

---

# 漂流のA

権兵衛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

漂流のA

### 【コード】

N8880Q

### 【作者名】

権兵衛

### 【あらすじ】

転生者アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィス。転生先はゼロの使い魔の世界、トリステイン王国の子爵領。目的は、死なないこと、殺されないこと。テンプレ的二次創作、転生ものです。どのような展開になるかわからないので、不愉快な思いをさせてしまうかも知れませんが、よろしければご覧下さい。

2011年10月11日・三ヶ月もほったらかしにしてしまい、お待ち下さった方、申し訳ありませんでした。私事のトラブルが続発し、忙しさにかまけて、つい疎遠になってしまいました。一段落

しましたが、何とか今月中にもう一話くらいは仕上げたいです。

## 第一話〈転生〉(前書き)

初めまして。よくある転生ものなので、お気軽にご覧下さい。

## 第一話<転生>

アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィス

トリステイン王国のラヴィス子爵、彼の祝福されるべき第一子は、  
そう名付けられた。

両親のそれを受け継いだ、若草色の頭髪。空色の瞳。その瞳には  
既に自我と呼べるものが存在していたのだが、それを読み取れる者  
はいなかった。

よく遊ぶ子どもだった。いや、勿論子どもであるからには、遊び  
に時間の大部分を費やすのは当たり前なのだが、ラヴィス子爵はい  
つしか、アクセルの特異性に気付いた。

暇なメイドや使用人、挙げ句の果てには執事まで付き合わせ、屋  
敷の敷地内を所狭しと遊び回る。勿論、彼等も仕事があり、空き時  
間でアクセルの相手をしていたのだが……アクセルは、疲れ果てて  
も、遊ぶのを止めようとはしなかった。

まるで、体力を全て、それこそ爪先から脳天まで総動員し、一滴  
残らず絞り出そうとしているかのように。それは遊びというよりも、  
最早、鍛錬に近いものだった。

鬼ごっこをするときも、所詮はようやく歩けるようになった子ど  
も。全速力を出そうが、大人に敵うはずはない。しかし、いつしか  
……常に全速力で逃げ回るアクセルを捕えるために、大の大人が三  
人がかりで臨まなければならなくなった。早い話が、単純に追いつ  
けなくなったのだ。

外で遊べない雨の日は、屋敷の中で遊ぶ。書庫に籠もり、魔法書や物語などを、片っ端から読みふける。誰に強制されたわけでもない。そろそろ家庭教師をつけようかと、子爵夫妻が話し始める頃には、既に文字を習得していた。その後の勉強も、特に苦にした様子もなく、知識欲の塊のように、あらゆるものに貪欲な姿勢を見せた。

「まったく……家庭教師というのが、これほど寂しいものだったとは」

専属の家庭教師を任じられた、没落貴族の血を受け継ぐメイドが、どこか嬉しそうに言っていた。

彼女曰く、放っていてもどんどん進んでしまうそうだ。

「そうか……。しかし、この私から、あんな麒麟児が出来上がるとはな」

ラヴィス子爵は自嘲するような、しかし明るい笑みを浮かべ、窓の外を見る。

輝くような光が差し込む庭で、今日もアクセルは、暇を持て余していた使用人達と鬼ごっこに興じている。もはや、追い付けることすら滅多にないのだが、それでも、毎度付き合わされる彼等に倦怠感はない。自分たちと遊びたがり、懐いてくれる子どもは、愛すべき存在なのだろう。

「しかし、あの中には元傭兵もいた筈だが……いやはや、凄いな」

「そうですね。しかし」

「……まあ、言いたい事は分かる」

ラヴィス子爵は、隣に立つメイドに向き直った。

少々早いかも知れないが、アクセルに魔法の実技を始めさせようというのは、既に決まっていた。何しろアクセル自身が魔法に並々ならぬ興味を持ち、やたらと質問してくるのだ。初めのうちはまだ早いと窘めていた周囲も、あまりに熱心に聞いてくるので、結局真面目に答えてしまっている。

そもそも貴族として生を受けた以上、魔法は必須能力だ。そして、本人にやる気があるに越したことはない。

「私は、甘いのかもな？」

初めての子どもなのだ。つつい甘やかしてしまいたくもなる。

あの足の速さとスタミナは、褒めるべきものだと思うのだが、隣のメイドは違った。

魔法は必須能力であり、そして最重要のステータスなのだ。貴族の能力とは、統治能力や政治能力も確かに重要だが、それ以前にまずは魔法能力。それこそが、最も重視されるべきもの。

アクセルの家庭教師を務めるメイド……名前を、リーズ。彼女の両親は貴族であったが、魔法能力が低く、そしてその事が結果として、リーズの家を没落させた。

だからこそ、なのだろう。ラヴィス子爵から見ても異常なほど、魔法の力に固執する傾向がある。

どれほどアクセルが学業に励み、どれほど屈強な肉体を作ろうとそれを評価しない。全てはこれから……魔法の実力がどれほど伸びるか。そののみ、ただその一点のみ。

ラヴィス子爵がアクセルを麒麟児などと評価するのも、内心では何を的はずれなことを、と思っているだろう。魔法の実力すらわからない内から、下すべき評価ではない、と。

ラヴィス子爵も、それを間違いだとは思わない。

三日後、ついにアクセルは杖を持つことを許される。

今まで散々に書を読み耽ったお陰か、やり方は既に覚えている。

しかしだからと言って、それがすぐに実技に結びつくわけではない。

そう……その筈だった。

魔法を練習し始めたその日、一通りのコモンスペルを成功させたアクセルに、リーズは評価を下す。

麒麟児どころではない。大天才だと。

ここがあの世界だということを、アクセルが……アクセルと名付けられた魂が確信したのは、文字を覚えてからだった。

父親の机……そこに散らばっていた手紙の送り主は、ラ・ヴァリエール公爵。そして、グラモン元帥。その二人の名は、よく知っていた。

片や、トリステイン王国に名高い公爵家。片や、トリステイン王国に名高い軍人。

その二人と頻繁に手紙をやりとりしている、このラヴィス家も、一段劣る子爵とはいえ、それなりに重要な立ち位置にいるらしい。

どうやらまだ、原作の……平賀才人が召喚される時期までには、大分あるようだ。



アクセルには、死の記憶がある。六畳一間のボロアパートで浪人生活を送っている時、風邪をこじらせ、助けを呼べないまま衰弱死したという、あまりに寂しい記憶。

最後の記憶は、このまま死ねば、冷蔵庫の横に置いてあるネギがどろどろに腐って悪臭を放ち、その悪臭の中でようやく、自分の死体が見つかることになる……という、至極どうでもいいもの。

死ぬ時は、気持ち良かった。

体中から全ての力が抜けていき、まるで誰かに、これ以上頑張らなくてもいいんだよ、と、そんな風に抱きしめられている気分。

が、その快感はすぐに消えた。やっぱりお前頑張れ、と蹴飛ばされるようにして、自分は転生を果たした。

肩透かしを喰らったようにも思えたが、まあ折角take2が始まるんだし、頑張るべきなのだろう。

赤子になって気付いたのは、とてつもなく退屈ということ。何の因果か意識を保ったまま産まれたせいで、することのない時間というものを実感してしまう。しかし、それでも楽しみはあった。

女子と手を繋ぐなど、中学生の時のオクラホマミキサーが最後。そんな自分が、麗しきメイドに抱かれる。どれだけ胸に触れても怒られない。

(何というか、ここ……ひなた荘並の信頼率だよな)

父・ラヴィス子爵の趣味だとしたら、非常にいい父親だと思う。採用基準に外見が含まれているのは、まず間違いない。

メイドだけではなかった。母親も、少し身体の凹凸が乏しいといえ、紛う事なき美女。その美女の乳房に堂々と吸い付けるわけだが、何だか妙な気分だ。即エレクトオンしそうなものだが、母親から感じる愛情に、何というか……毒気を抜かれる。まあ、まだ自分の身体はそこまで発達しているわけではないし、実の母親相手にそんなことになるわけにはいかない。エディプス・コンプレックスは洒落にならないし。

鬼ごっこやその他の運動だって、活発な子どもだとか言われるが、申し訳なくもはっきり言ってしまうえば、その……性欲の発散の為だったりする。まだ精通とはほど遠い年齢なのに、性欲を持て余してしまうのはやはり、メイド達のせいだった。

弟が出来た気分なのか、甘やかし、愛情を注いでくれるのはいいのだが、スキンシップが少々過剰なのだ。基本的に、身の回りの世話はメイド達の仕事である。しかし、何も下着を穿かせたり、風呂で身体を洗ってくれたり、更には添い寝してくれる必要はない。

この年齢で、こちらが恥ずかしがっているのはどうやらバレているらしく、彼女たちは調子に乗ってやたらと世話を焼く。せめてもう少し、年を取ってからやって欲しいのだ。今は、手の出しようがないし。

吐き出しようない欲望に、気が狂いそうになり、それを何とか発散させるために、他のことに集中する。それしか方法はなかった。

しかし、やるべき事は山ほどある。やりたい事も。

はっきり言って、この世界での自分は主人公ではないのだ。言うなれば、ルイズと才人、そしてそれを取り巻く人々の物語の世界。自分はただの、とある子爵の嫡男。

主人公たちに積極的に関わるつもりはない。何故か？ 命がいく

つあっても足りないから。

取りあえず、自分の望みを考えてみる。

魔法は使えるようになりたい。使えないと死にそうだから。

身体も鍛えるべきだろう。魔法以外の要因で死ぬかも知れないから。

内政、というのもやってみたい。自分に抜きん出た知識などないが、それでも、持っている記憶を何らかの形で役立たせることは出来るだろう。

美人の嫁さん、それに出来れば愛人や側室を何人か。これは重要。昼は淑女、夜は娼婦だったら言うことなし。

(でもなあ……)

欲望は色々あっても、前提として、まずは死なないこと。殺されないこと。

死ぬ時は孤独ではなく、ベッドで、愛する人々に囲まれて、惜しまれて死にたい。

(そう……死んだらお終いだ)

一度死を経験したお陰か、死というものはつきりと、実体を持つもののように感じられる。折角人生をやり直せるのに、何も成さずに終わるのはイヤだ。

(いや、成すとか言っても、そんな……小さなことでいいんだけど)

後の世に功績を残し、その功績と、自分の名が忘れられないよう

にしたい。

しかし、死ぬような目には遭いたくない。

(なるべく、命の危険のない方法で……)

我が儘だとは、勿論思う。しかし、所詮は元一般人の思考。器量なんてものはなくて当然だろう。このまま子爵領を受け継ぎ、そこそこ領地を豊かにして、領民に慕われ、平穩無事に一生を終えられたら……。

(……吉良吉影かよ、俺は)

大きな喜びはなく、そして大きな悲しみもない、植物のように平穩な人生。

そしてそれを送るためには、強大な力を持たなければならない。

(どっちにしろ、強くならなくちゃなあ……)

アクセルはそう思いながら、思考を巡らせた。

魔法の訓練を初めて、三日後。既に治癒を含め、水属性の簡単な魔法なら使えるようになった。

本当は一刻も早く、出来るだけ多くの魔法をマスターしたいのだが、ふとアクセルは気付く。あまり強い力を持てば、目立ってしまうのではないかと。

こっそり魔法を練習し、それを小出しにしていくのが、一番のやり方ではないか。

「若様。本日は、ここまでにしておきましょう」

「うんっ。ありがとう、リーズ」

訓練を担当するのは、リーズ。没落した元貴族の、メイド。

初めてこの屋敷に来た時は、表情の乏しい娘だと感じたし、それは間違っではないなかった。そして、そんなリーズを笑顔にしてあげたいと、純粹にそう思った。

いくら学業の成績が良くても、あまり褒めなかったリーズが、アクセルが魔法を成功させた時には、途端に笑顔になる。そして、惜しめない賞賛をくれる。

女の子にいいところを見せたい一心で、つい張り切ってしまうのだが、やはり全力ではやらなかった。その事に罪悪感もあるが、あまり目立ちたくはない。

今日もリーズの笑顔が見られたことに、喜びと罪悪を感じつつ、アクセルは屋敷の外に出た。

供も連れずに外に出るのは非常識なのだが、少し歩いたところにある小さな湖だけは、一人での外出を許されている。リーズが、お墨付きをくれた。

(さて……今日も、と)

服を脱ぎ、上半身裸になる。水練のためということにしてあるが、アクセルは湖の畔にある岩陰に立った。屋敷や山道から誰かが来ても、ここならすぐに分かる。

「……フウ……」

軽く息を吐きながら、岩の前に立つ。そして腰を落とし、拳を構えると、岩に叩き付けた。

「……っ」

勿論、痛みはある。繰り返せば、あっという間に皮膚は破れ、血が滲む。

それでも、アクセルは全力で、両の拳を叩き付けた。

別に、前世で空手をやっていただけではない。武道と呼べるものは勿論、スポーツも、せいぜい温泉卓球くらい。それでも、こつやこつや鍛えれば、何れ頑強な拳が作り出されることは予想出来る。

明日のために……ではなく、死なないために。

この世界は、前世ほど死が遠くはない。死の危険は、ずっと身近な存在だ。確かに子爵の嫡男である自分は、外に出る時には護衛が付くし、魔法が使えない平民も、おいそれと襲っては来ないだろう。しかし、それでも襲ってくる平民は、俗に言うメイジ殺しと呼ばれるような、化け物。

魔法を使うには、杖、そして呪文が必要だった。杖を抜き、呪文を唱える。呪文の詠唱も、咄嗟の攻撃なら一秒ほどだろうが、その一秒で、杖を弾き飛ばされたら……。

予備の杖を持つことは出来るが、それでは根本的解決にはならない。

風呂で襲われたら？

女の子とベッドで楽しんでいる時を襲われたら？

アクセルは、杖を使わない……格闘技を習得しようとした。

しかし、無い。そんなもの、いくら調べても見当たらない。

剣術は存在するし、軍人なら独自に格闘術も編み出しているだろうが、それはあくまで独自のものであって、教えて貰えるような技術は見つからなかった。少なくとも、調べられる範囲には。

もっと探せば、その為の教師となる人材も見つかるだろうが、時間は惜しい。

剣は傭兵あがりの使用人に教えて貰えるだろうが、その剣すら無い場合は、どうするか。

結局、自分で何とか工夫するしかない……そんな結論に達した。

痛い。本当に痛い。傷ついた拳で殴り続けているのだから、当たり前と言えば当たり前だが、それでも、一撃一撃、怯みそうになる身体を奮い立たせ、全力で岩を叩く。傷ついても、水の治癒魔法があれば、跡形も無く完治する。この為に、何よりも真っ先に治癒を覚えた。

死なないためののだ。痛みも、それを考えれば我慢できる。

以前は三発ほどで血が滲み始めたが、今では十発殴っても無傷なところを見ると、成果は上がっているようだ。

しかし、これはあくまで、秘密にしておきたい。杖も、剣すらも持っていない自分なら、相手も油断するだろうし、隙も生まれる。知られたら、ひょっとしたら腕を切り落とされるような目に遭うかも知れない。と言うか、自分ならそうするだろう。

空手をやっていたわけではないから、技術もなく、見様見真似。しかし、硬い拳はそれだけで、切り札となってくれる筈だ。

毎日治癒を続けたお陰で、水系統のレベルも上がっている。そしてアクセルは、一つの実験を行った。

「……………」

場所は、湖。しかし岩陰ではなく、小舟を出し、ちょうど湖の反対側に。万が一にも、見られるわけにはいかないし、見られたくない。

「……………大丈夫、大丈夫……………」

アクセルはぶつぶつと、呪詛のように呟く。その顔……………いや、体中には冷や汗が浮かんでいた。

杖を弾かれれば、魔法は使えない。それはどうやら、絶対らしい。しかしもし、素手で魔法が使えたら……………それもまた、強力な、これ以上無い程の切り札になってくれる筈だ。

「欲張りすぎじゃないのか、俺……………」

これから行う事を考えると、少し震えが来る。ここまでする必要があるので、疑問が浮かぶ。

しかし。これをしなかったから、死んだ……………そんな未来は、絶対に避けたい。アクセルは遂に覚悟を決め、小枝を銜えると、左手のナイフを握り締めた。

通常アクセルは右利きで、右手に杖を持つ。杖と言っても、オー



ソドックスな、教鞭のような細いものだ。右手で包み込むように持つが、唯一人差し指は、杖に沿わせるようにして伸ばしている。

「ふっ……ぐっ!!」

噛み締めた小枝が、細かく湿った音を立てる。涙が滲まなかったのは助かったが、全身が強張り、冷や汗でなく脂汗が滲んだ。

ナイフの刃が、右手人差し指の肉を切り開く。地面にボタボタと、真っ赤な血が流れ落ちた。

今更、ナイフの刃を消毒していなかった……とか、指の付け根を縛っておけばよかった……など、そんな考えが浮かぶ。興奮しすぎて、そこまで頭が回らなかつたらしい。

そして、肉と血の間から、真珠のような骨が見えた。

「……………!!」

急いで、契約を行う。

通常の杖の契約は、それなりの日数を要する。しかし、生まれてから今まで付き合ってきた骨は、異常な速度で適応した。

「……………ははっ……………ははははははははっ!!」

その場に身を投げ出したアクセルは、さながら、新世界の神の如き笑い声を上げた。

こんなこと調べた限りでは見当たらなかったし、こんな異常な実験を行った者もないだろう。

実験は、成功した。人差し指の骨は、無事に杖として機能し、動かなくなつた指に治癒を行う。

耐えられた。死なないため、殺されないためだからこそ。

(そう、これで……杖を手にしていなくても、魔法が……！)

しかし。

こんな真似をしておきながら、アクセルの中身はやはり、小心者だった。

いや、本当に小心者ならそもそも、こんなことをしないのかも知れない。

まあ、はつきり言ってしまえば、ネガティブではあった。

徐々に、笑い声が消えていく。

もしも、人差し指を切り落とされたら？

いや、そもそも、右腕を切り落とされていたら？

右手、左手……それらを、じっと見つめる。

「……なあ……嘘だろ？ ほ、ほら、キリがねえじゃん？」

そうすべきだ……そんなことを言ってくる、恐ろしい自分がいる。

「俺は別に、そんな特殊な性癖があるわけでもなし……異常者でもなし……」

その目は虚ろ。しかし、手はまるで別個の意思に支配されたかのように再び、ナイフを握った。

「……嘘だと言ってくれ、誰か……なあ？」

もしも、両腕ともに切り落とされてしまったら？

その日、アクセルは初めて高熱を発し、寝込んだ。

生まれてこの方、風邪すら引いたことのないアクセルだけに、屋敷中、大騒ぎになった。

両親は……特に母親は、ベッドの横で泣き叫ぶし、リーズも無理な訓練をさせたと自分を責めて泣き出し……。朦朧とした意識の中で大丈夫だからとそれだけを繰り返していたアクセルは、やがて失神した。

二日後、無事に熱は下がった。しかし、アクセルは頭を抱え、ベッドの上で悶えていた。

十本全部の指と契約しなくとも、腕の骨二本と契約すれば良かった事に気付いて。

## 第二話〈初陣〉

“骨”を杖にしてから、変わった事がある。

以前は感じ取れなかった“力”の存在に、気付き始めた。

やはり、魔法を発動させるための道具を、自分自身の身体の中に作り上げたことが影響しているのだろう。

現在、アクセルの予備の杖は14本。両手指、両腕の橈骨（とうこつ）、両足の脛骨。

（……無茶したなあ、俺）

流石に、両足の膝から下が破壊されたら……と考えるのは、やめておく。喉もと過ぎれば何とやら、の心だが、ともかく幸いなのは、あの苦しみを二度と味わう必要が無いということか。

自分の肉体を不必要に傷つけて、快感を得る趣味は無い。

魔法を使う時確実なのは、両手の人差し指の二本だけ。それ以外ではやはり性能が下がり、特に両足の骨では、コモンスペルすら失敗することがある。人差し指の相性がよいのは、イメージの問題かも知れない。まあ、流石に文字通りの無駄骨だった、なんてことは避けたいので、両足で魔法を使う訓練もするつもりだ。

そして、自分は確かに、感覚を掴んだ。

(……魔力……って言えばいいのかな、これ)

目に見えるわけではない。それでも、目を閉じ、息を止め、耳を塞ぎ……五感を封じていけば、はっきりと感じ取ることが出来る。その力を、取りあえず魔力と呼んでいる。まあ、相談する相手もないのだが。

両親やリーズなど、メイジの周囲に漂うもの。メイジでない平民、使用人たちも纏ってはいるが、その範囲、濃度ははっきりと違う。普段は頼りなさ気に漂っているその力は、魔法使用時に途端に意志を持ったかのように流れ、収束し、そして……発動する。

勿論、自分の周囲にも漂っている。

「あの……魔力さんですか？」

一応尋ねてみたりするのだが、もとより反応は無い。反応するのは、魔法を使う時だけ。

端から見れば、見えてはいけない友達が見えているようなので、あまりアプローチはかけられない。そもそも、自我を持っているのかも謎だし。

ともかくそのことは、いい方向に働いた。試してみたいことも益々増え、24時間では少なすぎる。

(……充実し過ぎだな)

前世では、決して得られなかった感動。あそこの自分は、ただ周

困に流されるまま、確たる夢も持たず、漠然とした時間を送っていた。

時計を見るたびに、まだ残っている時間に溜息をついたり。

そんな事を考えていた時、父親に呼ばれた。

曰く、領内の村が盗賊に襲われるようになり、それを鎮圧してこい。

まだ、年端もいかない子どもだ。勿論、アクセルに何かを期待している、というわけでもないだろう。いくら魔法の成績が優秀でも、やはり所詮は、子どもなのだから。

討伐隊を率いるのは、アクセル。補佐するのは、リーズ。

実質的な責任者は、リーズだった。メイドとは言え、彼女は風のラインクラスの魔法使い。そこらの盗賊に敗北する筈はない。

今回のこれは、アクセルの教育の一環なのだろう。人の上に立つということ、また、魔法を使って平和を守ること。杖を振るうことではなく、どんなことが起きるか、その目で見据えることが、ラヴィス子爵の望み。

(……あのお父さん、結構スパルタなんじゃないか?)

あつという間に全ては整えられ、アクセルは馬上の人となる。とは言え、アクセルは乗馬が苦手であるので、手綱を握るリーズの前に大人しく跨っている。周囲を取り囲む兵は、合計70名。

そう、まだ馬にも乗れないような子どもなのだ。それどころか、同年代の貴族では、未だ杖すら与えられていない者が殆ど。そんな子どもが、名ばかりとはいえ、討伐隊の隊長。

ひよっとしたら、血や死体に馴れさせておく、という目的もあるのかも知れないが……。

( 血生臭い話だなあ )

それはつまり、これからの自分の人生で、そんな場面に遭遇することが多々ある、ということ。

他の貴族を知らないのでも言えないが、どうやらラヴィス子爵は、何か秘密を持っているらしい。内政にもそれほど興味を示さず、普段はエリート商社マンか何かのように、彼方此方を飛び回っている。ラ・ヴァリエール公爵家からの手紙も一通や二通ではないし、屋敷を留守にしているか、屋敷でのんびりしているかどちらかしかない。

ともかく、子爵自らが領地を留守にする必要があるのなら、なるべく早くに、自分を成長させておきたいのだから。アクセルはそう考えた。

ラヴィス子爵領パリュキオの村に到着したのは、夜も更けてからだった。予め連絡はされており、兵士は宛われた集会議場で休み、アクセルとリーズは村長の家に招かれる。

「アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィスだ」

緊張した面持ちで出迎える村長に、アクセルはそう告げる。年上とはいえ、平民に敬語を使うのは不自然であり、しかしなるべく威圧感を与えないよう、声色も選んだ。

「これはこれは。こんな遠くまで、よくぞ来て下さいました」

一応、領主であるラヴィス子爵の名代としての来訪なので、扱いても子爵本人と遜色ない。が、略奪を受けた村に蓄えは少なく、歓迎

の宴、という雰囲気でもなかった。それが村長の気がかりだったらしく、アクセルが寝床を用意してくれただけでいい、と言うと、ホッと表情を緩めた。

村長が集まった村人たちからの情報を総合すると、盗賊……というより山賊は、全部で30人ほど。メイジはいないが、傭兵崩れや破落戸、逃亡奴隷などで組織され、近くの山にある廃墟を根城としている。隣の男爵領から流れてきたものと、元々この地にいたものが統合され、ついに二ヶ月前から略奪が始まった。

「二ヶ月前？」

アクセルは思わず聞き返す。何か不味かったのかと、村長は青くなりながら頷いた。

流石に山賊の略奪を、一回程度ならなかったことにしようか、などとはならないだろう。一度でも略奪が起きた時点で、領主に連絡がいく筈だ。

今回の討伐隊は既に準備が出来ていたので、その結成にどれだけ時間がかかるかは分からないが、それでも遅すぎる気がする。兵士達も確か屋敷からは、遠くても半日の場所に駐屯していた筈。

やはり、いくら何でも遅すぎる。

(……どんだけなんだ、うちの内政は……)

いくら領主が頻繁に領地を空けるとはいえ、これは酷すぎる気がする。これなら、代官でも用意した方が、ずっとうまくいくのではないか。

つまり、この周辺の村々は、少なくとも二ヶ月前から略奪され続けているわけで……。

反乱でも起きそうなものだが、やはり、平民と貴族を隔てる壁は、



果てしなく高く、絶対なのだろう。例え不満はあっても、文句を言うという発想すらないのかも知れない。天災と同じく、どうしようもないことと諦めているのか。

そして、それがこの世界の常識。

取りあえず、一通り情報を集めた後、アクセルは宛われた部屋に戻った。

「いいですか、若様。明日は私から、くれぐれも離れないようにしてください」

リーズが同室なのは、そもそも村長の家の部屋数の問題と、アクセルの護衛の為。その彼女は、もう何度目かわからない注意を、また繰り返していた。

「うん、わかってる。僕に何かあったら、みんなの責任になっちゃうし」

「……それがお分かりなら、何も言うことはありません」

どうせまた言い出すんだろうなあ、と、アクセルはそつと苦笑する。行きの馬上でも、この会話は何度かしている。

考えてみれば、これが初めての遠出だった。普段は子爵の屋敷と、その周辺に行くことしか許されていない。スパルタなのか過保護なのか、よく分からない父親だ。

未だ馬に慣れていなかった尻をさすりながら、アクセルはベッドに潜り込んだ。

誘拐された。

な、何を言ってるのかわからねーだろうが……思わずポルナレフ。

朝日が窓から差し込む中、後ろ手に縛られて、薄汚れた広間に引  
つ立てられたアクセルは、山賊の手際の良さに驚いていた。

(まさか……向こうからやって来るとは……)

アクセルが立てた……と言うより、リーズが立てた計画では、今  
晩は兵を休ませておき、明日の朝一番で出立、本拠地へと向かい、  
兵隊で包囲、そしてリーズ達が攻撃する、というものだった。勿論、  
アクセルは包囲網の外に置かれる。

しかし、討伐隊の情報を得た山賊は、奇襲に出た。討伐隊が到着  
したその夜中に囫部隊が村を襲い、村人に化けた手下がどさくさに  
紛れて、眠りこけていたアクセルをかつ攫う、というものだった。

流石に、メイジ……リーズを恐れたのだろう。数の上でも討伐隊  
が勝っているし、まともに来られては逃げるしかないと考え、領主  
の息子であるアクセルを手に入れた。つまりは戦う前から、勝敗を  
決めてしまった、ということになる。

(……うん。そうだ。ぶっちゃけ、舐めていた)

たかが山賊という、そんな驕りがあった。そしてそれは、討伐隊  
全体のものだった。

考えてみれば、リーズもいくらメイジとはいえ、集団戦のような経験はない。せいぜい、盗人を倒すくらい。兵隊を率いるなども、知識としては知っていたのだろうが、初めての体験だった筈だ。

(そうだよな、まあ、山賊だってバカじゃないよな)

彼等も、必死なのだ。勝って当たり前の戦で、どこか余裕があった……はつきり言って弛んでいた討伐隊とは違い、死に物狂い。

(俺も、いつの間にか、平民を舐めていた)

平民にだって恐れるべき者はいると、そう考えて今まで修行してきたのに……山賊など、所詮は雑魚が集まっただけだと、そう、どこかで侮っていた。

「ようっし！ これで、俺らにも勝ち目が出来たな！」

山賊達の中心で、がらがらとした笑い声を上げる、髭の大男。筋骨隆々とした男で、傭兵か何かだったのだろう。言うまでもなく、この男がボス。

奇襲をかけて貴族を誘拐するなど、思いついても普通は実行しない。それを実行に移す判断力、度胸……ただの力自慢ではなく、それなりに知恵もカリスマもあるようだ。

(そう……侮っちゃいけない)

こんな状態になれば、貴族には何も出来ない。騒がれないように猿轡をされ、勿論のこと、杖も取り上げられている。例えアクセルのように、思い掛けないものを杖にしても、呪文を唱え

られなければ意味がない。

確かに身体は鍛えているが、相手は目の前の筋肉男を筆頭に、大人が三十人近く。太ったヤツもいるし、チビなヤツもいるが、それでも大人は大人だ。単純な腕力では、まず敵わない。せめて猿轡さえなければ、何とか出来るだろうが。

(いや……幸運に思っただ。そうだ、そう思え)

アクセルは静かに考える。ここまで冷静でいられるのも、相手に自分を殺す気がないからだ。よほどのことが無い限り、死の危険はない。

対して、自分は彼等を殺しても、何の問題もない。貴族を拐かせば、それだけで死刑だし、何より相手は山賊、殺そうが功績にしかならない。

つまりは……格好の“実験台”が、三十個もある。

「お頭、これからどうしましょう」

「そうだな。とりあえず、村には連絡したか？」

「へい。さつき。村から一歩でも出れば、ガキを殺すと言っておきました。見張りも、二人ほど残してます」

「そうか。それじゃ、まずは金をありったけ集めさせる。こうなったら、こんな場所さつさとおさらばしねえとな。村中の金を集めさせたら、二回に分けて運ばせるんだ」

「へ？ 二回？ 何でそんな面倒な……」

「バーカ。さんざん俺らがしゃぶった村だ、そんなトコに、ロクに金があるわけねえだろ。しかしまあ、村人も貴族は怖えから、隠してた金を出すかも知れねえ。それでも、タカが知れてるが……。一回目に兵隊に運ばせて、またそいつらを戻して、二回目を運ばせる。しかし、二回目の金を運んで来た時にゃ、ここは無人になって

るってわけだ」

「それで……？」

「兵隊どもがモタモタしてる間に、ガキを連れて子爵の屋敷に乗り込む。そこで、ありったけの金を吐き出させるわけだ」

「さつすがお頭！ 貴族の屋敷なら、唸るほど金がある！」

「当たり前だ、俺を誰だと思ってるやがる」

やはり、金に目が眩んだ雑魚ではない。小さな利を捨て、大きな利を取ることを知っている。子爵の屋敷に乗り込む、というのはともかく、ここを脱出するなかなかの良策だ。

まあ、人質となっている自分が、その成功率を上げているわけだが。アクセルは猿轡のまま、小さく溜息をついた。

なかなか修羅場をくぐっている、こんな男を相手にして、リーズと彼女が指揮する隊は、勝てるのか。恐らくは無理だろう。数は勝っているとはいえ、知恵で遅れを取る可能性が高い。

「ガキは、隣の部屋にでもぶちこんどきますか？」

「いや、やめとけ。どうせすぐにここを出ることになるんだ。隅っこに放っておけ」

手下の一人が進み出て、アクセルを掴む。その時、それまで大人しくしていたアクセルは突然騒ぎ出した。うーうーとうなり声を上げ、身体をじたばたと動かす。

ボスの目配せを受けてから、手下は猿轡を外した。

「何だ、クソガキ。暴れんじゃね……」

「おしっこー！！」

部屋中に響くような大声で、アクセルが叫ぶ。

一瞬の静寂の後、何人かが笑い出した。ボスも首を振り、苦笑している。

「くそ度胸の座ったガキだなあ、おい。流石は貴族様」

「あ、くそで思い出したけど、大きいのも！」

相変わらず、子どものような……まあ、子どもなのだが、大声で喋るアクセル。

「ここで垂れ流されても迷惑だ、連れてけ」

ひらひらと手を振り、笑いながら、ボスは命じた。

「おう、一人で大丈夫かあ？」

「ついてつてやろうか？」

アクセルに、ではなく、アクセルを引っ張る手下に、山賊達が声を掛けている。うるせえっ、と、一言だけ叫んでから、手下はアクセルを連れ、廊下に出ると、近くのトイレに押し込んだ。しかし、アクセルは突っ立っている。

「おい、何してやがる」

「脱がせ」

手下は、呆れた。このガキは、自分がおかれている状況を理解していないらしい。屋敷でも、使用人達に任せきりなのだろう、と。

「ちっ、テメエでやりやがれ」

ナイフを取り出し、少年を縛っていた縄を切断し、両手を解放す

る。杖も取り上げているし、そして何より、相手は小生意気なだけ  
のガキだ。

そう、ただのガ……

「？ 何して……」

少年はこちらに人差し指を向け、何か呟いている。再び聞き返そ  
うとした手下、彼の二十二年という人生の最後を飾った光景は、首  
のない自分の身体だった。トイレの天井にまで達する血飛沫が、噴  
水のようにだった。

ドアが開きかけ、止まる。その僅かな隙間から、何かが転がって  
くる。

床に、足跡のような血痕を残しながら、それは山賊達の足下を擦  
り抜け、ボスの足にぶつかつた。呆然とした光を宿さない目と、そ  
れが生首であると確認したボスの視線が、合わさる。

次に、軋んだ音を立てて、ドアが開いた。

血をバケツで被つたような姿の少年が、準備体操のように首を捻  
りながら、入ってくる。

沈黙が支配する空間で、少年はそつと左右を見回すと、ボスの隣  
のテーブルに無造作に転がる、自分の杖を発見した。

「それ……返してくれる？」

人差し指を向け、アクセルは軽く微笑んだ。

「……………テメエ……………」

ようやく、近くの……………少年の左隣に立つ一人が、声を絞り出す。驚愕は薄れ、だんだんと激情が広がっていた。

「なんなんだっ、テメエ！！」

そう叫んだ、瞬間。アクセルは右の人差し指を向けたまま、左手でその男の顔面を叩く。拳が届くか、微妙な距離。よって、手は軽く広げたままの、素早い目眩ましのような攻撃。

大して力も込めてはいないが、日頃の鍛錬で、その指は既に尋常でないほど硬くなっている。鼻っ柱を打たれ、男は鼻を押さえて目をつぶった。じわりと、涙が滲んでいる。

打たれた瞬間、男がヒュッと、息を吸い込んだ。

鼻を押さえて、蹲るように頭の位置を下げた時、ハッと息を吐く。血が何滴か、床に散った。そしてその時、アクセルは足を動かし、男を真正面から見据える。

そして、次。男は再び、ヒュッと息を吸い込む。

その呼吸音に重なるようにして、

「ハッ」

アクセルのかけ声。さんざん練習した正拳突きを、男の腹部に突き刺した。



相手が息を吸い込む時に攻撃すれば、ダメージが倍増する……そんな知識は、前世から。単純に正拳突き威力かも知れないし、タイミングが遅かったかも知れない。人体に試したのは初めてなので、何とも言えないが、クリティカルヒットと感じられる手応えがあった。

男は顔と腹を押さえたまま、文字通り、崩れるようにその場に倒れ、嘔吐した。てっきり悶絶するだけだろうと思っていたのだが、床に広がる血の混じった吐瀉物を見て、アクセルは少し驚く。同時に、今までの鍛錬が、無駄にはなっていないかったことを確認した。

直後、室内で怒号が暴発する。

一つの怒鳴り声の直後、集団パニックに陥ったように、皆が皆一斉に武器を手に取った。その衝動の矛先は、言うまでもなくアクセル。唯一皆を抑えようとしたボスの声は、掻き消される。

悶絶する男を踏み台にして跳躍し、手斧を振り上げていた男の顔面に右膝をめり込ませるアクセルの表情は、ポーカーフェイス。強いて言うならば、あまりにも落ち着いた自分に驚いている。

武器を抜いたヤツは全員、背の低いアクセルを叩き潰そうと、武器を振り上げている。

何人かの……特に剣を振り上げた敵は、うっかり天井に突き刺しってしまった。

アクセルは上からの攻撃を気にしていればいい。

これで金的でも狙えば簡単だが、それはしない。折角の実験台だと、そう思っていた。

金的を狙うことなくこの場を切り抜ければ、少しは自信がつく。周囲の熱気に反比例するように、アクセルは冷静になれた。

(確かに……一人が相手だと、結局は一度に数人しか攻撃できないな)

漫画で得た知識。周囲の熱気にあてられ、自分がパニックになれば、恐らく自分は殺される。パニックになるのだけは避けなければならぬ、そう思って、実際にそれが出来ているからこそ、頭にある知識も役に立ってくれた。

小さな身体に似合わぬスタミナにモノを言わせ、常に動き回り続ける。

相手が振り上げても、攻撃するにはそこから更に振り下ろさねばならない。対して自分は、振り上げる動きがそのまま攻撃に直結している。

周囲に気を配りながら、一番早く攻撃に移れそうなヤツを捜し出し、ジャブや平手の叩き付けで目眩まし、隙を見て止めの正拳突き。ガンシューティングゲームのようなものだ。

助かったのは、山賊達に傑出した人材がいなかった点。恐るべきなのは、どうやらあのボスのみで、彼がまとめ上げていたからこそ戦闘力だったらしい。

しかしそれも、自分たちが襲撃されたのは初めてで、まさか山賊が襲われるとは思っていなかったらしく、ボスも止める止めると叫ぶだけで、まったく生かせていない。

十人ほどを床に転がした時点で、初めて、勢いが弱まる。

流石に、アクセルがただの子どもではないと気付いたのだろう。

一旦下がる……というか、腰が引け始めた。

(逃がすな!!)

アクセルは、攻撃に転じた。

不意打ちを食らったその男の目に浮かぶのは、恐怖と、そして二本の指。流石にまだ子どもの手では大きさが足りず、アクセルは両手の人差し指を並べ、男の両目に突き刺した。

ぬるり、とした暖かさ。

周囲に恐怖を与えるための攻撃だが、これはアクセル自身の試練でもあった。

幸い、意識は大分この世界に染まっているらしく、山賊程度の命など重視していない。自分に害を及ぼす相手であれば、尚更だ。

眼球を破壊する。それは即ち、その相手の残りの人生から、永久に光を奪い去るということ。

殺すことと失明させること、どちらが重大か……それはともかく、やはり自分は、必要とあらば命を奪うタイプの人間で、それが今証明された。

どちらにしろ、一人も生かしておくわけにはいかない。

自分の戦い方が、この世界で異質の部類だからこそ、今も自分は生きていられる。その優位性を崩せば、それだけ、自分の命が危険にさらされる。

だからこそ、この場にいる全員、生かしておけない。そう、全ては……アクセル自身が生き延びる為に、殺されない為に。

両目を破壊された男。子どもの指では脳までは達さず、ただ眼球を破壊されただけだが、それが周囲の不幸だった。ほとんど半狂乱になり、手に持った剣を振り回している。それはアクセルには当たらず、仲間達を傷つけるのみ。

両手の人差し指に残る、イヤな感触を押し殺しながら、アクセルは振り下ろされた剣を避け、それを握る指を殴りつける。小指をへし折られた男は思わず剣を落とし、蹲るが、落下した剣はアクセルに受け止められ、逆手の刃で首を裂かれた。

山賊のボスはただ、呆然としていた。外見に似合わず、理性的な人間である彼は、未だ衝撃から立ち直れない。半ば機械的に止める止めろと言っただけで、それに耳を貸す者はいない。

御伽噺のような光景だった。

逆手で一人の首を切り裂いた子どもは、剣を握ったまま、柄頭に右掌底を当て、飛び込むようにして次の男の腹部を貫いた。剣の切っ先が、背中から飛び出る。

ああ、そうだ。それでいい。そのまま後ろから斬りつける。

アクセルの無防備な背後に向かって、剣を振り上げるのが三人ほど。が、少年は剣を握ったまま、たった今突き殺した男を傘のように扱う。その男の死体を支点として、身体をぐるりと入れ替えた。目の前にあるのが少年の背中から、仲間の死体の背中へと変わり、三人は驚いて動きを止める。

突如として風が起こり、死体が吹き飛ぶ。それに巻き込まれる形で、三人は床に転がった。

今のは……確かに、魔法。しかし何故、どうやって？ 予備の杖

を持っていた？

あれだけ動いても、少年の動きは衰えない。主に、手下達の顔を狙って動きを止め、隙を見て破壊。

それでも、何とか少年を掴むことが出来たヤツはいる。素早いし、妙な体術を仕込まれているようだが、流石に腕っ節では敵うはずはない。

そうやって、窮地に追い込またびに……魔法が炸裂する。

意地汚く視界を奪われ、木々を避けるように飛び回る少年に翻弄され、追いつめれば魔法でやられる。

何だ、あれは。悪魔か？

首を切り裂かれて倒れる者。

倒れた所で顔を踏みつけられ、動かなくなる者。

ああ、二人、逃げ出したヤツがいる。そいつらの背中が、魔法で切り刻まれる。

そして、あとは……あとは……残ったのは？

未だ生きてるヤツも多い。痙攣している者もいる。風の魔法で、両腕を切断された者は、ズリズリと這って逃げようとしている。

その、芋虫のような手下と目が合った。しかし、首に剣を突き立てられ、床に縫いつけられ、その瞼は閉じていく。

無傷で立っているのは……ボス、一人だけ。

「いち。にい。さん」

アクセルは人差し指を動かし……確認するように、数を数える。具体的には、転がっている顔の数を。

（ああ、確かに、死体がこんな有様じゃ、顔で数えるのが確実だな）

ボスの頭の中、どこか醒めた部分が、少年の行動に同意していた。

「じゅうきゆう。にじゆう。にじゅういち」

声変わりしていない少年特有の、美しい高音。

「……さんじゆう」

その声が、最後の数を数える。

その指が、ボスの顔に向けられる。

そう……最後の、一人。

「……ははっ」

アクセルは笑いながら、軽く首を振った。

「流石に……疲れたよ」

風の刃が襲いかかる。

世界は、闇に包まれた。

全ての山賊に止めを刺した後、アクセルは風呂場に向かった。

いくら何でも、返り血を浴びすぎたし、掠り傷も数箇所。相手が武器を持った山賊、三十人だったことを考えると、少々出来すぎな結果だったが……それでも、まだ安心は出来ない。

もし、あの戦力差で、自分が襲われる側だったら？

もし、あの中に一人でも、メイジ……いや、経験豊かな強者がいたら？

自分の格闘の有用性は実感できたし、杖を持たないメイジが、いかに無力なものであると考えられているかも分かった。

「……ふう」

バスタブの水を流し、飲み水として使われていた清潔な水、そして凝縮の魔法で作り出した水で満たし、少々苦手である火炎魔法で熱して……服を脱ぎ、ゆつくりと身体を沈める。一旦潜って、ガシガシと髪の毛を洗いながら、顔を上げる。入浴剤でも入れた時のように、湯が真っ赤に染まっていた。

死体だらけの屋敷で、風呂に入る。弁解の余地無く、異常者の部類であるが、それでも一刻も早く洗い流したかった。

傷を治癒で処理しようと思ったが、無傷というのもまずいだろう。そのままにしておく。血染めの衣服も、軽く湯にくぐらせただけで、

そのまま着用した。

ポタポタと、体中から水をまき散らしながら、再び先ほどの屠殺場に入る。

そして壁に手をつくると、アクセルは嘔吐した。胃の中のものを粗方追い出したところで、あらためて室内を見回す。

死体だということは、わかる。自分が作ったのだから、尚更だ。今の嘔吐は、精神的な要因ではなく、血の香りが原因。やはりあの時は、嘔吐を忘れるほど気分が高揚していたのだろう。

どうせ、自分のような臆病な生き方をする以上、人殺しは避けては通れなかった。早い段階で“童貞”を捨てられたことに、感謝をしよう。

(……さんざん見たもんな)

あの日。骨を杖にするために、自分の身体を切り刻んだ時。血塗れの肉をさんざん見たせいか、死体に対してそこまでの嫌悪感はなかった。

「さて、やるか」

吐き出すものがなくなり、スッキリしたのか、アクセルは呟くと、傍らの剣を拾い上げる。

片手で。両手で。逆手で。

既に物言わない死体を、切り刻む。

それは、練習だった。腕や首を、切断出来るまで切りつける。使



い物にならなくなる度に、死体も剣も次のものに取り替え、ひたすら振るう。

始め……あの、自分をトイレに連れて行った山賊は、上手に首を切断できた。

しかし、最後。あのボスは、確かに一撃で死んだが、切断までには至らず、動脈を切り裂いただけ。疲労があつたかも知れないが、それでも、ここにある死体を有効に使う。

魔法は、イメージが大きく影響する……気がする。

人を斬るには、どうすればいいか。それを自分の身体に教え込ませるのは、決して無益なものではない筈だ。そのイメージさえ、自分の中で完成させれば。あの、最初の殺しは、恐らくはたまたままぐれ。

やがて、切り刻むものも、切り刻むためのものも無くなった時、アクセルは死体を漁った。主に、指輪。財布。その他アクセサリ。自分に目利きなどは、出来ない。片っ端から集め、それを一つの袋にまとめると、窓から放り投げた。

続いて屋敷を歩き回り、宝物庫を発見すると、それも窓から外へ。

少し迷ったが、山賊達から漁ったものはそのままに。宝物庫にあったものは一部を屋敷の傍に埋めた。

台所にあつた油を全て、屋敷中にはらまき、火を付ける。その火が屋敷を包み、内部で二階の床が崩れる轟音を確認すると、アクセルはその場を立ち去った。背中の中の布の包みには、山賊のボスの首が入っている。

早く、リーズ達を安心させてやらないと。

村に戻ったアクセルは、リーズに治癒をかけてもらうと、村長の家で泥のように眠った。

実際は、そんな一文で語れるようなものではなく……血に染まったアクセルを抱きしめ、人目も憚らず号泣したり、とにかく大変だったが。

村の見張りをしていた山賊二名は、アクセルが無事に戻ったことであっさりと捕縛された。

山賊が仲間割れを起こし、同士討ちを始めた。

自分は杖を奪われるも、逆に剣を奪い、死に物狂いで戦った、というか逃げ回った。

ボスは宝を抱えて逃げる途中だったので、襲いかかって剣を突き刺した。

誰かが火を放つたらしく、燃える屋敷から命からがら脱出した。びしょぬれなのは、山を下りる途中の小川で転んだから。

要約すると、それが、アクセルの説明だった。

明らかにした功績は、ボス一人を討ち取った、そののみ。子爵の嫡男、盗賊退治の初陣の手柄にしては、これだけで上出来だろう。

屋敷の焼け跡に散らばる宝は、後始末と称して、全て兵士達が回収した。まあ、それが彼等の報酬なのだから、止めはしない。埋め

ておいた宝はどうやら見つけなかったらしく、運がよい誰かが、後に見つけることになるだろう。そもそも、燃やすのも勿体なかったからだし、運ぶのも重そうだったし、必要になるか、何かの折には、その時に発見されていなかったら回収しよう、という、極めて優先順位の低い理由で埋めたのだ。はつきり言えば、どうでもいい隠し財産。多分、自分だって忘れ去るだろう。

略奪を受けた村に関しては、屋敷に帰ったら速やかに税を下げなければならぬ。というか、自分がやらないと、誰もやらないだろうし。村人達も、逆らわないだろうし。

そうそう、リーズや兵達の責任についても、結局は囚われた自分が一番間抜けだったわけだし、なるべく父親に掛け合って、軽い罰で済むようにしないと。

凱旋の馬上、自分をしっかりと抱きしめるリーズに身体を預けながら、アクセルは静かに微睡んでいた。

### 第三話〈邂逅〉

ところで、魔力についてわかったことがある。

まず、外見。丸い頭、十字架のような身体の薄っぺらいヤツ。その集合体だと、日に日にはつきり見えてくるそれを観察して、わかった。例えるなら、千と千尋の神隠しで、竜体のハクを襲っていた、式神のようなあれ。あれを、もっと縮小させたもの。

魔法を使う時、それらが変色するのもわかった。

メイジの周囲に漂うそれは、魔法を使う時に変色し、それ自体が魔法となる。ファイヤーボールを使うときには、赤くなって集合し、炎の塊となる。

どうやら、どこにでもいるものらしく、焚き火の傍を漂っていたり、湯船を出たり入ったりしていた。

火の周囲に漂うのは赤色、水の周囲に漂うのは薄い青色、一際素早く、風の中を漂っているのは若草色、地面にいるのは茶色。

実に、わかりやすい。

それが見えることのアドバンテージ……優位性は、最近ようやくわかった。

例えば火炎の魔法を使う時、何もないところからいきなり炎を生み出すわけだが、その際に魔法使いの周囲の魔力が集合し、赤く変色したと思ったら火炎が生まれる。

しかし、よく見てみれば、すぐに赤く変色するもの、少し時間がかかって変色するもの、まるで変色を嫌がっているようなものなど、様々。

結局、真っ白一色のように見える魔力達にも、個性があるという結論に落ち着いた。

リーズを見ていると、火炎の魔法を使うとき、すぐに赤く変色するものも変色を嫌がるものも、まとめて無理矢理、火炎にしている。それは、試してみた自分も同じだった。

原作では確か、理をねじ曲げるのがメイジの系統魔法で、理に沿って使用するのがエルフの先住魔法だった……等。

つまりは、魔力の個性を無視して、魔力と統一して、一緒くたにしているのが、メイジということか？

メイジよりエルフの方が強いなら、魔力の個性を重視すれば、並のメイジより強力な魔法が使える？

アクセルは早速、部屋の中に四つ、置物大のインテリアを作った。

デザインを考え、木材を自分で削り出し、寝る間も惜しんで製作を続ける。一刻も早く、仮説を試したくて。

一つ目は、火のインテリア。燃え盛る火炎を象ったもので、周囲に蝋燭を立てられるようになっていて。おまけで、火という漢字も彫り込んだ。

二つ目は、水のインテリア。どんなデザインにすればいいんだ、と大分迷ったが、以前商人から買った、人魚姫の置物を思い出し、そのまま木製の土台にくっつけ、人魚姫の周囲を削り込んだ。堀が出来たわけだが、一応は、海に突き出た岩に腰掛ける人魚姫、とい

うイメージである。そこに、水を流し込んだ。これも、土台に水という漢字を彫ってある。

三つ目、風のインテリア。水と同じくデザインで迷ったが、竜巻にした。ただ、バランスが悪くすぐに倒れるので、二本の串を両側に立てて支え、ついでに紙を切り出して作った風車をくつつける。勿論、風という漢字を彫り込んだ。

四つ目、土のインテリア。土台に土を盛るだけにしようかと思っただが、いくら何でも寂しすぎるし手を抜いた感があるので、自分が持っている一番価値の高い宝石を、小さなティアラのようなものを削りだしてはめ込んだ。そのティアラの内側に、土を山型にして積み上げる。やはり、漢字で土と彫った。

まあ要するに、祭壇を作ってみた。

アクセルも、ここまで来るともはや魔力ではなく、精霊と呼び直している。今見えているのが精霊なのかどうかはともかく、自分しか見えていないのなら、何と呼ぼうが問題はない筈だ。

火のインテリアに蠟燭を立て、火を点すと、自分からいくつかの精霊が離れ、インテリアの周囲を漂い始めた。他も、同様。自分の身体から離れ、インテリアに留まる。

改めて自分の身体を見回すと、周囲を漂う精霊は、大分減っていた。これは、一般的な平民より少し多いくらいか。

残ったのは、四つのインテリア、どれにも反応を示そうとしない精霊達。

(ひょっとして、これが……虚無の精霊？ いや、違うか？)

失われたとはいえ、虚無の属性も、立派な系統の一つだ。とはいえ、虚無のインテリアなど、何をモチーフにすればいいのか。

そもそも、虚無の使い手は、現在世界で四人だけの筈。努力とか、そういう問題ではないだろう。

というか、虚無って何だ？ 無属性って考えていいのか？ いや、そもそも無属性の物質って、何だ？

考えても仕方ないので、自分の身体に留めたままにしておく。試しに系統魔法を使ってみたが、特に可もなく不可も無し。四つの属性、全てに対して、目立った反応の違いは見られない。取りあえず、無属性としておいた。

さて、それからが大変だった。

「……ちよっ、こらっ、喧嘩しない！ ほら、仲良く。……え？  
ああ、ひよっとして、水が古くなつた？ じゃあ取り替えないと……だからそこっ、ちよっかい出さない！」

託児所の職員も、こんな感じなのだろうか。

精霊達はやがて、それぞれの色から変化しなくなつたが、それだけにはつきりと、居場所や行動が分かる。火属性のくせに、他の属性に喧嘩を売っていたり、風の属性が他のインテリアの乗っ取りを進めたり……。

それらを引き離すのも、一苦労なのだ。

アクセルがトイレに行く為に部屋を出て、戻ってみれば水のインテリアを火の精霊が乗っ取り、水の精霊達が途方に暮れたように漂っていたり、火の精霊が他のインテリアに攻め込んでいる隙に、風の精霊が火のインテリアを強奪していたり。

それだけならまだしも、四系統の精霊全てが入り乱れ、部屋の至る所で己以外全て敵、な大戦争を繰り広げていた時は、流石に無視

して寝てしまおうかとも思った。

「ほらっ、大人しくしろ！ 自分とこに戻れ！ 行儀の悪い子には、お菓子やらんぞっ……て、お前らほんと……食欲には忠実なんだな」

インテリアの前に食べ物をお供えてみたら、意外にも好評だった。いや、好評すぎた。

比較的大人しい水のインテリア前に置いたところ、四つのインテリア全てから、全精霊が突撃した。流石に四色の奔流は見事で、暫し見とれてしまったが。

とはいえ、基本的に精霊達は物質を擦り抜けるので、備えた食べ物は全く無傷。どうやら、食べ物の中の何かを食べているらしいが、それが何なのか全くわからない。重さも変わらないし、味も変わらない。

食べ物よりも、お菓子が好みらしい。では飲み物は、と、試しにワインをコップでお供えてみたら、群がるのは水の精霊だけ、残り三系統の精霊たちが羨ましそうにしている、という、なかなか面白いものが見られた。

喧嘩になるので、食べ物やお菓子は同じものを、四つにきちんと等分してお供えている。それでも、喧嘩は絶えないのだが。

(……日に日に増えてるのは、気のせいだよ……?)

前は確か、精霊達は漂うほどしかいなかった筈だ。それなのに今や、インテリアの周囲を忙しく流れている。

精霊同士は、同じ系統ならすんなり重なるので、いくら増えようが、体積は変化しない。他の系統同士だと反発しあうが、それはそういうものなのだろう。つまり、系統精霊全てをコンパクトにしてみたら、僅か四つ分の体積で済む。なのに、それをせずにバラバラ



になっているのは、きつとくつろいでいるからだ……そう考えておく。

お菓子の脅しが有効なように、どうやらこちらの言うことは理解している。こちらからは見ることしか出来ないが、それでもだいたいの動きで、精霊たちの気持ちは大まかに判断できるようになってきた。

故に、意思の疎通が出来ることが嬉しく、楽しく、もっと会話したいのだが……流石に横から見れば、自分の部屋で、自作のインテリア相手に独り言言っている、頭の危ない少年だ。部屋のドアはきちんと閉めるようにしているし、父親は相変わらず留守にしがち、母親は音楽が唯一の趣味であり生き甲斐であるので、四六時中楽器に触れているから、用心すべきは使用人達なのだ。

肝心の魔法の威力については、一度試したきりだった。ウィンドブレイク……風を爆発させるような魔法を、試しに、風色に染まった精霊達のみを行使してやらせてみたら、自分が吹き飛んだ。狙ったのは、三メートルほど前方に立てた木の杭だったのだが。

本当に、こつそり試して良かった。

いくら何でも、きつとあれだ、純度が高すぎたのだ。自分の周囲の、無属性らしき精霊で薄めれば、いつも通りの威力になった。

最大出力を試してみたい気はするが、やめておく。絶対に、自爆する。それ以前に、それをこつそり試せるような、秘密が厳守される場所がない。

そもそも、ラインクラスになったばかりの自分が、スクウェアク

ラスの威力を出せる方がおかしいのだ。言ってみればこれは、チートコードだろう。

禁じ手として、封印する。まあ、極限のピンチに陥った時に、自覚悟で封印を解くとしよう。

属性が固定された精霊たちを、格闘に利用できないか、現在の目標はそれだった。

ベッドの上に胡座をかき、膝の上に手首を乗せ、十本の指に意識を集中する。周囲のインテリアから精霊を集め、指でバラバラに操るようにして、奔流を作り出して操作する。

火の精霊が暖かい。

水の精霊が体内で流れる。

風の精霊が頬を撫でる。

土の精霊が集合する。

それを感覚として察知できるのもやはり、自分だけだったようだ。試しに精霊を集め、リーズに向かってこっさり放ってみたが、彼女が何か気付いた様子はなかった。それはそうだ、風の精霊をいくらか走らせても、そのままでは髪の毛一本たりとそよぐことは無いのだから。

属性が固定されようと、あくまでそれ自体では、何の影響もたらさない。

まるで、マスゲームの練習をさせるように……精霊達に、号令を出す。普段は我が儘だが、こちらが強く願えば、それに応じてくれるのだ。

コンコンッ

ノックの音。見られても特に問題ないので、

「若様、旦那様がお呼びです」

「ああ、わかった。すぐ行く」

メイドの声に返事をし、立ち上がる。

じつとしていれば、そして集中していれば、精霊への号令も難しいものではないが、行動しながら、他人と会話しながらだと、その難易度が強烈に跳ね上がった。

すぐに行動を乱し、ばらける精霊達を見ながら、理想とはほど遠いと溜息をつく。

いや、今の自分だって、相当に強い筈なのだ。少なくとも、十歳にも満たない年齢でラインメイジになっている時点で、なかなか非常識なのである。

しかし……これから先、自分の非常識さなど、通用しなくなる……  
…そんな非常識な物語が始まる。そうなった時、生き延びる為には、  
まだまだ足りない。

相手として想定すべきは、メイジや幻獣、亜人たちだけではない。タルブの村のゼロ戦、それに、ロマリアの虚無の担い手が使うという世界扉から引っ張って来られるであろう、近代兵器。もしも、自分の未来で、あれを相手にする可能性があるのなら……。

（まだだ。まだ足りない）

あんなもの、相手にしたくはないというのが本音だ。従って、才

人と敵対するのは避ける。

だが、もしも……彼が将来、自分の前に立ちはだかる事になれば？  
確か機関銃なら、水の壁でも作り出せば、銃弾が自壊して防げた  
筈。もしくは風で軌道をそらすという方法もあるが、才人の主な武  
器である、インテリジェンスソードのデルフリンガーには、魔法を  
吸収するという特技があり……それが怖い。

それを考えれば、手は抜けない。その余裕が無い。せめて、サイ  
ヤ人クラスの存在にならなければ、安心は出来ない。

いや、それが無理だとしても。この世界での、最強と呼べる存在  
の一角にならなくてはならない。

(……デカ過ぎるだろ、夢が)

ただ、長生きしたい。殺されたくない。

そんな当たり前のような願いを叶えるためには、最強とならな  
ければいけないのか。

平穏な人生というのも、案外楽ではない。

ただ、己の小心さ故なのだろうが。

「おお、来たか。アクセル」

「三ヶ月ぶり……ですね、父上」

ラヴィス子爵は、バタバタと部屋中を歩き回っていた。レビテー  
ションで彼方此方の書物を浮き上がらせ、表紙を確認しながら、何  
冊かを手に取り、机の上に積み上げる。

この父親は、忙しいかのんびり休んでいるか、そのどちらかしか  
ない。先ほど、メイドがアクセルを呼びに来た時、そこで初めて、  
子爵が帰っていることを知った。それが、日常。アクセルがもつと  
甘えれば変わるだろうが、既に独り立ちしそうな我が子に、かえっ

て自由に動けると喜んでいららしい。安心して、アクセルが知らない仕事に精を出せるのだろう。

寂しい家族だとも思うが、両親の仲は悪くない。亭主元気で留守が良い、なのか。

たまに帰ってきた時は、アクセルが敬遠するほどべったり愛し合っている。

父親が留守の間、母親も特に寂しくはないようだ。お茶を飲むか、音楽を楽しむか。アクセルを愛していないわけではないが、これもまた、一つの家族の形なのだろう。

「そうか、そんなになるか」

ふむふむと頷きながらも、子爵の動きは止まらない。先ほど帰ってきたらしいが、またすぐに、次の出張の準備をしていた。

「それで、父上。御用は？」

「ああ。アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィス。ラヴィス子爵領の代官に任ずる」

アクセルはそっと、頭に手を当てた。

「父上。一体何を……」

「まあ聞け、確かに珍しいが、前例がないわけじゃない。私はこの通り忙しい身だし、いつ仕事の目途が付くかもわからん。しかし、子爵が不在というのは問題だ。そこで、名ばかりではあるが、息子のお前を領主代理とする。心配するな、座ってるだけでいいんだ。細かいことは、ゼルナの部下達がやってくれる」

この屋敷から徒歩で一時間ほど歩いたところに、ゼルナの街があ

る。ラヴィス子爵領の中心地とも言つべき場所で、言うまでもなく、子爵領最大の街。そこには執政館が建てられており、官吏が詰めている。

一応、そこで政治を取り仕切っているのは元執事のメイジだが、そろそろ老体なこともあり、後方へ退かせたい。

「わかりました。アクセル・ベルトラン、謹んで拜命致します」

「おお！ 相変わらず聞き分けが良いな！」

「父上に似たようです」

「……そうか。まあ、慣れるまでは向こうで寝起きをするようにしろ。要領がわかったら、週に一度か二度は屋敷に戻り、母さんを安心させてやれ。それと……」

「はい」

「……リーズを、同行させよう」

少し迷いを匂わせながら、ラヴィス子爵は告げた。

アクセルの教育係であるリーズだが、同僚のメイドや使用人達からは、あまりウケが良いとは言えない。

平民に墮とされたとはいえ、彼女の根は貴族であり、他の平民を見下す言動が目立つのだ。勿論、メイジであるリーズに表立って喧嘩を売る者はいないが、使用人達の不満が、そろそろ無視できないレベルにまで達している。

没落貴族の娘が、理由もなく威張っている……快いものではない。

「わかりました」

聞き分けよく、アクセルは頷いた。

しかし、ラヴィス子爵はどうも、リーズに甘い気がする。

仮にも貴族の屋敷で働くメイド達は、通常の平民などとは比べるに足りない程の教養を身につけていた。貴族に使用人を世話するギルドがあり、メイドは皆、そのギルドの試験をパスした才女たち。

貴族として育てられたリーズと比べても遜色はなく、そしてメイドはメイドとしての自負があるからこそ、平民になっても高圧的なリーズを苦々しく思っていた。

はつきり言ってしまうえば、リーズがまともに身につけているのは魔法のみ。試験をパスしたわけではなく、ラヴィス子爵の独断で引き取られた娘だった。

アクセルは父親の部屋から出たその足で、リーズに異動を伝えに行ったが、彼女は寧ろ、屋敷を離れることが出来てせいせいする、という風だった。

まあ、これが普通の貴族というものなのだろう。

三日後、二台の馬車が、ゼルナの街に到着した。

ラヴィス子爵領最大の街とはいえ、所詮は片田舎。城壁に囲まれた街であるので、大した大きさはない。

出迎えた元執事だという男の目には、クマが出来ていた。鳥の骨などと呼ばれている……現在、まだ呼ばれていないが……マザリ― 二枢機卿と同じく、相当に苦労しているらしい。

自分の仕事を子どもに奪われることで、怨みに思っただけ何か仕掛けてくるか？というのは、杞憂だった。早く家に帰って、のんびりし

たい。孫と遊んで暮らしたい……そう語る老人の頬を、涙が伝う。思わず、今までありがとうございました、と、両手を取って頭を下げてしまった。

さて。

館の二階、執務室の奥、代官の机に腰を下ろしたアクセルは、周囲に集まる人々を見回す。

「さて、と。まあみんな、頑張るように」

それだけ言うと、さっさと文官たちを仕事に戻した。

そう、こんなものなのだ。自分はただ、形式的に派遣された代官。ここにいるだけでいいし、文官たちも、それ以上のことを望んではないだろう。決まり切ったいつもの仕事を、今日もまた、繰り返すだけ。

「リーズ、ちょっと散歩に行ってくるよ」

「しかし……」

「大丈夫、ちゃんと変装して行くからさ」

山賊のボスの首を持ち帰った時、同時に、アクセルは魔法の腕前を示したことになる。

お忍びで、なら、供を連れずとも問題ないと判断され、リーズも快く、というわけではないが、そつと頷いた。ラヴィス子爵の代理のアクセル、その彼の代理を務める彼女なので、文官達に混じって書類仕事に向かう。

整えられていた髪をグシャグシャに掻き乱しながら、運び込まれたばかりの荷物を漁り、着古された平民の服に着替える。リーズが見れば、こんなボ口を纏うなんてっ、と、拒絶反応を起こしそうだ。



続いて、風呂敷くらしいの布に、適当に予備の衣服を詰める。それを背負えば、世間の荒波に揉まれつつも健気に生きる、飲んだくれの父と病弱な母と幼い弟妹を背負った、平民の長男（in行商の旅）……ともかく、どう見ても貴族ではない少年が出来上がった。人など滅多に通らない裏門から出て、軽く地面を転がり、更に砂埃を頬に叩き付ける。

（これで、バレる心配はないな？）

疑問符が浮かぶが、アクセルはそのまま大通りへと向かった。

文官たちは、その目で、その足で、街の様子に触れることはなさそうだ。お飾りの代官ではあっても、本当のお飾りであってはならない。というより、少しでも良い方向へと持つて行きたい。

転生者とはいえ、自分には原作知識以外、何の武器も無いのだ。政治も知らないし、外交も知らない。農業の知識も、軍事の知識もない。あるのはお決まりの、アニメやら漫画やらゲームやら……それと、どうでもいいような豆知識群。

出来ることからやろう。そう、例えば、捜査とか。

することがなくて暇で暇で、勧善懲悪の水戸黄門ごっこでもやろうか、そんな理由であることは否定できないが。

領内第一の都会らしく、様々な人間が溢れている。まあ、そりゃ街なのだから人だらけなのは当たり前だが。

取りあえず、地理を把握するためにひたすら歩き回る。時折露店や大道芸人を見物しながら、店の場所、道路の様子など、なるべく頭の中に入れていった。

「……やれやれ」

二時間後、街の中心部を一通り歩き回ったところで、アクセルは噴水のベンチに腰を下ろす。

(……なんもねえや)

自分に出来ることが、である。昼間から酒を飲んでる大人達が暴れ、露店で万引きしようとした少年がぶん殴られた。アクシデントは、その二つだけ。

街は、平穩無事な時間の中にある。

目立った悪も、目立った善もなく。可も無し不可も無し。

(まあ流石に、漫画みたいなわかりやすい悪役はいないか)

もしいたとしても、その悪役を懲らしめてめでたしめでたし、というほど、簡単ではないだろうが。

「ん？」

そして、アクセルはその男に気付く。

自分の右奥に見える、建物に挟まれた薄暗い通り。その陰に、じっと一点を見つめる、無精髭の男がいた。年齢は見たところ、二十歳前後か。

「……………」

既に冬も終わったというのに、厚手のコートをしつかりと着込み、フードを被っている。その両目はぎらぎらと、刃のような輝きをし

ていた。

背を丸め、片手をコートの中に忍ばせ。

(殺すつもりか……?)

男が見つめているのは、噴水を隔てて広場の向こう側に建つ、街一番のホテル。今は貸し切りとなっていて、見張りに立つ傭兵達を避けるように、誰も近づかない。

別に、殺気を感じたとか、そんなことはなかった。そもそもそんな真似、本当に出来るのかわからない。

しかし、季節外れの分厚いコート、その内側に入れられた手、そしてシリアスな表情。

まさか、隣の菓子屋で限定発売されている、ナッツベリーケーキを買いわけでもないだろう。

再び男を見ると、彼は目を閉じていた。そして……肩を上下させて何度か深呼吸し、目を見開くと、裏通りから広場に出た。

「ぶつ殺す……」

彼がアクセルのすぐ前を通り過ぎた時、彼のぶつぶつとした呟きの正体がわかった。

やはり目的は、殺し。恐らくは、あのホテルを貸し切っている人物。

それにしても、呟きとはいえ声に出すとは……格好だって、あんな“それらしい”もので。

殺し屋ではないが、強い決意がある。

(ちよつと……ちよつとだけ。見るだけ)

少なくとも、あの男には自分の命を脅かすほどの力はなさそうだ。いい加減、退屈で、暇だったのも理由。アクセルは膝に手を当て立ち上がると、ホテルの隣の裏通りへと入った男を見た。

「はい、ちよつとごめんよオ」

軽く声を上げながら、人混みを擦り抜ける。頭に籠を乗せたおばさんの前を通り、子どもを背負った女性の背中を掠り……。

「おいっ、その薄汚い小僧。このホテルは貸し切りだ。さっさとどっか行け」

「なんだよオ、ちよつと近づいただけじゃんかよオ……」

口を尖らせながら、見張りの傭兵に言われたとおりホテルの前を横切る。そして、先ほどの男と同じように、見張りの視線が外れた時を狙って、裏通りへと飛び込んだ。

街一番のホテルというだけあって、面積も広く、途切れない壁が続いている。そこを少し進んだところで、アクセルはゴミ箱の陰に隠れた。

(見つかったるし……)

少し先、ホテルの裏口の前に、男が三人。さっきの男は路地に倒れ、亀のように蹲っている。それを蹴りつける、二人の傭兵。

(見張りか……そりゃ、裏口にだっているだろうに)

近くに、男がコートの下に隠し持っていたのであろう、一振りのナイフが落ちていた。

しかし、何がどうなっているのか。

コートの下に武器を隠し持った男を、そのまますんなり通すわけにはいかない。そのくらいの理屈は言うまでもないが、男は誰を狙ったのか。

貴族……というわけではないだろう。貴族だって傭兵を雇うが、それならホテルの前に、これ見よがしに馬車を待たせておく筈だ。いや、宿泊しているのなら違うが。そうだ、貸し切りなのだから、当然宿泊してゐるだろうし、貴族の可能性もあるか。

しかし、それなら当然メイジであるわけで……メイジを殺しに行く男の武装が、ナイフ一本？ あり得ないだろう。

いや、待て待て。この街には、貴族は自分しかいない。そこへお忍びでない貴族が来るのなら、余計なトラブルを防ぐため、当然真っ先に自分に連絡が来る筈で……。あ、でも、到着してすぐに街に出たから、自分にまで連絡が来ていないのかも。もしくは、単純に皆が伝え忘れたのか。

（あああつ、もう！ バシツと正解出してくれよつ、俺の脳みそ！！）

まあ……自分の頭脳にそこまで期待する根拠もないのだが。

別に、答えを一つに絞る必要はないのだ。ホテルが貸し切りなのだから、宿泊しているのは当然、それなりのステータスを持つ人間即ち……貴族か、それなりの商人か。

蹴られ続ける男が、だんだんと動かなくなっている。

(……バカか、俺。あの男に聞けばいいじゃねえか)

アクセルは立ち上がると、三人に向かって走り出した。

「兄ちゃんっ！」

その声を出すと、傭兵二人が攻撃を止め、少し驚いたようにこちらを向く。アクセルはそのまましゃがみ込むと、蹴られていた男にしがみついた。

「兄ちゃんっ、何してんだよっ、こんな所で！」

「兄ちゃん……ああ、小僧。こいつ、お前の兄貴か？」

合点がいった、という表情で、傭兵の一人が声を掛ける。

「そうだよお！ お前らっ、兄ちゃんに何しやがる！」

あくまで自分は、この男の弟。男は気絶してはいないが、かなりのダメージを受けており、喋ることも出来ない様子だ。突然現れた自称弟を確認しようと、彼の目だけが動く。

「何しやがる、じゃねえよ。この野郎、よりもよって、バルビエ様を狙うたあなあ」

バルビエ……その名で、商人だと判明した。

確か、主に骨董を商う男で、出身はかなり遠くの………忘れた。今ホテルを貸し切っているのは、そのバルビエ。

「親父の敵討ちか？」

「敵討ち？」

聞き返したのは、もう一人の……若い傭兵。壮年の傭兵は顎髭を撫でた。

「そうだよ。三日前……だったか。こいつの親父が、分相応な逸品を持つてるって聞いてな。バルビエ様が自ら出向いたんだが、頑として譲ろうとはしねえ。時間の無駄だったことで、俺らが忍び込んで、一家皆殺し。ブツは目出度くバルビエ様の手に……」

事も無げに話す傭兵。アクセルは、蹲る男の身体に力が込められるのを感じた。

「運悪く……こいつにとっては運良く、だろうが、こいつだけ外出してな。まあ、敵討ちに来るかもってんで、一応警戒していたわけだ」

言うまでもなく、その傭兵が告白しているのは犯罪。

しかし、それを易々と口にはしているのは、口封じをするからではない。勿論、口封じに男とアクセルを殺すつもりだろうが。

つくづく、弱者に厳しい世界だ。

この男だって、帰宅して家族が皆殺しになっていれば、勿論通報しただろう。

しかしその通報も、受けるのは下っ端。バルビエがばら撒く金の力で、すぐに止められ、握り潰されてしまう。一家皆殺しですら、所詮は金さえあれば黙らせることが出来る、些細なことなのだ。

近所の人間だって、関わりたくはない。

せいぜい、通りすがりの盗賊にやられた、可哀想な一家……そのような結論に落ち着き、やがて風化する。

ガンッ

アクセルが事情を把握した時、思いも寄らないことが起こった。

「……何しやがる」

壁に手をつき、殴られた頬を擦る壮年の傭兵。拳を握り締め、鋭い目つきになっているのは、若い傭兵。

(え……何？ 仲間割れ？)

思い掛けない展開に、アクセルは二人の傭兵を見比べる。

「ふざけるなっ」

若い傭兵の怒声。

「そんな……そんなことの為に……人の命を、何だと思ってる」

(おお……熱血だ)

軽く感動したアクセルだが、それに比べて自分の、あまりにも冷徹な……無機質な感想に、自己嫌悪に陥る。  
確かに、酷い話だ。自分だって、バルビエを放っておくつもりはない。

しかし、この若い傭兵ほどの激情は、遂に生まれなかった。



「…………あのなあ、新入り」

バシィツと乾いた音が響く。平手打ちの反撃を喰らい、若い傭兵は背後の壁にぶつかると、そのまま尻餅をつく。

「きゃっ…………」

(弱っ…………しかも、女みたいな悲鳴…………え？ きゃっ、て？)

すっかり蚊帳の外となったアクセルを横切り、壮年の傭兵は、女のような悲鳴を上げた傭兵の兜を掴むと、それを素早く外した。

(…………女だったのかよ…………)

兜で、顔の大部分が隠れていた為か、気づけなかった。声変わりの遅い新米傭兵が、兜を外せば、栗色の髪が露わとなり、そしてその顔つきは…………紛れもない女の子。

「バレてねえと思ってたのか？ もう、全員知ってんだよ」

「…………い…………痛…………やだあ…………」

少女は座り込んだままボロボロと、大粒の涙を流し始めた。

(…………つうかさつき、倒れた人間ガシガシ蹴ってたじゃん。ストンピングだったじゃん。浦島太郎の悪ガキBだったじゃん)

男勝りで勝ち気な少女が、男を見返すために性別を隠して傭兵に…………と、そこまで広がっていたアクセルの想像は、一瞬で打ち砕かれた。

チツ、と、壮年の傭兵は手を伸ばす。少女の鎧に付いていた飾り布を引きちぎると、それを無理矢理、泣きじゃくる口に押し込んだ。ズボンを引きちぎれば、少女の下半身が露わとなり、白い太腿と、清楚な下着が晒される。何をされるのか理解したのか、少女の顔は、恐怖で一層歪んだ。

「いいか、新入り。テメエが昨日食った飯だって、そうやって殺されたヤツらの持ち物で買った、血塗れの飯だ。おかわりもしてた  
だろ？ いい機会だ、ようつく、そのちっさい身体に叩き込んで、  
教育してやるよ」

その前に……男は呟くと、剣を抜いた。

「さっさと始末しとくか」

倒れ伏した男は、顔を上げ、傭兵の剣を見つめる。その顔には既に憎しみではなく、恐怖が張り付いていた。

「……ん？ そういや、あのガキは……」

倒れ伏す男に寄り添っていた、弟がいない。

「いや……そもそも、生き残ったのはこいつだけで……それに、  
息子は一人で……」

「今更かい」

傭兵の右後方に回っていたアクセルの、突っ込み。ただし、手の甲ではなく、ナイフで。

ベルトと鎧の間から、脇腹を深々と刺され、痛みで声を上げるこ  
とすら叶わなかった傭兵の身体が折れ曲がり、やがて路地裏に転が  
る。何が起こったのか、理解できないといった瞳から、暫くして光  
が失われていった。

アクセルは首を振る。

弟だと偽ったのは、失敗だった。たまたまこの傭兵が気付かなか  
ったから良かったものの、これがもつと頭の回るヤツだったら……  
それだけでなく、腕も立つヤツだったら……。

(まあ、ともかく……こんな危ない橋、渡るもんじゃないな)

切っ掛けは、ただの好奇心。それがいつの間にか、一人命を落と  
すような結果を生んでしまった。

(そうだ、あの娘……)

壁に目を向けると、少女は失神していた。口を塞がれていたおか  
げか、悲鳴を上げることはなかったが……座り込んだ地面が湿り、  
湯気が立ち上っている。

(……何で、傭兵に……)

どこからか烈風カリンの噂でも聞きつけ、憧れたのか？ まさか？

気になるが、今は話を聞ける状態ではない。アクセルは傭兵の死  
体を踏み越えると、未だ倒れたままの、ボロボロの男に歩み寄った。

「……やあ」

軽く微笑み、右手を挙げる。

どういつ対応で行こうかと思ったが……謎の少年、ということにする。

強烈な第一印象を与えておけば、これから主導権を握り易くなる筈だ。

そう、これから……。

出来ることないんじゃないか、とはいえ、やってみたいことはある。その為には、自分以外の人間を引き入れる必要があるのだ。

ところで、自分に人を見る目があるのか……多分、ない。とりあえず、前世ではなかった。だから今生でも、期待出来ない。

流石に、主人公組など、原作で登場する人物達については、ある程度信頼出来るだろうが……それでも、絶対ではない。彼等だって、騙されたり、操られたりする。モブキャラの一人である自分は、その時に近くにいれば、あっさり殺される可能性が高いのだ。皆が過ちに気付いた時には既に遅く、アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィスの方が刻まれた墓碑の前、沈痛な面持ちの誰かが、「アクセル、あなたの死は無駄にしない……」とか言いながら、夕陽の中、涙を拭って黒幕を倒しに向かう……。

……何だか、笑えなさすぎる想像だ。

いや、じゅうぶん無駄死にだし。

それくらいなら……。

……原作キャラを庇って……出来れば女の子の胸で、惜しまれながら死ぬ。

あり、か？ それはそれで。よし、その時には“可愛い顔が台無しだぞ”とでも言ってから死のう。いや、“いい女になれよ”も良い。“死ぬ前に一発ヤラして”は……キャラを選ばないと、引かれる可能性が……。まあ、冗談だと理解してくれる相手なら、言ってみようか。

いつの間にか、思考が随分脱線していた。

こちらを見上げる男は、目を見開き、呆然とした顔のまま。流石にそろそろ、名前くらいは知っておきたいのだが。

いやその前に、こちらが名乗るのが常識だ。しかし、今アクセルと名乗るのも……。じゃあ、ミドルネームで……。

「ベル、と言う。そう呼んでくれないかな？」

右手を自分の胸に当てながら、アクセルはそう言った。

「キミの名前は？」

ようやく、男は答えてくれる。

「……ナタン」

……むう……結構イケメンだな、畜生が。

無精髭が生えているし、殺意に満ちた表情だったので気付かなかったが、今の呆然とした顔をよく見れば、二十歳手前か。老け顔だとしても、高校生くらいだろう。

髪は少しクセがあるらしく、微妙にウェーブがかかっている。

「ナタン、か。……傭兵の数は、知ってる？」

「え？」

「今、バルビエが雇ってる傭兵だよ」

「……確か……七人」

「成る程、七人の傭兵か。生意気な数だ」

アクセルは隣のホテルを見上げ、鼻で嗤った。

「それで、今もまだ七人かい？」

「……いや……今は……六人」

ナタンの視線が、脇腹にナイフが突き立ったままの死体に移る。その隣で失神しているがっかり男勝りは、多分再起不能だろう。となれば、残りは五人。ホテルの正面入り口の見張りが、四人だった。ならば、残り一人は中か。そして恐らくは、バルビエの傍に。

いや、ナタンも、“確か”と言っていた。この傭兵もどきの女の子だって、つい昨日雇われた可能性もある。断定は出来ない。数え間違いだとして、あと二人か三人くらいはいると、覚悟しておこう。

「立てる？」

「ああ……何とか、な」

攻撃されていたのは、背中。確か、背面は前面の五倍の強度があると、バキで見た覚えがある。だんだん回復してきたのか、ナタンは壁に手をつきながら立ち上がった。

「怪我は？」

「……なさそう、だ」

地面を見たまま、彼はふうと溜息をつく。そして……

「……………ありがとうよ」

こちらを見ずに、ナイフを拾い上げた。しかし、彼はアクセルの方へと向かって歩き出す。勿論、襲いかかるつもりではない。そのままアクセルの横を擦り抜け、裏口のドアに手を伸ばし……………。

「あ？」

自分の後ろに、順番待ちのように並んだ少年を振り返り、じっと見つめる。

「……………何なんだ、坊主」

「いや。僕も、こつちに用がある。偶然だね？」

「……………いいか……………坊主。俺は、これから……………人を……………」

人を殺しに行く。そう言おうとしたのだろうが、彼は、背後の少年の殺人を目撃している。

「出来るの？ 初めてなんでしょ？」

アクセルがそう言ったのは、半ば確信があつたから。普通、ここまで情報を得れば、ナタンが人を殺したことがないと、完全に結論づけられるだろうが……………もしかしたら、と、そんな気もあつた。

ナタンが言葉に詰まったところを見ると、本当に初めてで間違いなかったが。

「……………遊びじゃねえんだ。バルビエはともかく、傍には恐らく、傭兵のリーダーがいる。そいつは……………」

これを言えば、大人しく帰ってくれるだろう……ナタンは、そう考える。

「メイジだ。ラインクラスだな」

ナタンとて、勿論メイジに勝つ自身があるわけではない。為す術もなく殺されるに決まっている。

そう……ナタンは、殺されるために来た。バルビエの身体に、傷の一つでも付けてやるために。それが叶わずとも、顔に唾でも吐きかけてやる。

流石にアクセルも、目の前にいるのが、自殺志願の鉄砲玉だと悟った。それに付き合わせるつもりはない、と、そういうことだろう。

「ラインクラスの……メイジ」

「ああ、そうだ。だからさっさとおうちに」

「そういうことは、早く言ってくれ」

ナタンの脇を擦り抜けて、アクセルはさっさとドアを開けた。死ぬ覚悟をしていたとはいえ、突然の出来事に、ナタンは慌てる。

「さて。どこにいるんだろ」

「お……おいつ、待て！ 何してんだっ、坊主！」

「静かにした方がいいよ。貸し切りとはいえ、従業員は大勢いるだろうし」

冷静な口調で告げられ、ナタンはまたしても、呆然とし……結局、少年のあとに付き従った。

少年は、“早く言ってくれ”と、確かに言った。普通そういうのは、ドアを開けて中に入ってから台詞だろう。



ナタンの自分を見る目が、得体の知れない化け物か何かを見るそれになったことは、アクセルの理想通りだった。

そう。突如として現れた、得体の知れない子ども。このインパクトは大きい。

ナタンが慌てるほど、アクセルは反比例して冷静になっていった。

「しかし……おかしいね」

「な、何がだよ？」

「従業員すら、誰もいない」

「……そりゃ、バルビエが貸し切ってるから……」

「いくら何でも、全員でバルビエを世話してるってわけでもないだろう。みんな暇で、スタッフルームで休んでいるのだとしても……」

廊下に放置されたワゴン車を、とんとんと叩く。

「ここまでだらしないものかな？ だとしたら、街一番のホテルなんて、大袈裟すぎる」

もっと探索すれば、どういうことかはつきりするのだろうが、アクセルは階段を上っていく。外から見た時、最上階のスウィートルームだけ、雨戸が閉まっていた。

あまり時間をかけすぎて、ナタンが冷静さを取り戻してしまうのも、おいしくない。

最上階に到着した。雨戸が閉まっていたのは、たまたま改装中だったから？ いや、バカと何とかは高いところが好きなものだ。それに、折角ホテル丸ごと貸し切りにするのだから、一番上等の部屋

で過ごしたいに違いない。少なくとも、自分はそつだ。

スイートルームの、重厚そうな扉に耳を押し当てる。果たして、話し声が聞こえた。

アクセルはナタンを振り向く。

「うん。やっぱり、ここにいるね」

「バルビエも……か？」

「さあ。ちよつと見てみようか」

「え？」

鍵はかかっておらず、ドアは簡単に開いた。

中にいたのは、三人。

でっぷりと太った、ごてごてした衣服の男。恐らく、商人バルビエ。

軽装の鎧を身につけた、精悍そうな中年男。恐らく、例の傭兵のリーダー格。

もう一人。椅子に縛り付けられた、初老の男。その太腿には何本もの針が突き刺さっており、顔は腫れ上がっている。拷問されていたということ、すぐに分かった。

それは、開くはずのない扉だった。

バルビエ、メイジの男が、信じられないようなものを見る目をしている。拷問されていた初老の男は、荒い息を吐いているだけ。

二人の目線の先、ドアの隙間にいるのは、一人の……若草色の髪の毛の、少年。

「……………」  
「……………」  
「……………」

やがて、少年の顔が隠れていき……再び、ドアは閉じられた。

「それっぽいのがいたよ、ナタン」  
「な……な……」

怒りすら通り越し、顔を真っ青にして口を開閉させるナタン。流石に意地悪しすぎたかと、アクセルは反省した。

「あ、閉めない方がよかった？ そうだね……ここじゃ何だし、入ろうか」

再び……今度はドアを全開にして、アクセルが部屋の中へと歩き出す。ナタンの手を引いて。

「……………」  
「……………」  
「……………」

メイジの名前らしい。バルビエは、傍らに立つ彼を怒鳴りつけた。

「は……………」  
「いえ……………」  
「……………」  
「……………」

モリスも、状況が掴めていない。

たった今、雨戸を少し押し上げ、正面玄関を見張る四人の部下達を見下ろしたばかりなのだ。

あの四人が無事ならば、残るは、裏。モリスの部下の内、一番の手練れを張り込ませた。一番の足手纏いも一緒だが。

しかし、それしか考えられない。こんなことなら、あの間拔けな小娘を雇うべきではなかったのだが、それはそれ、バルビエの趣味。このホテルでの目的を遂げたら、飽きるまで弄り、どこか娼館にでも売るか、適当に放り捨てるつもりだった。

「ナタン」

アクセルは、立ち尽くしている彼に声を掛ける。

「あのメイジを片付ける。少し待ってて」

「……え？」

ナタンが止める間もなく、アクセルはモリスへと歩み寄った。

誰の目にも見えていないが、彼の周囲には現在、風の精霊が渦巻いている。流石に四系統を一度に、は無理だが、一系統だけならば、何とか制御できていた。

風を選んだのは、戦闘やトラブルが起きた場合、一番応用力が高いから。

(頼むよ……皆)

精霊達に意識を集中させる。

やがて、モリスの目の前に立った。相手が何か言おうとしたが、アクセルはそつと右足を上げ、モリスの左足を蹴る。もっとも、爪先が当たったのは鉄の脛当てで、何のダメージも無いが。さながら、ノックをする時のように。

コンッ……コンッ……コンッ……

続けざま、三回。何をしてるのか、欠片も理解できず、モリスはじっと少年の頭を見つめる。

「わからないか？」

アクセルはモリスを見上げ、首を傾げた。その表情がどこか、嘲りを含んだものであることに気付くのに、少しの時間を要す。

続いて……

腕を伸ばし、人差し指を丸め、少し高めの位置にある鼻先を、ピシッと弾いた。

「売ってるんだけど……喧嘩を」

モリスの顔が、歪む。

腰に差していた杖を引き抜き、横薙ぎに払った。激昂しているとはいえ、その動きは素早い。何の用意もしていなかったら、きつとあの杖に、頬を殴られていただろう。

（案外……早かったな、キレるの）

まだ声変わりもしていない、年端もいかぬ少年。その幼い声による嘲りは、発火装置として十分だった。

もし、逆の立場だったら……自分も激怒していたかも知れないと、アクセルは頭の片隅で考える。

「このっ、小僧があああ！」

振り抜いた姿勢のまま、モリスは詠唱を始めた。杖をアクセルへ向けようと、動かす。

先ほどの横薙ぎを、バックステップで避けたアクセルは、風の精霊に意識を集中させた。無属性の精霊とブレンドし、右拳へと収束させる。

モリスが構える杖の先に、火球が出現した。

（フレイムボール……火のラインクラスか）

もしも水のメイジだったなら、仲間に取り込む可能性もあった。しかし、既にアクセルを攻撃する意志を示している以上、アクセルにとってモリスは、実験台ではない。

と言うより、メイジ……しかも、同じラインクラスの相手は初めてなので、手加減をする余裕も、度胸もないが。

別に、難しいことはない。

ただ、風の力を解放するだけ。それならば、無詠唱で十分。

目の前には、力を強め続ける火球。どうするか。このまま、相手がこちらへ向けて飛ばすのを待ってもいいが……。

いや、まだ実験だ。それに、さっさとした方がいいだろう。

前方……火の球体に向かって、跳躍。右腕を首に巻き付けるようにして、左耳の近くまで右拳を引く。

着地すると同時に、火球を裏拳で殴りつけた。インパクトの瞬間、収束させていた風の精霊を、一気に解放する。

放たれようとしていた火の玉は、床と水平に弾き飛ばされ……三

メートルほどしたところで、嘘のようにかき消えた。

モリスの顔から、憤怒が消えていく。その様は、ひどく間抜けなものに思えた。

両足の裏に、先ほどと同じように、風を起こす。ふわりと、アクセルの身体は宙に浮いた。フライと同じようなものだが、それよりも遙かに簡易。

跳び上がりつつ、身体の上下を入れ替える。啞然としたモリスの顔が、こちらを追った。

そして、モリスの顔が、天井まで向いた時……その顔を、そっと両手で包む。

(痛いな……)

右手の甲が、若干の火傷を負っていた。もっとタイミングを正確にすれば、無傷で弾けただろう。やはりいきなり、飛んでくる火球を弾き飛ばすなどという無謀をしなくて、よかった。

また、風の精霊を……足の裏のそれを意識して、解放。

部屋の中に、グシヨリという音が響く。

石造りの床だが、もしも板張りだったら、下の階まで突き抜けていたかも知れない。

モリスの後頭部は、床にたたきつけられ、絨毯にぬるつとした血液を零していた。その彼の頭の両側には、彼自身の脛当てがある。

モリスの身体は、腰の辺りで二つ折りにされていた。

出来るだけ、派手な殺し方をしよう……そう思ったからこそその、

行動。

アクセルが、永遠に凍り付いたままであろうモリスの顔から両手を離し、腰を曲げて足を床に置いた時、バルビエは尻餅をつき、その肥満体を震わせ始めた。

「ひ……」

何の緊張もない、アクセルの顔が向けられた時、バルビエの股間が濡れ、湯気が立ち上った。

それが、裏口のあの娘を連想させ、アクセルは流石に顔をしかめる。少女の失禁で興奮するような性癖はないつもりだが、それでもこんな醜悪なものを見せられるよりはマシだ。

急いで窓、そして雨戸を突き破り、大声を出せば、入り口にいる傭兵たちが気付く可能性もある。

しかし、今のバルビエにはその選択肢はなかった。いや、選択肢はあっても、頼りのメイジが二つ折りにされたことで、彼もまた、完全に心をへし折られていた。

「ナタン」

アクセルは後ろを振り向くと、突っ立ったままの男に声を掛ける。同じく放心状態だった彼は、はっとしたように意識を戻した。

さて……しかし、今のこのナタンに、人を殺せるのか。

噴水を横切った時なら、出来ただろう。裏口に踏み込んだ時なら、出来ただろう。見張りに蹴りつけられている時なら出来たはずだ。



だが、彼の目の前にいるのは、もはや何の……何の武力も持たない、太った男。

己の欲望を満たすためなら、平民の命など、吹けば飛ぶ塵屑同然と思っていた悪の権化というヤツも、既に巨体を震わせるだけの、肉の塊。

(少し……調子に乗りすぎたか?)

自分が……アクセルが、である。

ナタンの心に、出来るだけ強い衝撃を与えようとしたのだが、それも度が過ぎたか。あまりに衝撃が強く、彼の中の殺意まで踏み潰してしまっただのではないか。

バルビエの姿は、あまりにも憐れなのだ。

もう、ここまで哀れな存在になり果てたのなら、殺すこともないかも……。

そんな事を考え、そして何もしままでいることを決めたのなら……その時は、自分がバルビエを殺す。

ナタンは……出来れば、殺したくない。そして、協力して欲しい。

どうなのだろう、ナタンは。未だ動かない。

……わかった……後、一押し。ほんの、一押しだけ。

それでも……無理なら……。

アクセルは人差し指を、そっと、バルビエに向けた。

彼の口から発せられたのは、ただ一言。

「報いを」

ナタンの視線が、アクセルへと向けられる。そして、バルビエにも。

スウ……と、小刻みに震えていた瞼が静止し……目線が定まる。

アクセルの駄目もとの一押しは、彼の心を押し出した。

隠していたナイフが、コートの内側から姿を現す。その握りを確かめるように、数回、指が動いた。ゆっくりと、踏みしめるようにしてバルビエに近づき……。

「ひっ、やっ、やめっ、やめろオオオ！」

バルビエは、絞り出したような絶叫を上げると、ナタンに背を向けて、這って逃げようとする。腰が抜けたのか、立ち上がることもなかった。逃げ場が無いことなど、バルビエも理解しているだろうに……。

絶叫に呼応するかのように、ナタンが飛びかかると、その背にナイフを突き刺した。その場に両膝を付くと、再びナイフを振り上げ、二度、三度、四度……一心不乱に、刃を突き立てる。

やがて、バルビエがピクリとも動かなくなり……そして、ナタンは続けられなくなったのか、ぜえぜえと荒い息を吐きながら、ナイフを落とす。石造りの床で、乾いた音を響かせた。

「…………お美事」

もっと気の利いた台詞を言えるようになりたいものだ。

アクセルは、椅子に縛り付けられている、初老の男に向かった。

酷い有様だ。太腿に突き刺さっているのは、小枝ほどの長さの針。殺し屋イチの、変態組長が持っただけの、とっぴなアレ。とりあえず、それ

らを全て引き抜く。

あとは、へし折られた指。腫れ上がった顔。

しかし……失敗だった。水の個性を持つ精霊、というか魔力は、全て祭壇に解放してしまっている。勿論、減った魔力は時間と共に回復するが、今の無属性魔力がほとんどの自分では、大したヒーリングも使えないのだ。

こんなこともあるのかと、密かに入手しておいた、治癒の秘薬。早速その出番が来たことを、喜ぶべきか恐れるべきか。

薬を飲ませようと、瓶の蓋を開けた時、ナタンが歩いてきた。振り向いたアクセルは、彼の雰囲気の違いを感じる。とはいえ、曖昧なもので、その詳細まではわからないが……。

そう……例えるなら……“兄貴の言葉が心で理解出来た”ペッシになっっている。

「……どうだった？ 初めて人を殺した感想は？」

「別に……。思ってたより、全然……大したことは、ねえ」

うん。やはり、ペッシだ。

流石に、まだ顔を青くしているが……それは、余韻のようなものだろう。

「手伝って。この人、そのソファに寝かせるから」

「……ああ」

素直に、手を貸してくれた。鍛えてるとはいえ、こつこつ単純な力仕事は、流石に未だきつい。

初老の彼は、見たところホテルの従業員。こんな年齢のボーイな

ど見たことがないので、支配人が、それに近い人物なのだろう。

薬は問題なく効果を発揮したが、目覚めるにはまだ、大分時間がかかりそうだ。近くのテーブルにあった水差しを持ち上げ、今更ながら右手の火傷に注いでいると、ソファの手すりに腰掛けたナタンが口を開く。

「……………これからどうすんだ？」

これから……………？

それを聞くということは、少なくともアクセルを、自身より上に見ている証拠か。

「そうだねえ」

アクセルはそつと、窓に近づき、雨戸を僅かに動かす。しかし既に眼下には、見張りの四人の姿はなかった。

(……………まさか)

スイートルームの、開放された扉。その、更に向こう。階段の方から、忙しない足音が聞こえてきた。

「とりあえず、残りの四人を片付けてからにしよう」

向かってきているのは、四人の傭兵。奴らがよほど怠け者でない限りは、無断で持ち場を離れたりはしない。つまり、その四人が、持ち場を離れる必要があると判断したこと。

見た限りでは無人だったが、もしかしたら未知の傭兵が、一部始終を見学していて、慌てて報せに行った、という可能性も、まあ……………数パーセントは、ある。

しかし、普通に考えれば、裏口の死体が見つかったか、意識を取り戻した娘が報せたか。

……そうだよ、死体だよ。すっかり忘れてた。

ナタンに、自分をいかに非常識な存在であると見せるか、それに気を取られすぎて、死体の始末を失念していた。近くにゴミ箱もあったんだから、隠し様もあっただろうに。いくら狭い路地とはいえ、誰も通らないと考えるのは、あまりにも楽観的過ぎる。

次からは、もっと慎重に行動すべきだ。今回の失敗は、自分を都合よく印象付けようとしての失敗という、何ともお粗末なもの。

ナタン、と声を掛けようとしたが、既に彼はナイフと……メイジが装備していた剣を、それぞれの手に握っている。テンションが上がっているだけか、それとも、傭兵を殺さなければ自分が死ぬと、冷静に判断したからか。

どちらにしろ、仇を討ち果たしても、まだナタンは、生きることが捨ててはいない。

良い結果だ……と、アクセルは内心満足しながら、階段に向かって走り出した。足音は、更に大きくなっていく。

ちょうど、階段の向こうに誰かの頭が見えた時、アクセルは跳躍した。

咄嗟に見えたのは、一列になって駆け上がってくる、四人の傭兵達。その先頭の男が、思わず立ち止まり、驚いたようにこちらを見ている。

その傭兵は、反射的に両腕で防御しようとするが、その間を擦り抜けるようにして、アクセルの両足が顔面に叩き付けられた。いくら子どもの身体とはいえ、30？近い物体が顔面に衝突したら、耐

えられるものではない。そのまま、後方の三人を巻き添えにする形で、五人は団子のように転がり落ちていった。

階下まで、何とか下敷きにならないように転がり落ちた後、アクセルはいち早く体勢を立て直すと、団子状態の傭兵達から距離を取る。近くにあった花瓶を持ち上げると、とりあえずこちらに一番近い頭に目がけて、ぶん投げた。

「……………おおおおおおっ！」

それが砕け散った時、階段の上から、雄叫びを上げつつナタンが落下してくる。傭兵達をクッションにしつつ、彼も素早く起き上がると、引っかかった鎧を外そうともがく彼等に、剣を振り下ろした。

斬る……………のではなく、叩き付ける。傭兵達を、まるで一個の物体としか見ず、ほとんど半狂乱となって剣で殴りつけた。忽ちにしてそこら中が血の海となり、もはやどれが生きていて、どれが死んでいるのかもわからない。

「……………さて。もういいだろう」

全体的に見て動かなくなった団子に、未だ剣を振り下ろし続けているナタンを、そつと落ち着かせる。彼は剣を握ったまま、隣の壁に背を預け、先ほどと同じく、荒い呼吸を繰り返した。今回は、精神的なショックはほとんど無いらしい。

ドロップキックと花瓶投げしかしていなかったアクセルは、ナタンからナイフを取り上げると、四つの首をそれぞれ順番に突き刺し、止めを刺す。

あっさりと片づいてくれたが、まだ終わりではない。

「さて……その、キミ」

バレていないでも思っていたのか。植木の陰の少女は、ビクリと身体を震わせたが、やがて……バツと飛び出し、背筋を伸ばした。

「フフフ……まさか、見破られていたとはね」

(これはひょっとして……ギャグでやってるのか?)

ナタンを見ているが、彼も困惑しているらしい。命のやり取りで血を燃やした後に、冷や水を浴びせられたような……そんな表情だった。

少女は腰に手を当て、引きつった笑みを浮かべている。彼女の中では、余裕たっぷりな笑みのつもりなのか？

「なかなかやるじゃないか、君達」

「……一つ聞いていいかな？」

「フフフ、何かな？」

「何で、目、つぶってんの？」

そう。

ふんぞり返る少女は、しっかりと目を閉じていた。

「……実は、私はすごい系目なのだよ。これでもちゃんと見えている」

「ふうん。じゃあ、これ何本？」

「なんぼん？ ……フフフ、簡単だ。三本だろ？」

……。

ひよつとして、“なんぼん”と聞いたから、“いっぽん”や“にほん”でもなく、“さんぼん”だと思ったのか？

彼女の脳みそは、実にどうでもいい所で、どうでもいい方向に働いているらしい。

「残念。六本でした」

まあ、勿論、指を上げてみせたりもしていないのだが。

「……フ……フフフ……騙したな？」

「ああ、何て言うか……何て言えばいいんだ、すごい面倒。さつさと目を開けてくれないか？」

「フフフ、何故私が、君の言葉に従う必要が？」

「……。ところで、傭兵さん達が生き返って、すごい目でキミを睨んでるんだけど」

「えっ!？」

少女はようやく目を開け、そして……血塗れの肉団子と化した、四人の先輩達を目にして……軽く蹠踉めくと、壁に手をついた。

「貧血？ 大丈夫？」

「……フフフ、貧血だと？ 何を馬鹿なことを……。血で血を洗う、数多の戦場を潜り抜けてきたこの私が、死体を見たくらいで貧血？ 何を馬鹿な……」

(うおおおおおおっ、もうっ、イライラするうううう!!)

年齢は、アクセルより少し上ぐらいか。



まあ、美少女だとは思う。にっこり微笑んでくれれば、可愛げもあるだろうが、今はとにかくムカついて仕方がない。

「そうか……。安心したよ。ベテランの傭兵さんなんだね？」

「フフフ、ベテラン？ 違うな、少年よ。そんじょそこらのベテラン如きと一緒にされるなど、そんな不愉快極まりないことは……」

両足は震えてるし。

さつきより一層強く目を瞑ってるし。

顔は真っ青になってるし。

冷や汗らしきものはダラダラと流れてるし。

「……。それじゃ、そろそろ死んでくれないか？」

「え？」

「傭兵は、あとはキミ一人だけなんだろう？」

ナイフを振って、血を払うと、アクセルは突進した。少女はそつと、恐る恐る片目を開ける。

狙いは、喉もと。表情を固まらせる少女に構わず、最後に一歩踏み込むと、ナイフの切っ先を顎の下へと滑り込ませる。

勿論、突き刺しなどせず、ギリギリで停止したが。

「……………」

表情を作ることすら出来なくなった少女は、ぺたんと、その場に女の子座りで崩れ落ちる。

「ひ……………」

その顔が、くしゃくしゃに歪んだ。

「ふえ……え……ふえええええんっ」

少女は両手で顔を押しさえ、決壊したかの如く泣き出した。

(何というか……あれだな。アニエスにヘタレを足して、そこから更にアニエスを引いたような……そんなキャラか)

再び、少女が座り込む床に、なま暖かい液体が広がっていく。

(……つうかよく見れば、そのズボン、俺のじゃねえか。まあ、別に惜しくはないけど……)

路地裏で気絶する前、あんなに出してたのに……ぐっしりと濡れた自分のズボンを見ていると、アクセルは溜息をつきたくなった。

「さて、ナタン。これからのことだけど」

「えっ!? ちょっと……“それ”放置なのか?」

「いい加減、疲れた。それでこれからだけど、無かったことにしようと思ってる」

「……どういうことだ?」

「ここでは、誰も死ななかった。貸し切っていたバルビエは、もうしばらくこの街に逗留することになるし、雇っていた傭兵たちは雇用を打ち切られ、どこかへ行ってしまった。そういう結末だよ」

協力……してくれるよね?

微笑みながら、アクセルがそう尋ねてみると……ナタンは、何故か震えながら、一度大きく頷いた。

七日後。ゼルナの街の執政庁を、二人の男が訪れた。

「主・バルビエの代理で参りました。ナタン、と申します。よろしく」

「お初にお目にかかります。ホテル『初月の館』の、ローランと申します」

身なりのいい平民。そして、アポ無しの平民がその日に対応されたということは、それなりの財力と、権力を持っているということ。

応接室にいるのは、来訪者であるナタンとローラン、そして、リースと名乗る若い女性、更に、未だ椅子の背もたれを向けたままの、領主代理。

派手ではなく、堅実な金のかけ方をされた服装に身を包んだナタンは、精悍な美青年といったところ。

ローランも、初老ではあるが、未だ未だ体力の衰えを感じさせない佇まいで、礼儀正しい老紳士。

未だ男というものを知らないリースは、若干頬を染めて戸惑っている。

「それで、ご用件は？」

「この街の東地区の、再開発の提案です」

ナタンが取り出した書類の束は、その表紙に、『ゼルナの街の東

地区における再開発計画書』と記されている。

東地区というのは、この街の最下層、澱みのような場所だ。城壁と無許可の建築物によって、満足に陽の光が差し込まず、職を失った人々や、障害を持つ者たちが追いやられている。更には、各地からの浮浪者たちが集まり、勝手に住居を造ってしまったっており、それが城外にまではみ出している。あたりには悪臭がたちこめ、そんな地区の門番など誰もやりたがらず、門番までもが最下層の兵士。可もなく不可も無いこの街の、不可の部分を、丸ごと押し込めたような、掃き溜めの如き地区。

そこが生まれ変わるのなら、魅力的な提案だ。

しかし……。

「これは……どういうことですかっ!!」

リーズは激昂した。それは、計画書の出来がどうのではなく、ただ、女としての部分の拒絶反応。

その計画の中心となるのは、娼館……つまり、風俗店だった。東地区を一大繁華街に作り変え、そこを特別行政区とする。

この街の娼婦は、夜の街に立つ者がほとんど。草むらや裏路地に入れば事の真つ最中だった、というのも珍しくない。組織が結成され、縄張りを管理し、彼女たちは上納金を納める代わりに、その地区で客を確保することが許される。

当然、その日暮らしの生活であり、老後のことなど一切考慮されてはいないし、彼女たち自身もしていない。

「ローラン殿！ あなたもあなたです！ 由緒正しきホテルの主でありながら、何故このようなは……破廉恥な考えに協力を……！」

顔を真っ赤にするリーズは、計画書を領主代理の机に叩き付ける。

タンツ

やがて聞こえてきた物音に、リーズはハッと振り返った。

椅子の背を向けていた少年が、くるりと振り返り、机に向き直り、書類の上に判を押印したのだ。

「……若様あああ！？」

「え？ な、何？ 駄目だった？」

若草色の髪の毛、貴族の少年は、驚いたようにリーズを見る。

「そつ、それつ、最終許可の判じゃないですかああ！ 何でつ、それ押しちゃうんですか！？ そういうのは、こちらでよく吟味した上で……っていかそもそもつ、そんな計画、認められません！」

「えー。でも、困ってる人、助けなくちゃ。この人たちの話を聞いてると、結構いい考えかなー、つて」

「しつ、しかしつ、こんなつ、破廉恥なつ……」

「破廉恥……何が？」

「なつ、何が！？ 何がって、その……」

「そう言えば、シヨーフさんとかショーカンとか……どういう意味？」

「いやっ、あのですね……その、あの……」

怒りではなく、困惑で顔を真っ赤にしたリーズは、ブツブツと俯く。

少年が、ちらりと来訪者の方を向くと……驚愕して目を見開くナタンと、叫ぼうとした彼の口を押さえるローラン。少し驚いた顔を

していたローランは、すぐに表情を戻すと、少年の合図に従い、軽く挨拶して退室した。

質問攻めから解放されたはいいが、肩を落とし悄然と去っていくリーズを見送ると、アクセルは平民の変装をして執政庁から抜け出し、彼等との待ち合わせ場所へと向かった。

場所は、酒場『風と雨の舞踏亭』。その片隅のテーブル。

「……これからは、様付けで呼びゃいいのか？ “ラヴィス様”」  
「女性を困らせるのは、あまり感心出来ませんな」

皮肉混じりのナタンに、呆れた様子のローラン。二人のテーブルに腰掛けると、アクセルは軽い食事を注文した。  
まだ昼間だというのに、酒場は騒々しい。

「騙してたのは悪かったけどさ。文句は言わないでね？」  
「ふふ、わかりました。恩人のお言葉なら、従いましょう」  
「おいっ、爺さん！ それでいいのか!？」

あの時、バルビエに拷問されていた老人は、ホテルのオーナー、ローランだった。

何のことはない、彼が個人的に所有していた骨董品を、バルビエが欲しがったという……ナタンと同じような理由。  
ホテルマンなら、信頼できる人種じゃないのか。そう思ったアクセルは、彼も仲間に引き込んだ。

あっさり和不問にしたローランに不満をぶつけるナタンだが、特に損はしなかったという諭すような言葉に、不承不承ながら黙った。

「……僕はね。お飾りの代官でいるつもりはないよ」

アクセルは話し出す。

「お飾りと思われるのはいい。でも、本当の飾り物になるつもりはない。いずれ、ラヴィス子爵領は僕のものとなる。今から、この領土を磨いていきたいんだ」

「その為の、再開発計画か？」

ナタンの言葉に、軽く頷いた。

再開発の発案者は、十歳にも満たない少年。

「人間の最も大きな欲求は、三つ。食べること、寝ること、そして性的なもの。この性欲を利用して、東地区を発展させていく。何しろ、あそこの土地はやたら安い。やがて、旅人たちの間でここが有名になっていき、この街に多くの金を落とすことになる。雇用問題も、改善されるだろう」

「ふむ……」

「そう言えば、ここからはまだ話してなかったね？ 勿論、娼館を中心にするとはいえ、客は男だけではない。賭場や、様々な娯楽施設も作る。たくさん雇い口が出来ることになるだろうけど、大きな問題は……」

「治安の悪化」

「そう、その通り。流石ローラン。金が動くってことは、それを手に入れようとするヤツが出てくる。この一週間、娼婦の元締めたちと交渉してきたけど、あいつらみたいなのが、どんどん街に入ってくることになる」

「いや、あれ交渉か？」

この一週間の、日常生活のような暴力沙汰を思い返したのか、ナ

タンが顔を引きつらせる。特に反論する材料も気持ちもないので、アクセルは黙殺した。

「領主の兵士たちでは、間に合わない。いや、逆に取り込まれる兵士も出てくる。人の出入りの監視を強化する方法もあるけど、それは発展の足枷になりかねない。そこで、この街の裏の顔役を、ナタンにする」

要するに、この街に根を張る、強固なヤクザ組織を結成、それをナタンに纏めさせる。

「非合法の、治安維持組織。ファミリーの結成さ。この街に落ちるのは、金だけではない。娼婦相手の会話、賭場での会話……膨大な情報もたらされる。それらを収集し、整理。情報と、暴力、金。東地区の全てを支配するのは、実質ナタンであり、僕でもある。……わかりやすく、僕の目的を言うと……この街の表と裏、全てを握ることだ」

現代社会で言えば、市長がヤクザの親分を兼任するということ。

「僕は、あまり目立つつもりはない。せいぜい、可もなく不可も無し、何の変哲もない置物領主。そう思われてる方が気楽だし」

「……恐ろしいガキだな。お前は」

「しかし、楽しくもありますなあ。一介のホテルのオーナーで終わると思っていました、人生の終盤で、こんな面白いことに関われるとは」

顔を強張らせるナタンに、初老の顔に似合わぬ笑みを浮かべる口ーラン。



「そう、これは陰謀さ。この先、この街を支配するのは、ここに  
いる三人。“表”の“官”である僕に、“表”の“民”であるロー  
ラン、そして“裏”を管理するナタン。昔……遙か遠くの場所で、  
義兄弟の契りを交わした三人の男達がいた。それは桃の園だったし、  
契りの盃ももつと上等だったらしいけど……。ここが、僕らの桃園、  
ということになるかな」

アクセルは、水の入ったコップを持ち上げた。

「乾杯しよう。まずは、東地区の発展の成功を願って。そして…  
…僕ら三人の、明るい未来に」

「そう言えば、あの失禁してた小娘は？」

「いや、小娘って。お前より年上だろうに。……あいつなら、ロ  
ーランのホテルで寝てるぜ。どこにも行く当てがないらしいし。一  
応、宿泊料金はツケってことにしてるけど」

「ふうん……。まあ、戦力にはならなくても、人手が足りてない  
のは現実問題だし。あの小娘も、行く当てがないなら、それなりに  
役には立ってくれるかな？」

「小娘小娘ってなあ……」

「だって、名前知らないし。あれから一週間、特に気にも留めて  
なかったし」

「アニメスだとよ」

「……………え？」

「名前聞いたら、アニメスって言うてた」

嘘だろ承太郎

## 第四話<邂逅2>

東地区に建築中の建物も、完成まであと僅か。半分は娼館のためだが、あとの半分は、ヤクザ事務所としての役割を持つ。

“清掃活動員募集。食事出ます”

バルビエの金をふんだんに使用し、行ったのは、清掃活動。生ゴミですら上等なご馳走である東地区に、ゴミと呼べるものなど皆無だったが、綺麗にするという概念自体失われているらしく、排泄物などが放置されていた。

完成間近の娼館の周辺から、清掃を推し進める。指示を出しながら、自らも積極的に関与する。ナタンの弟分ということで、彼の指示に従いつつ、アクセルは人糞をシャベルですくう。ローランに昼食に招待されたということになっている領主代理が、排泄物の中で清掃活動に励んでいるなど、リーズが知れば卒倒どころの騒ぎではない。

活動開始初日、ボロ服を着てマスクをしたアクセルに、ナタンは驚いていたが、人手が足りないのだから当たり前だろうと、少年は事も無げに告げた。

確かに、貴族がこんな平民以下の仕事をするなど、ハルケギニアの月が一つになるようなものだ。

「兄貴い。こっち、終わったぜえ！」

「よしっ、ベル！ 今度はこっち手伝ってくれ！」

ナタン、その弟分の少年ベル。二人が率先して行う清掃活動は、日毎に規模を拡大していった。

勿論、文字なんて読めない人間がほとんど。敢えて、宣伝も勧誘もしなかった。初日は、誰も加わったりせず、ナタンとアクセルに奇異の視線を向けるだけの者ばかり。

次の日には、文字を読める者とそれに誘われた五人が来た。

その次の日には、倍に増えて十人。

更に次の日が来れば、一気に四十人にまで増えていた。

食事だけでなく、僅かではあるが金まで貰える。そもそも、出来るような仕事すらなかったのだ。

人数が増えるにつれ、チームに分けられ、部隊として展開していく。

名簿も作った。食事や金を渡す際、名前と性別、年齢を確認する。チーム編成のために使ったが、人別帳のための情報収集でもあった。

「おいっ、ベル君！」

マスクの下から、少女の声が放たれる。

「何故私がつ、このような事をしなければならな……うわっ、嘘ですごめんなさいっ、せっせとやりますから許して下さい！」

アクセルが、排泄物山盛りのスコップを振りかぶる仕草を見せ、アニメスを黙らせる。

そう、アニメス。涙目になりながらも、せっせと動く彼女の名前。

(これが……あれになるのか……)

一体、この小便垂らしのヘタレ娘に何を混ぜれば、あんなオメガモンにジヨグレス進化するというのか。

行く当てがないということ、結局そのまま居着いた。

確か……例の虐殺事件から、既に十年近くは経過している筈。

こんな多彩な表情を見せてくれているのなら、少なくとも外見を取り繕える程度には、立ち直れているらしい。村一つ滅ぼすような虐殺の中、生き残った少女……そんな悲壮さは、未来を知らない者には察することも出来ないだろう。

(しかし……初めて知り合う原作キャラが、まさかアニメスで、しかもこんな形だとはな)

彼女なら、ある程度信用しても問題ない。自分と関わったことで、性格が捻れに捩れてしまう可能性もあるが、基本的には善人だ。

内面まである程度知っているからこそ、原作キャラとの……特に、善人に分類出来るキャラとの邂逅は、密かに楽しみだった。まあ、正直に言えば、すごくがっかりしたが。

「言つとくけど、ホテルの宿泊料金に食事代、その他諸々。しっかり記録してあるからね？　そして未だ、その十分の一も稼げてないからね？」

「……フフフ、ベル君。提案があるんだ。私の身体で払う、というのはどうかね？」

「ふーん。具体的には？」

「フフフ、その、な。なな、何と！　わわ、私の下着を……見せてやってもいい。フフフ、その価値たるや、それはもう……」

「うん、すごく言いにくいんだけど、言わせて。無駄口叩くな」  
「フッフ、おやおや坊や、照れてるのかい？」

「……………じゃあ、見せてもらおうかな？ 濡れてない下着を」

「……………ふえ……………ゆ……………言うなああああ！」

「泣くなよ、面倒くさい」

さてと……………。

東地区の清掃は、まだまだ序盤。しかし、東門から娼館を結ぶ大通りなど、ある程度の土地の浄化は目途が立った。

「むほほほほ」

ホテル『初月の館』の一室にて、ナタンとローランが今後について相談し、アニエスがぐったりソファに寝そべっている時。そんな、妙な笑い声が聞こえてきた。直後、ノブが回る。

従業員たちには、大事な話だと伝えておいた。ノックもなしに開けるなど、考えられない。

三人が見つめる中、ドアが開き、姿を現したのは……………肥満体の男。

いや、知っている。三人は、この男によく見覚えがある。

「……………バツ……………！？」

バルビエ。仇であり、雇い主であり、加害者であった商人。

「むほほほ、おバカさんですねえ。私ですよ」

カチカチと、乾いた音をさせつつ、バルビエは自分の顔をはぎ取った。手には、なめし革のようなバルビエの顔が、ぶらんと垂れている。

「…………ベル!?」

肥満体の身体から、アクセルの顔が生えていた。その身体も、すくなく崩れ落ちる。

「…………な…………何なんだよ、それ…………」

「ああ、作った。この為に、バルビエを生きてることにしてるんだ。もう少し、バルビエに表で動いて貰おうと思ってさ」

バルビエの小柄な体軀を見た時、思いついたことだった。

アクセルは確かに、今やっているように、貴族とは別のベルという少年として動ける。

しかし、所詮は少年。子どもでは出来ることが限られてくるし、何より子どもらしくないことをすれば目立ってしまう。

肥満体ではあるが、背が低いバルビエなら、天狗のそのような高靴さえあれば、自分は商人バルビエという顔を手に入れられるのではないか。

「……………つうかこれ、よく出来てるなあ。本物そっくり……………。……………。なあ、ベル。一つ聞いていいか? この変装セット、材料は?」

「えーっと、三人ほど」

「まさか人数で答えられるとは!」

なめし革にしようかと、自分でなめし方を調べて試してみたのだが、皮膚が思ったより伸びなかったのだ。

まあ、何のことはない。最初から、固定化の魔法を使えばよかった、という結論に落ち着いた。

「結構、大変だったんだよ？ サイズは問題なかったんだけど、皮の裏まで脂肪がビツシリでさあ、それをナイフで削って行ったんだけど」

「ぎゃああつ、聞きたくない！ 聞きたくないぞおお！」

耳を両手で塞ぎ、ぶんぶんと首を振るナタンに、既にぐつたりとソファに倒れ伏しているアニエス。そんな二人とは対照的に、暫く人皮のマスクを見ていたローランは、落ち着いた声で尋ねた。

「それで。これを使って、どうなさるおつもりで？」

「ああ、奴隷を買いに行くんだ」

「ほう？ 奴隷ですか」

「そう。出来れば、ナタンのファミリーの役に立つような奴隷」

男と女、欲しいのは両方だった。

男は、なるべく頑丈な人間がいい。ファミリーの構成員として、武力がある人間は必要。更に言えば、自分の技の実験台にしても問題ないくらいの、屈強な男。

女は、なるべく美人。娼館で働かせるつもりだ。ある程度頭が良かったら、尚のこと良い。

「確かに、人間は東地区に山ほどいる。でも、ファミリーの役に立ってくれるほど有能な人間となると、なかなか難しい。そこで、なるべく裏切る可能性の少ない奴隷を、何人か確保しておきたい」



「なるほど、確かに。しかし、場所に当てが？」

「ちょうどいい具合に、隣の子爵領の街で。あまり長く留守にも出来ないし、三日つてところか。行くのは、バルビエに化けた僕と、ナタン」

「え……俺も？」

「当たり前だよ。君の部下になる人間だよ？ 自分の目で確かめなよ」

「……うー……わかったよ」

奴隷とはいえ、下に立つ平民として、そんな場所に行きたくはない……というのが、ナタンの本音だろう。

しかし、それでは駄目だ。これから裏社会の人間となるナタンには、裏の世界を見せておかなくてはならない。そうしなければ、折角彼を選んだ意味が無い。

ローランは、社会的地位があるので除外。

「ふむ、わかったよ。私も同行しよう」

「駄目。アニエスには、清掃活動を続けてもらおう」

「いやっ、しかしっ、護衛は必要だろう？」

「普通護衛っていうのは、自分より強い人を選ぶものだろうに」

もしかしたら……。そう思い、アニエスと手合わせしてみたのだが、あっさり勝てた。

それを自分が強くなったから、などと解釈するのは、あまりにも調子に乗りすぎている。今までは子どもの見た目を利用し、相手から平常心を奪い、一気に畳みかける、そういう戦いばかり。用意始めの合図があるのだから、しかも、相手は将来のメイジ殺しなのだから、どうなるかわからない。

そう思っていた時期が、俺にもありました。

男とはいえ、年下の拳骨に負けるなんて……いや、普通の女の子

なら、そういうものかも知れないが。

ひょっとして、同名の別人ではないか。

今では、そんな気もしている

「じゃあ、ローラン。リーズには、ローランに招待された演劇を見に行ってくる、ということにしておくから」

「畏まりました。お気を付けて」

ローランは、そつと頭を下げた。

ラヴィス子爵領の隣、レオニー子爵領。その中心地、クルコスの街。

バルビエの遺品の中には、そこで密かに開催される奴隷市の情報もあった。勿論、奴隷などこの世界では珍しくない存在であるが、この奴隷市は少々違う。ただの労働力ではなく、奴隷の中でも特色のある……もっと言えば、ただの奴隷市で扱うには勿体ない、そんな人材が集められている。

アクセルも、ただの労働力には興味がない。この中でガチムチ、ボンキュッボン、インテリがいれば、全て自分のところに来て欲しい。

「むほほほほ」

聞くところによると、これがバルビエの笑い方らしい。キャラとしては結構面白いので、そして勿論怪しまれたくはないので、アクセルもその笑い方を真似た。

問題は声だったが、元から甲高い声だったので、少し努力すれば出来た。審査をさせられたアニスは、震えっぱなしだったが。しかし、それでも辛い。フェイスエンジの劣化版で、ヴォイスチェンジなんてのも考えたが、まだまだ未完成。なるべく、口数を減らすようにしなければ。

念力を併用すれば、簡単な動作くらいなら問題ない。

「むほほ、胸を張りなさいな、ナタンさん」

「……いや、けど、こんな場所は初めてで」

「むほほ、さあ行きますよ。ザーボンさん、ドドリアさん」

「誰だよ」

入場料を支払い、薄暗い地下へと下りていく。アクセルもナタンも、仮面を貸与され、それを着用していた。

市場は、円形の間取りだった。半円を描くように座席が設けられ、それぞれ個室のように壁で区切られ、客同士は見えないようになっている。中心のステージのような場所に奴隷が引き出され、オークションのように値を付けていく。

客席は、十個前後といったところか。ここの地上部分では同じく奴隷市が開かれており、買い手がひしめいているが、上の熱気に比べれば、このVIP用のそれは、至って粛々としている。

区切られているので、客同士の会話もない。時折、同室の者同士

の微かな囁き合いが聞こえてくる程度。

「……すげえな、こじ」

薄暗さにも目が慣れてきたのか、ナタンが周囲を見回している。

「むほほ……ナタンさん、あまり騒がないように」

やがて、ステージの奥から道化師の衣装をした進行役が現れた。

出品される奴隷は様々だが、だいたいの流れは決まっている。主催者側が特別だと判断した奴隷たちに、更に等級を付ける。そして最低落札価格を決定し、その低い者から順番に出品される。

老若男女、バラバラだった。やがて、客側のテンションが高まる時間に、最高の奴隷を出品。あとは、そのテンションを下げるように、今度は高い奴隷から低い奴隷へと下っていき、全て終了。

提示金額は進行役が告げる方式。客同士が顔も会わず、声も出さないのだから、今、誰と競っているのかも分からない。それによって、値段の上昇が加速する。

「それでは、開始致します。1号。男、23歳」

見れば、なかなか屈強そうな男だが……まだ、様子見だ。

サービスのワインを味わっていると、隣のナタンがそっと囁いてくる。

「おい、いいのか？ 他のヤツに買われたぞ」

「むほほ、まだまだ。初めての競売なんですから、何も今回に全てを掛ける必要はありませんよ。最上級の品が出るまでは、一応、

見にしておくつもりですから」

「……最上級ねえ。一体、どんなのだ？」

「さて。噂では、メイジや没落貴族が出されることもあるそうですが」

競りは、着々と進行していく。最低落札価格も、最高落札価格も上昇していく。

(……うーん……)

先ほど、ナタンにああは言ったが……アクセルは、迷っていた。それほど多く連れて帰るつもりはない。多くても、四人程度。その四人の枠の中に入りたいと思える人材が、全く出てこないのだ。いや、こんなものかも知れない。適当に選んでしまうのが正解かも知れない。

ステージに連れて来られた後、奴隷の服ははぎ取られるのだが……美女ならともかく、屈強そうな男の股間でぶらんぶらんしているゴールデンバットなど、好んで見たいと思うものでもない。

素っ裸にされる美女たちに、ナタンは落ち着かない様子だったが、自分より十も年下のアクセルが平然としているので、それを必死に押し隠そうとしている。

娼館の主人は、誰か別の人材に任せた方がいいのかも知れない……アクセルがそう思っていると、たった今落札された奴隷と入れ違いに、進行役が中央へと進み出た。

「次の品に移る前に、申し訳ありませんが……改めて、確認させて頂きます」

いよいよ、例の“最上級の品”というヤツだろうか。

「この競売は、あくまで秘密厳守。皆様方のためにも、我々のためにも、どうか口外はお控え頂きたいのです」

決まり切ったことだ。しかし、何故今、改めてそのことを？

「次の品は、ここでは初めての……恐らくは、今後出品されることもない、真正正銘、史上唯一の逸品に御座います。……よって、この品を落札されたお客様は、本日のところはお引き取り願います」

連れて来られたのは、布を被った、小柄な何か。

「本来なら、決して世に出すべきではない品。しかし、本日ここにお集まりの皆様は、常人が計り知れぬほどの“力”をお持ちの方々。よって……我々も、覚悟を決めることに致しました」

布が取り払われ……姿を現したのは、一糸纏わぬ少女。自分の身体を抱き、身を縮め、不安げな目で薄暗い周囲を見回している。

輝くような金髪に、幼子のきめ細かな柔肌。世が世なら、手を出せば間違はなく逮捕される年齢だろうが、少なくともこの世界、そしてこんな場所では、客達にとって珍しいことでもないだろう。

驚きの声が上がった。その理由は、金色の頭髪を割るようにして伸びている、尖った耳。

「そう……我々の大いなる敵。恐るべき先住魔法を操り、並のメイジでは束になっても返り討ちにされてしまう……エルフでございます。ですが、ご安心を。この者が納品された時、既に声は潰されておりました。よって、魔法を使うことは出来ず、このエルフも、最早ただの平民の娘と何の変わりもありません」

(なるほど、エルフか……)

確かに、特別な逸品に相応しい。匿ったと知らただけで死刑なのだから、普通の人間では、例え魔法を封じられていても、その存在そのものの危険性故に、絶対に手を出すことは出来ないだろう。

「お……おいつ、ヤベエよ！」

ナタンが耳打ちしてきた。

「むほ、どうされました？」

「お……お前まさかつ、あれを買ったつもりか!？」

「そのつもりですが」

「馬鹿っ、お前っ、何考えてんだ……! お前はどうか知らんが、俺はまだ死にたくねえんだよ……!」

「むほほ、私とて死にたくはないですよ。しかし、ピッタリではないですか。我々には」

精霊との契約が出来るエルフならば、もしかしたら、自分の能力の発展に一役買ってくれるかも知れない。何かヒントをくれるかも知れない。

もしバレたとしても、買ったのはバルビエで、アクセルではないのだ。

出来ることなら、是非とも手に入りたい。

皆が静まった時を見計らって、再び、進行役が告げた。

「それでは。早速、最低落札価格を……」

そこまで言った時、通路の奥から怒号が響いてくる。何かを追うような足音、そして声。

ステージの目隠し布の下から、何かが這い出し、エルフの少女に向かつて駆け出した。それを追うようにして男達が現れたが、進行役はそつと彼等を手で制した。

「ふむ、またお嬢さんですか」

エルフの元に駆け寄った少女は、自分が纏っていたぼろ布を脱ぐと、代わりにそのエルフの身体に被せ、そしてぎゅっと抱きしめると、進行役を睨み付けた。自分の裸体が晒されることなど気に留めた様子もなく、威嚇するように鋭い目をしている。

「しかし……お嬢さん。もはや、あなたに出来ることなど、何もありませんよ」

予定外の事態だったが、進行役は冷静だった。駆け出した少女も、例え自分が暴れた所でどうにもならないことは理解していたらしく、エルフの少女を守るように抱きしめるだけ。

ぱぶしっ

バルビエの口や鼻から、ワインが飛び出す。エルフが出てても驚かなかったくせに、と、ナタンは不思議そうに首を傾げた。

「……………」



進行役は暫く黙っていたが、やがて客席に向き直った。

「さて、皆様。お騒がせして、申し訳ありません。ただ今乱入してきたこの少女、さるやんごとなき貴族の娘で、勿論のことメイジ。この娘も同様に、とある特殊な方法で声を潰しておりますので、例え杖を持ったとしても、最早魔法を使うことはありません」

エルフとメイジ。平民にとっては、何よりも恐るべき者。

「勿論、二人とも処女であることは、保証致します。魔法を使えぬエルフに、魔法を使えぬメイジ。恐るべき者と、その恐るべき者を妹のように大事にしている者。突然で申し訳ありませんが、この二人は、併せて一つの品とさせて頂きます。……最低落札価格は、二人の合計、320エキュー。では、どうぞ」

そう……少女とはいえ、恐るべき者たち。だからこそ、その恐るべき力を持たなくなった少女達は、平民にも自由に出来る少女達。

普通なら、例え魔法を使えないからといっても、恐れを成して逃げ出すだろう。

しかし、ここにいる者達は違う。平民とはいえ、下級の貴族よりも大きな財力を有している。そもそもこの場にいることが、選ばれた者であることの証。

少女達はさながら、翼をもぎ取られた天使の如く……。

次々と、競りに参加することを示す札が、合図を受けた進行役の手で掲げられていった。触れられないのは、アクセルとナタンがいる個室、7番だけ。

「590……620、625……」

進行役が次々と最高値を告げる中、7番の個室にいる、バルビエことアクセルは……頭を抱えていた。どうやら参加を諦めてくれたようだ、ナタンはほっとした顔をしている。

(……何でだ?)

金髪の、エルフの少女。その少女を守る、緑髪の年上の少女。

(……ティファニア……それに……マチルダ……)

間違いかも知れない……などという希望は、最早持てない。

モード大公の私生児であるティファニアと、サウスゴータ大守の遺児であるマチルダ。ティファニアは、エルフと子を成したモード大公が殺された後、サウスゴータ大守に母親のエルフと匿われていたが、発見されて母親も殺され、サウスゴータ大守は取り潰し、遺児のマチルダと共に、ウエストウッド村に隠れていた筈だ。

アルビオンの小さな村にいる筈のティファニアが、何故、トリステインの奴隷市で競売品となっているのか……。

(……俺のせい、ではないよな?)

今まで、原作を大きく変化させるようなことは、して来なかった……と思う。そもそも今までだって、所詮は片田舎の子爵領での出来事。

アニエスにしても、傭兵として修行していた時代があったかも知れないし、ティファニアとマチルダだって、奴隷として売られた後、上手く逃げ出したという過去があったかも知れない。声を潰されて

いたとしても、それが治るイベントが起こったのかも知れない。

(どうする?)

自分はここに、ナタンのファミリーの構成員をスカウトしに来た。アクセルが落札した後、逃げ出すのだとすれば、それはそれでいいだろう。結果的に無駄金を使うことになるが、そんなもの、原作が大きく改編されるという損害に比べれば、微々たるものの筈だ。

それに……。

(……放つとけねえや、やっぱりさ)

二人の人柄、そして過去を知っているからこそ……助け出したかった。

スウ、と、バルビエの手が上がる。一瞬呆然とした後、ナタンがその手を押さえつけようとしますが、肘を当てて黙らせた。

「! 750……」

他の客達は、さぞ驚いたことだろう。

競売が始まってから今まで、一度も上がらなかった7番の札。それが、今になって突然上がったのだから。

基本的に、札は全室分用意されている。例えば空室であろうと、客が退出した後であろうと。

7番は空室なのだと、誰もが思っていた。

「810、820、845……」

そこで、二つ、札が下りた。

「9000……9500……」

既に、下級貴族が二年は生活出来る額。また、札が一つ下がる。

「1000」

千の大台に乗った時、次々と札が下りた。残るは、2番、3番、7番の札。

(正直、キリが無いな)

そう思いながら、バルビエの指を念力で操作する。

「2000」

一気に、二倍。7番の札が頂点に立つ。

やがて……3番の札が下りた。少しの沈黙の後、進行役は2番の札を上げる。

「2010」

(しつこいっ)

ついに、最終手段。アクセルは懐の包みを取り出した。

7番の部屋から、ステージ上に投げ入れられたそれは、がしゃんと音を立てる。僅かに開いた口からは、大粒の宝石が零れていた。客席からでも、十分に見えただろう。その輝きが、未練がましく

残っていた最後の2番、それに、借金してでも手に入れようかと考えていた客達を黙らせる。

「他には……ありませんね？ それでは、24号と25号の二つ。7番のお客様が、2010エキュー、それプラス現物にて、落札されました。……ありがとうございます」

「むほほ、なかなか有意義な買い物でしたねえ」

肥満体を揺るようにして笑うバルビエ、の中のアクセル。僅か半日の間に、島流しにでもされたかのようにげっそりとしてしまったナタン。

「エルフが……エルフが……」

「まあまあ、落ち着きなさい。エルフと言っても、ハーフェルフ……つまり、半分は人間なのではないでしょうか？」

「そうだとしたら、エルフはエルフで……」

やはり、エルフというのは恐怖の対象でしかない。何とかナタンを宥めようとすると、彼は頭を抱えるだけだった。

「つうか、バレたらきつと、俺まで縛り首に……」

「大丈夫ですよ、オークションの主催者だってプロなのですから。ハーフェルフを出すなどという剛毅なことが出来る以上、彼等も相当地根を張っていますねえ。ナタンさん、いずれは貴方のファミリーも、あれくらいの力をつけて頂きますよ」

「そうなる前に、死ななきゃいいけどな」

果たして、あの二人が本当にティファニアとマチルダなのか……。アクセルは未だに、それを疑っていたりする。

声を潰されているから、返事は出来ないだろうが、貴族の娘なら文字は書けるだろう。

それに、髪の色や二人の関係を考慮すれば、まず間違いない筈。

流石にアルビオンも、国王の弟がエルフとの間に子どもを作っていた、などということをも、他国に知らせることはないだろう。逃亡した二人が、極秘裏に手配されていたとしても、あくまでアルビオン国内のみ。

よって、浮遊するアルビオンではなくトリスティンにいるのは……と言うより、地上に逃げ出したのは、正しい判断だ。相当な厳戒態勢だっただろうに、どうやってフネに乗ったのか。

しかし、原作のティファニアは、何故わざわざアルビオンに残っていたのか。彼女自身が復権を狙っていた様子は無かったし、ただ単に脱出出来なかっただけか？

まあ、その理由を知る機会も、もしかしたら永久に失われてしまったのかも知れないが。

新聞の記事で、モード大公とサウスゴータ大守が死んだことは知っていた。連想する形で、ティファニアとマチルダのことも思い出したのだが、特にアルビオンに行く機会も無かったし、何が出来るというわけでもないの、その時は記憶に留めるだけにしておいた。

しかし……これがもし、原作の流れの一部だというのなら。

ティファニアは、やがてアルビオンに戻ることになるだろう。どんな理由からか、そんなのは見当も付かないが。

マチルダは、そんなティファニアや孤児達を養うために、怪盗・フーケとなって金を稼ぐようになり、トリステインの貴族を恐怖に陥れる。よって、マチルダがトリステインにいることについては、特に不思議も無いのだが。

原作開始までに、声に戻るイベントが発生するのだろう。それはひよっとしたら、自分が治すのかも知れないが。

しよつちゆう使っているせいか、自分の治癒の腕は相当なものになっている自信がある。まあ、一番得意なのは自分自身への治癒なのだが。

しかし……声を奪う技術か。この世界なら、何らかのマジックアイテムか、または何者かによるギアスがかけられている可能性もある。治癒だの回復の魔法だの、そんなものが全く関係ないようなものだったら、自分にはお手上げかも知れない。

……ん？

……。

いや……いやいや、ちょっと待て。その前に。その前に、ちょっと。

何か妙か？

いや、そうだ、確かに何かが妙だ。

(……こんな年頃だったか?)

モード大公が殺された時、確かティファニアはもっと、年齢が上

ではなかったか？

大公が死亡したという記事を見たときは、ああそんなこともあったな、じゃあマチルダもティファニアも、今頃は逃亡中か、と、軽く流していたが……幼い二人に、ふと違和感を覚えた。

そもそも、アルビオンにおける例の反乱が起きたことの一因が、あのモード大公の事件だった筈。いくら何でも、まだ原作開始までには十年以上あり、そんなに長い間レコン・キスタが動いている筈がない。事実、モード大公死亡のニュースはアルビオンを揺るがしたが、それでも未だアルビオン王室は厳然と君臨している。

確かに、ここは所詮異世界。あの原作通りとはいかず、多少は異なる部分があってもおかしくないが……それにしても、この違いは大きすぎないか？

確か、レコン・キスタの背後にいるのはガリア王ジョゼフだった筈だが、そのジョゼフは未だガリア王ではない。先代の……と言うのも妙だが、とにかく国王、つまりジョゼフとシャルルの父親は健在だ。

バタフライ効果だ何だと言っても、自分の影響が、遙々アルビオンにまで届くものなのか……？

(まあ……仕方ないんだけどな)

そう、仕方がない。原作知識があるとはいえ、既にいくつか違いがある以上、それは参考程度にしなければならないだろう。

結局は、その場その場で対応していくしかないのだ。

「やっ、と……」



奴隷競売を取り仕切る組織が用意したホテル。アクセル……というよりバルビエは、特別にそこに招待されていた。

いくら何でも商品が商品である故に、慎重になったのだろう。このホテルの一室に二人を届け、バルビエから現金を受け取った後は、主催者側は一切の責任を持たない。

「やっぱ怖え」

ナタンは嫌がり、一人だけ別の個室を取っていた。

バルビエの為に用意されたのは、離れのような一室だった。庭を突っ切る渡り廊下を渡ると、小綺麗な、茶室のような建物がある。だいたい、平民一家族の家くらいの広さか。

マチルダとティファニアは、既にその離れに運び込まれていた。眠り薬か魔法でも使われたのか、二人とも、ベッドの上で大人しく寝息を立てている。

(……まあ、流石にな)

今の自分と同じくらいの年齢のマチルダに、妹と言っている年齢のティファニア。二人とも、将来大変な美女に成長することは分かっているが、この時点ではただの幼女。流石に、身体の一部が硬質化したりはしない。

時刻は、そろそろ夕飯時。バルビエは夕食を注文し、ボーイに金を持たせて果物を調達させる。女の子の食量など見当も付かないが、自分だって子どもの胃袋だ。取りあえず、大人と子どもそれぞれ一人分の量を目安にしておいた。

ナタンは遊びに出かけたらしく、留守だった。

やがて料理が運ばれてきたが、起こすのも可哀想だったので、自分一人で食事を済ませ、大人一人分と果物、そして水を、二人が寝ている部屋に運んでおく。

バルビエの肥満体を、窓の傍の椅子に沈めながら、アクセルはぼんやりと双月を見上げた。

マチルダとティファニア……奇しくも、善人と判断していい原作キャラと接点を持つことが出来た。が……二人を、どうするか。はつきり言ってしまうえば、衝動買いのようなものだったのだ。

勿論、娼館で働かせるつもりはない。マチルダは、秘書として学院に潜入できるくらいだから、事務仕事の才能もあるだろう。表の文官見習いにするか、裏の情報整理をやってもらうか。ティファニアの方は……未だ、幼すぎる。それに、問題はあの尖った耳。今の自分には、フェイスチェンジなんてものは使えない。

（まあ、それは帽子が何かで隠すようにして……。あとは、ナタンだな）

彼の意識を変えさせないと、どうにもならない。いつそ、アクセルが連れてきた、という風にしてもいいが、リスクが高すぎる。王の弟でさえ殺されるのだから、たかが子爵の息子など、あつという間に潰されるに決まっている。

それに、今までそういうことをしてこなかった自分がいきなり、「将来有望そうな女の子がいたので、光源氏計画を発動しようと思いまーす」などと言い出しても、怪しまれるのは間違いない。

(……もつと、エロガキとして振る舞っておけばよかったかなあ)

幼い頃から性欲を自覚し、それに対処し続けてきたせいかな、どうも、性欲が減退している気がする。まあ、まだ思春期にも入っていないし、これからどんどん盛り返していくことだろう……と思いたいが。

東地区の構想は、まだまだアイディアが出し切れてないし、清掃事業もまだ終わらない。無秩序に建てられた家屋は取り壊すとして新しく長屋のようなものを用意する必要もある。そして何より必要なのは、自分が思い描くものを、現実に作り出せるような能力を持った人材たち。

(まあ、初めから全てうまくいく筈もないし)

やってみたら、ゴロゴロと不都合が出てくる。それに、いち早く対処していけばいい。

人材についても、作成中の名簿を更に改良していけば……。

そこまで考えたところで、気付いた。背後から忍び寄る気配に。いや、気配と言っても、達人か何かのように第六感が働いたわけではない。

吐息。足音。衣擦れの音。

(さて……。起きたか)

恐らくは、マチルダだろう。こっそりと、背後から近寄ろうとしているらしいが、はっきり言ってバレバレだ。未来の大泥棒とはいえ、今はただの、幼い少女でしかない。

「……………むほほほほっ！！」  
「…!?」

アクセルは、なるべく大声で笑い出した。それに驚いたらしく、忍び寄ろうとしていた少女は、仰け反るようにして床の上に尻餅をつく。金属音が響いた。

椅子を回し、背後を振り向く。

唾然とした顔でこちらを見上げるマチルダ。彼女の傍には、料理の皿から持ってきたナイフが転がっている。それで、後ろから首を突き刺そうとしていたらしい。

(……………怖えな)

そんなもので突き刺されるのも怖いけど、そんなものを突き刺せると思っっているマチルダも怖い。バルビエの首周りは、まだ相当脂肪が蓄えられており、よほど力が要る筈だが、ぶつつけ本番でこんなことをしようとするなんて。

(……………ここで、エロいお仕置きとかするのが定番なんだろうけどなあ……………)

そんな気は、ついに起きなかった。

(……………さて。やっぱ……………やらなきゃダメか……………)

内心溜息をつきながら、バルビエの右手を振りかぶる。我に返ったマチルダが、再び襲いかかってきたら厄介だ。まだ驚愕が抜けき

らないうちに……。

バシィッ

ずんぐりむっくりな右掌が、マチルダの左頬を弾き飛ばした。

(ヤッベエ！ 思ったより強かった！？)

せいぜい、パシッ……くらいの力で良かっただろうに。

マチルダは床に倒れ伏したが、左頬を押さえつつ、こちらを見つめる。

その瞳にあるのは、怯え。今更ながら、両者の力関係を理解したのだろう。魔法も使えない今となつては、マチルダが例え数人いようが、バルビエのビンタで弾き飛ばされる。

奴隷市場も、売り物に傷を付ける筈はないし、もしかしたらビンタされた事など、殆ど無かつたのかも知れない。

別室から見守っていたらしいティファニアが、慌てて駆け寄ってきて、マチルダの身体を支える。いや、支えているつもりなのだろうが、ほとんど抱き付いているようなものだ。彼女も同じく、バルビエに怯えた瞳を向けている。

「……むほほほ、お馬鹿さんですねえ」

心の中でマチルダに謝りながら、バルビエは再び笑った。安心してくれるかも、と淡い期待を抱いたが、その笑い声も、恐怖を焚きつける油にしかなかった。

「仮に、ここで私を殺したとして。逃げられるとも思っているのですか？」

いや、逃げてもいい。何も、二人の心を見殺ししてまで、縛り付けておこうとは思わない。良心がどうのこうのと言っよりは、二人になるべくプラスな印象を持っていて欲しいという、少々情けない理由ではあるのだが。

しかし、逃げ出すにしても、成功させて欲しいのだ。

「お嬢さんだけならともかく、そちらの妹さんは、お耳が大変目立ちますよ？ このホテルの敷地から逃げ出したとしても、お二人とも、よく知らない街の中で、どうやって逃げるのですか？ どうやってご飯を食べていくのですか？ 一体どこで安心して眠るのですか？」

やはり、そこまでは考えていなかったのか、マチルダは俯いた。

「……せめて、確実に逃げ出せるようになってから、お逃げなさいな」

アクセルが立ち上がると、二人は震え出しながら、様子を窺う。

「では、そろそろ私はベッドに行きますよお。お二人も、お部屋にお戻りなさいな。明日には、この街を出ますから、ちゃんとご飯は食べておいて下さいね？ それでは、おやすみなさい……」

バルビエの身体を、別の個室へと移動させる。そしてそのまま、ベッドの上に寝転んだ。

(……説教臭いのは嫌いんだけどなあ……)

これで、あの二人も大人しくしてしてくれる筈……だ。多分。ひよっとしたら、また殺しに来るかも知れないが、彼女の力では、内部のアクセルにまでは届かないだろう。

何か用心の為にしておくべきか、とも考えたが、マチルダもそれほど愚かではない。

(寝よ)

そのまま、アクセルは目を閉じた。

翌朝、起きてから鏡を見てみるが、バルビエの身体には傷一つなかった。

(まあ、あつたら困るんだけど)

取りあえず、隣の……二人が寝ているであろう部屋へ行く。

「むほほ、入りますよお？」

少し待ったが、返事は無い。そっとドアを開けて見ると、粗方消えた食事と……。

(……そっか)

部屋は、無人だった。マチルダも、ティファニアもない。

このままバルビエの奴隷でいる危険性と、二人きりで逃げる危険性……それらを比べての結論か。それにしても、やはり、浅慮だと思いが。

（追うか？ 流石に知らんふりも出来ないぞ？）

考えていると、ナタンがやって来た。

「おや、ナタンさん。どうかされましたか？」

「お客さんだ」

ナタンに続いて、顔に真一文字の傷のある男が入ってくる。奴隷市場の者だと名乗った。茶でも用意しようとしたが、彼はそれを丁重に断る。

「私は、ただの使いとして参りました」

「むほほ。それで、ご用件は？」

「昨日の競売の、2番。あなたと最後まで争っていたお客です。我々は、彼にあなたの情報を漏らしました」

そこまで言われた時、だいたいの見当はついたが……アクセルは、黙って聞き続ける。

本来、決して漏らす筈のない情報。しかし、主催者側が人質を取られ、バルビエの……更に言えば、バルビエが落札した二人に関する情報を、漏らしてしまったという。

2番の客の名前は、商人ドリユーブ。彼は奴隷市場の責任者を人質にすると、主催者側の人間達に命じ、ホテルからマチルダとティファニアを盗み出させた。



「盗み出したのは、私です」

「ふむ……」

傷の男は、淡々と告げた。バルビエの指が、顎に添えられる。

「ちなみに、人質というのは……あなたがたのボスで？」

「はい。昨日、道化師に扮していた進行役です」

彼が、責任者だったらしい。

「今、ドリユーブは？」

「既に街の外に。ドリユーブに雇われているのは、メイジ二人に傭兵が六。ボスは自分を見捨てるように告げましたが、次のボスは未だ決まっておりません。組織の混乱を避けるため、知っているのは上層部のみ。大々的に手下を動かすことは出来ません」

「ボスは、未だドリユーブに？」

「はい。何人かで追っていますが、どうやら近くの森の中を通るらしく……」

「成る程」

「私からは、以上です」

そして……。傷の男は、素早く……。しかし、何の違和感も感じさせないような動作でナイフを取り出すと、その切っ先を、自分の胸へと向けた。

アクセルが、バルビエの手を操作してナイフを止めることが出来たのは、その予感があったから。

あまりにも、男は喋りすぎた。自分の組織の内情まで。

「お……おいつ」

ナタンが慌てて、男のナイフを取り上げた。

「本来、客の情報を漏らすことはない……。それが漏れてしまい、あなたは礼儀として、この私に情報を漏らした。しかし、情報を漏らした者を、生かしておくわけにはいかず……。ですか？　そして、何も知らない手下達が、あなたの死体を処理すると？」

そう言いながら、アクセルはペリーコロさんを思い出していた。

傷の男は、黙っている。流石に全てではなくとも、大部分は当たりなのだろうな……。そう思いながら、アクセルは再び笑い出す。

「むほほ……。命がけの礼儀には、命がけの礼儀で返さないといけませんねえ。ナタンさん」

「ん？　何だ？」

「追いかけますよお、泥棒さんを」

バルビエに情報を漏らしたのは、その男の独断だった。勿論、彼もただ何が起こっているのかということの説明に來ただけで、ドリユーブへの対処、ボスの救出を期待していたわけではない。

追っているのがバレれば、人質であるボスの身も危ない。しかし、それはあくまであちらが脅威を感じるからであって、相手との戦力差に明らかな分があれば、そんなこともないだろう……。ということ、バルビエは一人、馬を走らせた。ナタンや組織の人間たちには、

森に潜みながらついて来てもらう。

「むほほほほ、見つけましたよお。泥棒さんたち」

森を抜け、平原に出たところで、バルビエは彼等の馬車の前に飛び出した。肥満体のバルビエだが、実質皮膚と服と、アクセルを足した重さしかない。相手も、気付いていたがスピードを読み違えていたらしく、馬車は軽く滑りつつ停止した。

馬車は二台。前の一台に乗っているのが、傭兵たち。御者を含めて六人。後の一台に乗っているのが、恐らくドリユーブ、マチルダ、ティファニア、ボス、そして二人のメイジ。

傭兵達が動き出し、後ろの馬車からメイジ二人、そしてドリユーブが飛び出し……あっという間に、バルビエに武器を向けた。

「ドリユーブさん、いけませんよお。人のものを勝手に持って行くっちゃ」

さて……メイジが二人か。二人の周囲に渦巻く精霊を見ると、どうも、乱雑な印象を受ける。十中八九ドットクラス、そうでなければラインクラス。間違っても、トライアングルなどではないだろう。まあ、根拠は乏しいのだが。

傭兵達は……弓を構えているのが一人、剣を構えているのが四人もう一人は槍。少々広がり、こちらを包囲している形になっているので、魔法で一掃というのも難しい。

いつも通り、まずは、会話からスタートすることにした。

「おーい、お二人さん。処女はまだ無事ですかねえー？ ついでにボスさんもー」

後ろの馬車にいるであろう二人に、冗談交じりにその声を掛けてみるが、失敗だと気付いた。二人とも、喋れない。それに、理解できるのかも怪しい。

開け放たれた馬車から、三つの顔がのぞいていた。周囲の状況を確認しようとしたマチルダ、ティファニアと……あとの老人と違っていい年齢の男は、話に聞くボスだろう。

自分を無視されたことに気分を害したのか、ドリユーブが口を開いた。

「お前がバルビエか？」

「むほほ、そうですね。あのお二人は、あなたには少々手に余るのではないですかねえ？ 大人しくお返し願いたいのですが」

もしかしたら、ドリユーブはアルビオン王国の手の者で、二人の素性を知っているのではないか……そんな予想も浮かんだが、それならば競売の時、借金をしてでも購入しようとした筈だ。いくら何でも一介の商人と一国では、資金力が違いすぎる。

「殺せ」

ドリユーブは、会話に付き合わなかった。

バルビエだと確認した後、僅かに口元を歪ませ……一言、告げる。

矢が空気を切り裂き、バルビエの胸に突き刺さった。

「ぐっ……」

バルビエは小さく呻きながら、身体を傾ける。そして落馬すると、

横たわったまま動かなくなつた。

「ドリュープ様。ヤツの持ち物、頂いても？」

「好きにしる、それに早くな。出来るだけ、森から離れたい」

いくら人質を取っているからとはいえ、このまま組織が指をくわえている筈がないのは、当然のことだった。メイジ二人が相手だろうが、彼等は死に物狂いで反撃に出る。恐らくは、既に森の中に潜んでいるだろう……ドリュープはそう考えていた。でなければ、バルビエが単騎で来る筈がない。何らかの作戦を立てていたのだろうが、交渉も会話もせずさっさと殺せば、相手の予定は大きく狂うことになる。

バルビエというのが、相当の商人であることも知っていた。だからこそ、バルビエ自身には手を出さなかつたのだが、こつも早く情報が漏れてしまったのなら、仕方がない。寧ろ、文句を言ってくる人間が一人減つたことを喜ぶべきか。

当初のドリュープの予定では、このままレオニー子爵領を抜け、組織の手の届かない場所まで逃げることになっていたが……。

その時、森から一騎、飛び出してきた男がいる。右手に片手剣、左手には手綱。

そして、それに続くようにもう一騎。弓に矢をつがえた、顔に傷のある男。

「……おい、さっさと片付ける」

傭兵達は、バルビエの死体漁りに忙しいだろう。ドリュープは、メイジ二人にそう告げた。

たかが二人の平民。それに対するのは、二人のメイジ。

もしも、森に大勢が隠れていて、それらが一斉に飛び出してくる

のであれば、人質を盾にする発想も出ただろう。しかし……そんな面倒なことをする気にはならなかった。

ただ、手早く、殺してしまえばいいだけだ。

ドリユーブは、自分の馬車へと戻っていく。

もはや、あの貴族の娘とエルフの娘は、自分の所有物だ。

何をしようと、誰も咎める者などいない。

傭兵達には、少なくとも金を払っていることだし、彼等が通報する筈もない。

奴隷市場の人間たちも、縄張りとしているのはたかが一つの街だけ。

馬車に近づいたドリユーブは、マチルダとティファニアの表情に違和感を覚えた。

二人とも、呆然と、どこかを見ている。それは決して、自分に向けられているものではない。

おかしい、と、ドリユーブは思う。

今、あの娘達の視線を集めているのは、自分であるべきだ。抵抗できない強者となった自分を、貴族が、エルフが、怯えに満ちた瞳で、恐る恐る……その一挙手一投足を窺いながら、身を縮めているべきなのだ。

「おいっ！」

怒りを露わにしながら、ドリユーブは怒鳴った。ふとこちらを振り返るメイジ二人に、お前らに言ったのではないと、心の中で毒突く。

それでも、マチルダもティファニアも、瞳すら動かさなかった。彼女たちは……いや、その傍にいる人質も、じっと同じ方向を見つ

めている。

そしてそこで、ついさっきこちらを振り返ったメイジ達も、呆然として彼方を見つめていることに気付き……。

ドリユーブは、ついにそちらを振り向いた。

「……やってくれたね、全く」

聞き覚えのない、少年の声。それが発せられたのは、尻餅をついたり武器を構えたり、様々な反応をしている傭兵達の中心に立つ、バルビエの“内部”からだった。

胸に矢を生やしたまま立つバルビエの身体が、脱ぎ捨てられた衣服のように萎んでゆく。そして、彼の背中を幼い両手が突き破り……バルビエだったものが完全に地面に落ちると、そこには一人の少年が立っていた。

「“帰り”も、使わなくちゃならない道具なのに……」

アクセルは足下のバルビエを眺めながら、右手の杖で軽く自分の首を叩く。

(杖……!!)

何が起こったのか、理解など出来はしないが……決してドリユーブの味方側ではないであろうメイジが一人、出現した。それだけは、全員が分かった。

子どもである。そう、まだ幼い子どもであるが、メイジの恐ろしさなど言うまでもない。

反射的に叫ぶ。

「おいっ、一人はあのガキを……」

ドリユーブに雇われたメイジの一人はその命令を受け、急いで駆け出そうとして……転倒した。傷の男が放った矢が、左の太腿に刺さっている。更に矢が放たれ、それはうなじへと突き立ち、メイジの口から血塗られた鏃が飛び出した。

もう一人のメイジは、仲間の死を見て心を引き締める。弓を持つ騎馬にファイアボールを放ち、落馬させると、既に目の前に接近していたもう一騎に向き直った。

「おらあっ！」

「『ブレイド』！」

騎乗したナタンがすれ違いざま、屈むようにして振り回してきた刃を、メイジは杖を剣とすることで防ぐ。

メイジはナタンを後回しにして、バルビエの中から現れた少年に向かおうとしたが、ナタンはすぐに馬から飛び降り、再びメイジに斬りかかる。

再びブレイドの魔法を唱え、近づきすぎたその男に応戦するメイジは、畏であったことを悟った。

ナタンは決して、退がらない。メイジがどれだけバックステップ、サイドステップを組み合わせて距離を取ろうとしても、執拗に食いついてくる。離れようとはしない。

剣もそうだ。ナタンが剣で攻撃すると、メイジは魔法剣で受けるが、反対にメイジがさっさと男を切り捨てようとしても、身体を捻



って避けるか、軽く弾いて反らすか。決して、“受け太刀”に回ろうとはしない。受け流すのではなく、例えば直角に刃を受けてくれれば……剣で魔法剣を受け止めようとしてくれれば、その剣ごと叩き斬ってやるのに。

少年のメイジという、予定外の敵が出現したというのに、そのメイジはナタンに対処するしかない。勿論、こんな距離で魔法を使おうとすれば、刹那に致命傷を受ける。

（こいつは……何で向かってくる！？）

メイジは、混乱していた。

仮にも武器を持つ者同士、互いにタダでは済まない。一生モノの怪我を負っても、何の不思議も無い。

ある程度慎重になるのが定石だろうに、この平民はまるで刃を恐れない。メイジの振る魔法剣に怯えない。

（この、平民の男が強い……？）

一瞬頭に浮かんだ疑問を、メイジはすぐに打ち消す。自分と違い、この男はまともに剣術の訓練をしたことなどないのだろう。その証拠に、男の身体には次々と切り傷が増えているのに対し、自分はまだ、二カ所ほどしかやられていないだろう、と。

いくら平民とはいえ、この状況で剣の腕の差を認識しないほど愚かではない筈。

（なら……何で……メイジであるこの俺に近付ける……？）

メイジは、己が氣迫負けしていることに遂に氣付かなかった。

何故これだけ痛みを与えているのに、ナタンは動きを鈍らせないのか。何故これだけ斬りつけても、自分は一度も強烈な一撃を食ら

わせていないのか。

何故……メイジである自分だけが、後退っているのか。

そう……彼が、自分が後退っていることに気付けたのは、人質達が乗る馬車の車輪に、背中をぶつけた時だった。

（俺が……退がっていた？ いや、それより……もう……退がれ……）

目の前の男が、剣を横薙ぎに払う。

左脇腹に達しようとするその刃を、メイジは右手の魔法剣の切っ先を地面に向けつつ、受ける。衝撃に備えようと力を入れるが、刃と刃が接触した時、そのあまりにも軽すぎる感触に違和感を覚え、驚愕した。

驚愕したのは、宙に浮いた相手の剣を見て……相手が、剣から手を離れたことを知った故。

（剣と剣の戦闘で……剣を……手放して……？）

ナタンは、メイジの……防御しようと、身体の左側へと移動していた右手首を、右手で掴む。そして左拳を握りつつ、その中の人差し指と中指の第二関節を尖らせると、振りかぶらないまま、メイジの右腕の上を滑るように真っ直ぐ、喉を突いた。

「……！……」

痛みと衝撃に、メイジの口が開く。耳には、持ち手を失った剣が、地面に落ちる音が届いた。

(喉を突かれ……詠唱できるのか……いやまずは……魔法剣で……)

混乱しかける中、右手の魔法剣を手の中で回転させ、男を斬りつけようとしたが……メイジの右手の中で、くるりと杖が回っただけだった。

既に、魔法の刃は消え去っている。

(そうだ……まだ……左手が……ナイフが……確か……腰に……)

しかし……そのメイジの左手は、予定とは別の方向に動く。互いの右手を封じたままで、ナタンの左フックが脇腹に突き刺さり、痛みと苦しみに思わず停止……そして、視界に広がるナタンの額を、反射的に防ごうとした。

ゴッ……

「……っひっ……」

メイジの左手は遅く、顔面に頭突きを浴びた。鼻血により、口の奥が鉄臭くなる。目は涙で滲み、なかなか視界が回復しない。

その闇の中、左手首が握られたのがわかった。

ナタンは何度も何度も、額を叩き付ける。メイジの頭は、後ろの馬車の板壁と、前から迫るナタンの頭との間を、何度も何度も往復した。

両手で捕まえている相手の両手から、徐々に力が失われていくのを感じたが、ナタンは構わず額を叩き付ける。

やがて、ナタンの額が割れ、顔も髪も血達磨となり……体力が続

かなくなった時。ナタンはようやく頭突きを止め、相手のメイジのボロボロの顔面を確認する。

その時、馬車の中の……ティファニアと、目が合った。  
ハーフエルフの少女の感情は、容易に確信できる。恐怖だ。

「……は……ははっ、はっ……」

息が出来ない。苦しい。

ナタンは崩れるようにして倒れ込むと、地面に大の字に寝転がった。

(……俺、今、どんな顔になってんだろ……)

相当に酷いのは、鏡がなくても分かる。

(しかし、なあ……エルフに怖がられるって、俺……)

恐怖の対象である存在が、怯えた視線を向けた。それも、自分にそれが何だか、とてつもなく痛快なことに思えて、ナタンは笑顔を作る。顔を掌で軽く撫でると、そこにはべつとりと血が付いていた。

(こりゃ、子どもも泣き出すぜ……)

視界の端で、アクセルが杖を振っているのが見えた。取り囲んでいた傭兵達の最後の一人は、首筋から血を噴出させつつ、地面に転がる五人の屍への仲間入りを果たす。

(ハッ。そうだよな……あのガキの方が、よっぽどの化け物……か)

このまま眠ってしまいたくなり、ナタンはそっと、目を閉じた。

しかし次の瞬間、彼の身体に衝撃が走る。何かが、覆い被さるようにして落ちてきたのだ。

「!?!」

続いて、打撃音。どうやら本当に眠り掛けていたらしく、ナタンは急いで意識を引き戻し、目を見開く。

また、あの妙な移動法を使ったらしく、いつの間にかすぐ傍に来ていたアクセルと、彼に顔を蹴飛ばされて転倒するドリユーブ。

打撃音が“あれ”で……それなら、今、自分の身体に落ちてきた“これ”は？

「……!?!」

急いで起き上がり、自分の上にのし掛かっていた老人を助け起す。

「……チツ、遅かったか」

アクセルの忌々しそうな舌打ち。老人の背に、ナイフが突き刺さっていた。

(……バカか俺はっ!)

ナタンも、歯を軋ませる。

ドリユーブを、完全に意識から外していた。所詮戦闘員ではない、

何もしないだろうと。

しかし……ドリュープは既に、恐慌の直中にいた。自分の敵であるナタンを、無我夢中で消そうとしたのだろう。

一太刀でもドリュープに浴びせていれば、結果は変わっていたかも知れない。なのに、あんな状況で眠ろうとするなど……気を抜くなど……。

「……落ち着けや、坊主」

猿轡を外された老人は、上体を起こすと、叱るように告げた。

死が近づいているというのに、その声には一種の威厳のようなものがあり……昨日の道化師と、本当に同じ人間なのか疑わしくなった。

アクセルが駆け寄り、ヒーリングを施す。いつの間にか、ドリュープの背に剣が突き立てられていた。

すぐにナイフが抜け、傷は塞がっていったが……アクセルは表情を変えないまま、溜息と共に立ち上がった。

「……やっぱり、分かるもんなのか？ メイジには」

「ああ、まあね」

老人の問いに、少年は軽く返す。

ガン……と呼ぶべきなのか、果たして本当にガンなのかは分からないが、この老人が病気で、既に余命幾ばくもないことは分かった。傷は治ったが、僅かに残ったダメージが最後のダメ押しを行ったらしく、生命力は着実に低下している。

そのことを薄々勘付いていたのだろう、老人は「そうか」とだけ呟き、次に声を張り上げた。

「バルシャ！ 来いっ」

反応したのは、先ほど落馬したまま気を失っていたらしい、顔に傷のある男。さながらバネ仕掛けの人形のように跳ね起きると、全速力で駆け寄ってきた。

「ボスっ、ご無事で!？」

「いや、そろそろ死ぬな」

詰め寄る男……バルシャという名の彼を、少し煩わしそうに押しやりながら、老人は他人事のように言う。

「……負けたな」

ふと、噛み締めるように呟いた。

「客の情報を漏らし、客の購入した品を盗み出し……まったく、負けた負けた。人生の最後の最後で、こんな醜態を晒すとは。あの世で先代に殺される」

「……な、なあ、爺さん」

「黙れ坊主、邪魔をするな」

ナタンを黙らせ、頬杖を付く。

「そう言えば、バルシャ」

「はっ」

「後継者の問題が……まだ片付いてなかったな」

「はい」

「折角だ、コイツにする」

老人が見もせず指した先にいたのは……ナタン。

「……はあ!？」

「だから黙れ。何度言わせんだクソ坊主が」

「け……けど……」

「こんな大失態やらかした以上、組織は終いよ。新しいボスの元生まれ変わる必要がある」

「じゃあ、俺じゃなくても誰か」

「いいや、お前だ」

老人は首を振った。ナタンは加勢を求めるようにバルシヤを見るが、彼はじつと老人の話に集中している。一言一句たりとも、聞き逃すことのないように。

「……昔の話だ。ワシは奴隷を救いたかった。だから奴隷商人を殺し、運ばれていた奴隷を解放しようとした。しかし、彼等は奴隷になるしか生きる道は無かった。だから買われて来たんだ。逃げれば当然、故郷の家族が責任を負わされる。青臭い正義感に走ったガキの、よくある話だが……そのガキは捕えられ、仲間に加えられて……いつの間にか、奴隷市場を仕切っていた。その頃にはもう、“怒り”を忘れていた」

「怒り？」

「そうだ、怒りだ。怒ることを忘れれば、心が凍っていく。怒れないヤツには、未来が無い。希望が無い。夢も無い。笑えねえことに、奴隷を扱う自分たちまで、奴隷になっちまった。このバルシヤ達だってそうだ。見ず知らずのヤツに、理不尽にぶん殴られたって、怒りはしねえ。ただ、ボスの命令だけを聞く、人形みてえなもんだ。……そんなのが上に立つちまったら、また、今回みてえなことが起きる。客よりボスの身を優先するなんざ、あっちゃならねえ」

「……その、怒りがありやいいんなら、尚更俺じゃなくていいじ



やねえか」

「ああ、そうだな。けどな、この場にいる中で、お前以外に誰に任せろって？」

「消去法かよ……」

「そうだ、消去法だ。だが……お前は、青臭い。こつからの人生、何度も何度も怒りを持つだろう。怒ったってどうにもならねえもんはどうにもならねえし、現実が変わらねえ。けどな、その怒りに身を焦がし、苦しんで……それでも、怒りを忘れるな。燃やし続ける。死ぬまでだ。そうすりゃ、お前は……負け犬達を……導……」

徐々に……老人の声が、弱まる。

「くそ……まだ……まだ、あるというのに……俣ならん、な……。バルシャ、お前達で……この男を……助けてや……れ」

そつと、瞼が閉じる。バルシャに向けられていた指が、膝の上に降りる。

老人の身体は、二度と動くことは無かった。

一方的だった。

縁もゆかりもないナタンを指し、後継者になれと告げて、老人は息を引き取った。

「……なあ、ベル」

老人の身体を抱いたまま、ナタンはアクセルを見上げる。

「何？」

「……俺に……何をさせようってんだろな、この爺さんは。見ず知らずの俺を、命を捨てて庇って……恩に思うなら、後を引き継いでっていいことか？」

「好きに取ればいいんじゃないかな。こんな場所でも、遺言は遺言だ。それも、命を掛けた言葉。ナタンが真剣に考えた結果なら、その人も許してくれる……と、思うけどね」

どちらにしろ、アクセルにとっては悪くない提案。

役に立つ人員が増えるし、あちらの組織のノウハウも吸収出来る。これで、ナタンに後を引き継げと命令すれば、彼は……。

しかしついに、アクセルはナタンに任せた。

この場でそのような事を告げることが、何かを冒瀆するものだと感じて。

「……わかったよ、爺さん。まとめて、有り難く……俺の“家族”にさせてもらおう」

## 第五話<邂逅3>

「…………なあ、行かないやダメ？」

「勿論。さあ、さつさと」

「け、けど、何言えばいいのやら」

「そうだな…………。ここに集まっているのは、あのお爺さん曰く負け犬だ。だから…………。思い出させてやればいい。負け犬じゃないってことを」

何故、老人はナタンを選んだのか。本当に、消去法だっただけか。それとも、メイジを倒せるような強さを見せつけたから？

どうせ死ぬんだし、その後のことなど知ったことか、という考えから？

今となってはわからないし、その術も無いが、アクセルはあまり気には留めなかった。

あの老人はこれまでの人生の中で、何人も人間を見てきて、何人も人間と接してきた。

その経験豊かな老人には、人を見る目がある筈だ。人を見る目がある者が、ナタンを選んだというのなら、ナタンは決して無能な人間ではない。人の上に立つ器量があり、組織を任せられる人間である…………と、それは言い過ぎかも知れないが、とにかく素質はあるのだろう。

今はまだ、大物でなくてもいい。これから、そうなって貰えばいい

い。

「……よう、負け犬ども」

ゼルナの街、東地区の、完成した娼館前。集まった人々の前で、自己紹介すらせずに、ナタンはまずそう言った。

クルコスの街の奴隷市場は、表のものを残して閉鎖された。それを運営していくために必要な人員を残し、あとの、特に裏の奴隷市場を運営していた人材には、全てゼルナの街へと移ってもらっている。

バルシャを筆頭に、揃ったのは屈強な男達。彼等には、少しでもナタンの迫力を増すために、現在ナタンの両側に待機して貰っている。

「お前らは、何故、ここにいる？ 何に負けてきた？」

壇上に出る前は、あれほどオドオドしていたのに、既にナタンの顔には、何の迷いも見受けられなかった。本当に同一人物か？と、少し遠くから見守るアクセルは疑いたくなる。

（蒼天航路の劉備みたいなものか？）

「自分には何も出来ない。自分には何の価値もない。このまま、死ぬまでずっとこのままか？ このまま逃げ続けるのか？」

拳を握り締め、双眸を鋭くし、集まった群衆の顔の一つ一つを確認していくように……。

（……ああ、そうか。“怒り”か）

アクセルは静かに、その迫力の正体を認識した。  
何に対する怒りか……それは薄々としか分からないが、とにかく  
ナタンには“怒り”があり、その“怒り”の火炎を広げようとして  
いる。その熱気で、煽動しようとしている。

「ふざけるなあつ……！」

人々が、震えるようにざわめいた。

「いいかつ、ここはつ、この糞溜めは！ テメエ等の崖っ縁だ！  
ここから一步でも逃げてみるつ、真つ逆さまに落つこちで、糞み  
てえな結末を迎える！ そうなるくらいならつ、テメエの足を信用  
して、前に踏み出せ！ テメエの足も信用できねえってんなら、仕  
方がねえ！ この俺を信じてつ、ついて来い！！ そうすればつ、  
いつかテメエ等だって、イヤでも気付く！」

一層の大声を張り上げた後、ナタンの言葉は途切れる。  
最早群衆の中に、喋る者はおらず……不思議な静寂が訪れていた。

そんな中で、ナタンは再び口を開き、黒鉄のように重厚な声で、  
告げた。

「自分たちが結局、何も……負けちゃいねえことに」

アクセルは指で合図を送ろうとして、その動きを止めた。  
群衆の彼方此方から、雄叫びのようなものが沸き上がり、それは  
一つの巨大な流れとなって、広場を支配する。

誰も彼もが、叫んでいた。

アクセルが予め、群衆達の中に仕込んでおいた、歓声要員。合図

と共に声を張り上げ、場を盛り上げようとしていたのだが、アクセルは、それが無用の小細工だったことを知った。仕込みの彼等ですが、熱狂して無我夢中で雄叫びを上げていて……例え合図をしたとしても、気付きもしなかったのではないかと感じる。

（まさか……ナタンめ、自力で二こ神さんの名台詞に辿り着くとは……）

最初、アクセルがナタンに目を付けたのは、その身長とスタイルと、イタリア人モデルみたいな顔と……要するに、外見であった。事実、少々身綺麗にさせるだけで、ダンディが服着たみたいになった。

イタリアと言えばマフィアだね、じゃあマフィアとかヤクザとかの親分させようかなあ、と、いい加減にその後を決めていったのだが、既にある程度満足している。取りあえずは、こんな、人々を熱狂させるような男ではあったのだから。

「テメエらは今日っ、たった今からっ、この俺の家族だ！！」

最後にそう言い、ナタンが壇上から去った後も、人々の雄叫びは止まなかった。

「ベルっ、来いっ」

命令するような口調に、アクセルは大人しく従う。ナタンはそのまま、まだ誰もいない事務所の中へと進んで行き、その中の一室へと入ると、ドアを閉めた。

「ベル、この部屋は何だ？」

「えーっと、皆のデスクの隣だし、ナタンの仕事部屋にしよう」と

思ってる。ナタンのお客さんが来たら、ここで迎えるのもアリだし。扉も特別製だし、外に音が漏れる心配も少ないから、内緒話の時もいいかもね」

「そうか。つまりここなら、基本的に何してもいいわけだな？」

「まあね」

そう答えた、次の瞬間だった。

それまでアクセルに背を向け、こちらに顔を見せなかったナタンが突如振り向き、崩れ落ちるようにして、アクセルの腰にしがみついた。

「……え？」

「こっこここっ、怖えええかつたあああああ！」

流石に、涙は流さなかったが……ナタンは絶叫して震えながら、アクセルの小さな腹に顔を押しつける。

「石とか泥とか投げつけられたらどうしようって！ 一人でどんどん熱くなっちゃって、みんな白けてたらどうしようって！ ぶっちゃけると昨日からっ、全然眠れてねえんだあああ！」

「……あー、よしよし。ステイル氏が、お前は。え？ じゃあ僕ルシー？」

「なあっ、俺っ、やってけるのか！？ あの爺さんの死に顔がちらついて、ついついあんな突っ走っちゃったけど、本当に俺がボスでいいのか！？」

「……もつと自信を持ちなよ」

跪いて縋り、震える青年に、先ほどの思いがガラガラと無かったことになりそうになるが、アクセルはそつと彼の頭を撫でた。

「そ、そうか？ あの演説で、大丈夫だったか？」

「ああ、勿論。期待以上だ」

「本当か！？」

「ああ、本当だ。大丈夫、もつと胸を張っていいよ」

ある程度個人情報収集し、何とか形になった名簿を見ているうちに、役に立ちそうな人材が大勢埋もれていたことに気付いた。

足が不自由になったせいで、お払い箱になった建築作業員がいた。彼を監督官として雇い、他の作業員達の指導と育成を任せ、東地区の建築物整理に貢献させることにした。

貴族の不興を買い、追放された音楽家がいた。肉体労働者のテンションを上げ、疲労を軽減させるため、音楽隊を作り現場で演奏してもらった。

農地を奪われ、職を求めて流れ着いた農民の家族がいた。表の内政で、農業の効率化と品種改良を目的とした試験農場を作る予定だったので、その管理を任せることにした。

盗賊団に放火され、店を失った料理人がいた。建築現場の食事を任せ、ゆくゆくは店を持つてもらうことにする。

屈強そうな男は、自警団を組織させてナタンのファミリーの傘下に組み込み、東地区の治安維持をさせた。



極少数ではあるが、メイジもいた。水のメイジは医者として、土のメイジは建築作業の補助として雇い、あとの二系統のメイジは取りあえず自警団に入れた。

「……人材の、総合デパートや」

「え？」

「いや、何でもない」

こちらを向いたナタンに、微笑みつつ首を振ると、アクセルはソファの上に寝そべったまま、頬杖を突いた。

この子爵領に流入する難民の数は、多い。偶然かも知れないが、原因を挙げてみるのなら、やはりそれだけ出入りが甘いからだろう。ラヴィス子爵がしょっちゅう隣接した領土を通るためか、それともまともな代官がないので舐められているのか、とにかく人々が入って来やすい環境ではある。もしかしたら周囲の領主も、面倒な難民は全て、ラヴィス子爵領に任せようと考えているのかも知れない。

まあ、アクセルとしては好都合だった。クルコスの街の奴隷市場の組織と連携し、金持ちたちがこのゼルナの街に遊びに来るように仕向け、また奴隷市場に出品する前に、めぼしい奴隷はこちらに送ってもらう。そんなことがスムーズに行える事の一因は、この領土の気質によるもの。

（そうだな。取りあえず東地区に必要な施設は、まずこの事務所。娼婦の健康状態も万全に保たなきゃならないし、病院も早く完成して欲しい。店なんかは勝手に出来ていくだろうけど、バルビエの財産も少なくなってきたし、賭場も必要か。……娼館の完成形としては、日本の遊郭みたいなのを目指しているから、宿泊施設は……い

や、やっぱり必要だ。客が全員男ってわけじゃないんだし。けどそうになると、男娼も必要だよなあ。まあ、そういう趣向の客がどのくらいいるのかは分からないけど。それに、男娼が一日に相手できる数なんて、多寡が知れてるし。……いつそ、ホストクラブを作るか？)

いや、焦るな……先走るな……と、アクセルは自らに言い聞かせる。

娼館も早速オープンさせ、ボチボチ商人らしき客も来たが、早速問題が持ち上がった。

馬車を停車させておくスペースが足りなくなったり、予約のダブルブッキングが起こったり。細かなこと言えば、予定していた料理が届かず、急遽アクセルが知識を総動員して、珍しい定食を作ってお茶を濁したり。

(たかが東地区一つ……更に言えばその中の娼館の管理ですら大変なのに、一つの街の内政だなんて……)

ついつい後ろ向きな思考に陥りそうになるが、原因は人手不足であるとはつきりしている。四則計算どころか、足し算引き算を完全に出来る人物も少ないのだ。

(やっぱり、文字を知っているのは当然として、四則計算もマスターして欲しいな)

12×12の暗算ならまだしも、7×8の暗算で尊敬の目を向けられるとは思わなかった。これで前世がインド人だったら、神として降臨していただろう。

「すみませんっ」

ナタンの仕事部屋に駆け込んできたのは、バルシャだった。

「櫛の間のお客さんの所なんですけど、女の子が足りず……」

「すまねえが、頼めるか？ ベル」

「あら。この姿の時は、アリスでお願いしますわ“お兄様”」

言葉遣いを改めつつ、そう言って立ち上がったアクセルの姿は、成る程少年には見えなかった。

黒と白を基調とした、所謂ゴシッククロリータのワンピースドレスに、同じく黒白縞模様のハイソックス。黒髪のカツラの毛先が、小さな身体の太腿にまで達している。

源氏名はロリカードかEASYのどちらにしようかと迷ったが、結局アリスという名に落ち着いた。

「さて、一応練習を……。初めまして、アリスです。特技は楽器演奏と歌を歌うこと。あとは正拳突きですわ」

「似合いすぎてて怖えーし、特技の後半も怖えーし。……そう言えば、その妙にリアルなカツラって……いややっぱ聞きたくない」

実はアクセル自身、なかなか楽しんで演じていたりする。

音楽については、母親の生き甲斐でもあるので、必然的にアクセルにもそれなりの腕はあった。どうせ声変わりすれば、こんな高音は出せなくなるし、今のうちに堪能しておこうと思っている。

初めは緊張したが、一度経験してしまえば度胸がついて、不慣れな新人よりも接待が上手くなっていった。

(……ここか)

応援要請は、“檉の間”。部屋には階級ごとに、大きく分けて三種の種類があり、上級は花の名前、中級は木の名前、下級はその他の植物の名前だった。

応援とは言え、年若すぎる女の子は娼婦ではなく、繋ぎの役割を果たす。ただ酌をしたり、話し相手になったり、その他の雑用だったり……。勿論今回のアクセルの役割も、避妊具の準備が出来ておらず、娼婦が部屋に到着するまでの助っ人だ。

「失礼致します」

「遅えぞ！」

「大変申し訳ありません」

部屋に入る前から、怒号が響いた。ああ、そういうお客さんかと、大方の目星をつけて、アクセルは入室する。

いかにも不機嫌、といった感じの男だった。足下には二本ほど、ワインの空き瓶が転がっており、手には中身が入ったものが一本。だらしなく椅子に腰掛け、ワインをラッパ飲みしつつ……。濁った目が、アクセルに向けられた。

「……ほお」

なかなか体格のいい男だった。恐らくは、傭兵か何かだろう。仕事終えて、まとまった金が入ったので……。と、そんなところか。

男はアクセルを見て、感心したような吐息を漏らすと、もう一口ワインを飲み込み、椅子から立ち上がった。

「お前、名前は？」

「アリス、と申します」

小さなヴァイオリンケースを床に置き、広がったスカートを両手で摘み上げ、なるべく礼儀正しく挨拶をする。顔は、微笑を忘れない。

「特技は」

そう言いかけた時、男の手が自分に向かって伸びているのに気付いた。そのまま気付かない振りをして、足下のヴァイオリンケースを持ち上げると、くるりと回りながら男の手を避け、男の後ろ、テーブルの前に移動する。空振ったその男は、二歩ほどたたたらを踏んだ。

「楽器演奏と、歌です。一曲如何ですか？」

テーブルに置いたヴァイオリンケースの留め金を外し、蓋を開ける。が、今度は背後から、肩を掴まれた。流石に知らない振りが出る状況でも無いので、どうしようかと考えていると、そのままベツドへと放り投げられる。

「あの、お客様？」

慌てず、騒がず……ベツドの上で上半身を起こしつつ、アクセルは首を傾げた。男が、ベツドの上へと登り、膝立ちになってのしかかってくる。

「一曲と言わず何曲でも、歌ってもらおうか。身体でな」

男はニヤリと口の端を吊り上げると、ワンピースの襟部分に指を入れ、左右に引き裂いた。あつという間に上半身が露わになり、肌が晒される。

(サムいんだよおお！ 何だその台詞！ プレイボーイ気取るんならつ、女の子の服くらい、テメエの手を使わず脱がせてみるってんだ！)

アクセルの服は、上の部分が左右に破れていた。キスでもしようとして顔を近付けてきたら、容赦なく掌底を叩き込むつもりだったが、男はアクセルの両肩を掴んで阻めないようにしながら、一心不乱に上半身にしゃぶり付いている。

(……うわあ)

嫌悪感はあるが、意外に冷静だった。舌先で乳首を舐め回されても、くすぐったいだけで特に問題ない。爬虫類か何かが這い回っていると考えれば、寧ろ嫌悪感は薄れた。

じつと、忙しく動く男の頭頂部を見下ろしてみる。人間の男ではなく、何か下等な生物のように思えた。

(そう言えば俺、前世では結局童貞のまま死んだけど……初体験の時、きつとこうなつてたのかなあ？ うわあ、じゃあそうなつたら、相手の女の子にこんな目で見られてた？ あはは、乳首吸いまくってるよコイツー、全然気持ちよくないってのー、とか？ ああもう、清いままでよかつたー)

もしかしたら、現実逃避だったのかも知れない。  
ふと、アクセルは尋ねなければならぬことを思い出した。

「あの、お客様？ 私の前にお相手をしていた女の子がいた筈ですが、その子は……」

返事は、聞くまでもなかった。

自分の、頭の左。ベッドと壁との隙間に、小刻みに震えている、藍色の何かが見える。

「……………」

すうつ、と、冷静だった脳が、別の冷たさに支配されていくのを感じた。

男は舌舐めずりをしながら、自分のシャツに手を掛ける。そして、男が衣服を脱ぎ去ろうとした瞬間、顔が隠れた時……アクセルは拳を握り、中指の第二関節を尖らせると、起き上がりつつ男の脇腹に突き刺した。

「むじっ！？」

視界が効かない中、予想だにできなかった衝撃と痛みを受けて、男の身体はベッドの上から、部屋の中央側へと転げ落ちた。

アクセルはその反対側に降りると、しゃがみ込む。

藍色の髪の少女が、膝を抱え、身を縮め、ぶるぶると震えていた。

「大丈夫？ どこが痛い？」

顔、腕、脛……体中に、アザが出来ていた。全身痛いに決まっているだろうと、質問の馬鹿馬鹿しさに自ら呆れつつ、アクセルは少女に手を伸ばす。少女は大きく身体を震わせて、恐る恐る、アクセルの……いや、アクセルの手を見つめた。また殴られるとも思っ

たのだろうか。

「てんっ、め……」

「お客様。この娘は未だ見習いです。何か不作法がありましたか？」

見習いの娘には手を出さないように、と、十二分に説明がなされているにも関わらず……。

ベッドから落下した男は、ようやく服を脱ぎ去ったのだろう、怒りに満ちた表情でアクセルの背後に立つ。

「ここは娼館だろうが！ こっちは、金払ってんだ！ なのに、そのガキがよお、股の一つも開きやしねえ！ テメエの身体で許してやろうってのに、何なんだ一体！」

藍髪の少女の衣服は、ボロボロに引き裂かれていた。

「……その、大変はしたない言葉遣いなのですが……“突っ込んで” いないんですね？」

「そうだよっ！ そのガキっ、必死になって抵抗しやがって！ 見てみるっ、このひっかき傷！」

「……よかったですね」

「ああっ!？」

「“突っ込んでたら”……くたばって貰ってましたから」

精霊の力を使うつもりはなかった。それが、精霊に対する冒瀆であるようにも思えて。

再び中指を立て、振り向きざま、肝臓目がけて拳を叩き付ける。



「っ……いつっ……!!」

声にならない悲鳴と共に、男は膝をつく。足を上げ、ちょうどいい高さまで落ちてきた顔を蹴飛ばすと、男の身体は背後の棚にぶつかり、今度は仰向けのまま崩れた。

「……っ……!!」

額にねばついた汗を浮かべ、身体を丸めて悶絶する男の頬を、軽く叩く。

「もし。もし、この娘に、その汚物と変わりないモノを、1センチでも突っ込んでいたら、根元から切り取って……汚物は汚物らしく、あなたの後ろの穴に突っ込んでいました。例え突っ込んでいなくても、是非ともそうしたい気分ではありますが、追放一号の記念に、やめておいて差し上げます」

そこまで言った時、バルシャが駆けつけた。

「バルシャさん。この人、お帰りです。“ たっぷりとお土産を持たせて” 放り捨ててあげて下さい」

藍色の髪の少女が、ようやく立ち上がったのは、それから一時間後。アクセルに抱きしめられ、頭や背を撫でられながら、何とか落ち着いてくれた。

「おいっ、べ……じゃねえっ、アリス！ 無事か！？ 純潔は！」

「ふざけた事言ってるよ、唇を縫い合わせますわよ。お兄様」

「……うおおおっ、ち、乳首丸出しじゃねえかああ！」

「こんなもん、ただのピンク色したホクロですよ。もしくはニキビ。それと、他の部屋のお客様に迷惑です」

ナタンには仕事を続けるように言っていたが、連絡を受けて一時間後に来たということは、ちゃんと終わらせたのだろう。心配して駆けつけてくれたことについては、感謝しておく。

アクセルは少女と抱き合ったまま、地下の大浴場へと向かった。この事務所の中で、アクセルが一番拘った場所でもある。偶然ではあるが、地中深くから温泉がわき出していることに気付き、わざわざメイジまで動員して、地下から汲み上げるようにした。掛け流しの温泉という、贅沢なもの。まだ人が少ないので、入浴時間をずらすという方式だが、いずれはもっと広くして、男湯女湯混合の三つを作りたい。

そう言えば、確か温泉には火山性と非火山性があった筈だ。近くに火山はないので、非火山性なのだろう。とすると、地熱でも温められているのだろうか。

「……ここに来るのは、初めて？」

アクセルの問いに、少女は少し頷いた。入浴という文化も無いこととは無いのだが、せいぜい小さなバスタブに湯を張る程度。ここまで大きい、入浴のだけの為の場所は見たこともないらしく、ランプや天井を見回している。もっとも、その仕草はかなり控え目なものだったが。

「それじゃ、入り方を説明しようか」

服を脱がせ、腰にタオルを巻いた状態で、浴場へ入る。ナタンの名前付きで、壁には手順のパネルを嵌め込んである。

「まず、身体と髪の毛を洗って。それから、ゆっくりつかるとの」

少女は未だ何も喋ってくれないが、膨らんできている体付きから見るに、アニメスと同じくらいの年齢か。

(……変だな)

前世では、中学生どころか小学生の二次絵でもイケたのに、ついに息子は反応しなかった。まあ、流石に自分の肉体年齢が幼すぎるし、それにこの少女をどうしようとは思わない。何だか、肉親……妹を風呂に入れている気分で、性欲よりも父性が勝る。

「しみるけど、ちょっと我慢してね？」

石鹸を泡立て、少女の身体を洗っていく。こびり付いた血を拭き取り、同じく石鹸を泡立てて、髪も洗った。流石に女の子であるのでシャンプーを使うべきかも知れないが、そもそも成分を知らない。股の間の大事な部分も、念のため、裂傷などが無いか確認しつつ、洗う。

「よし。それじゃ、あとは傷を……」

少女が大分リラックスしてくれたのを見て、両手を伸ばす。

まず、左右の手をそれぞれ一本ずつの杖に見立て、ディテクトマ

ジックの要領で、怪我や病気の場所を探す。ここで引つかかることがあれば、更に指を一本一本杖に見立て、十本の指でディテクトマジックを行うのだが、幸い骨にも異常は無かった。

「はい。ちちんぷいぷいつ、と」

この程度の怪我なら、別に詠唱は必要なくなったので、代わりにおまじないのようなかけ声と共に、ヒーリングを使う。

引いていく痛みに驚いたのか、それとも杖を使わずに魔法を使ったことに驚いたのか……両方が。

(そうだ、つい杖を忘れて……。まあいいか)

自分を見つめる少女に構わず、

「さあ、風邪引かないうちにさっさと入ろう?」

手を引いて湯船に誘った。腰のタオルを取った時、少女が驚いたことで、そう言えばそうだったと思い出す。

「普通はタオルを取るべきんだけど……まあ、どっちでもいいよ」

タオルを畳み、頭を上に乗せると、少し迷っていた少女もそれに習い、アクセルの隣に腰を下ろした。

「あつ、と」

何か背中に違和感があると思ったら、すっかり忘れていた。アクセルは髪の毛を手早くまとめると、頭上に持ち上げた。女装したま

ま湯船に入ったことが無いので、結い上げる方法がわからない。

(……しかし、話さないな)

少女を盗み見ると、水面に顎を浸し、じっと揺れる湯を見つめている。

「……髪」

「？」

「いや、自分では結ったことなく……。お湯につけちゃ駄目だし、ちよつとやってくれる？」

少女に背を向け、アクセルはカツラの黒髪を示す。迷った風もなく、彼女は長い髪を一纏めにすると、頭上へと結い上げてくれた。

「ありがとう」

「……………」

少女は、何も言わずにそつと微笑んでくれた。

あの客に殴られた時も、悲鳴ぐらいは上げただろうに、誰も気付けなかった。ということは、悲鳴も上げなかったのか。

「……………喋れないの？」

そう聞くと、少女は僅かに頷き、そしてポロポロと涙をこぼし始めた。

「そっか」

肩に手を伸ばし、抱き寄せると、少女も抵抗せずに抱き付いてき

た。

「……頑張ったね。偉かったね」

恐らくは彼女も、奴隷として売られて来たのだろう。確かに可愛い顔をしているし、将来有望と判断してこの街に送った組織の行動も、間違っではない。

少女は声も出さず、ただ涙のみで、泣いていた。

(……どう思っかな)

彼女がこうやって、アクセルを信頼しているのは、同じ境遇の子どもだと思っっているからではないのか。

しかし、アクセルは管理側の人間である。この少女を含む、女達を買い取った側の人間。決して、味方ではないのだ。それを知った時、彼女はどうするか。

「……何だろっね、君の名前は」

ふと、呟いてみる。すると、少女は抱き付いたまま、アクセルの背に人差し指を這わせた。

すぐに、文字を書いているのだと気付く。

(文字が書けるのか……。そう言えば、身体を洗っている最中にも、特に恥ずかしがってる様子は少なかったような……。没落貴族か?)

ミシエル……。アクセルの背にそう書いた後、彼女は涙を拭いた。

( ミシエル……か。うん、よくある名前だ。うん、よくあるよくある )

確認してみたい気もするが、それはゆっくりとやりたい。共通点もせいぜい、髪の色と名前だけだが……正直に言つと、ビビッていた。

( 何？ 原作キャラって、スタンド使いみたいなもんなの？ 引  
力でも発生してんの？ )

何度考えても、結論は目を背けたくなるような場所へと辿り着き、アクセルは天井を見上げて溜息をついた。

## 第六話〈安住〉

つまり！ この地は特異点なのだよ！ やたらと原作キャラが集まってくる！

な、なんだってー！？

(……いやでも、ミシエルはアニメだけのキャラだから、セーフだよな？ よな？)

結局、ミシエルは娼婦見習いから弾き、貴族であったことを確認し、事務を手伝わせることにした。

(これで……計、四人か)

マチルダ、ティファニア、アニエス、ミシエル。

(いや……そりゃ少しくらいは、美人な原作キャラとお近づきになりたいとは思ってたけど……近すぎる！)

どうあっても、自分の行動は、彼女たちに多大な影響を与えてしまっただろう。

(マチルダ、ティファニアはともかく。ミシエルも、まあとにかく



く。アニエスは、乖離しすぎだろ！)

確かミシエルは……父親がリツシュモンの部下で、リツシュモンに責任をなすりつけられて没落して……リツシュモンが、父親の没落は国のせいだと唆して……それで、トリステイン王国に怨みを持つて……。

(うん、これは別に大丈夫か。どうせリツシュモンは、アニエスに殺されるんだし)

そうなることやはり、一番の問題はアニエスだった。

はつきり言つて、クレイモアのラキのような超進化を遂げるとは思えない。

以前……そう、ちょうど、ナタンとアニエスを仲間に引き入れた後。

アクセルがナタンに、剣の稽古をさせようとしたら、アニエスもくつついてきた。

剣の技など知らないし、ダメなら護衛を付ければいい話なので、アクセルはナタンの才能に賭けることにした。

(確か、剣客商売の鰻売りの男が、こんな稽古を付けてもらった筈)

要するに、まずは刃物に慣れさせようと思った。そこで互いに真剣を持ち、皮一枚を斬ろうとしたのだが、自分にそんな芸当が出来る筈がないことに気付いた。しかし、それと同時にもう一つ。自分が、ヒーリングが出来ることにも気付いた。

だから斬った。結構ざつくりと。

その時アニエスは、裏切り者と叫ぶナタンの悲鳴を無視して、さつさと逃げ出した。

(……いくら何でも、女の子にあんな事しないっての)

しかし、その翌日、覚悟を決めたように剣の稽古を付けてくれと言ってきたアニエスを、正直見直した。

(っというか、何で俺に言うの。まあいいけど)

近くの森に赴き、木を切り倒し、木製の剣をいくつか用意して、更に十字架のような練習台も作った。

「とりあえず、打ち込みまくれ。木剣が全部折れたら、また用意する」

それだけ言って放置していたが、なかなか真面目に取り組んでいないらしい。

(まあ、俺が焦ってるだけか)

正直、今の成長スピードで、メイジ殺しになれるのかと言われれば、恐らくノーだろう。しかし、成長スピードが一定というのも考えられず、これから何らかの経験を経て、ぐぐーんと成長してくれるならなあ……と、半ば希望的観測に縋っている。

最悪の場合は、自分がリッシュモンをこっそり暗殺するという手もあるのだ。

しかし、所詮それらの心配は、未来のこと。

今だって、大事なのだ。ようやく娼館も軌道に乗り出し、東地区も発展が続いている。アクセルも、ベルとアリスという二つの顔を使い分けて、こっそり様子を見ていたが、もう女の子が足りなくなるなど、そろそろ無いだろう。

アクセルは、自分自身の魔法について整理してみる。

今、自分がどの程度かは分からないが、リーズに見せているのはライnkラスの実力。皆、だいたいライnkラスで壁に当たるのですよ、と励ましてくれるところから察するに、成長が停滞していると見られているらしい。

勿論、魔法を使う時は杖を使っているが……実は、杖を使っていない。杖を構えているふりをして、人差し指で使っている状態だ。杖に添えた人差し指では使えても、杖自体は使えなくなっていた。少し焦りもしたが、そもそも手を失えば杖を持つことなど出来ないで、バレる可能性などないし、問題ないことに気付いた。

停滞していると言えば、魔力の総量だ。

通常、失った魔力は休んだりすれば回復するのだが、自分は魔力をだいたい祭壇に解放してしまうせいか、その回復能力が鍛えられたいらしい。特に眠ったりしなくても、立ち止まったりしているだけで、どんどん魔力が回復していく。

(まさか……そのせいかな?)

回復速度が速いのは助かるが、保有できる魔力の総量は、なかなか

か思うように伸びなかった。重い単発の攻撃か、早い連発の攻撃かというのはよくあるが、このまま総量が伸びなければ……つまり、最大MPが伸びなければ、大量に魔力を消費する大きな魔法など、永久に使用できないだろう。それはつまり、FF9の、成長しないダガーのようなもので……。

勿論、祭壇に解放してある魔力を使う方法もあるが、自分の最大MPを超えれば扱えないし、そもそも都合良く祭壇近くにいるというのは、考えない方がいいだろう。

（最大MPの上昇は、メイジのランクアップに絶対必要なんだよな……。スペルの難易度がドットからラインに上がれば、必要MPは二倍どころか三倍四倍になるし）

どんな敵にも、自分一人の力で対処出来るようになりたい、と思うのは欲張りだろうか。

しかしそれでも、もっと強くなりたかった。自分はナタンの弟分や妹分ということでファミリーに関わっており、正式な一員かと言われると微妙な立ち位置だが、現在の総合的な戦闘能力で言えば、最強であると自負している。それが自惚れだとしても、この外見と相まって、ジョーカー的な存在ではある筈だ。

折角、組織が出来たのだ。例えばどんな強大な敵が現れようとも、自分さえいれば蹴散らせる……それほどの強さが欲しい。

（このまま、最大MPが伸びないのだとすれば……やっぱり、道具に頼るしかないのか？）

流石に、今すぐに解決出来る問題ではなかった。

「フッフ……」

アクセルは軽く息を吐きながら、身を翻しつつ、後ろ回し蹴りを行う。天井から吊した木切れに当たり、コンツと小気味良い音が響き、揺れる。

地下浴場の隣は、地下鍛錬場として整備されていた。

「……………今のも、違うか」

他には誰もいない。独り言の相手は、自身の魔力……………精霊だった。

独自の近接格闘術を編み出す上で、アクセルが重視したのが“土”と“水”だった。“土”で拳を強化し、“水”で体運びをして威力を乗せる。例えを用いるなら、いずれ自分の打撃を、“水銀の鞭の先に鉛玉を付けたような”ものになりたい。

精霊に尋ね、調節し、精霊の好みに合わせていく。文字通り、自然なフォームを作り出そうと模索する。

だんだんと、動きの無駄が削ぎ落とされていく感覚は……………勘違いであって欲しくはない。

何度か試している内に、確かに、全ての歯車がガチリと噛み合ったような快感を覚える……………そんな動きが、出来る時がある。

その快感を、もう一度得たくて。あの高揚が欲しくて。

何度も何度も、繰り返した。

自分自身へのヒーリング能力が上がるにつれて、少々無茶な鍛錬も行うようになった。

正拳突きと同じ要領で、但し、拳ではなく平手で。藁袋の中に小石を詰め込み、そこに突き刺すようにして……………確か、貫き手という技だった筈だ。

はつきり言わなくても、痛い。爪が割れたり突き指、骨折は当たり前で、酷い時には折れた骨が皮膚を突き破ったりと、かなりグロテスクなことになった。そりゃ独歩ちゃんだって、指を切り落としたくもなるなあ……と、納得する痛みだったが、我慢できるまで続け、我慢できなくなったらヒーリング、というのを繰り返すうちに、更に治癒の腕前は上がり、最長でも五分ほどで完治するまでになった。

我ながらよく続くなあ、とも思うが、やはり、どんなに痛くてもどんなに酷くても、ヒーリングをすれば絶対治るといふ安心感が大きい。そうでなければ、きっと正拳突きの時点で投げ出していただろう。

流石に周囲にバレるわけにはいかないので、程々にしておいた。

隣の浴場で軽く汗を流し、再びアリスとなる。アクセルであることを隠すのなら、異性の方がいいと思ったので、最近ではベルよりもアリスの姿にお世話になっていた。

地下から出ると、バルシャに声を掛けられた。

「アリス殿。魔術書ですが、手に入れたものはお部屋に運んでおきました」

「あら。ありがとうございます、バルシャさん」

「いえ。それでは、失礼します」

本当に有能な男だと思う。それでも、バルシャのボスは、彼の能力を人の下に立つ者の能力と判断したのだろう。

あまり表情も変わらず、無愛想だが、よく働いてくれるし、真面目。既に、ファミリーにとって無くてはならない、中心人物の一人

だった。

魔術書は、行商人や他の領土からかき集めたもの。様々なルートを通じて、手に入るだけ手に入れた。勿論、噂など立たないように注意を払いながら。

何とかしなければいけないのは、マチルダとティファニア、ミシエルに施された、声を奪う術。

（まったく、便利な術だ）

メイジにとっては、ただ喋れなくなるだけではない。最大の拠り所である、魔法を封じられるという呪い。

ナタンの寝室の隣に作られた、アクセル用の部屋。戻ってみると、木箱が二つほど、部屋の隅に置かれていた。

早速開封して中身を取り出し、テーブルの上に積み上げ、その中から水系統に係るものをベッドの上に分けると、早速表紙を捲った。

最初は、周囲の音を消し去る風系統の“サイレント”の応用かと考えた。が、サイレントの魔法は、基本的に術者の周囲の音を消し去るもので、対象を設定するようなものではない。自発的にサイレントを行っている、と言うか行うように呪いをかけられている、としても、マチルダとミシエルならともかく、虚無の系統であるティファニアが使える筈もない。

次に考えたのは、水系統の禁呪“ギアス”。対象に制約を強制する魔法。流石に禁呪だけあって、その名を言及する書物すら殆ど無い。だが、あれは確か、条件発動型のものだった……ような気がする。いや、単純に“声を出してはならない”というギアスなのか。

しかし、発動時に目に魔力の光が現れる筈であり……それも、完璧なギアスなら現れないのだが。どうも、声を封じるといふのは肉体的なものであり、水系統による精神的なものではない気がする。声を出そうとする意志を封じるものなのか。とにかく、ギアスについて詳しく解説した書など、早々手に入るものでもないので、保留としておくしかない。

(……でもなあ)

ギアスが禁呪だとすれば、たかが奴隷の呪いなどに使用される筈もないのではないか。もし習得していることがバレれば、間違いなく罰を受ける。

三人を連れて来た奴隷屋を辿ってみたが、収穫は無かった。何でも、近年ガリア周辺で密かに流行し出したマジックアイテムを使うそうなのだが、その制作者の名は不明。手掛かりは途切れていた。そもそも、メイジが奴隷にされるなど滅多にないので、需要が多いわけでもなく、流通量も極僅かだ。

「……ふう」

一冊、一通り目を通したところで、畳んだ。今回手に入れたものと、事務所の中の書庫とを再び併せて、また考えてみなければならぬ。

それに、マチルダにはあと十年で、トライアングルクラスにまで成長して貰わなければならない。今のランクは不明だが、早めに声の問題を解決しておきたかった。

ヴァイオリンを手に、部屋を出る。前世ではせいぜい、ピアノで猫踏んじやった高速演奏しか出来なかったが、これも母親の情操教



育の賜物というヤツか。弾けるようになれば、なかなか楽しいものだと感じた。

時刻は既に正午近い。娼館の中庭、日当たりの良い岩の上に腰掛けて、得意な曲を弾き始めた。

まだ眠っている娼婦もいるので、控え目な、柔らかな曲を選ぶ。演奏を始めると、身体の周囲の精霊達が、嬉しそうに流れ出すのを感じた。普段お世話になっている彼等への、感謝の気持ちも込めている。

何人か、娼婦達が手すりに寄りかかりながら、演奏に聴き入っていた。

奴隷奴隷と言っているが、それは正式名称ではない。いや、書類上は、奴隷など非人道的なものは存在しないことになっている。

彼等が売ったのは身体ではなく、あくまで“労働力”。奴隷一人一人は、正式な労働契約を結んでいるのだ。しかし“労働力”を發揮して貰うには、彼等の“肉体”が必要不可欠なので、仕方なくおまけの肉体ごと管理している……と、表向きにはそういう理由になっている。

奴隷を禁止する法も、法律の隅っこには一応あるが、事実上何の効力も發揮していない。

本格的な奴隷禁止が謳われ出すのは、このままだとまだ何十世代と先のことだろう。いや、もしかしたら永久に来ないかも知れない。奴隷は奴隷として生きていくしか道はなく、社会も、奴隷抜きでは考えられない。

(……あのお爺さんの言っていたことも、よく分かる……)

奴隷が必要不可欠な社会でありながら、奴隷がいなくなれば、世紀末の世が訪れるだろう。何の制御もルールも無い、文字通りの弱

肉強食の世が訪れるだろう。

それを、当たり前のことだと、どうしようもないことだと、他に答えなどないことだと……そう考えていながら、理解していながら尚、奴隷を必要とする世界に怒りを抱く。踏みにじられる人々がいることに、怒りを抱く。

(……せめて、俺の手の届くところまでは)

奴隷に、完全な奴隷となって欲しくはない。そう、ジョジョ五部の台詞を借りるならば、“眠れる奴隷”でいて欲しい。

希望を失った人形となったとしても、その人形に、怒りを忘れな  
い人間の姿を見ていて欲しい。その人間の、怒りの火炎に照らされ  
ていて欲しい。

アクセルが思い描くのは、ナタンの姿だった。

(俺じゃ、無理だなあ……)

自分が死にたくないから。少しでも安心して生きていたいから。  
アクセルの行動理由は、それが全てだった。

(……過ぎた仲間を持ったもんだ)

アクセルの中でも、ナタンは大きな存在となっていた。値踏みし  
ていたあの頃とは違い、今では、尊敬の念すら持っている。

(まあ、それを表に出すことは無いだろうけど)

少し心配していた、娼婦達の反乱も、今はまだ特に無かった。  
アクセル自身、娼婦を奴隷と考えていた面もあったが、彼女たち

の明るさ……というか活力は予想外だった。奴隷として娼婦として売られて来て、明らかに気持ちが悪んでいる娘もいたのだが、殆どの娘がすぐに元気を取り戻していた。覚悟を決めた女は無敵だそうだが、なるほど確かに。腹の据わった彼女たちは、笑顔で客に接していた。

（強いなあ、彼女たちは）

女装は出来ても、勿論心まで女にはなりきれない。永久に理解できないであろうその強さに、畏敬の念を抱く。

「ん？」

そろそろ昼食だ……そう思い、曲を終わらせ振り向くと、ティファニアがいた。

流石に耳を露出させてはおけないので、耳の大部分が隠れる、獣耳をモデルにした帽子を作り、常に被らせている。そろそろ暑さが厳しくなっていくので、もっと涼しいものを考えねばならない。いつの間にか来ていた少女は、演奏に聴き入っていたらしい。立ち上がると、左手を握り、引っ張った。

「ああ、お昼ご飯だね。呼びに来てくれたのかしら？」

軽い微笑に、満面の笑顔を返してくれた。

（ああもう、ほんっと可愛いなあ……）

たまらない気持ちになり、ティファニアの頭を撫でる。

二人並んで厨房に行くと、マチルダやミシエルたちが調理器具を用意していた。

「さて。それじゃ、始めましょうか。今日は……ローランさんから、お野菜を頂きましたし、シチューにしましょう。ミシエルは、お鍋の準備を。マチルダは、お野菜をお願いします。テファちゃん は、一緒にミートボールを作りましょうか」

料理のスキルは、覚えていて損はない。特に、この三人は貴族の娘だったので、包丁すら握った事が無いようなお嬢様ばかり。

( やっぱ、女の子の手料理も食べてみたいしなあ )

メイドの筈のリーズも、料理は出来なかった。どうやら料理というのは、貴族にとって比較的下等なスキルと思われるらしい。

「しっかし、何でも出来んだな、お前」

仕事が一段落したのだろう、ナタンが厨房の入り口でアリスを眺めていた。

「お兄様もやってみたら如何かしら？」

「いや、俺は食べるの専門だから。やっぱ、家でも料理とかすんのか？」

「うーん、お菓子作りが主ですわねえ」

「もうお前、女として生きてほしいんじゃないの？」

「声変わりするまでは、そうしましょうか。……あ、マチルダ。入れるのは硬いお野菜からにして下さいね」

料理が出来れば、ナタンにも手伝わせて、テーブルに食器を並べる。その頃には、鍛錬していたアニエス、そしてバルシャも集まってきた、皆でテーブルを囲んだ。

「始祖ブリミルよ、以下省略致します。それでは、頂きます、と」  
「毎度のことだが、ブリミルが可哀想だ」

あの、食事前の長ったらしい台詞も暗記させられていたが、アクセルはあまり使う気にはなれなかった。いただきます、だけでいいのではないかと。

「ところで、バルシャさん。大衆浴場の件ですが」

「順調です。あと三日ほどでオープン出来るかと」

「その近くに、屋台村でも作りましようか」

「屋台村？」

「ええ。お風呂でさっぱりした後、冷たい飲み物やお手軽な食べ物などを、気軽に楽しめる場所。廃材を再利用して、出店を作れば」

「……なるほど。特に料理修行が必要ないものなら、すぐにオープン出来ますし」

「お兄様はどう思われます？」

「そうだな。これから暑くなるし、外で涼みながら、つてのもいいかもな」

「では早速、暇そうな人達を集めましようか。出来ることなら、大衆浴場のオープンに合わせ……？」

そこまで言いかけて、アリスは隣を見た。ティファニアが、咎めるような視線を向けて、くいくいと袖を引っ張っている。

「……ああ、そうですね。確かに。ごめんなさい、お行儀が悪かったですね」

「どうかしたのか？」

「いえ、ティファが……ご飯中に、お仕事の話は止めなさい、と」

「お、おう、確かにそうだな。すまねえな、テファ」  
「申し訳ありません」

アリス、ナタン、バルシャの謝罪に満足したのか、ティファニアは再び笑顔になってくれた。

既にナタンも、エルフがどうのこうのとは言わなかった。少なくとも、この少女に関しては。こんな小さな女の子を怖がるのが馬鹿馬鹿しくなったのか、家族の一員と認めたからなのか。

食事が終わりにかけた頃を見計らって、アリスは厨房へと入る。用意していたデザートのカークを切り分けると、テーブルへと運び、それぞれ小皿に取り分けた。

「ほら、バルシャさんも取って下さい」

「しかし、貴重な砂糖を自分などに……」

「頭を使う人は、もっと砂糖を取るべきですわ。と言うわけで、はいもう一つ」

「そ、そんな」

「ベル君。バルシャさんはケーキが嫌いらしいし、私が食べてあげよう」

「ほら、バルシャさん。隣の餓鬼に奪われちゃいますよ？」

「餓鬼!？」

「と言うことで、ミシェルとマチルダにも二つずつ。テファにも二つ」

「おいっ、おかしいだろう!？ 何で私だけ一つなんだ!？」

「おう、アニエス。心配すんな。俺も一つだ」

「お兄様もアニエスも、あんまり頭使わないじゃないですか」

食事を含めて、昼休憩は通常二時間としている。マチルダやミシエルには、その後も少し書類仕事をして貰ってるが、昼寝するティファニアが起きて一人だと寂しがるので、相手をするように言っておいた。

「それでは、お兄様。参ります」

「おう。いつまでも斬られてはっかだと思っなよ？」

初めの頃は悲鳴と絶叫ばかりだったナタンも、今ではアクセル流に慣れていた。抵抗を諦めた、とも言える。

勿論、いつも付きつきりで修行を見ているわけではないが、やる度に確かに、少しずつ成長していつてるのを感じられた。

アリスが持つのは長剣。ナタンの両手には、それぞれ剣が一振りずつ。

以前ドリユーブが雇ったメイジを相手にしたが、結局飛び道具を持たない平民は、接近して魔法を使わせないのが基本となる。それならば、両手に剣を持って素早く振り回した方がいいのでは……とそれはナタン自身の考えだった。

「あれ？　そう言えばお前、杖を持ってない時でも魔法使ってた？」

「ああ、指の骨を杖にしてるから」

ナタンにそれを教えた時には……そして、どんな方法を使ったのかも教えた時には、すごい顔をされた。それからは、剣の傷も魔法の傷も、どうせヒーリングで治せるしと、開き直って剣と魔法で相

手をしている。

「がつ、畜生！」

容赦なく傷つけられ、ナタンの服は見る間に真っ赤になっていく。その為に、修行の時はいつもボロ服だった。傍目から見れば、なぶり殺しにされているのと大差ない。

そして、本日の修行も終わりかけた時。

片方の剣を投げつけられ、それを弾いたアリス。が、既にナタンは接近しており、振り抜かれたもう片方の切っ先を避けられず……。

「っ！！」

アリスの脇腹が裂け、ワンピースが血に染まった。

「……………いよっしやあああ！！」

剣を掲げ、歓喜の雄叫びを上げるナタン。彼自身、既にボロボロで傷だらけだが、最早大概の痛みでは動じなくなっている。

「……………あ……………」

一頻り喜びを噛み締めた後、彼は漸く、マズい事態ではないかと思いついた。

脇腹の傷に手を当てるアリスは、俯き、だらりと剣を下げている。

「……………強くなりましたね、お兄様」



てつきり報復の攻撃が来るものと身構えていたが、アリスは年寄りじみた口調と共に微笑んだ。

「お、おう。まあな。……その、何だ。傷は……大丈夫か？」

「ええ、勿論。この程度なら、もう治りました」

アリスはそう言って手をどけると、傷のない肌を見せる。

「……まさか、これほど成長するなんて。嬉しいです」

「そ、そうか？」

「ええ」

ズシャッ

「だがあああ！？ きつ、斬られ！？ 何で!？」

「いえ、お気に入りの服だったもので、つい」

「んなもん着てんじゃねえよ！」

ナタンの成長速度に比べて、アニエスのそれは、実にゆつたりとしたものだった。

なので、アニエスには他の技も練習させている。

「……おい、ベル君。こんなのが役に立つのか？」

口ではそう言いながら、彼女は手を休めない。ヒュンツと小石が放たれ、木にぶら下がった的に当たった。

「今はアリスですよ、アニエス。……投石は、非常に役に立つ技術です。何しろ、石ころさえあればいくらかでも攻撃出来るんですから」

「こんなものより、早く剣術を覚えたいんだが」  
「別に、剣術である必要はありません」

アニエスは未だ、自らの過去について話さない。

ただ、幼い頃から孤児で、その孤児院から脱走し、一人で生きていくために傭兵になろうとした。

アニエスはただ、強くなりたいとしか言わなかった。

「要するに、メイジにも勝てるくらいに強くなりたいんでしょう？」

「まあ、その通りだが」

「戦場で一番多く人を殺すのは、魔法や剣ではありません。矢と石と……最近では、銃ですわね。バルシヤさんは弓の名手ですが、彼も最初は、投げた石を的に命中させるところから始めたそうですわ。そして実際、彼はメイジを倒しています」

「……じゃあ、私も弓を使えるように」

「それはお勧めしません。勿論、弓術の練習は役に立ちますが、それはあくまで、いざという時の奥の手におきなさい。貴女が殺し合いの場に立つ時、装備すべき武器は剣、それに銃、といった所でしょうか」

「その二つがあれば、メイジも殺せるのか？」

「勿論、使い次第ですが。貴女は成長期、修行に専念すべき時期なのです。そして私の指導を受け続けるのなら、今すべきは持久力の向上、投石術の修行……それに、最低限の筋力を付けること」

「……わかった。やるよ。やってやるさ」

「あとは、お勉強ですわね」

「そ、それは別に必要ないのでは……」

「必要です」

「……絶対に？」

「絶対に」

夕食の時間が近づくと、娼館の方も賑やかになってくる。

特にアクセル……と言うか、ベルやアリスが必要になることも無くなったので、アクセルは書類仕事や見回り、趣味、鍛錬などに精を出していた。

賭場も開設し、人の入りは上々。爆発的に、ではなく段々と順調に、東地区を訪れる人々は増加していった。既にかつての掃き溜めの面影など見当たらず、歓楽街として、近隣の土地にも名が知られ始めている。

それにつれて、利権を狙う輩も流入してきているが、今のところはバルシャ達が対処していた。しかし、これから先更に発展していけば、強大な武力を持つ者たちも出てくるだろう。それが平民の破落戸ならともかく、メイジなら……。

(もっともっと……力を蓄えないと)

夕食は、昼の時と違い皆の予定が合わないことも多いが、それでもなるべく一緒に食べるようにしている。

家族だから……そんな理由もあるが、それよりもアクセルが重視するのは、皆の料理のスキルアップと生活習慣だった。

穀物、野菜、魚、肉、更には魚介類や海藻まで、なるべくバランスの良い食生活をさせるようにしている。米は、レオニー子爵領クルコス街の行商人から手に入れたので、それを増やすように試験農場に命じたが、残念ながらいつ頃安定供給が出来るのかわからな

い。ともかく、出来るだけ多くの種類を、栄養のバランス良く摂取させる。健康と、それに美容のために。原作キャラの女の子達は、放っておいても美人に育つのはわかっているが、それでも更に美人に育てたいと思ってしまふのは、女装するようになってからだろうか。

「テファ、頑張つて。残さず食べたら、今日は絵本、二冊読んであげるから」

人參に悪戦苦闘する少女……ここで叱るべきかも知れないが、そんな事は出来そうになかった。叱るつもりでも、ついつい顔が蕩けてしまふ。ミシエルも生野菜が嫌いなようだが、いつも我慢して、残さず食べてくれた。アニエスは特に好き嫌いが無く、何を食べさせてもおかわりを要求してくる。

この三人はともかく、アクセルを常々驚かせるのは、マチルダだった。

「……………」

妹分のティファニアが、我慢しながら人參を頼張るのを横目で見ながら……未だ決心がつかないのか、自分の皿の上に取り残されたハシバミ草の揚げ物を見つめている。

ちらり、と、マチルダが恐る恐るアクセルの目を見た。怒られないかと不安気な表情に、アクセルは微笑を返す。

驚きの原因は、やはり、原作のフーケを知っていることだろう。世の中の裏を見てきた、姉御肌の女性……もつとも今は、この前まで貴族の箱入り娘だったお嬢さんなのだが、あのマチルダがこんな顔をするのに、彼女には悪いがたまらなく萌えた。

ハシバミ草の栄養など知らないが、良薬口に苦しと考え、なるべく苦みが消える調理法を研究した。その成果が、この揚げ物で、ハシバミ草嫌いへの特効薬なのだが……唯一マチルダだけは、まだ苦みが気になるらしい。

「……………」

フォークで刺し、口に運ぼうとして……また皿に戻す。そして時折、ちらちらとアクセルの顔色を窺う。

(……可愛すぎるぞ畜生がああ!)

微笑の裏で悶絶しそうになったりするのも、一度や二度では無かった。

「……………」

くい、と、ティファニアに袖を引かれた。少女はこっそり、マチルダの方を窺いながら……繰り返し、袖を引っ張る。

少しの間考えたが、やがて、要求しているのだと気付けた。

(え? まさか……そういう事? だったら俺、もう死ぬぞ。萌え死ぬぞ?)

暫く黙っていたアクセルは、そっと、マチルダの名を呼んだ。彼女は肩を震わせて、こちらを向く。

「さあ。さっさと食べて、今日はみんなと一緒に寝よう?」

一瞬の後、意を決して揚げ物を口に放り込み、ぎゅつと目を閉じて噛み砕いたマチルダに、アクセルは思わず顔を背けた。

食事の後は、地下の大浴場で風呂に入る。

体臭を消すために香水を使うなど、認めない。認められない。アクセルは皆に、毎日風呂に入ることを推奨していた。

「ん？ ま、またか？」

若干戸惑ったような声を出しつつ、アニエスは風呂の中に入る。しっかりと、タオルで身体を隠して。

「はい、流すよ。ざばー」

アクセルは椅子に座り、ティファニアの泡だらけの髪を洗い流していた。

流石にもう、石鹸をそのまま使うということはしなかった。女の子がいる以上、シャンプーを作り出そうと研究し、植物の汁や、海草や香草から抽出したエキス、それに臍気な知識から、椿油やオリブオイルなどを使うことも考え、自らの髪で実験、水の精霊の助言を得つつ、遂に試作品を完成させ……そして、それを使っている。洗い方にも気を配る。爪を立てず、指の腹でマッサージするように、しかし風邪を引かせないように手早く、迅速に……。

(……前の世界から好きなもの持ち込んでいいよー、って言われ

たら……今なら迷い無く言える。高級なリンスが欲しいと)

ティファニアは両耳を指で塞ぎ、口をしっかりと閉じ、目をぎゅつと瞑り、泡を流して貰った後、ぷるぷると頭を振った。

(もうね、この可愛さだけで、飯が食える)

頭にタオルを乗せてやりながら、アクセルは必死で微笑を保とうとする。

「ベル君。何と言うか……あまりにも堂々としたスケベ行為だと思わないか？」

「え？ 何が？」

同じように、ミシエルとマチルダの髪も洗いながら、アクセルは半ば本気で尋ねた。

アクセルは一応、腰にタオルを巻いているが、他の三人の少女は特に何も隠してはいない。

「……三人の裸の女の子に囲まれて、随分枯れた反応だね」

「あー……うん」

「……。ベル君、ベル君。ほら」

「え？」

アニエスはタオルを少し緩め、ちらりと、膨らみかけた乳房を露わにした。

「……さあ、風邪引かないうちに湯船に」

「おねえさんの色仕掛けが通用しないだ！？ ベル君っ、前々から思ってたんだがなっ、男としてどこかおかしいと思うぞ、その

反応は！」

「あー、はいはい。とりゃ、お返し」

「きゃっ!?!」

立ち上がり、腰のタオルを取り去るアクセル。思わず女言葉に戻るアニエス。

「ほら、ね？ 勃つてないでしょ？」

「……だ、大丈夫なのか？」

「大丈夫って何だよ！？ 勃つ時は勃つんだよっ、ちゃんと！」

「いや、今の状況は勃つ時だと思っただが……ベル君の将来が心配だ」

「あのねえ、僕はまだ九歳なんだよ？」

「すまないが、信用できない。ナタンも言ってたよ、“あいつ絶対俺より年上だ”って」

実はアクセル自身、密かに悩んでいたりもする。

前の世界では、警察に調べられたらアウトな動画をオカズにしたりもしていたが……今のマチルダやミシェルやアニエス、そして勿論ティファニア相手には、ついに欲情はしなかった。恐らくは父性本能が芽生えたからだろうし、そうでなければ困る。

それにきつと、九歳ではまだ身体が性欲に目覚めていないからだと、自らに言い聞かせていた。

「止めて〜くれるなと〜、袖を〜振って〜」

大浴場の扉が開き、ナタンが入ってきた。

「うわぁ?!」

「何してんだ、アニエス？ 隠すほどの身体でもねえだろうに」



ナタンが慌てないのは、アニエスを完全に妹として見ているからだろう。慌ててタオルを直そうとする彼女を笑い飛ばしながら、鼻歌交じりに湯船に向かう。

「…………え？」

そして、湯船に入っている四人の顔を見て、固まった。

「ほら、ナタン。湯船に入るのは、身体を洗ってからだって言うただろ？」

「あ…………ああ」

アクセルの注意を、どこか上の空で聞き流しながら、ナタンは慌てて腰のタオルに手をやる。そして洗い場へ向かおうとするが、それをアクセルが呼び止めた。

「ナタン、どうかした？ ……何で前屈みに？」

「い…………いや、何でって、そりゃ…………」

ナタンが振り向いた時、全員沈黙した。

別に、タオルの締めが緩かったわけではない。にも関わらず、内側から、押しのけられるようにして、タオルが床に落ちた。そのまま引つかかってくれれば、まだダメージが少なかったかも知れない。

「…………でかあっ！」

思わず叫んだアクセルの両手は、既にティファニアの両目を覆い隠していた。

ナタンは慌ててタオルを拾い上げると、股間の天を衝くドリルに

被せる。そして、大浴場の入り口に向かって走り出した。

「待て、ナタン！」

ティファニアの目を隠したまま、アクセルが叫び、ナタンは思わず停止する。

「別に、そうなったことを責めるつもりはない！ 男なら当たり前の生理反応だとも思う！ しかし、そうなったことは仕方なくても、そうなった理由は重要だ！ 一つだけ答えるんだ！ …… テファじゃないよな!？」

「ちっ、違う！ それだけは断じてない！」

「なら良し！」

「えっ、いいのか!？」

アニエスが二人を見比べる中、ナタンは大浴場から逃げ出した。

美容のため、歯磨きをさせた後は、日付が変わる前に皆を休ませる。

「そして、その王女様は、コインを湖の底へと投げ捨てました…」

絵本の原作者は、アリス・ムーンライト。もともとはアクセルが、前世で見知った物語を忘れないように、また忘れていても適当に繋げたり改造したりして、紙に綴ったものを本にした時、偽名を使っ

たのが始まりなのだが……今ではこっそりと、街中の書店に置いていたりする。ムーンライトの由来は、子どもにベッドで聞かせるよ  
うな話が多かったのだ。

ベッドを二つくっつければ、子ども四人くらいは楽に寝られる。  
本を広げるアクセルの左隣にミシエルが寄りかかり、ティファニア  
を抱えたマチルダが右隣に。

部屋にはただ、アクセルの声だけが響いていた。

「……おしまい。さあ、寝ようか。お休みなさい」

二冊目の本を積み、枕元に置く。そろそろ眠くなってきたのか、  
ティファニアが大あくびをした。

「……………」

三人が寝静まった頃、アクセルはそつと、服を握るティファニア  
の指を解き、身体の上を通るミシエルの腕をどけて、ベッドから抜  
け出す。そしてこっそりと部屋を出て、地下に向かった。

「『ライト』」

地下倉庫で、魔法の灯火を出現させる。倉庫の隅には作業場のよ  
うな場所があり、壁際には糞が並んでいた。

昼食時、屋台の提案をしたのは、地酒がようやく形になったから  
だった。

米が無い以上、日本酒は造れないが、ワインや蜂蜜酒の作り方を  
知り、要するに糖分さえあればアルコールを足せば何でも酒になる  
のではないかと考え、実行に移した。映画『大脱走』で、ジャガイ

モノの酒を捕虜達が造っていたので、不可能ではない筈だ。勿論、麹や酵母とかそんなものについては知識がない為、手探りでやった所、強い酒が出来た、くらいにしかわからないが、それでも珍しいものなので売れるだろう。屋台で試験的に売り出してみても、イケそうな研究者を増やし、品質を向上させ、娼館などでも扱ってもらうのだ。

この世界の酒は、ほとんどがワイン、次に麦酒であり、他は蜂蜜酒やラム酒など。

(この芋焼酎もどきは……ポテト……だから……ポテロックでも名付けるか。蜂蜜酒は、そのままでもいいし。いや、そう言えば、蜂蜜酒はハネムーンの語源だったな。だったら、ただの酒と言うより、滋養強壯の妙薬として売り出すか)

蓋を開け、ちびちびと味見をしながら、思考を巡らせる。

(とりあえず、暑い時期の商品だな。氷が欲しいけど、メイジを使ったとしても高くつくし、目立ちすぎる。……テルマエ・ロマエみたいに、牛乳を売り出したいけど、それも瓶が高くつきそうだ。大衆浴場なんだから、出来るだけ安くしたいし。まあ再利用すればいいか。利益は、周囲の店で出せばそれでいいか。……高級浴場は、はっきり言って風俗店みたいなもんだしな。……いやそもそも、大衆浴場にちゃんとお客さんが来るかどうか……)

コップを机に置きながら、首を振った。

前世では未成年のまま死んだので、ビールやチューハイを軽く舐める程度にしか経験しなかったが、あのまま成長すればきつと泣き上戸になっていただろう。少し酒が回ってきたのか、思考がネガティブへと傾いている。

(……もう、暗く考えるのはやめだ。失敗したら失敗したで、ま

た他を考えればいいじゃないか)

そういう風に自分を励ましても、やはり心配になり、アクセルは木切れの入った箱をひっくり返した。

あの四つの祭壇を作った時から、彫刻も趣味になった。ナイフや彫刻刀で、不要になった木切れを削り、装飾を施す。前世でも工作の授業は楽しみだったので、色々試しに作ってみたりした。

薄く削り出し、大きさを揃えて並べ、錬金で作り出した金具で端の一カ所を固定する。もう一方の端には紐を通し、余計に広がらないようにする。

完成したのは、木製の扇子だった。風呂上がりに、涼むための。それらを十個ほど作り出したところで、だんだんと気持ちが悪く落ちて着いてくる。

(……寝るか)

気付いたら、日付が変わっていた。工具を片付け、灯火を消し、階段を上がる。

娼館はいよいよ賑わっていて、中庭から見回すと、ほとんどの部屋に灯火があった。

(その前に、ちょっと見回るか?)

腕に巻いていたバンダナを、頭に被る。そうして下働きの少年べルに化けると、アクセルはそっと娼館の壁を飛び越えて外に出、壁伝いに正面へと回った。

『イシユタルの館』……そう名付けたのは、アクセルだった。皆

には、東方に伝わるとされる娼婦の守護神と誤魔化している。

建物は四階建て。防音も考慮した、頑丈な造りのもので、ホテルを真似たような間取りになっている。食事も出来るし、金次第で連泊も可能。

吉原か祇園を参考にしようと、そう思った。ただの娼婦ではない、男を癒す女神達。流石に女神という名詞を使えば角が立ちそうなので、表立ってはレディを付けている。性交だけの場所ではなく、唄や踊り、そして遊戯など、あらゆる交流がなされる。

彼女たちは、諜報員としての顔も持っていた。訪れた男たちとの会話は、最終的に事務所へと伝えられ、それを整理して有益な情報へと仕上げる。得意げに語られる成功や、恨み言、愚痴、噂話……女の前では男達の口は軽くなり、あらゆる情報がもたらされ、今ではその整理が追いつかなくなっていた。

完全な娼館と言うより、それにキャバクラを混ぜたようなものだろうか。

「やあ、バルシャ」

「え？ あっ……………ベルさん」

正面の門の近くに、バルシャがいた。最近アリスでいることが多かったからか、彼は少し沈黙した後、ようやく少年の呼び名を思い出した。

アクセル自身、三つも名前があるのはややこしいと自覚していたが、今のところ改めるつもりはない。

「さん付けじゃなくて、呼び捨てだつてば」

「あ、ああ。そうだったな、ベル。夜の散歩か？」

「うん。少し、寝つけなくて。何か問題とかあった？」

「いや、特に。強いて言うなら、破落戸どもが利権の一部を要

求してきたが、それはいつものことだ。お引き取り願ったんだが、その頃にはてめえの足じゃ歩けなくなってたんで、他の奴らが捨てに行ってる」

「そうか……。ありがとう」

「いや、仕事だからな」

「明後日は、この館も休みになる。明日のパーティーは、楽しみにしてくれよ。とっておきの酒を出すから」

「ああ、わかった。他の奴らにも伝えておく」

正面の門を抜けると、人工池がある。『ベニティエ（シャコ貝）の泉』で、形もシャコ貝をモチーフにして、アクセルが自ら設計した。泉の中央には、背中から翼を生やした女神像。一応、イシュタルをモデルにして……と言うより、イメージして製作された、アクセル会心の像だった。だいたいの形に錬金し、あとは少しずつ削っていったので、それほど手間がかかったわけではないのだが。

中央のその泉を左右に回り込むと、いよいよ娼館の入り口が近づいてくる。

一階の入り口では、履き物を脱ぐのが決まりとなっている。そして受付を済ませ、絨毯敷の廊下を歩いていけば、宴会場や娼館事務室、倉庫、控え室、応接室、厨房などがある。また、老齡の客のために、人力で稼働するエレベーターも作った。

二階、三階、四階は個室で、客はそこまで上ることになる。そして上の階の個室ほど、値段は高くなり、女の子の質も上がる。基本的に、娼婦達には一人一部屋を与えており、まだ子どもの女の子は見習いとして、娼婦の弟子となり配属される。

勿論、この『イシュタルの館』で遊べるのは、それなりの金を持つ者だけ。この街の娼婦は全て取り仕切ることにしたのだが、そうやってくると金を持たない男達の相手をする者がいなくなる。ので、

『イシユタルの館』で働けるのは一定以上の水準の娼婦だけとし、その他は風俗店のように小規模の娼館を作り、それで需要を満たすことにした。

娼婦の元締めを全て潰したことにより、現在それらの管理を一手に引き受けるのは、ナタンの組織となった。娼婦達にとっては、上納金を支払う相手が変わっただけなので、働き場所が固定されるのも大した問題ではない。

しかし、街の中にはまだ何人か、商売を続けている娼婦もいる。そのことについての対応も、考えなければならなかった。

(さて……戻るか)

暫く泉の傍で建物を見上げていたアクセルは、遠回りに娼館を通り過ぎ、その奥の事務所の建物へと向かった。

寝室に戻った時、他の三人は目を覚ましていた。泣きじゃくるティファニアが腰に抱き付いてきて、アクセルは慌てて受け止める。

「ど、どうしたの?」

尋ねてみるが、ティファニアは顔を埋めたまま、両手でアクセルの身体を叩く。マチルダ、ミシエルの二人も、やがて両目を潤ませながら、左右から抱き付いてくる。二人とも若干アクセルより背が高く、埋もれる形になった少年は、部屋の隅で腕を組んで立つアニエスに目を向けた。

「ど、どうしたの? 何でみんな泣いてるの?」

「男として、嬉しい状態だろう?」

「冗談言ってるんで、教えてよ。アニエス」

「……そんなの、寂しくて心細くて不安だったからに決まってる



だろう」

何となくではあるが……アクセルにも、理解できた。

彼女たち三人は、声を封じられてる。一応、ミシエルとマチルダは筆談という最終手段を持つが、ティファニアは文字を知らず、それすらも出来ない。

誰も、彼女たちの素性など知らない。ただ、奴隷市場で買われた娘としか思わない。

しかし、ただ一人、アクセルだけがそれを知っていた。彼女たちがこうなってしまった理由を。勿論、彼女たちが教えてくれるまでは知らない振りを続けるつもりだが、それでも、やはり配慮した対応をしよう。

自分を裏切る筈がないと、信じられる者。彼女たちが必要とするのはそんな存在であり、アクセルは格好の立ち位置にいた。

「……ごめんね」

そう言いながら、ティファニアの頭を撫でる。

ふと、アニエスがこの場にいる事に疑問を持ったが……彼女たち三人に言えることが、アニエスにも言えることだと気が付き。

「ねえ、アニエス」

「ん？」

「折角だから、一緒に寝ようよ」

「な、何を馬鹿な。私は……」

「お願い。僕が、そうして欲しいんだ」

「……そうか。わかった。仕方がない、可愛い弟分の頼みだしな」

アニエスは持参した枕を持ち上げると、誰よりも早く、真っ先に  
ベッドに向かった。

## 第七話〈決意〉(前書き)

お陰様でPV50000超、ユニーク30000超です！  
皆様ありがとうございました！

## 第七話<決意>

次の日。

昨夜の大浴場での失態が、アクセルにどんな影響をもたらすのか……密かに震えていたナタンの元にやってきた少年は、明らかに悄然としていた。書類を整理していたバルシャも、心配そうにアクセルを見ている。

「おはよう、ナタン。バルシャ」

「お、おう」

「……おはよう御座います」

「気付いたんだけどさ……ここって、子どもの教育上よろしくないよね」

「「いまさら!?!」」

思わず二人は声を合わせた。

「……考えてみれば、ミシエルもマチルダもティファニアも、ついでにアニエスも、子どもなんだし」

お前だって九歳児だろう、とは、ナタンもバルシャも言わない。本当に九歳児だったとしても、二人ともそれを信じるつもりはなかった。

「今朝、わかったよ。僕が最低な人間だということに」

「……何があったんだよ？」

「少し寝坊してね。先に起きたテファが、飛び乗って起こしてくれたんだ」

「微笑ましいですね」

「その時……本人はただの真似っこのつもりなんだろうけど……僕の下腹部に跨って、上下運動を」

「うわぁ……………」

「しかも。気付いたら、勃ってた」

「……………」

アクセルは椅子の一つに座り込むと、溜息と共に天井を見上げた。

「……………」

「どうしようもねえだろ。つつつか俺は、そこら辺のことお前は承知の上で、ここに住まわせてんのかと……………」

「しかし、他に場所ありませんしね。テファの耳は勿論ですが……………アニエスともかく、他の三人は、明らかにアクセル様に依存していますし」

そう……………どうしようもない。

ティファニアがエルフであることを知るの、アクセル、ナタン、バルシャと、マチルダ、ミシエル、アニエス……………そしてローランの、七人。あとは、あの時奴隷競売に関わっていた数人。

女の子達……………特にティファニアは、この娼館の敷地から外に出たことは無い。今までは特に不満を言わなかったが、考えてみれば不満など表現しようが無いのだ。

（住居の問題は別として、もっと考えるべきだったなあ……………）

安心できる住まいはここしかない。そのことは仕方ないとして、ティファニアを遊びに行かせるなどという発想すら無かったのは、

大きな落ち度だと感じた。

「……バルシャ。少し時間を作って欲しいんだけど。ナタンも」

「あと十分ほどすれば、一段落しますが……。今日は、明日からの休業の為に縮小営業ですし、人手は少なくて済みます」

「よし。じゃあバルシャ、馬車の用意をお願い。ナタンは、仕事を片付けたら荷物運びを。僕は、厨房で料理」

「なあ、何すんだよ？」

「ただのピクニックさ」

ピクニックの行き先は、ゼルナの街を出て馬車で一時間ほど北西へ向かったところにある、清らかな小川だった。

「……よしつ、テファつ、網貸して！」

隣の小さな手から網を借り受け、アクセルは糸の先に食らいついた魚を掬い上げる。

「あー、やれやれ。何とか全員分釣れたね。よかったよかった」

帽子を外したティファニアに連れられ、皆が待つ、焚き火へと戻る。そして火の番をしていたナタンに手伝わせ、七匹の魚をそれぞれ串刺しにし、塩をまぶし、焚き火の周囲に突き刺した。ティファ

ニアがしゃがみ込み、興味深そうにそれを眺めている。

「おい、ベル君。これでいいか？」

「……うん、よしよし。あ、待って。これとこれ、毒きのこ」

「どこが違うんだ？」

「ほら、傘の裏。放射状に縦線が入ってるでしょ。モリルトキノコだ。食べると、数日は手足が痺れる」

「よく知ってるなあ、貴族のくせに」

「事務所の書庫に、凶鑑があるんだよ。……アニエス、ちゃんと読んでる？」

「いや、まあ……ボチボチとは」

アニエス、マチルダ、ミシエルの三人が集めてきたキノコや野草を、食べられるものだけより分け、シチューの中に放り込む。バルシャが馬車の中からワインやジュースを運び出し、七つのコップに注ぎ、配った。

「さて。それじゃ、初ピクニックに。かんぱーい」

車座に皆が座る中、アクセルは自分のコップを掲げた。

椅子も、テーブルもない。皆が皆、野原の上に座り込んでいる。

昼食は、釣った魚の塩焼きに、近くの林で採ったキノコ入りのシチュー、そして用意してきたサンドウィッチ。

「……なあ、バルシャよ」

頬杖をつき、アクセルと、その周りの少女達を眺めながら、ナタンは隣の男に声を掛けた。

「何でしょうか？」

「どう思う？ あいつら」

「あいつら……？」

「アニス、マチルダ、ミシエル、テファの四人だよ。俺の知る限り……ベルのヤツは、自分の利益を最優先するヤツなんだ」

「……………」

「あいつらは、もう俺の妹なんだ。邪魔に思ってるとかじゃねえぞ？ そうじゃなくて、ベルは何を考えて、あいつらを匿っているのか。マチルダとテファは、お前も知ってるだろうが、ベルが大枚叩いて買い取った。すぐにでも娼婦として働ける女か、すぐにでも荒事の頭数に入れられる男。本当は、そのどっちかを買うつもりだったのに……結局あいつは、幼い少女二人を買っただけだった。しかも、一人はエルフ。先住魔法が使えるってのなら少しは分かるが、喋れもしない。声の封印を解く自信があったとは思えねえ。まだヒントすら無えようだし、そもそもエルフだってバレれば、処刑されるに決まってる。帽子が取れて、あの耳を見た誰かが騒ぎ出しゃ、それで俺ら全員アウトだ。考えてみれば、慎重なあいつらしくない」

「確かに。現に今も、もし誰かが通りがければ、大騒ぎになる危険もありますし」

「ミシエルは、同じく喋れねえ。声を封じられてるってことは、メイジなんだろう。……そりゃ俺だって、あんな小さな女の子を殴るヤツは許せねえ。けど、あのまま娼婦の見習いさせてた方が、今の事務員見習いより、よっぽど稼いでくれたんじゃないかねのか？ 最後にアニエスだが、あいつへの対応が一番分からねえ。あいつだけは、奴隷なんかじゃなく、いつだって放り出せるんだ。頭がいいわけじゃねえ、腕が立つわけでもねえ。才能なんてなさそうなのに、ベルは衣食住も全部立て替えて、修行まで付けて……色々と面倒を見る。……俺が心配なのは、ベルがあの人を、一体何のために確保してるのかってことだ」

「……………単に、好みだったから……ではありませんね」

「ああ。あの四人に関しては、どうも……ベルの行動ってよりは、



俺みてえなタイプの行動なんだ。損得より感情を優先させちまってる、ように見える。あいつらしくない」

「……………」

やがて、長めの昼食が終わった。

「……………。さて、片づけは男どもでやろうか」

「珍しいな、ナタンがそんな殊勝なこと言い出すなんて」

食器や鍋の片づけを始めた、ナタンとバルシャ。

アクセルはティファニア達に、目の届かない場所に行かないように、誰か来たらずくにティファニアの耳を隠して知らせに来るように、と注意すると、二人に続いて、川の中へと入った。

三人で並び、食器を濯いでいると、ナタンが尋ねてきた。

あの四人への対応の理由を。

「……………」

アクセルは、暫し沈黙する。そして、洗い終えた皿を陽光に照らしながら、ぼつりと言った。

「実は、ね。僕の中では、あの四人とも、素性の見当はついてるんだ」

「え?!」

「…………?!?」

絶句する二人には構わず、少年は次の皿を手取る。

「まだ、何の確証もないし、はっきりしたことも言えない」

「……俺達に教えてくれるのは、はっきりしてから……か？」

「いや。もしもはつきりして、それが僕の予想通りなら、それこそ言えない」

「そこまで危険なのですか？」

「うん」

「四人とも、か？」

「そう」

その答えに、二人は更に疑問を感じる。それほどの重大な秘密を持つ人間を、四人も抱え込むなど、危険すぎる行為だ。

「まあ、危険だってことは百も承知さ。でも、野放しにしていたらそれこそ、とばっちりを受ける可能性もある。どうせ危険だってわかってるなら、積極的に関わろうと思っただ。せめて、自分の身を守るような力を持つまでは……僕は、あの四人を守るよ」

「……存在を知られる恐れがあるから、娼婦としては働かせなかつたんですか？」

「それもある。それもあるけど……。いや、それもあつた、か？」

「もう忘れたよ、そんなの。とにかく、ナタン、バルシャ。秘密ばっかりで申し訳ないけど、僕の考えに賛同して欲しいんだ」

「……ああ、そうだな。俺だって、可愛い妹たちを危険に晒したくねえし」

「私は元より、御意のままに」

その答えに満足したのか、アクセルは軽く笑みを漏らした。

娼館は、明日から三日間の休業に入る。

理由としては、色々。大掃除に人員配置の調整、書類整理など。あとは、意見の交換会。

しかしそれも、二日目からであり、休業前夜である今夜は、慰労パーティーを企画していた。

「……ねえ、テファ。そろそろいいか？」

アクセルの胡座の上に座る少女は、ぶんぶんと頭を振ると、絵本の続きを要求する。ちょうど第一章の終わりに来たので、切り上げようかと思ったのだが。

今夜の慰労パーティーには、子どもは出席しない。恐らく夜通しで宴会が続くだろうし、ミシェル、マチルダ、ティファニアの三人は、事務所で休んで貰うことになっている。アニエスには給仕を手伝うように言い付けてあり、そして企画した張本人であるアクセルは、パーティーが始まる前に、執政庁へと戻るようになっていた。

明日は、母親が待つ屋敷に戻る日なのだ。勿論、これが初めてではなく、だいたい一週間か二週間に一度のペースで帰宅している。この娼館に入り浸ることが出来ているのも、リースがアクセルの魔法の腕前にしか興味がない事他に、彼女が自分の代わりに仕事をしてくれているからでもある。そのリースの、休みの日でもあるのだ。

これからローランのホテルに戻り、着替え、いかにも彼のホテル

から戻ってきた、という体裁を整えておかねばならない。

「……………」

しかし、ティファニアはまだ、退いてはくれない。いつもなら、渋々とはあっても、手を振って送り出してくれるのに。何故か今回に限って、駄々をこねる。

「……まあいつか」

「お前ほんつと、テファには甘いよなあ……。いや……。俺以外には、か？」

隣には、アクセルが作った数学のドリルを前に唸るナタン。ティファニアのあまりの可愛さに、つい少年が漏らした言葉に、ふて腐れたように愚痴った。

「……さて、全部読んじやったね。じゃあ……」

机の上の本を、全て読み終えたら、今度はアクセルの胸にもたれてくる。そして少女は目を閉じ、静かに呼吸を繰り返す。

「……………」  
「……こら。こらこら。嘘寝だろう？ いけない娘ですねえ」

人差し指で頬を突き、脇腹をくすぐると、観念したように笑いながら身を振る。

（ああもう……ほんつと、一生こっしてたい）

思わず抱きしめると、ティファニアもぎゅっと抱き返してくれた。

しかし、確かに幸せだが、このままでいられないのも事実。あまり遅くなれば、誰かがローランのホテルまで迎えに来るかも知れない。

「……ねえ、テファ」

抱きしめたまま、そっと囁く。

「今日は、楽しかったね。みんなで外に出て、みんなで水遊びをして、みんなでご飯を作って」

小さな背を、優しく撫でた。

「……ごめんねえ」

その言葉に、ティファニアは小さな身体を離した。驚いた様子で、じつとアクセルの顔を見る。

「僕がもつと優秀なら、もつと自由に動けたのにねえ」

相変わらず優しい手つきで、アクセルは少女の尖った耳を撫でた。

「もつと優秀なら……みんなの、声だつて……」

すう……と、アクセルの下瞼から涙が流れ、頬を伝い、ティファニアは狼狽した。何気なく見ていたナタンも、啞然として口を開いている。

「あ、あれ？」

当のアクセル自身、突然溢れた涙に慌てた。

ティファニアもナタンも、今までアクセルの涙など見たことがない。ナタンなど、生まれた時も黙ってたんじゃないか、と考えていた。

怪我をしても泣かない。腹が減っても泣かない。寂しくても泣かない。感動の嵐を呼んだとか言われている小説を読んでも、感動はしてもやはり泣かない。

「……あーっ、と」

アクセルは袖で涙を拭った。見ると、つられてしまったのか、ティファニアまで涙目になっている。少女は表情を歪めると、アクセルの胸に抱き付いた。

涙の理由は、だんだんと自覚できた。自分の不甲斐なさだ。

声を封じるマジックアイテムが、どの程度のレベルのものなのか、それは関係ない。問題なのは、声を封じる、ただそれだけの呪いを解除できない、自分の力不足。

勿論、今だつて死にたくないとは思っている。強くなければ不安だし、得た強さを表に出すのも怖い。

しかし。

（たかが、原作に出てこない程度のマジックアイテム……そんなものくらい、もっと軽く、何とか出来ないのか）

マチルダも、ティファニアも、ミシエルも、三人とも大好きだし、大事だ。原作キャラがどうのこうの、ではない。日々の触れ合いの中で、もうそんな利害意識など、彼方へと度外視されていた。彼女たちを苦しめるものがあり、そしてそれを前にして何も出来ない

いう自分の不甲斐なさに、悔しさがこみ上げる。

「……大丈夫」

未だ、解呪の目途が立っているわけではない。  
しかし、やる。出来なくても、やる。やって見せる。やるしかない。

「絶対に、大丈夫だから……」

アクセルは目を閉じ、またティファニアの頭を撫でた。

「皆、よくやってくれた！ 客入りは上々だ！ 今夜は好きなだけ食って、好きなだけ飲んでくれ！ それじゃあっ、乾杯だ！」

最高責任者であるナタンの音頭で、飲み物を持つ皆の手が掲げられる。

娼婦達に、自警団メンバーや娼館の事務員……ナタンのファミリ―である者は、粗方が集められ、宴会に加わっていた。こんな時でも襲撃される可能性はあるので、警備のメンバーが交代で見張りに立っている。哀れなのは一番最後に見張りに立つ、酒が一杯しか飲めないチームだが、彼等には次の宴会でいい目を見てもらうことに

する。

アクセルが自作した酒は、なかなか評判が良かった。今までにない味で、しかも強い。ラム酒など、度数が50°を超えるものも存在するのだが、そもそもラム酒はこの世界で高級品であり、庶民がおいそれと手を出せるようなものではない。

勿論、酒税というものがあり、許可無く酒を造れば処罰されるのだが、許可を出す立場のアクセルが行っているものなので、実質的に問題はない。今の時点で皆が騒ぎ出せば問題になるが、そんな真似に走るような人間は、少なくともこの中にはいなかった。

皆が騒ぐ中、ナタンはそっと、隣のバルシヤに顔を近付け、先ほどのアクセルとティファニアの一件を伝えた。

「……そんなことが」

「ああ。まあ、俺はベルのこと勘違いしてたってことだ」

くるくると酒を揺らすその表情は、どこか嬉しそうでもあった。

「あいつだって、結構、情で動いてんだなあ。テファを買ったのだって、ただ珍しい物が欲しかったからかとも思ったが……あいつは、ただ単純に助けたかつたんだらうよ」

「……そうですね」

「いやあ、まあ、いい弟分と妹分を持ったもんだ」

既に酔いが回ってきているのか、ナタンは笑いながら膝を叩く。

「……。では、私はこれで」

「あ？ まだ大丈夫だろ？」

「いえ、少々酒乱の気がありますので」



「初耳だ」

バルシヤはすっと立ち上がると、宴会場を後にした。

通常の予定ならば、彼はあと一時間はあの場に居続け、その後表の見張りと交代するのだが……それは、咄嗟の判断だった。

宴会場を出て、更に厨房の裏口から娼館の外に出る。周囲は既に日が沈んでおり、微かに聞こえるのは騒ぐ従業員達の声。バルシヤは音を立てずに渡り廊下に飛び乗ると、そのまま前方の人影を追った。

近くの柱に取り付けられている、マジックランプの灯火。それによつて鮮明になった人影は、二十歳ほどの女。娼婦の一人だ。

外からの襲撃には十分備えてあるが、まさか慰労の宴会中に娼婦が抜け出し、立ち入り禁止の事務所側に侵入することは予想外で、見張りも二人ほどしか置いていない。しかもその二人は、主に脱走者が出ないかを見張っていた。

今までも、脱走者が出なかったわけではない。しかし、すぐに解決した。脱走を試みようとしたのは、まだ奴隷として売られてきたことを自覚していない者であり、外に出て、ここ以外に行き場がないということに自然と気付くと、自ら戻った。

バルシヤは、アクセルの密命を帯びていた。密命と言っても、タンに秘密にすると言うよりは、可能性の話なので、密かに警戒していた方がよい、というレベルのものだ。

事務所に侵入した娼婦は、階段を上っていく。そして廊下の角に身を潜めると、スカートの中に仕込んでいたナイフを取り出した。

中庭側の窓の向こうに、眠たそうに目を擦りながら歩く、一人の

少女がいた。トイレにでも起きたのだらう、ミシエルはずるずると足を動かしている。

娼婦はその姿を確認すると、また廊下の角に身を隠した。ナイフを構え、じつと、ミシエルが通り掛かるのを待つ。

(……有罪)

冷徹に判断し、バルシヤは娼婦の背後に忍び寄ると、左手で口を押さえて右手でナイフを奪った。こんな事態を日常茶飯事として処理するバルシヤに敵う筈も無く、娼婦は突然の襲撃に驚愕すると同時に、腹部をナイフの柄頭で突かれ、意識を手放した。

急いで階段の下へと娼婦を引きずり下ろすが、間一髪、ミシエルは気付くことなく通り過ぎていった。

(やはり、か)

『イシュタルの館』は、他にも娼館を知るバルシヤとしては極楽のようなものだった。

客の有無に関わらず、最低限の生活は保障されている。この娼館のみを使って私腹を肥やす、というわけではないので、娼婦達が稼いだ金は半分以上が彼女たち自身のものとなる。通常、娼館の主人などは、いかに女を効率よく使って利益を上げるか、のみを考えるものであり、それが普通なのだ。

彼女たちは娼館の持ち物であり、通常では外出など厳しく制限されるのだが、ここの娼婦達は営業時間外であれば自由に街中を歩ける。アクセルが付けた条件は、オシヤレをして出かけることのみ。これは、宣伝も目的としていた。

更にバルシヤが驚いたのは、娼婦達は、娼婦でありながら身体を開くことを強制されなかったことだ。客は娼婦を選んで部屋に入るが、娼婦もまた客を選ぶ。だからと言って、そのまま何もしなければ

ば、自由に使える金が手に入らない。娼婦達にはそれぞれ、奴隸市場などでの購入額が知らされており、その額と利子を払えば自分を買い戻すことも出来た。

バルシャが最も驚いたのは、それでも利益が出たことだ。

既に足腰も弱くなつたが、お気に入りの娘と一緒に風呂に入り、身体を洗ってもらえればそれで満足という、商家の隠居がいた。

時折襲いかかる死への恐怖を忘れるため、一晚中女に抱き付いて頭を撫でて貰うだけという軍人がいた。

大酒飲みの娼婦と、一晚中酒盛りをしてバカ話をして、翌朝颯爽と帰途につく、どこかの貴族であろうメイジがいた。

全ては、集められた女の質の高さだった。その形は数あれど、アクセルの語る“女神”に相応しい女達の……。

バルシャは腕の中で気絶する娼婦を見下ろした。

ミシエルを殺そうとしたのではない、攫おうとしたのだらう。女の懐には、ロープがあつた。彼女が喋れないというのは、娼婦達の中にも知っている者は多い。確かに、悲鳴を上げない者ほど攫い易い対象はないだらう。ということは、ティファニアやマチルダであっても、その対象となる。

そして攫う理由は、勿論人質とするため。ただの娼婦ではないが故に、人質としての価値も高いと思われたらしい。それは間違っていない。あの三人のうちの誰か一人でも誘拐されれば、アクセルは何としてでも取り戻そうとする筈だ。

では更に、人質とする理由は。この娼婦が、ただの金目的ならば特に問題はない。しかし、人質の対価として求めるのが、もっと大きなものであるなら。

(……この街の、裏の利権か)

組織が軒並み潰されたことで、東地区の最大勢力となったナタンのフアミリーは、実質的に裏の全てを支配するようになった。娼館も賭場も賑わいを見せ、大きな利益を上げつつある。手に入る可能性があるのなら、誰だって欲しがらるだろう。今までは簡単に対処できていたが、今回の相手は、内部の娼婦を味方に引き入れていることからしても、今までのそれとは違つと確信できる。

(調べてみる必要があるな)

折角の休みだが、バルシャにとつてそこまで惜しいものでもない。

(……この“炎”だけは)

今、彼は自らの内に、沸々と、熱を持ったものが沸き上がっているのを感じていた。

それを、彼自身は“炎”と表現した。

今まで、ただ命令に従うことが人生だった。そして、ナタンとアケセル……その二人に出会つてからも、それは変わっていない。しかし、いつの間にか、自分の中には“炎”が生まれていた。

(何だつて、出来そうな……そんな愚かな気持ちか……)

ともすれば、自らの能力の限界を超えたような力すら、引き出せるような気になつてしまう。

滑稽だと、愚かだと思つた。

だが、それが何とも心地よかつた。

(やらせは……しない)

翌日の昼過ぎ、アクセルは自分が生まれた屋敷に戻った。母親や執事、メイド達に挨拶し、紅茶を楽しんだり母親の二重奏に付き合ったりしている内に、あつという間に日が暮れる。

二日目は、リーズを釣れて馬を飛ばし、試験農場の様子を見に行つた。流石に、もう彼女と相乗りせずとも問題ない。

「おお、これは若様」

「やあ、ご苦労様」

農場の広さは、5000?ほど。農民の家族の三世帯が家を構え、ここで農作業を行っている。

事実上、米の栽培の為に作られた施設だった。稲作は高温多湿で雨が多い地域に適しているそうだが、アクセルには勝算があった。

ラヴィス子爵領を流れる川は海まで続いているが、その水源は、ガリアとの国境にあるラグドリアン湖である。トリスティンは、このラグドリアン湖の水によって生かされていると言ってもいい。そのあり得ないほどに豊富な水が、この国に豊穡をもたらすのだ。

要するに、よほど無茶なものでなければ、まず失敗することはないと考えられる。これは、水の精霊のチートっぷりの恩恵だろう。

田には水が張られている。

「具合はどう?」

「一応、仰った通り水を張って、また耕しておきました。それで、育てていた米ですが……」

農夫が持ってきたのは、なかなか成長した苗。確か前世で見たのも、これと同じようなものの筈だ。

「……どうでしょう?」

恐る恐る尋ねてくる彼に、笑顔を返す。新しいものを栽培するというのは、しかもそれが貴族直々の命令によるものなら、相当なプレッシャーだったのだろう。

「これは、成功するかも知れないね」

「本当ですか!」

「いやあ、まだ何とも言えないけど、なかなかよく育ってるし。うまく行けば、収穫は……ラドの月(9月)になるかな」

アクセルはマントと服、靴を脱ぐと、ほぼ下着姿になって、田んぼの中に踏み込もうとする。リーズが慌てて止めた。

「わっ、若様! お止め下さい、泥の中になど!」

「……ああ、そっか。そうだね」

「ええ! ですから、早く服を……」

「ちゃんと田下駄とかつけないと」

「あのっ、そういうことじゃなくて!」

勿論、フライレビテーションを使えば、更に言えば念力を使え

ば、わざわざ泥の中に踏み込まなくてもいいのだが……。体験してみたい、という気持ちもあった。

広めの板きれに縄を通し、しっかりと足に固定する。リーズももう諦めたのか、何も言っただけだった。

「間隔は……このくらいか？」

まだ少し、土の塊があるような気がするが……恐らく大丈夫だろうと、苗を数本ずつ差し込んでいく。倒れないように、少し土を固めた。

「だいたい、このくらいで。まあ初めてなんだし、やる内に調整していけばいいと思うよ」

だばんだばんと田下駄を鳴らしながら、田から上がる。

「足腰にかなり負担がかかるから、休みながらでね。また時々様子を見に来るけど、苗を植えるのが終わったら、あとは基本的にすることが無いから。害虫が出ないか、見張るくらいかな？ もし何かあったら、ゼルナの執政庁か、ラヴィスの屋敷に知らせる」

そう言いながら、アクセルも不便さを感じていた。

ゼルナの街に滞在し続けることが出来ればいいのだが、母親は屋敷から離れるつもりはないし、まだ子どもの自分がずっと詰めているわけにはいかない。電話などというのは無いものねだりだとしても、何か一発で自分の元へ繋がるような、そんな直通のものが欲しかった。

(いや……作れるか?)

恐らく、材料さえあれば何とかなるだろうが、知識が無い。マジックアイテムを作ろうかと思ったこともあったが、普段目にすることのないようなものも含めた、膨大なルーン文字を習得するだけではなく、専門の教育を受けなければならぬらしい。よって、制作者も数える程しかないそうだ。

(まあ、仕方ないか。……他の方法を考えないと)

マジックアイテムという単語で思い起こすのはやはり、あの娘たちにかけられた声を奪う呪い。解呪が無理でも、それを上書きするような方法を探っているのだが、相変わらず手詰まりだった。

(王立図書館に行けば、或いは……でも、ツテがなあ)

今、最も可能性が高いのは、そこだった。或いはアカデミーの誰かに診察してもらおうという手もあるが、それだとティファニアが殺される可能性がある。

(……まあ、そうだな。片っ端から試していくしかないか、今は)

アクセルは慥然としたリーズと共に、農場を後にした。



「……ご存じの通り、ファミリーはこの街の“娼売”を、一手に仕切っています」

アクセルとナタンを前に、バルシヤは静かに告げた。

「今回、あの娼婦を使って誘拐を企んだのは、ラパンです」

「……うさぎ？」

「はい。勿論通称ですが。彼女たちは娼婦の集団です」

「……ファミリーが仕切っていない娼婦。未だ、自分たちで独自に客を取っている娼婦たちかい？」

「ええ」

バルシヤの肯定に、アクセルは天井を見上げて溜息を吐き出した。

誘拐未遂の報告を受けてから、アクセルは一度も、微笑みすら漏らしていない。その表情には憤怒などではなく、能面のような無表情が貼り付けられていた。

ナタンもバルシヤも、アクセルは逆鱗に触れられた、ということを理解している。

「娼婦を取り仕切っていた組織が壊滅していく中で、それを好機と見たのか、“ラパン”の異名を持つフラヴィという娼婦が仲間を集め、小規模ながら組織を作りました」

「……そいつは、人質を取って何を要求しようとしてたんだい？」

「あくまで推測ですが、やはりナタン殿の地位かと。娼婦の元締めは、同じ娼婦であるべきだ、という理屈も分からないでもありません。念のため、他にも内通している娼婦がいるか、密かに確認しましたが……どうやら、単独だったようです」

「ただの意地なら、可愛いもんだけどね」

「そして更に、傭兵団も雇ったようで」

「ん？ そんな金、どこから？」

「後払い、ということでしょう。ここには女も金もありますから」

「よし。潰そう。いいよね、ナタン」

「……ああ」

ナタンとて、妹と呼ぶ者を狙われて、黙っていられる筈が無かった。

「相手にだって、言い分はあるだろう。……けどまあ、どうでもいい。知ったことが」

それだけ告げると、アクセルは部屋を出た。

夕方から降る雨は勢いを弱めず、今では雷鳴を伴って暴れ回っていた。

今日もまた、二つのベッドをくつつけ、皆で眠る。幸い、アクセルがベッドに戻っても誰も目を覚ましてはおらず、ぐっすりと寝入っていた。

一際大きく雷鳴が轟き、部屋を照らす。

「……どうしたの？ アニエス」

そつと寢室に入り込んできた少女に、視線も向けずに尋ねてみた。

「いや、なに。ベル君が、雷を怖がっているだろうなあと。姉として、そんな弟分を安心させてやるうと……」

「うん。怖いよ。だから、安心するまで一緒に寝てくれる？」

「仕方ない、そうしてあげよう」

燃え盛る炎と、そして轟音。アニエスは、それに対して怯える。

今日のように雷が鳴り響く夜は、大抵アクセルの寢床に来た。

「さあ、もう大丈夫だ。お姉さんがいるからな」

そう言つて、アニエスはアクセルに抱き付いた。小さな胸に顔を埋め、彼の寢間着をぎゅつと握り締めている。

「うん。ありがとう」

からかう気など、毛ほども起きなかつた。アクセルもそつと腕を回し、彼女の頭と背を抱きしめる。

雷の度に、自分よりは少しだけ大きな体が震えた。

アニエスは相変わらず、喋り方を年相応には改めなかつた。それは、彼女が目標とする理想像が、既に完成形に近いからだろう。

男の格好をして、男の言葉遣いで、剣を振るって敵を倒していく……イーヴァルディの勇者のような戦士。そう、要するに、男の強さにある種の憧れを抱いていた。

このまま成長すれば、いずれはアンリエッタに召し抱えられ、銃士隊の隊長として活躍することになる。

(……目的は……立身出世か、仇討ちか)

恐らく彼女の中で、その二つは別ではない。出世していけば、必ず、自分たちの村を滅ぼした相手を探り当てる事が出来ると、そう考えて……その為に、強さを求めている。

復讐の相手は、当時実験魔法実験小隊を率いていたコルベールと、その部下達。そして命令を下した、リツシュモン。

ナタンのファミリーが総力を挙げたとしても、今の程度の勢力では、魔法実験小隊にすら届くのかも怪しい。未だ、所詮は片田舎の子爵領、その中の街に根を張る、極小のヤクザだ。

(復讐がどうこうは置いとくとして……とにかく、今はまだ、一人には出来ない)

男に化けて傭兵の真似をしたのも、実践で鍛えようとしたからだろう。しかし、いくら何でも早すぎる。せめて、一人旅が出来るような強さを持って貰いたい。

もしも、ファミリーが順調に勢力を拡大したなら、いずれはリツシュモンにまで届く。

それが無理なら、アニエスは兵士としてトリスティン王国に仕官し、自らの手で探し出す。

(……どちらでもいい)

アニエスの目的が復讐である以上、ナタンのファミリーもアンリエッタ王女も、その手段としかならない。ならば、どちらの手段を選ぶべきか……それも、どちらでもいいのだ。

ファミリーを選ぶなら、才能ある戦士が、ナタンの力となってく

れる。

アンリエッタを選ぶなら、王女はメイジ以外で構成された、優秀な部隊を手に入れることが出来る。

原作通りなら後者だが、前者でも構わないのだ。彼女のその後の主な役所は、才人を鍛えることだが、それは別の人間でも問題ない。そう、いざとなれば、アクセル自身が師匠となるか、代役を向かわせることも出来る。全ては、その時の状況。

そう、今から考えておく必要のない問題だ。

今の問題は……。

「……そんなに怖いのかい？」

より一層、自分を抱きしめたアクセルに、アニエスはそっと尋ねてみる。

「……ああ。怖いよ。怖くて……怖くて……」

もしもまた、新たな誘拐犯が現れば。そしてそいつが、自分では到底敵わないような敵ならば。

(攻めるしかない。こちらから……)

訪れる可能性のある、不幸な結末が……ひたすらに、怖かった。

東地区は今日も、不夜城の如く君臨している。

あそこでは、娼婦達は着飾り、輝き……咲き乱れる。

あれが光であるならば、こちらは陰だ。闇だ。

あれが出来る前は、希望もあった。

今まで娼婦達を絞り上げていた連中が、次々と潰されていき、ようやく少しはまともな生活が出来るようになった。その前が酷かった、というのもあるが。

しかし、結局は違った。支配者が変わったただけだった。全ての娼婦達は集められ、東地区で支配されている。

“ラパン”のフラヴィは、やがてイシュタルの館の方角から目をそらすと、近くのベッドに座り込んだ。彼女の家ではない。元締め組織のアジトだったのだが、壊滅してからは空き家となっていた。カムフラージュのために倉庫とされていたので、怪しむ者もない。

ラパンという異名の由来は、足の速さと、赤い瞳。

(……リリー又は、失敗したらしいわね)

リリー又という娼婦は、潜入したのではなく、初めからイシュタルの館に組み込まれていた。何とか彼女に渡りをつけてみると、今までよりも遙かに待遇が良いという。それならば、とも思ったが…

…。

最近、野良の娼婦達が消え出した。イシュタルの館に組み込まれていなかった、または警戒して逃げ回っていた娼婦達は、十人ほどしかし、今では六人にまで減っている。

全て、行方不明。ここを逃げ出して、東地区に奔ったというならわかるが、そんな情報は無かった。

少し前、傭兵を名乗る男が来た。何が起きているのかということとは、その男が説明した。

早い話が、狩られていたのだ。東地区の者に。街の娼売を一手に握る、それを東地区の者が目的とする以上、支配体制に組み込まれていない野良の娼婦は見逃せない。だから、密かに攫う。

殺され、死体でもあれば、また別だったろう。しかし、この街は……というよりこの子爵領は、人の出入りが多い。いなくなったのなら、どこかに蒸発したと見なされる。

東地区の再開発の熱気の中で、それでも、その発展に関わろうとしなかった者たちもいる。それが、フラヴィを初めとする娼婦達や、物乞い、浮浪者たち。彼等彼女等は、清掃活動にも参加しておらず名簿にも名がないため、尚更、いる筈のない存在として扱われる。

まだ二十歳半ばのフラヴィであるが、娼婦達のリーダー格である。過去、何度か行われたことがある浮浪者狩りでも、その足の速さと機転で、仲間の娼婦達を導いて逃がしていた。

再開発に加わらなかった理由は、疑念だ。うまい話に潜む罠にはまり、ゼルナの東地区に墮とされた人間など、山ほどいる。

ナタンの演説を聴いた者もいた。しかし、ナタンという男が本当の救世主なのか、それともただの煽動者なのか、すぐに結論を出さない者もいた。或いは彼自身は善意であっても、彼を取り巻く人間にどれほどの悪意が隠れているか、想像も出来ない。

傭兵を名乗る男の言葉は、そんな懸念を肯定するものだった。

東地区で働く娼婦達は、最初こそ優遇されていたものの、少しでも役立たずと判断されたり、また不都合な真実を知ってしまうと、密かに外部へ売り払われるそうだ。それもまだマシな方で、最悪の場合は家畜のように処理されるという。

そして、攫われた野良の娼婦達も生死不明で……わかっているのは、既にこの街にはいないということ。

現在、娼婦が一人でいることはそれだけで、自殺行為と呼べた。

堂々と売春宿でも構えれば、すぐに見つかってしまう。かと言ってこのまま隠れていても、客は取れず干上がるしか未来はない。

逃走か、闘争か。その二つを突きつけられ、フラヴィーが選んだのは後者。

(見せてやるうじゃないか。売女の意地つてもんを)



## 第七話〈決意〉（後書き）

いつもご覧下さり、ありがとうございます。溜めていた分を全て吐き出したので、次は先になりそうです。

一話あたりの文字数ですが、多すぎると思われる方は、また御意見下さい。

ところで疑問なのですが、100ドニエが1スウなのか、10ドニエが1スウなのか、どちらが正しいのでしょうか？ ご存じの方いらっしゃれば、お教え下さい。

第八話〈函館〉(前書き)

いつの間にかPV10万突破、ありがとうございます！

## 第八話〈囃餌〉

雨上がりの中庭で、今日もアリスはヴァイオリンを奏でる。恵みの雨に感謝を込めて。雷雲に別れを告げて。

しかし……その音色の違いに……子守歌の曲でありながら、それに潜む荒々しさに気付いた者もいる。子守歌の曲が、獷猛な魂を押し隠すものであることに。

だが、気付いた娼婦達は何も言わない。娼館の助っ人でありながら管理側の人間でもある、特異な少女。その彼女に確認することを、恐れて。

アリスは演奏を終え、自室まで戻ると、ヴァイオリンを片付けた。そして、ナタンとバルシャの元へ向かう。

「さて。それでは、参りましょうか。お兄様、バルシャさん」

「おう」

「はい」

と言っても、すぐに動くのは二人ではない。これは、行動開始の報告だ。

アリスは地下へ行くと、倉庫の片隅に鎖で繋がれた娼婦の前に立った。

「……あなたは……」

娼婦は驚いた顔をしたが、アリスはそれには構わず、鎖の鍵を外す。

「お静かに、リリー又さん。お兄様やバルシャさんに気付かれてしまいます」

捕縛された、誘拐未遂犯である娼婦……リリー又。彼女は監禁されてはいたが、拷問されていたわけでも、乱暴に扱われてもいない。このことを知っているのは、バルシャ、ナタンのみ。他の娼婦達も、リリー又はお忍びの貴族に呼ばれ、ローランのホテルで休日勤務を行っている……と知っている。

「アリス、どうして……？」

「話は後にしましょう」

声を潜め、緊迫した状況であることを印象づける。

「とにかく、何があったのかは知りませんが……あなたはもうここを出るべきです」

「逃がしてくれるの？ どうして？」

「……大切な女の子が傷つけられるのを、黙って見ていられないだけ、です」

その言葉はアクセセルの本心であり、何一つとして間違っではないなかつた。

彼女の衣服を、目立たないものに変えさせる。ちょうど出入りの商人が来る時間帯だったので、それに紛れるようにして娼館の敷地から脱出した。

既に時刻は夕暮れ時だが、つい二日前にオープンした大衆浴場は、アクセルの予想に反してなかなかの賑わいを見せていた。周囲の屋台はまだ六軒ほどだが、珍しい酒を仕入れているということもあり、また、大衆浴場自体もオープン価格として値段を下げているので、仕事を終えた人々が大勢集まっている。

アリスはリリーヌを連れて、更にその中に紛れた。

「リリーヌさん、ここまで逃げて来ましたが……行く当てはありませんか？」

「……ええ」

「それでは、私はこの辺りで戻ることにします。いいですか、すぐにこの街を出て下さいね？ それが無理でも、東地区には絶対に近づかないで下さい」

人通りの少ない裏道まで来た時、アリスはリリーヌに別れを告げる。

しかし、リリーヌは少女の手を掴んだ。引き留めるようにして。

「……どうかしましたか？」

「……。お願い。私を、連れて行って欲しいの」

当初の予定では、別れた振りをしてリリーヌを尾行するつもりだった。

（もし、リリーヌの考えていることが、予想通りなら……）

彼女が、未だアリスに同行を求める理由が、人質にする為なら。素直に連れて行って貰った方がいいかも知れない。

少し考え込む振りをした後、アリスは彼女の要求を受け入れた。

リリー又が向かったのは、東地区と南地区との境目にある倉庫。裏口の、古ぼけたドアを押し開けると、彼女はアリスを招き入れた。

(さて。そろそろか?)

すたすたと歩みを進めるアリスは、軽く倉庫内を見回す。背後から攻撃の気配がするが、見当は付いていた。恐らくリリー又が、ドアの近くに立て掛けてあった棍棒を振り上げているのだろう。

「ここが、目的地ですか? どなたがお友達が?」

背後を振り向かず、アリスは軽く尋ねた。

リリー又は、未だ殴りかかってこない。そうしてくれないと、アリスとしても話が進まないのだが。

ガラッ

「……リリー又さん?」

ついにアリスは振り向くと、床に転がる棍棒、それに座り込み俯くリリー又に目を向けた。

(流石に、良心が咎めたということか?)

捕えられた彼女は、アリスが助け出すまで、一体何を想像していたのだろうか。

リリー又は決して訓練を受けたスパイなどではなく、ただの一人の女性なのだ。恐怖に浸食され、予想できる結末は最悪へとエスカレートし……。

目的としていた誘拐の対象をアリスに変えたのも、自然なことだろうに、リリー又はアリスを恩人として見ている。

「……そいつが、向こうの“弱み”かい？ リリー又」

薄暗い倉庫の中に、静かな声が響いた。

「待って！ お願い、この娘はやめてあげて！」

絞り出すようにして、リリー又は懇願する。その願いが聞き入れられるとは思っていなかったし、事実、つい先ほどまでは、そんなことを願うつもりもなかった。

その決意が打ち崩されたのは、年端もいかぬ少女の、あまりにも無防備な背中を見せつけられたが故。

「やめてどうするんだい、リリー又？ その娘が黙っていてくれるだけでも？」

「でもっ……！」

「リリー又、これは戦争なんだよ。もう後戻りなんか出来はしない。こつちが滅ぶが、ヤツらが滅ぶか、そのどちらかだ」

闇の中、赤い瞳が現れた。

破れた窓から僅かに差し込む夕陽の中に、一人の女が姿を見せる。

（彼女が……“ラパン”のフラヴィカ）

流石に、まとめ役となるだけのことはある……アリスは素直にそう感じた。双眸には静かな決意が宿り、その物腰は堂々としている。

「……生まれて初めて、ブリミル様に感謝してえ気分だ」

また、別の男の声が聞こえた。ギシギシと、闇の中にある階段が軋んだ音をさせ、誰かが近づいてくるのを教える。その声は、アリスにとって特に印象に残るものではなかったが、やがて現れた男の顔を見て、頭の片隅から記憶が蘇った。

（協力者の傭兵つてのは、こいつのことだったのか）

以前、ミシエルを殴りつけた男だった。バルシャ達に大分痛めつけられた筈だが、もう完治したのだろう。相変わらず、嫌悪感を催すような笑みだと思った。

「残念だったなあ、お嬢ちゃん。悲しいお知らせだ。もう二度とおうちには帰れねえ」

アリスは一つ、溜息を吐くと、そっと両手を挙げた。

“彼”がこの一件に手を貸したのは、暇だったから、ただそれだけ。

レオニー子爵のドラ息子が、道楽で始めた傭兵稼業。本人もラインクラスのメイジであり、戦闘ではなかなかの強さを誇る。まあ、そんな強さなど、“彼”にとっては猿山の大将と何ら変わらないも



のであったが。

隣のラヴィス子爵領に最近出来た娼館、そこで叩きのめされたので、復讐したいという、特に珍しくもない話だった。女々しい男だと、そんなことは以前から分かり切っていたので、別に軽蔑したりもしない。“彼”自身も、己が善人ではないということは自覚していた。

しかし、あのドラ息子は違う。自覚していない。自分を高尚な存在であると信じ、それを否定される言動を極端に嫌う。いや、本当は心のどこかで、自分を信じ切れていないからなのだろうが。そう考えれば、“彼”よりはまともかも知れない。

ドラ息子の作戦は、単純だった。野良の娼婦達を攫い、それを娼館の仕業にする。苦境に立たされた娼婦達に、善人面をして近づき、唆す。

“彼”はこの一件に、傍観者として参加していた。勿論、何かあれば手を貸さねばならないが、今のところそれはなさそうだ。

あのアリスという小娘一人のために、娼館の人間は果たして、全てを明け渡すのかと言えば、恐らくNO。見捨てられるだろうし、それが当然だ。誰かの身内だとしても、周囲が切り捨てる。

娼婦達は、自分たちの自治を勝ち取ることを望んでいる。

あのドラ息子は、叩きのめされた仕返しが出来ればそれでいい。

そして……その他の傭兵達は、利権を手に入れることを目的としている。

“彼”が求めるものは、そのどれにも当てはまらなかった。

“彼”はただ、倉庫の天井の梁に寝そべり、そつと下界を見下ろしていた。

色々と予定変更になってしまったが、想定外ではなかった。

アリスの両手首は麻縄で縛られ、その小さな身体は倉庫の二階から吊されている。爪先が辛うじて床に触れ、アリスはふらふらと揺れていた。

「お願い……離してよお」

今にも涙を溢れさせそうな表情で、アリスは声を絞り出す。木箱の上に腰掛け、真正面からその顔を眺める男は、相変わらず下卑た笑みを浮かべていた。

フラヴィは腕を組んで険しい顔をし、リリー又はアリスに背を向け、耳を塞いでいる。

他の女達は娼婦で、男達は傭兵だろう。

「さて。どこがいい？」

男はナイフを取り出し、木箱から腰を上げた。

「……ラファラン、何をするつもりだい？」

少々咎めるような声で、フラヴィが尋ねる。ラファランという名を聞いて、アリスが思い浮かべるのは一人。

（確か、隣のレオニー子爵の息子の名前だな。放蕩息子だという噂だったが……。いや、流石に偽名の可能性もある。とはいえもし本当に貴族なら、死なれると厄介だな）

ラファランは右手でナイフを弄びながら、その切っ先をアリスへと向ける。

「これから、イシユタルの館の連中に手紙を出すわけだが……無視されねえよう、土産をつけようと思うんだ」

「……土産？ まさか……」

「まあ、そうだな。指の一本でも添えてやるか？」

「そこまでする必要があるのかい？」

フラヴィも流石に躊躇した。いくら敵対する人間とはいえ、まだ幼い少女を傷つけたくはない。ナタン達が大人しく出て行き、行方不明の仲間の居所が分かれば、それでいいのだ。

「甘えよ、フラヴィ。お前らは舐められてる。だから攫われるんだ。だから奪われるんだ。……俺は、俺を舐めるヤツを許さねえ」

それも正しい考え方ではあるが、ラファランの表情を見るに、これは彼の個人的事情や嗜好が大きい。

「ひイツ……お願いっ、助けて！ 助けてよぉ！」

徐々に自分の身体に近づく刃に、アリスは悲鳴を上げた。フラヴィは険しい顔をしているが、まだ迷っているらしい。リリー又は更に身を縮め、音を遮断しようとしている。

フラヴィとリリー又以外の娼婦達は、互いに顔を見合わせ、誰かが行動を起こさないか待っている。

ラファラン以外の傭兵は、五人。ラファランはメイジだとして、その五人の中にメイジはいない。ただの傭兵だ。判断理由は魔力の流れ。

(……ナタンとバルシャが来る前に、終わらせるか?)

そう考えていた時、突然拳が襲いかかってきた。

「ぐっ……」

殴られたのは、顔面。ぼたぼたと鼻血が垂れ、床に染み込む。一瞬、表情が崩れそうになったが、アリスは何とか“怯えた少女”の顔に戻した。

(甘かったな。流石に女の子の顔は大丈夫と思ってたけど……そう言えばこいつ、ミシエルもさんざん殴ってたっけ)

女の顔を殴り、痛み悶えるその表情に興奮する性癖らしい。ラファランは、拳に残った余韻を楽しむように、何度も指を曲げ伸ばししながら、ニヤニヤとアリスを見下ろしていた。

「二発……だったよな？ あの時」

再び、拳が迫る。今度は真つ直ぐではなく、左頬を殴られ、不安定な身体がぐるりと回った。縄が擦れ、二階の方から軋んだ音が響く。

「俺は、倍返しがモットーなんだ……」

右頬を殴りつけられた。

そして最後の一発は……ラファランはまたナイフを握り……。

「やめときな」

アリスと彼との間に割って入ったのは、フラヴィだった。

「……邪魔すんじゃないよ」

「あんたとこの娘の間に何があったのかは、知らない。けど、もう十分じゃないかい？ これ以上、しなくちゃならないのかい？」

「うるせえ、どけよ、フラヴィ。まず、テメエを可愛がってやるうか？」

グスグスと、アリスの泣き声。少女は涙を流しながら、フラヴィの背に向かって訴えた。

「お願い……何で……私がこんな目に……？ 帰してよお……おうちに……帰して……」

「うっとおしいんだよ！」

「ひいっ!?!」

振り返りざま、フラヴィはアリスの襟を掴み、自分の方へと引き寄せる。アリスは顔を背けながら、恐る恐る、彼女の顔を窺った。

「まず、あなたのボスが、あたしの仲間を返すのが先だ。殴られたのは可哀想だと思うけど、悪いとは思っちゃいないよ。……あたしらにとつてそんなもんは、傷つけられた内にも入りゃしない。……あんたらみたいなの……！」

フラヴィの指に、力が込められる。

彼女の脳裏に蘇るのは、攫われた仲間の娼婦達。

勿論、彼女たちの奪還も目的だが……薄々と、気付いていた。それは不可能だろうということに。生かされている理由などないのだ。恐らく彼女たちは、もう既に……。

「あんたらみたいなの！ 守られてのうのと暮らしてるガキどもなんかっ……！」

忌々しげに、彼女はアリスの襟から手を離れた。

アリスは確かに、リリーヌを助け出してくれた。そのことに恩は感じている。だが、目の前の少女の泣き言に、だんだんと怒りが沸き上がってきたのだ。

その可愛らしい服も、普段食べている食事も、全ては何の努力もなく……ただ、生まれた境遇の幸運故に得たもの。

たった一杯のスープのために、ゴミ以下の存在と自分を貶める生活など、想像も出来る筈がない。

「……あんたら……です、か」

「ああ？」

俯き、ぼつりと呟いたアリスに、フラヴィは三白眼を返した。

「何の苦勞もなく、常に誰かに守られて……絹の衣にくるまれ、  
のうのうと生きてきた……私は、そんな人間です」

すう……と、アリスはフラヴィの瞳を見つめる。

フラヴィが異変に気付いたのは、その時だった。

常に彼女を助けてきてくれた、驚異的な危機察知能力……それが  
けたたましく警報を鳴らし、うなじの産毛を逆立たせる。

「でも、“あんたら”って……言いましたよね？　つまり、私以  
外のあの娘達も、私と同じように扱った……そう言うことですよね  
？　……ふざけるな」

か弱い少女の目ではなかった。

か弱い少女の声ではなかった。

無力な小娘の顔ではなかった。

「ああ、どうしよう……二人を待つべきなのに……駄目、もう……  
……自制が……」

アリスは両手を広げると、そっと、自分の顔を覆った。

「……え？」

誰かが、そんな間抜けな声を出した。

アリスを吊していたロープは、既に切断され……少女の両手首を  
束縛していたそれも、バラバラに散らばってミミズのように床に落  
ちる。

「確かに……あの娘達を狙ったのは、正解です。あの娘達は、既に私の一部とも言えます。あの娘達に何かあつたら、私は……。…だから、お願いです。死んでください」

アリスの足が、地を蹴る。そして未だ呆然としたままのラファランの前に立つと、彼の腹部に、両掌を押し当てた。

そして次の瞬間、ラファランの巨体は鞠のように吹き飛ばされ、倉庫の壁に叩き付けられる。悶絶するその口から、血の混じった吐瀉物が零れていた。

(他は……五人か)

取り出した杖を、必死に握るラファランだが、あれでは詠唱もままならない。横目で見つつそう判断し、アリスは一番近い傭兵に向かった。

「なっ」

驚愕するその男の腹部に、有無を言わず正拳突き。近付けてくれた顔面に、跳躍し膝を叩き込んだ。

二人、剣を構えて接近してくる。

(ちょうどいい位置だな……実戦で使うのは初めてだけど……)

アリスは一度、動きを止めた。

そして二人の傭兵が打ち掛かってくる直前、身体を翻し、背を向け、後ろ回し蹴りを放つ。

届かなかった。二人の手前、半マイルほどの場所で空振った。



「『嵐脚』」

呟きと、身体の向きが戻るのと、二人の傭兵の腹が蹴りの軌道に沿って切り裂かれるのは、ほぼ同時だった。

“六式”をモデルとした、魔力を利用する近接戦闘。元ネタのONE PIECEのように、斬撃を飛ばすのはまだ無理だが、1メートルほどの風の刃を作り出し、攻撃の間合いを伸ばすのは可能だった。

「『月歩』」

長らく名称の無かった、足裏での風の暴発による移動も、そう名付けた。まともに姿勢を保っていられるのはせいぜい三回までで、四回目にはあらぬ方向へ飛んで行ってしまふことが殆どだが。

文字通り、空を蹴るようにして接近、焦りで剣を抜けていない傭兵を殴り飛ばす。倒れ伏した拍子にすっぽ抜けたその剣を奪い、逆さに持ち上げ、一直線に喉に突き刺した。

「……………」

そこで、アリスは周囲を確認する。

ラファランは未だ蹲ったまま、傭兵は一人がたった今死亡。腹を切り裂かれた二人は重傷で、恐らく放っておけば死ぬだろう。最初に膝蹴りで沈めた傭兵は、四つん這いになって顔を押しさえている。あと一人、まだ攻撃を受けていない傭兵は……。

ズスッ……………

すっかり怯えていた傭兵の手から、剣が転げ落ちる。彼の右耳から入り込んだ矢は、左耳から飛び出していた。

「……あなたらしくないですね」

「また、派手にやったなあ……」

弓に次の矢を這わせるバルシャと、両腰に剣を下げたナタンが、呆れた様子でアリスを眺めていた。

「確かに、ね」

ふっ、と、アリスは苦笑する。二人の言葉を否定できるほど、盲目になっていたわけでもなかった。

しかし……アリスが苦笑し、死体に突き刺さった剣から手を離れた刹那、何も見えなくなった。

「!?!」

少しの後、倉庫内の灯火が全て掻き消されたのだと理解する。確か、マジックランプだった筈だ。その灯火を一齐に消せるのは、メイジしかない。

間の悪いことに、双月も黒雲に隠され、完全な闇が訪れる。

その中で、何かの動きを感じた。

(……いる！ 何かが……！)

アリスは咄嗟に構えるが、相変わらず、漠然とした存在しか感じ取れない。

「またお会いしよう」

静かなその声は、さながら暗闇そのものようだった。

闇を切り裂くように、窓が破られる音が走る。ようやく気付いたアリスは、自分の鈍さに舌打ちしながら、周囲の灯火を再び蘇らせる。

死体となっていたり、死体のような状態の傭兵達。

我を忘れたように、呆然としている娼婦達。

周囲を警戒しているナタン、バルシャ。

蹲っていた筈のラファランの姿が、消えていた。

残されていたのは吐瀉物、窓の破片、そして……アリスの耳にまとわりつく声。

(……また、か……)

遂に、訪れるべき時か来てしまったかと……アリスは冷や汗を流しながら、唾を飲み込もうとする。乾いた鼻血がへばり付く喉が、砂漠のように渴いていた。

第九話<邂逅4>(前書き)

PV15万、ユニーク1万突破しました、ありがとうございます！

## 第九話<邂逅4>

外見で惑わし、驚愕させ、相手の動揺が収まるまでに殺す。それが、アクセルの戦い方だった。

そして、そんな戦い方でこれから先もやって行ける筈がないという事は、誰よりもアクセル自身が理解していた。

魔力の系統属性に関するアドバンテージがあるとはいえ、九歳児の肉体では、まだ筋力が足りない。そこらの平民相手なら何とかなくても、腕の立つメイジ相手ならば……。

(何者だ?)

あの時……ラファランを連れ、逃走した謎の男。あまりにも鮮やかな腕前に、戦慄を覚える。そして彼は言っていた、“また会おう”と。

(メイジ、それも強力な……。初めから倉庫に潜んでいたのか？ラファランの仲間だとすれば、どうしてもっと早く現れなかった？……どちらにしろ、敵には違いない。参ったな、もう戦える所は見せてしまった。流石にメイジと杖の固定観念は強すぎるから、ただのメイジ殺しとも思ってた。くれればいいんだけど。……取りあえず、暫くアリスの姿を封印すべきか？ いや、でもきつと、ナタンとバルシャは顔を覚えられているだろうから……)

「おい、ベル？」

ナタンの声に、意識を現実に戻した。アクセルは顔を覗き込んでくる彼に、そつと手を挙げた。

「少し、問題がね……」

「例の、謎のメイジってヤツか？ そんなに気にすることか？」

アクセルが悲観的すぎるのか、ナタンが楽観的すぎるのか……。ともかく、この問題を放っておくことは出来なかった。

「ナタン、少し留守にするから。その間、よろしく頼むよ」

「どこに？」

「レオニー子爵に、ご挨拶を。ついでにクルコスの街で、情報を集めたい」

あのラファランが、本当にレオニー子爵の息子だとすれば、その方面から謎のメイジの情報を掴めるかも知れない。子爵本人との直接の面識は無いが、ローランが知り合いだったので、その伝手を使わせてもらうことにした。

「いや、けど、結局フラヴィはどうすんだ？ あの娼婦達も、あのまま放っておくわけには……」

「放っておいても、問題はないだろう。頼りの傭兵達がなくなつたんだ。しかも、僕らが攫つたと思いきやこんでいた娼婦達は、その傭兵達が売り払っていた。いいように利用されたシヨックは大きい。売り払われたとすれば、恐らくクルコスの街の奴隷市だろう。その義理も無いけど、発見次第確保しておくようにとは言っている。……」

「もし、また何か企むようであれば……今度こそ、消えて貰うけどね」

「……少々、驚きました」  
「ん？」

馬車の向かいに座るローランの言葉に、アクセルはメモから顔を上げた。

「あれほど、慎重に事を運ぼうとする貴方が……」  
「本当は、臆病な、って言いたいんじゃないかい？ ローラン」

石ころでも踏んづけたのか、馬車がかたんと揺れる。メモの文字が大きく歪み、アクセルは舌打ちすると、紙と羽ペンを片付けた。

「アクセル様。一つ、お願いしたいことがあるのですが……」  
「何？」  
「“ラパン”のフラヴィの命、許して頂きたいのです」  
「いいよ」

事も無げに聞き入れたアクセルに、ローランは目を見開く。

「……と言うか、どうでもいいと思ってる。マチルダやテファたちを狙ったのは許せないし、許すつもりも無いけど、もうあの女は無力だ。これ以上厄介な真似をされない限りは、僕は放っておこう」

と思ってる」

「ありがとうございま」

「と、言うかねえ」

アクセルは狭い馬車の中で、ぐっと上半身を突き出した。所詮は子どもの体格なので、圧迫感などないのだが、その視線は好奇心を以ってローランを射る。

「由緒正しいホテルのオーナーで、名士として知られるローランが、何でたかが娼婦一人にご執心なのか、そっちがすごい気になってきたよ」

「実は、私の隠し子でして」

「マジで!？」

「嘘です」

ホテル『初月の館』をあそこまで大きくしたのは、ローランだった。

まだ先々代のラヴィス子爵、つまりアクセルの祖父が隠居する前だった頃、盗賊に襲われた彼の馬車を、通りがかりに剣を振るって護ったという、なかなか豪胆な武勇伝が残っている。

当時のラヴィス子爵はこの武功を大いに讃え、彼に家伝の秘宝を与えたという。嘗てバルビエが存命中に求めた宝は、まさしくそれを指していた。

アクセルも、アニエスがもう少し成長すれば、ローランに正統派の剣術を指導して貰おうかと考えている。

「本当は、友人の種でして。その友人も、既に他界しています。あの娘の母親から、何かの折には助けてやってくれと遺言を受けました」



「じゃあ、娼婦やめさせて、ローランのホテルで雇ったら？」  
「フラヴィは、私との繋がりを知りません。それに彼女はもう、いい大人なのです。今回のこれは、たまたま私とアクセル様が知り合っていた、それだけの理由です」

暫くローランを見つめていたアクセルは、やがて背を立てると、再び馬車の席に収まった。そして窓枠に肘を立て、頬杖を付くと、うつすら見えてきたクルコスの街を眺める。

アクセルがクルコスの街にやって来るのは、これで四回目だったが、アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィスとしてなら、今回が初めてだった。

（考えてみれば、公式には初めての外出だなあ）

今まで、アクセルとしてラヴィス子爵領から出たことはなかったし、そうでなくても東隣のレオニー子爵領以外には入ったことがない。近隣の貴族同士、パーティーなどで招待し合ったりしそうなものだが、ラヴィス子爵がしょっちゅう領土を留守にするせいか、そういうものに誘われたことは無かった。

もつとも、アクセル・ベルトランの名は近隣では有名だった。十歳にも満たない年齢で、ラインクラスに成長した麒麟児……アクセルとしては、あまり好ましいとは言えない評判である。やはり、魔法学院に行く、などという年齢になるまでは、精々ドット止まりで在りたかった。

理由はやはり、リーズの喜ぶ顔が見たいから。

（俺いつか、女が原因で死んだりするんじゃないの？）

暗澹とした予感を、頭を振って追い出す。

クルコスの街は、ゼルナの街とほぼ同じ規模だった。しかし、今でこそゼルナも賑やかになり始めたが、街の活気はクルコスの方が上。鉱物資源もなく、特に農業などが盛んでもないが、この街の特徴はギルド（同業者組合）だった。

商会は大きなものだけでも三つあるし、使用人斡旋ギルドはラヴィス家を始め、周囲の貴族や富裕層に大勢の使用人を世話している。職人ギルドもあるのだが、規格化という概念が存在しないここでは、完全に商会の下っ端という位置づけになっている。また、大勢の人々や物が入り出す中継基地でもあり、常に何かしらの飯の種はある。

この街でドロップアウトした者の行き先が、隣のラヴィス子爵領・ゼルナの街であるとも言えた。

普段はさつさと馬車から降り、露店を冷やかしながらゆっくり進むのだが、今回はそのまま街の中心部へと向かう。屋敷は別にあるのだが、レオニー子爵は真面目な仕事人間だそうで、だいたいこの街の執政庁にいる。そこがほとんど自宅のようなもので、街の北の一画は丸ごと執政庁の敷地となっていた。

（見事なもんだな……）

アクセルは溜息を漏らした。

ゼルナの執政庁のような、無機質なものではない。門や塀にまで装飾が施され、敷地内に入れば庭園の花々に迎えられる。そこで、ローランと共に馬車から降りた。

色彩豊かな花々の間を、護られるようにして歩いていき、やがて庁舎の入り口に到着する。今度は大勢のメイドや執事が迎えてくれた。

（うちの父親と話が合いそうだ）

ちらりとメイドの顔ぶれを見、余計な事を考えていると、執事の一人が歩み寄ってくる。

「ようこそいらつしゃいました、アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィス様。セバスチャンと申します」

「うらやましい」

偽名やあだ名などではなく、本名がセバスチャンという執事である。

「？」

「あ、いや、何でもない。一晩、よろしく頼むよ」

「お荷物、お運び致します」

とは言っても、二人分の衣類と小物が少々なので、そんなに多いわけではない。

メイドに導かれて客室へと向かい、マントを脱ぐと、ローランと二人で応接間にて待つ。

三十分ほどして、レオニー子爵は姿を現した。

「初めまして、レオニー子爵。アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィスです」

「こちらこそ、初めまして。フィルマン・ルノー・エクトル・レ

オニーだ」

思ったより小柄で、アクセルの目線の高さには首がある。

「久しぶりだな、ローラン」

「ご無沙汰致しております、子爵様」

ローランもまた、先々代ラヴィス子爵の伝手で、レオニー子爵と知り合っている。

「二人とも、楽しんでくれ。忙しなくて申し訳ないが、私はまたすぐに、仕事に戻らねばならん。夕食はご一緒出来るだろうか……  
そうだ、アクセル君」

「はい」

「ラヴィス子爵領からの外出は初めてかな？」

「ええ、楽しみにしていました」

「それならローランを連れて、街の中を見て回るといい。夕食まではまだ時間があるのでな」

「ありがとうございます。お忙しいところお邪魔して、申し訳ありませんでした」

「いや、最近は私の息子達も顔を見せなくてな、寂しかったところだ。夕食は皆に腕を振るわせるから、楽しみにしててくれ」

軽く挨拶を済ませると、子爵は再び執務室へと戻っていった。正式な訪問というわけでもないし、また、そこまで歓迎される理由もないので、アクセルも少々申し訳ない気持ちになる。どうやら間の悪いことに、多忙な時期に来てしまったらしい。

アクセル、ローラン、そして執事のセバスチャンの三人で、街へと繰り出した。兵士は人数に余裕が無く付けられない、と、申し訳

なさそうにされたが、アクセルにとっては都合が良い。ローランと二人きりで、いや、寧ろ一人きりで歩きたいくらいだ。

「何だか、大変な時にお邪魔しちゃったみたいだねえ。事件でもあったのかな？」

「……実は、傭兵ギルドが襲撃されました」

「傭兵ギルド？」

振り向き、背後のセバスチャンに聞き返す。

「はい。わかりやすく言えば、期間限定で兵士を派遣したり、兵隊と個人契約を結びたいと考える人に人材を斡旋したり……。更には、傭兵志望者の育成も行っています」

「どうやら、傭兵ギルドとは何なのか、という説明を求められたと受け取ったらしい。自分が九歳児であることを、今更ながら思い出しつつ、アクセルは黙って聞いていた。

「ちょうど今朝方、その傭兵ギルドの本部が襲撃されるという事件がありました、現在調査中なのです」

「その割には、街中は平然としていますね」

普段と変わらぬ様子の町並みを眺めながら、ローランもセバスチャンを振り向く。

「この街では、ギルドのトラブルなど日常茶飯事ですから。それに、あそこはならず者の集まりで、人々にも嫌われていました」

「ふうーん。行ってみようかな」

「お止め下さい、危険です」

「そっか……」

暫く散歩を続けていたが、セバスチャンは相変わらずピッタリとくっついており、離れてくれない。出来れば奴隷市と連絡を取り、攫われた娼婦についての情報を得たかったのだが、それは帰りがけに行うことにした。

夕暮れ時になり、一行は執政庁へと戻る。

どうやら仕事も片づいたようで、レオニー子爵と食卓を囲む。

「しかし……君の年齢で代官とは、初めて聞いた時は驚いたよ」

「腰の落ち着かない父でして。僕はただ、父の代わりに椅子を暖めているだけですよ」

「いやいや、謙遜することはない。私には三人息子がいるんだが、長男も次男も、君くらいの年齢の時は遊び呆けていた」

三男のラフアランについては、子爵は何も言わなかったが……アクセルも、何も聞かない。三人の息子がいる、と言ったのは、子爵にとってはミスなのだろう。

貴族の三男坊が、不良メイジとなって傭兵ごっこをしている……お世辞にも、好ましいと言えるものではない。レオニー子爵家にとって、そのことは恥部に等しい。

食事の後、団欒の時、アクセルは用意してきた模型を見せた。

「実は、これを見て頂きたくて」

そう言いながらテーブルの上に、細長い金属製の梯子を寝かせる。そして更に、四つの車輪を付けた、荷車のようなものを置いた。

「これは？」

レオニー子爵が見つめる模型を掴み、梯子の上を転がしてみる。

「トロッコ、というものの話を聞きました。鉱山で鉱石を運び出す際、このようなものを用いるそうです。ご覧の通り、揺れも少ないので、より小さな力で走らせることが出来ます」

物資、情報など、少しでも早く伝達させる手段は無いか……そう考えた時、鉄道が思い浮かんだ。

勿論、蒸気機関など詳しい仕組みは知らないし、機関車を走らせるなど夢物語だが、線路を敷いて走らせる、というのは、案外有効なものではないかと考えた。貨物車のようなものを作り、それを連結させれば、一度に大量の物資を運ぶことが出来、牽引する馬の数も少なくて済む。

そして、そのアイデアを是非とも誰かに教え、意見が聞きたかった。

「なるほど、面白い考えだな」

「盗賊に狙われる可能性も高いので、高価なものは運べませんが、木材や食料品などを大量に運ぶのには適していると思います」

「街道を舗装する場合との、コストの違いは……。ふむ……。いや、なかなか……いやいや、素晴らしい発想だと思っぞ」

興味深そうに模型を眺めるレオニー子爵に、アクセルも嬉しくなる。とにかく、発想の方向性は間違っていなかったのだ。

二人で問題点や改善点などを話し合っていると、いつの間にか結構な時間が過ぎていた。そのことに気付いたのは、セバスチャンがやって来た時だった。

「旦那様、少々宜しいでしょうか」

「何だ、急ぎか？」

話の腰を折られたから、レオニー子爵は慙然とする。

「それが……」

「おいっ、親父！」

言いくそうにするセバスチャンを押しつけ、大柄な男がズカズカと入ってきた。この場合は正に、“土足で入り込んだ”という表現が合う。

「控える、ラファラン。客人の前だ」

「客人？ そのガキのことか？」

「……ラヴィス子爵のご子息だ」

「はあ？ 何でそんなヤツがいるんだ？」

自分の息子ながら、レオニー子爵は啞然としたが、既に彼と二度も顔を合わせているアクセルは、特に驚きもしなかった。

いくらお飾りとは言え、アクセルは正式に任命された、子爵領の代官なのだ。それを知りながらの、しかも本人を目の前にしての暴言は、ラヴィス子爵家への侮辱とされてもおかしくはない。

「まあいいや、金をくれ。仲間と祝杯を挙げるんだ」

「……金が欲しいなら、働け。簡単なことだ。まだ十にも満たない年齢で、立派に代官を勤める貴族もいるというのに」

仕事のほとんどをリーズに任せきりにしているアクセルにとっては、少々居たたまれなくなる言葉である。



「さて、行こうか、アクセル君。話の続きは、私の書斎で」

暫く言い合っていたが、家族内のトラブルを見せられて居心地悪そうにしていた少年に気付いたレオニー子爵は、ラファランを黙殺した。未だ背中に罵詈雑言を投げつけてくるが、二人はそのまま部屋を出た。

レオニー子爵との話は、なかなか有意義なもので、アクセルも心地よい充実感に包まれ、そのままベッドに潜り込んだ。

「……………はあ」

月明かりの下、寝間着の上にマントを羽織るアクセルは、杖で肩を軽く叩きながら、溜息をつく。足下には、心地よい充実感と安眠を、見事に奪い去ってくれた存在が倒れている。

微睡むアクセルの部屋に、お座なりなノックの後踏み込んできたラファランは、魔法の稽古を付けてやると、彼を無理矢理に外へ連れ出した。

ある意味、厄介な相手である。殺すわけにもいかないのです、手の内を晒すことは出来ない。単純な魔法のみで戦わねばならないのだ。

ラファランは、火のラインクラスのメイジだった。

過去に戦った火のメイジもそうだったが、アクセルが見る限り、どうも火属性は練度というか、鋭さに欠ける気がする。攻撃力が強すぎるので、単純に威力を上げることが優先しがちになってしまふのか、それとも属性に性格が引つ張られ、火のメイジはだいたい派手なもの好きになってしまうのか。

フレイム・ボールも、なるほど直径がアクセルの身長半分ほどと、大した大きさだったが、風の刃であっさり切り裂けた。啞然とする彼を、ウィンドブレイクで吹き飛ばし、さっさと気絶してもらふ。

(……これで三度目だ。いい加減、飽きたぞ)

再び、溜息が出た。

貴族としても、平民としても生きられない……それが、不良メイジというものなのだろう。友好的なそれならいいのだが、敵対するそれは、アクセルにとって厄介者以外ではない。

九歳児をベッドから引きずり出し、己の鬱憤晴らしに利用しようと考えるような男など、出来れば放っておきたい。又は殺しておきたい。

だが、彼はそれでも、レオニー子爵の息子なのだ。ひよっとしたら、兄二人へのコンプレックスや、末っ子としての僻みなど、色々あってこうなってしまったのかも知れないが、歴とした貴族なのだ。

(何というか……お互い、無視し合いたいというか……)

流石に九歳児に返り討ちにされたなどは、恥ずかしくて言えないだろう。事を大きくすれば、結局ラファラン自身が恥をかくので、大々的な仕返しはして来ない筈だ。となれば、密かに復讐の機会を窺う、という行動に出る可能性もあるわけで……。

（うーん。つい、苛ついて押しちゃったけど……これなら、わざと負けてた方がマシだったかもなあ）

考えれば考えるほど、溜息をつきたくなった。

「綺麗な月だな」

その声が聞こえたとき、アクセルの甘い悩みなど掻き消されてしまった。思わず硬直する彼の背後に、火炎の壁が出現する。

「あの時、“また会おう”と言ったのは……私が、それを望んだからだ。だから、なのか？ その願いを、あの月は聞き届けてくれたのか？ こうして君の方から、私の元に来てくれるなんて」

暗闇の倉庫での声と同じ、壮年男性のそれ。

火炎で紅に染まった景色の中に、いつの間にか、その男は立っていた。

（……嘘だろ）

自分はまだ、九歳だ。

自分はまだ、ラインクラスだ。

自分はまだ、転生して九年しか経ていないのだ。

自分はまだ、満足できる強さを手に入れてないのだ。

それなのに、何故？

「さあ。ダンスの時間だ」

メヌヌヴィルは両手を広げ、楽しげに告げた。

## 第十話〈苦況〉

“白炎”のメヌヴィル

トリステインの下級貴族だったが、『魔法研究所実験小隊』に配属され、約10年前のダングルテールの虐殺を始め、トリステイン王国の様々な裏仕事をこなす。が、そのダングルテールの虐殺時、上官のコルベールに杖を向け、返り討ちにされて失明する。小隊を抜けてからも、相変わらず殺し合いの渦中に身を起き続け、コルベールとの再戦を心待ちにしている。

（今は、そんな情報はどうでもいい……系統は火で、確かクラスは……トライアングルだったっけか？）

アクセルは舌打ちした。

（“こういうの”は、まだ求めてないんだよ！ 早すぎる！ 俺の人生の“この位置”にいていいボスキャラじゃねえ！）

せめて、自分もトライアングルまで成長していれば……。

いや、メヌヴィルの恐ろしさは、魔法の実力だけではない。あのメイスのような杖は、それだけで十分すぎるほどの凶器。あの巨躯によって生み出される暴力は、単純な蹴りだけでも、アクセルの身体など吹き飛ばせるほどの威力がある。

そして何よりも恐ろしいのは、光を失ったが故に身につけた、熱を探知するという異能。暗闇の倉庫で、誰よりも自由に動き回れたのも、その能力があつてこそ。

はつきりと、自信を持って断言できる。

メヌヌヴィルは、前世を含めても、自分の経験の中で最強の敵だと。

背後で煌々と燃え盛る赤は、周囲を地獄のような色に彩っていた。そしてアクセルにとって、この事態は地獄にも等しい。

「さあ……俺を、楽しませてくれ」

メヌヌヴィルはアクセルに杖を向ける。

(それつまり、燃やされてくれってことだろ……)

バトルジャンキー、パイロマニア、焦げ臭フェチ……メヌヌヴィルを表現するとしたら、それらの言葉が全て当てはまる。全て、アクセルにとっては鬼門に当たる個性だ。

(落ち着け。正に、“こういう状況”を考えて来たんだろ?)

指を杖にしたのは、何のためだ?

格闘術を磨いてきたのは、何のためだ?

全てはそう、“こういう状況”でも生き残るため。

(……けど、まだ、圧倒的にレベルが足りないんだよなあ)

杖を奪われても魔法が使えるというアドバンテージは、はつきり言って、魔法の実力が上の相手には通用しない。格下なら杖を奪おうとするかも知れないが、メンヌヴィルは、そんなことをせずともアクセルに十分勝てる。というか殺せる。

「あの……人違いでは？」

一縷の望みを託して、知らんふりをしてみた。いくら何でも、あの黒髪の少女とこの若草髪の少年が同一人物だとは……。

「くく、怖い怖い。あの倉庫での化け方も、なかなかのものだったぞ」

そう言えばメンヌヴィルは、外見ではなく、その人物の熱によって人間を識別する。アクセルの優位性を、悉く無に帰してくれる天敵だ。

しかしいくら何でも、執政庁の敷地内でこれほどの火事が起これば、誰かが気付く。

（そうだ、思わず戦う方向で考えちゃったけど……ぶっちゃけ、付き合う必要は無いんだよな）

相手は大人のトライアングルメイジ、こちらは子どものラインメイジ。例え逃げ出したとしても、誰が咎めるといつのか。幼気な子どもを、殺し合いに付き合わせようとするメンヌヴィルが悪い。

「……自己紹介くらい、してくれていいんじゃないかな？」

杖で軽く肩を叩きながら、アクセルは溜息をつく。こんな怪物を相手になどしていられないので、さっさと逃げることにしたのだが、その素振りを見せる訳にはいかなかった。

「ああ、そうだったな。非礼を詫びよう」

メンヌヴィルは杖を持ったまま、右腕を腹の前に横たえ、そっとダンスを申し込む時のようにお辞儀をする。

流石に下級とはいえ、貴族だっただけのことはあり、その仕草に何ら不自然な部分は見受けられなかった。

「俺はメンヌヴィル。“白炎”のメンヌヴィルだ」

勿論知っている。

アクセルは努めて平然とした動きで、同じようにお辞儀を返した。

「アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィス。済まないね、二つ名は未だ考えていないんだ」

この場合、本名を名乗らねば不自然だろう。

永遠に逃げ切れる筈もない。が、とにかくこの、一人で立ち向かうという状況がまずい。初代ドラクエじゃあるまいし。

何とかこの場を逃げ切り、メンヌヴィルを大勢でボコる。それがベストだ。

最悪の場合は、コルベールの居所をバラしてやればいい。彼には可哀想だが、どうせ十年後には、己の過去と向き合わなければならぬ時が来るのだ。十年後に勝てるのなら、今だってきつと勝つてくれるだろう。

まあその場合はメンヌヴィルに、何故魔法実験小隊のことを知っ



ているのか、と追求されるだろうが。

自分が今、こうやって狙われている理由は……。

アクセルは首を捻る。自分は一体、何故、メンヌヴィルに襲われなければならないのか。本当に、ただ単に、メンヌヴィルの興味を引いてしまったからなのか。

「ひよつとして、彼の敵討ちかい？」

アクセルは杖の先を、倒れ伏すラファランの背に向けた。

一瞬キョトンとしたメンヌヴィルは、やがて苦笑いしながら首を振る。

「いやいや、違うさ。そいつは俺の舎弟のようなものだが、それはただの成り行きだ。放っておいていいぞ。面倒だからな」

「そうか、なら、戦う理由もないし……寝かせてもらうよ。生憎と、育ち盛りなんぞね」

「つれない事を言わないでくれ。求め合う二人が、月夜の晩に奇しくも邂逅を果たした……それなのに、はいサヨナラ、という法もないだろう？」

「申し訳ないけど、僕はこれっぽっちも、それこそトカゲの爪垢ほども求めてはいないんでね。そうだな……王都にでも行けばいいんじゃないか？ ダンスの相手には事欠かないだろう」

確実に逃げ切る手立てが無い以上、メンヌヴィルの方から興味を無くしてくれるのが一番良い。

（興味を失え、とまでは言わないけど、もうちょっと先に延ばしてくれないかなあ。ヒソカだって、青い果実を見逃すくらいはの自制

心はあるってのに)

アクセルはちらりと火炎の壁を振り返り、それに沿って歩き出した。メンヌヴィルも一定の距離を保ったまま、少年と平行に歩き出す。

(助けてー！と大声で叫んでも、無駄だろうな。兵隊も出払ってるし、今屋敷に残ってる人間なら皆殺しに出来る、そう思ってるんだろう。そして事実、こいつなら出来るだろう。トライアングルとはいえ、スクウェアにだって勝てそうだなあ)

急いで、ではない。今晚のメニューを考えながら陳列棚の前を通る主婦のように、求める元ネタの同人誌を漁るオタクのように。

「……傭兵ギルド襲撃の一件は、聞いているか？」

突然、メンヌヴィルはそう聞いてきた。アクセルは相変わらず、カタツムリのように進みながら、肯定の返事を返す。

「実行犯は、俺と、そのラファランだ」

「理由は何だい？ いや、そもそも、理由はあるのかい？」

「全て、お前の為だ」

アクセルの髪が、僅かに揺らいだ。

「ゼルナの街を最後に、消息を絶つ傭兵の数が多くてね。しかも、その中にはメイジも含まれているというのだ。ギルドはこう考えた、ゼルナには何かがある……と。しかも、そのラファランが、主に黒髪の少女についてあること無いこと騒いだのでね、ついに調査が入ることになった。それをさせるのは、俺にとって好ましくなかつ

た。今のギルドを潰し、新しいギルドを牛耳ろう……と、ラファラ  
ンを唆すのは簡単だったよ」

「つまり……余計な詮索が行われる前に、傭兵ギルドをぶっ潰し  
た、そういうことかい？」

「ああ」

「僕が、迷惑するだろうか？」

「その通りだ」

メヌヌヴィルのメイスが、双月の光を受けて煌めく。その煌めき  
はいっそ、蠱惑的でした。あつた。

もう、猶予の時間は無くなった……そう判断し、アクセルは立ち  
止まる。そして首を回し、それに身体を追従させ、メヌヌヴィルを  
真正面に見据えた。

メヌヌヴィルも、元より準備は出来ている。相変わらず無駄に白  
い歯を見せたまま、楽しげに笑っていた。

「さあ、俺にここまで口説かせたんだ……。恥をかかせてくれる  
なよ？」

(やるだけやって、隙を見てトングラ。これしかないか)

アクセルは軽く息を吐くと、杖を振りつつ、走り出した。

「『エア・カッター』！」

風の刃を放つと、腰を落とし、その後方に隠れるようにして走る。

「ウル・カーノ！」

メンヌヴィルはアクセルに杖を向け、発火のスペルを唱える。杖の先の孔に火の粉がまとわりついたかと思うと、火炎の奔流が放たれた。

刃は奔流を通り抜け、奔流もまた、二つに切り裂かれながらも勢いを弱めない。

互いに右側に避けた二人の脇を、それぞれの攻撃が掠めていった。

熱を感知する……その特性について、アクセルは考えてみた。

大抵の蛇は、舌を頻繁に出し入れすることで匂いの粒子を付着させ、それによつて獲物を感じ取る。そして一部の蛇にはピット器官というものがあり、動物の体温……というか赤外線を感知することが出来る。その仕組みを応用して発明されたのが、サーモグラフィ。いくら何でも、メンヌヴィルの身体にピット器官が生まれるわけではない。彼は確か、熱を肌で感じ取ると言っていた。風のメイジが聴力を強化されるように、火のメイジも熱に敏感になると言う。そう、考えてみれば、理屈は通っている。昔、よりよい香水を開発させるために、奴隷の目を潰して嗅覚を上げたと言う話もあったが、それと同じなのだ。

視覚を奪われたメンヌヴィルは、肌で温度を感じ取ることが出来るようになった。

（そうだ。別にその点については、化け物ってわけじゃない。火メイジの元々の特性が、強化された……それだけのこと）

赤外線は、絶対零度を除く全ての物質から放出されている。それを感じ取れるということは、結局、盲目というハンデなど無いも同

然となる。

（いや待て、流石にそれだとお手上げだ。いくら何でも、そこま  
で精度が高い筈がない。だとしても……肌で感じ取っている、とい  
うことはつまり、死角がないってことだ。視覚が無い、故に死角も  
無し。……バカか俺は、落ち着け）

一度に行使できる精神力は、メンヌヴィルの方が文字通り一つ上。  
精神力の容量も、同じく。

ただ、普通は休まないと回復しない筈の精神力が、アクセルの場  
合は立ち止まっていれば回復する。そのアドバンテージは幸いかも  
知れない。

（つまり、メンヌヴィルの感覚を欺くには、サーモグラフィを欺  
く方法を考えればいいわけか。……MGSのステルス迷彩しか思い  
浮かばないな。風魔法を極めたら出来そうな気もするけど、とにか  
く今は無理）

「ふんっ！」

「イル・ウインデ『ストーム』」

メンヌヴィルほどの使い手なら、火炎放射くらい無詠唱で出来る。  
彼にとっては軽い感じで放たれた炎は、それでも無視できない威力  
が込められており、アクセルは竜巻を起こして散らした。熱が肌を  
焦がし、痛い。

（待て……メンヌヴィルの特性なんて、普通は思い至らないぞ。

俺は原作を知っているからだろ。つまりメンヌヴィルは、未だ俺が、  
目が見えないことを気付いていない訳で）

アクセルは右手の杖を振るい、詠唱を開始する。反対側の左手は胸に当て、指を動かして密かに寝間着のボタンを外していった。

幸い、メンヌヴィルは楽しむための戦いを求めている。一気に勝負を決しようとはしない筈だ。

（と言うか、本気で殺しに来られてたらとっくにお陀仏だった。……これに勝つコルベール先生、マジパネエっす……って感じた）

アクセルは全てのボタンを外し終わると、再びメンヌヴィルに向かって突進する。相変わらず凶悪な笑みで顔を歪ませるメンヌヴィルは、その場を動かさず、じっと待ち構えた。

「ラナ・デル・ウインデ！」

アクセルの詠唱は、エア・ハンマー。それを聞いたメンヌヴィルは、杖の先に火炎を纏わせる。

「ウル・カーノ……『フレイム・ボール』！」

「『エア・ハンマー』！」

しかし、風の槌が放たれたのは、メンヌヴィルの攻撃に対してではない。彼が火球を放った直後、アクセルは杖を地面に向けた。風の暴発により、アクセルの小柄な身体が舞い上がる。

（上空からか！）

メンヌヴィルは心を躍らせた。

確かに大柄なメンヌヴィルは、対人戦に於いて、自分より高い位

置から攻撃を受ける経験は少ない。それに目を付け、上空から攻撃を仕掛けようとしたのなら、大した子どもだ……そう、彼は考えた。だが、それはメンヌヴィルが視覚に頼っていた場合の話だ。肌で熱を感じ取る彼にとって、視界は全方位と言っている。

「燃えるオ！」

メンヌヴィルは吼え、斜め上空へと杖を向け……はっとした。

熱源が、二つに分かれている。どちらを追うべきか、その判断が遅れ、放たれた火炎は結局、二つの熱源の間を擦り抜けた。

メンヌヴィルの鼻腔に届くのは、肉が焦げる匂い、そして羊毛が焦げる匂い。

片方はアクセル、もう片方は、体温の移った寝間着だった。

「何と……！」

子どもの発想ではない。立て続けに二度、メンヌヴィルは驚かされることになったが、彼は寧ろ感心していた。

「ラナ・デル・ウインデ……」

メンヌヴィルの頭上を飛び越えたアクセルは、再び『エア・ハンマー』の詠唱に入る。

しかしそこも、メンヌヴィルの射程範囲。

「ふんっ！」

振り向きつつ杖を向け、アクセルへと火炎を放つ。今度は、外れ

はしなかった。

「うあああつ！」

少年の、悲痛な叫び声が耳に届き、肉が焦げる匂いが鼻腔を満たす。

笑い声を上げるメンヌヴィルの足下で、アクセルは転がって火を揉み消した。

(ようやく……してくれだな、油断を)

アクセルは、エア・ハンマーを放つつもりは無かった。ただ、形だけ詠唱してみせただけだ。彼が本当に使いたかったのは、物体を操作するコモンスペル『念力』。

「……………!!?」

メンヌヴィルの顔に、脱ぎ捨てられた寝間着がまとわりつく。アクセルは寝ころんだまま、右手の杖と、左手の人差し指を向けた。

『錬金』、そして『発火』。

錬金術で寝間着の汗を油に変え、それに火を付ける。

「があああああ!?!」

今度は、メンヌヴィルが絶叫した。地面に倒れ、転げ回り、寝間着を掻きむしるようにして引きちぎる。

顔を襲う火炎は、やはり、多少のトラウマだったらしい。それでも杖を手放さないメンヌヴィルに、失望と驚嘆を覚えつつ、アク



セルは杖を構える。

「っはあっ、っはあっ、っはあっ!?!」

ようやく寝間着の呪縛から解放され、メンヌヴィルは地面に両手をつき、荒い呼吸を繰り返していた。

今のアクセルには、止めを刺すような決定打が無い。このまま逃げたとしても追いつかれると判断し、可能な限りの精神力の回復に努めた。

「……………!?!」

遠くから、人々の怒声が聞こえてくる。

(ようやく……………応援が……………)

アクセルはメンヌヴィルを警戒したまま、そっと溜息をつく。

メンヌヴィルが作り出した火炎の障壁は、いつの間にか、花壇の花々にも燃え移っていた。火事になった庭園に誰かが気づき、騒ぎ出してくれたのだろう。

「さて……………どうする、メンヌヴィル君。口喧しい親たちに見つかってしまった。二人の逢瀬も、ここまでかな？」

口調だけは努めて余裕ぶり、アクセルはそう言った。

メンヌヴィルなら、全てを燃やし尽くしそうな気もするが、そこまで自棄になる男ではない、と信じたい。彼にも、自分の両目から光を奪った男と再会するという、人生の目的が存在するのだ。逃げられるのなら、逃げる道を選ぶ筈だ。

「……くくく」

やがて、メンヌヴィルは立ち上がった。

トラウマを掘り起こし、精神を揺さぶることは出来たらしいが、ダメージはそれほど大きくはない。

(やっぱり……まだ、圧倒的にパワーが足りないな)

精々、焦げ跡を残しただけ……といった所か。アクセルは腕を組み、軽く杖を動かして首筋を叩いた。

メンヌヴィルは満面の笑みをアクセルに向け、立ち上がる。

「何を言う、これからだ……。運命の相手を逃すくらいなら、誰も出会いなど求めはしない」

(だから……お前の運命の相手は、コルベールだろうに)

消火活動は始まっているだろうが、この場所まで救助が来るには、まだ相当時間がかかりそうだ。

「そうか、なら仕方がない。死ぬまで踊れ」

勿論、殺し合いに最後まで付き合うつもりはない。これ以上痛めつけることは出来ないだろうが、何とか防御に徹して、火勢が弱まった時を見計らって逃げる。

大まかな予定を立てると、アクセルは杖を振り上げた。

その直後、襲いかかってきたフレイム・ボールに、彼の身体は弾き飛ばされた。

(……え?)

裸の背中に感じる、熱さと痛み。予想外の方向からの攻撃に脳が働かず、アクセルは傍らの石灯笼に額をぶつけると、地面に落下した。

(……そうか……実戦だもんな。こういうことも……あるか……)

朦朧とした意識の中、視界の端に、こちらに杖を向けるラファランが見える。

(あー、くそっ。こんな事なら、さっさと殺しておくべきだったなあ……)

何かに引きずられるようにして、意識が遠のいていくのを感じた。

「なあ、メンヌヴィル……助けてくれないか？」

そんな、馬鹿馬鹿しい言葉が飛び出した。

意識を失うのは、死と似ていた。いや、このまま意識を失えば、それこそ死んでしまうかも知れない。

ある種、快感なのだ。それはとても魅力的で、楽園へと導かれる光の中にいるようで。

自分から手放したのか、それともついに“その時”が来たのか……アクセルは眠るように停止した。



## 第十一話<奇縁>

「……………ははっ……………ははははははははっ」

紅蓮の中で、男は唾う。身を振り、腹を抱え、天に唾吐くように。

「ざまあ見ろ！　ざまあ見やがれってんだ！」

あらゆるものが地獄の色に染まるその場所で、ラファランもまた、悪鬼のように輝いていた。

「焼かれちまえっ！　兄貴に！　炎に！　黒焦げの消し炭になっちまえっ！」

ラファランにとって、この場の火事などどうでもいい。

気に入らなかった。お飾りの代官のくせに、ただ座っているだけの代用品のくせに、得意気な顔でいることが。

気に入らなかった。九歳でラインクラスに達した少年が。十二歳でスクウエアクラスに達したガリアのシャルル王子よりも、身近な分、より憎悪が湧いた。

父親であるレオニー子爵と、二人きりで話していた事も気に入らなかった。

一体、書齋で何を話していたのか。貴族社会に誇れる職を持たない自分のことか。二人の兄より出来の悪い出廻らしのことか。必死になって魔法の修行を積んでも、結局トライアングルクラスになれ

なかった、厄介者の三男坊のことか。

「お前なんぞっ、燃えてしまえばいい！」

一頻り笑い声を響かせると、ラファランは唇を結び、メンヌヴィルの元へ駆け寄った。

「おいっ、兄貴！ さっさと逃げようぜ！ いくら何でも、やり過ぎちまったしなっ」

周囲の火炎の熱気を振り払うように、ラファランは掌で顔の周りを仰ぐ。

汗一つ見せないメンヌヴィルは、そつと、口を開いた。

「今の……フレイルム・ボールは……お前か？」

「ああっ、そりゃ別に、兄貴が負けるなんてこれっぽっちも思っちゃいないが……勘弁してくれよ。俺だってこいつにや、煮え湯を飲まされたんだ」

「……………」

「それよりも兄貴っ、これからゼルナの娼館をかつ攫おうぜ！」

前みたいに、余計な小細工なんかいらなかったんだ！ どんなヤツがいようが関係ねえっ、兄貴と俺がいれば無敵だ！」

「……そう言えば、一つ聞きたいんだが」

「ん、何だ？」

「お前は どうして……俺を、兄貴と呼んでるんだ？」

言葉にではなく、その声によって、ラファランは口を開けなくなった。

戦闘の時は勿論、その他のどんな時も……傭兵ギルドを襲った時でさえ、メンヌヴィルはそんな声を出さなかった。

ただひたすら、その声は、氷雪のように冷たかった。

その冷たい声の主は、杖に炎を纏わせる。

「ラファランよ。お前は俺にとって……ただの、“蛇の足”だ」

クルコスの街の執政庁を襲った火事は、夜が明ける頃、ようやく鎮火した。

庭園は四分の一が完全に焼失し、四分の一が半焼。幸い庁舎まで及ぶことは無かったが、焼け跡から成人男性一名の遺体が発見される。体格、そして身につけていた装飾品から、レオニー子爵の三男、ラファランであることが判明した。

そしてもう一人、焼け跡から発見されたのは、来訪していた隣の子爵領の代官・アクセル。背中には魔法による火傷の跡、肩にはラファランのナイフが突き刺さっていた。

更に、前夜にラファランが、アクセルの客室の場所を聞き出したというメイドの証言。

止めに、傭兵ギルドの襲撃で辛うじて生き残った傭兵が、死の間際、犯人はラファランだと遺言した。

アクセルは風のラインメイジ、ラファランは火のラインメイジ。

全てを総合して出された結論は、火の元はラファランの魔法で、

アクセルはラファランに殺されかけた。

水メイジの治療によって目覚めたアクセルは、狼狽するレオニー子爵にカバーストーリーを提案する。

アクセルはラファランに誘われ、夜の庭園を案内されていた。

しかしそこに、狼藉者の火のメイジが襲いかかる。

二人は共に杖を振るって立ち向かうも、相手はトライアングルクルアのメイジであり、ラファランは戦死して何とかアクセルだけが生き残った。

庭園は襲撃者の魔法によって火事になり、騒ぎが大きくなったことで犯人は逃げ出した。

その後、襲撃者の行方は杳として知れなかった。

犯人の逃亡先として可能性の高い候補に、ラヴィス子爵領も挙げられるのだが、そこはレオニー子爵に手心を加えて貰う。

火事の後始末や、大怪我を負ったアクセルへの負い目もあり、レオニー子爵は結局、その提案を有り難く受け入れることにした。

王都トリスティンから二人の兄も急遽帰郷し、三日後、ラファランの葬儀が執り行われた。

そしてアクセル・ベルトランド・ラヴィスは、葬儀から四日後、ようやくラヴィス子爵領への帰路につくことが出来た。

「……災難でしたな」

馬車の向かいに座るローランは、気遣うように言う。彼はアクセルの家臣ではないので、護衛の義務も無かったのだが、彼自身はそ



うは思っていないらしい。

あの夜の真実を、アクセルはローランにのみ話していた。

「まあ、厄介ではあったけど。命があって万々歳……かな」

ラファランを殺したのは、恐らくメンヌヴィルだろう。勝負を邪魔された腹いせか、流石に足手纏いだと切り捨てられたのか。どちらにしろ、アクセルは彼を惜しんだりはしなかったが、憐れみはした。ラファランが死者となってしまうた今なら、尚更だ。

葬儀に集まった家族や親族の間には、その死を悲しむと言うよりは寧ろ、厄介者が消えたことに安堵する雰囲気は漂っていた。

ふと、アクセルは前世を思い返し……自分の葬儀も、あんな感じだったのではないかと考えた。

「……ねえ、ローラン」

「はい？」

ラヴィス子爵領に入った頃、それまで肘をついて窓の外を眺めていたアクセルは、口だけ動かしてローランに呟いた。

「僕の臆病さは、知ってるよね？」

「……？」

「だから。僕があの夜、何があったかをローランに打ち明けたのは、それ程にローランを信用しているからだって、それを認識して欲しいんだ」

ローランとて、人を見る目はある。いや、無ければ、貴族から破落戸まで様々な人間の相手をしつつ、街一番のホテルを切り盛りすることなど出来なかった。

アクセルは臆病なまでに用心深い。子ども故か、時々馬鹿な程に抜けている事もあるが。それでも、重大な話を打ち明ける人間は選んでいた。

「……お言葉有り難く。身に余る光栄にて……」

「いや、ごめん。言いたいののは、そういう事じゃないんだ。ローランにも、僕を信じて貰いたいんだ」

「……元より、私めも共犯者で御座います」

「僕を信じて、これから言う事をよく聞いてくれ。まず一つ、何があるうとピクリとも動かないで。二つ、僕が許可するまで黙っていて。声を上げないで」

「……？」

アクセルは相変わらず、窓の外から目を離さない。不思議に思いながら、ローランは言われたとおり、己を石像か何かのようにした。

「……入って来ないのか？」

十秒ほどして、ふと少年はそう呟き……ローランの心臓は跳ね上がった。

アクセルが眺めていた景色の中に、黒い革製のブーツ……いや、何者かの足が割り込む。それはするりと窓枠から侵入し、驚くほど静かに、馬車の中へと入り込んだ。

恐らく、壁越しとはいえ、アクセルの背中に触れられるほど近い御者も、牽引する馬も気付いてはいないだろう。いや、頭の上にながら、ローランにすら気配を感じさせなかった。

姿を見せた大男は、窮屈そうにしながら……それでも相変わらず

衣擦れの音すら立てず、アクセルの隣に腰を下ろす。

逆立つ真つ白な髪、顔の半分を覆い隠すマスク……そして、目を合わせた者に、深淵を思い起こさせるような左目。

「そう言えば……明るい時に会うのは初めてだったね」

アクセルは相変わらず、ぼんやりと景色を眺めている。

「そうなる、か。俺には昼だろうが夜だろうが、あまり違いはないが」

ローランはふと、この男が例のメンヌヴィルであることに気付いた。

アクセルが平然としていられるのは、ある種の諦念であった。相手にはある程度力を見せてしまったし、そしてその相手とはよりによってメンヌヴィルである。何も出来ない。

何故あの夜、自分が生き残れたのか……という疑問はあるが。

「今、唐突に思い出したんだけど……よくも肩を刺してくれたね」

「その点は、素直に謝罪しよう。あれくらいしか手は思い浮かばなかった。そしてそれを、お前はきちんと利用してくれた」

メンヌヴィルは杖を抜いていない。

いや勿論、ただ単に襲いかかるつもりだったなら、わざわざ乗り込んで来たりはしないだろう。

少なくともアクセルには、彼が戦いに来たとは思えなかった。

「ところで、御用は？」

アクセルは漸く窓から目を離し、メンヌヴィルに向き直る。

「？ 何故、そんなことを聞く？」

対する男の表情は、怪訝そうなものだった。アクセルの問いを、まるで愚問であるとしても切って捨てるような顔。寧ろ、自分が何故そんな質問をされなければならないのか、本当に理解などしていなさそうだった。

質問そのものを否定するような彼の態度に、アクセルは更に疑問を深める。

「……じゃあ、他の質問。何で、僕を助けた？」

「お前が言ったんだらう、“助けてくれ”と」

確かに、アクセルも忘れたわけではない。

「……言っていない。僕はただ、“助けてくれないか？” って尋ねただけだ」

「いいぞ」

「……何がだよ」

「助けてやる、お前を」

一瞬、頭を抱えなくなっただが……頭を抱えても、理解出来る筈が無いという結論が出た。

メンヌヴィルは確かに強烈なキャラクターだったが、それは彼の特性が理由だ。彼がどういう経緯で小隊に入ったのか、どういう人生を送ってきたのか……そして、どんな理由があつて、肉が焦げる匂いを求めるようになったのか、明らかにされなかった。勿論、

生まれついでの異常者という可能性もあるが。

別に、狂人という訳でもないだろう。近づく者全員燃やし尽くすという人間ではなく、傭兵として仕事をして報酬を得るといって、極めて真人間と言える面もある。

「ふーん……助けてくれるんだ。僕を？」

「ああ」

「僕の、大切なものも含めて？」

「ああ。だから……」

「だから？」

「俺も、助けてくれ。と言っか、匿ってくれ。お前のせいで、子爵の三男坊を殺したお尋ね者だ」

「それは間違いない、お前自身の責任だろうに」

「俺はお前を助ける、お前も俺を助ける。俺もこう言おうか、アクセル、助けてくれないか？」

「いいよ」

アクセルはごくあっさり、そう返した。

既にメンヌヴィルと知り合った以上、彼との奇縁から逃れる術は無い。ティファニアも、勿論未だ忘却の魔法を習得していない。そしてアクセルは、メンヌヴィルよりも弱い。

それに、メンヌヴィルの人生の目的を叶えてやる、という手札は、アクセルの手の中にある。

メンヌヴィルは太い腕を伸ばすと、アクセルの肩に回し、抱き寄せた。

「感謝するぞ、友よ」

彼の口から飛び出したとは思えない二つの単語だが、流石にそう感じるのには酷すぎると、アクセルは密かに反省する。

分厚い胸板に頬を押し潰されながら、アクセルは溜息をついた。

「僕も、助けしてくれたことにはありがとう、と言いたいけど……殺し合いで育まれる友情なんて、聞いた事もないし、信じたくもないね」

「だからこそ、だ。“まさかの友は真の友”というヤツだな」

陽気に、そして豪快に笑い声を上げるメンヌヴィル。

そこでようやく侵入者に気付いた御者が、仰天し、慌てて馬車を止めた。

今回、メンヌヴィルと出会う羽目になった原因を辿っていけば、命の軽視にある……アクセルはそう結論付けた。

別に、今までの殺人の罪悪感で心が押し潰されそうだとか、そんな事は無い。敵として現れた傭兵を、たかが戦闘員……言うなれば、経験値をくれる果实のように考えてしまった事が問題なのだ。

彼等とて、木に実るわけではない。歴とした人間であり、雇用主との繋がりもある。

例え傭兵として個人契約を結んでいたとしても、そうなる前はギルドに所属しており、当然その繋がりもある。

行方不明にするだけでは駄目なのだ。傭兵など大多数は破落戸と変わりないが、家族や友人なども当然おり、消息は求められ……：そして特に大きな戦争なども無いのに、そんな実例が多くなれば、流石に怪しまれる。メイジまで含まれているのなら、尚更だ。

盗賊や山賊ならともかく、傭兵は立派な職業なのである。傷害や殺害が発覚すれば無罪放免とはいかないし、ギルドを襲撃すれば犯罪者となる。

“ラパン”のフラヴィを急襲した一件についても、怒りにまかせて、という部分があり、アクセル自身も失態を認めざるを得ない。

(流石に、歴とした組織を相手取るのはまずいな……。怖がられるのはいいけど、興味を持たれるのはイヤだ。もう、いつそファミリーを宣伝しまくるか?)

そう考えれば、メンヌヴィルが味方についたのは幸いだ。敵になる可能性のある存在が、マイナス1となり、味方がプラス1となった。

しかし、メンヌヴィルは所謂“悪者”のキャラである。原作でも、異常者として描かれていた。

(……アニエスみたいに、俺の予想を裏切ってくれることを祈ろう)

そう……：アニエス。メンヌヴィルもまた、彼女にとっては仇の人である。

内緒にしておく、という結論は、一瞬で出た。

そしてアクセルが留守にしている間、ゼルナの街の事務所でも、

変化があった。

「……フラヴィを、ねえ」

「……ああ」

娼館の全ての権限は、ナタンが握っている。その彼が、実質的な経営を誰に任せようと、何も不都合など無い。

アクセル不在の間に、ナタンは、フラヴィを部下として雇い入れ、娼館の管理をさせることにしていた。

ナタンは明らかに、アクセルの攻撃を警戒しており、事務室には妙な緊張感が漂っている。アクセルを怒らせたフラヴィを、勝手に味方に引き入れたことで、きつと何らかの制裁があると考えているのだろう。

「……惚れたのかい？」

「いや、違う」

もしかしたら……と思い、尋ねてみたが、ナタンは静かに首を振った。

「理由は、まあ、色々だ。流石に、男相手に出来ないような相談だつてあるし……それに、管理側が男だけつてもバランスが悪い。

……あとは、罰ってことかな」

「罰？」

「……俺は……その、ここが好きなんだ。いい場所だと思ってるし、もつと良い場所に行きたい。フラヴィだつて、もう行き場所が無えんだ。ここを居場所にして、ここを好きになって貰いたい。……ほ、ほら、あれだ。ただ殺すよりも、生かして協力させようと思つたんだ。自分たちが誘拐しようとしたのが、どんな子ども達な



のか。自分たちが傭兵まで巻き込んで敵対してたのが、どんな組織なのか……それとかを、全部知って、やっぱりここを潰そうとするんなら、そんな時は改めて……」

後半は、若干情けない口調になってしまったが……アクセルはじつと黙り込んだまま、ナタンを見つめていた。

(全く……主人公みたいな事を言いやがって)

アクセルは思わず、ふつと微笑む。

「……イシユタルの館の管理は、全部ナタンに任せてるんだ。そのナタンが選んだ人間なら、好きにすればいいよ」

「お、怒ってない……のか？」

「別に。ところで僕も、一人、仲間を連れて来たんだ」

「え？」

合図を受け、部屋に入ってきたのは、顔に火傷跡のある大男だった。右目を含めた顔半分は、マスクで覆われており、口元の笑みは凶気を感じさせる。

「紹介しよう、“白王”のスルトだ。火のトライアングルメイジ」

「よろしく頼む」

「お……おお」

異様な風貌の男に、若干気圧されつつ、ナタンは取りあえず返事をしておいた。

「特技は殺し合い。好物は、肉が焦げる匂い……」

「おいっ、ベル！？ 何かヤバイ趣味持ってるそうなんだけど、こ

いつ！」

「何を言ってるのやら。彼はただの、類い希なるステーキ職人の素質を秘めたオジサンです」

「嘘だつ、絶対嘘だ！ いいのかよつ、こんな危険物を……」

「酷いなあ、僕の友達に向かって」

既に一通りの葛藤を終えたアクセルは、余裕を持ってナタンに話しかけることが出来る。

「天災……みたいなものさ」

冗談めかしてそう言うが、アクセル自身、その言葉が一番しっくり来ると感じた。

流石に傭兵の世界で、メンヌヴィルという名は有名なので、単純にスルトに変えさせた。そして彼が、再びメンヌヴィルと名乗る時は……恐らく、アクセルから離反する時だろう。

彼はアクセルにとって、正しく天災のようなものだった。人の手では立ち向かえず、それ自身をコントロールすることなど出来ない。出会ってしまった以上、何とか受動的に対応していくしかないのだ。

(……そうだ、裏切られたらどうしようもない。束になったって敵わない。だから、無駄なんだ、考えるだけ。気にしても仕方がない)

未だ何か言いたげなナタンだったが、彼もまた、アクセルを一応信じてはいる。よって、最終的には受け入れるしかなかった。

ナタンと別れたアクセルは、スルトを従えて、バルシャを探そうとした。

「おや、坊や。何でこんな所にいるんだい？」

少年を見つけ、そう尋ねてきたのは、赤目の女……フラヴィだった。声を掛けてから、後ろにいる大男に気付いたらしく、若干慌てた素振りを見せる。

しかしふと、気付いた表情になり、フラヴィはスルトの前に立った。

「……………」

フラヴィは突如、身体を沈めると、両膝と両手を……そして額を地面に擦りつけ、スルトの足下に平伏す。アクセルは初めて、彼の困惑した顔を見た。

「頼める筋合いじゃないってのは……分かってる」

スルトはフラヴィの顔を知っているが、ラファランが個人で勧誘した彼の顔を、フラヴィは知らない。よって、フラヴィにとっては初対面の相手である。

土下座したまま、彼女は続けた。

「殺されたって、おかしくは無かった。命を助けて貰っただけで、有り難いとは思ってる。けど……何なら、私の命と引き替えだっていい。頼む。攫われた仲間達を、どうか……………」

恐らくナタンはフラヴィに、自分の背後にいる存在を教えたのだろう。教えたのはその存在だけで、具体的な情報は漏らしていないらしいが。

フラヴィはどうやら、スルトこそがその存在であると見たようだ。

困惑した表情を見せるスルトは、助けを求めるようにアクセルを見た。

「攫われたのは、四人。二人は一週間ほどでここに帰り、あとの二人は交渉中」

クルコスの街での、思わぬ滞在延長の間に手を回した、アクセルの成果。

少年の声に、フラヴィは驚いたように顔を上げ、跪いたまま背後を振り向く。

「詳しくは、ナタンにでも聞いて。……それじゃ」

やはり未だ、どこか、気持ちの整理が付いていない部分がある。

単純に、マチルダやティファニア達を誘拐しようとした、感情的な部分。そして、メンヌヴィルと殺し合いをしてしまう羽目になった原因の一端を、彼女が担っているという、損得での部分。

呆然としたフラヴィを残し、アクセルはスルトを連れて再び歩き出した。

「……“熱”に、当てられたな」

「ん？」

ぼんやりと、独り言のような彼の呟きに、アクセルは首を傾げる。

「あの女から、静かで、力強い“熱”を感じた。……よほど、仲間を大事に思っているのだろう。……やはり、俺とは違う」

その言葉は、どこか自嘲を含んだようなものであった。少なくとも

もアクセルは、そう感じ取った。

彼の言うその熱が、ナタンのものと同種であれば、フラヴィもまた、人の上に立つ素質を持つのだろう。

「……………スルト」

「何だ？」

「あの女も……………僕の、大切なものだと思っていてくれ」

「……………了解した」

## 第十二話〈虎穴〉（前書き）

今回、本編の後ろにおまけがくつついています。

人を選ぶ内容かも知れませんが、挿絵OFF（イラストではなく画像ですが）とブラウザバックのご用意をお願いします。

## 第十二話<虎穴>

メンヌヴィル改め、スルト。彼の加入は、ファミリーの戦力に大きく貢献したと言える。そうならそうなら仕方がない、と裏切る可能性は無視しているが、今のところそんな素振りは見せなかった。

(……考えてみれば、主人公側という、正義にとつての悪なわけ。俺ら……と言うか俺だって、正義か悪かと言われれば、間違いなく暗黒面だし。意外と、相性いいんじゃないのか?)

そんな風にポジティブな事を考えられる程には、アクセルの意識にも余裕が出て来た。

彼は、呆れるほどに強かった。魔法すら使わず、杖として契約しているメイスのみで、戦闘を終わらせてしまった事もあった。生半可な連中が攻撃を仕掛けて来ても、鎧袖一触と言った所だろう。

“ラパン”のフラヴィ。彼女もまた、大いに役に立ってくれていた。

彼女はスルトと違い、戦闘能力が無く、その分アクセルとしては対処できる存在だが、そんな未来は先ず無いだろうと思っている。

遅参の彼女が頂点に立つことに、他の娼婦達の反発が起きるのではないかと危惧していたが、寧ろ歓迎されているらしい。そもそもフラヴィは、娼館を信用していなかったから闘争を選んだわけで、娼館側に回った今は、信用がどうのこうのではなく、自分に何が出

来るか、という問題に変わった。そして、同じ立場の人間が権力を得るのはやはり有益だと考えられたらしく、そこに元々信頼されていたフラヴィが収まることに、異を唱える娼婦はいなかった。

娼館の仕事をフラヴィに譲ったナタンには、ボスとして、より足場を固めて貰うことにした。東地区全体の顔役としての信用を勝ち取るため、厄介ごとには積極的に介入。代官のアクセルとの繋がりを活かし、その権力を使えば、トラブルもスムーズに解決出来る。

バルシャは、はつきり言って非の打ち所がないくらいに働いてくれている。自警団の運営からナタンの秘書的な仕事、果ては荒事まで、何でもこなせる万能タイプで、能力的にも人柄的にも、アクセルが心から信頼する数少ない人間だった。

アクセルはここに来て、組織のバランスが取れたのではないか……そう考えた。

三本足のテーブルは、傾きはしても揺らぎはしない。バルシャ、スルト、フラヴィの三人が足となり、上のナタンを支えてくれれば、少なくとも揺らぐことなど無いのだ。例え大きく傾いていようが、元々ヤクザなど、社会からドロップアウトした人間。傾いているくらいがちょうど良いのかも知れない。

「……何してんだ？ あいつ……」

最初に気付いたのは、ナタンだった。

イシュタルの館、事務所の窓の外でまた、アクセルが妙な事をやり出している。

バルシャ、フラヴィも、窓で切り取られた中庭を見た。

「……くくく」



窓の下に座り込んでいたスルトが、小さく笑った。盲目の彼だが、顔はアクセルの方を向いている。

「お前らには感じられんだろうが……あいつはなかなか、とんでもない事をしているぞ」

「どんな事だい？」

「わからん」

「わからんってお前……」

「くくく……」

漠然とした答えに、若干呆れ気味のフラヴィとナタンだったが、取りあえず庭に出て、観察を続けた。

アクセルは少し腰を落とし、大地を踏みしめ……指先を揃えた両手を前に伸ばし、何かを支えるような姿勢を保っている。目は半開きで、自分の鼻先か、地面を見つめるような視線。

別に彼は、眠っているわけではなかった。

（北斗羅漢撃！……ってな。そう言えば、俺、前はジャギが嫌いだったんだよなあ。けど“極悪ノ華”でコロツときちゃって、それで“北斗無双”のジャギ幻闘編で大好きになって……）

集中していたわけではなかった。頭に次々に浮かんでくる、取り留めもない事を流れるままに任せて……そう、全てを……在るがままに受け入れ、そのままに任せて。

「……何をしてるんだい？」

日課の修行を終えたのか、アニエスがそう言いながらアクセルに

近づく。眠っているのかと疑ってしまう程、少年は無反応だった。

「おい、小娘。邪魔をするな。こっちへ来い」

スルトが座ったまま、ア二エスを手招きする。

一度、びくりと身体を震わせた彼女は、そっとアクセルの後ろに回り……大きく遠回りしつつ、ナタンの隣に並んだ。

メンヌヴィルの顔は覚えていなくても、火のメイジに対する恐怖心は大きい。

嫌われたもんだ、と、自嘲気味に笑うスルトも、勿論ア二エスの顔を覚えてはいなかった。

「……おいおい」

数分して、ナタンが呆然とする皆を代表するかのようになり、呟く。チチチ、と甲高い声を響かせながら、アクセルの肩に小鳥が止まった。そのまま、毛繕いを始める。また一羽、今度は左腕に小鳥が降り立ち、とんとんと掌に向けて跳ねていった。

やがて、アクセルがはつきり目を見開くと、小鳥たちは慌てたように飛び立っていった。

「……決めたよ」

集まった皆に、少年は微笑む。

「決めたって、何をだ？」

「僕の二つ名。どうしようか、ずっと悩んでただけ……決めたい。『大樹』のアクセル。そう名乗るよ。……って、何なの、その顔は」

通常二つ名は、属性と関連づけたものを付ける。

アクセルの属性は、未だはつきりしていない。普通は既に、はつきりと適正が別れている筈なのだが、どうもアクセル自身、断言は出来なかった。敢えて言うなら、一番苦手なのが火、風と水が得意で、一段下がって土。一応表向きには、風のラインクラスとしてある。

よって、複数の解釈が出来るような、全属性に関連づけられそうなものは無いか……そう悩んだ末での結論だった。

いいアイディアだと思うのだが、どうもナタンの……そして皆の反応は、芳しくない。

「いや……地味じゃねえか？」

「いい事じゃん」

名乗るとしたら、表向きの貴族として……アクセル・ベルトランド・ラヴィスとして名乗るのだから、地味であるのは寧ろ長所だ。将来当たり障りのない平凡な子爵となった時、木偶の坊とか、ウドの大木とか揶揄されそうだが、植物のような人生、それこそアクセルの望むところだった。

「じゃあ、何がいいの？」

一応、皆にも意見を聞いてみた。

「“誘惑”のアクセルは？」

「“嗜虐”のアクセル」

「“黒幕”のアクセル……などどうでしょう？」

「“両性”のアクセルとか？」

「“天使”のアクセルだな」

上から順に、ナタン、アニエス、バルシャ、フラヴィ、スルトである。

「おっと、まさかの四面楚歌とは。……皆。スルトが一番まともで好意的って時点で、おかしいと思わないのか？」

自分が、決して善人と呼ばれるような人間ではないと、アクセル自身よく分かっているつもりだが……それでもシヨックを受けないわけでは無い。

「バルシャ……君だけは、最後の良心の砦だと……僕は、そう思っ  
て……」

「も、申し訳ありません。決して悪意があつたわけでは無いんです」

「……あのね、寧ろ、悪意があつて欲しかった。一番マシなのはスルトなんだけど……僕には、詳しく理由を聞く勇気が無い」

「一般に天使は、両性具有と言われて……」

「だからっ、聞く勇気は無いの！ 臆病なままでいさせてよ！」

かなり悩んだ二つ名だが、そもそもそんなものを口にするのは、戦闘の時なのだ。言う必要がある状況を迎えてしまったら、寧ろアクセルにとっては不味いのである。結局、アクセルの努力は二つ名を使わない道を選択していくことでもあるので、こんなに悩む必要無かつたんじゃないか……と、それなりに落ち込んでしまった。

「……ところで、あれは何だったんだ？」

部屋に戻ったナタンは、早速アクセルに尋ねてみる。

「ああ、ちよつと実験をね。極限まで心身をリラックスさせて、精神力を巡らせればどうなるか、試してみたんだ」

自分の能力をどのように伸ばしていくのか、そのアイデアも前世の漫画を参考にしていた。

使えそうなのはONE PIECEの六式、そしてHUNTER×HUNTERの念能力。六式も、特に“剃”は無理そうなので結局五式までだろうし、念能力ほど汎用性も無いだろうと判断して、新たに構築していく必要があった。

まずは“識”。これは、自分の精神力……もつと言えば精霊様の存在をはつきり認識し、号令を出して制御することで、既にクリアしている。まだまだ練度は上げられそうだが。

次に“絶”。周囲を漂っている精霊を、自分の体内へと隠して目視できなくする。何となくやってみたのだが、何の役に立つのか未だ不明。ひよつとしたら意味がないかも知れないが、精霊を操る訓練にはなる筈だ。

そして“焦”。全ての精霊を、どこか一カ所に固めて固定する。拳に集めればパンチ力が増す、などということはなく、これも“絶”と同じく、無意味な行動かも知れない。

最後に“然”。これが、先ほどの行動だ。自然物と同化するようなもので、小鳥もアクセルを樹木か何かだと錯覚した。

“識絶焦然”を、四行と名付けることにした。他人に伝授できるような類の物かは分からないので、あくまで、自分の整理の為である。

「ふふーん、ふん、ふん……」

その日、また女装してアリスとなったアクセルは、やたらと機嫌が良いらしく、常に微笑を浮かべて鼻歌混じりに厨房に立っていた。ナタンは単純に、能力の開発が成功したからだろうと思っっている。

「さて、出来た出来た」

ティータイムの予告はしておいたので、食堂には既に皆が集合していた。

ナタン、バルシャ、スルト、フラヴィの、主要人物。そして、アニエス、マチルダ、ティファニア、ミシエルの四人。

「どうい風風の吹き回しだい……?」

アニエスは紅茶を注ぐアクセルに、怪訝そうな顔で尋ねてみる。配られたケーキは、フルーツや生クリームをふんだんに使用し、砂糖菓子の飾りまでついた、手間のかかったもの。しかも、それが自分にも二切れ配られている。

いつもは、お茶会などとはつきり時間を指定されない。適当に茶菓子が用意されており、それを皆が、手の空いた時に適当につまむ。食後のデザートが出される事もあるが、アニエスには一つしか配られない。

更には今回、アクセルは誰にも手伝わせようとはしなかった。全て自分一人で材料を調達し、自分一人で調理し、今も自分一人で、給仕のように皆の世話をしている。手伝いを申し出たバルシャや、立ち上がるうとしたマチルダやミシエルを、笑顔で制した。アリスの姿で、エプロンまで着ているので、本当にメイドか何かにか見えな

「さあ。それじゃ、頂きましようか。あ、紅茶のお代わりは、言っってくださいね」

「……おい、アニエス。気のせいかな？ 俺の皿なのに、ケーキが二つも乗ってるぞ。これは本当に俺の皿かな？」

「そのようだね、ナタン兄者。今夜は月が一つになるんじゃないかい？」

基本的にアクセルは、アリスの姿に女装している時は、猫を被るよって、今アクセルがニコニコと笑顔なもの、別におかしい事ではない。

しかしそれでも、アクセルはアクセルなのだ。

「……何か、盛ってるわけじゃねえよな？」

警戒するナタンの言葉に、既に半分ほど食べていたフラヴィーが、ハツとしてアクセルを見た。彼女には、そうされてもおかしくないという自覚がある。

「イヤですわ、お兄様。テファ達も食べているのに」

「お、俺だけだったら盛ってたのか!？」

「それでしたら、カップに塗りつけた方が確実ですし」

「ええっ!？」

「ふふ、冗談冗談」

いつものコイツか……と、アニエスもナタンも思い直し、一つ食べてもまだ一つ残っているという、未曾有のケーキを楽しむことにした。

そして、夕食の時間。

「……おい、質問だ。今日は誰の誕生日だ？」

ナタンは取りあえず、皆に尋ねた。

テーブルに所狭しと置かれた大皿は、ご馳走と呼んで差し支えない。

牛肉も豚肉も鶏肉も、魚介類も野菜も果物も、パンもワインも、そして、アクセルがあればほど大事にしていた試作品の地酒も、惜しげもなく振る舞われていた。

そして、食卓には……社会的地位を考慮して、イシュタルの館に滅多に姿を現さないローランまで来ていた。今晚に限って、何故かアクセルには是非にと招かれたそうだ。

「いいからいいから。さあ、みんなグラスを持って。……あ、いや、やっぱ持たないでいいよ。疲れるだろうし」

アリスでもなく、ベルでもなく……そこには、アクセルがいた。

自分以外の九人をさっさと着席させ、グラスを持たせると、一人だけ起立したまま、勿体ぶって咳払いをする。

「それじゃ、ちょっと長くなるけど、僕に挨拶させてくれ。……

まずは、ナタン」

「え？」

突然名を呼ばれ、ナタンは驚いたように肩を震わせた。手に持つグラスの中のワインが、跳ねるようにくるんと回る。

「出会ったあの日から、色んな事があつたねえ……」



「……いきなりどうした、そんなしみじみと」

「君がいなければ、僕はファミリアを実現出来なかっただろうし、もし出来ていたとしても、とっくに潰れてしまっていただろう。……ありがとう、仲間になってくれて。これからも頼むよ」

「……何なんだ、一体。変な物でも拾い食いしたか？」

アクセルは別に、何か邪心を持ってそんな事を言ったわけではない。それでもナタンが怯えるのは、やはり普段の行動故だろう。

「次に、ローラン」

疑心暗鬼に陥るナタンを余所に、アクセルは今度はローランにグラスを向けた。

流石にローランは、少年が本当に感謝していることを勘付いたが、それは胸にしまっておく。

「いつも、表側から組織を支えてくれていた君にも、感謝している。娼館に、ローランみたいな社会的地位がある人間を、おおつぴらに呼ぶことは出来ないけど……それでも、知っていて欲しいんだ。僕も組織も、あらゆる面で、君には本当に助けられている」

「光栄です、アクセル様。こんな老骨がお役に立つのでしたら、無上の喜び」

「ああ。これからもよろしく。……そして、バルシャ」

名を呼ばれた彼は、冷静だった。ナタンのように取り乱したりせず、背筋を正し、両手を太腿の上で揃え、アクセルに向き直る。

「君みたいなの、何でも出来る優秀な人材が仲間になってくれたことに、本当に感謝している。ナタンや僕の至らない所を支え、常に力になってくれた。それに正しく報いることが出来ているのか、非

常に不安ではあるけど……これからも、お願いします」

頭を下げたアクセルに、流石にバルシヤも驚いた。

「どうか、お止め下さい。私のような者に……」

「“のような”……とか、言わないでくれ。少なくとも、君が使っている言葉では無いよ。……さて、スルト」

この状況の中で、彼だけが、何の気負いも見せてはいなかった。頬杖をつき、口元には笑みを零しながら、アクセルの言葉を待っている。何を言い出すのか、まるで歌劇の続きをのんびり待つかのように、楽し気だった。

「まず、あの火事の時、助けてくれてありがとう。君がいなければ、流石にもう、駄目だったかも知れない」

「くく、気にするな」

「そして、ファミリーに加わってくれたことに……ありがとう。」

“友よ”」

スルトは、いつメンヌヴィルに戻ってもおかしくは無い。そしてそうなれば、止めようがない。

それを踏まえた上で、アクセルは彼にグラスを向けた。

「……“友”か。やはり、悪くない響きだ」

「僕も同感だよ。そして君とは、これからも良き友でありたい」

「いいだろう、友よ。俺もそれを願おう」

アクセルはフラヴィーに向き直る。

「フラヴィー。残念ながら僕らの出会いは、決して良いと呼べるも

のでは無かった。そのことで、色々と大人気ない態度も取っちゃったけど……感謝してる。君のお陰で、女の子達の不満も大分解消されたようだ。これからも、彼女たちの良き代弁者となって欲しい」

「……あんたに礼を言われると、何だかむず痒くなるねえ」

口調はぶっきらぼうだが、彼女の心には、未だ罪悪感があった。自分が攻撃しようとしたものを、害しようとしたものを、好きなものへと変える……それが罰だろうと、ナタンはそう考えた上で、フラヴィーに管理を任せた。そしてそれは、成功したと言える。罪悪感とは、間違っていたことを気付いたあの時よりも、寧ろ大きくなっていった。この居場所を、そしてマチルダやティファニア達を大切に思うようになればなる程、それはこれからも肥大化するだろう。

「頼りにしてるよ、フラヴィー」

「……わかったよ。どの道、もう私に行き場なんて無いんだし」

拗ねたような口調を、微笑みながら受け入れると、アクセルは一旦グラスを置く。数秒ほど黙っていたが、彼は再びグラスを持ち上げ、アニエスの方を向いた。

「アニエス、ありがとう」

「……何だ、藪から棒に」

アニエスは確かに、特にこの館や組織に貢献してはおらず、彼女自身もそれを自覚している。寧ろ、今までのような感謝の挨拶など、自分にある筈も無いので、早く終わって目の前の料理に手を付けられないものか……そればかりを考えていた。

「……君は、焦る必要なんか無い。着実に強くなっているしね」

「そうか？　いまいち信用できないんだが……」

「今まで、何本の木刀を駄目にしたと思ってる？　継続は力なり、真面目にやっている証拠だ。……まあ、まだまだ僕には遠く及ばないけど」

「うるさいな、すぐに追い抜いて見せるさ。その時は、たつぷりと後悔させてやるから……覚悟し給え」

「はいはい、楽しみにしてるよ」

それでもやはり、楽しそうな、嬉しそうなアニエスの顔に、思わず顔を綻ばせ、彼は続いてマチルダとミシエル、二人の名を呼ぶ。

「二人とも、ありがとう。ナタンやバルシャも、二人が事務を手伝ってくれているお陰で、とても助かっているよ。そして、いつもお疲れ様。これからもよろしく」

シンプルな挨拶だったが、二人は笑顔で頷いた。彼女たちも、言いたいことはあるのだろうが、それは出来ない。

一瞬、表情に翳りを見せたアクセルだが、すぐに笑顔を戻し、隣のティファニアの頭を撫でた。

「テファ。可愛い過ぎる。以上」

「それだけかよ」

「それ以上の、どんな言葉が必要だい？」

ナタンにすました顔で答えながら、アクセルはティファニアの髪を撫でる。少女はくすぐったそうに身を振り、白い歯を見せて笑った。

「慰労パーティー、感謝パーティー……色々言えるけど、とにかく、こういうのも悪くないだろ？　みんな、僕にとっては必要な人

間なんだ。一度、きちんと感謝しておこうと思ってね」

ナタンなどにしてみれば、むず痒いやら小っ恥ずかしいやら、複雑な気持ちだが……それでも、はっきりとアクセルが表した感謝は、嬉しい。得体の知れない少年が、そんな感情を抱いていたことも。

豪勢な夕食の時間は、実に穏やかに過ぎていった。

風呂を終え、マチルダやティファニア達がベッドに入った頃、アクセルは事務室に顔を出してみた。

中にいたのは、大人四人。ナタン、バルシャ、スルト、フラヴィイ。

「お疲れ様」

「おう、お疲れ……何だか嬉しそうだな？」

一番付き合いの長いナタンは、やってきたアクセルの様子を見てそう言った。確かに、どこことなく雰囲気は柔らかかで、鼻歌でも歌い出しそうだと感じられる。

「聞きたい？ ねえ、聞きたい？」

「ああ、さつさと言えよ」

「テファがね、背中を流してくれた」

「それはそれは」

あの少女達に関する事だというのは、予想通りだった。ナタンがお座なりな相づちを打つが、アクセルは相変わらず嬉しそうにニ

やっている。

「ごう、お疲れ様って感じでさあ……一生懸命ごしごしと。嬉しくってさあ、つつい好きだけ絵本読んであげちゃった」

「……風呂の後？」

「そう、今まで」

ナタンにつられ、フラヴィも時計に目をやり、彼等が風呂場に向かった時間を思い出す。

「……あんた、何冊読んだんだい？」

「わかってないなあ、フラヴィ。数は問題じゃないんだ。喜んでくれたのが大事なんだ」

呆れる彼女に、アクセルも首を振って呆れ返した。

この少年が、あの少女達に向ける愛情には、ある意味父親以上のものがある……と、父親を知らないフラヴィは、漠然とそう思っている。

「ついでに告白しようか。あの娘達は勿論、僕はここにいる四人だって大好きだ。ローランも含めてね」

スルトが顔を上げていた。

盲目の彼に、視界など関係ないが……光を失う前の習慣故か、それとも単純に能力をより発揮する為か……彼は何か意識を集中させる時、そちらの方向に顔を向ける。今、その方向の先にはアクセルがいた。

「ナタンと、ナタンを支える三人。組織として、実に安定した、理想的な形だと思わないか？」

三人とはつまり、バルシャ、スルト、フラヴィー。  
アクセルは入っていない。

「つまり、今なら……この状態なら……僕がちよつとばかり、取り返しの付かないかも知れない事をしでかしても、些細な問題で……十分に、組織はやって行けるわけだ」

「やっぱ、何か企んでやがったか」  
「まあね」

アクセルはナタンに向かって、肩を竦めて見せた。

「……何を、企んでいる？」

誰よりも早く尋ねたのは、スルトだった。その顔に、いつものゆとりは無い。

彼だけは、アクセルの外ではなく、熱という……ある意味の“内”を見ていた。

「別に……人生は長いんだ。僕に今回許された時間は、明日から四日間。レオニー子爵に招かれ、自領の不祥事に対する改めてのお詫びを受けに行く……それで口裏を合わせるよう、子爵にもローランにも頼んである。だからこれから四日間、僕は……熱血だ。そう決めたんだ。なあに、失敗しても、死ぬわけじゃないから……気楽なもんだよ」

そこでようやく、アクセルは背中に隠していたものを取り出した。その正体に気付けたのは、“それ”がアクセルに届けられた時、唯一傍らにいた、バルシャ。

アクセルが以前から求め、ようやくたった一つだけ手に入れられた、マジックアイテム。

「最後になるかも知れないから、言っておくよ。みんな、本当にありがとう」

アクセルは拳銃のような形状をしたその銃口を、自らの喉に押し当て、引き金を引いた。

マジックアイテム“ラ・メイユール・ベルメール夢の姑”。効果は、声を封印すること。

以下は、本編と関係ありません

皆様のおかげで、PV30万アクセス、ユニーク3万を突破致しました。驚きです。本当にありがとうございます。

何かしよう、しなければと思ったのですが、絵が駄目なので、どうでもいいおまけを付けました。

ただ、耐性の無い人には強烈かも知れませんが、冗談でも同性愛



が許せない人はバツクしてください。

題・相関図ジェネレータで遊んでみた。

まずは、男性陣の相関図

> i199900 | 2695 <

- ・バルシャ離反フラグが立ちました。
- ・スル ナタが判明しました。
- ・アクセルとスルトの関係で、逆だとアクセルが騒いでいます。
- ・ローランが大暴れしております。

女性陣の相関図

> i199901 | 2695 <

- ・ハーフェルフ最強伝説が始まりました。
- ・銃士隊イコール百合の園疑惑が高まりました。
- ・ミシエル、マチルダにアニエスを寝取られる疑惑が発生しました。

・ティファニアとフラヴィの間に、マチルダに関する何か（ドロドロとした取引）があった可能性が出ました。

アクセルについての女性陣の評判

> i 1 9 9 0 2 | 2 6 9 5 <

- ・所詮オリ主（笑）。
- ・上記以外に言うことがありません。

ではナタンはどうなのか

> i 1 9 9 0 3 | 2 6 9 5 <

- ・風呂場での前科がある為、アクセルに殺されるかも知れません。
- ・アクセルに殺されなくても、全国のハーフェルフファンに殺されます。

最後に、オリ主と、虐殺系火のトライアングルお二人

> i 1 9 9 1 2 — 2 6 9 5 <

- ・アクセルはオリ主から、寝取られ系オリ主に転職しました。
- ・作者はダメーヂを抑える為、コルベール女体化の構想を始めました（本気度20%）。

最後に、こんな作者ですが、よろしければこれからもお願い致します。

## 第十二話<虎穴>（後書き）

ジエネレータ管理人のららぴまさん、どうもありがとうございました。

そして皆さん、ごめんなさい。

### 第十三話く宝光く（前書き）

前話のおまけから、更に妄想がエスカレートしました。  
挿絵OFFと、バックの準備をお願いします。  
後書きに女体化落書きあります。

### 第十三話<宝光>

薄氷が粉々に砕け散るような、そんな甲高い音が響いた気がしたが……それが自分だけに聞こえたのか、それとも皆にも聞こえていたのか、わからない。

喉にじわりと、熱が広がった。火傷するほどではないが、少し熱めの風呂に入ったような、散髪屋でおしほりを乗せられた時のような感覚。

(あー……)

口を開け、発声を試みる。しかし、聞き慣れている声は耳に届かない。確かに唇を上下に開き、肺の空気を喉で固め、声を絞り出した筈なのだが……相変わらず、何の音も聞こえない。

(本当に、声が出なくなった。偽物だったら、売った商人を殺してやるうかとも思ってたけど……)

隣に、鏡がある。そちらを向くと、自分と目が合った。

喉元に浮き出たのは、青白いルーン文字。

(このルーンは……逆アンスールに、逆マンか。誤解、情報の混乱、人間関係の不調和……別に、予想外のルーンじゃないな。平凡と言えば平凡、当たり前な……)

やがて、じわじわと染み込むようにして、ルーンは薄れ消えた。

誰一人として、声を出す者はいない。

そのマジックアイテムを知っていたバルシャだけではなく、机の上で頬杖を付いていたナタンも、筆記の練習をしていたフラヴィも、スルトも、見えない目でアクセルを凝視し……何が起きたのか、想像が及んだらしく、啞然として口を開いていた。

静寂を破ったのは、甲高い金属音。

アクセルが開け放たれたままのドアを振り向くと、廊下にはスプーンが散らばっており、そしてその中心には、マチルダが立っていた。恐らくはふと目を覚まし、サイドチェストに放置されていた食器を、今夜のうちに片付けてしまおうとしたのだろう。

マチルダ

いつものように名を呼ぼうとしたアクセルの唇は、空しく上下しただけだった。

少女の顔が、見る見るうちに萎んでいく。震える両手で自らの顔を包み、やがて身体全体を震わせ始めたマチルダは、突然アクセルの元に飛び込んだ。

「っ!?!」

腰に抱き付いてきた少女を何とか受け止めたが、その少女より小さな身体では、勢いを殺すことは出来ず、アクセルは背後の机に背を強かにぶつける。衝撃に顔を歪ませるが、呻き声も出ないまま、床に座り込んだ。

落ち着いて、改めて、抱き付いてきた少女を眺める。マチルダは

小刻みに震えながら、少年の腹に頭を押しつけていた。非力な腕が、精一杯にアクセルの腰を抱きしめている。

(……大丈夫)

言葉は出せない故に、身を以て示すしかない。

左手でそっと、彼女の震える身体を抱き返し、右手で頭を撫でた。いつも思うことだが、彼女の、自分のそれより少し濃い髪は、適度な反発によって指を絡める。それがまるで、愛撫のように心地よかった。

マチルダはくしゃくしゃになった顔を上げ、水没したような目でアクセルを見つめ、唇を震わせる。アクセルは寝間着の袖で、そっと顔を濡らす涙を拭ってやると、出来る限り柔らかい笑みを見せた。

(さて、時間は有限。いつまでもこうしてても……な)

やがてアクセルは、マチルダを抱き付かせたまま立ち上がる。そろそろ離してくれないかと、視線で彼女に語りかけるが、少女は幼児のように首を振ると、今度は彼女より少し低い位置にある肩に抱き付いた。

アクセルはもう、それを振り解こうとはしない。白墨を手に取り、壁に掛けられた連絡用の黒板に、手早く文字を書き込んだ。

“これから地下に籠もる。四日で決着を付ければ、僕の勝ちだ”

その言葉を残すと、アクセルはマチルダを伴い、ドアから去っていった。

事務所は、相変わらず静寂に包まれていたが……既に全員、空白



のような呪縛から解放されていた。ナタンとバルシヤは、ハシバミ草を口いっぱい押し詰められたような顔をして、フラヴィは自発的な行動が出来ず、ちらちらと他の三人を窺っている。スルトは唇を結び、黙り込んでいた。

「…………一言くらい…………」

ナタンがようやく、口を開いた。

「一言くらい、相談しろってんだよ…………あのバカが！」

「……………」

拳を震わせるナタンの言葉は、バルシヤの代弁でもあり、バルシヤは目を瞑る。

「あいつは…………一体何を…………」

「決まってるだろが！！」

フラヴィの言葉が引き金となり、激情が解放され、ナタンは硬く握った拳を机に振り下ろす。初めて聞く彼の怒鳴り声に、フラヴィが思わず首を縮めた。

「声の封印が解けないからってよお、テメエで試しやがった！」

あいつは自分を実験台にしゃがった！ 退路を断ちやがった！」

アクセルの行動は、確かにファミリーに損害を与えるものだが、ナタンの怒りはそのことではない。

「俺らは一体、何なんだよ！？ そこまで頼りねえのか！？ どれだけ信用ねえんだ！？ 何も言わねえまま、勝手に突っ走りやが

って！」

「……もし……」

そこで初めて、スルトが口を開く。彼は見えない目で、じつとナタンの顔を見つめた。

相変わらず見る者を引きずり込むような、恐怖を感じさせる視線だが、威嚇するわけではなく、真剣な目なのだ。

「もし、アクセルが相談していたら……お前はとうした？」

「決まってるだろうが、止めたよ！ 取り上げたよ！」

あの三人の娘達の声の封印について、ナタンも、何も思っていないわけではない。

しかし、彼はメイジではない。マジックアイテムに関する問題など、相手にするのは問題外の門外漢なのだ。そしてアクセルも、マジックアイテムの専門家ではない。

「止めて、どうする？」

「どうするって、そんなの……もつとじつくりと、焦らずに……」

「そして解決するのは、何年後だ？」

「わかるかつ、そんなもん！」

「そうだ……誰にも、わからない」

普段のスルトでは無かった。

彼にしては、あまりにも穏やかすぎる口ぶり。冷や水を注されたように、ナタンの熱も治まっていく。しかし、冷静になっていく頭でも、尚、アクセルの行動は納得できない。

ナタンだけではない。バルシャも、フラヴィも、そしてスルト自身も、己の中の感情の矛先に飢えていた。

「……声が出せなくなれば、詠唱が出来ない。つまり魔法が使えない。この四人の中で、それがどれほどの枷であるかを理解出来るのは、メイジである俺だけだろう。自分の声を封じるなど、伊達や酔狂で出来る事ではない」

「んな事あ、俺だってわかってる……。あいつがマジだったのもな」

アクセルは、容赦しない。自分の敵に対して、自分の大切なものを奪おうとする敵に対して。まるで駆除するかのよう、素直に人の命を奪ってしまう。

快樂殺人者ではない。ただ単に、それが彼の、自らの人生に横たわる障害を排除する方法なのだ。そこには歓喜も、血飛沫への渴望もなく、あるのはただ……。己の敵を、報復することすら許さずに、永劫の彼方へと追放してしまいたいという臆病さ。

「けど……何で、“今”なんだ？」

ナタンはどさりと、自分の椅子に座り込む。両手を垂らし、天井を見上げ、呆然と呟いた。

スルトの加入によって戦力が強化され、フラヴィが降ったことで娼館の内部が改善され……。組織の質が底上げされたという理屈は、ナタンにも分かる。しかしだからと言って、アクセルが必要無いわけではないのだ。

この街を、表と裏の両面から支配する……。彼はあの時、そう言った。アクセルには、代官という顔がある。寧ろそれこそが、彼の真正面とも言うべき肩書きなのだ。喋れなくなった代官……。貴族など、貴族社会でどう見られるのか。……。それは言うまでもなく、“無能”である。

その上アクセルは、未だ九歳。もし解呪の方法を見つけられなかったのなら、残りの人生を、その枷に付き合わせなければならぬ。

臆病な者が冒険を行うには、未だ早すぎるのだ。

もつとマジックアイテムについての研究を重ね、理解を深め、メイジとしての力量を高め、そして目途が立った上で、ようやく行うべき挑戦。

「……とある娘が、美しい宝石を求めた」

再び訪れた静寂を嫌うように、スルトが話し始めた。ナタンは目だけ動かし、彼を見る。

「年齢、未だ16。美しく、そして高価な宝石だった。その娘は平民で、そんなものを買う金など無い。勿論、その娘の親にも無い。親は言う、諦めろ、と」

「……何の話をして」

「いいから聞け、ナタン。もしお前がその娘の親ならば、何と云う？」

ただの与太話に付き合うつもりにはなれない。しかしナタンは、スルトのあまりに静かな声色に、それを無視することが出来なかった。

「……そりゃ、諦めろ、高嶺の花だ……とか。自分で金を貯めて買え、とか」

「その金が貯まるのは、いつだ？ 何しろ平民だ、十年二十年では無理だ。食いたい物を食わず、着たい服も着ず、見たい歌劇も見ず……そしてようやく金が貯まった、その時。その娘は、万感の思いを込めて宝石を購うのだろう。しかしその時、美しかった娘は既

に娘ではなく、年老い、病を患っているかも知れない。宝石を購うのに何十年もかけながら、結局は、手にしていられるのは数年だけかも知れない」

「……………」

「娘は……借金をしてでも、宝石を購うべきなのだ。確かに金は少なく、生活は苦しくなるだろう。だがそこに、金を貯める事と、何の違いがある？ 娘は、少なくとも娘であるうちに宝石が得られ、そしてそれを何十年と手にしていられるのだ。……その時娘が購ったのは、宝石ではない。宝石のように輝かしい、人生の時間なのだ」

スルトは壁に手をつき、立ち上がった。

「今、アクセルは……己の残りの人生の声、全てを賭け、あの娘達の、残りの人生の声を手に入れようとしている。“今でなくてもいい”ではない、“今しかない”のだ」

彼は腰のメイスを握り、その感触を確かめる。そして、俯いていた顔を持ち上げると、ドアに向かって歩き出した。

その背に、ナタンが声を掛ける。

「……………どこに行くんだ？」

「俺とすることが、熱に侵されたい。俺にも、“今しかない”のだ。俺に出来る事など、燃やすぐらい。燃やすことだけが、俺に出来ることだ。今、不穏な動きを見せている連中は、二つだったな？ そいつらは俺に任せろ。三日でカタを付けてやる」

言い終わる前に、スルトは部屋を出ていた。

「……………今しかない、か」

ぼつりと、ナタンが漏らす。

「今しかない、ねえ……」

顎に手を当て、肘を机に乗せ、一度瞼を閉じる。そして再び開いた時、ふっと、ナタンは笑った。

机に両手を置き、勢いを付けて立ち上がる。弾かれた椅子が、背後の壁に衝突した。

「バルシャ！」

「はいっ」

「あのマジックアイテム、もつと調達出来ねえか、クルコスの街に連絡だ！ 手に入れられるんなら、一つ残らず買い占める！ 流通経路についても、もう一度洗い直せ！」

「了解」

「フラヴィー！ お前に、イシユタルの館の全権を任せる！ 文字通り、全部だ！ 役に立ちそうな客には、存分にサービスしてやれ！ 貴族だろうと商人だろうと、骨抜きにしてやるんだ！」

「あ、ああっ」

「俺は、今集められてる情報をもう一度整理、検討してみる！ いいかつ、これから四日間は、俺らにとっても正念場だと思え！ いつもいつも、好き勝手に引っかけ回してくれやがるあのガキに、俺らの本気を見せつけてやれ！！」

平民には魔法は使えないが、平民でも使えるマジックアイテムは存在する。風石の力を使って飛ぶフネは、平民の技師によって操縦出来るし、声を封じるマジックアイテムも、メイジではない人間でも使用できるようになっている。

マジックアイテム“ラ・メイユール・ヘルメール夢の姑”

電池、動力とでも言うべき精神力は、使用者から吸収するのではなく、初めからマジックアイテムの内側に蓄えてられている。引き金を引くことでその力が解放され、銃口へと向かい、ルーンを刻み込むらしい。使えるのは一度きりで、使い捨てだが、シャチハタ型とでも言うべきか。

「……………」

手の中の、拳銃型のそれに、精神力を込めてみる。アクセセルは再び、その銃口を喉元へと押し当てた。

しかし、それをぐっと押し止めた手がある。

隣を見ると、蒼白な顔をしたマチルダ。

アクセセルは安心させるように微笑み、ゆっくりとマチルダの指を解いていく。彼女はそれ以上、止めようとはしなかったが、じつとアクセセルを見つめていた。

再び、あの、薄氷が砕け散る甲高い音が響いたが……今度は、喉には何の変化も無かった。

（再利用は出来ないか。まあ、当たり前だよな。それとも、重ね掛けが出来ないだけか……最初に込められていた精神力でしか発動

しないのか……一度使えば、壊れるように出来ているのか)

また、隣を見てみる。安心した表情で、マチルダが止めていた息を吐き出していた。

先ほどから、ずっとこの状態なのだ。彼女はアクセルの一挙手一投足、果ては指の動きに至るまで、神経を尖らせるようにして注意深く見守っている。

少し考えた後、アクセルは地下倉庫の壁に立て掛けられている黒板に向かうと、そこに文字を書いていった。

“もう夜遅い。お休み、マチルダ”

アクセルがそれを書き終える前から、マチルダも白墨を握っている。

“ここにいる”

再び、アクセルは考える。慎重に、言葉を選んだ。

“テファが寂しがるよ”

“テファもここに連れてくる”

(……そうなる、ミシエルも、それにアニエスもくっついて来そうだな)

この感覚は、前世でもあった。将棋のルールを覚えたばかりの頃、上手い友人と対戦した時、指す手指す手にカウンターを喰らわされ、じわじわとなぶり殺しにされた時のような……逃げ場が次々と失わ



れていく感覚。

“ 四日間だけ、ここに籠もる。だから外で待っていてくれ”

“ 私も四日間だけ、ここで過ごす”

駄目だ、と、アクセルは焦った。どんどん袋小路に追い込まれて  
いる。

“ お願い。集中したいんだ”

“ いるだけ。静かにしておく”

“ だめ。女の子はちゃんと寝なさい”

“ 子どもはちゃんと寝なさい”

幼い応酬が続き、ついにアクセルは、苦笑と共に諦めた。

こんな筆談による言い争いをしている暇など、自分には無いとい  
うのに。それくらいなら、一步でも解決へ向けて進むべきなのだ。

ルーン文字を使用していたことからしても、魔法に則った、メイ  
ジにとっては十分に理解可能なものなのだ。ならば、解明出来ない  
道理が無い。

既に用済みとなったので、件のマジックアイテムを分解してみる。  
仕組みは至ってシンプル、それだけに難しい。もう一つ、未使用の  
ものを分解出来ればいいのだが、無いものねだりはキリが無い。ど  
うやらスペースの大部分は、精神力を保管しておく電池に取られて  
いるようで、心臓部と呼ぶべき部分は銃口に集中していた。

十本の指の全てを活用し、マジックアイテムと自分の喉を、ディ  
テクトマジックで調べていく。

(ギアス、では無さそうだ。水系系統だけど、肉体の一部分に直接

作用するタイプか。それに風系統か……)

呼吸を繰り返してみる。呼吸音はあるが、寒い日に手を温めるようにはあーっ、と息を吐き出してみても、風が吐き出されるといった感じだった。囁き声も封じられている。水系統で肉体の動きを阻害し、風系統で補完しているらしい。

(よし……。まずは、ルーンを試すか)

(なあ、メンヌヴィル……助けてくれないか?)

傭兵にとっての戦闘は、仕事である。報酬を受け取ることを目的とした、労働である。

戦うことに意義を見出す、そんな者は少数派だ。戦闘行為が手段ではなく、目的になってしまっている。大部分は、確固たる信念や信条、正義を持たない、半分破落戸のような者たち。別に悪い事では無い。そんなものを持っているのは義勇兵と呼ばれるべきであり、そもそも傭兵とは別物なのだ。

金だけの繋がりであるので、当然、不利になればさっさと報酬分働いて逃げる。賞金稼ぎなどと同じく、死ぬまで戦おうとするのは愚か者だ。

命乞いは正道。スルトも、数多くの命乞いを見てきたし、その大半は自分に向けられたものだった。

現に、今も……。

「ブリミル様あつ！　どうかお助け」

「間違えるな。命乞いの相手を」

スルトは呆れたように、メイスを振り下ろす。彼に背を向け、天に向かって祈りを捧げていた男は、少なくとも痛みを感じる暇なく死ぬ事は出来た。ぱっくりと割けた頭部から、脳漿と血が零れている。

スルトはふと、あの少年の事を思い出していた。

（なあ、メンヌヴィル……助けてくれないか？）

少年はあの時、確かにそう言っていた。

そしてあの時から、彼の自問が始まっていた。

アクセルは言う、死ぬのが怖いと。恐ろしいと。

それは本心なのだろうが、それでもスルトは考える。ならばアクセルの本質とは、何なのか、と。

人は闇を恐れる。暗闇の中を、怖々と歩く。理由は当然、見えな  
いから。

既に世界が闇に閉ざされたスルトだが、それでも、まだ光を失っていないなかった頃の事は覚えており……“自分は闇など恐れない”などとは思わない。ただ単に、闇から逃れることが出来なくなり、順応するしかなかった、それだけだ。

死も同じだ。先が見えない。その中にはきつと、疑心暗鬼という名の鬼が棲む。

アクセルのあの時の行動を、やはり、命乞いだとは思えなかった。

何度も命乞いをその目で見て、見えなくなつてからはその温度を感じてきた。

「たつたたつ、助けっ」

そう、これが命乞いだ。武器を持つべき手には何も持たず、両手を組み合わせ、身動きが取れないように膝を畳んで座り込み、ただ嘆願する。自分は無害な存在である、殺す必要など無いと、必死に体現する。

スルトがその男の隣を通りながら、無造作に炎で焼き殺したのは、考え事をしていたから……それだけの理由。

（命乞いではなく、救いの手を求められたから？）

肉が焼ける匂いが、体中を満たす。しかしスルトは、常のようにただそれを楽しんではいなかった。

いくら自問しても、納得のいく答えは出ない。

「……八八っ」

しかし、それを不快には思わなかった。答えが出せない、という答えが出るたびに、スルトは人知れず笑っていた。得体の知れないもの……まるで、闇だ。

ああ、自分は闇を恐れていると同時に、それと同じかそれ以上に、

闇を愛している……それが自分の本質の一つだと、スルトは思っている。

そんな彼が、自問の果てにたった一つだけ導き出せた、アクセルの本質。

「そうだ」

勇敢にも剣を振り上げて襲いかかってきた、一人の青年。彼の身体を、無造作にメイスで払いのけつつ、スルトは両手を大きく広げ、赤く染まる天に向かって叫んだ。

「あいつは！ あいつはあの時！ 死を真正面から見据えていた！」

誰もが忌避し、目を背けようとする死を、他の何ものでもなく、ただ“死”としてそのままに見る。

少なくともスルトの、そしてメンヌヴィルだった頃の記憶に、あんな温度は見当たらなかった。

得体の知れない、初めての、記憶に無い、前代未聞の、史上初の、未曾有の……それらの言葉全てが、スルトの喜びを励起し、渴ききった彼の心を潤していく。

「何と！ 何と素晴らしい事か！」

メイスを振るい、燃え盛る火炎の一点を指し示す。突風が起こり、炎を吹き潰し、逃げようとしていた数人の姿を露わにした。彼等は皆、スルトに向かって怯えた表情を向ける。

「どうした？ 何をしている？」

笑顔のまま、スルトはその数人に向かって歩き出した。

「分不相応な夢を見て、その幻に手下達を付き合わせた罪。哀れな手下達を見捨てて、自分たちだけ逃げる罪。今日まで生きていた、罪」

「くっ、来るな化け物！」

彼等の中の、誰かが叫ぶ。命乞いが無駄だという事を知っているのは、この襲撃の一部始終を見ていたからか。

「俺は化け物ではない。足を引きずってやって来た、罰だ」

スルトはメイスを振り上げる。現れた炎球が、彼等の顔を真っ赤に染め上げた。

アクセルは、こいつ等とは違う。こいつ等のように、代わりがない。

果たして彼は、あの呪縛を解放できるのか。声を取り戻し、宝石のような人生を与えられるのか。もしも、それが出来たとすれば、何と素晴らしい少年なのだろう。

素晴らしい、だからこそ……スルトはやがてメンヌヴィルへと戻り、彼を灼くのだ。

「……“芝居は終わった。喝采せよ”」

灰となった、最後の数人に背を向け、恭しくお辞儀をし……スルトはその場を去った。



## 第十三話<宝光>（後書き）

以下閲覧注意

前話の感想のうち、頂いた二つともコルベール子に言及されており  
ました。

ので、思わず魔が差しました。

- ・胸が薄い
- ・幸も薄そう
- ・尼さんってかんじ

というイメージらしいので・・・

トリスティン魔法学院女教師  
ミス・コルベール（三十路越）

>i20080—2695<

嫁き遅れの中年女性。

新任のミスタ・ロングビルに一目惚れし、何とか食事に誘おうとす



るも、顔もまともに見られない。キモがられないかと、そればかり心配している。

コルベールに目を付けたアクセルは、前世の知識を総動員したり、ゼロ戦を持ち出したりして、彼女の興味を引くことに成功。良好な関係を構築しつつ、いつかゼロ戦だけではなく股間の操縦桿も握らせてやる、と密かな野望を抱いている。

しかし、そこに大いなる障害が。

「させるわけにはいかなあ、先輩」

「き、貴様は……ダブリまくりのメニューヴィル（40）……！」

立ちはだかったのは、コルベールの同期、なのにまだ生徒やってるメニューヴィル。

そして恐れていた事態が……

> i20081 — 2695 <

「残念だったな、先輩！ 昨夜目出度く貫通式だ！」

「／／／／／」

何と、三十年ものの初物を美味しく頂かれてしまった。

## 怒り心頭のアクセル

> i 2 0 0 8 2 — 2 6 9 5 <

しかし、両者の対決は意外な形で幕を閉じる。

> i 2 0 0 8 3 — 2 6 9 5 <

> i 2 0 0 8 4 — 2 6 9 5 <

「……具体的には？」

「そうだな。コメントが nice boat の洪水となる……と言えはわかりやすいか？」

「あともう一つ。何故のハンサムだ？」

「……流石にオリキャラ絵はハードル高すぎだろ（意識：誰か描いてくれねえかな）」

コルベールの眼鏡忘れ、メンヌヴィルが学ラン着てることなど、色々と申し訳ありませんでした。

そしてまた、相関図ジェネレーターで遊んでみました。

原作女性陣の、アクセルの評判（未登場編）

> i20085 | 2695 <

ここまでくるともう、宇宙意志か何か働いているとしか思えない。

## 第十四話<一敗>

「姉さん」

フラヴィを呼ぶ時、娼婦達の中にはそうやって親しみを込める者もいる。勿論、血は繋がっておらず、正式な契りを交わしたわけでもないが、それは彼女に対する、信頼と親愛の現れだった。

「……リリー又かい」

呼び止められたフラヴィは、長い付き合いになる妹分を振り向く。リリー又はパタパタと、足の裏を廊下に滑らせるようにして、小走りで近づいてきた。土足厳禁の板敷きは、相変わらず入念に磨かれており、彼女は少しスリッパ気味に停止する。

リリー又の表情は、この曇り空のようだった。

「あの……これ……」

「ん？」

フラヴィは、差し出されたリリー又の手に視線を落とす。小さな包みが乗っていた。

「お客さんからの、頂き物。滋養強壯の、妙薬だって……。その、あの人に……」

アリスという少女の正体も、その正体であるアクセルがどのよう

な状態にあるかも、フラヴィはリリーヌに打ち明けていた。他言するような女じゃない、という信用もあったが、それよりも、フラヴィにとつてはケジメの意味合いが強い。

真相を知らなかったとはいえ、フラヴィはリリーヌに、誘拐の実行を命じたのだ。リリーヌもまた、割り切れるような単純な心境ではない。フラヴィと同じく、罪悪感を抱え……フラヴィを諫めなかつた事を、自らの罪であると考えていた。

「自分で渡さないのかい？」

「邪魔になっちゃうかも知れない……。私に出来るの、これくらいだから」

「……そうかい」

包みを受け取り、きゅつと握る。中で丸薬が擦れた。

「わかった、渡しておくよ。それと、あたしが言えた義理じゃないけど……あんまり、気にしない方がいいよ」

罪悪感を持つな、というのも、無理な話だろう。

今、リリーヌに出来ることは、客を楽しませることであり……そしてそれが最終的に、アクセルの力となる。その為にも、彼女は明るさを取り戻す必要があった。

「うん……わかってる」

「それじゃ。お互い、頑張ろうじゃないか」

リリーヌと別れ、フラヴィは事務所の地下室へと向かう。

アクセルの行動は、結局、一夜明けて朝になれば、他の娘達の知るところとなった。

そもそも、隠し事など無理だったのだ。暇さえあれば可愛がり、暇さえあれば音楽を教え、暇さえあれば勉強を見て、暇さえあれば修行に付き合い、暇さえあれば遊んでやる。それが、ここでのアクセルの全てである。

そんな彼が突然、研究室としても使っている倉庫に閉じ籠もるなど、前代未聞の出来事だった。

地下に下り、倉庫まで来ると、扉の前に座り込む少女がいる。剣を抱き締め、膝を曲げ……かくんかくんと、頭を上下させている。

「……………」

フラヴィーが、わざと足音を立てて近づくと、アニエスはハッと目を開けて飛び上がった。握ろうとした剣は、跳ね起きた拍子に床に倒れ、がらんがらんと音を立てる。

「っ！ しー……………」

剣に向かって、唇に人差し指を立てている所を見ると、寝惚けているらしい。しかしそれでも、すぐに覚醒すると、左右を見回してフラヴィーに気付いた。

「あ……………フラヴィー姉か」

「……………ご苦労様」

少女の様子に、どこか微笑ましいものを感じ、フラヴィーは柔らかい笑みを浮かべる。アニエスはごしごしと顔を擦り、両手で頬を数回叩くと、長く息を吐き出しながら剣を拾い上げた。

「何も、進展は無さそうだね」

「そうみたいなんだ……」

「差し入れがあるの。入るよ」

「ああ」

慎重な手つきで、ゆっくりと、倉庫の扉を開く。その中の隅の一角に、アクセルはいた。

床には書類やメモが散乱し、本が積み上げられている。粗末な木製のテーブルの上にも、走り書きの紙片や見慣れない器具、本から引きちぎられたページが、所狭しとひしめいていた。

壁に掛けられた黒板にも、隅から隅まで文字が並んでいる。アクセルはその前に立ち、黒板を睨みながら、顎に手を当てていた。パクパクと細かく口が動いているが、勿論呟きも漏れてはいない。

少年は布を手に取り、黒板の四分の一ほどを拭き取る。そして一言一言、改めて文字を並べると、背後のテーブルを振り返り、メモを漁り始めた。目当てのものが見つかったらしく、それを持ち上げた時にようやく、入ってきたフラヴィーに気付く。

「あーっ、と……」

じつと、不思議そうに見つめてくる彼に、慌てて持ってきた包みを見せた。

「リリーヌから。滋養強壯の妙薬だつてさ」

声を失ったアクセルだが、寧ろ呆れるほどに落ち着いていた。

通常、没落貴族がその地位を取り戻すことは無い。それはまさし

く、御伽噺なのだ。一度ドロップアウトした者を、貴族社会は受け入れない。

声を封じるといふそのアイテムは、まさしく貴族という肩書きを剥奪するもの。いや、去勢と呼んでもいい。奈落の底へと突き落とし、二度と這い上がれなくする為の、永劫の呪い。貴族という肩書きを奪った上に、貴族であったことを示す魔法さえ奪い去るのだ。

マジックアイテムであるので、呪いを施すのは誰でも出来る。そして、使用する彼等に悪意は無い。悪意を持つのは、その奈落へと突き落とした者たち。

フラヴィはふと、近くの樽に寄り掛かって眠るマチルダを見た。その隣にはミシェルが肩を並べ、二人の間に挟まれるようにして、ティファニアが寝息を立てている。寝室から引っ張ってきたシーツにくるまり、静かに眠る三人の少女は、花弁のように儂げな存在に思えた。

この少女達は何故、それほどの悪意に晒されたのか。そしてフラヴィ自身、かつてはその誰かと同じ、この無力な子どもにも悪意を向けた存在であることに思い至り、悪寒に震える。

解呪など、出来る筈がない……フラヴィは密かに、そう考えている。

マジックアイテムについて詳しくない彼女でも、わかる道理なのだ。簡単に解かれてしまうようでは、意味がない。悪意とは、そんな生易しいものではない。アクセルとて、そのくらい……いや、その道理がわからないような少年ではない筈だ。

テーブルを回り、フラヴィの手にある包みを受け取ったアクセルは、ありがとう、と唇の動きで示した。



何故、わざわざ礼を表すような余裕があるのだろう。既に彼は、賽を投げてしまったというのに。失敗が許されない状況になってしまったというのに。

メイジとしての全てを、失ってしまうかも知れないというのに。

「……………」

早速包みを開き、丸薬の一つを摘み上げたアクセルは、不思議そうに首を傾げる。視線の先には、包みはもう無いというのに、未だ手を浮かべたままのフラヴィー。

取りあえず、ポケットを漁ってみると、銀貨が指先に触れた。一枚取り出し、所在なげな彼女の手に乗せる。

「……………」  
「えっ、あっ、いやっ、ちょっとぼうっとしてただけで！別に、そういうわけじゃ……………」

ようやく意識を引き戻したフラヴィーは、掌に置かれた銀貨を慌てて突き返そうとするが、既にアクセルは黒板に向き直っている。

「……………」

邪魔をするのも憚られ、ひとまず銀貨はポケットに放り込んだ。何か、励ましの声でも掛けようかと思っただが、それも止めておく。最良の選択は、黙って立ち去る事だ。

なるべく音を立てないように、倉庫の出口へと向かい、ゆっくりと扉を開けた。

（進めておこうかねえ？……………ゲルマニアへの逃亡の準備でも。あっちは、金さえあればいいらしいし）

ゲルマニアでは、平民でも金さえあれば、貴族になれると聞いたことがある。例え魔法が使えなくなるが、アクセルならばゲルマニアで上手く渡っていくのではないだろうか……彼女の頭に、そんな予感が浮かんだ。

魔法は全能ではないが、万能ではある。アクセルは黒板にルーンを書き込みながら、改めて考える。人のイメージが無限大であるように、魔法もまた無限大なのだ。原子配列変換を軽く行ったり、念動力を簡単に使えたり、空を飛び火の玉を放ったり。

ハルケギニアで六千年もの間、支配体制の変化が起らなかった理由の一つに、魔法があまりにも漠然とし過ぎていた、というのが挙げられるのではないかと思う。牛歩の如きそれではあるが、魔法も進歩してきたのだ。ただ、その道のりはあまりに、途方もなく長く、六千年の歳月を経ても終わりが見えない。本当に進歩しているのか、それすらも曖昧になってしまいそうになる。

（まあ、はつきり言ってしまえば……「クリリンのことかー!!」  
が使える世界なんだよな）

魔力とは即ち精神力。巨大な精神のうねり……感情の爆発は、時としてメイジのクラスの壁すら越えてしまう。

(……世界中の幼女マニアよ！ オラに元気を分けてくれー！)

両手を上げ、目を閉じ……我ながらあまりの不毛さに、首を振った。これではまるで、お手上げのポーズである。

魔法を使った呪いが、魔法で解けない道理は無い。方法は必ず存在し、それを探し当てるだけなのだ。例えそれが、干し草の山からたった一本の針を探し出すようなものだとしても、諦めなければ徐々にゴールは近づいてくる。

(そうですね？ 名も無きアバッキオの先輩さん)

気を取り直し、テーブルを振り向く。散らばるメモを整理していると、不思議と疲れが減っていることに気付いた。気のせいかも知れないような、そんな些細な感覚だが。

(……これか)

先ほどフラヴィーが渡してくれた包みを開き、再び丸薬を取り出す。一見、難の変哲もない丸薬だが、ディテクトマジックを使用してみると、マジックアイテムの一種だと判明した。

十本の指を揃え、丸薬を挟み、更に詳しく解析する。薬草から抽出したエキスに、薄めた水の秘薬を混合させて練り上げたもので、確かに疲労回復の効果を持つ。

(成る程なあ。取りあえず、身体によさそうなモンを混ぜてみて感じてか？ ……けどこれ、確かにマジックアイテムだけど、材料さえあれば、平民でも作れそうだな)

“マジックアイテムとは、必ずしもメイジが作ったものではない

”と、黒板に書き込んでみる。

「……………」

少し考え、また文章を足す。

“風石はマジックアイテムであるが、風石を使って飛ぶフネはマジックアイテムか？”

アクセルは腕を組み、今度は長く考えた。己の問い掛けに答えるため、思考を巡らせる。

魔法を使う時、その力の源となるのは精神力であり、それは勿論平民にもある。そして並のメイジよりも高い精神力を持つ平民は、別に珍しくはない。しかし、その精神力を魔法に変換する術を持たないが為に、平民は魔法が使えない。

やがてアクセルは、己の問いに答える。

“フネもまた、マジックアイテムである”と。

風石を動力に変換する心臓部はともかく、それを包むフネという乗り物は、平民の手で作る事が出来る。

(……………やってみるか)

アクセルは、“夢の姑”の銃口部分に嵌め込まれていた、レンズのような結晶を摘み上げると、人差し指に乗せた。

イメージは、呪縛からの解放。そのイメージを保ったまま、何度も何度も結晶体をさすり、染み込ませるようにして精神力を注いで

いく。暫くして、反応があった。それが何を意味する反応なのか、全くわからないが……とにかく、無駄な行為では無さそうだ。その結晶体を用いて、マジックアイテムを再び組み立てる。そう、重要なのは、この結晶体なのだ。それ以外の部品は、平民にも作成可能……な筈だ。これをマジックアイテムとして成立させている要因は、全てこの結晶体にあり、つまりはここだけがメイジの領域。

この動作も、既に三回目。やや手慣れた手つきで、銃口を喉に当て……。

(……………ん)

また、あの薄氷が砕け散る音。テーブルの上の手鏡を持ち上げ、自らの喉を確認すると、新たにルーンが刻まれていた。それはまさしく、先ほど自分がイメージした、アンスールのルーンとマンのルーン。呪縛に用いられたルーンを、そのまま正位置へと直し、負の要素を正の要素へと変換させた。

口を開き、試しに声を出そうとして……異変に気付く。

喉元のルーンは未だ消えず、青白い光を放ったまま、ぐにやりと、粘土細工か何かのように歪み始めた。

(これは……？ え、ちよっ……やばい……のか！？ ルーンが暴走して……！？)

手鏡を放り捨て、アクセルは両腕を交差し、身体を跳躍させた。

「ゲルマニアあ？」

「ああ。……どう思う？」

片手で書類を持ち上げ、もう片方の手で頬杖を付くナタンは、フラヴィの言葉に素っ頓狂に返す。

書類からフラヴィへと、ナタンは暫く視線を移していたが、やがて溜息をつきながら次の書類を手にした。

「あいつは、別に天涯孤独ってワケじゃねえんだ。両親共に元氣なんだぜ？ それに……わざわざ九歳の子どもの亡命に手を貸す貴族なんざ、いると思うか？」

「……そうだった。あいつ、まだ九歳だったね。すっかり忘れてた」

「気にすんな、俺だって信じちゃいねえんだから」

声を失っても、相変わらず余裕があるアクセルだが、考えてみればそう不思議な事でもない、フラヴィは思い直す。

あの少年は臆病なほどに心配性だが、貴族が命の危機に陥るなど、戦争でもない限りはそうそう無い。魔法で何とか死の淵から生還する……そんな貴族が、どれだけいるというのか。多くの護衛に守られ、恐れられる者は、本来もつと気楽に、怠惰に過ごしているべきなのだ。

アクセルは長男であり、何れはラヴィス子爵として領地を継ぐ存在である。次男坊三男坊のように、無理をして職を得る必要も無いのだ。トリスタニアでの出世にも興味がないし、名声も欲しがらな

い。高い能力を得ても、それを隠してしまふ。つまりは、一生領地で平穩に暮らすという未来があれば、それでいいのだ。そして、その願いはこの街の表裏を握ることによって、確固たるものとなる。

(別に……問題ない、か)

例え声を失い、メイジとしての能力を失う事になったとしても、まさかラヴィス子爵家から間引かれるという事は無いだろう。ゲルマニアへの亡命は、万が一、そんな事になった場合の最終手段なのだ。

失敗しても、死ぬわけじゃない……あの夜、アクセルはそう言っていた。

廊下の方から、足音が近づいてくる。ナタンは書類を見つめたままだが、フラヴィはふとそちらを見た。

書類の束を捲りながら、バルシャが入ってくる。目には隈を作り、髪は乱れていた。フラヴィは確認するように、ナタンを振り返る。やはり彼の目の下にも、隈が出来ていた。

何故、彼等はろくに休もうともしないのだろうか、彼女は考える。アクセルですらそれなりの睡眠を取っているのに、二人ともまるで横になるのを嫌うかのように、忙しなく動き回っていた。アクセルは、恐らくそのことに気付いていない。もしも気付いていれば、自分を手伝うよりも組織を固める、と、説教の一つでも行うだろう。

「……どうだった、バルシャ」

相変わらず見向きもせず、ナタンは尋ねた。

バルシャも、自分の机に腰掛けながら、視線は書類の上を走っている。

「元々、ガリアのマジックアイテムですからね。なかなか捗りませんが、今、存在を確認させています。製作者ですが、新たに二人ほど候補が挙がりました」

「誰だ？」

「サンソン男爵に、フォントネル伯爵」

「……その情報は、どの程度信頼出来る？」

「申し訳ありませんが、何とも言えませんね。サンソン男爵の方は、ガリア国王に謁見した際、関与を否定した、とされていますが……秘密の多い家柄だけに、信用度は低いようです。フォントネル伯爵は、療養の為に自領に引きこもっていて、詳細は……」

ただ声を封じるマジックアイテム……しかし、メイジにとっては恐るべきもの。

自分が開発した、などと声高に喧伝する者はいないだろう。売名目的で口にする者は、ただの愚か者であり、そもそも製作する能力を持つとは思えない。

メイジの天敵を作り出してしまった製作者の情報は、勿論の事、そう簡単に得られるものでは無かった。

本人が、必死に隠しているのか。それとも、既に王国と繋がっていて、飼い慣らされる者として生き永らえているのか。

「作ったヤツより、作ったモノを探すのが先だな」

「ええ。特に、今は」

二人がようやく、互いの顔を見合わせ、確認し合った時だった。

「……？」

フラヴィは、最初は怪訝そうに、しかしやがて確信したように目



を見開くと、突然床に這い蹲った。まるで壁の向こうの音を拾おうとするかのように、床に耳を押し当てる。

「……どうした？」

妙な行動に出た彼女に、ナタンは身を乗り出す。這い蹲ったまま、フラヴィイは口を開いた。

「地下で、何か……物音が……」

一瞬の後、ナタンとバルシャは飛び上がるようにして机を超え、ドアに向かって走り出した。ナタンに飛び越されたフラヴィイは、思わず身体を縮めていたが、すぐに起き上がり、二人の後を追う。

廊下を走り、地下への階段を駆け下りていくと、アニエスの悲鳴が届いた。ある意味聞き慣れたものではあるのだが、今回に限っては、まるで絶望したかのようなそれだった。

「ちいっ!」

一番早く辿り着けたのは、ナタンだった。僅かに開いたままの倉庫の扉を、飛びかかるようにして蹴り開く。

「ベル! 無事か!？」

答えが返ってくる事に、ほんの僅かの期待を込める。だが勿論、その期待は外れた。

「早くっ、早く来てえっ! ベル君がっ……ベル君があっ……!」

完全に取り乱した、アニエスの声。この出所を探そうと周囲を見

回すが、そうするまでもなかった。灯りが漏れる倉庫の片隅、半壊した木箱の陰から、涙で濡れたアニエスの歪んだ顔が覗いていた。ナタンに続き、他の二人もそちらへと駆け出す。

「……………！！」

散乱する本や実験器具、木箱や樽の破片。マチルダ達に被害が及ばないよう、咄嗟に距離を取った彼の身体は、砕けた木箱の上で、壊れた人形のように横たわっていた。

いや、横たわっていた……その表現は正しくない。アクセルは歯を剥き出しにして、両手で喉を押さえ、痙攣するように背を仰け反らせている。額には脂汗が浮かび、唇は震え、そして喉元からは大量の出血があった。

ティファニアが、ボロボロと涙を溢れ零しながら、アクセルの腰にしがみついている。マチルダが服の袖で、止まらない血を拭いている。ミシエルは蒼白な顔で、自分を失ってしまったかのように虚るな目を、アクセルへと向けていた。

カッと、アクセルは目を見開く。目玉をひり出そうとするかのように、瞼を上下にこじ開け、そしてナタンに視線を向ける。右手で震える人差し指で、テーブルの上を指した。抑える手が片方となつたことで、喉が露わになる。食い破られるようにして空いた大きな穴から、隙間風のような音と、血の泡が零れだしていた。

考えるよりも前に、ナタンの足が動く。指されたテーブルへと駆けつけ、一通り見回し、すぐに小綺麗な瓶だと判断した。見覚えのある、水の秘薬である。

栓を引き抜きながら、アクセルの元へ駆け寄ると、無我夢中で、中身を全て小さな喉へとぶちまけた。

アクセルはそれを逃さないよう、両手でかき集めるようにして、喉元を撫でる。そしてごろりと俯せになり、身体を縮めて震える。その様子が、まるで寒さに凍える小動物のようで、マチルダは覆い被さるように抱き締めた。

「……………」

呼吸音と言うよりは、ボロ小屋の中に吹き荒ぶ、冷たい隙間風。ひゅーひゅーと鳴るその音の間隔が、徐々に短くなっていく。そして、一定の間隔へと落ち着いた。

マチルダが、恐る恐る身体を離す。アクセルは再び寝返りを打ち、仰向けに、大の字に寝転がると、安堵したように目を閉じ、溜息をついた。既に喉の穴は塞がり、元通りとなっている。

そして、その喉元には……再び、ルーンが閃き、染み込んでいった。

喉の大部分が破壊されながらも、それでも尚、呪縛はアクセルの身体に居座っていた。

「……………」

むくりと、アクセルは背を起こす。飛び込んでくるティファニアを受け止め、隣のマチルダの頭を撫で、ようやく顔色を取り戻し、涙を流し始めたミシエルに、苦笑いのような笑顔を向けた。

水のメイジを連れてきたバルシャに、軽く手を挙げて無事であることを示す。

「おい………… 大丈夫なんだろうなあ？」

問い詰めるように……いや、文字通り、ナタンが詰め寄った。睨むように見つめる彼に、相変わらず曖昧な笑顔を返し、見せつけるように喉を示す。

アクセルは膝に手を当て、立ち上がると、覚醒させるように何度か首を振った。

そして彼が歩み寄ったのは、黒板だった。床に転がる白墨を拾い上げ、小気味良い音を響かせながら、文を記していく。

“ごめん、ちょっと失敗”

「失敗ってレベルじゃねえぞ！」

ナタンの怒鳴り声は、本当に怒っているのか、それともいつもの突っ込みが、背を向けるアクセルには判断できない。

“悪いけど、出て行ってくれ。時間は限られている”

そう記すと、アクセルは皆の方へと向き直り……そのまま両膝を床に突き、倒れ伏した。

## 第十五話〈半分〉（前書き）

PV55万アクセス突破、ユニーク6万突破、  
お気に入り1050突破、総合評価2600突破、  
ありがとうございます！ 皆様のおかげです！

そして遅くなって申し訳ありません。リアルが多忙になり、今までの更新速度は無理です。感想を下さった方、ありがとうございます、返信が遅れていて申し訳ありません。なるべく早めにアップしようと思いますが、また遅れてしまいそうです。

今回、あまり進んでいなくてすみません。

## 第十五話<半分>

幼い頃、母親に抱かれて昼寝をしていた記憶がある。屋敷の中庭で、白いオーク椅子に腰掛ける母親の胸で、暖かな日差しを浴びながら、子守歌に包まれて微睡んでいた。

(……俺、何でこんな事思い出してるんだ?)

そう考えた時、唐突に、自分が眠っていることに気付いた。感覚が戻り、暖かいものがくつついていて感じる。

そつと、瞼を開いてみた。視界に、緑色のものが映り込んでいる。何とはなしに手を伸ばし、触れてみると、マチルダの髪であることを示す心地良さが伝わってきた。

「……………」

暫く、ぼうつとした頭で、その感触を楽しむ。いつもはアクセルを抱き締めるようになっていたのだが、今回のマチルダは、アクセルの胸に抱き付くような形になっていた。

やがて、覚醒が進むと、気を失う前の記憶が蘇ってくる。

(ああ……失敗したのか)

原因は、ルーンの暴走。単純に、逆位置のルーンを正位置のルーンで上書きすれば、と思っってしまったのだが、改めて考えれば確かに浅慮すぎた。熱が下がらないからと言って、氷水をぶっかけるよ

うなものだ。

（確か……使い魔のルーンだって、死ねば消えるようになってたよな？）

そう……実は、解呪する方法は一つだけある。  
死ねばいいのだ。

（仮死状態でも、ルーンの効力が消えたりするんだよな？ アニメでは、タバサが仮死の魔法を使ってたけど……）

人間を仮死状態にする魔法は、広く知られてはいないが一応存在する。

しかし、確実に蘇生するわけではないのだ。アクセルは使えないが、文献を漁った限りでは、どうやら成功率は20%や30%といったところで、あまりにも危険すぎる。その事を知った時には、結構とんでもない賭けに出たんだな、と、タバサを恐ろしく感じたあの時は、止めを刺そうとするアニメスから重傷のコルベールを守るために、死んで元々、という判断もあつたのではないだろうか。そもそも仮死状態になつても、確実にルーンが消えるわけではない。あくまで、その可能性があるというだけだ。

当然の事、却下。 例え使えたとしても。

髪を撫でられている感触に気付いたのか、マチルダの頭が動いた。寝惚け眼でアクセルの顔を確認し、おはよう、と言う代わりに柔らかい笑みを浮かべてくる。

しかし、だんだんとその顔が歪む。目を潤ませ、そっと手を伸ばし、少女はアクセルの喉を撫でた。

ふと、アクセルは自分の状態を確認する。寝ているのはベッド、

マチルダと反対側にティファニアがおり、ミシエルは突っ伏して寝ている。着せられているのは寝間着で、血だらけになってしまった衣服は誰かが着替えさせてくれたらしい。アクセルも生娘というわけではないので、着替えさせたのが誰なのかは興味がない。

「……………!」

そこで、彼はハツとして上体を起こした。壁際の時計を見て、時間を逆算する。

(俺、どれくらい寝てた!? この時間だと……………7時間!? 1  
9時間!?)

昼夜の分からない地下に籠もっていたせいで、いまいちはずきりとはしない。しかし、貴重な時間が失われてしまったのは厳然たる事実だ。

少し考え、気絶したのが昼間だった事を思い出し、窓を見る。日光が全く差し込んでこないならば、7時間だろう。勿論、31時間という可能性も否定し切れないが。

(その程度で目を覚まして良かった、とポジティブに考えるべきか? まあいい、さっさと……………)

ベッドから抜け出そうとした時、ぐいと手を引っ張られた。蹠蹠けながらも何とか体勢を立て直し、後ろを振り向く。マチルダが、両手でぎゅっと、アクセルの掌を握り締めていた。

アクセルはしゃがみ込み、少女の喉に触れる。少女は相変わらずの泣き顔で、アクセルの顔を見上げ、そしてブンブンと首を振った。

(……………お願い、マチルダ)



ああ、声が失われたという事は、何と不便で残酷なのだろう……  
アクセルは唇を結ぶ。

怒りを抱いた時、怒鳴る事も出来ない。

悲しい時、号泣する事も出来ない。

楽しい時、笑い声も上げられない。

ありがとう、が言えない。

ごめんなさい、が言えない。

おはよう、が言えない。

苦しくて辛い時、心が砕かれそうになる時……助けて、というその一言が言えない。

握られていた手を握り返し、アクセルはマチルダを引き寄せた。  
頭を交差させ、両腕を精一杯に伸ばし、その身体を強く抱き締める。

泣き言も言えず、助けも呼べず、彼女はティファニアを守りながらずつと耐えてきた。

彼女たちの中には、一体、どれ程の澱が沈殿しているのだろう。  
どれ程、溜め込んで来たのだろう。

苦しかった事、辛かった事、悲しかった事……全て、聞いてやりたい。吐き出させてやりたい。この小さな身体から、少しでも重りを削り取ってやりたい。

その願いを叶えるには、結局、やるしかないのだ。

アクセルはそつと、マチルダから離れる。今度は、彼女も引き留めず、ただ手を離してくれた。

ミシエルを抱え上げ、ベッドの上に寝かせ、ティファニアの毛布

を直す。

部屋を出ようとすると、マチルダもついてきたが、アクセルは敢えて留めようとはしなかった。

ドアノブに手を掛け、回し、押してみるが、ドアは動かない。

「……？」

ただの仮眠用の部屋で、特に鍵は取り付けていなかった筈だ。引いて開ける扉、というわけでも無い。

数秒ほどドアノブを見つめるアクセルは、やがて腰を沈め、拳を構え、正拳突きを放った。ドアを吹き飛ばす、などという豪快な真似は無理でも、この小さな拳はその硬さと相まって、石槍の如く板を貫通する。皮膚が破れ、血が滲むが、大した痛みには思えなかった。

拳を引き抜き、しゃがみ込んで空いた穴から外を確認する。よく映画で見たように、椅子を斜めに倒し、ノブを固定しているらしい。アクセルは立ち上がると、今度はドアの前で、両掌を構えた。

ポオンッ

巨大な掌によって、ドアを押し開けるイメージ。掌の前で、爆発するように吹き荒れる風は、ドアの蝶番を跳ね飛ばして椅子ごと吹き飛ばす。壁に叩き付けられた椅子が、飴細工のように崩れた。

（行かせない……と、そういうことか？）

軽く手を叩きながら、ただの穴となった出入り口を眺める。ミシエルとティファニアが、音で目を覚ましてしまったようだ。アクセルはさっさと廊下に出た。

ふと、右側で何かが動く。

「また……行くつもりかい？」

声で分かったが、そつと、首を回す。

アニエスが木剣を構え、今にも打ちかかって来そうな視線を向けていた。

アクセルの頭に浮かんだ感想は、この少女は一体何をしているのか……それだけだった。

ドアを塞いだのは、アニエスだろう。木剣を握っているのは、真剣だとアクセルに怪我をさせてしまうからか。そして彼女の目的は……目的は？

彼女と向き合ったまま、少し考えてみる。ドアを塞いだのはつまり、アクセルを外に出さない為。また、あのような事故が起きると考えているのかも知れない。しかし、続けない事には、アクセルは永遠に声を失ったままなのだ。だとすれば、このままタイムリミットまで監禁して、失敗させようという事か。

(……ダメなんだよ、アニエス)

アクセルは、今回のこれに対して、失敗は許されないと考えている。

このままでは、声を封じられたまま執政庁のリースの元へと戻ることになるのだが、そうなった場合の言い訳を用意していないのだ。せいぜい、レオニー子爵領から戻る途中、狼藉者にマジックアイテムでやられた、程度のお粗末なもの。

ただ声を封じられる、その程度の事だが、それがメイジの、貴族の嫡男だとすれば……。

リーズ、ローラン……彼等が責任を負わされる恐れがある。二人とも、人を見る目が無い事を自負するアクセルが、原作知識無しに信頼する、数少ない人物。その彼等に、この敗北の責を背負わせるわけにはいかないのだ。

「言っておくが、ベル君！ 私は本気だ！」

足を震わせながら、アニエスが叫んだ。

しかし、やはり、アクセルは……何をしているんだ、と、その感想しか出せなかった。

未来のメイジ殺しも、今はまだまだ無力な小娘。勿論、成長はしているのだが、あくまで常識の範囲内でしかない。

アクセルはそっと、か細い息を吐き出すと、両の拳を握り締め……構えた。

(アニエス)

声が出ないまま、彼女に告げる。

その目で、その構えで。

(僕が一体、何年前から……鍛錬を続けてきたと思ってる?)

死なないため、殺されないため。その二つは、アクセルにとって同義では無い。

死なないため、表に出ることを避けた。注目されることを嫌った。それは、死の回避。

殺されないため……強くなる目的は、それだ。自分を脅かす存在、自分と敵対する存在、そんなものが目の前に現れた時、それを討ち

滅ぼす為。

それは、障害を排除する力。

己が避けるか、相手を除くか……この場合は、後者である。

アクセルは一度目を閉じ、再び開くと……アニエスを睨み付け、飛び出した。限界まで引き絞られ、突如解放された矢が、一直線に襲いかかるように。

「っ……！」

アニエスは歯を噛み締め、木剣を振りかぶる。もう以前のように、たかがそれだけの動作で蹠跟けたりはしなかった。

しかし、残念なことにその動作は中身が無い。鷹が翼を広げるような、肉食獣が鋭い歯を剥き出しにするような、威嚇としての動作。それが有効なのは、彼我の力関係に差がある時だ。自分より弱い者の恫喝に、膝を屈する者はいない。

振り下ろされた木剣が、攻撃せずにそのまま突っ込んで来たアクセルの額と衝突し、へし折れた。

「……！」

痛みと耳鳴りに歪むアクセルの顔に、血の筋が走る。

(……強くなったなあ……)

考えてみれば、アニエスも成長していた。威嚇のための動作、そこから繰り出された殺気の無い攻撃でも、こうやって木剣がへし折れる。出会った頃と比べれば、別人のような進歩だ。

軽量とはいえ、新品の木剣を、たった一度でへし折るといふその  
事実は、彼女の成長を表すものだったが……今、アニエスはそこま  
で思い至らない。割れたアクセルの額、その下の双眸を見つめ、ぶ  
るぶると身体を震わせていた。

軽く額の血を拭いながら、アクセルは少女を残して進む。アニエ  
スが自分を心配してくれている、というのは理解出来たが、それで  
も止まらなかった。

更に二人、前方にいた。右の壁に、腕を組んで寄り掛かるナタン。  
左の壁に、衛士のように立つバルシャ。

「……………」

二人をそれぞれ一瞥し、アクセルは構わずに進む。一步一步、距  
離は狭まり、やがて二人と交差し、そのまま何事もなくアクセルは  
過ぎ去った。

詠唱不能のアクセルならば、そして二人がかりなら、腕尽くで取  
り押さえる事も可能だった。それでも、ナタンもバルシャも、手を  
出さなかった。

「……………何故だっ」

崩れるようにして両膝を突いたまま、振り向かず、アニエスは怒  
鳴る。その怒りの矛先の二人は、一人は天井に向けて溜息をつき、  
もう一人は静かに目を閉じた。

「止めようがねえよ。あんな目に遭って、まだ行こうってんだ。  
どうやって止めるってんだ？」

「我々は、メイジではありません。信じて待つ、それだけしか出  
来ません」

納得は無理でも、理解は出来た。ナタンもバルシャも、そしてア  
ニエスも。

だからこそ、心がざわつく。背を支えることも、手を貸すことも  
出来ず、ただ待つしかない自分に。

彼が死を恐れるのなら、襲いかかってくる敵から守ってやる事も  
出来る。しかし、アクセルは喉を吹き飛ばされながら、また繰り返し返  
そうとしている。自ら進んで、危険へと飛び込んでいる。そんな人  
間を止める術など、誰も持ち合わせてはいなかった。

確かに、声が出せないのは不便ではある。しかし、それが不治で  
あったとしても、命を脅かすようなものではないのだ。彼女たち三  
人は、十分にその一生を全うすることが出来る。アクセルの立場で  
あれば、表から裏からサポートし、この領地に困うことだって出来  
るのだ。

彼女たちが、表に出せないほどに重要な人物であるならば、尚更、  
声など出せない方がいいのに。

「……まだ、グチグチと悩んでいるのか？」

沈黙する三人、その誰でもない声が、彼等の頭上に降りかかる。  
いつの間にか、すぐ目の前にまで歩み寄っていたスルトに、アニエ  
スは悲鳴を上げかけて後退った。

「……悩んでちゃ悪いかよ」

「ああ。悪いな」

仏頂面のナタンの言葉を、間髪入れずスルトは両断する。

「過ぎた不変の事実を、いつまでも語るな」

一応、身体を清めてきたらしいが、アクセルが声を失ってから今まで、ずっと留守にしていたスルトである。何をしてきたか、という事も知っている三人には、彼が吐き出す言葉の一つ一つにすら、べったりとした返り血が付着しているようで、奇妙で重厚な圧迫感に息苦しさを覚える。

「そもそも、だ。ヤツが今行っている事は、奪われたものを取り返す事ではない」

スルトは更に続けた。

「奪われたのは時間であり、取り返しよつものないものなのだ。ヤツは今、戦っているのだ。何と？ 悪意と。何によつて？」

彼はそこで、三人に背を向け、大きく両手を広げる。見えるはずもない双月を見上げ、それらを受け止めよつとするかのように大きく息を吸い、そして笑みと共に吐き出した。

「愛によつて、だ」

三人ともが、面喰らった。

この目の前の大男の口から、そんな言葉が出た事に。この大男の頭の辞書の中に、そんな単語が用意されていた事に。

「信じる信じない、ではない。必然なのだ。例え一年かかろうが十年かかろうが、ヤツは必ず、この戦いに勝利する。何故ならば、ヤツはそれに値する者だからだ」

「……随分と、信じてるんだな。あいつの事」

ナタンの言葉には、若干の嫉妬が籠もっていた。そしてその感情



は、アニエスも同じである。

貴族としてではない、裏のアクセルと最も付き合いが長いのが、この二人だった。これまでの交流の中で、それなりの信頼関係を築けたという自負もある。

しかし、この昨日今日仲間になったばかりの男が、まるで自分たち以上にアクセルについて理解しているようで、自覚出来るほどのものではないのだが、確かに嫉妬は生まれていた。

「もう一度言う。信じる信じない、ではないのだ。既に半分終わっているのだ」

「何？」

「やり始めた者は、既に半分を終わらせている。やり終える、という残り半分を、我々はただ待つていればいい」

本人達ですら自覚していない嫉妬に、スルトが気付けたのかどうか……彼はそれを表には出さない。

振り向いたスルトは、見えない目で、三人を見回した。

「俺は既にやり始め、そしてやり終えた。……お前達は、何をやり終える？ それとも、これからやり始めるのか？」

甘かった。

軽く考えていた。

ベッドの上に身体を横たえ、右腕で両目を覆い隠し、眠り込んだように動かないフラヴィ。彼女の脳裏に蘇るのは、吹き飛ばされた喉。

気分が悪くなった、と、ナタンやバルシヤに告げ、それからずっと自室で休んでいるが、相も変わらず鮮明にあの光景が浮かび上がる。

アニエスの怒声と、何かが碎ける音。そして、その後の彼等の会話からするに、アクセルは再び地下室へと戻ったらしい。

心のどこかで、考えていた。

貴族の坊ちゃん気まぐれだと。魔が差しただけだと。

(……全然、本気じゃないか……)

矛盾している。水の秘薬を用意していたとはいえ、それであの大怪我が治るかどうか、確証は無かった筈だ。あの少年なら、こんな手段に走る前に適当に山賊でも捕まえ、どの程度の怪我なら治るのか調べ上げそうなものなのに。

死にたがりではないが、アクセルは命を賭けて、治療に臨んでいた。

(……そんな必要が?)

声が出なかったとしても、死ぬわけではないのに。声の出ない三人を、生涯守り抜けるほどの力を彼自身が付ける方が、よほど堅実だっただろうに。

しかし彼は、その道を選ばなかった。誰から悪意で呪われたわけでもない、自分から、自分の手で、自分の声を奪ってしまった。

(ただ、焦っただけ?)

以前から、声を取り戻す方法を模索していた事は聞いている。マジックアイテムを求めていたことも。

たまたま、今、我慢が出来なくなっただのか。

スルトが言っていたように、“今しかない”のか。

(ああ……まただ……)

心の中に、黒くどんよりとしたものが広がっていくのを感じる。先ほどから何度、別の考え事に意識を集中させようとしても、この得体の知れない何かが、結局全て食らい尽くしてしまうのだ。

フラヴィはベッドの上で、胎児のように身を縮める。

何者も、己の身体を引きずり寄せる事が無いように、必死で身体を強張らせる。

あの時……初めて、アクセルと出会った時。

次々と破壊されていく傭兵達を、呆然と見ながら……それでも、心はどこか浮き足立っていた。まるで、長い間探し求めていたものを見つけた時のような、踊り出したくなるような気持ち。

その時は、気付かないふりをしてただひたすらに、常の自分であるようにした。

しかし、今度はあの時、アクセルの吹き飛んだ喉、その傷口のピンク色の肉を見ている時、また、あの得体の知れないものが覆い被さってきた。それはまるで、自分の穴という穴から侵入し、体内へと染み込んでいくようで、自分というものが、蹂躪されていくように。

(やめる……考えるんじゃない、フラヴィ)

蹂躪されつつある自分を、何とか守ろうとする。しかし、それはまるで一個の人格のようなものを持ち、話しかけて来た。

何故、お前は人よりも耳がいい？

何故、遠く離れた場所の会話が聞こえる？

何故、お前は足が速い？

何故、他人よりも高く遠くへ跳ぶ事が出来る？

その疑問に、彼女は反論しようとしてしまった。違う、自分はどこもおかしくなど無いと。

そしてその時、フラヴィは自分の内側と向き合い……浸食を許してしまった。

(喉が吹っ飛んでも、消えないってことは……)

アクセルはパラパラと、書物の一つを流し見ながら思い出す。

(俺という存在そのものに、呪いがかかっている、というわけか)

あの時、自分の喉は死んだとも言える。喉にかけられたルーンな

ら、それで消えてしまう可能性が高い。しかしそうならなかったのは、何故か。

（やはり、イメージだな）

水の秘薬を使いながら、自分でも何とかヒーリングをかけた。しかしどうやら、自分は既に、呪縛を受けた喉を通常状態として意識してしまっただけらしい。

（もう一度、喉を吹き飛ばして……喋れる状態の自分を強く意識すれば、呪縛は取り除けるか？）

水の秘薬は、あと二つある。一瞬浮かんだその考えを、アクセルは首を振って頭の外へと追い出した。確かに、試してみる価値はあるだろうが、例え成功したとしても、それが他の三人にも適用できるかは分からない。

アクセルは、喋れる状態の彼女達を見たことが無い。よって、イメージするのは難しい。彼女たち自身も、もう、喋れない状態の自分たちを、イメージの基本に置いてしまっているのだろう。アクセルは、一晩でそうなってしまったのだから。

魔法どうこうと言うよりは、精神にかけられた呪いだった。

（考えようによっては……魔法単体でも、声を奪う呪いはかけられるって事だよな）

一度吹き飛んだルーンを、そのまま再生するだけとはいえ、今のこの呪縛は間違いなく、自分の精神が引き起こしたものだと言える。

アクセル自身、ここまで冷静である自分に密かに驚いていた。

あの時は、水の秘薬を誰かに取って貰えばいいだけだったが、確かに死ぬほどの大怪我だった。

死んでしまう可能性も、決して低くは無かったのに、何故、自分はいこうやって、未だ続けようとしているのか。

「……………!?!」

そしてアクセルは、背後を振り向く。

漫画やアニメで、殺気や気配を感じるといふ表現があるが、そんな事は実際には起こり得ないと思っていた。足音が聞こえたり、何かが動く風を感じただけだろうと。

しかし、違った。一応、表向きには風メイジであるアクセルは、空気の動きや振動に敏感だが、それでは無かった。背中に氷柱が滑り込んできたような、思わず身を縮めるような感覚。

振り向いても、そこには誰もいない。応急処置を施された地下倉庫の扉が、頼りなげに傾いているだけだ。

マチルダやティファニア達は、風呂に行かせた。あと二十分は戻らないだろう。ナタンかバルシャか、アニエスカ、それとも帰還したスルトか。

誰かいるのか……………そう、声に出して尋ねる代わりに、アクセルは静かに扉に歩み寄る。

しかしその時、無事だった方の扉がするりと開き、一人の女が姿を現した。

(……………フラヴィイ?)

マチルダから、フラヴィは気分が悪くなって休んでいると聞いた。確かに、あんなスプラッタもどきを見せられたのでは無理も無い、そう思っていた。

彼女は白い寝間着を纏い、俯いて床を見ている。ふらふらと左右に揺れ動き、それは傍らの壊れた扉と同じく、ひどく頼りない存在に思えた。

(……一体、どうした?)

常とは違う彼女の様子に、そっと歩き出す。すると、フラヴィはそっと顔を上げ、無表情のまま、赤い瞳をアクセルに向けた。

さながら宝石のような眼球を、アクセルも見つめ返す。見つめ合うのはこれが初めてというわけではないが、その赤には、やはり心惹かれるものを感じる。ひどく綺麗なのだ。

フラヴィの身体が、前のめりに傾く。

アクセルは驚き、慌てて彼女の身体を支えようと、受け止めようと、そして走り寄ろうとした。

しかし、倒れると思ったフラヴィは、既にアクセルの目の前にまで来ている。

(……え?)

赤い瞳が、アクセルを捉えていた。

第十六話〈逸勝〉(前書き)

今回短くて済みません。

あまりに遅れているので、出来たところまで。続きはまた遅れそう  
です。



## 第十六話<逸勝>

(まるで、地獄の色だ……)

後から考えれば、それはほんの刹那の瞬間だったが、アクセルはその時、そんな感想を持った。地獄には未だ行った事がないし、出来れば永遠に御免被りたいが、きつと本物の地獄も、この瞳と同じほどに美しいのではないか……そんな思いが浮かぶ。

「……!」

アクセルは尻を落とし、尻餅をつくようにして座り込んだ。フラヴィの右手が、頭上を凄まじい速度で通り抜ける。そう、そんな無様な回避行動しか、選択肢は残されていないかった。

(……何が何だか、さっぱりわかんねえが……)

尻餅をついた勢いを利用し、素早く後転し、床をはね除けるようにして立ち上がる。

空振ったフラヴィは、そのまま停止していたが、ゆっくりと、あの赤い瞳をアクセルへと向けた。同じ色ではあるが、普段の彼女のそれとは、あまりにも雰囲気の違い過ぎる。

(この厄介な時に、厄介が仲間を呼んで、おや、厄介たちの様子が……なんと、キング厄介が現れた、って事だけはわかる。……俺のバカ、落ち着け、少しは)

軽く息を吐き出し、床を踏みしめ、拳を構える。

一体、何がどうなってフラヴィがこうなったのか、それはさっぱり分からないが……とにかく、フラヴィが明確な攻撃の意志を持っている事だけは確かだ。無造作に振られたあの右手だが、それはちょうどアクセルの頭の位置を空振っており、回避しなければ無事では済まなかっただろう。流石に首が千切れ飛んだりはいしないが、身体ごと吹っ飛ばされていたかも知れない。

油断無く構えるアクセルだが、フラヴィはふと、踵を返した。

(そのまま帰る……ってのは無理だよな)

若干の期待を込めてそう願ったが、それこそ問題の後回しである。このまま事務所や娼館の人間に被害が出れば、目も当てられない。それならば、ここで自分が、何とかするしかない。

(……出来んのか?)

詠唱できないメイジという、導火線のない爆弾のような自分が、果たしてどこまで出来るのか。確かに普段のフラヴィなら、素手で勝てる相手だろうが、今のフラヴィの戦闘能力は未知数なのだ。

「……死に木よ」

背を向けたフラヴィは、ぽつりとそう漏らす。

「ざわざわと這い寄りて、疎ましき壁となれ」

変化があつたのは、木製の扉だった。重厚な扉を構成する板が、意志を持ったかのように延び、軋みながら結合して壁に潜り込み……それはもう扉という出入り口ではなく、ただの板の壁となつていた。

アクセルの体中から、どっと汗が噴き出す。からからに乾いた唇を、舌を這わせて潤すと、フラヴィイに向かって走り出した。

(今のつて………先住魔法じゃねえかつ!?)

彼女は確かに、精霊を操り、扉を変形させた。杖を持たずに、口語の詠唱のみで。

もたもたしていれば、こちらがやられると、彼はそう判断した。

(くそつ、何てこつた! エルフ………じゃないよな、流石に。じやあ何だ? 翼が生えてないから翼人じゃないつ、なら、獣人? 吸血鬼? それとも娼婦らしく、サキユバスか?)

アクセルが思いつけるのは、それが全てだった。

アクセルは先住魔法を使えないし、それどころか実際に使われるのを目にしたこともない。周囲の精霊の力を利用し、メイジが使うそれよりも強力なものを使用できるというが、なるほど確かに、あんな魔法は自分には出来ないだろう。

あのような魔法を使うのは、つまり、外から邪魔されない為であり、内から逃がさない為。一対一でフラヴィイと戦い、圧倒しなければならぬ。

(………惜しい)

ぎいつ、と、齒を噛み鳴らす。それはまるで、ようやく見つけた泥中の宝玉に、見逃せない瑕疵があった時のような、そんな悔しさ。フラヴィの有用性は、既に熟知している。ファミリーのため、更には娼館のためには、失いたくない人材だ。しかし、今、彼女の命を損なわずに事態を解決出来る可能性は低く、それどころかアクセルが殺される可能性が高い。

(……厄介なもん抱えやがって。先に言っといてくれよ、そういう事は……)

フラヴィを射程範囲内に捉えたアクセルは、迷わず拳を突き出す。が、そこにフラヴィはいない。しかし、先ほどとは違って覚悟していた為か、その動きは目で追えないものでは無かった。真上にジャンプしている。

(そんな、大袈裟な避け方するもんでも無いだろうに。いや、持て余しているのか？ 力を……)

先住魔法を使う相手となれば、距離を取る事は出来ない。詠唱させる際は与えられない。

斜め上、フラヴィに風の爆弾を放とうとしたアクセルだが、どこまで威力を込めればいいのか、その判断が出来なかった。

(余裕ぶってる場合か？ いくら惜しいとはいえ……)

迷いは隙こそ生まなかったが、代わりにチャンスを逃した。

飛び降りてきたフラヴィは、振り上げた右手をアクセルに叩き付ける。咄嗟に、彼女の左側へと逃げる少年の太腿を、爪が掠った。

「……っ！」

顔が歪んだのは、痛みによってではない。ズボンの布を軽々と引き裂き、更にその下の肉体を傷つけた、彼女の爪の強靱さに驚いた。左手を伸ばし、フラヴィの左袖を掴む。それを引き寄せるようにして、更に彼女の左側へと周り、右拳を脇腹の後ろあたりへ叩き付けた。

（確か、この辺りだったよな？ 肝臓は……）

危険すぎて反則技とされる、肝臓打ち。

「がっ」

フラヴィは短い呻き声を上げ、その身体を崩す。通常の身体であれば大ダメージだが、二秒とせずには手を伸ばしてきた彼女は、既に通常の身体ではない。

（全力でなかったとはいえ……結構ショックだ）

びりびりと布が裂け、アクセルの手に袖が残される。

自由になったフラヴィは、今度は両手を使い、頭上からアクセルを捉えようとした。

（バカの一つ覚えに、やられてたまるかっ）

少々の無茶を行っても問題ないと判断し、アクセルは更にフラヴィに接近し、彼女の両腕の内側へと潜り込む。

そこはフラヴィではなく、アクセルの間合い。だが、両手両足全ての攻撃が出来ないその距離で、彼女はぐっと、顔を異常な速度で

近付けてくる。

(!?!? 間に合わ……………)

風の爆弾を放つよりも一瞬早く、フラヴィの開いた口が、アクセルの首を銜えた。それと同時に、鋭い痛みが走り、放とうとしていた風の精霊が霧散する。

(吸血鬼……………か……………!)

彼女の正体を確信したところで、床に押し倒された。馬乗りされ、両手同士を封じられ、のしかかる体勢のまま、血を吸われる。

(……………何……………だ……………これ……………)

体中から、体温が失われていく感覚。前世で献血をした時と似たような感覚であり、別段不思議な事でもないが、それよりも、脱力感に衝撃を受けた。

(……………そうか……………噛まれたら終わりなのか……………)

“彼岸島”の吸血鬼のように、吸血鬼の牙には、筋弛緩作用があるらしい。一度噛まれたら最後、そのまま抵抗も出来ずに血を吸われてしまう。

当たり前と言えば、当たり前の事かも知れない。吸血鬼は確かにハルケギニアで最も危険とされる種族であるが、力自慢なら対抗できる程度の筋力しか持たない。にも関わらず恐れられるのは、魔法でも人間との違いを感知出来ないという、その極めて高い埋没性によって、である。

この世界の吸血鬼は、“彼岸島”のように人間を家畜化などせず、

一気に吸い殺してしまう。屍人鬼として操る場合は別だが、基本的に一度噛みついたら、その人間の全ての血液を吸収する。ひよつとしたら原作に出てこないだけで、密かに人間牧場でも作っているかも知れないが、隠れ住む存在である彼等だからこそ、少数から限界まで搾り取るという食事法なのだろう。

一人の人間が持つ血液は、体重の12か13分の一くらい。出血死するのは、その三分の一が失われた時。アクセルのような子どもならともかく、大の大人なら5?程の血液を有し、出血死させるどころか、出血多量の状態にするにも時間がかかる。その間抵抗されない為にも、筋弛緩作用は必要な能力なのだろう。

(……って……俺は……何を暢気に……)

子どもの自分なら、その速度は更に速まる。吸血鬼に噛まれたら終わり、という教訓は、死を代償として得なければならぬものなのか。

(吸血鬼の……弱点は……? 太陽の光、流れる水、大蒜、十字架、銀……。けど、どうもこの吸血鬼は……太陽の光に弱い、くらいしかないな。……待てよ……)

アクセルは、体中の力を一点に集中して絞り出すように、指先に力を込めた。

(イメージだ……イメージなんだ……。大蒜は駄目、流れる水は無い、十字架も駄目……なら……退魔の力を持つと……言われる……)

血を吸うフラヴィは、気付かない。少年の力無い指先が、自分の身体の上をなぞっているが、それはただの力無い抵抗だと考えた。

落下してくる巨大な岩に向けて、思わず両手を突き出してしまおうな。

（頼む……あってくれ……）

フラヴィがああ薬を持ってきた時、自分が渡した銀貨を、彼女はどこに仕舞ったのか。受け取った右手には持ってなかった。一番考えられるのは、彼女の右のポケット。

「……！」

指先に、硬い何かが触れた。それ以上の確認の時間が惜しく、無我夢中でイメージを込め、自分の精霊に追従させる。

“退け”と。

次の瞬間、彼女の身体は浮き上がった。刺していた牙が無理矢理引き抜かれたことで、皮膚と肉が若干食い千切られたが、痛みはななく耳障りな音が聞こえただけだった。

アクセルの上から吹き飛ばされ、ニマイルほど後方に落下したフラヴィは、むくりと上体を起こす。

赤い瞳が、じっと、未だ満足に動けないアクセルを見つめている。静寂の中、地下倉庫に忘れられた柱時計の振り子が、その音を大きくしていった。

「ひっ……」

その音を、また取るに足らない雑音へと押し戻したのは、フラヴィの悲鳴のような呻き声だった。



何かに取り憑かれたようだったその瞳が、歪み、人の脆弱さを取り戻す。首筋に牙の傷跡を残し、ぼんやりとした顔で天井を見上げるアクセルが、その赤の中に映し出されていた。

「あた……し……あたし……」

フラヴィは両手を自分の顔に這わせ、震え出す。それはまるで、触れているそれが人間の顔かどうかを確かめるような仕草だった。歪み、揺れる瞳は、目を背けたいという感情と、自分の行動を見据えたいという感情の狭間で混乱している。

アクセルはようやく動くようになった右手を、自らの首へと移動させ、掌で傷跡を押さえ込んだ。

(……寒い)

かなりの量の血液を奪われたようで、その代わりに氷水でも注入されたような気分だ。

妙な気分だった。体中を脱力感が襲い、意識が朦朧としているのに、頭脳は冷や水を浴びせられたように落ち着いている。杖となった指で、自分の喉を調べていくうちに、その冷静な頭脳は静かに回り始めた。

フラヴィには、常に意識があった。こうやってアクセルを押し倒し、その首に噛みついて血を吸ったのも、自分がそれを望んだからそうせずにはいられない、という、強い欲求故だった。

しかし、その欲求が満たされてしまえば、また普段の彼女へと戻った。戻ってしまった。

首筋に噛みつき、その血を啜るなどという、およそ人間では考えられない行動を、人間という視点から見ってしまった。

ふと、漸く上体を起こしたアクセルと視線が重なる。暫く無表情を崩さなかった彼は、やがて唇の端を吊り上げると、笑みに顔を歪めた。そして、喉に手を当てたままゆっくりと口を動かす。

「……賢者タイムの……ところ……悪いけど……」

「えっ」

すぐに、フラヴィはその異常に気付いた。正常であるという異常に。

掠れ、使い古しの手拭いのように擦り切れてはいるが、この少年の口から確かに、失われている筈の声が出た。

「……ちょっと……付き合え……フラヴィ……」

倉庫の扉が消えてから三時間ほどして、フラヴィが出て来た。

「……まだ貧血か？」

「いや……寧ろ……足りすぎ……」

「……？」

言葉短く、途切れ途切れにナタンに返し、彼女はよろよろと、壁に手をつきながら自室へ戻った。

地下倉庫の扉がどうして“こう”なったのかはわからないが、恐らくアクセルが何かやらかしたのだろうと、皆がそう思っている。スルトが錬金を行い、壁に穴を開けて、今ではそこが出入り口となっていた。

「いい顔になってきたな」

「……あれがか!？」

盲目のスルトが顔という言葉を使って評価を下す時、それはどの目開きよりも信用できる。が、今回ばかりは、ナタンも同意できなかった。

物が散乱していた地下倉庫は、更に足の踏み場が無くなり、壁には黒板からはみ出した文字が、所狭しと並んでいる。ルーン文字、ナタンでも読める文字、そして見たこともない文字の群。中には、血で描かれているようなものもあった。

それらの中心に胡座をかいて陣取るアクセルは、血走った目で書物のページを捲り、空いた手で口にハムを運んでいる。

（あの娘達を上げらせ、たった一人になったという事は……勝算が出たか）

あの少女達は確かにアクセルに依存しているが、アクセルも彼女たちに依存していた。それが必要なくなったということは、突破口を開いたのだろう。確かに、この姿は幼気な少女達には見せるべきではない。

「つまり、どういうことだ？」

「女の前では、男は誰だって頑張るだろう」

「ああ。なるほど」

とりあえず納得したナタンだが、やはりアクセルが気になった。時折顔を歪め、頭を掻きむしりながら本を漁る姿は、鬼気迫るものがある。そのまま本当に人間を辞めてしまうのではないかと、そんな馬鹿馬鹿しい杞憂すら頭を過ぎった。

(マジで……テファ達に見せない方がいいな、これは)

元々、どこか振り切れている……いや、人間として何かが欠落している感があるアクセルなので、例え人間以外になろうがナタンは気に留めない。しかし、今のアクセルを見ると、自分たちを置き去りにしてどこか遠くへ行こうとしているかのような、そんな不吉な予感を覚えてしまった。まるで、どこか異世界へと足を踏み入れているかのような……。

(この文字が……原因か?)

ナタンは傍らの文字に目を向け、そつと指を這わせてみる。ルーン文字や口語文字ではない、成り立ちからして異質な文字。適当に作ったものではないだろう。規則性があるようで、無いような……そう、異世界から引きずってきたような文字。

そしてそれを扱うアクセルの顔は、これ以上ない程に子どもらしかった。

「……楽しそう……に見えるな」

「ああ、いい顔だ」

スルトは再びそう言った。

考えてみれば、自然の道理だった。十年近く親しんだ文字が利用できるのなら、二十年近く親しんだ文字が利用できない道理は無い。最も重要なのはイメージを具現化することであり、漢字を使うのはアクセルにとって実にしっくりくる手段だった。

(……すごいな。間に合った)

屍人鬼化すれば、喉の呪縛を打ち破って喋れることを発見し、かなり気持ちに余裕が出来た。しかし、その方法は出来れば使いたくなかったのだ。確かに喋れることは喋れるが、呪縛に呪縛を無理矢理ぶつけているせいか、喉の痛みが激しい。イガグリでうがいをしているように、ズキズキと痛みが走る。よって、あの三人に使うのも却下。そもそも屍人鬼<sup>ゲイル</sup>に出来るのは、吸血鬼一体につき一人だけだし、それ以前に屍人鬼<sup>ゲイル</sup>にして問題解決という話も無い。

(フラヴィーに感謝だな)

彼女が今まであの本性を隠せたのは、客の体液を吸収していた為だろうか。確か、それではその場しのぎにしかならなかった筈であり、何故今まで潜伏していたのかという疑問はある。事情を知ってそうなのはローランだが、彼は現在レオニー子爵領にいる。しかし、そんな重大な話を隠していたとは考えにくく、ひょっとしたら成果は上がらないかも知れない。

身体を屈め、倉庫の穴から外に出ると、スルトが座り込んでいた。娼館ですら灯りを消すこの時間に、まさか誰かいるとは思わず、アクセルは驚いて立ち止まる。

「……………出来たのか」

「……………ああ」

疑問ではなく、確認するような彼の口調に、アクセルは軽く笑みを浮かべて返す。少年の声を聞き、スルトはゆっくりと、大きく頷いた。

「そうか。では先ず一つ、おめでとう、と言っておこつ」

「ああ、ありが」

「さて」

ゴツゴツと硬いブーツの音が、地下の廊下に響き渡る。立ち上がり、歩み寄ってきたスルトは、アクセルの前に立った。

「そのマジックアイテムか？」

「……………ああ」

「それを使わない、という選択肢もあるぞ」

スルトのその提案は、アクセルにとって予想だにできなかったものではない。アクセルは右手に持つ、拳銃型のマジックアイテムを改めて眺めつつ、何故彼はこんなにも的確に、自分の迷いを衝くのだろう、と考えた。

「……………誰よりも早く、それを言うために……………わざわざ待っていたのか？」

からかうように言うアクセルの言葉に、スルトは若干表情を和らげる。

「少年はついに試練を克服し、乙女達は声を取り戻した、めでたしめでたし。ところが、残念ながら世界は残酷だ。トゥ・エ・ビヤン・パッセなどというのは、所詮は御伽噺の中でしか通用しない」

「ああ、そうだ。わかってる。でも……」

「いや、気にするな。一度、聞いてみただけだ。成したいようにすればいい」

「……ああ」

彼女たちは、その存在を公にすることが出来ない。

現在スルトが確認した限りでは、こちらに敵対する人間はいても、こちらを監視する人間はいなかった。

声を失った経緯は未だ分からないが、彼女たちは悪意に晒されたのだ。その悪意の主がもし、彼女たちが生きていることを知り、更に声が戻ったことを知れば、再びその切っ先を向けてくることになる。

アクセルもスルトも、彼女たちの声が戻った場合のデメリットを考えていた。

特に、マチルダとティファニアが、アルビオンにとって消してしまいたい存在である、そのことを知るアクセルは、頭を悩ませた。もしも、誰にも気付かれないような高度な諜報手段、またはこちらの予想を遙かに超えるほどの諜報員がいて、アルビオン側に二人が生きていることを知られていれば。そして彼等が、二人が声を取り戻したことを知れば。

声を失った事で、暗殺の必要もないと見逃してくれていた、あち

らの微妙なバランスを、自分は悪い方向に突き崩してしまうことになるのではないか、という懸念もあった。

想像に過ぎない。しかし、あり得ない話ではない。

もしかしたら、初めから声を取り戻す方法を探るなど、余計なお節介以外の何者でもなかったのかも知れない。

「それでも求める、か」

アクセルの足音が聞こえなくなってから、スルトはふと呟いた。彼も、あの少女達には何か秘密があるのだろうと、薄々とは感じている。だからこそその提案だった。

「……………守ってやろう。俺が、“スルト”であるうちは」

“その時”がやって来るのは、そう遠くはないかも知れない。

“その時”を他の何よりも待ち望んでいながら、彼は何故か、今だけかも知れないが、笑顔を作ることが出来なかった。



## 第十七話<文殊>

ルーン文字、ハルケギニアの文字、漢字……自分が文字と認識して、その意味を強く意識できるもの。指先に精霊を集め、それで文字を描く。何度も何度も、沈着させるように繰り返し、文字をなぞる。それはつまり、文字に自分の精神力を注入していくこと。“文呪法”と名付けたこの方法は、アクセルに可能性を与えた。

（考えてみれば……横島忠夫の文珠を手に入れたも同然じゃね？）

勿論、大きな働きをさせようとすれば多大な精神力を必要とするし、色々と制限もある。しかし、これから精神力を更に強大にしていけば、理論上は全て実現可能なのだ。

「ククク……フフフ……フハハハハッ！」

一人きりなら、そんな笑い声も上げたくなる。宇宙のように無限大に広がった可能性は、彼の脳にアドレナリンの洪水を引き起こした。

（手始めに……何をやる？ 何を試す？マジックアイテム、巨大ロボット、秘密基地……くそつ、片っ端から全部やりたい）

しかし、一番最初に作る物は既に決まっている。今後、絶対に必要な物が。

形状に随分と迷ったが、耳飾りは年齢的に未だ早い気がして、却

下。首飾りも目を付けられる可能性があり、結局はチヨーカーに落ち着いた。

ゴムを通し、レースをあしらう。文呪法の媒介とする為に、木製の花びらの形をしたボタンも取り付けた。

“隠” “縮”

主に風属性の精神力を込めて描くのは、二つの漢字。直接的なものはそので、あとはその漢字の持つ意味を限定する為に、保護を表すエオローのルーン、それに贈り物を表すギョーフのルーンを込める。更に、それを支える為に、口語で文字を込めていく。

完成したチヨーカーを持ち、一階へと上がる。事務室の扉が僅かに開いており、中をそつと覗き込んでみた。

「ほんつとーに、大丈夫なんだよな!？」

「大丈夫大丈夫、一口だけ。……うっかり全部吸ったらごめん」

「いやっ、それごめん済まねえよ!」

椅子に腰掛けて首を傾け、若干身体を震わせながら叫んでいるのはナタン。そんな彼の背後から、首筋に向かって噛みつきこうとしているのはフラヴィイ。

宣言した通り、彼女は一口だけナタンの血を吸い取ると、牙を離した。ナタンは大きく溜息をつきながら、首筋をさすっている。

「……やっぱ、もう一口いいかい？」

「これまさか無限ループじゃねえよな!？」

振り向こうとしたナタンは、ドアを開けたアクセルに気付く。彼が現れた事に、心底ほつとした表情になると、フラヴィイを振り返り

つつアクセルを指で示す。

「あー、そのー……ちょっと……」

少し躊躇いを見せる彼女に、アクセルはいいよと言いながら、襟を掴んで首筋を晒す。フラヴィは愛想笑いを浮かべると、少年の首筋に噛みついた。

筋弛緩の毒はコントロール出来るようになったらしいが、代わりにチクリと小さな痛みが走る。どうやらアクセルの血は、フラヴィの身体に合うようで、比較的少量で彼女は満足する。

やはり、ローランから有益な情報は得られなかった。フラヴィが吸血鬼であると知って目を丸くしていたが、彼がより古くから知っていたのはフラヴィの父親であり、母親とはそれほど親しくはなかった。いくら埋没性の高い吸血鬼とはいえ、父親がそうであるとはどうしても考えられず、ならば母親が吸血鬼だったのではないかとローランは言う。アクセルも、フラヴィに今まで全く吸血の必要性が無かったことからして、人間と吸血鬼とのハーフなのではないかと考えた。それが何かの拍子に、吸血鬼としての血が目覚め、血を欲するようになったらしい。

ともかく、もう、彼女は人間よりも吸血鬼に近い存在になっていた。

既にハーフェルフがいる以上、仲間の一人が吸血鬼だったと判明しても、あだから朝に弱かったのか、と、ナタン達からもその程度の反応しか出なかった。

アクセルは密かに先住魔法に期待していたが、どうやらあれは暴走状態だったからこそその奇跡であり、フラヴィ自身、やり方は本能的に何となくで理解していても、未だ形にして使いこなせるように

はなっていない。

「…………ふう」

牙を離し、フラヴィイは軽く息を吐き出す。

「何でだろうね？ やっぱ、アンタのが一番身体に合うよ」

「それは良かった。…………まあ、暴走とかされない限りは、血くらいいつでも分けてあげるよ」

「…………未だ根に持ってんのかい」

「当たり前。あのままだと、絶対干物にされてたし」

最終的に、あの出来事が大きく役に立ったとはいえ、今考えてみれば、一歩間違えれば死んでも可笑しくはなかったのだ。しかし、アクセルとしても、フラヴィイが必要な人材であると考えている以上、その皮肉に陰湿なものは込めない。

「そうだ、テファ知らないか？」

本来の目的を思い出し、アクセルは襟を正しながら二人に尋ねた。

「テファなら、裏庭でマチルダと遊んでる筈だぜ」

「わかった。ありがとう」

マチルダ、ティファニア、ミシエル。三人とも、流石にすぐには無理だったが、解呪用のマジックアイテムを使用してから三日ほどで、喋れるようになった。アクセルは実家に帰っており、その瞬間に立ち会えなかった事が心残りだったが、戻った時に迎えに来てくれた少女達の、三人揃った“ありがとう”の声に、不覚にも涙を滲ませた。あらゆる全てが、報われた気がした。

( そうだ……。今のままじゃ駄目だ……。 )

マチルダ、ティファニアの生存を、アルビオンが嗅ぎつけたとしても。手出しできないような、絶対的な力が必要だった。

( いや……。寧ろ、公にするか？ )

そもそも隠すからこそ、秘密になってしまふ。愛する女のため、アルビオン王国を敵に回したモード大公の愛の深さを賛美する形で、ティファニアの存在を喧伝すれば、少なくとも密かに狙われる危険性は無くなる。その存在を、国中の誰もが知るような有名なものにしてしまえば、密かに連れ去る事も、密かに殺す事も出来なくなる。しかし、一瞬間に浮かんだその考えは、即座に却下した。

事が全て原作通りに運んでいるのなら、原作知識を利用して、そんな絵図も引けたかも知れない。だが、モード大公の一件が十年ほど早まってしまっている以上、原作に無い何かが起こったと考える他無いのだ。

( 大体……。愛を賛美して横車を通すなんて、情熱の国のゲルマニアならいざ知らず、古くさいトリステイン王国では絶対無理だろう。善悪がどうあれ、モード大公は王国に楯突いた反逆者であることに変わりはない。……。やっぱ無理か、トリステインでは )

安穩の為に、色々と方策を考えてみる。

まず知りたいのは、アルビオン王国の動き。流石にこれは表の仕事ではなく、探るのは難しいが、あちらがどこまで情報を握っているのか、それは是非とも知っておきたい。原作開始時点では、既にアルビオン王室はレコン・キスタに追いつめられており、通常状態のアルビオンについての原作知識が少ないというのも痛い。未だ王

国が健全に機能している現在、ひよつとしたら想定外の隠密部隊、諜報部隊が存在しているかも知れないのだ。その場合、最悪のケースは、アルビオン王国はマチルダ・オブ・サウスゴータとティファニアの生存を把握している、そして現在の居場所がラヴィス子爵領だということも知っている、更に未だ二人を危険視していて、暗殺対象のカテゴリーに入れている、というものだろう。

(……協力者が必要だな)

ハーフとはいえ、エルフであると分かっている尚、味方となってくれるような人間。可能なら、出来るだけ国の中枢に近い、強大な権力を持つ貴族がいい。

(トリスティン第一等の貴族……と言えば……)

アクセルの頭に浮かぶのは、主人公ルイズの実家、ラ・ヴァリエール公爵家。自分のラヴィス子爵家とも、満更知らない間柄でも無いらしいが、そのことは未だ父親に尋ねていない。敵対してはいない、と、それくらいはわかるが、九歳児がする質問でも無いだろう。ヴァリエール公爵は、国家よりも娘達を優先する子煩悩。次女カトレアは原因不明の病に冒されており、もしも彼女の病気を完治させる事が出来れば、公爵に大きな貸しを作る事が出来る。

(……けどなあ)

それも、保留するしかない。治癒を司る水属性が苦手なわけではないが、大勢のスクウェアアクラスの水メイジ達が匙を投げたものを自分ならどうにか出来るという勝算が無い。文呪法を発展させていけば可能性は出るかも知れないが、ともかく今は無理だった。

それに、心優しいカトレアなら味方になってくれそうだが、エル

フを受け入れてくれるという保証は無い。

（そうだ。権力とかそういうのよりも、もっと重要なのは、口が堅くエルフを受け入れてくれるかどうか、だろうな）

首尾良くカトレアの病気を治し、恩を売り、ヴァリエール公爵を味方に引き入れたとしても、そのヴァリエール公爵がどこまで付き合ってくれるかは未知数。

（治療をわざと長引かせ、俺をなるべく長く必要とさせるのがいいか……まあ、外道な策だけど）

裏庭から、楽しい笑い声が聞こえてくる。マチルダと、ティファニアのものだった。

（ああつ。くそつ）

崩れるように蕩ける自分の顔を掴み、戻そうとする。

未だ、彼女たちの声に慣れない。彼女たちの声が聞けるという、その喜びが醒めない。こうやって楽しいげな声を聞きたびに、だらしなく眉を下げてしまう。

「テファ。マチルダ」

「あつ、お兄ちゃんっ」

「あ……ベル君」

ティファニアの、弾んだ声。マチルダの、柔らかい声。

フラヴィーのような姐さん口調ではなく、年相応の少女の喋り方をするマチルダは、アクセルにとって新鮮なものだった。

「お仕事終わったの？」

「…………いや…………お仕事って言うか…………」

腕を掴んでくるティファニアの何気ない言葉に、思わず苦笑が漏れる。代官としての仕事をそっちのりで、趣味のような工作に走っている自分には、少々耳が痛い言葉だった。

「はいこれ、プレゼント」

しゃがみ込み、ティファニアの首にチョーカーを巻き付け、首の後ろで結ぶ。

「あつ…………」

驚いたように小さく叫んだのは、それを見守るマチルダだった。ティファニアの髪を突き割るようにして飛び出していた耳が、徐々に縮んでいく。すぐに両耳の全てが髪の内側へと隠れ、見えなくなった。髪をかき分けて耳を見ると、若干尖ってはいるものの、普通の人間と何ら変わらない耳に形を変えていた。

「風のスクウェアスペル、フェイスチェンジの劣化版だよ。これでもう、堂々と街を歩けるよ」

実際の所、作ったアクセル自身にも、はつきりと仕組みは把握できていない。そうなるようにした、よってそうだった、という、極めて曖昧な説明しか出来ないものだ。フェイスチェンジの劣化と言ったが、実際の仕組みはフェイスチェンジとは全くの別物かも知れない。

ともかく今重要なのは、エルフであることを示す長い尖った耳が、



完全に擬態しているということ。

それさえ隠してしまえば、エルフの存在など吸血鬼以上に発見されにくい。

(一番いいのは、こんなマジックアイテムに頼らなくても、堂々と歩けるようになる事なんだよなあ)

エルフを忌避しない、そんな社会。しかしそれを実現させるためには、大規模な運動と革命のような一手が必要だ。何十年かかるかわからない。果たしてこれから、その切っ掛けとなるような出来事があるのかも。

(まあ、焦ってそんな事考えても、ろくな事が無いか。マチルダも、まだ信じてくれてないし)

アクセルは、マチルダに何も尋ねなかった。彼女が自分から、全ての経緯を打ち明けてくれるその時、彼女の本当の信頼を勝ち取ることが出来ると考えている。例えその時が永久に来なかったとしても、泥棒などになる必要も無いような、平穏な生活を歩ませてやりたかった。

もう自由に出歩けると言われたティファニアが、それぞれの手でマチルダとアクセルを引つ張り、買い物に行こうと言い出した。

アクセルの頭に一瞬過ぎるのは、アルビオン王国の目。このトリステイン王国と、比較的友好な関係を構築している国ではあるが、モード大公とエルフとの間の遺児について情報を提供するとは思えない。例えどんなに親しい関係であろうが、国と国である以上、そんな危険な醜聞はひた隠しにするだろう。よって、トリステイン王国が動くことはあり得ないが、もしもアルビオンの諜報機関が真っ

当な優秀さを持っていたのなら、国外への逃亡も視野に入れている筈だ。既に秘密裏に、彼等の活動が進行している可能性もある。

確かに、ティファニアの耳の問題は片づき、もう帽子で隠す必要も無くなった。が、あくまでマジックアイテムである以上、ディテクトマジックに反応するものだ。フェイスチェンジという魔法の存在も常識である故に、怪しまれてディテクトマジックを使われれば、それでアウト。

（先住魔法は確か、ディテクトマジックでも探知出来ないんだよな？）

先住魔法にも、姿を消すものがあつた筈だ。ティファニアにそれを覚えさせれば、と一瞬考えたが、彼女の魔法は虚無系統である可能性が高い。恐らく普通のエルフと違い、先住魔法は使えないだろう。

（その意味でも、フラヴィーが吸血鬼だったことは不幸中の幸いだけど……。やっぱり、必要なはもつと魔法を知ることだ）

何故、先住魔法はディテクトマジックに反応しないのか。結局、先住魔法と系統魔法との違いは何なのか。

文呪法を得ても、それでもまだ不十分なのだ。もつともつと、魔法というものを研究し、どつぷりと頭の天辺まで浸かり、あらゆる理を手に入れる必要がある。

とはいえ、差し当たって警戒する理由は無。アクセルの考えは、常に最悪へと突き進んでいる場合のものであるし、鼻が効くスルトも、そんな気配は無いと言つ。

三人の真ん中で、童歌を歌うティファニアに引かれ、アクセル達

は露店が並ぶ通りを歩く。折しも虚無の曜日で、大勢の人々で賑わっていた。はぐれてしまわないよう、アクセルもマチルダも、小さな手をしっかりと捕まえる。

東地区の隆盛は、最早疑うべくも無かった。

少し前まではこの街のゴミ箱だったそこは、ゼルナの街で最も華やかな場所となり、外からも大勢の人々が訪れる。清掃活動も完全に終了した上、全てのゴミを収集、運搬し、街の外の処理場へと移すというシステムも新しく整備され、アクセルにとって、なかなか満足のいく状態になっている。

しかし勿論、光に羽虫が群がるように、質の悪い破落戸の流入という弊害も起きていた。もともと平穏な街で守備隊も多くは無く、自警団も主に娼館の周囲の東地区で活動している。娼館や賭場の利権を狙う輩ならともかく、人が増えて景気が良くなりつつある他の地区の商店などが狙われた場合、対応しきれない面があった。

(ん……?)

今夜はオムレツがいいと言うティファニアの為に、切れていたタマネギを買っている時。釣りを待つ間、何気なく空を見上げようとしたアクセルの目に、一つの光景が止まった。

(あれは……)

通りの向こう側にある、名の知れたレストランの、二階席。晴れた日にはテラスにまで客席が用意され、そこで食事を楽しむことが出来る。祭りの日には、仮装行列やパレードを楽しめる特等席となるが、いつもは金を持った人間だけ通される。

そこに、リーズがいた。

(遅めの昼食か……?)

勿論、一人きりで座るわけが無い。他に二人、男と同席していた。一人はゼルナの街の守備隊長で、名前は確かイジドル。壮年の騎士。執政庁であまり顔を合わせることもなく、どのような性格なのかも噂でしか知らない。二人きりなら、思わずニヤつくようなオフィスラブ的一幕にも見えるが、あと一人、中年の小太りの男がいた。

(あの衣服は、ブリミル教の司祭か?)

ゼルナの街にも、ブリミル教の教会はある。いや、正しくはあった。しかし、もう随分前に寂れ、朽ち果て、無人となった。西地区にあるそれは、取り壊されてこそいないが、既に教会としての面影など無い。

あの司祭は、どこか他の場所からやって来たのだろう。音に敏感な風のメイジとはいえ、いくら何でも距離が遠すぎる。周囲の喧噪と相俟って、何を話しているのかは全く聞こえなかった。

三人は暫く会話していたが、やがてリーズが席を外す。残された守備隊長のイジドル、そして司祭は、顔を近付けて二人きりで話し始めた。

(……悪い顔してるなあ)

リーズには聞かせたくない内容なのだろう。下品な男と生臭坊主の下世話な話なら問題ないが、二人の笑顔には何か、もつと黒いものを感じた。

「ベル君」

マチルダと呼ばれ、彼女を振り向く。既にお釣りを受け取ったマチルダが、不思議そうにこちらを見ていた。

「はい、お釣り」

「ん、ああ。ありがと」

「どうかしたの？」

「いや、良い天気だから、ちょっとぼーっとしちゃって」

適当に誤魔化しつつ、再び二階席を盗み見る。ちょうどリーズが戻ったところで、二人の男は既に顔を離していた。

（これは……調べる必要があるか）

堂々と街の一角を占拠しているような娼館に、リーズは当然いい顔をしない。アクセルもイシュタルの館で、客として来ている執政庁の職員を何人か見ており、そのことは更に彼女を不快にさせるだろう。

ハルケギニア唯一の宗教、ブリミル教。アクセルが前世で知る多くの宗教がそうであるように、この宗教もまた、禁欲を賞賛する傾向にあった。それがいつか娼館を批判する可能性があるのは道理であるし、女の子のいる部屋に男が遊びに行くだけ、という、意地でも娼館として認めない理屈は用意してある。バルシャなどは、全く新しい形の娼館、と評すが、アクセルにしてみれば、言い逃れの材料を作っていたらそうなたただけだった。

リーズがブリミル教を使って攻撃を仕掛けてくるのは、想定の内。しかし、先ほどのイジドルと司祭とのやり取りを見ると、どうも想定外の範囲外が出てきたらしい。

(まさか……だよな?)

未だ見ぬアルビオン王国にばかり気を取られていたが、考えてみればトリステイン、ゲルマニア、ガリア、ロマリア全てで、エルフは禁忌の存在なのだ。ハルケギニア中に信者を持ち、敬虔な信者が諜報員に早変わりしても不思議はないブリミル教にこそ、最も注意を払わなければならないのではないか。流石にティファニアだと特定されている筈が無いが、耳の長い少女を見た、という情報を得たブリミル教が動き出したなら、不思議は無い。考え過ぎかも知れないが、もしもイシュタルの館に踏み込まれば、露見する可能性もある。

「くらっ」

ぐいっと、右手を引かれ、右肩が落ちる。

「駄目でしょ、ベル君。ぼおっとしてちゃ」

マチルダではなく、ティファニアだった。大人ぶった幼い叱責に、思わず苦笑いする。

「ごめんね。……そうだ、帰ったらケーキ作ろうか」

「え、ケーキ!？」

「うん。ほら、さっきのお店、季節外れの蛙苺が安かったし」

「やったあ」

アクセルの右手に掴まったまま、ティファニアはくるくると回り出した。身体一杯に喜ぶ少女に、アクセルの目尻が下がる。

マチルダの視線には、アクセルはついに気付かない。喜びで踊る

ティファニアではなく、だらしない笑顔を浮かべるアクセルを、彼女はじっと見つめていた。

「ほら、お姉ちゃんも早く、早く」

「……うん。そうね」

ティファニアに促され、マチルダは少し長く目を閉じる。そして開くと、ちょうどアクセルが彼女に視線を向ける所だった。

「マチルダ、何がいい？」

「……え」

質問の意味が分からず、マチルダは驚いたような咳きを漏らす。それに答えるように、ティファニアが飛び跳ねた。

「お姉ちゃんは、ケーキに何乗せる？ お兄ちゃんは桃林檎だつて」

「私は……。私も、それでいい」

「そう？」

「うん……」

マチルダはそつと微笑む。その笑みにどこか、翳りのようなものを感じ取るアクセルだったが、それは彼にとって、気のせいだと捨て置ける程度のもだった。

部屋に、ノックの音が響く。机に向かうアクセルは、振り返らないまま入室を許可した。

「入るね。兄さん」

夜食と紅茶を持って、静かに入ってきたのは、ミシエルだった。

何故年下の自分を兄さんと呼ぶのか、アクセルには不思議だったが、未だ年齢に疑いを持つナタン達は、別に不思議だとは思わないと言っていた。

声を奪われてから、肉体的な意味で一番酷い目に遭ったのは、彼女だろう。マチルダとティファニアのように、縋れる誰かもおらず、家が没落してからずっと一人だった。そんな彼女にとって、直接的に自分を救い出してくれたアクセルは、最も信頼できる人間なのだろう。

そもそも呼び方など些細な事であるので、それを改めさせる必要も理由も無かった。

ミシエルもマチルダと同じく、自分の事情を話そうとはせず、彼女の父親の冤罪について調べようとしても、トリスタニアは遠い。

「お疲れ様」

「ああ、ありがとう」

サイドテーブルに夜食を置くミシエルに、アクセルもペンを置く。凝り固まった首や肩を捻るが、両肩が優しい手に捕まえられた。

「肩揉みしてあげよっか？」

「じゃあ……お願い」



アクセルは目を閉じ、安堵するような溜息をつく。その小さな肩を揉みほぐしながら、ミシエルは机の上を覗き込んだ。彼女にとつて見覚えのない文字が並び、その横に彼女でも読める説明文が横たわっている。

「何をしていたの？」

「ん？ ああ、これ。……東方のルーン文字、と思ってくれればいいよ」

ルーン文字と同じく、漢字の意味も多岐に渡る。文字に力を持たせるといふ点では違いは無く、比較的単純なものだが、問題なのはそれをどう制御、コントロールするかだった。そうしなければ、込められた文字は一人歩きして対象を拡大し、それを実現しようとしても力が足りずに、結局何も機能しなくなる。

（文呪法、なんて、テンション上がって名付けちゃったけど……。漢字を使う以外は、普通のマジックアイテムの製造法なんじゃないの？ これ……）

冷静になれば少し落ち込んだりもするが、使える文字の幅が広がるのは、かなりの利点であることは間違いない。

アクセルは暫く身体の力を抜いていたが、ふと、時計が目に入った。

「ミシエル、もう寝た方がいいよ。こんな時間だし」

「兄さんは……」

「僕ももう……。あ、そうだ」

漢字表を仕舞い、アクセルは思い出したように一冊の本を広げる。アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィスは、公式にはローランと遊んでいることになっているが、流石にそればかりではまずいと判断したのだろう。家庭教師でもあるリーズから宿題として、初歩の魔術書を完読しておくようにと言われていた。勿論、既にアクセルにとって飽きるほど染み込んだ知識だが、リーズは必ず質問してくる。問題なのは、今のアクセルが知っていてはおかしい知識まで、べらべらと漏らしてしまう事だ。どこまでなのか、ということを確認しておかなければ、彼女に怪しまれる事になる。知らない事を聞かれるのも困るが、知り過ぎている事を知られるのも困るのだ。その辺りが、アクセルにとって実に厄介な問題である。

(一応、項目を大まかに書き出しておかないと……)

別の紙を広げ、再びメモの用意をする。未だ肩に手を置いていたミシエルが、欠伸をかみ殺した。

「……ここで寝ていい？ 邪魔しないから」

「うん、いいよ」

ミシエルは目を擦りながら、アクセルのベッドに潜り込んだ。枕に頭を横たえ、じつと、灯に照らされる少年の横顔を見つめる。

「……お休み。早く休んでね？」

「これが終わったらね。お休み」

三十分後。彼女が寝入ってから十分ほど経った時。魔されるような声に気付き、アクセルは隣のベッドを見た。

ミシエルの顔が歪み、シーツの下の身体をもぞもぞと動かしている。いい夢では無いのだろう。その悪夢がどれ程のものか、アクセル

ルには分からない。

彼はそつと手を伸ばし、水の精霊を集めた指先を、汗を滲ませる額に触れさせた。描く文字は、“安”。何度も何度も、同じ文字を繰り返す。

やがて静かな寝息が戻り、歪んでいた顔が元に戻った。満足したアクセルは、再び読書に戻る。本に向かうその顔では、まるで固定化でもかけられたかのように、満足の微笑みが崩れる事は無かった。

## 第十八話〈貝殻〉（前書き）

ユニーク10万突破、お気に入り登録1500突破しました！  
皆様のおかげです、ありがとうございます！

## 第十八話<貝殻>

ゼルナの街の守備隊長であるイジドールは、土のドットメイジだった。特に武芸などに秀でているわけではなく、彼が隊長を勤めているのは、メイジだからである。

(……ふむ)

無骨な手摺りに肘を乗せ、頬杖をつき、アクセルは眼下の広場を眺める。今はアクセル・ベルトランとしての立場なので、マントを羽織り、腰には杖を下げていた。

見下ろす執政庁裏の訓練場では、守備隊の日課とも呼べる訓練が行われている。執政庁を背にして立つイジドールの怒鳴り声を合図に、兵達は様々に動き回っていた。槍術の訓練、剣術の訓練……恐らくは、どこの訓練場でも見られるであろう、至極普通のもの。まだまだゼルナの街は活気づくだろうし、アクセルとしても彼等に、これから今まで以上に頑張って貰いたいのだが、どうも士気が高いとは言えない。

その理由は、少々予想外のものだった。

(まさか……バルシャとリリーヌがなあ……)

少し調べた結果、アクセルが出した結論は、その結論を出した時の彼の弦きを借りれば、バルシャさんマジパネエ、リリーヌさん力ツケである。

元々は東地区のトラブルに対応するために結成した自警団だったのだが、彼等ははつきり言ってはりきり過ぎなのだ。その中でも一

番活躍しているのは、バルシャ。東地区だけではなく、他の地区の見回りまで行い、事件に遭遇すれば俊敏に対応する。

自警団の制服には、羽織を採用している。イシユタルの館に、ベニテイエの泉を作ったアクセルは、その制服に貝殻をあしらった紋章を付けた。そして今、彼等……貝殻たち、それにイシユタルの女たちは、ゼルナの街の人々に受け入れられつつある。

こんな話がある。

守備兵達に追いつめられた強盗が、食堂に逃げ込んで給仕の少女を人質に立て籠もった。既に逃げ切れない事を自覚していた犯人は、自棄になり、店中に油をまいて少女もろとも焼身自殺を図ろうとした。

その時、ちょうど付き添いの少女達を連れて通り掛かった、一人の美しい娼婦。どうやら、それはリリーヌだったらしい。大勢の野次馬達をかき分けるようにして、店の正面に立った彼女は、付き添いの少女達に楽器で演奏を行わせ、静かに踊り出し、衣服を次々と脱ぐと、一糸纏わぬ姿となって尚も踊り続けた。

守備兵や野次馬だけでなく、強盗も、全ての視線が彼女に集中した時。気付かれぬよう、細心の注意を払い、わざわざ生ゴミを流す水路を逆に辿って店内へと侵入したバルシャが、背後から強盗を取り押さえ、捕縛した。

店から少女が飛び出し、続いて溝ネズミのように汚れたバルシャが、捕縛した強盗を引きずって表に出る。すると、どこからともなく貝殻紋の羽織を纏った男達が現れ、羽織で壁を作り、肌をさらけ出すリリーヌを隠した。彼女は慌てることなく、一枚一枚丁寧に衣服を身につける。そして再び少女達を引き連れ、何事もなかったかのようにその場を去り、強盗を守備兵達の目前に放り捨てたバルシャも、男達を引き連れて無言でその場から消えた。

そしてそれは一例に過ぎず、貝殻紋の男達は恐るべき連携によって、遭遇した事件を解決してしまう。

(……守備隊の士気が下がるのも、無理もないよな)

貝殻紋の男達は、常に影のように道の端を歩き、強請もたかりも行わない。寧ろ、相手から食事や金品を差し出されても、容易には受け取らない。そのくせ、トラブルが起きれば全力で事に当たる。

文字通りどぶ川に潜るような覚悟、そしてそれによる活躍を見せつけられ、また、人々の間でも守備隊より自警団に人気が出るようになり、守備隊の兵士達は自らの存在意義を見出せなくなっているのだ。

(全く……警沢な悩みだよ)

アクセルはその場にしゃがみ込むと、両手で目を覆い隠し、ふうと溜息をついた。守備隊が劣るというよりは、バルシャ達の方が高すぎるのだ。彼等が想像以上に働いてくれるのは助かるが……。

(その弊害が……なあ)

バルシャ達を事実上の守備隊にする、もしくは加えるというのも一つの方法だが、あのような対価を求めないヒーロー的な存在は、官ではなく民の立場であってこそだろう。官の存在となってしまうば、余計な義務や責任までついてくる。

それに、所詮はヤクザ者なのだ。たまたま近くにいた力持ち、くらしいの認識をされていれば良く、だからこそより深く街に受け入れられる。

訓練の終了を告げる合図の笛が、訓練場に鳴り響いた。

座り込んでいたアクセルは、その音にそつと腰を上げ、再び訓練場を見下ろす。武器や訓練道具を片付ける兵士達と、部下と何やら話し込んでいるイジドルが見えた。

(先日の一件、イジドルが何を企んでいるのか……司祭と何を話していたのかは、未だわからないけど。やはり、守備隊の地位低下に関する事なのか?)

まさか、会って直接、何企んでるんですか?と聞くわけにもいかない。

季節は既に夏。前世、日本でのそれと比べればカラツとした暑さで、確かに不快感は少ないが、湿気が少ないからか唇が乾く。燦々と光を降りまく太陽を、顔を顰めつつ見上げると、アクセルは唇を舐め、屋内へと戻った。文官達は遅めの昼休みを取っており、事務室には誰もいない。そこを通り抜け、奥にある自分の机に腰掛けると、水差しを傾けて冷水をコップに注いだ。

机に積み上げられた書類を捲り、軽く確認を行う。

(……やっぱ、事件が増えたな)

今年は、例年より若干気温が高い。その為か、喧嘩や傷害など、短気な事件が頻発していた。報告書の所々には、貝殻紋の男達、イシユタルの館などの単語が並んでいる。幾つかの事件は、どうやら彼等の、ナタンの名の下の仲裁で解決していたらしい。

(まあ、やばいのは来月だろうな)



来月は、ニイドの月。ニイドには、忍耐という意味が込められている。そのような名前が付けられる月ということは、それだけ忍耐が必要になってくる時だということだが、その月はまた、三ヶ月に渡る、トリステイン魔法学院の夏休みの最後の月でもある。それぞれの領地、実家に帰っていた貴族の子ども達が、再び魔法学院へと戻ってくるのだ。

当然、夏休み最終日に戻る者は滅多にいない。新学期の準備もあるので、少し早めに出発する貴族が大半だろうが、そうして暇になった彼等が、このゼルナの街にやって来る可能性もあるのだ。更に言えば、それなりに有名になりつつある、ゼルナのイシュタルの館に。

（流石に、そいつら……いや、“先輩”と呼ぶべきか？ そいつらだって、親や実家には内緒で来る筈だけど）

王都トリスタニアでは人目が気になるが、この片田舎なら大丈夫と考える者もいるだろう。流石に親や実家に秘密にしたい以上、家名を出す事は無いだろうが、世間知らずの坊っちゃん方が横車を押し通そうとするのは目に見えている。そして彼等は、言うまでもなくメイジで貴族。娼婦が平民である以上、どう扱おうが大した問題は無いと考える。

（さて……。どうするか）

吸血鬼もいればエルフもいるイシュタルの館は、それだけで一つの弱点。露見すれば、国家の一つや二つ敵に回る。

それなりに分別のある貴族なら、ゼルナの街がラヴィス子爵領であることを弁え、無用の争いは回避するだろう。しかし、その分別すらないドラ息子、特に伯爵や候爵の者は厄介だ。例え最終的にこ

こちらが勝つとしても、女の子の一人でも傷つけさせるわけにはいかない。

(……なら、どうするか。親や実家に告げ口するのは、イシユタルの館の信用問題だ。精々、噂を流すくらいだな。しかしそんなの、所詮は報復の手段でしかない。何とか、予防する事は出来ないか?)

再び水差しを傾け、コップを満たす。

(こんな事なら、夏休みが始まる前に、魔法学院から何か一言言っておいて貰うべきだったな。少しでもマシだったろうに。……来年からはそうするか?)

何か天啓のようなアイデアでも降臨すれば別だが、今となつては、対応策を考えるしかない。

勿論今でも、客には入り口で履き物や武器、メイジなら杖を預けて貰っているが、その段階で暴れ出されては、そして相手がそれなりの力量を持つていれば、取り押さえられるのはスルトだけだろう。流石に彼が敵わない相手など考えたくないが、彼が不在で対応できない場合の事を考えねばならない。

(……っつーかそもそも、高校生程度の年齢の分際で、娼館に行こうってのが気に食わん)

この世界では、別に不思議な事では無かった。十三歳でメイドに手を出し、孕ませた貴族もいたという。

(……駄目だこりゃ。個人的な怨みにすり替わってる)

アクセルは思わず苦笑いを浮かべると、書類の束を整えた。

事務室のドアが開き、誰かが入ってくる。昼休みを終えた文官かとも思ったが、カチャカチャと金具の音が聞こえた。

「ん？ おお、若様。こちらにいらっしやいましたか。失礼を」

イジドルだった。鎧の大部分を外している彼は、笑顔で挨拶してくる。

その笑みは、アクセルを完全に蔑ろにしたものだった。自覚が無いままにそんな顔をしているのなら、別に構わない。自覚があつてわざとそんな顔をしているとしても、別に構わない。どちらにしろ、ただの貴族のバカ息子と見られているということなので、アクセルにとっては都合が良い。

「訓練、ご苦労だったね。どうかした？」

「ええ、少々お願いが。これからの季節、犯罪が色々増加する傾向にあるのですが、何故かご存知ですか？」

「……いや、わからないよ」

コップの水を飲み干すと、アクセルはイジドルの言葉を待つ。彼は胸を張って、一つ咳払いをした。

「暑くなってくると、人々の心からは余裕が失われ、実に怒りっぽくなるものでしてな。頭に血が上りやすくなるのです。更に人々は怠惰となり、戸締まりは疎かとなり、盗人にとって実に都合の良い環境が生まれます。よって、街中の警備を強化する為、守備隊の増強を提案致します。特に最近では、近隣である“悪逆”のサンデイを目撃したとの情報もあり……」

イジドルは間を置かず、言葉を連ねた。

どう返そうか、それを考えようとしたアクセルだったが、すぐに

止めた。うーん、と困ったように唸り、頭をかく。

「……………リーズがいいって言うんなら、良いよ」

アクセルは、その返答がベストだと判断した。

「了解しました。では、彼女と相談して参ります」

果たしてイジドルは、その返答を予想していた。いや、そう返されると確信していたらしい。侮りの笑みは喜びの笑みとなり、回れ右をすると、さっさと事務室から出て行った。

アクセルはまた、コップに水を注いだ。

（あの様子だと、リーズを顔かせる準備は出来てるな。守備隊の増強は道理だけど、あの笑みは気に入らない。小僧と小娘如き、所詮は自分の掌の上……………と、そんな風に思っただろうな顔だ。守備隊の増強を承認させ、それから何をしようとしているのか。問題はそれだな。……………ああ、全く、次から次へと問題が……………）

一つ溜息をつき、アクセルは立ち上がる。少年は癒しを欲していた。

「……………何やってんだお前」

今日は執政庁にいる筈のアクセルが、いつの間にかイシユタルの館にいたことも驚いたが、寧ろナタンは呆れていた。アクセルはベツドの傍で膝を立て、昼寝中のティファニアの顔をだらしのない目で見つめている。

「何って、回復中。心の力を」

「あー、そうか」

「あ、涎が垂れてる。……いいかな？ 拭っちゃっていいかな？」

「……好きにすりゃいいんじゃないの？」

「本当に！？ そんなことしちゃっていいのかな！？ この天使の事に、僕みたいな下賤の者が触れても許されるのかな！？」

「ちよつと待て、お前マジで大丈夫か！？」

ティファニアが寝返りを打ち、慌ててアクセルは口を閉じた。

「……で、どうした。何かあったのか？」

「あ、うん」

ナタンに促され、アクセルは立ち上がると、寝室から出た。そつと扉を閉め、二人並んで廊下を歩き出す。

アクセルの話の聞いている内に、ナタンも渋い顔になった。

「貴族のガキか。……そういうのは、今まで無かったな」

「まあ、この子爵領では僕だけだからね、そういうのは。今までの貴族の客は、隣のラファランもそうだったけど、だいたい二十歳を過ぎた人ばかりだから。何て言うか魔法学院の生徒達は……」

「常識が無い、つつうか……」

「そう。平民相手なら無茶が許される、そんな事しか頭がないガキだと、少々困ったことになりそうなんだ」

「……九歳児にガキって言われる奴らか」

口角を吊り上げて一度笑うと、ナタンは前方から歩いてくるバルシャに気付き、声を掛ける。書類を捲りながら歩いていた彼は、二人に気付くと立ち止まった。

「ちょうど良かった。少々、お願いがあるのですが……。二週間ほどの間、イシュタルの館、並びに東地区の警戒を強化したのです」

「おっと、バルシャもか」

「え？」

ちょうど、ナタンにも話そうと思っていた所だ。怪訝そうに聞き返すバルシャ、それにナタンの二人を前に、アクセルは執政庁での事を話す。

ナタンはただ頷いていたが、バルシャは険しい顔をした。彼が気になったのは、アクセルが口にしたとある名前。

「“悪逆”のサンディ……ですか」

アクセルもナタンも知らなかったが、バルシャによれば、裏社会では有名だという。

「何した人？」

「……昔、王城に忍び込んだそうです」

「え？」

思わず聞き返す。バルシャは険しい顔のまま、更に話を続けた。

“悪逆”という、実にわかりやすい、そしてシンプルな二つ名で

呼ばれるその男は、隠れた伝説である。トリステイン王国は、そんな男は存在しない、ただの根も葉もない噂話だと否定したのだが、わざわざ正式に否定したというその事実が、かえって実在の信憑性を持たせる事となった。

あれは十年前、いや二十年前だと、裏社会の人々は様々に言う。一体いつの話なのか、それどころかいつ頃から噂が始まったのかも分からず、全ては曖昧。だが、彼が何をしたのか、そう問われれば、ほぼ全ての人間が口を揃えた。

曰く、トリスタニアの王城に忍び込み、国王の愛妾を寝取ったと。

その愛妾の名もバラバラで、いや王妃を寝取ったのだなどという者もいる。しかしともかく、国王の女を奪ったというその男の噂は、人々の間で実に痛快な傑作として語り継がれ、実在したかが曖昧な事も相俟って、裏の伝説として定着していった。

「……すげえな」

ナタンは顔を引きつらせて、ぽつりと漏らす。が、アクセルは首を傾げた。

「まあ、王城に忍び込んで無事に逃げ延びたってのは、とんでもないヤツだなあ……と思うけど。事実だったとしても、結局はただの、間男だろ？ そいつが何でそんな……」

「“悪逆”のサンディが実在したかどうかなど、大した問題ではありません。問題は、“悪逆”のサンディを名乗る者が現れた、ということなのです。“悪逆のサンディ”という名はもはや、一種の称号のようになっており、様々な悪党が好き勝手に名乗っています」

そこで一旦、バルシャは言葉を切る。そして俯き、少し考え込ん

だ。

「もしかしたら、“悪逆のサンディ”とは、“悪党”そのものな  
のかも知れませんか。様々な悪党達がその名を名乗り、彼等の重ね  
た罪が、“悪逆のサンディ”の罪科に加えられていった……。 “悪  
逆のサンディ”が犯したと言われる罪は、星の数ほど挙げられます  
が、本当のサンディ自身の罪は、一体そのうちの幾つなのやら。 …  
…ともかく」

バルシヤは溜息をつくど、軽く頭を振った。

「その名が出てくる以上、警戒はしておくべきです。悪党の名で  
あることに変わりはないのですから」

聞き流していた名が意外に重要であることに、アクセルは頭を抱  
える。表と裏、両方から厄介事が押し寄せている感じた。

「……しかし」

そのアクセルの苦悩を察したのか、バルシヤは微笑むと、書類の  
束を手の甲で叩いた。

「イシユタルの館、並びに東地区の警備はお任せを。スルトもい  
ますし、対応しきれないという事も無いでしょう」

「夏休み終わりで、羽目を外したがる貴族の坊ちゃん達も来るよ  
「失礼ですが、あなたは少々心配し過ぎです。物分かりの悪い貴  
族を相手にするのは、私も初めてではありません。乗り切って見せ  
ます」

力強いバルシヤの言葉に、アクセルは彼を信頼することにした。



ただ、あまりに仕事に励み過ぎる彼に、違和感を覚える。出会った当初は、もつと冷静というか、冷徹というか、激することなく淡々と仕事を行うタイプだった筈だ。どうやらバルシャの中で、何かが変わりつつあるらしい。その変化が正か負かは不明だが、明るくなったとも言えるので、アクセルは善しとすることにした。

「そうか……。じゃあ、警備関係はバルシャ、それにスルトに任ずるとして。僕は、執政庁の問題に集中するのでしょうか。リーズの攻撃は大したことないだろうけど、イジドールと司祭の関係が気になる。ブリミル教を無視するわけにもいかないしね」

「んじゃ、俺はどうするか……」

ナタンはそう言うと、二人の顔を見た。問い掛けるような彼の言葉に答えようとするアクセルだったが、バルシャは待っていたとばかりに笑みを浮かべる。手に持っていた書類の束、その三分の二ほどを割り、ナタンの胸に軽く当てた。

「では、まずはこちらをお願いします」

「……何これ」

「この辺り一帯の治安の悪化の原因に、クルコスの街の傭兵ギルド崩壊が挙げられます。元傭兵の中から何人かが流れ着いていて、雇って欲しいと。その彼等のリストです。目を通して、優先雇用順位順に整理しておいて下さい」

「これ全員を？」

「はい」

ナタンは斜め下のアクセルを振り向こうとしたが、既に少年は消えている。傭兵ギルド崩壊に責任はなくとも、原因の一端を担うアクセルは、途中で耳を塞いで退散していた。

(そうだ……すっかり忘れてた)

ナタンとバルシャの元から逃げ出し、事務所二階のテラスの椅子にだらしなく寄り掛かっていたアクセルは、ふと思い出す。ティファニアの寝顔によって、すっかり脳内の辺境へと追いやられていたが、こうやってイシュタルの館に戻ってきたのは、バルシャに何か、普段の働きに報いるようなプレゼントをしようと思ったからだ。

以前の彼なら、頑なに辞退していただろう。だが、今の彼ならばどうか。欲しい物、望んでいる事、そのヒントくらいは漏らしてくれるのではないか。

(……何か、マジックアイテムでも作るか？ 平民でも使えるのがいいな。いや、それよりも休暇を取らせて、旅行をプレゼントするか。普通は行けないような場所がいいな。……サハラとか？ いや駄目だ、絶対に嫌がらせだと思われる。……あれ、そう言えばバルシャの趣味って何だ？ 酒もあんまり飲まないし、博打も女遊びもやらないし。そんな事も知らない俺も俺だよ、全く)

昔からバルシャを知る人間に聞くべきか。そう思っていると、ふらりとテラスにやって来た女性がいる。どこか疲れたような顔をしたフラヴィは、先客のアクセルに気付くと、挨拶も億劫なのか軽く手を挙げた。

「そうだ、フラヴィ。ちょっと聞きたいんだけど」  
「ん？ 何？」

尻を放り落とすようにして空いた椅子に陣取ったフラヴィは、軽く首を回しながら両手を左右に伸ばす。

「バルシヤの趣味とか、知ってる？ 好きな物とか」

「……弓術」

「それ、趣味かなあ？ 噂でもいいから、何か無い？」

「噂って言ってもねえ」

思い出そうとした様子も、考え込んだ様子もなく、彼女は笑い声を漏らした。そして顔をつるりと撫でながら、溜息をつく。

「そう言えば、知ってたかい？ 男前だし、優しいし、強いし。結構人気なんだよ、あいつ。ナタンもそうだけど」

「ああ、やっぱりか。納得」

「何人か、バルシヤを口説き落とそうとした娘もいるんだけどさあ……駄目。全滅。自覚無し、ってわけじゃなさそうだけど、何て言うか……節制って言うの？ 自分でブレーキかけてる所があるんだろっね」

「……ふーん」

職場内恋愛について、アクセルはとやかく言うつもりは無かった。彼女たちが恋心を抱くことが、イシユタルの館の業務に差し支える恐れがあるのは事実だが、本気で愛する男が出来たのなら、それはそれで仕方ないことだと思っている。

「……じゃあ、誰かバルシヤの想い人がいるってこと？」

アクセルは、自分がバルシャの立場だったらと考える。きっと自分なら、誘われるままホイホイついて行きそう。そうしないと云う事は、誰かに操を立てているのだろう。

「そりや分らないさ。けど、そうだね。自分はいくまで女を守る立場の人間で、女に手を出してはならない……と、そう考えてるんじゃないかい？」

「ああ、有り得るな、それ。奴隷市場でも、商品に手を出してはならない……って、厳しく教育されてたそうだし。そうだ、ひよっとして」

「ん？」

「リリーヌ？」

少年の口から、ふと一人の女の名が漏れる。そしてその呟きの意味を、フラヴィは即座に理解した。

「フラヴィも聞いただろ？ 食堂での立て籠もり。通りかかったリリーヌがバルシャに協力したそうだけど、それって、バルシャだったから協力したんじゃない……？」

「そうかねえ？ いや、それよりも」

リリーヌの名で思い出したのだろう。適当な返事をしたフラヴィは、そのような恋愛事情などより重要な、リリーヌについての別の話題へと移った。

「西地区の、ラーマ商会の旦那。それに、北地区の“木陰の小鳥亭”の若旦那が、リリーヌを身請けしたいとき。全く、二人とも全然諦めないから、対応が大変でさあ」

イシユタルの館の一番人気のリリーヌだということは、彼女の部

屋が館の四階にあることで、アクセルも臆気ながら知っている。そして、先日の立て籠もり事件以降、その人気は更に上がっていると、フラヴィはどこか嬉しそうに言った。収入や利益がどうこうではなく、大事にしている妹分の人気の高さに、鼻高々なのだろう。

白昼堂々、大衆の面前で一糸纏わぬ姿になる、という行動は、慎重深いとされるトリステイン王国の気風にも関わらず、好意的に評価されていた。やはり、人質の命を救ったという事実が大きいのだろう。批判する輩も、恥知らずの娼婦の中でも更に恥知らずな売女、としか言う事が出来ず、声を大にして言おうものなら周囲の失笑を買う。片田舎の街なので、身請けを申し出たのは二人だけだが、ここがゲルマニアで、更に首都のウィンドボナだったら、国中から何十人と押し寄せていたのではないかと、アクセルはぼんやりと想像した。

「……………ん？ ちょっと待って」

先ほどのフラヴィの言葉が引っかけかり、アクセルはすっかり妹馬鹿と化した彼女を現実に取り戻す。

「二人とも全然諦めない……………と言うことは、リリーヌが断り続けてるってこと？」

「ああ。まあ商会の旦那は、ガマガエルみたいな面してるし、わかるんだけど。小鳥亭の若旦那の方は、精力溢れる男前って感じなんだよねえ。まだまだあの食堂も大きくなりそうだし、悪い話じゃないと思うんだけど。まあ結局は、あの娘が選ぶことだしね。外野が口を出してもしょうがない」

「ふーん……………」

その時、フラヴィはハツとしたように目を見開いた。アクセルに

向き直ると、咎めるように彼に人差し指を突き刺す。

「っていつか、そうだよ。あんた、代官でもあるんだろ？」

「まあ……そうだね。いや、それが本来の姿なんだけど」

いくら殆ど働かないとはいえ、この街の、ひいてはこの子爵領の責任者であることに間違いはない。

「バルシャもそうだけど、リリーヌも民衆の命を救ったんだよ。

そんなら、リリーヌに何かご褒美があってもいいんじゃないかい？」

「勿論、それも考えてるさ。バルシャと恋仲なら、二人きりで旅行させるとか、そういうの考えるんだけど……。はつきりしない今じゃ、まだ保留」

「バツカじゃないの？」

フラヴィは立ち上がると、人差し指で何度もアクセルの胸を突いた。されるがままのアクセルの身体が、椅子ごとぐらぐらと揺れる。

「ちよっ、痛いつ、痛いつて」

吸血鬼の血が混じっている彼女の力は常人以上で、何気ないスキンシップが立派な攻撃にもなる。心配りを忘れたその指の攻撃に、アクセルは降参するように両手を突き出した。

「ご褒美なんて、いくつ上げたっていいじゃないか。マジックアイテム作れるようになったんだろ？ 代官なんだろ？ とにかく、全力でリリーヌを喜ばせな。それが報いるってことじゃないか」

どうもリリーヌの事になると、フラヴィはアクセルへの恐れが薄れる傾向にあるらしい。ふと、未来の……原作のマチルダとティフ

アニアを思い出すアクセルは、抵抗せずに頭をかいた。

「……うん、そうだね。よしわかった。わかったよ。……それじゃ、フラヴィ。リリー又の好きな物を教えて。もしくは趣味とか」  
「い、や、だ」  
「ええー……」

少々理不尽な対応をされたようにも思え、アクセルの片目が歪む。

「フラヴィ、矛盾してない？」  
「してない。あんたが苦労してそれを探ることも、報いるってことの内だよ。ほらっ、さっさと行くっ。結果的にリリー又が喜ばなかったら、アンタを屍人鬼化<sup>グール</sup>させてとんでもない汚名を着せてやるからね！」  
「ちよっ、言っつていい冗談と悪い冗談があるぞ！」  
「何言っつてんだい、本気だよ！」  
「……うわ本当だ、本気の目してるよ……」

這々の体で、アクセルはテラスから逃げ出した。

## 第十九話<問答>

バルシャは無言でフラヴィを見返す。その目に感情の動きは全く見られず、怯んだフラヴィは思わず半歩ほど後退った。

暫く瞬きを繰り返していたバルシャは、彼女の質問が自分にとって大した意味を持たない、その事に思い至ったかのように、また書類へと視線を戻す。

「違う」

口からは短く、否定の言葉を漏らした。

「え……そうなのかい？」

そう言うフラヴィも、その答えを心のどこかで予想していた。ああ、やっぱりそうかと、別段不思議に思うこともない。

書類に一言二言書き込みながら、壁に広げられたゼルナの街の地図にピンを差し込んでいくバルシャは、否定の言葉を重ねずに仕事を続ける。

「……んで？ 何でそんな的外れな事、わざわざ聞いてきやがった」

バルシャも、決して育ちが良いとは言えない。アクセルとナタンに対しては別だが、その他の人間に対してはだいたいこんな口調だった。



「いや、ベルのヤツがさあ、あんたに何かプレゼントしたいって」  
口に出してから、言わない方が良かったかと思ったフラヴィだが、既に後の祭りである。ちらりとバルシヤに目を向けると、彼は目を丸くして、書類ではなくフラヴィの顔を見ていた。

「プレゼント……？」

「そうだよ。この間の立て籠もり事件の時とかもそうだし、色々頑張ってくれてるからって。まあ、ご褒美ってヤツかねえ？ 代官としての立場もあるし」

「……………」

バルシヤは再び書類に顔を戻す。

(喜んでる……のかな?)

フラヴィにはそう見えた。一瞬だが、彼の表情が和らいだようにも見えたのだ。それが見間違いか幻覚であった可能性も否定できないが、どこことなく、その雰囲気は優しげなものを感じた。

「……………えっと、まあそんな訳で。アンタとリリーヌが恋仲なら、二人きりで旅行とかプレゼントしようかと思っただらしくて」

「その必要はねえ。仕事だからな」

「それ……………ベルの前でも、同じ事言えるのかい？」

バルシヤは答えない。その価値が無い質問だと判断したのか、それともフラヴィの言うように、アクセルに面と向かってそれを言う自分を想像したのか。

「……あの一件に関しては、俺も正直驚いた」  
「え？」

バルシャは書類の束を整えると、机に置く。そして壁際の水差しを手にすると、近くのコップに中身を注ぎ入れた。

「立て籠もりの一件は、俺も焦ったんだ。犯人はすっかり頭に血が上ってたし、容易には手が出せない。落ち着くまで時間をかけるか迷ったが、冷静になる前に最悪の事態になる可能性も高かった。……そこへ、通りかかったリリーヌが、自分が囿になると申し出たんだ」

「あの娘の方から……？」  
「そうだ」

冷水を一気に飲み干すと、彼は椅子に腰掛ける。壁に背を預けていたフラヴィも、近くの自分の椅子に落ち着いた。

「確かに、有効な手だ。女が衣服を脱ぎ始めたら、男なら誰でも気になる。どこまで脱ぐのか、どこまで見えるのか、ってな。特に最後の一枚を脱ぐ時なんざ、固唾を飲んで見守るさ。しかも、あいつは若くて美しい」

バルシャが女に対してそんな感想を持ち、しかもそれを口に出してしまうことに、フラヴィは密かに驚いた。彼はコップを机の端に置き、思い出そうとするかのように腕を組んだ。

「最後の一枚を残す、なんて事を考えて脱いでたら、犯人の注意は引けなかった。初めから素っ裸になる覚悟だったんだ。いや……覚悟、ではないな」

ついに、バルシヤは目を閉じる。唇を結び、鼻の奥から軽い呻きを漏らすと、瞼を開くより先に口を動かした。

「……覚悟じゃねえんだ。そんな鈍重なもんじゃない。良心、つてヤツか？ 一番優先すべきものが何か、わかってると言うか……心強い柱が通つていると言うか……」

暫く一人で抱え込んでいたが、バルシヤは突然頭を掻く。

「とにかく、だ。あいつは……そこらの女なんかより、よっぽどいい女だ」

バルシヤ自身、自分がそんな事を言うことになろうとは思っていなかった。

フラヴィ達が以前に起こした騒動に対して、ナタンは既に水に流している。アクセルは時々皮肉を言うが、それとて軽口のようなものだ。

しかしバルシヤは違う。未だ、フラヴィのことを、そして更にはスルトのことを信用していない。スルトについては、メンヌヴィルとして傭兵をしていた頃の情報を集め、契約違反を行う人物では無さそうであること、次に高い能力を有していることで、信用はしなくとも簡単に裏切りはしないと判断している。彼が警戒しているのは、やはりフラヴィだった。

女の摩訶不思議さを知り、理解できない存在だと理解しているからでもあるが、明確な悪意を組織に向けた相手を、バルシヤは容易には許せない。吸血鬼としてフラヴィが暴走したあの時、もしも彼がその場にいれば、アクセルの首筋に噛みつこうとする彼女の頭を射抜いていただろう。

あり得ない事だろうが、今、ナタンかアクセルに命じられれば、

バルシヤは躊躇いなくフラヴィイを殺す。

(……あの時)

バルシヤが思い起こすのは、アクセルがいなかった、イシユタルの館の宴会での事。一人会場を抜け出し、フラヴィイに命じられるままミシエルを攫おうとしたリリーヌを取り押さえたのは、他でもない彼だった。

(どういう事だろうな)

あの頃はまだ、リリーヌはどこにでもいるただの女だった。確かに美人だったが、騒ぐほどのものでもなく、器量や度胸も感じられない。ただ、その場その場で自分以外のものによって流されていく一人では何も出来ないか弱い女だった。

そのリリーヌが、いつの間にか変わっていた。彼女が犯人の注意を引く役を買って出た時は、双子の姉妹でも現れたのかと疑ってしまった。

白昼堂々、公衆の面前で裸になるなど、誰だって躊躇する。彼女に露出癖があるとも思えない。にも関わらずそれが出来たのは、先ほど彼自身が口にした通り、少女の……いや、少女だけではなく、犯人の命すらも優先したから。

(常に人命を優先する……ってことか)

その優しさは、リリーヌの元々の気質だろう。しかし以前の彼女なら、果たして、心では思っているにも実行に移せたかどうか。

ともかく、彼女のお陰で誰も死なずに解決したのだ。それについては、バルシヤは素直に感謝している。

「……まあ、リリー又も凄いいけどさあ」

独り思考の海に沈んでいたバルシャに痺れを切らしたのか、フラヴィは曖昧な笑みを作ると、彼に声を掛けた。

「アンタも凄いつて言うか、何て言うか……わざわざ溝を逆行するなんて、それこそ覚悟が無いと出来ない事だと思おうよ」

それが自分への褒め言葉であることを認識するのに、バルシャの脳は十数秒もかける。

「……。あんなもん、臭いを我慢すりゃいいだけだ」

素っ気なく返す彼は、その機会に思考を打ち切った。

イシュタルの館最上階である四階、イキシアの間。そこがリリー又の領域であり、この館で最上の一室であり、現在アクセルがその前をうろついている場所であった。

(……どっしり)

来訪の言い訳である。そろそろ客が来る時間帯であるし、そんな

に時間は無い。自然な理由を思いつけず、いつそ別の日に後回しにしてしまおうかとも考えた。

（クソツ、こんなんだから童貞のまま死んだんだよ、俺は）

扉をノックして、やあと挨拶して、欲しい物や好きな物が無いか聞き出す。すべき行動は、たったのそれだけ。スムーズに行けば、一分どころか三十秒ほどで済んでしまう。

（そもそも、普段そんなに話したりもしないしなあ）

以前に貰った、滋養強壯の妙薬のお礼を改めて言う、というのも考えたが、それなら手土産の一つでも持ってくるべきではなかったかと、二の足を踏んでしまった。

「……どうかしたの？ ベル君」

ここまで近づかれたのに気付けなかったというのは、それだけ集中していたからだろう。突然背後からかけられた声に、思わず前へと跳躍し、目の前の壁に手について姿勢を保つ。

「あ、部屋にいなかったんだ？」

急いで振り向きつつ、アクセルはぎこちない笑顔を作った。リリ―又は少年の様子に軽く首を傾けたが、すぐに柔和な微笑みを返すと、そつと手を伸ばして扉を開く。彼女に誘われアクセルも、相変わらず壊れかけの人形のようにぎこちない動きで、部屋の中へと立ち入った。

第一級の部屋ともなると、家具や内装も立派である。ベッドは天

蓋付きだし、絨毯は上質。さながらホテルのように、一通りのものは揃っていた。

「ジューズでいい？」

「あ、いえ、その、おかまいなく」

備え付けの食器の用意を始めるリリーヌの仕草は、実に自然体である。ここが彼女の領域である以上、それは当然な事であるのだが、ペースを崩されたままのアクセルは一層身体を硬くしている。

「ふふっ」

リリーヌが笑った。

「何だか、借りてきた猫みたい」

アクセルは反論できない。苦笑いのような愛想笑いを返し、彼女からコップを受け取った。注がれたレモネードは、アクセルのレシピの一つである。

絨毯の上に胡座をかくアクセルの横で、リリーヌも膝を折った。互いにレモネードを一口飲んだところで、少年は話題を思いつく。

「フラヴィイから聞いたんだけどさあ」

「姉さんから？」

「うん。……身請けの話、二つとも断ったんだって？」

リリーヌはこくりと頷いた。彼女は相変わらず、自然な動作のままであり、特に心を動かした様子は見られない。

身請け、と言っても、リリーヌの場合は完全に彼女の自由意志と

なる。元タリリー又はこの街の娼婦で、奴隷市で買われた女ではない。つまり、金銭的な義理は殆ど無いに等しく、例えば彼女がイシユタルの館を出ると言い出せば、阻める道理など無いのだ。せいぜい、この部屋の改修費用くらいだが、それも今までのリリー又の貢献で何とかなるレベルであり、結局身請けするのにいくら必要かは、勝手に吹っかける事が出来てしまう。そして身請けの金を、こっさりリリー又が懐に収める事も可能なのだ。

何故、と、断った理由を聞きかけて、アクセルは止め、レモネードを飲み干した。それはつまり、彼女が未だイシユタルの館に留まっている理由を聞くのと同じである。流石にそれを聞いてしまえば、自分がリリー又を追い出したがっているように取られるのではないかと、そんな危惧を抱いてしまった。

そしてそのように考えてしまったが故に、次のリリー又の言葉に慌てる。

「断らない方が良かったの？」

「そ、そんな事は言っていない。リリー又の好きにすればいいし。」

……まあ、断った理由を知りたいと言えば、知りたいけど」

「色々よ」

戯けて見せたのか、リリー又は胸を張った。が、すぐに背を正すと、彼女もレモネードを飲み干し、コップを傍らの椅子の上に置く。

「……私もね、聞きたい事があるの」

「僕に？」

「うん」

リリー又は絨毯の上に両手を置くと、足を揃えて正座した。ちょいちょいと、右手でアクセルを招く。内密な話でもするのかと、彼



は立ち上がらずに近づいた。

「わっ……」

両肩を掴まれ、引き倒され、思わず声を上げる。ぼふんと、彼女の太腿の間に顔を埋めた。驚くアクセルだったが、すぐに意図を察して寝返りを打つと、天井を……リリー又の顔を見上げる形で寝そべる。しかし彼女の顔は、眼前の豊満な双丘が障害となって見えず、アクセルはそれ以上意識しないように目を閉じた。

「……それで、何を聞きたいの？」

両頬がそつと、掌によつて包まれる。片目を開けると、リリー又は背を丸めてアクセルの顔を覗き込んでいた。頭に当たる柔らかい膨らみに気付き、アクセルはふて腐れるように再び目を閉じる。

「ベル君は……何で、イシュタルの館を作ったの？」

予想していなかった質問に、彼はそつと両目を開けた。二度三度、瞬きを繰り返し、リリー又の瞳を見つめ返す。

ふと、彼女は視線を逸らした。

「街の裏も支配するために、ナタンさんをボスにして組織を作ったんでしょ？ でもそれなら、賭場でも良かったし、そっちの方が稼げたんじゃないかなあって……。賭場を作つて、それから娼館を作るなら分かるの。でも、先に娼館を作つて、それをメインにしたのは、何でだろうつて思つて」

「……たかが九歳児のガキが、そこまで細かく考えると思つ？」

リリー又はそつと、アクセルの鼻梁に指を這わせる。暫く黙り込

んでいたアクセルは、自嘲するような笑顔を仕舞うと、一つ溜息を吐いてから口を開いた。

「人間の三大欲求は、食欲、性欲、睡眠欲。その中で一番商売になりそうで、裏社会で扱うのに相応しいと思ったのが、性欲。実際、この街には娼婦はいても、賭場は無かった。必要だったのは、娼婦なんだ。だから全ての娼婦を集めて、彼女たちを抑えれば、それが一番早く街の裏を抑える道になる……と、思った」

リリー又は黙って聞いている。

「……と、ナタンやローランには言っただけどねえ」  
「けど……？」

聞き返す彼女に、アクセルは呻いた。顔を顰めるように皺を増やしていたが、すぐに力を抜いてまた溜息を吐き出すと、表情を崩す。それが笑顔と呼んでいいものなのかどうかは、リリー又は判断出来なかった。

「初めは、何も考えてなかった。ただ、ナタンと出会って、あいつをボスにしようと思ってから、何日かは暴れ回ってた。あの時はただ、ゴロツキを片っ端から殴り飛ばしてただけだったんだけどね……そいつらが、揃いも揃って娼婦達を支配していることに気付いたんだ」

ラヴィス子爵領、ゼルナの街は、周辺から浮浪者が流入してくる、掃き溜めのような場所である。

碌な教育も受けておらず、何か特技があるわけでもない彼等が働き口を探そうとすれば、男はヤクザ、女は売春婦と相場が決まっている。賭博に熱中できるほど余裕がある者もおらず、いたとしても

そういう人間は、隣のクルコスの街へ行ってしまう。また、売春婦の成り手には事欠かない為に、賭博ではなく売春が広がったのだらう。

娼婦の勝手な商売は許さず、縄張りを作り、上納金を納めさせる。売春婦には事欠かない為、使い捨てが出来る。そして一定の縄張りさえあれば、十分に金は集まり、無理に他の組織を食らう必要もない。

アクセルとナタンは、ある種の馴れ合いを演じていたそれらの組織を次々と壊滅させ、一手に纏めたことになる。

「……僕がこんな事言っても、説得力無いだろうけど……貴族も平民も、職人も商人も傭兵もヤクザも、御婦人も娼婦も、結局は同じ人間なんだ。何の因果か生まれや育ちが違って、今の形になってしまっただけだ。なのに組織が金を吸い上げて、身体を張って稼いだ娼婦が苦しむって法も無いだろう」

アクセルは寝転んだまま、両腕を広げた。

「人間なんて……一人の人間なんて、ちっぽけさ。こっやって両手を広げて、たったこれだけしか抱え込めない。でもさ、だったら、僕が抱え込めるだけの世界では、僕が満足出来るようにしたいんだ。そして、せめて僕の両手が届く範囲の女の子には、明日を失って欲しく無い」

自分自身で確かめるようにしながら、尚も言葉を続ける。

「まあ、僕らも娼婦の稼いだ金をピンハネする以上、前の組織の連中と、特に変わり無いんだけど……せめてさ、安心して仕事出来る場所くらい、あってもいいんじゃないかな。明日の事、明後日の事、ずっと先の未来の事。そういう、夢を見られるくらいの安心

を」

使い捨てにされる娼婦達は、明日を見ていなかった。これから先、自分がどうなるかくらいは、容易に想像できた筈だ。何しろ周囲には、未来の彼女たちの見本がゴロゴロといた。見えなかったわけではない、見なかった。見ようとしなかった。目を背けていた。そして例え見たとしても、その結末を受け入れてしまっていた。

「……だからっ、要するにっ」

いくら何でも、喋りすぎた。今更ながらそのことに気付いたアクセルは、照れ隠しに慙然とした表情になると、齒軋りするかのよう  
に顎を閉じる。

「今までの売春が気に入らなかったから、自分で気に入るようにしようと思っただけさ。それだけ」

結局は、それだけなのだ。使い捨てにされる娼婦達が可哀想だと感じた、それだけの事。

改めてリリーヌの顔を窺うが、彼女はニコリと微笑んで見せた。何となく、年の離れた姉に秘密の相談をしている弟のような、そんな気分になってくる。アクセルは壁の時計を確認すると、身体を起こした。

「時間……」

「うん。そろそろだね」

リリーヌに見送られ、部屋の扉を開く。未だ四階へと上がってくる客はいないが、階下は俄に騒がしくなってきた。

彼女がここに留まる理由、その一片だけでも聞いてみたかったが、客が来る前に下がった方が良い。

「あ、そうだ。僕からも質問なんだけど」  
「ん？」

扉に手を当てるリリー又は、小首を傾げた。小細工を用いるのも馬鹿らしくなり、アクセルは単刀直入に尋ねることにする。

「何か、プレゼントしたいんだけど……。何がいい？」

「プレゼント？」

「そう。何か欲しい物とか、して欲しい事とか……」

「じゃあ……」

殆ど考えることもなく、彼女は口を開いた。

「それは、来るだろう」  
「やっぱりか」

リリー又との会話中、ふと思いついたアクセルは、スルトに相談に来ていた。何と言っても最年長であり、世の裏を渡ってきた彼からは、重要な意見を聞けることが多い。

「お前も考えている通り、この街の裏を統一しようなんて組織が現れなかったのは、せいぜいシノギになりそうなのが売春程度で、それが過剰供給状態だったからだ。無理に痛い思いをして縄張りを広げても、結局は得られる利益が少ない。だから、組織は互いに協定を結び、仲良しこよしでやって来た。それを、お前が全て平らげ、ナタンの元に統一してしまったわけだ」

「うん」

「この組織が苦労も痛みも全て引つ被り、丸ごと街の裏の顔となった。娼売を一手に握り、今まで出来なかった賭場も運営できるようになった。宣伝も行い、領主に黙認させるための伝手も……いやまあ、これはお前がいるから、大した問題では無かっただろうが。ともかく、だ」

スルトは頬杖をつき、椅子の背もたれに深々と身体を預けた。

「ナタンだ。あいつは、一つの象徴となった。裏の象徴にな。そして、ファミリーだったか？ この組織を倒し、取って代わりさえすれば、この街の裏の利権は全て手に入る。既に一元化されているから、実にスムーズだ。面倒ごとを片付けた以上、お前達が苦労して開墾した土地を狙う輩も次々と出てきた。そして、次第にこの組織の戦闘力が知れ渡り、簡単には太刀打ちできないと知って、ゴロツキ共も二の足を踏んでいる……というのが、現在の状況だろうな」

さながらブームが過ぎ去ったかのように、今では組織に喧嘩を売る者は極僅か。

頬杖をつくスルトの、その太い腕を見ながら、アクセルは無理も無いと考える。目の前にいる彼一人を取っても、こんな片田舎には場違いな戦闘能力を有している。メイジであることはそれだけで畏怖の対象であるのに、そのメイジの中でも上から数えた方が早いであろう実力者なのだ。

「しかしなあ、まだ来るぞ」

スルトの言葉に頭痛を覚えながらも、アクセルは頷いた。

「そして、次の相手は」

「ああ……。この街の守備隊でもおかしくは無い」

それはあくまで可能性の話であり、勿論そうであって欲しくは無い。

しかし、未だ戦っていない相手で、目に付くのはそこだった。今までとは違う、正規の教育を受けた戦闘集団。イジドルが何を企んでいるかにもよるが、或いは、守備隊を丸ごと敵に回さなければならぬという未来も有り得る。

そうなった場合、勝つのはファミリーの方なのだが、それが問題である。こちらが非合法である以上、守備隊が敗北するのは世間的にも許されず、もしも最悪の方向へと進めば、監督不行届によるラヴィス家取り潰しへと繋がりがかねない。

（流石にそれは、最悪に最悪が続けばの話だけど……。もしも守備隊が敵に回るんなら、何とか穏便に片付けられないとな）

現在、ラヴィス子爵領の支配体制は、なかなか歪なものになっている。

前任の代官から引き継がれて後、守備隊や文官たちを束ねるのはアクセルやリーズ。しかし二人とも、未だ子ども。相変わらずラヴィス子爵が出張中である以上、軽く見られても仕方がない。その為か、守備隊の素行の悪さが問題となり、自警団の方に人気が集まることにもなった。

守備隊の質が悪くなり、自警団の方が頼りにされて士気が下がり、

それによって質が悪くなり……と、悪循環に陥っている。つまり、更なる悪行へと走る可能性もある。

「守備隊が、ゴロツキになってしまいかもな」

アクセルは相変わらず渋い顔をしていた。

スルトは拳を顎から離し、さながら教師か上司のように言う。

「ゴロツキが求めるものは、何だ？」

「……金。女」

「そうだ。そしてここには、そのどちらもある」

「……スルト、何かない？ 守備隊更正の妙案とか」

「逆なら出来るがな。そういう地道な正しい行いは、俺の範疇外だ」

ただ……と、スルトは続ける。何か方法を思いついたのかと、アクセルは期待の面持ちで口を閉じた。

「魔法だ」

「魔法……？」

「そうだ。お前がガキだろうが、メイジはメイジ。お前の魔法が更に強力になれば、お前は表の世界でもっと好き勝手が出来る。要するに、守備隊を恐怖で支配しろ。そのイジドールというメイジはドットクラスなのだろう？ お前はラインクラス、既に一段上の存在だ。トライアングルにでも成長すれば、お前に逆らうヤツなんて消えるだろう」

「……………」

「それに、これは貴族共全員に言えることだが……もっと、魔法を使う鍛錬を行うべきだ」



正論である。それ故に、アクセルは少し驚いた。

「大人になれば、どうしても、いざという時の問題が出る。いざという時、魔法が必要になった時の事を考え、常に一定の精神力を残すようにする。魔法なんざ、使えば使う程強気に成長するんだ。だから、ガキのうちに、それこそ精神力を使い果たすまで鍛錬を積むべきなんだが……どいつもこいつも、面倒くさがるからな。才能があっても、それを開花させられないヤツらばかりだ。まあ、お前には必要ない説教だろうが」

「……いや、そんな事ないよ」

バツが悪そうに、少年は俯く。最近は文呪法や座学、それに格闘術の開発に囚われてばかりで、正道の魔法の訓練をお座なりにしていた。切り札や奥の手も重要だが、貴族社会で生きる以上、通常の……普通の魔法も、疎かには出来ないのだ。何しろ表に出せるのは、それだけなのだから。

「……なあ、スルト」

「鍛錬には付き合わんぞ」

ぴしゃりと窓口を閉じられ、アクセルは文字通り閉口する。

今までにも何度か頼んでみたことがあるのだが、いつも彼は、何のかんのと理由をつけて拒否していた。

「むう。アニエスには稽古付けてやってるんだろ？」

「あれは、あいつの恐怖症を治すために、俺の鍛錬がてら付き合っただけだ。貴族であるお前が、不良メイジを先生にしてどうする」

自らを不良メイジと表す彼は、やはりアクセルの考察通り、なか

なかにまともである。目を付けられさえしなければ、付き合うのに何ら問題無い男だ。

「……ところで、話を戻すけど」

どうあってもスルトの了解を得られそうには無く、アクセルは椅子に座り直すと、膝の上で両手を組み合わせる。廊下の外では、従業員達の忙しない足音が響いていた。

「守備隊を相手にする可能性、どのくらいだと思っ？」

「何とも言えんな。未だ、特に動きは見られないそうさ。それに何より、“悪逆のサンデイ”についても気になる。……いつそ、俺がクルコスの街に行くか」

「え？ けどお前、レオニー子爵領ではお尋ね者だろ」

「はつきり名指しで手配されているわけでも無し。向こうとて、本気で探しているわけではないのだろう？ 闇夜に紛れて動けば、例え発見されたとしても、俺なら逃げ切れる」

「それにしても、危険過ぎるぞ」

「いや、二日か三日ほどだ。それで何も見つからなければ、大人しく戻る」

確かに、昼も夜も関係なく動けるスルトならば、捕まる可能性は低い。それに彼ほどの能力があれば、もしかしたら、何らかの手掛かりを入手してくれるかも知れない。

「……二日か三日でいいの？」

「ああ。イジドルが守備隊増強の案を出したそうだが、それが布石だとしても、すぐに動き出す事は無いだろう。ゴロツキの侵攻も一段落した事だし、そのくらいなら俺がいなくても問題無い」

「案内は？」

「いらん。前はあそこが拠点だったしな。信用できそうな人間も何人か知っている」

「そうか……。それじゃ、よろしく頼むよ」

「ああ」

アクセルはふと、窓の外を見る。

闇夜に映えるイシュタルの館は、確かに、誘蛾灯の如き不可思議な魅力を放っていた。

## 第二十話<家族>(前書き)

ついに100万PVを突破しました、ありがとうございます！  
相変わらずの遅筆ですみません。PVの記念とは言えませんが、今回、また後書きに落書きがありますので、挿絵表示OFFとバックのご用意をお願い致します。

## 第二十話<家族>

「……やられました」

生のハシバミ草を鼻の穴に突っ込まれたような顔で、バルシヤは報告した。

報告書を纏めていたナタンは書類から顔を上げ、ソファに寝転んで読書していたアクセルも、ページを開いたままの本を胸に置く。

「やられたって……何が？」

「食い逃げです」

「そ。飯と酒、それに女をね」

事務室に入ってきたフラヴィは、バルシヤの背後を擦り抜けると、頭をかきながら自分の椅子に座った。バルシヤは両の拳を握り締め、肩を微かに震わせている。

ナタンとアクセルも、ようやく何が起きたのかを理解した。ナタンは机に書類を置く。

「初めてだな………そんなの」

イシユタルの館に来た客は、皆、玄関で履き物を脱ぐ。開放感があるとの評判だが、同時に容易には逃げられない。金を払わずに逃げ出そうとしても、履き物が保管されている為だ。

そもそも客は金持ちばかりであるし、持ち合わせのない場合の後

払いというのはあっても、踏み倒して逃げられるというのは初めてだった。

「そいつ、どんなヤツだ？」

怒りよりも寧ろ興味が湧き、ナタンは笑みを作りそうな自分の顔を戒める。バルシャの答えは、実に漠然としたものだった。

「白髪の老人らしい……です」

「らしい？」

「接待した女は二人なんですが、二人とも、話したから……」

ナタンに続き、傍らで聞いていたアクセルも首を捻る。

「どうやら、よっぼどいい爺さんだったらしいよ」

補足する形で、フラヴィが割り込んできた。

金を払わず逃げられ、そして“タダ乗り”をされていれば、最も怒りを抱きそうなのは彼女なのだが、その顔には怒りではなく困惑のような呆れが浮かんでいる。

「いい爺さん……って、何が？」

「ナニが、だよ」

理解していないナタンにも呆れたのか、フラヴィは軽く溜息をついた。

「相手したのは二人なんだけどさあ、二人揃って、その爺さんの代金を肩代わりするって言うって。よっぼどの女たらしなんじゃないの？」

「……ふうん」

アクセルは相変わらず寝転んだまま、鼻の頭をかく。新米の娼婦なら、そうやって男に騙される事も不思議では無いだろう。しかし、娼婦が保証人になってツケるといのはわかるが、肩代わりとなると話は違う。もう金輪際、顔を見せるか分からない男の為に、金を払ってやるということだ。

しおりを挟み、本を隣のテーブルに置くと、アクセルはソファの上で背を起こした。

「女の子にそこまで想われるなんて、すごい爺さんだね。会ってみたいな」

「言ってる場合ですかっ！！」

アクセルに同意しようとしたタタンだが、バルシヤの激昂に思わず姿勢を正す。今まで彼に怒鳴られた覚えなど無いアクセルも、驚いて瞼を打ち鳴らした。

「そのジジイは、イシユタルの館の……ひいては組織の顔に泥を塗ったことになります。早速に追っ手を放ち、捕えましょう。例え老人といえど、例外を認めるわけにはいきません」

メンツの話が出た事に、いよいよヤクザになってきたなど、アクセルはぼんやりと思う。

確かに、非合法的な組織であろうと……いや、非合法的な組織だからこそ、信用というものは大切なのだ。それしか依る辺は無いのだから。

「……そうだね。それじゃ、僕がその二人に聞き込みしてみようか」

「聞き込み？」

「もしかしたら、子ども相手ならポロっと洩らしてくれるかも知れないし。ダメで元々、やってみる価値はあると思うよ。」

ベルだろうとアリスだろうと、管理側の子どもとして娼婦達に知られていることに変わりはないが、それでもバルシャ達よりは警戒が薄れるだろう。

だが、それでも矢張り可能性は低いのだ。

直接の被害者である筈の娼婦が納得している以上、彼女たちに老人の情報提供を強要することは出来ない。しかし、彼女たちも集団に属している以上、自分たちが了解しても、それで丸く収まる筈が無いことくらい理解しているだろう。にも関わらず、バルシャが手を出せない程に頑なに黙っているのなら、それなりの覚悟を決めている筈なのだ。

(つまり、一筋縄ではいかない、と。女にそこまでさせる爺さんつてのも気になるけど……やっぱ、聞き出すのは無理かなあ)

一応試してみるが、アクセル自身、あまり期待はしていない。

「それで、フラヴィ。その二人ってのは、誰なの？」

「ギャエルとマノン。元々は街の娼婦で、あたしもよく知ってるよ。」

問われることを予想していたらしく、フラヴィは淀みなく答えた。だが、口調とは裏腹に、その顔はどこか釈然としない風で、人差し指でくるくると自分の髪を弄んでいる。彼女の表情が気になり、アクセルは、何か気になる事でもあるのかと尋ねてみた。

「いやあ、それがさあ……。あの二人、犬猿の仲だった筈なんだ



けど。その爺さんが帰ってからは、何でか仲良しになってるんだよねえ。二人で一緒に接客することになった時は、文句ばかり言うてたのに」

「ふうん……」

アクセルの脳裏に、ふと二人の娼婦が浮かんだ。直接話したこともなく、遠目に見るくらいだったが、確かに、明らかに仲の悪そうな二人がいた。性格も正反対で、水と油といった様子だった覚えがある。

「んじゃ、フラヴィー。案内して」

「え、アタシ？」

「そう。ちょうどさっき、クッキー焼いたから……一緒にお茶しようとか、そういう風に誘って」

ギャエルとマノンは、二人とも、親がこの街に流れ着いたという女で、ゼルナの生まれだった。他の娼婦達と同様、教育などというものは受けられず、出来る仕事は非常に限られていた。

現在、イシュタルの女達の中での第一位はリリーヌであり、それは彼女たちも認めている。ギャエルとマノンは、言ってみれば二位を争う二人なのだ。街で立っていた頃から仲が悪かったが、イシュタルの館に入って野垂れ死にの恐れが無くなった事により、却って喧嘩に精を出すようになり、その仲は益々悪くなっていった。ただのライバルならば問題無いのだが、あまりの仲の悪さに周囲にまで悪影響を及ぼすようになっていて、フラヴィーとしても悩みの種として頭を痛めていた。

そしてその二人が、今では仲良く一つのテーブルに座り、噂話で談笑している。

(バルシヤに怒られるけど……その爺さんのお陰なら、礼の一つも言いたくなるな)

休憩所としても使われている広間には、二人しかいない。人の目がない所でも仲良くしているなら、その老人のお陰で、本当に仲が改善されたのだろう。

「あ。フラヴィに、ベルか」

ガタンと椅子を揺らし、こちらに顔を向けてきたのは、ギヤエル。背を反らしても、彼女の胸にははつきりとした膨らみがある。細かい事を気にしない大雑把な性格で、それは、なるべく手入れを少なくするために、短めに切られた緑髪からも見て取れた。

「ああ、ちょっとね。クッキー焼けたんで、二人にも食べて貰おうと思って」

フラヴィの後ろから、アクセルはそう言って包みを持ち上げる。さっと立ち上がり、フラヴィとアクセルの分のカップを用意しに向かったのは、マノン。よく気が回り、ほつれた客の衣服を繕ってやったりもする。しかし気が回ると言うよりは、きちんとしていない物を放っておけない性格と言うべきで、その為に、大雑把なギヤエルには嫌悪感とも呼べるものを抱いていた。

アクセルが空いた椅子に腰掛け、クッキーの包みを広げる頃には、カップと皿を用意したマノンが戻ってくる。手を拭くための濡れタオルも持参するあたり、用意が良い女だった。

ギヤエルもマノンも、アクセルとフラヴィが、例の老人のことを聞きに来たのであることは察していた。しかし何事も無いように、

今度はフラヴィも交えて噂話を再開する。唯一聞き役に徹するアクセルは、クツキーをゆっくりと嚙りながら、彼女たちの話に耳を傾ける。

ナタンやバルシャにああは言ったが、はっきり言って、上手く聞き出す自信など無かった。前世で女つ気が皆無であった自分が、こつやって美しい女性に囲まれているのに、泰然と落ち着いていられることからしておかしい。

（まあ、俺にそんな能があるわけないし。……子どもは子どもらしく、単刀直入でいってみるか）

話題は、最近の客のことへと変わっていた。カップの紅茶が無くなっていく。立ち上がるうとしたマノンを制し、アクセルはポットを持ち上げ、彼女たちのカップへと静かにお代わりを注いでいく。そして全員のカップが満たされた時を見計らって、椅子に座り直しながら、彼は思い出したように口を開いた。

「そう言えば、バルシャの兄ちゃんが怒ってたよ。食い逃げされたって」

「食い逃げ、ねえ。確かに」

少年が知る筈の無い意味合いを想像してか、ギャエルが頬杖を付いてニヤニヤと唇を歪める。行儀が悪いと、まるで母親のように注意するマノンは、音もなくカップをテーブルに置いた。

「確かに、バルシャさんの怒りももつともだけど」

「やっぱりさあ、別にいいと思うんだけどなあ。私達が払う、つて言ってるのに」

メンツの話など、ギャエルにとっては腹の足しにもならない細事

なのだろう。少し考えたアクセルは、彼女に同調することにした。

「僕も、わかんないんだよねえ。結局は、損なんかして無いんでしょ？ だったら、そのお客さん、見逃してあげてもいいんじゃないの？」

「だろお？」

アクセルの頭を撫でながら、ギャエルは口を尖らせる。リリーヌの時もそうだったのだが、普段あまり子ども扱いをされないせいで、このような善意の接し方をされると、どうしても照れが出てしまう。

「ちよ、やめてよ」

若干顔を赤くしながら、彼女の手を振り払おうとする。それは演技半分、素直半分の行動だった。

「えー、別にいいじゃん、ちょっとくらい」

最近気付いたことだが、娼婦達はどうも、幼い少年というものに触れる機会が少ない。黒幕とも言えるアクセルも、裏事情を知らない彼女たちから見れば、ただの無垢な男の子にしか映らないらしく、可愛がられることも多い。元々アクセルが、女相手に強く出られない性格であることも相俟って、その評価も完全に間違っているとは言い難かった。彼の容赦のない暴力を知っているフラヴィも、初めのうちは内心ハラハラしていたが、今では落ち着いて放置することが出来る。

今の子どもっぽい拒否の行動も、ただの照れであると思われていくらしく、そしてそれを否定しきれない以上、結局は諦めるしか無い。若干慚然とするアクセル、彼の頭を抱きかかえるギャエルの二人に、マノンは呆れたように反論した。

「そういうわけにもいかないでしょ。私達のやったことは、例えば、レストランで食い逃げした客の代金を、ウェイトレスが支払うようなものよ」

「……けど、それって問題かな？ だって、結局店側は損して無いだろ？ 当の私達が納得してるわけだし、問題無いと思うんだけど」

「それは……」

マノンも、自分の正論を一から説明できるほどに、学がある訳ではない。自分たちが本来してはいけない事をしたのだと、感覚的には理解しているらしいが、それをギャエルに納得させる術は持ち合わせていなかった。

ギャエルに味方したのは間違いだったかと、アクセルは少し反省し、寝返ることにした。

「ベルも、そう思うよねー？」

ギャエルはアクセルの顔を覗き込みながら、小首を傾げて笑って見せる。彼女の胸に埋まりながら、アクセルは首を振った。

「え？ 何、裏切るの？」

「いや、マノンの姉ちゃんの話聞いて、やっぱりいけない事だなあと思った」

咎めるようなギャエルの腕から解放され、アクセルは椅子に座り直すと、二人を見回す。

「いくら、ウェイトレスが納得しててもさあ。やっぱり、店側の人はいやだと思う」

「ん？ 何で？」

「だって、同じ場所と一緒に働く、大切な仲間でしょ？ そんなことさせたくは無いし」

ああ、つまりはそういう事なんだ……と、アクセル自身も納得してきた。その満足感が薄れないうちに、フラヴィイの方を向く。

「フラヴィイだって、イヤなんですよ？ 仲間がそんなことさせられるの。僕はイヤだけど」

「確かに、ね」

世の中の裏ばかりを見てきた、見せられてきた彼女たちには、予想出来なかったのかも知れない。男が、自分たちを管理する存在である者が、そんな甘く優しい心を持っていた事など。

娼婦達を使い捨てる道具としてしか見なさなかったのが、今までの組織であり、そしてそれが当たり前だったのだ。ギャエルも、自分がまさか仲間として扱われているなど思いもしなかったし、マノンもただメンツや道理の話をしていただけで、そんな事は露ほども考えてはいなかった。

勿論、メンツの問題もあるだろう。しかし、もっと大きいのは、仲間を思いやる気持ちでは無いのか。そしてその気持ちが一番大きいのはバルシヤであり、先ほどの彼の激昂は、その現れでは無かったのか。アクセルは、自分のその考えが間違っているとは思わない。

(間違ってたのは……やっぱ、ナタンと俺か)

薄々、バルシヤの怒りは正しいと思いつつも、結局自分は、それをただのメンツの問題としか捉えていなかった。

ナタンも、今頃は沸々と怒りを滾らせているかも知れない。自分の仲間が騙されたかも知れないという、家族愛とも呼べる怒りを。

絶句しているギャエルとマノンを前に、フラヴィは溜息をついた。

「やっぱ……甘いんだよねえ、ウチの男どもは」

ナタンも甘い。バルシャも、やはり甘い。

二人はフラヴィの言葉に、それぞれ黙ったまま頷いた。

「……そんなんじゃ、娼婦に……私達に舐められるんじゃないの？」

呆れたように笑うギャエルの顔に、うつすらと涙が光る。

「ちょっと、何泣いてんの？」

「う、うつさい。言うな、見逃してよ。泣きたくなるから」

空中でひらひらと、マノンを押しつけるような仕草で右手を動かしながら、俯いたギャエルは左手で顔を擦る。

「いや……ハハ、何だか、何だろ……嬉しい……のかな？」

彼女は未だ、顔を上げようとはしなかった。

「バルシャに、怒られたんだけどさあ……初めてだよ、怒られて嬉しいなんて」

アクセルも沈黙していた。頭では理解していても、やはり、ナタンやバルシャのように激しい怒りを抱けない自分への失望。そして、怒られて嬉しいという、彼女の言葉に。

「でも……やっぱり、甘いと思う。ギャエルの言うとおり、私達にまで舐められたら……」

「それこそ、あたし達の心の問題だろ？」

フラヴィは深々と、椅子に座り直す。無理な体重のかけ方をされ、ギシリと木材が軋む音がした。

「娼婦がそんな事を心配出来るんなら、ここは……イシユタルは安泰さ。甘ちゃんの男どもを、あたし等が支えてやればいいじゃないか」

「……そうだね、それでいいじゃん」

漸く涙が途切れたのか、ギャエルは顔を上げると共に立ち上がった。赤くなつた顔を袖で拭い、一度大きく息を吐き出す。

「どこ行くの？」

「んー、バルシャの所」

アクセルの問いに彼女がそう答えると、マノンもそつと立ち上がった。

「……そのお爺さんの事、話すの？」

「ううん、その必要は無いわ。今夜も遊びに来るって言ってたから」

「そ。待ってれば、あっちから来てくれるよ。勿論、あの人に支払わせるつもりは無いけど……売り言葉に買い言葉とはいえ、バルシャに色々とひどい事言っちゃったんだよねえ」

「主にギャエルがね」

「マノンだつて、相当だったじゃん。……と言つわけで、これから謝りに行くの」



マノンが手を伸ばし、アクセルの頭を撫でる。その上からギャエルが手を重ね、彼女と同じ色をした少年の髪の毛をぐしゃぐしゃにかき回した。頭部を振り鐘のように揺らされたアクセルは、二人の手が離れた後、そつと彼女たちを見上げる。

「自分が悪いと思った時には、素直に謝らなくちゃ。ベルもそうしなよ?」

「……うん……」

力無く頷き、アクセルは誰にも聞こえないような溜息をついた。

がたんつ、と、椅子が倒れる。

「……?」

二人のどちらかが、椅子に足でも引っかけたのかと、アクセルは見当を付けて振り向く。しかし、椅子と共に、ギャエルが床に倒れていた。

「え……」

椅子を跳ね飛ばして立ち上がったアクセルに、フラヴィも異変に気付く。倒れたギャエルに手を伸ばそうとしたマノンが、視界の中で、同じように床に倒れた。

「ああ……あつ……あつ」

ギャエルは顔を歪め、悲鳴とも呻きともつかない、声にならない声を上げ、自らの胸を押さえている。マノンは歯をガチガチと打ち

鳴らしながら、何かに耐えようとするかのように、身体を丸めて震えていた。

「どうしたっ、何があった!?!」

アクセルはテーブルの上を踏み越えると、二人の元に着地する。フラヴィもすぐに駆け寄ってきた。

「フラヴィっ、持病か何かか!?!」

「いや……この二人にそんなのは無い」

手を伸ばし、ギャエルにディテクトマジックをかけようとする。が、彼女の悶絶は益々激しさを増し、その手は弾かれた。

「フラヴィっ、抑えろ!」

「あ、ああっ」

自分より膂力のあるフラヴィに怒鳴り、ギャエルの身体を無理矢理に抑え付けさせる。馬乗りになり、ディテクトマジックを行うアクセルの両腕は、ふらふらと泥酔者のように彷徨った。

「何っ……だ、こりゃ……」

アクセルの口から、唾然とした吐きが漏れる。

この方法で人間を診察した経験は少ないが、そのアクセルの感覚から言っても、それは異質だった。体中の水分の流れが混乱しており、それが漠然とした苦痛を引き起こしている。身体全体を苛むその症状は、原因となる場所の特定を困難にしていた。

「くそっ、一体何だこれは」

水メイジの医者も二人ほど雇っているが、専門家であるその二人ですら、どうにも出来ないのではないか……そんな思いが浮かぶ。

「ベルっ、何とかならないのかいっ!？」

憔悴しきった顔のフラヴィが尋ねてくるが、アクセルには答えられなかった。耐えようとしていたらしいマノンも、すぐにギャエルと同様に苦しみ出し、アクセルは彼女の上へと飛び移る。

「……! 誰かつ、誰かいないかつ!」

暴れ出そうとする彼女の背中に回り、羽交い締めにする。ドアへ向けた叫びから十数秒ほどして、パタパタと足音が聞こえてきた。

「兄さんっ!？」

駆けつけたのがミシエルであったことに、アクセルは安堵する。いくら何でも、ティファニアなどに見せられるものではない。

「ミシエルっ、ナタンとバルシャを呼んでくれ! 大至急だっ」  
「わ、わかった!」

問答の時間が無いと判断したらしく、ミシエルはすぐに行動に移った。

「た……助かるんだろ!? そうだろ!？」

泣きそうな顔で、フラヴィが尋ねてくる。

彼女とて、病気で苦しむ仲間を看病した経験はあった。しかし、

あまりにも異質なのだ。何の前触れもなく、突如として倒れ、気絶するのではなく苦しみ出した二人の様子は。

答えを持たないアクセルはただ、唇を噛み、マノンを抑え付けるしかなかった。

ギャエルとマノンの二人の症状については、医者もお手上げだった。

あまりの苦しみに、スリープクラウドで眠らせようとしたのだが、体内の水の流れの乱れのせいか、受け付けなかった。水の秘薬を試しても、同様に効果が薄い。

水の秘薬を全て使い切る形で、ギャエルは何とか安静状態に持ち込めたが、問題はマノンの方だ。

アクセルが考え出せたのは、フラヴィに噛みつかせ、屍人鬼にして強制的に意識を奪う方法だけだった。

(……何て愚策だ)

改めてそう思い、アクセルは舌打ちする。吸血鬼ハーフの能力が、真正の吸血鬼とどう違うのかも未だわかっておらず、屍人鬼化を解呪する方法も確実ではない。自分にそれが出来たからとはいえ、彼女に応用できるかはわからないのだ。勿論、何としてでも成功させ

るが、もしも失敗すれば、自分はフラヴィに仲間を破壊させたことになる。

「くそ……」

医務室に寝かされた二人を前にして、アクセルは噛み合わせた歯を動かさずに漏らした。両手の指を組み合わせ、そこに額を乗せる意図したわけでもなく、祈りの姿勢となった。

今まで自分が漁った書物の中にも、該当しそうなものは無い。

(……何か……盛られたのか……?)

持病もない、健康体の彼女たちが、二人揃って突然苦しみ始めた原因として考えられるのは、二人一緒の時に、何かをされたから。念のため、クッキーや紅茶も調べてみたが、特に異常は無かった。二人が一緒に過ごした状態を考えてみれば、昨夜、例の老人を客として迎え入れた時。

「………………。ごめんなあ。ギャエル、マノン」

答えが返ってくる筈も無いが、アクセルはぼつりと呟くと、変わらず頭を下げたまま両手を持ち上げ、二つの拳を固く握りしめる。

「二人にとつて、その爺さんは大切な男なんだろうけど……やっぱり……僕たちは、それじゃ収まらないんだ」

本当に彼女たちの気持ちを汲むのなら、この行動は間違いなのかも知れない。

しかし、自分を含め、そこまで物分かりの良い仲間はいなかった。

「絶対……何とかして見せるから」

口にした彼以外に聞く者もない言葉。それは、アクセル自身への言葉だった。

## 第二十話〈家族〉（後書き）

妄想乱文注意

〈拙作での原作キャラ・アニエスについて〉

本来、彼女の役所はオリキャラの傭兵少女が担当する筈でしたが、書き進めている内に魔が差し、大幅な性格改変をしてしまいました。概ね受け入れて頂いたようで安心しました。最大の問題はメニューとの関係ですが、これは後々書いていきたいと思っています。

478

既に私の中で、アニエスというキャラ自体が大幅な魔改造をされています。

オリ主、アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィスの驚愕

> i24294 — 2695 <

転生者言語で「少し黙っててくれないか」

アニエスに悪気や乱痴気があるわけではなく、ただ新しく覚えた言葉を使ってみた年頃なだけです。アクセルは自分のせいでは無いかと危惧しますが、こればかりは原作介入などによるものではなく、言い訳のしようも無い程に作者の悪気です。

### エンゲル係数の牽引役

> i24295 — 2695 <

「どんだけ食うの。ギャル曾根かお前は」

「（ギャルソン？ …… ギャルソンとは給仕……そして男の子の意味もある）……誰が少年メイドだ!？」

「全然違う。全部違う」

本編の中で、アニエスは好き嫌い無く何でもお代わりをする、と勝手に書きましたが、それがうちのアニエスの最萌ポイントだと勝手に思っています。

自分の作ったものを美味しそうに大量に食べてくれるアニエスに、オリ主も時折「悔しい、でも（ry）」とビクンビクンしてしまいます。

今この後書きを書いている時に、唐突に思い至りましたが、うちのアニエスには微量のファーザー成分（神聖モテモテ王国）が含まれている可能性が大了。街角でアニエスファンに見つかれば、新鮮卵星を当てられる可能性も大了。



展開が原作前だから好き勝手していますが、原作後の成長したア  
ニエスも好き勝手したものとなる予定です。そこまでにどれだけか  
かるんだと呆然としますが。

最近アニエスの出番があまりにも少なすぎるので、何か外伝的なも  
のでも書こうかと思つていますが、その時間があるなら本編を進め  
るべきではないかと迷つています。何かネタを思いつけば、衝動的  
に書いてしまつかも知れませんが。

最後に、こんな妄文にお付き合い下さりありがとうございます。

以前の後書きで「誰か描いてくんねえかな」と思っていました  
が、未だ思っています。奇特な方お待ちしております。  
これからもどうぞよろしくお願い致します。

第二十一話<邂逅5>(前書き)

また遅れまくってすみません。待つて頂いた事、申し訳ないです。

## 第二十一話<邂逅5>

レオニー子爵領、クルコス<sup>1</sup>の街。傭兵ギルド消滅の影響は、未だ治まっていない。新たな傭兵ギルドの利権に絡む抗争は、さながら混戦状態といったところであり、それに一般市民が巻き込まれる事件が後を絶たない。領主であるレオニー子爵も、事態の沈静化を図ってはいるが、大した結果も出ていなかった。

その事態は、寧ろスルトにとっては好都合だった。暗がりよりも尚深い闇に入り込める彼は、その巨体を誰の目にも触れさせる事なく、易々と進むことが出来る。

治安が悪くなっているのはゼルナの街も同様だが、いくらイシユタルの館が有名になってきているとはいえ、クルコスの街の繁栄はそれ以上であり、こちらが主戦場といったところらしい。

ゼルナの街の裏を仕切るのは、ナタンの組織一つだけ。それに対し、クルコスの裏を仕切るのは、三つ。

奴隷市場はその一つだが、これは既にナタンの組織の傘下となっている。次に、ギルドの大部分を仕切る商人の連合体。

そして最後の一つが、占い師の老婆を頂点とする『ユヌ・バーンク・テユ・ヴィット漠忘の岸辺』<sup>2</sup>であり、三つの中でも最も権力を持っている。

その占い師の老婆は、ノーリと呼ばれていた。

「……おお、メンヌヴィルかい？ よお来た、よお来た」

まるで孫でも訪ねてきたかのように、ノーリは顔の皺を一層深くして微笑む。

「久々だな、いじけた者。土産の酒だ。皆で分けてくれ」

部屋が薄暗いのは、ノーリもスルトも、光が無くとも不自由しないからである。

「ありがたいねえ」

テーブルの上に置かれた酒瓶を撫でながら、ノーリはそれを傍らの老人に渡す。老人はニヤリと笑い、それを持って奥の部屋へと引っ込んだ。

「……ああ、そうだ、今はスルトだ。そう呼んでくれ」  
「へえ。あんた、まだあそこに？」

ノーリは少し驚いたように、窪んだ眼を開く。外套を脱ぎ去り、スルトは老婆の向かいの椅子に斜めに腰掛けると、足を組んでテーブルに肘をついた。

「てつきり、もう“焼いた”から、ここに来たんだと思ってたよ」  
「……そうだな。そろそろ、“焼き頃”かもな」

呟くように口にしたスルトは、回想するかのように顎を上げた。ほんの数秒ほどで、彼の顔は再びノーリへと向けられる。

「ノーリ、“悪逆のサンディ”についてだが……」  
「ん？ それは、アンタの方がよく知ってるだろ？」

“悪逆のサンディ”について、スルトは全てを知っている。何しろ、このノーリとスルトを引き合わせたのは、サンディなのだ。

「……いや、何でも無い」

スルトがここに来たのは、確認のためだ。“悪逆のサンディ”の情報が、ゼルナの守備隊長イジドールのデタラメであることを。そしてその目的は、既に達成された。

「まあ、ゆつくりして行きな」

「いや、悪いがそうもいかん。なるべく早めに帰ってやらねばな」

その言葉に、ノーリはより一層驚いたような顔をする。そして、自らが持つ彼自身の情報と照らし合わせ、一体どのような天変地異かと考えた。

「……ついに、見つけたのかい？」

「何をだ？」

「“天使”さ」

まるで石化の呪いをかけられたかのように、スルトの身体がほんの少しだけ固まった。聞き返した口をぼおっと開いていたが、それが閉じられ、唇をへの字に結ぶ。彼はテーブルの下で拳を握り締め

「……予言か？」

「そりゃ、これでも占い師だからねえ。でもこれは、カンニングさ。何しろあたしは、あんたの過去を知ってる。……あんたをその地獄から救い出せるのは、天使だけさ」

「地獄？ ハッ」

スルトは鼻で嗤った。

「地獄だと？ そんなわけ無いだろう。俺は楽しみにしているぞ。あいつに火炎の外套を着せ、その真っ黒な薫香で満たされる至福の時を……」

「違うね……」

老婆は首を振った。

彼等『漠忘の岸边』の恐るべき点は、死など度外視している所だ。だからこそ、スルトに対して物怖じせずに接する事が出来る。スルトの頭髮が逆立った。

「何が違う」

「あんたがやってるのは、砂漠を作ってそれに平穏と名付けるよ  
うなもんさ。そのまま殺されるまで止まらない。いや、寧ろ殺され  
たがってる。……地獄さ」

脅そうが、口を閉じるような老婆では無い。文字通り息の根を止  
めねば、気の済むまで喋り続ける。

「……地獄さ」

再びノーリは呟いた。

「……」

スルトは無言で立ち上がる。そして出口へ向かおうとする彼の背  
に、老婆はぼつりと声を掛けた。

「最後に、メンヌヴィル。いや、今はスルト。占いの結果を聞い  
ていくかい？」

テーブルを、カードが擦る音がする。スルトは振り返らなかったが、無視して出て行くこともしなかった。

「……喜びな。“ユル”のルーンが出たよ」

「死のルーン、か」

「再生のルーンでもあるさ。……とりあえず、退屈はしないだろうね」

老婆の言葉に、スルトは天を仰いで大笑いした。

宙に舞う、色取り取りの花弁。花の嵐。その美しさに、思わずナタンは心を動かされ、惚けた。さながら目の前に、大輪の花が咲いたと言っべきだろうか。

その花は、娼婦達の部屋に飾られるもの。しかし、その希有なる開花を目撃できたのは、たった一人、彼だけだった。

いや、もう一人。その花を咲かせた男がいる。

そしてその花は、咲かせた男によって散らされた。

「！」

花弁を掻き乱すようにして、その男の足は空中を走る。弧を描く爪先を、ナタンは冷静に目視することが出来た。

咄嗟に左腕を上げ、蹴りを防ぐ。男の爪先がナタンの肘下に衝突した時、乾いた音が耳に入ってきた。

「がああっ……」

ツルハシのような蹴りだった。ヒビが入ったのではなく、折れたのだということは、今までの経験上一瞬で理解出来た。

後ろ飛びに距離を取り、ナタンは右手で護身用のナイフを抜く。男は蹴り足を戻すと、頭に被っていた手拭いを取り去った。後頭部で無造作に束ねられた、四足獣の体毛のような白髪が現れる。

「折れたな」

「ああ……折りやがったな、ジジイ」

威嚇するような笑みを作るナタンに、老人は肩を竦めた。

「ひよっとして、痛みには慣れっこか？ ん？」

「……恐ろしいガキがいてな。そいつのせいだろ。いや、そいつのお陰か……」

所詮は子どもの筋力とはいえ、アクセルの硬い拳をまともに受ければ、骨を折られることもある。今ではその痛みにさえ慣れつつあり、ナタンは自分自身に溜息をついた。

腰を落とし、老人に向かってナイフを突き出す。

「まさか、そっちから来るとはな。てっきり逃げたもんだと思ってたぜ」

今夜も来る筈……ギャエルとマノンはそう言っていたが、バルシヤも信用はしていなかった。あのような事態を引き起こしておきな



がら、ノコノコと顔を出せる筈が無い。その事態によって何らかの利益を得ようとしているのだとすれば、それほど遠くにいつとも思えない。恐らくはこの街の、東地区以外のどこかに身を潜めているのだらうと、バルシヤはそう当たりをつけ、自警団の人員を可能な限り動員し、老人の行方を追っていた。

「……よく見破ったな、自信はあったんじゃが」

「見慣れない花屋だったんでな。試しに、肩でも打つつもりで殴りかかったんだが、まさか腕を折られるとは」

「ほ……。何じゃ、嵌められたのはワシの方が」

感心したように目を見開く老人だが、ナタンはそれを素直には受け取れない。バルシヤや自警団の殆どが不在で、自分が老人の変装を見破ったのも偶然だ。周囲に頼れる人間がいけない以上、ナタン一人で対処しなければならぬが、この老人は明らかにナタンより強者だった。しかも、既に左腕を壊されている。武器は小さなナイフだけ。

「……何が狙いだ」

ナタンは、自分がアクセルとは違うことを自覚している。このような状況、アクセルならば何とか仲間を呼ぶか、この場を穩便に納めることを考えるだらうが、ナタンは違う。

仲間を傷つけた者を目の前にして、そこまで冷静にはなれないのだ。事実今も、怒りの火炎によって痛みなど押しつけられており、この老人の喉に食らい付きたいという欲求が暴れ回っている。

老人に向けて突き出されたナイフは、その欲求を抑えるための小道具だった。

「狙い、か……」

しかし、ナタンのその自制を試そうとするかのように、老人はスタスタと歩き出す。眼前の刃など目の入らないかのような、あまりにも自然な足取り。ナタンの噛み合わされた奥歯が、小さく軋んだ。

「ワシも知りたい。……女に阿片なんぞ使いよった理由を」

(……あへん?)

老人の口から出た、耳慣れない言葉。それを聞き返そうと口を開けば、自分は本当に老人に噛みついてしまうのではないかと、ナタンは真剣に考えた。

「まあ、あれだ。ちいつとばかり、虐められとけ」

老人はいつの間にか、突き出したナイフよりも内側に入り込んでいる。

股間へと繰り出された膝蹴りを、ナタンは自分の膝で無理矢理に弾いた。

(このっ……ジジイ)

ナイフを引き戻そうとするが、老人は左腕でナタンの右腕を抱え込む。左腕が折れている以上、ナタンの両腕は封じられた。頭突きを浴びせようとするが、老人は背を丸めて更にナタンの懐に入り込み、彼の右腕を担ぎ上げる。

「!？」

気付けば、景色が回転していた。天井が見えたかと思うと、刹那

に背中から床に叩きつけられる。さながら建物に殴られたような衝撃が体中で暴発し、ナタンは悶絶して咳き込んだ。ナイフは既に、老人の手に渡っている。

(何……だ……今の……)

こんな小柄な老人が、男一人の身体を軽々と振り回し、床に叩きつけた。アクセルもそんな攻撃はしてこなかったし、他の人間にされたこともない。梯子から足を踏み外して転落し、テーブルの上に叩き付けられた、数年前の記憶が蘇る。

(くそっ……)

必死で起き上がろうとするが、まるで背骨をバラバラにされたように自由が利かない。そのナタンの腹の上で、老人はどっかりと腰を下ろし、胡座をかいた。ナイフを軽く煌めかせ、切っ先をナタンの首筋に当てる。

「この娼婦は、他とは違うな」

「……？」

「目が死んどらん。世で最底辺とも言える生業でありながら、己に絶望しとらん。……お前がボスか。ふむ……」

独り言のように話す老人は、ナイフを引くと、それを振り上げて天井に突き立てた。短く震えたナイフが静止するころ、僅かに生えている白髭を撫でながら、老人はナタンの顔を覗き込む。

「……話せんじゃろ？ だったら、首で答える。阿片、っつーもんを知っとるか？」

少し老人を睨んだ後、ナタンは軽く首を振った。

「ふうーむ……」

品定めをするような老人の顔を睨んだまま、身体の状態を確かめる。だんだんと衝撃が薄れ、身体の機能が戻ってきた。動かせる右の指を密かに曲げ伸ばしさせ、完全に回復するのを待つ。

「どうやら、お前じゃない、と……。そんなら……」

ナタンの右手が伸びた。思わず拳を作り、老人の左頬を殴りつけてから、失敗だったことに気付く。こんな寝転んだ状態で、大したパンチが放てるわけがない。何とか届きはしたが、老人の頭は軽くぐらついただけで、その身体はビクリとも動かなかった。

殴るのではなく、掴むべきだったのだ。

伸ばした右手が、老人に掴まれる。ナタンは逆襲を覚悟し、次の一手を考え出そうとした。

「……………」

しかし、老人はそのまま立ち上がると、ナタンを引き起こす。唇の端から垂れた血を指先で払い落とし、そつと両手を上げた。

「降参じゃ」

「……………は？」

警戒するナタンに、老人はニヤリと笑みを浮かべる。

「奇襲を仕掛けたワシを、お前が捕まえた。……………そういうことにして、主立った人間を集めてくれんか」

要請と言うよりは、命令に近かった。

怪訝な瞳で睨み付けるナタンの前で、老人は相変わらず、人懐っこくも見える笑みを揺らしていた。

地下に新しく設置された、牢獄。鉄格子で囲まれたそこは、随分と物騒な雰囲気になってしまったが、守備隊などに引き渡せないよ  
うな、内々に処理するべき相手のためにも、前々から必要とされた  
ものだった。

その初めての主となった老人は、後ろ手に縛られ、座らされて  
いる。

「……………」

ナタンが捕縛したという老人を、アクセルはじつと見つめた。老  
人はふて腐れたように唇を曲げ、そっぽを向いている。

「それで……………」

アクセルはそつと瞳を動かし、隣のナタンを見た。折れた左腕に  
は先ほどヒーリングを使ったが、完全に治癒させるために、新しく  
開発したギプスを着用させている。残った右手で頬をかいていたナ  
タンは、その瞳に思わず後退りかけた。

「何か吐いた？ この爺さん」

「いや、未だ何も……」

「そう」

再び老人へと目を向ける。少年の頭は次に、効率のいい拷問の方法を考えるために回り出した。

「爺さん、名前は？」

アクセルは少し膝を曲げ、老人と同じ高さに視線を合わせる。鉄格子の向こうの老人は、首を回してアクセルを見つめた。そして数秒ほどして、徐に口を開く。

「お前だけに話したいことがあるんじゃないかのお……」

「ん？」

「ちよつと、その兄さんは出て行ってもらえんか？」

老人とアクセルの視線を受けたナタンは、尋ねるようにアクセルに目を向けた。アクセルは首を振る。

「何故僕だけなんだ？ 爺さんとは初対面の筈だけど」

「……ちよつとなあ……」

老人は片眉を上げた。後ろ手に縛られていながら、その態度には余裕が感じられる。既に一通りの拷問方法を思い浮かべていたアクセルは、老人の態度に違和感を覚えた。この状態から逃げられる筈も無いのに、妙に落ち着いているのだ。

「ええんか？ ここで言っつて」

「別にいいよ。言ってみろ」

本当に自分を慌てさせる事が出来るのか、それともただのハッタリか。

後者であることを確信していたからこそ、その動揺は大きく現れた。

「阿片じゃろ？ 使いよったのは……」

横のナタンにも、アクセルの動揺ははつきりと見て取れた。

そしてその動揺を見取った刹那、老人は縛られていた筈の両手を広げる。右手には、杖が握られていた。先端が牢獄の鍵に向けられる。

「『アンロック』！」

更に、座り込んだまま足を伸ばし、鉄格子を蹴り飛ばす。苦もななく開いた扉を、アクセルは後方に跳躍して避けた。啞然としたナタンの視線の先には、老人ではなくアクセルがいる。

「ナタンっ！」

何も、一人で相手をする必要は無い。加勢を促すために短く叫び、アクセルは自らも、牢獄から一步踏み出した老人に向かった。老人はこちらに杖を向け、細かく唇を震わせて詠唱しているが、アクセルはそれを完全に無視する。

「……つちいつ！」

杖を向けられても怯まず突進してくるアクセルに、老人は舌打ち

した。老人も応じるように右足を踏み出し、杖を指揮棒のように軽く振って打ちかかる。魔法よりは威力が弱まるとはいえ、杖自体にも、人を打擲する程度の威力に耐えられる強度はあった。

「『密葉』」

アクセルがそう呟き、彼の手刀が振り上げられる直前、老人は杖を手放して無理矢理に身体を捻った。身体を支えきれず、床を転がって避けた老人は、たんつと快い音を響かせて跳ね起きる。壁に後ろを預け、背を丸めて油断無く構える老人の肌は、冷や汗によつて潤っていた。

頬を縦に割り、白眉の端にまで届いている傷から、じわりと血が滲む。真つ二つに切断された杖が、細かく床を叩いて止まった。

「……………」

下段から天井の方向へ、伸びる竹のように真つ直ぐに振り上げられたアクセルの手刀。その掌は、半透明のエメラルドグリーンの刃で包まれていた。

ナタンですら初めて見るそれは、指……と言つより腕の骨によつて作り出された、マジックブレイド。杖が骨であること以外は、通常の『ブレイド』の魔法と特に違いは無いが、相手にそれとは全くの別物だと思わせる為、アクセルは違つ名前を付けた。

「……………こりゃ、とんでもないガキじゃのお」

軽く指先で血を払う老人は、唇を歪ませて感心したように言う。アクセルは無言のまま、右手のブレイドを下ろした。

「……………ふんっ」



鼻で嗤い、ブレイドを消す。そして少年は腕を組み、老人に背を向けると、ナタンに真正面から向き合った。

「で、どういう事だ？ ナタン」

口調は穏やかだが、ここで軽い冗談など許される筈も無い事を、ナタンはイヤと言う程理解している。そっぽを向かれた老人は、苦笑いしつつ頭をかいた。

老人がメイジでは無い事は、アクセルは一目見た瞬間に気付いていた。『アンロック』も、ただ唱えて見せただけだ。つまり老人は最初から縛られてはおらず、そして牢獄の鍵も初めから開いたままだったことになる。

冷えた頭でアクセルが出した結論は、自分は何らかの茶番に付き合わされた、ということだった。

「まあともかく、だ」

言い淀むナタンに助け船を出すように、老人は両手を上げてひらひらと揺らす。

「どうやらお前も、この一件の犯人じゃねえな」

「……そして爺さん。アンタが犯人じゃないって保証は何処にも無いぞ」

アクセルに釘を刺され、老人は一瞬渋い顔をしたが、またすぐに首を振った。

「ワシの名は、クーヤ。関わっちまったもんは、キリまで面倒見

「やろっ」

クーヤと名乗る老人は、ギャエルが寝ているベッドに身を乗り出すと、彼女の口元で鼻を動かす。そして得心がいったように頷くと、傍らのアクセルに促した。

ナタンがこの老人を信用すると決めた以上、アクセルはそれを信用する。裏切れば即刻殺すつもりだが、今は未だ、クーヤに妙な動きは見られない。

同じくギャエルの口臭を嗅いだアクセルは、クーヤを振り向いた。

「……何だか……甘ったるいな」

「阿片、っつーもんがある。知つとるんじゃねえのか？」

アクセルは頷く。

クーヤはやはり、マノンの口臭を確認しながら、傍らのナタンに目を向けた。

「昨夜、この二人を抱いた時にな、覚えのある臭いがしたんじや。阿片っつーのは、痛み止めの妙薬でもあるが、酒と同じく、それ無しではいられなくする。使い方によっちゃ、一国の民衆を骨抜きにすることも出来る」

「聞いたことねえなあ、そんな薬……」

ナタンは頭に手を回した。入手した全ての情報を把握しているわけではないが、そんな薬の情報が入れれば、まず印象に残る筈だ。

「ワシも、噂程度に聞いただけじゃが。まあ話を聞く限りでは、どっかのメイジがそれに更に手を加えたようじゃ。煙管も見当たらず、香も焚いとらんかったんなら、残るは経口か女陰じゃが……娼婦じゃからな、女陰ならお手上げじゃ。口から入ったんなら、そこまで悲惨な事にはならんが……」

クーヤは唇をひん曲げて、顎を撫でる。

「ワシはメイジでは無いんでな。さつきも言ったように、メイジが手を加えとるんなら、あんまり役に立つ情報はやれねえ。……よつて、罨を張る」

「罨？」

「二人が苦しんだんなら、阿片の禁断症状が出たってことになる。それで終わりってわけでも無いじゃろ。阿片がありや楽になれるが、その阿片を持って来るのが犯人じゃ。……それとなく、噂を流すんじや。二人の娼婦が、原因不明の病で苦しんでるってな」

「……すまねえ」

「え？」

俯いて、ただ一言、そう呟いたナタンを、アクセルは怪訝そうに振り返る。

「……二人に薬を盛ったのが、メイジだって聞いて……それで、お前の地下牢での反応を見て……一瞬、お前を疑った」  
「……………」

アクセルは何も言わず、柵から書類を取り出す。

(何と言つか……別にいいのに……)

細かい、とは言わないが、ナタンは気にしすぎなのだった。確かに仲間同士、信頼することも大切ではあるが、それに徹してさえいれば上手くいく程、現実は甘く無いとアクセルは考えている。今回は別としても、これから組織を広げるにつれて、裏切るような人間も出てくるだろう。そうなった時、ただ信じ続けてそれによって組織が崩壊すれば、非常に困った事になるのだ。

「……人間関係に、絶対なんてもんは無いんだ。間違ってたら、悪かった、その一言でいいんじゃないか？」

アクセル自身、自らを、絶対的な信頼を勝ち取れるような人間でないと評している。そんな人間だったなら、こんなにネガティブでは無かっただろうとも。

「いや。お前だって、あれだけ怒ってたじゃねえか。なのに、そのお前を疑った……」

頑固だと、アクセルはそう思う。自分には理解できないと。そしてだからこそ、ナタンは必要な人間なのだと改めて認識する。

熱血で、曲がった事が嫌い……太陽のような明るさを持つ男。

「ねえ、ナタン」

「え？」

「あの爺さん、信用出来そう？」

アクセルはそう言いながら、ナタンを振り向いた。

自分では無理なのだ。自分などでは。

だからこそ、ナタンを失いたくは無いし、これからも頼れる男でいて欲しい。

「……俺は……信用出来ると思う」

遠慮がちなその言葉は、しかし、確固たる自信を感じさせた。

アクセルには、それで十分だった。

「そう」

安心させるかのように、そつと笑顔を作る。

「来よった、来よった」

いつの間にかやって来ていたクーヤは、部屋に首を突っ込むようにして、アクセルとナタンに呼びかけた。

「救世主ヅラしよって、やって来たぞ。ブリミル教の司祭がな」

半ば予想はしていた人物ではあるが、アクセルは天井を仰いで軽く溜息をつく。

覚悟を決めねばならない。

ナタンも、イシュタルの館も、失うわけにはいかない。

「ナタンは、ここで待っていてくれ。軽々しくボスが顔を出すんじゃない」

表と裏、合わせて何人殺すことになるのだろうか。

アクセルは早速、一人目の死人になるであろう人間の元へ向かった。

第二十二話<危愧>(前書き)

挿絵表示OFF推奨

## 第二十二話<危愧>

「屑なんですよ……娼婦も、娼婦を買う男も……」

イジドールは言う。

「俺の家が没落したのは、全部女絡みなんです。祖父は友人の貴族の妻を寝取りましたし、父は目を付けた女を片っ端から罫に嵌めて、その快楽を満喫しました。まあ、そんな男の血を引くのが俺なわけで、つまり言うまでもなく、この俺も屑でして」

彼は既に、自らの命を捨てていた。到底、この場を生き残ることが出来ない。

「……許せなかつたんです。この屑の俺に抱かれたことがある分際で、この屑の俺の金を受け取ったことがある分際で、リリー又は……。ええ、あつち俺を覚えてませんがね、まだイシュタルの館が出来る前、三度ほど抱きました。……そんな汚らわしい女のクセに、あんなに美しくなるなんて。立て籠もり事件のあの時、俺も現場にいたんですよ。リリー又だと気付くのに、大分かかりました。その時のあいつは、美しかった……天使か妖精のようでした。……けどね、俺を覚えてなかつたんです。目を合わせたのに、会釈しただけで。……許せませんよねえ、屑女の分際で……一人だけ一段上に上がるなんて」

腹を斬られ、先ほどまで呻いていた部下が、いつの間にか動かな



くなっていた。

「女に不自由してた司祭が、いい薬があると持ちかけてきました。薬の効果が切れれば、地獄の苦しみを味わうというものでして。女を縛るものですよ。女の方から来てくれるんなら、面倒ごと減りますしね。……あの司祭はそう考えたようですがね、俺は、それでは意味が無いと思ったんです。だってそんなの、薬目当ての関係じゃないですか？ 司祭は一般には出回っていないって言うてました。それがどこまで信用できるかわかったもんじゃありません。他に薬を持つヤツがいれば、そいつに靡くでしょうから。……薬の呪縛は、三日ほどで切れるそうです。勿論その間、苦しみは続くわけですが。……だったら、その苦しみから救い出してやればいい。女を縛るのではなく、救ってやれば、女の心は完全に自分のものになる。三日三晩付き合っただけでやれば、その恩義から、女は報いようとするでしょう。そして……あの美しいリリーヌの心を奪うことが出来れば……あの美しい女の愛を一身に浴びることが出来れば……俺はもっと、高尚な存在になれるんじゃないか。我が家の屑みたいな血統から逃れられるんじゃないか……そう思ったんです」

イジドルが一步踏み出すと、ぬるい水音が響いた。石造りの床は血を吸収せず、彼方此方に血溜まりを作っている。

切断された消化器官から這い出る、排泄物の臭い。濃厚なべつたりとした血の香り。毒霧のような悪臭の中、イジドルは自分が既に死んで、地獄に降り立っているのではないかとすら考えていた。

「……結局、こうなっただけですが……」

曖昧な笑いに顔を歪ませ、イジドルは自分の周囲に転がる、部下達だったものに両手を広げる。

部下達は全滅したが、自分は未だ死んでいない。辛うじてそう判

断できる理由は、目の前に静かに佇む、一人の少年だった。

「……………何でだっ」

広げていた両手で自分の頭を抱え、イジドールは叫ぶ。

「アクセル様よおつ、何でアンタがつ……………！」

尋ねるべきは、現在代官を務める子爵の息子が、ここにいる理由か。それとも、部下達をこんなにも……………人をこんなにも簡単に殺してしまえる理由か。はたまた、阿片を使う陰謀を知っている理由か。

「……………」

血で塗れたアクセルは、同じく血で染まった包みを放り投げる。小さな壺ほどの大きさのその包みは、イジドールの足下に転がってくるまでには、中身を露わにしていた。苦痛と絶望に歪む、司祭の首だった。

「……………それは、死んだ時の表情だ。そのまま残ってる」

その言葉に、イジドールの疑問の半分は霧散した。

そして残る半分の疑問も、静かに照らし出されていく。

「なあ……………何でだ？ 誰も殺してないし、誰も死んでないんだろ？ なのに、何でだ？ 何で……………こんなにも簡単に……………殺してしまえるんだ？」

「イジドール。僕は、臆病なんだ」

アクセルは歩き出した。

足にかかる血も、靴に絡みつく臍物も、一向に気にしていない。せいぜい、浅瀬を徒歩で渡るかのような歩みだった。

「うまく代官を務め上げることが出来るかどうか、怖かった。だから、イシユタルの館と、それを管理する非合法な組織を作り上げた。市民も犯罪者も、どちらをも管理するために。そうすれば、早々間違いも起きないだろうと」

アクセルの杖が、また、エメラルドグリーンの光に包まれ、それは剣の形に収束した。

「……お前は、イシユタルの館に悪意を向けた。悪意を向けたのなら、やがて杖と剣も向けてくるだろう。……そうなるくらいなら、そうなる前に死んで欲しい。だからだ。司祭を殺し、お前らが潜り込ませた料理人を殺し、守備隊の女狂いどもを殺し……そして残るは、お前一人を殺せば終わりだ」

「……………ふ……………ふざけんじゃねえぞっ、小僧おおっ!!」

イジドールは杖を振る。

彼を守るようにして、剣を持つ二体のゴーレムが姿を現した。そして彼自身は、空いた手でレイピアを握る。

一人と二体によるこの体勢は、強力な一人に対するための、イジドールの必殺の構えだった。

「小僧の分際でっ、この俺を殺せるとでも思ってるのか!」

横に並ぶ、二体のゴーレム。その後ろに隠れるイジドール。そしてそのフォーメーションを保ったまま、アクセルへと突っ込む。

二体のゴーレムが、揃って剣を振り上げた。アクセルはマジックブレイドを頭上で横たえ、それを防ぐ。

イジドールの攻撃は、その時だった。杖が防御に用いられた、狙い通りの状況。ゴーレムの間から、腕とレイピアを槍のように見立て、一直線にアクセルの喉を突く。

「『ミシバ密葉』」

が、必殺の突きは難なく弾かれる。

(……え?)

弾かれたと言うよりは、逸らされた。

アクセルの左手が、マジックブレイドの光に包まれている。杖は、ゴーレムの剣を受け止めたままだ。少年の左手の刃がレイピアを擦り、滑り、イジドールへと近づいてくる。全身全力の突きであるが故に、ブレーキを掛けられないまま、寧ろイジドール自身もその刃へと向かっていった。

「が……」

肩から腰へと、斜めに切り裂かれる。吹き出した血が、ポトポトと床の血溜まりに合流した。

力を失ったゴーレムを左右に蹴り倒し、アクセルは膝をつくイジドールの前に立つ。イジドールは首を傾げるように顔を上げ、上目でアクセルを見た。

「……むかつくなあ……余裕……こきやがって……」

敢えて、イジドールの得意技を潰しての決着。アクセル自身にそのつもりは無かったが、イジドールは頬を痙攣させて吐き捨てた。

どうしてマジックブレイドが二本もあるのか……その疑問は、も

はや何の意味も持たない。

「しかも……敢えてマジックブレイドかよ……格好つけやがって……」

イジドールの手が伸び、アクセルの上着を掴もうとする。既に杖もレイピアも持っておらず、生卵を砕く力すら残っていない。

しかし、アクセルは無言でマジックブレイドを振り、その手を切り飛ばした。

「っ……！」

短くなった腕を抱え込むようにして、イジドールは血溜まりの中に転がる。

「……よ……容赦ねえ……な……」

「言っただろう、臆病者って」

「……へ……ナイフでも……隠してると……思った……か……？」

イジドールは血溜まりに浸る顔を、ぶるぶると持ち上げた。己と部下のそれが混じった血で、真っ赤に塗れている。

その唇が、嗤った。

「……ざまあ……見る……臆病者め。死んでやる、ざまあ見る……」

正式に任じられた、守備隊長の死。それは確かに、大きな問題となる。

その後始末がどれ程厄介かも、アクセルは理解していた。

確かに、ざまあ見ろ、なのだ。

「……………一つ、教えて……………やる」

堪えきれなくなったように、イジドルは笑い声を上げた。しかしそれも、顔を持ち上げる力も無くなったのか、すぐにガラガラと泡音に変わる。血溜まりでうがいしながら、イジドルは血で穢れた喉で、呪いのような最後の一太刀をアクセルに浴びせようとしていた。

「女に関しては……………俺たちの独断だが……………娼館を潰すのは……………命令だった……………からだ……………」

それは、身体を擦り抜けて心に届く、言葉による暗い一太刀。

「その……………命令は……………命令を……………出したのは……………お前の……………親父の……………ラヴィス……………子しゃ……………」

遂に、イジドルは息絶えた。

足が重い。亡者が膠にでも化けてへばり付いたかのように。

心が重い。地獄の底から伸びる暗い手が、命を求めてしがみついているかのように。

肩が重い。ただ一人生きたままその場を去ることを、死者達が許さないらしい。

「……ん？」

敗残兵か何かのように歩くアクセルの前に、見覚えのある人間が現れた。深夜、顔はよく見えないが、あのシルエットの大きさは覚えがある。

「……スルト。お帰り」

それは確かに微笑みではあったが、あまりにも弱すぎた。儂すぎた。それを感じ取ったスルトですら、思わず両手を伸ばして支えそうになってしまった程に。

「ん？」

アクセルはふと、スルトの陰に立つ人物に気付いた。

「爺さん……何で？」

クーヤは年長者らしい笑顔のまま、ドアをノックするかのよう、スルトの胸板を叩く。

「クルコスの知り合いでな。しかし、驚いたわい。まさかコイツと仲良く出来るヤツがいるとは……」

「へえ、そうなんだ。だったら、少しは信じてやってもいいかな、爺さんのこと」

「おい、まだ疑ったんか？」

「完全に信用するほど、勇気も度胸も無いんでね」

そう言って笑い……アクセルはその場に崩れ落ちた。今度こそスルトが腕を伸ばし、その小さな身体を支える。

「ごめ……後は……お願い」

吐息のような声でそう呟き、アクセルは目を閉じた。

「……………」

「眠つとる。随分と信用されとるなあ、メンヌヴィルよ」

先ほどアクセルが出てきた建物を覗き込むクーヤは、中の様子をちらりと一瞥し、顔を顰めた。

「同じ穴の貉ってヤツかのう？」

「うるさいぞ、ジジイ。さっさと足跡を消せ」

「ほいほい」

アクセルの感触に、スルトは違和感を覚える。これだけ血にまみれていれば、当然血の足跡も残るだろう。この少年がその事に思い至らないとは考え難く、出せた結論は、それ程に消耗しているという事だった。

しかし、たかが土のドットメイジを相手に、ここまで消耗するものなのか。

「おい、終わったぞ」

足跡を消し終えたクーヤが、急かすようにスルトに言う。スルトは建物の中にフレームボールを投げ込むと、アクセルを背負い、クーヤと共に執政庁の塀を越えた。



「……なあ、メンヌヴィルよ」

二人並び、闇を走る。スルトは返事をしなかったが、クーヤは構わず言葉を続けた。

「やっぱ、そいつも燃やすことになるんか？」

スルトはふと、背中のアクセルに意識を向ける。完全に眠っているようだが、例え起きていたとしても、構わないのではないか……そんな考えが浮かんだ。

「さて、な。……そうなった時、止めるのか、ジジイ？」

「止めんよ。止められるモンでも無し。ワシはワシの事だけ考えたいんでな」

既に遠くなっていた執政庁の方角から、轟音が届く。予定通り、アクセルが運び込んでいた火薬に引火したことを確認し、二人は騒がしくなる場所とは反対の方向へ走っていった。

睡眠状態にあることに気付き、そつと片目を開けてみる。アクセルは記憶を辿り、意識を失う前の事を思い出そうと試みるが、その前に状況を把握してみた。

「……………」

身体に不快感は無い。上体を起こし、身体を見回してみるが、既に血塗れの衣服は取り去られ、寝間着に着替えさせられていた。どうやら、自室のベッドらしい。ちょうど明け方で、開け放たれた窓から、美しい朝焼けが見えた。

(……………そうか。あの後、スルトがいて、それで寝落ちして……………)

執行庁の守備隊宿舍で爆発が起き、守備隊長と隊員たちが死亡するという、緊急事態。有耶無耶にする為の爆破だったが、どうやらリリースは予想通り、代官を起こさないという選択をした。確かにリリースがちゃんと働いている限り、アクセルの必要性など疑わしいのだが、それでも朝一番に連絡は来るだろう。今のうちに、ローラのホテルに移動しておくのが望ましい。

そしてもう一つ、爆破という行動を起こした理由がある。アクセルにとっては、既にそちらの目的が重要だった。

「あ……………おはよう、ベル君」

部屋に入ってきたリリース又は、既に着替えを始めたアクセルを見ると、優しく微笑みを見せてくれる。女の笑顔一つで心を躍らせる自分に呆れもするが、前世を考え合わせると、生意気な感想だと笑い出したくなる。

「これから、ホテルに行くの？」

「うん。そのつもりだけど……………」

そう言いつつ、アクセルはリリースが持つ木製の盆に視線を落と

す。パンとサラダ、スープ、それにティーセットが乗っていた。作りたてらしく、仄かに湯気が立ち上っている。

「……ひよっとして、僕に？」

「あ、食べる時間が無いなら、別に……」

「いや、頂きます」

軽く、腹に何か入れておきたい気分だった。それもあるが、折角自分のために作ってくれたものを、無駄にしたいくないという気持ちの方が大きいかも知れない。

リリーヌが小さなテーブルの上に盆を置き、アクセルは飾り気のない椅子に腰掛けた。驚いた事に、パンも焼き立てだった。

「その……無理しなくていいから……」

「え？」

立ったまま、胸の前で手を組み合わせ、焦ったように言う彼女にその言葉の意図が分からないアクセルは首を傾げた。まだ熱いパンを千切り、右手のそれを口の中に放り込む。

「……肉料理は、やめておいたんだけど……でも、もし無理なら……」

咀嚼し、胃の中に納める。そして再びパンを引き裂こうとしたところで、ようやくアクセルは理解した。

「リリーヌ。もしかして、リリーヌが着替えさせてくれたの？」

「……うん」

深夜であった故に、娘達ではないことは確かだった。リリーヌの

言葉が気遣いであったことに思い至り、あの血だらけの衣服を取り替えてくれたのが、彼女であることにも気付いた。

「そっか……ありがとう」

人を殺し、その返り血を浴び、そのことが食欲に影響する事は、あの“童貞”を捨てた時から一度たりとも無かった。確かに山賊討伐の時、嘔吐はしたが、村へ戻る頃には既に胃は食物を要求していたのだ。ナタンと共に暴れ回っていた頃も、当然相手を死に至らしめることもあったが……血溜まりの中で空腹を覚え、彼等のアジトにあったハムにかぶりついた時には、ナタンも明らかに顔を引きつけていた。

（そうだな……考えてみれば、異常って言うか……サイコ？）

出会った頃はナタンを値踏みもしたが、今考えてみれば、彼の方こそよく自分の元から逃げ出さなかったものだ。

昨夜の殺し合いがアクセルの初体験でないことは、リリー又は前から知っていただろう。朝食を見れば、確かに、肉や血を連想させるような色は見当たらない。これは、彼女の優しさが詰まった食事なのだ。

「うん、美味しい」

一応は貴族であるので、ガツガツと少年らしく、というのは無理が出てしまう。それでも、精一杯の感謝を示そうと、笑顔のままアクセルは胃に収めていく。

その様子に安心したのか、アクセルが盆の上を全て平らげる頃には、リリー又は紅茶を注いでくれていた。

「……でも、リリー又こそ疲れてるんじゃないの？ 昨夜もお客さんいたんでしょ？」

「私は大丈夫。夜更かしには慣れてるから」

「そう」

アクセルは紅茶のカップを口元に持ち上げたまま、そっと、窓の外に視線を移した。

外の様子が気になったわけではなく、単純に、テーブルの向かいに座るリリー又の視線に耐えられなくなったからだ。両肘をテーブルの上に立て、両手で自らの顔を支え、微笑みのままアクセルを眺める彼女の視線に、何となく気恥ずかしさを覚え、あまり長い間見つめ返すことは出来なかった。

目を見て話せない者は卑怯者だ……その格言は、前世で見た映画か何かだったか、それともこちらの世界の書物からか。どちらにしろ、間違った格言ではないと、アクセルは静かに自嘲した。

「あ……ごめんなさい、お行儀悪かったね」

ふと気付いたように、リリー又は背筋を伸ばし、手を太腿の上に置いた。

「別にいいよ。一番人気のレディ・イキシアに朝食のお世話をし  
て貰えるなんて、男としては無上の喜びだね」

アクセルは空になったカップを、盆の上に戻す。お代わりを勧めるリリー又に、首を振って断り、椅子から立ち上がった。

「ごちそうさま。ありがとう、嬉しかったよ。片づけは誰かに任

せて、リリーヌも早く休んでね」

「…………あの、ベル君」

そろそろ時間だと、部屋から出ようとしたアクセルを、リリーヌは呼び止める。振り向くと、こちらに向かって遠慮がちに伸ばされた、白い手があった。

「どうかしたの？」

その手の向こうの、心配そうな顔に尋ねる。

「…………未だ…………終わらないの？」

「うん…………」

アクセルはただ一言、そう返した。

ギヤエルとマノンの異変に始まる一連の事件は、未だ終わっていない。未だラスボスとも呼べる存在が、一人残っている。

それは、この子爵領の本当の支配者。

「ごめんね、リリーヌ。あの約束は、まだ先になりそうなんだ」

「それはいいの、私のわがままだし。…………でも、その…………ベル君」

「ん？」

「疲れてない？」

アクセルは右腕を回す。続いて左腕を回す。

「…………いや、そんなことないけど？」

昨晚は別としても、ちゃんと睡眠は取っている。食欲もある。元

気はつらつとはいかないが、身体もいつも通りだ。

精神的には確かに悩みばかりで、頭痛すら覚えるが、こんな深刻そうな表情で心配される程でもない。

「……………そう」

「ん、まあ、心配してくれた事はありがとう。そうだね、寝られる時はしっかり寝るようにするよ」

「気を付けてね？ もしもの時は、逃げていいんだから」

「ああ、それは得意だな」

ひらひらと手を振り、努めて軽々しく言いながら、アクセルはホテルに戻った。

(……………参ったな)

結局昼近くになっても、執政庁からは何の連絡も無かった。流石にいくら何でも、これ以上知らんふりを決め込んで動かなければ、かえって不自然であると思い、自分の足で戻る。そして戻ってみれば、机で文字通り頭を抱えるリーズがいた。

「……………！ あ、若様……………」

ひょっとして、普段のあまりの存在感の無さに、ただ存在そのも

のを忘れられていただけかとも考えたが、どうやら違つらしい。

「お聞きになりましたか」

「うん。誰か怪我人が？」

「……守備隊の隊長、イジドルを含め、守備隊の半数近くが死亡しました」

そう言ってから、あまりにも単刀直入過ぎると思ひ直したのか、リーズは首を振りながら続けた。

「全ては、若様の留守をお預かりする私の責任です。罰を受ける覚悟は出来ています」

要するに、アクセルには何の罪も無い、ということをお願いしたいらしかつた。

(責任どころか、俺が実行犯なんだけど……参った)

相変わらず真面目すぎるのだ、とも思った。二人でどうするか一緒に考えよう、という展開に持つていくのが理想だったのだが、彼女のあまりにも健気な覚悟に、アクセルはより一層の罪悪感を覚える。

「ねえ、リーズ。何で爆発したの？」

「原因は不明です。火の不始末だと言う者もおりますが、この季節に暖炉に火を入れる筈ありませんし、それに何より、火薬を宿舎に保管する筈ありません」

「じゃあ、誰か犯人がいるの？」

「その可能性が高いようです」

「だったら、そいつの責任じゃないの？」



守備隊の隊長以下、多数の兵士を失った以上、そう簡単に動けないことは、アクセルも理解していた。執政庁の中の施設に侵入し、鍛え上げられた守備兵たちに気付かれずに爆破などでかせる相手……弱体化した守備隊でどうにかなる筈も無い。  
動機も、目的も予想は出来ないだろう。金も何も盗まず、ただ守備兵を殺しただけ。まるで子どもの気紛れな悪戯のようだ。

「ねえ、犯人に心当たりは無いの？」

重ねて、アクセルは問い掛ける。ここで“悪逆のサンディ”だと言い出すのも驚きを誘うが、もしも……。

「……“イシュタルの館”かも知れません」

え……、と、アクセルは絶句する演技をした。

公的にはイシュタルの館……そして東地区の改善を成し遂げたのは、商人バルビエということになっている。確かにバルビエの遺した財産が活用されたので、あながち的外れというわけでも無い。実行したのはバルビエの腹心、ナタン。様々な援助をしたのが、ゼルナの街一番の名士、ローラン。それが、リーズだけではなく執政庁全体の見解だろう。

「でも、あそこ、ローランも賛成してたんだろ？」

「アクセル様」

“若様”ではなく、“アクセル様”。リーズがその呼び方になる時だけは、アクセルもふざける事は出来ない。

「しばらく、ホテル“初月の館”への出入りはお控え下さい」

「まさか、ローランを疑ってるの？」

「ローラン殿が無実でも、ローラン殿が利用されていないとは言いきれません。今回の一件の犯人、私は、“イシュタルの館”が行った“警告”ではないかと考えています」

アクセルにとっては、さながら心臓を射抜かれたかのような衝撃だった。思わず変化した彼の表情は、幸いにも、単なる驚きと受け取られた。

解答に至るまでの道筋は間違っけていても、リーズは正解を出してしまっただのだ。ついさっきまでのアクセルの余裕は、嘘のように崩壊した。

「……警告……？」

震えそうになる唇を何とか止め、聞き返す。リーズは真剣な表情のまま頷いた。

「実は、旦那様より密命がございます。“イシュタルの館を潰せ”と」

「……何で……？」

「娼婦を公に認めることは出来ない。領地の風俗を乱す輩の跋扈は許さない」と。また、“必ずや成し遂げるように”とも……。私と守備隊長イジドル殿、そしてブランツォーリ司祭様にもご協力をお願いしました。現在ブランツォーリ様がご無事か確認中です。……考えたくはありませんが、この執政庁の内部に裏切り者がいて、それによって旦那様からの密命を知った奴らが、警告のためにイジドル殿を殺害したのではないかと。……私の判断ミスです。まさか、相手があそこまでの力を持っていたなど」

そこで、リーズはアクセルの震えに気付いた。自分が口に出してしまったことと、それを聞いていたのが九歳の子どもであることを思い出し、彼女は慚愧に顔を歪める。

「大丈夫です」

リーズの優しい手が、アクセルの頬を包む。そして彼女は、そつと互いの額を触れ合わせると、目を閉じて口元に笑みを浮かべた。

「ご安心下さい、若様。何があるうと、私がお守り致します」

アクセルの脳裏に蘇るのは、幼い頃、激しい雷雨の夜、同じようにしてベッドの中で包み込んでくれた、リーズの掌の温もり。

「……………何も恐れることなど無いのです。正義は、私達なのです。この私が……………ラヴィス家に、栄光と勝利を捧げます」

そう、あの頃もそうだった。あの激しい雷雨の夜、闇の中、ベッドの内側で、リーズもこうやって、身体を震わせていた。自らの震えを隠すために、ひたすら抱き締めていた。本当に震えていたのは、彼女の方だった。

続いて、アニエスの顔が浮かんだ。精一杯背伸びをして、アクセルを励ます彼女の表情。回想の中のリーズの姿が歪み、雷鳴に怯えるアニエスへと変わる。

マチルダが時折見せる、寂しげな表情が浮かんだ。その顔はいつも、アクセルの心を鎖のように歪に締め付ける。声を取り戻してからも、いや、取り戻してからより一層、そのような顔をするようになり、それが少年の心に影を落とす。

何の疑いも持たない、信頼しきってくれているミシエルの無邪気な顔が浮かんだ。まるで光に照らされた溝ネズミのように、アクセルは、その顔に怯んでしまうことがある。

勇気と活力をくれる、ティファニアの無垢な笑顔。時折、あの小さな身体に触れる事が、畏怖という感情によって出来なくなってしまう。それは果たして、自分に許される行為なのかと。

自分を見捨てなかった、男前なナタンの様々な表情。決して激さず、誰が相手だろうと穏やかに諭すローランの器量。九歳児の自分に敬意を払ってくれる、バルシャの仁義。朝はいつも眠そうに起き出してくる、フラヴィのだらしない顔。本当の弟のように可愛がってくれる、リリーヌの優しさ。前世では想像も出来なかった、スルトの頼もしさ。

恐怖、焦燥、後悔、慚愧、絶望……あらゆる負の感情が、身体に激流を巻き起こす。アクセルはリーズを突き飛ばし、近くの窓から身を乗り出すと、地面に向けて、朝食を全て吐き出した。

第二十二話<危愧>(後書き)

ここから先、特に意味はありません

第二十二話のまとめ  
タイトル変更フラグ

>i25469 | 2695<

リーズ「問題無さそうで何よりです」

Q何がオリ主をそつとせるのか

A作者

第二十三話く挨拶く(前書き)

相変わらずの遅筆で申し訳ありません。

## 第二十三話く挨拶

女の叫び声は、いつ聞いても心地よいものではない。錯乱して暴れ回る姿など、目を背けたくなる。

「っしやあつ、来いやあつ！」

挑発するように掌を曲げるクーヤの、はだけられた上半身は、引つ掻き傷とアザで古い木像か何かのようになっていた。老人とは思えない身体を包んでいたシャツは、既にボロ雑巾のようになって、檻の隅にへたっている。

ギャエルは金切り声を上げながら、クーヤの頬を殴り飛ばした。一瞬ぐらついた老人の身体は、すぐに体勢を立て直し、仕返しのようにギャエルの頬を叩く。ダメージではなく、衝撃を与えるような平手。崩れ落ちるようにしやがみ込んだギャエルだったが、数秒ほどして再び立ち上がり、またクーヤに襲いかかる。檻にもたれ掛かるマノンは、力尽きたかのように目を閉じていた。

壮絶……いや、凄惨としか言いようが無かった。

一人の老人と、二人の女による乱戦。いや、獣同士の殺し合いと言えるかも知れない。

ナタンは檻の外で目を怒らせ、固く拳を握り締めていた。

クーヤは二人の女の半狂乱な攻撃を、或いは受け止め、或いは受け流し、ずっと相手をしている。



「……代わるか、爺さん？」  
「へっ、ワシの女じゃ。横取りすんな」

ナタンを振り向き、歯をむき出しにしてクーヤは笑う。胸にギャエルの拳を受け、その顔がぐらついた。

「……別に、キツかねえ。本当に苦しんどるのは、この二人じゃ」

また、ギャエルが拳を振り上げる。その手を掴み取り、クーヤは彼女の身体を回転させた。背中から叩き付けられ、悶絶する彼女を前に、老人は大きく息を吐き出す。

「何人も女を抱いてきたが、ワシはその半分も幸せには出来とらん。別に、罪滅ぼしでもないがなあ……目の前の女にや、命くらい賭けるわい」

例え痛みで誤魔化しても、苦しみは消えない。それでも、これしか方法は無い。

三人が牢獄の住人となってから、既に二日が経っていた。

リーズ・エルネスティヌ・フランセット・ド・ブロー。ブロー伯爵家の長女として生まれた少女は、今はただのリーズとして、ラ

ヴィス子爵家のメイドとなっていた。既にブロー伯爵家は無く、その血を引く人間も、彼女ただ一人。

自分にメイドが出来るなどとは、勿論リーズも思っただけはなかった。いや、それどころか、平民の仕事など出来る筈は無いと思っただけだった。

貴族として生まれ、貴族として生きていた少女は、突如として貴族であることを剥奪された時、生きることすら億劫になった。しかし、ブロー伯爵家の血を守るべきではないかという考えもあり、結局は自ら命を絶つ決断も出来ず、流されるまま、父の友人であったラヴィス子爵家に身を寄せることになる。

自分が孤立しているということを、リーズ自身はつきりと自覚していた。メイドの仕事を身につける気は無く、食客のような位置に自分を置いていた。貴族としての地位を失ったとしても、自分は平民ではなく、メイジなのだ。

メイジである自分にしか出来ない事こそ、自分がやるべきだとリーズは考えていた。掃除や炊事、洗濯など、どれも平民でも出来る事ばかりであり、メイジとしての能力を持つ自分が、わざわざそれらを身につける必要は無い。いつかメイジとしての働きを行う為、今はただ、魔法の訓練を積むべきだと。

使用人達は誰一人として、面と向かってリーズに文句を言うことは無かったが、それはメイジの魔法を恐れたからに他ならず、自分がいない所でどんな風に語られているか、リーズには聞くまでもなくわかっていた。

その孤独は、アクセルによって終わった。

リーズは初めのうち、アクセルの行動を苦々しく思っていた。勉強に秀で、どこか大人びた風ではあったが、苦々しく思ったのは、

平民に対する接し方である。執事であろうとメイドであろうと、何の障壁も無く彼の態度は、リースにとつてあまりにも軽率なものに見えた。恐怖を以つて、とまでは言わないが、ある程度の貴族としての自覚は必要不可欠なものであり、威厳を以つて接するべきだとアクセルはまた、リースに対しても自然体で接してきた。平民に対するそれと、全く同じように。自分が平民ではなくメイジであること、それを否定されているような気分にもなり、リースもそれを不快に思っていた。

しかし、いつしか自分が孤独では無くなった事に気付いた。確かに、平民と変わらない接し方をされるのは不快だが、気軽に話しかけられる存在が出来た。自分を拒否しない存在が出来た。

(……失うわけにはいかない)

リースにとつて、アクセルは最優先の存在となった。何よりも優先して守るべき者であり、失うことは許されない者であると。

しかし、彼女は未だ、その思いの根元にある打算に気付いていない。いや、無意識のうちに、必死で目を背けている。

このままアクセルが優秀なメイジとして育てば、その師であるリースは名声を得ることが出来る。例えそうならなくても、もしアクセルと結ばれることになれば、ブロー家の血を継続させることが出来る。

その打算に気付くには、あまりにもリースは幼く、潔癖だった。今は未だ、彼女は己の使命感に眩んでいた。

「……若様は？」

リースは近くのメイドに尋ねる。メイドは悲しそうな顔で、静か

に首を横に振った。その手に乗せられた盆は、持って行った時と変化は無い。

(無理も無い)

アクセルの衰弱に、リーズはそう感じた。今まで執政庁にはほとんどおらず、外で自由に遊んでいた少年が、突然軟禁されるような事態に陥ったのだ。食物にもほとんど手を付けず、ずっとベッドの上で過ごしている姿は、最早病人と変わり無かった。

ラヴィス子爵が帰ってくるまで、あと一週間といったところだろうか。子爵本人の手紙には、そう書いてあった。特にリーズが責められることは無かったが、例の密命については、子爵が戻るまで停止ということだった。

「……………若様」

リーズはアクセルの寝室の前に立つと、躊躇いながらも、ドアを叩く。中から、弱々しい返事が聞こえてきた。

「失礼します」

中に入ったリーズは、アクセルの様子に胸を痛める。ベッドの上で枕に支えられ、ようやくと上体を起こしている彼の目の下には、インクで描いたかのようなクマが出来ていた。リーズも安眠を得ているとは言い難いが、アクセルはそれよりも酷い。

「……………お父上は、一週間ほどでお戻りになるそうです」

「本当に、帰ってくるかなあ？」

「……………」

アクセルのその言葉は、彼にしてみれば他愛もない疑問だったのだが、リーズは違う受け取り方をした。

以前、アクセルがレオニー子爵領で火災に巻き込まれ、怪我を負った時も、ラヴィス子爵は戻らなかった。リーズはアクセルから問題ないという旨の手紙を受け取り、迎えに行くことは無かったが、少年の背に残った火傷を見た時、密かに心を痛めた。

息子が怪我を負った時も帰らなかった子爵が、領地の危機には帰る……。それは領主として正しい行いであり、父親として間違った事なのではないか。リーズにその判断は出来ないが、それが当の息子を悲しませる事実であることは、臆気ながら理解できた。

そして理解はしても、アクセルにかける優しい言葉は見つからなかった。

「一週間……それまでの辛抱です、若様。お父上がお戻りになれば、またいつもの日常が戻ります」

「うん、ありがとう」

リーズの気遣いと居たたまれなさを察し、アクセルは力のない笑みを浮かべる。それに安心したわけではないが、これ以上かける言葉も無く、リーズはそっと部屋を出た。

彼女が去った後、アクセルは溜息をつくとき、光を遮断しようとするかのように、自分の両目を掌で覆った。

今までは、はっきりしていた。

片方が好きなものであり、もう片方が嫌いなものだった。だからこそ、躊躇無く嫌いな方を殺すことが出来た。例えば困難であろうと、進むべき道は、選ぶべき未来ははっきりと見えていたのだ。

(それもこれまで……か?)

ラヴィス子爵家を取るか、イシユタルの館を取るか。本当に、そのどちらかを選ばなければならぬのだろうか。

選べる筈も無いのに。

(……まずは、原因を考えてみるか。リーズによれば、あの密命が出されたのは、要するに娼館を存在させておきたくないから、ということになるな)

この苦悩の原因は、ラヴィス子爵の密命である。ならば何故、その密命は下されたのか。

娼館が公に存在していることに対する、不快感……成る程確かに、リーズが好みそうな理由だが、アクセルはそれを信じてはいなかった。

東地区の発展は、表向きには、イシユタルの館を管理する組織の功績ということになっている。浮浪者や難民に真つ当な生活の場を与えることで、市民として扱われる人間は増え、街の人口は増加し、税収も上がった。散在していた娼婦をまとめ、闇夜の娼婦とその客を狙った強盗もいなくなった。ゼルナの街を訪れる人間も増え、東地区だけではなく、街全体に多くの金を落とすようになった。更に言えば、バルシャとリリースによる立て籠もり事件の解決を初めとした治安維持活動により、イシユタルの館は市民の間でも受け入れられている。

否定的な意見を取れば、利権を狙うゴロツキの襲撃だが、最近では組織の戦闘能力が知れ渡り、すっかり形を潜めていた。

(……やはり、益の方が遙かに大きい気がするが……)

治安の悪化も、驚くほど士気の高い自警団により、懸念していた程では無い。

賭場からは執政庁側に相当の裏金を流してあり、それによって文官たちも黙らせている。

(単純に、組織の戦闘能力を恐れた……?)

メイジとして強大な力を持つスルト、弓の名手のバルシャ、双剣の扱いがなかなかサマになってきたナタン。主要な戦力を挙げれば彼等三人だが、考えてみれば全員メイジ殺しだ。本当にメイジを殺したとは知られていなくても、それに値する力を持つと見られていっておかしくは無い。そんなものが、息子が代官を務める街に存在することを危険視しているのか。

(……それも無い気がするが)

ラヴィス子爵は放任主義ではないかと、アクセルはそう思っている。以前、レオニー子爵領で火災に巻き込まれた時も、軽い手紙のやり取りだけで済ませていた。

そもそも考えてみれば、アクセルを代官に任命してから、未だ一度も帰ってはいない。帰るまでに馬車で一週間かかると言うが、それだけあれば、トリステイン王国を横断することすら出来る筈だ。

(何というか……領地経営に全く興味を持っていないというか)

九歳の息子に代官を任せることから、それは明らかだった。そして事実、アクセルが何もしなくても全ては順調だった。

(だめだ、わからん)

さながら大岩に突き当たったかの如く、アクセルはそこで思考を停止せざるを得なかった。全ては憶測であり、的外れであつてもおかしくは無い。本当に、ただ、ラヴィス子爵が存外潔癖で、娼館という物体そのものを嫌悪している可能性もあるのだ。

そして、もう一つ問題がある。

阿片を用いた、ブランツォーリ司祭についてだ。

(やっぱ、俺、考え無しな所があるんだよなあ……)

一応ブランツォーリ司祭は、イシユタルの館を出て、わざわざ教会に戻った後に拉致したのだが、司祭が行方不明は大きな事件である。てつきり司祭については、イジドールの私的な繋がりだけだと思つたのだが、リーズが相談だけではなく、具体的な協力を請うていたのは予想外だった。結果的にブランツォーリ司祭殺害容疑まで組織にかけてしまう事になったのだ。そしてそれは冤罪ではなく、事実である。

(個人的にむかついたから殺した、つてのが大きいからなあ。他にいい方法も思いつかなかつたんだけど、面倒だつたって理由が主だし)

流石に守備隊が壊滅状態にある今、リーズも具体的な行動は起こさず、大人しくラヴィス子爵の帰りを待つだろう。

(言い換えれば、猶予は一週間つてとこか)

前世では七日だが、この世界の一週間は八日であり、一日多い。



そしてそんな、既に分かり切っていることで自分を慰めるしかなかった。

(……選べっつか?)

ラヴィス子爵家と、イシュタルの館。一番平和的に思えるのは、イシュタルの館を潰し、皆をどこかに逃がすことだが、それも下策だ。既に守備隊長や司祭の殺害容疑がかかっている以上、逃げても追いかけられる可能性が高い。

そして、あの四人の娘達を匿ってくれるような、信頼できる場所が見当たらない。ミシエルは素性が明らかになってもそこまで問題は無いが、残る三人は厄介だ。ダングルテールの虐殺から十年を経れており、魔法実験小隊も既に存在していない以上、生き証人であるアニエスに限っては、そこまで苛烈な追求が及ぶ可能性は低い。が、マチルダとティファニアはそうもいかない。アルビオン側に露見すれば二人とも消されるだろうし、特にティファニアは全てに対して警戒が必要だ。

(クルコスの街は……駄目だな。奴隷市場がイシュタルの館と繋がっていることは、少し調べれば分かる。くそっ)

イシュタルの館を潰したくないのも、また素直な気持ちだった。そして、今までに集まった仲間を、誰一人として失いたくないのも。

(……大罪を犯すか……)

ラヴィス子爵の暗殺……この世界での、実の父親の殺害すら、易々と視野に入れてしまえることに対して、アクセルは既に失望という概念を通り過ぎていた。

ラヴィス子爵が不幸な事故で亡くなれば、その後はどうなるか。

(……それも危険すぎる)

ラヴィス子爵は風のラインメイジであり、今のアクセルでも方法によっては十分に暗殺が可能である。そう、それ自体は可能なのだが、守備隊壊滅直後の死は、あまりにも臭い。下手をすれば、王都から苛烈な査察の手が伸びるだろう。そうなった場合、自分がラヴィス子爵家を受け継げる可能性も低くなり、新しい領主によってイシユタルの館が蹂躪される未来も有り得る。

(まさか……手詰まりか……?)

正体不明の、悪逆のサンデイの仕業にしてしまう手もあるが、それはあまりにも強引すぎる。そしてその名前を出せば、それこそ魔法実験小隊のような、裏の力が伸びてくる危険もある。

アクセルは顔から手を離すと、その手を左右に広げ、ベッドの上に叩き付けた。

「……畜生めが」

どうにもならないと分かっているながら、吐き捨てる。

メンヌヴィルに襲われた時とは違う、それよりももっと重厚で鈍勢な危機。一週間というはっきりとしたタイムリミットは、じわじわと這い寄る毒沼のように、奮い立とうが絶望しようが変わることなく近づいてくる。

ノックの音が響いた。

「……? どうぞ」

食事の時間は、たった今過ぎたばかりだ。かける言葉を見つけた  
リーズが戻ってきたとしても、それはあまりに気まずい。

ドアを開けたリーズは、静かに、アクセルの枕元まで歩み寄って  
きた。

「どうかしたの、リーズ？」

「レオニー子爵様がいらっしやいました」

「え？ レオニー子爵が？」

予想もしなかった訪問者に、アクセルは鸚鵡返しに聞き返す。

「若様にお会いになりたいそうですが、如何致しましょう？」

「……。うん、会いたい。あの人が良かったら、ここまでご案内  
してくれる？」

「畏まりました」

守備隊壊滅の報は、レオニー子爵も得ているだろうが、それで何  
故自分に会いに来るのか、アクセルには見当が付かなかった。いく  
ら代官とはいえ、アクセルがお飾りであることくらい、彼も十分に  
理解している筈である。実質的な代官であるリーズとの会話のつい  
でに、アクセルの見舞いに来るといふのならわかるが、どうも初め  
から、アクセルと会うことを目的とした来訪のように思えた。

「やあ、久しぶりだな。アクセル君」

小柄な身体には似合わない大きな掌を上げながら、レオニー子爵  
は寝室へと足を踏み入れた。アクセルも挨拶を返す。

「すまないな、病気だったとは知らなかったのだ」

「いえ、ちよつとその、ショックを受けただけで……。少し休めば、よくなりますよ」

「そうか、それならいいんだが……」

ベッド脇の椅子に腰掛け、レオニー子爵はマントを外した。どうやらただの見舞いではなく、本当にアクセルに用があるようだが、彼は他愛もない世間話を始める。

(……確か、傭兵ギルドの壊滅の後始末に苦労してるって聞いたけど……)

領内の元傭兵のため、ゼルナの壊滅した守備隊の補充員を集めさせて欲しい、というのなら、それこそリーズに話すだろう。

「……と、病人相手に長話もあれだったな」

世間話を打ち切り、レオニー子爵は頬をかいた。本題は既に決まっているらしいが、それを言いくそうにしている。

「実は……君に、謝りに来たんだ」

「え？」

ラファランの一件について、というわけでも無い筈だ。全く見当が付かないアクセルは、首を傾げて続きを促す。

「以前、君が見せてくれた模型だよ。トロツコを参考にしたという」

「ああ……」

線路の上を走る、鉄道もどき。あれから特に改良を加えることも

なく、模型もどこかに仕舞い込んでしまっているが、それで何故自分が謝られる必要があるのか、アクセルには一向にわからない。

「少し前、王都に行った時、マザリー二枢機卿という人と話してな。酒が入っていたせいもあり……いや、それは言い訳だな。ともかくあのアイデアを、得意になって話してしまったんだ」

マザリー二枢機卿、という名に、アクセルは小さな衝撃を受けた。

「それが、採用される可能性が出てきたんだ。しかも、私の名前です。君のアイデアと訂正してもいいんだが、そうするには遅すぎた。既にマザリー二枢機卿は、発案書を粗方作り終えていてな。……大変申し訳ないんだが、あのアイデア、私の発案ということにしてはくれないか？ 勿論、私に出来る償いはしよう」

ああ、そんなことか……それが、アクセルの感想だった。要するに、アクセルのアイデアをレオニー子爵がパクった、ということになるが、そもそもアクセルのアイデアも、前世のパクリである。言ってしまうばどうでもいいことであり、そしてそんなどうでもいい事に対して、小柄な身体を縮めて謝るレオニー子爵に、却って申し訳ない気分になった。

(……律儀な人だな)

黙って進めていれば、後でアクセルが何を言ったとしても痛くもかゆくもなかっただろうし、そもそも例え無断でパクられても、アクセルに何か言おうという気は無い。それどころか、未だ九歳のラヴィス子爵の息子が発明した、などと公にされる方がよっぽど不愉快だ。そんな特異性が露わになって、下手に目立ちたくなど無い。

しかし、こうやって素直に謝るこのレオニー子爵という人物は、

好感が持てる男だった。

「いえ、いいんですよ。あんなもの、ただの思いつきで、僕には実現出来ませんし」

「いや、しかしだな……」

渋い顔を上げたレオニー子爵は、少年の表情の変化に気付いた。どこか虚空を見つめる彼の視線は、固定化がかけられたかのように動かない。

「……………」

どうかしたのか……そう尋ねようとして、しかしそれは出来なかった。弱々しかった少年の瞳に、まるで炭火のような、静かな熱を感じ取った。

「あ……あのっ」

アクセルは夢から覚めたかのように、突然レオニー子爵に向き直る。

「一つ、お願いがあるんですが、いいですか？」

「む……ああ、出来る事なら何なりと」

上手くいくかは分からない。無駄骨を折ることになるかも知れない。あまりにも不確実な策。

しかし、その未来に手を伸ばすしかなかった。手が届かず、足下が崩れ去るかも知れないとわかっていても。

「僕、トリスタニアに行きたいんです」

全ては執政庁に戻ったアクセルが、現状を詳しく把握してから…  
…ということになっていた。

だが、そのアクセルが戻らない。どうやら半ば軟禁状態となっ  
ているらしく、見舞いに行ったローランですら、丁重に面会を拒否さ  
れた。手紙すら預かつては貰えない。

本当に面会謝絶の可能性もあるが、ナタンとバルシャは、東地区  
に關係するあらゆるものが拒否されているのだ、と判断した。それ  
はつまり、アクセルを守るため。そしてそのことは同時に、執政  
庁が完全に、イシュタルの館と敵対したことを示している。

あのアクセルなら、例え軟禁状態に置かれていてもどうにか連絡  
を取りそうなものだが、それが行われないうことは、彼の身に  
何かがあったと判断できる。結局、スルトが忍び込み、アクセルと  
接触するという方法が取られた。

事態が予想以上に悪化していることは、誰しもが感じていた。そ  
れこそ子爵の息子であろうと、どうにもならないくらいに。

最悪の場合は逃亡する、というのがナタンの判断だった。幸いと  
言うべきか、殆どの者は家族がいない。ラヴィス子爵がイシュタル  
の館を潰そうとしても、まさか娼婦達にまで手を出したりはしない

だろう。そう、最悪の場合は、イシュタルの館を畳んでどこかへ逃げればいいのだ。

しかし、それがあくまで最悪の場合であることは、ナタンも重々に承知している。アクセルがそれを望まないことも。

「どうでしょうか……」

バルシャは唇を噛む。現在の敵は、戦うことを選べない相手であり、それが歯痒いのだ。しかもその敵は、金でも女でもなく、こちらの消滅、ただそれだけを目的としている。

ナタンは、それに答えることが出来なかった。

そしてそんな時、生傷の手当を終えたクーヤは、

「んじゃ、そろそろワシはおさらばじゃ」

と、一人イシュタルの館を後にしようとしていた。確かに、ただの客人である彼に、この館の問題に付き合う義理は無い。それどころか、ギャエルとマノンの阿片を抜いた恩があるのだが、クーヤが礼として求めたのは、アクセルが作った酒を一瓶だけだった。

「おい、いいのか？ スルトに挨拶しなくて。もうすぐ戻ってくると思うんだが……」

「いらんいらん。生きてりゃまた会うわい」

この老人は、万事ずつとこの調子だった。飄々と、さながら雲か何かのように変幻自在で、つかみ所が無い。

スルトも別れくらい言いたいんじゃないか、と、迷ったような顔をするナタンに、クーヤは履き物の紐を結びながら言った。



「ここも何やら、キナ臭くなってきたしな。ワシはさっさと逃げることにするが……お前らはどうするんじゃ？」

「どうするって？」

「このままここにいれば、死ぬかも知れんぞ」

ナタンも、そして彼の後ろに立つバルシャも、わかっていた。その可能性が、決して低くは無いことを。

抵抗しても、それが成功しても良い結果が出そうにない以上、出来るのは防御と逃亡だけ。

「心配してくれんのか、爺さん？」

「……余計なお節介じゃったな。まあ、領主も、娼婦にまで手は出さんじゃろ」

二人の顔を振り向いたクーヤは、文字通り、余計なお節介を焼いたことに気付いた。

「んじゃ、お前ら、出来れば生きてろよ。そうすりゃまた会えるかもな」

場に湿気が生まれることを嫌い、クーヤは立ち上がると、手ではなく酒瓶をふるふると振った。軽く爪先を地面で叩き、ガラガラと裏口の引き戸を開ける。

「ん？」

そこに、スルトが立っていた。

「おう、帰ったか。また今度、茶あでも飲もうや」

そう別れの挨拶をするクーヤだが、スルトは無言のままだった。

「何じゃ？ どけや」

そつと、スルトは道を空ける。だが、更に立ち塞がる少年が現れた。

「出発は待つてくれないか、爺さん」

「ベル！？ え……何で……」

やつれた顔のアクセルを見て、ナタンが声を上げる。

「お、おいスルト。手紙じゃなくて、本人を持って帰ってどうすんだよ」

「どうしても、連れ出させてな」

ナタンに返事をしながら、スルトは肩をすくめて見せた。そのまま引き戸に背を預け、腕を組む。

「ナタン」

クーヤを通り越す形で、アクセルはナタンに声を掛けた。

「もう気付いてるかも知れないが、まずい状況だ。イシユタルの館始まって以来の危機だよ。敵は僕の父、ラヴィス子爵。本当の理由はわからないが、ここを潰したいのは確からしい」

既に察していたので、ナタンもバルシャも、大して驚きもせずに頷いた。

「色々考えた……。そして、賭けに出ることにした」

「賭け？」

「外部からの協力者を得る為に、僕は王都トリスタニアに向かう」

「あてがあるんですか？」

「都合良く、さつき出来たのさ。……父が戻るまで一週間、それまでに何とか出来るかは分からない。だから、もしも一週間で僕が間に合わなかった場合、内部から持ちこたえて欲しいんだ」

今までのアクセルの世界は、ラヴィス子爵領が全てだった。殆ど全てのことが、片田舎の子爵領で完結してきた。

今、その子爵領の支配者が、敵としてやって来ようとしている。それに対抗するには、アクセルの世界を広げる必要があった。

勿論、この状況で外の世界に出るのは、大きな賭けである。このままここに残り、ラヴィス子爵と顔を合わせ、息子として説得すべきかも知れない。

「どのくらい持ちこたえればいいか……悪いけど、それは明言出来ない。全て、ナタンの判断に任せる」

「……了解だ」

ナタンは笑顔を見せた。アクセルも笑顔を返すと、少しでも体力の消耗を減らそうとするかのように目を閉じ、口だけ動かす。

「そして、スルト」

「何だ？」

「もしも、ナタン達が逃げることになった時は、やっぱりクルコスが一番確実なんだ。そうなった時、案内を頼みたい」

「危険だな」

「ああ、下策さ。最悪より、少しマシな程度だろう。それでも…

…」

「わかった、力を尽くそう」

「ありがとう」

「もうええかのお？」

すっかり蚊帳の外にされていたクーヤが、蚊の泣くような声を上げた。こんなにやつれた顔の少年を押しよけるのも忍びなかったのか、ガリガリと頭をかいている。

アクセルは目を開けると、クーヤの目を見つめた。

「爺さんには、ナタンを助けてもらいたい」

「……はあっ？」

「ここに残り、手を貸して欲しいんだ」

「お断りじゃ」

予想しなかった言葉に目を丸くしたクーヤは、しかしすぐに表情を戻すと、あり得ないとも言うように首を振った。アクセルはじつと老人と視線を合わせるが、彼はそれでも動じない。

「沈む船からは、ネズミだって逃げ出さず。ワシはネズミほど利口でも無いが、人間ほど馬鹿でも無いんでな」

「それ相応の礼はするよ」

「舐めんなよ、クソガキが。欲しいもんは、テメエで手に入れるわい」

取り合おうとしないクーヤだが、アクセルは突然微笑むと、小首を傾げた。

「爺さん。米の飯には、もう未練は無いのか？」

「いいからさっさとどけ。……………おい、今何て言った？」

アクセルの他に老人の表情の豹変に気付けたのは、皮肉なことに、スルト一人だった。

「……………」

固唾をのむクーヤの目の前で、アクセルは膝を曲げ、中腰になると、右手を下げる。そして腹から絞り出すようにして、声を上げた。

「お控えなすつてえ！」

ナタンもバルシヤも、スルトでさえも、何事かと身体を浮つかせる。

「早速お控え頂き、ありがとうございやす。斯様粗忽な身形でのご挨拶、失礼さんでござんすが御免なさんせ。手前粗忽者故、前後間違いましたる節は、まっぴら容赦願います。向かいましたる上さんとは今回初めてのお目通り、ではございやせんが、改めましてご挨拶させて頂きやす。手前生国、水の国はトリステイン、聖湖ラグドリアンからギヨル川を下り、産声上げたはラヴィスの地でございやす。姓はラヴィス、名はアクセル・ベルトランと申しやす。ご賢察の通りの若輩者でございやす。後日にお見知りおかれ、行く末万端御熟懇に願いやす」

さながら、演劇か何かのようだった。朗々と、淀みなくアクセルの口から出た口上は、よく聞けば長い自己紹介である。相当に勿体ぶってはいるが、結局の所、名前を名乗ったに過ぎない。

アクセルはふうと息をつき、目を閉じる。

「爺さん。僕は出来れば、アンタとは後でゆっくりと、色々な事を話したい。……爺さんはどうだ？」

クーヤもじつと、瞼を下ろしていた。まるで広大な荒野で、同じ種の生物とぼったり顔を合わせたかのように、微動だにしなかった。理解できる者はいない。

そんな中、クーヤはカツと目を見開くと、アクセルと同じく中腰になり、右手を下げた。

「お言葉ご丁寧にごぞんす」

アクセルのそれとは違い、静かだが、さながら盤石を思わせるような声色。

「申し遅れて高うはごぞんすが、御免をこうむりやす。弘法さんが仰るに一生は、生まれて、生きて、そして死ぬ。生まれもしたし、生きもした。なれど最後の一つが出来ぬまま、甲乙を繰り返すこと三度にごぞんす」

節を付けて、さながら歌うかのように、クーヤは続ける。

「そもその生国は、大日本帝国は甲斐の国にごぞんす。日本橋から朝日を背負い、お天道様に追い抜かされて、白虎の街道を四十里。芙蓉峰の残雪に照らされ、浅間の水を産湯に使い、守ってくれたは笹と竹。竹は武にて、剛と猛。風林火山の虎に肖りまして、姓は佐々木、名は武雄と印しやす。何の因果か流れ流れて、着いた果ては酒のタルブ」

アクセルは人知れず、生唾を飲み込んだ。

「転じて次の名は一闡提。いっせんたい 四重禁に五逆罪、俗欲の限りを尽くし、閻魔の元へ赴かんとするも、だつえは 奪衣婆懸衣翁にも避けられて、極楽地獄に居場所無く」

アクセルのように、ただ名乗るだけではない。

ただアクセルの為にのみ語られたそれは、この老人の歴史だった。ただただ笑いて、カラカラと。空っぽ空虚、空の如く。更に転じて、今はただただ空也で、名乗ればクーヤと発しやす。お見知りおかれやして、今日向万端よろしくお頼ん申し上げやす」

そこまで告げると、クーヤは背を伸ばし、踵を返してその場の全員に背を向けた。

「……ヤクザの仁義なんざよう知らんから、適当にさせて貰ったぞ」

「……………うん」

わざわざ前に回り、老人の表情を確認しようとする者はいない。事情を知るアクセルでなくても、体温が見えるスルトでなくても、触れること憚るものを感じ取った。

「おいっ、クソガキい！」

無理矢理絞り出すようにして、クーヤは怒鳴る。アクセルは瞬きをすると、腰に手を当てる。

「ベル。そう呼んでくれ、クーヤ」

「……………ベル。女と酒と、それと米。これは譲らんぞ」

「ああ。好きにしてくれ」

「それと……ちゃんと、帰ってくるんじゃないかな？」

「ああ」

「よっしやあっ…！」

掌で軽く肩を打ち、クーヤは振り向いた。その顔は、全てを塗り潰すかのような強烈な笑みを作っている。

「まだ当分厄介になるぞ！ これで満足かつ？」

「ああ、文句無しだ。……ところで、クーヤ。一ついい？」

「何じゃい」

「今……何歳？」

「知るかつ」



第二十四話＜邂逅6＞（前書き）

今回も話が進んでません。遅筆に加えて申し訳ありません。

## 第二十四話<邂逅6>

ラヴィス子爵領から、馬車で一日。レオニー子爵に同行する形となったアクセルは、無事に王都トリスタニアに到着した。

「どうだね？」

「……凄いですね」

その答えに満足したのか、レオニー子爵はにっこりと笑顔のまま頷いた。

別に演技ではなく、正直な感想であった。

ラヴィス子爵領のゼルナや、レオニー子爵領のクルコスが片田舎であることは知っていたが、やはり自分の中で、街とはあの規模のものだったのだ。

アクセルは自分の世界が広がっていくのを、背筋の震えで感じていた。未知の場所に踏み出す、少年らしい冒険心が、体中に広がっていく。

王都トリスタニアは、あの二つの街などとは比べ物にならないほどだ。アルビオンのことを白の国とも呼ぶそうだが、このトリスタニアにこそ相応しいのではないか……そう思える。真っ白な石造りの建物が建ち並び、それらが太陽の光に照らされて、白磁の器のような光沢を放っていた。

弱小国家のトリステインの首都ですらこれ程ならば、ガリアやゲルマニアといった大国はどれ程なのか……と、未だ見ぬ都市に心を躍らせるが、しかしそれらも、ほんの一瞬のことだった。今のアク

セルに、童心に酔うような余裕など無かった。

帰りの時間も考え合わせれば、残り五日。それまでに、何とかしなければならぬ。

しかし、その“何とか”の内容すら、未だはつきりとは定まっていなかった。

(……………欲を出しすぎた……………かな)

もう何度、そんなことを考えてしまったのだろうか。

誰一人として殺さず、八方丸く収まるハッピーエンド……………そんな夢物語のような未来は、か細い亀裂の奥にちらつく、幻のようなものだったのかも知れない。しかし、例えそうだとしても、手を伸ばさずにはいられなかった。

アクセルの表情の曇りは、レオニー子爵の目には、身体的な顔色の悪さにしか映らない。

「まあ、思い切り楽しめばいい」

そう言いつつ、少年の肩を叩く。

今回のアクセルの王都訪問は、治療という名目もあった。軟禁状態で、食事すら受け付けなくなったアクセルには気分転換が必要だと、レオニー子爵直々にリーズを説得したのだ。リーズも、今後争いが起きそうなゼルナに置いておくよりは、王都にいて貰った方が良いのではないかと考え、決断した。

門を抜け、街の中へと入ったところで、馬宿に馬車を預ける。アクセルとレオニー子爵が並び、その後を、荷物を持った従者が続いた。

「……どんな方なんですか？」

アクセルは緑髪を揺らしながら、軽く顎を上げ、隣のレオニー子爵を見上げる。

「ん、マザリー二枢機卿殿か？ まあ、そうだな……」

ふむ……と上下の唇をずらし、どこか虚空に視線を彷徨させた彼は、やがてぼつりと漏らした。

「枢機卿らしからぬ……と言えいいかな。いや、別に、悪い意味では無いんだ」

マザリー二枢機卿……その名は、アクセルにとって信頼できる人物のそれだった。

勿論、実際に顔を合わせたこともないし、原作当時のように今は未だ、それほど有名でも無い。

信頼できると判断した理由は、ただ、原作の物語を知っているから……それだけだ。

我ながら何と脆い理由かと、アクセルは自嘲したくなる。既に物語は、大きく書き換えられているかも知れないというのに。

しかし、流石に彼の政治能力まで失われている筈は無いだろう。現在のトリステイン国王崩御から、アンリエッタ覚醒イベントまでの数年間、国の政治を一手に取り仕切っていた凄腕が、マザリー二枢機卿だ。

今抱えている問題が、アクセルにはどうにもならない事態である以上、アクセルより優れた人物に手を借りるしか無い。

(問題は、どうやって渡りをつけるか……だけど)

理想は、マザリーニが現在頭を悩ませている問題を、メイジである自分が解決してやり、それによって恩を売る、というものだが、そうそう都合良くはいかないだろう。

(……今、俺が出来ることを最大限に引き出すしかないな)

アクセルはそう思いながら、ふと開いた掌に精神を集中させ、魔力の渦を作り出してみた。

「……しかし、政治の才能は私などよりも上だな」

どうやらレオニー子爵の話を、多少聞き逃してしまっていたらしい。慌てて自らを戒め、アクセルは相づちを打った。

「元々、ロマリアからやってくる枢機卿などは、始祖ブリミルの教えを伝えるための、ただのお飾りなのだ。せいぜいが、式典を監督したり、ブリミルの教えに反した行為が無いかを見張る役。あまり政治に関わらせたくは無いが、異端と見なされるのも厄介なので、どの国も、腫れ物扱いさ。しかしそんな中、マザリーニ枢機卿殿は抜群の才能をお持ちだ。惜しむらくは、未だその才能を周囲が認めしていない点なのだが……」

まあ数年後には、イヤでもその才能を引っ張り出され、鳥の骨とあだ名されるほどにやせ細る羽目になるのだが……本人にとつてどちらが幸せなのだろうか、ふとアクセルは考えた。

昼も大分回っていたので、昼食を取ることになった。

向かったのはチクトンネ街にある居酒屋、『天使の箱舟』亭。店名の意味は、従業員の女の子達だろう。確かに、見目麗しき乙女達だが、甲斐甲斐しく客の相手をしている。少々店内の老朽化が激しい

感もあつたが、それを気にするような客は来ないらしい。調度品はなかなか立派なものが揃っており、それなりのステータスのある人物達がやって来るのだろう。

(……ん?)

ふと、アクセルは気付いた。

元々この世界の食堂など、酒を備えていない方が珍しいので、食堂より寧ろ居酒屋という呼称が似つかわしく、そこへ子どもを連れて行くのは問題ではない。

気付いたのは、席の半分ほどを埋める客が男ばかりで、そのうちの何人かが、女の子と共に二階へと上がっていくことだった。

(……ひょっとして、ここ、売春宿か?)

それこそ問題ではないか、と内心思いながら、しかしなるべく顔には出さず、アクセルは平然としていた。

「いい店だろう?。」

どこか下品な笑みを浮かべ、隣のレオニー子爵が囁いてくる。うぶな少年の顔を赤面させたいらしいが、それも自分を元気づけようとしてのことだろうと、アクセルは好意的に受け取った。

「そうですね、皆さん美しい方ばかりで……。」

「私の行きつけでな、ここは。トリスタニアに来ることがあれば、必ず立ち寄るようにしているのだ。」

「へえ。」

気のない返事をしつつ、アクセルは考える。

何故、このトリスタニアの売春宿が認められて、ラヴィス子爵領のイシュタルの館が認められないのだろう、と。チクトンネ街は確かに下世話な店が多い地区だが、そんなもの、人が集まる場所であれば自然と出来てしまう筈だ。だからこそ見逃される。

しかし、それ以上考えると、また出口のない迷路へと我が身を投げ込んでしまいそうで、自重する。

アクセルが頬を染める場面でも期待していたのか、レオニー子爵は「やはりまだ早かったか」と、残念そうな顔をする。

「あらあら、お久しぶりですね。フィルマン様」

年を食った老婆が、レオニー子爵の名を呼びながら近づいてくる。

「ああ、久しぶりだな、女将。景気はどうだ？」

「さてそれが、なかなか思うようには、ねえ。最近は、妙な連中が現れるようになりましたし」

「……妙な連中？」

女将に案内され、レオニー子爵とアクセルは、席の一つを囲む。

それほど忙しいわけでもないのか、女将はレオニー子爵の隣に腰掛けた。

「そうなんですよ。店を守ってやるから、金を渡させて……」

「ただのゴロツキではないか。“初物食い”として貴族の間に名を馳せた“箱船亭”にしては、随分と弱気だな」

そこでようやく女将は、アクセルへと目を向ける。レオニー子爵の子どもとも思っていたらしいが、それにしても顔が似ていないことにやっと気付いた様子だった。

「ところで、フィルムマン様。こちらは？」

「初めまして。アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィスです」

アクセルは形ばかりの挨拶をする。暫く目を瞬かせていた老婆は、挨拶を返すことすら忘れたように、レオニー子爵を見上げて首を傾げた。

「まさか……この子の初物を？」

「バカ言っちゃいかんよ、女将。ただ昼食を摂りに来ただけだ」

何で九歳児をそんな目で見るんだ、と辟易するアクセルだが、勿論顔には出さない。あくまでも、無知で無垢な子として振る舞おうと思っていた。

昼食は、すぐに運ばれてきた。アクセルの食欲も大分回復しているので、久しぶりに肉を堪能する。さつさと皿の上のものを平らげていく少年に、レオニー子爵はひとまず安心した。

「さて、私はこの後、マザリーニ枢機卿殿にお会いするのだが……本当に君も来るのかね？　ここらには、遊ぶ場所もたくさんあるぞ」

「ありがとうございます。でも、ゼルナではリーズが頑張っているというのに、僕だけ遊ぶのはどうかと……。だからせめて、少しでも勉強しておきたいんです」

アクセル自身、齒の浮くような台詞だったが、殊勝な少年だとレオニー子爵は感じ入ったらしい。そうか、と、まるで我が子が言ったかのように嬉しげに、アクセルに向かって微笑んだ。

昼食を終え、店の外に出たアクセルは、軽く伸びをする。元々狭



い通りが入り組んでいる中、ここは更に裏街であるチクトンネ街。頭上を見上げると、建物に押しやられた窮屈そうな青空があり、彼自身も息苦しさを覚えた。

「……？ 坊ちゃん、あれ、何でしょう？」

そう尋ねてきたのは、傍らの従者だった。両手を上に上げたまま、示された方向へと視線を移す。酒場の隣の、大人が両手を広げれば通せんぼできるような、非常に狭い路地。その物陰で、影が動いた。

「ん、何だろ？」

「あつ、坊ちゃんっ」

従者が止める間もなく、アクセルは単純な好奇心に引つ張られ、路地へと踏み入る。薄汚れた石畳を踏みしめながら、ゴミ箱の奥に座り込む、一人の人間を発見した。

身体に纏う精霊により、メイジであることに気付く。貴族の格好こそしていないが、路地裏には似合わぬ清潔感ある服装で、まさしく掃き溜めの鶴、といった感じだった。

年齢は、若くは無い。四十ほどの女性だった。黒髪に、銀縁の眼鏡。その奥の、閉じられていた双眸がすうと開き、アクセルと同じ青い瞳が、アクセルのそれを射抜くように見つめた。

「大丈夫ですか？」

アクセルがそう尋ねたのは、その女性の左肩が血で染まっていたからだ。女性はそっと、放っておけとでも言うように、首を横に振った。

「……どうなされた？」

会計を済ませたレオニー子爵に、従者が知らせたのだろう。アクセルの背後から様子を覗き込んできた彼は、同じく女性の怪我を見ると、痛々しそくに顔を顰めた。

「とりあえず、手当を……」

「ご親切、痛み入ります。ですが、どうぞ……私のことは構わずに」

そこでようやく、彼女は口を開いた。話すことすら億劫らしい。やはり、相当に消耗しているようだ。アクセルは構わず杖を抜き、治癒の魔法でその傷を癒した。治癒が得意ではないレオニー子爵は、素直に感心し、力無い手で杖を払いのけようとした彼女も、子どもとは思えない魔法の練度に、驚いたように目を見開く。

「……放っておいてくださいと、申しましたのに」

呆れるように、女性は溜息をつく。

「そんな大変そうな状況で、他人を気遣えるなんて……あなた、いい人ですね」

そう言っつて、笑って見せるアクセルの胸には、打算があった。

三つの可能性がある。この女性がマザリーニの味方である可能性、逆に敵である可能性、どちらでもなく無関係である可能性。それら全てを考え合わせた上で、彼女を助けることにしたのだ。

味方なら、恩を売ることが出来る。敵なら、差し出すことが出来る。最後の、そして一番可能性の高い、無関係の女性であったとしても、この女性個人に恩を売ることが、無意味な行動では無いだろ

う。

ふと、アクセルは上を見上げる。狭い空を、人影が横切った。

「……申し訳ありません、既に巻き込んでしまったようですね」

座り込んでいた女性も、同じく、上を見ていた。

「追われている、と？」

レオニー子爵の問いに、彼女は力無く首肯する。アクセルは目を閉じ、周囲に意識を巡らせた。果たして、緊張状態のメイジの反応が、広く薄く伸ばした魔力から伝わってくる。一つや二つではなく、十を超えていた。

(……包囲されている)

既に、アクセルもレオニー子爵も、この女性の味方と見なされているらしい。アクセルは跪き、彼女と視線を合わせた。

「あの、どこか安全な場所があります？」

「……………」

暫く無言だったが、全てが手遅れだと悟ったらしい。彼女は一つ溜息をつくと、ぐいと額の汗を拭った。

「王城の中……あそこまで行けば、彼等も手出しは出来ないでしょう。私が囿になって差し上げたいところですが、既に精神力が枯渇しています。夜に紛れて、と言いたくても、その時間は無さそうですね」

どうするか、と、アクセルは考える。

チクトンネ街の路地裏という、不慮の事故があっても不思議ではない場所。相手は、こちらを殺すつもりでかかってくるだろう。相手の数も実力もはつきりせず、通常の魔法だけでは相手が出来そうにない以上、逃げの一手しかないのだが、どうやって王城まで逃れるべきか。

王城の中、と彼女が指定したということは、この女性はやはり、それなりの地位を持つ重要人物。助けられた後に得られる利益を考えれば、益々死なせるわけにはいかないのだ。

(素早くは動けない。土地勘も無いから、敵を撒くのは不可能。一旦どこかに逃げ込んで……っていうのも、他人の迷惑を顧みないガキって感じで、印象悪いな)

アクセルはふと顔を上げると、レオニー子爵を振り向く。

「この状況、逃げた方がいいですよね？」

九歳児にどうやって事態を説明しようか悩む彼に、先手を打つ形で尋ねた。子爵は安心したように頷く。

「で、アクセル君。何か名案でも浮かんだのか？」

「公示人に化けるのはどうでしょう。ちょうど、荷物の中に僕のヴァイオリンがあります」

「……名案だな。おいつ、女将に化粧道具を借りて来い。それと、最新の布告だ。新しいものだぞ」

レオニー子爵が背後の従者に命じ、アクセルはマントと上半身の衣服を脱ぎ去ると、荷物の中のヴァイオリンと入れ替えた。

ほどなく、従者が化粧道具の詰まった箱を抱えて戻ってくる。それを開き、アクセルが顔と上半身に白粉を塗りたくっていると、従者から王城よりの布告を受け取ったレオニー子爵が、うっと呻いた。

「どうかしましたか？」

「……何ということだ。来月から、酒の値段を上げるそうだ」

「余裕ですね」

呆れ返るアクセルに向かって、レオニー子爵はふっと笑みを見せる。

「何だか、面白くなってきてな。……しかし、アクセル君。随分と化粧道具の扱いに慣れてるようだが……」

「……………気のせいでしょう」

この女性が何者で、どんな理由で追われているのか、それは未だわからない。レオニー子爵は尋ねようとはせず、アクセルも同じく悠長に名乗りあっている余裕が無いのも確かだが、それもまた、アクセルの打算だった。助けるのは家名によってではなく、傷つき困っている女性だからだと、彼女に印象づけるために。

「おい、アクセル君。どうしよう」

「え？」

「私は楽器は出来ないし、そもそも持ってない。しかも口下手だぞ」

「ああ、大丈夫だと思います。その布告を、繰り返し読んでおいて貰えば」

あまり識字率の高くないハルケギニアにおいて、公示人は必要不可欠な存在だった。彼等はチンドン屋と同じく仮装し、楽器を打ち

鳴らし、字が読めない人々に向けて宣伝を行う。その顧客は、場末の酒場から王室にまで及んでいた。

体中にペイントを施したアクセルは、ヴァイオリンで賑やかな曲を奏でながら、踊るように先頭を切る。その後ろから、従者の着替えを羽織り、のったりと布告文を朗読するレオニー子爵が続き、従者と眼鏡の女性は、その隣を歩いた。

(……うまいな)

レオニー子爵は素直に感心する。この目の前の少年の母親が、音楽に秀でていることは知っており、アクセルが楽器を演奏出来るのは不思議なことでは無いのだが、それでも彼の腕前には驚いた。

布告文を読む声を邪魔する程ではなく、しかし賑やかさを感じさせる、適度な音量。

忽ちにして、通りに鳴り響く音楽を聞きつけた人々が顔を出し、子ども達が群がる。公示人の音楽は、言ってみれば無料で聞ける演奏であり、たちどころに見物客が壁を作った。

演奏しながら、アクセルは相変わらず周囲に意識を巡らせている。

(どうか、諦めてくれよ)

見物客である老若男女は、壁であり、目撃者でもある。決して大通り以外を歩くつもりは無いし、群がる子ども達は王城の門までついて来るだろう。こんな目立つ状態で攻撃を仕掛けては来ない筈だが、それも絶対では無いのだ。

(……退いたか)

密かにこちらを追いかけているメイジたちの緊張状態は、緩和されていた。魔法を使う様子が無いところを見ると、どうやら諦めてくれたらしい。

もうすぐ、チクトンネ街を出る。そうすれば、更に観客は増えるだろう。

その時だった。アクセルは、メイジたちの緊張が、再び高まっていくのを感じ取った。

アクセルの警戒は、そのメイジが持つ精神力の流れを読み取るというもの。勿論、大まかにしかわからないが、魔法を使おうとしているのかどうかは判断できる。

(馬鹿な、無関係な人間が多いここで?)

アクセルは、自身の認識の甘さを悟った。もしも彼女が敵にとつて、想像以上に邪魔な存在であれば、強襲も考えられる。

「うっ」

彼女の呻き声が聞こえた。続いて、倒れ伏す時のくぐもったような音。

アクセルが演奏を止め、振り返ると、観客の一人が悲鳴を上げるのは同時だった。

(……バカか俺はっ)

俯せに倒れる彼女の背には、矢が突き立っている。メイジの攻撃は魔法だけという固定観念に囚われていた己に毒づき、振り向きざまに走り出した。

狭い通りは忽ちにして、阿鼻叫喚の渦に覆い尽くされたが、人々の逃げる方向は決まっている。倒れた彼女から……つまりアクセルたちから離れる方向。人垣はあつという間に無くなり、公示人に扮した一行は格好の的となった。レオニー子爵が連れてきた従者も、彼女と荷物を放り出して既にどこかへ消えている。

感じる精神力の高まりは、弓を引き絞る集中。それが解放される時、矢が飛んで来る。

(……！)

アクセルは女性の傍に立つと、ヴァイオリンを振り回した。振り切った時には、ヴァイオリンは矢に貫かれている。

「アクセル君っ、こっちだ！」

レオニー子爵は彼女を引きずり、傍らの酒場の軒下に逃げ込んだ。ヴァイオリンをその場に放り捨て、石畳を蹴り、アクセルは転がってその場を脱出する。

(ハイリスクハイリターン……か)

そんな単語が浮かんだ。次の……三本目の矢は飛んで来ない。

アクセルは腰を屈めたまま、彼女の傍に駆け寄った。背中に刺さった矢は、そこまで深くは無いようだ。が、このままにしておくわけにもいかない。

ポケットに入っていたハンカチを取り出すと、それを団子にし、か細い息を吐き出す彼女の口元に示した。

「矢を抜きます。いいですか？」



「……………」

彼女はさながらヤジロベエか何かのように、微かに、何度か首肯を繰り返すと、丸めたハンカチを銜える。アクセルはその彼女の背に足に乗せると、両手で矢の鏃近くを掴み、根菜のように一息に引き抜いた。一度、大きく身体を反らした彼女は、すぐに力を抜くと、鼻で荒い呼吸を繰り返す。その傷跡に、また治癒を施し、アクセルは溜息をついて彼女の傍らに尻餅をついた。

「……………どうでしょう」

何とはなしに、反対側のレオニー子爵に尋ねてみる。しかしそこでアクセルは、この小柄な男が、荒事を苦手とすることに気付いた。焦点の定まらない目……その視線は虚空を泳ぎ、小柄な身体を微かに震わせている。どうやら、こちらの声にも気付いていないようだ。

レオニー子爵にかかっていた、自己陶酔の魔法は切れている。彼は今、至って正常な、彼本来の頭脳を取り戻していた。

アクセルは、己の感覚が麻痺していたことを悟った。この状況、冷静でいられる方がおかしいのだ。見ず知らずの女性を助けようとしたことで、同じメイジに命を狙われるなどという展開、一体何人の貴族が経験したというのか。

それに比べ、この状況でも取り乱さないこの女性は、一体何者なのだろう。烈風カリンの他に女性軍人がいる可能性も低く、となれば裏の仕事に手を染める没落メイジか。しかしそれにしても、彼女が纏う雰囲気は由緒正しい貴族のそれである。王城に逃げ込める身分であるならば、尚更だ。

アクセルは、先ほど頭に浮かんだ“見捨てる”という選択肢を、静かに片隅へ押しやった。益々、死なせたくなかった。

( 追撃は未だ無し……か。いくら何でもこうやって騒ぎになった以上、敵は早くに片付けようとするだろう。守備隊が来るまでどのくらいだ？ それまで守備に回るのは……無理だな。三人の中で、まともに戦えるのは多分俺一人。レオニー子爵は…… )

ちらりと、彼に目を向ける。

「に、に、逃げなければ……」

ちょうど、独り言のように呟くレオニー子爵と目が合った。流石に、九歳児ですら落ち着いていることに気付いたのか、彼は震えを止める。いや、無理矢理に押し込もうとしているようだった。

アクセルは再び、周囲に意識を巡らせる。風のメイジの才能によって、感じる事が出来た。徐々にこちらへと近づいてくる敵たちを。

「……下水道……」

その呟きが、彼女の湿った喉の奥から聞こえてきた。アクセルは急いで這いつくばり、耳をその口元に寄せる。

「何です？」

「下水道……。そこに……。逃げれば……」

その考えが、アクセルに無かったわけではない。一度は思いついておきながらそれを却下した理由は、初めて入る場所であることその他に、彼女の消耗にあった。いくら傷を塞いであるとはいえ、怪我人をそんな不衛生な場所に連れ込むわけにはいかない。

そして、その判断を察したかのように、彼女は力無い笑みを浮かべて見せる。

「あなた方、二人なら……逃げられます。ここまで、ありがとうございます。ごさいました……。あとは私が、決着を……」

「立てもしないクセに、何を言ってるんですか。大丈夫です、すぐに守備隊が来ます」

「……来ません」

「そんなわけないでしょう。白昼堂々、あれだけの目撃者の中、人が襲われてるんです。なのに……」

「正確には……通常より遅れます……。守備隊に命令を出す筈の人間は……ここでこうして、身動きが取れないんですから……」

「!? じゃあ……貴女は……」

「こんな有様ですが……チクトンネ街区の護民官です」

アクセルは覚悟を決めた。杖を握り直し、静かに精神力を高める。

その時、通りを風が通り抜けた。

「……!?」

風属性の精神力の純度が高ければ高いほど、扱いが難しくなり、威力が跳ね上がるのは、アクセル自身が実験済みである。

そしてその風の純度は、アクセルが扱えば間違いなく自爆するであろう程のものだった。

(……敵が……)

次々と、敵の立ち去る気配が届いた。彼等は目的が果たせぬことを知り、退却を選んでいった。

その判断をさせた人間が、通りの向こうから歩いてくる。  
服装は、貴族のもの。マントを羽織り、顔には鋼鉄の仮面。長い  
桃色の髪を自らの風で靡かせながら、あらゆる障害が排除されたそ  
こを、何の気負いもなく進む。

(まさか……)

そう思いつつも、アクセルは杖を構えた。しかし、背後に守る彼  
女は、アクセルの裾をくいと引っ張ると、静かに首を横に振った。

「……ご無事ですか？ ヴィーヴィー殿」

鉄仮面の下から凜と響いたのは、女性の声。

「ええ……。ありがとう、カリン」

ヴィーヴィーと呼ばれた彼女はそう呟くと、安堵したかのような  
微笑みを浮かべる。

アクセルの全身から吹き出す冷や汗が、剥がれた白粉と共に、白  
濁した雫となって身体の上を滑り落ちた。

## 第二十五話<邂逅7>

マザリーニ枢機卿の邸宅は、トリスタニアの高級住宅街、モンシヤラン街にある、その地区の中では比較的小さな家だった。繁華街であるチクトンネとは、中級住宅街であるフォツソワイヤール街を挟んでいる。

王城での事務を終えて帰宅したマザリーニは、客の数が倍に増えたことをメイドから聞かされた。

レオニー子爵がラヴィス子爵の息子と共に来訪するのは、既に手紙で知っている。着替えもせずに応接間に向かったマザリーニが目にしたのは、ソファに腰掛けるレオニー子爵に、本棚の前をうろついている少年。そして予定外の来客、テーブルを囲んでいる二人の女性は、二人ともマザリーニにとって旧知の人間だった。

一人は、ラ・ヴァリエール公爵夫人のカリーヌ・デジレ。もう一人は、かつて魔法衛士隊の隊長代理を務めたこともある、現チクトンネ街区護民官の、ヴィヴィアン・ド・ジエーヴル。

「……お待たせして、申し訳ない」

マザリーニのその声で、本棚を眺めていたアクセルは振り返った。

年齢は、三十を少し過ぎた頃か。想像していたよりも、がっしりとした体付きのように見える。壮年、という言葉体を現したかのよくな雰囲気を持ち合わせており、必要以上の虚栄も卑下も無い。アクセルは、怜悯な戦国武将、という印象を持った。

「おお、お邪魔しております。マザリーニ枢機卿殿」

ソファから立ち上がったレオニー子爵は、大袈裟な身振りで挨拶すると、がっしりと握手を交わす。小柄な彼と並べば、より一層、マザリーニの長身が際立った。

「ようこそいらっしやいました、レオニー子爵。それで、そちらが？」

マザリーニは微笑を浮かべ、アクセルに目を向ける。その視線には何の敵意も感じられず、ただ幼い子どもに対する慈愛だけがあり、多少後ろめたさのようなものを覚えながらも、アクセルは礼儀正しくお辞儀をした。

「初めまして、マザリーニ枢機卿殿。ラヴィス子爵が第一子、アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィスと申します」

「これはご丁寧に。疲れているでしょう。狭い我が家ではありませんが、どうぞ、ご実家のようにおくつろぎ下さい」

「はい、ありがとうございます」

「いや、しかし驚きましたぞ」

そう言いながら溜息をつくレオニー子爵、彼の視線の先には、優雅に紅茶のカップを持ち上げるカーリヌ・デジレがいた。カップの取っ手に絡みつく、白くほっそりとした指には、妖艶なそれとはまた違った種の色気がある。

「武名の誉れ高き烈風カリン殿が実は女性で、しかも今では、ラ・ヴァリエール公爵夫人であらせられたとは……」

「レオニー子爵殿」

カリー又は顔を動かさず、横目でレオニー子爵を捕らえた。その視線はさながらマジックアローのように、彼の心臓を射抜く。レオニー子爵の背中に、冷や汗が滲み出た。

「それを明かしたのは、ヴィヴィアン殿の命を救って頂いたことへの礼儀です。サイレントすら使わずにそのようなことを仰るのは、些か軽率に過ぎるではありませんか」

語調こそ静かではあったが、短刀の刃を首筋に這わせているかのような、静かな迫力があつた。いや、殺気とすら言える。軽率である、というのは、烈風カリンの正体が知られるということに対してではなく、それを知ったレオニー子爵に、命の危険があるということを示しての言葉だった。

トリストインの伝説を前にして、先ほど襲撃された時以上の恐怖を感じるレオニー子爵を救ったのは、呆れたようなマザリーニの手拍子だった。カリーヌの視線が、今度はマザリーニに移る。

「ラ・ヴァリエール公爵夫人。我が家での荒事は勘弁願えませんか」

「……わかっています」

カリーヌは目を閉じ、持ち上げたままだったカップに唇を触れさせた。彼女とて本気ではなく、脅しというよりも注意のようなものだ。もつとも、彼女にとってはそうでも、された方はたまつたものではない。

「……失礼致します。少々、疲れまして……」

安堵の吐息を漏らすと、レオニー子爵はこれ以上の墓穴を掘らないよう、そそくさと応接間を後にした。

マザリーニは続いて、アクセルに目を向ける。すると、それまで黙っていたヴィヴィアンが口を開いた。

「マザリーニ枢機卿。私は、その子とレオニー子爵に命を救われました」

「ほう、左様ですか」

「賊に受けた傷を二度も癒してくれて、更には自らの命を賭して守ってくれたのです」

「それはそれは……」

マザリーニは片膝を付き、アクセルの肩に手を置いた。

「ヴィヴィアン殿を救って下さり、このマザリーニ、感謝のしよ  
うもありませんぞ」

力強い手だった。

「いえ、そんな……。それにあの矢傷は、僕の失敗でしたし……」

「そんなことはありません。未だお若いのに、その覚悟、知恵、魔法。どれを取っても、正しく一級品。私も見習うべきですね」

お世辞も入っているのだろうが、傍らから褒めちぎってくるヴィヴィアンに、アクセルは頭をかく。公示人に化けるといふアイディアも失敗し、結局は通りがかりの烈風カリンに助けられたのだが、考えてみれば、最後まで逃げなかったことは賞賛できた。しかし、もしもヴィヴィアンがマザリーニの敵だった場合、彼女を裏切ってマザリーニに引き渡そうとも考えていたので、やはり後ろめたい。

「では、今夜はこの小さな英雄のために、ささやかながら歓迎の晩餐といきましょう。アクセル殿、お疲れでしょう。どうぞ、それ



までごゆっくりと。メイドに案内させます」

マザリーニは小さな銀製のベルを鳴らし、メイドを呼びつける。どうやら、自分がここにいると都合が悪いようだ。敏感に察したアケセルは、素直にそれに従い、応接間を後にした。

少年が退室した直後、カリーヌは杖を抜くと、サイレントの魔法を使った。その時ヴィヴィアンは、ちらりとマザリーニの方に視線を向けたが、彼は首を左右に振って否定する。ヴィヴィアンが襲われた理由について、カリーヌにも黙っていた方がいいと、マザリーニはそう判断した。

「さて。これで一安心」

二人の視線での会話に気付かないカリーヌは、杖を太腿の上に置く。

「聞かせて頂きましょうか。ヴィーヴィー殿が何故、命を狙われたのか」

マザリーニとヴィヴィアンの予想通り、カリーヌは関わる気満々だ。それでこそカリーヌなのだが、今、彼女に関わらせるのは色々と都合が悪かった。

「……………。聞いてどうなさるおつもりだ？ また烈風カリンとして、杖を振るわれるおつもりですか？」

「場合によっては」

「お止め下さい」

マザリーニは溜息混じりに首を振る。その仕草が癢に障ったのか、カリーヌの視線が鋭さを増した。それに気付くマザリーニだったが、

反対に、穏やかな口調で語る。

「たかが蝋燭の火を消すのに、烈風は必要ありません。かえって燭台を倒し、無闇に火を広げてしまう恐れもあります。どうか、ご安心を。幸いなことに、烈風を求める程の大火事は起きていませんので」

「蝋燭だと侮っている内に、身動きが取れない程囲まれることもあるでしょう。今回はたまたま私が通りかかったから良かったものの、そうでなければ、ヴィーヴィー殿とこうして紅茶を飲むこともありませんでした」

そう、今回ヴィーヴィアンが命を拾ったのは、偶然の重なりである。もしもあのまま誰にも気付かれずに路地裏にいれば、いずれ発見されて止めを刺されていただろうし、アクセル達が時間を稼いだからこそ、カリリーヌの偶然に間に合った。

(さて……。どう言って丸め込もうか)

マザリーニが口を開こうとした時、かちゃりと、音が鳴った。叩き付けるのではなく、その場の注意を自らに向けさせる為の音。カリリーヌもマザリーニも、揃ってヴィーヴィアンの方を向いた。

「カリン」

若干、トゲを含ませた声だった。

「つまりお前はこう言いたいのだろう。私程度の力では、みすみす殺されるのがオチだと」

その声に、カリリーヌはイヤでも昔を思い出さざるを得ない。かつ

て、彼女の指揮の下で戦っていた自分を。

「それはつまり……このヴィヴィアン・ド・ジューヴルを、己の身すら守れない、か弱い女として見ていると……そういうことだな」  
「いえ……それは……」

道理がどうこうではない。絶対服従の対象である上官が一つだと  
言えば、ハルケギニアの月ですら一つとなる。

伝説の軍人、烈風カリン。彼女は規律を重んじるが故に、自らも  
その規律に従うしかない。それが長所であり、短所であった。

「……ふざけるなあっ!!」

鉄槌の如く振り下ろされたヴィヴィアンの拳が、カップと皿を粉  
々に砕いた。カリーヌがそれにビクリと身体を震わせたのは、相手  
がヴィヴィアンだからである。

応接間に、沈黙が横たわる。鉄槌を振り下ろしたまま、そして一  
言叫んだままだったヴィヴィアンは、やがて荒々しく立ち上がると、  
ズカズカと窓の前まで移動する。そのまま腕を組み、カリーヌ達に  
背を向けた。

ヴィヴィアンは、拗ねていた。幼子のように。童子のように。そ  
れもまた、道理などではなく、純粹な感情からくる行動。ヒステリ  
ーなどと同じく、思わず取ってしまう行動。そしてそんな純粹な行  
動だからこそ、説得する言葉などなく、時間経過しか解決策は残っ  
ていないのだ。

どうしようかと迷っているカリーヌの耳元で、マザリーニがそっ  
と囁く。

「あの、カリーヌ殿。どうか、この話はまた改めて、ということ

に。私も今回の一件で、敵の本質を大分見ることが出来ました。もう、ヴィヴィアン殿の命を危険にさらすような真似は致しません。ですので、その、どうか……今日のところは……」

相手が格下であれば、カーリーもお構いなしに、無理矢理にでも追求するだろう。しかし、彼女は自分自身よりも、ヴィヴィアンを一段高い場所に据えている。強引に出られる筈もなく、彼女はそつと立ち上がると、ヴィヴィアンの背に別れを告げた。

「……………カーリン」

ヴィヴィアンは背を向けたまま、退室しようとするカーリーヌの背に声を掛ける。

「トリスタニアには、どのくらい滞在する予定？」

「一週間ほど、でしょうか……………」

「そう」

それきり、彼女は再び無言。もしもの時には、ちゃんと自分を頼ってくれるのではと、カーリーヌはそう解釈することにした。

カーリーヌが退室し、応接間にはマザリーニとヴィヴィアンの二人が残される。マザリーニが溜息をつきながらソファに腰を下ろすと、ヴィヴィアンも振り返り、彼の傍に近づいた。

「……………ありがとうございます。彼女を説得するのは、些か骨が折れますので」

「いいえ」

ヴィヴィアンは軽く微笑みを浮かべながら、マザリーニの隣に腰掛ける。マザリーニは背を曲げ、足の上で頬杖を付いた。更に組ん

だ両手を、口元を隠すようにくつつける。  
ヴィヴィアンは軽く眼鏡を押し上げた。

「少々、カリィヌ……彼女に悪い気もしますが」

「仕方ないでしょう。彼女は公爵とは違い、政争などには向きませんから。……しかし、まさかポーフォール伯爵が……ここまでするとは。申し訳ありません、ヴィヴィアン殿。完全に私の読み違いです」

「仰らないで下さい」

深々と頭を下げるマザリーニに、ヴィヴィアンは急いで首を振る。

「原因は、私の油断ですから。……しかし、ポーフォール伯爵は既に老齡。巷では清貧の名が高く、高潔な人物とされているのに、何故……」

「老齡だから、ということも考えられます。老いた者がかかる病とでも言いましょうか。彼には跡継ぎとなる子どもはなく、妻もない。何も無いのです。そして、何もないことに気付いてしまった。残された時間は残り僅か。生きた証を、何とかこの世に残したい……」

「その為に、私を？」

「ええ。今、チクトンネの護民官である貴女が亡くなれば、恐らく前任のポーフォール伯が就くことになるでしょう」

「……。例えば……」

ヴィヴィアンは再び眼鏡を押し上げた。こちらを向いたマザリーニに、その青い瞳の視線を重ね、軽く首を傾げる。

「私が怖じ気づいた振りをして、護民官の職を辞任すれば……」

「ポーフォール伯爵の目的は果たされ、もう貴女を害そうなどと

はしなくなるでしょうな」

マザリーニも、ヴィヴィアンが己の保身の為だけにその案を出したわけではないことは、十二分に理解している。ポーフォール伯爵は老齢であり、下手に争うよりは一時の権力を与えてやる方が……という考えは、ある意味人道的な情けであるとも言えた。

それが手っ取り早い解決策であるとは認めても、マザリーニはその提案を却下した。

「それも、成功しないでしょうな」

「何故です？ 私の名誉の為とでも？」

「いいえ。この問題の厄介な所は、ポーフォール伯爵に確たる目的が無いところなのです。ただ漠然と、何かを成したいと思っただけで。チクトンネ護民官が一番手に入りやすそうだが、という理由だけで、貴女を狙ったのです。確かに貴女が辞職すれば、ポーフォール伯爵の目的は果たされたことになります。しかしまた、すぐに次の行動に移るでしょう。ただ、漠然とした欲望を満たそうとして」

「……………」

「失礼である事は承知の上で言います。貴女には、囹圄であつて欲しい。貴女を護民官の座から引きずり下ろす、という目標に集中している内は、ポーフォール伯は他の事には目を向けないでしょうから」

「……………酷い男」

先ほどのカリーヌに対する演技とは違い、ヴィヴィアンは本気で拗ねた。ほんの一瞬、二十歳前の小娘の声であつたような気がして、マザリーニは思わず目を丸くすると、隣の彼女を見る。言葉とは裏腹に、ヴィヴィアンはどこか楽しげに笑っていた。

マザリーニは一つ咳払いをすると、再び思索の姿勢に戻る。

「……ですが、それもあまり長く続けば、諦めて他の行動に出るでしょう。時間が無いということは、伯爵自身が一番理解している筈ですから」

今、マザリーニが恐れているのは、ボーフォール伯爵が狂人の如き破れかぶれの暴挙に出ることである。それは大乱の元となるやも知れず、また他国につけ込む隙を与えることにもなりかねない。

トリスタニアが抱える爆弾の一つをどう処理するのか、それがマザリーニの急務である。

彼は溜息をつくと、ピンと人差し指を立てた。

「……早々に、退場願いたいものだ……」

トリスタニアの表舞台から、そしてこの世から、である。

「私が選びましょうか？」

朽ちた要人を排除する裏方には、ヴィヴィアンも若干心当たりがある。しかし、マザリーニは静かに首を振った。

「今、ボーフォール伯爵は“疾風怒濤”を抱えています。生半可な者では、逆に貴女が危ない。……さて、どうするか」

そう呟いたきり、マザリーニは目を閉じる。本格的に思索に入る構えだ。

しかし数秒後、彼は

「ひえやつ!?!」

という奇妙な声と共に、バネ仕掛けの人形のように立ち上がった。両手を背中に回し、ぴよんぴよんと飛び跳ねながら、衣服を乱す。背中から追い出された数個の氷が、音もなく絨毯の上に転がった。

「な……何を……!？」

犯人は言うまでもなく、片手で杖を弄びながら、クスクスと笑っているヴィヴィアン。初対面の頃は、マザリーニも彼女を真面目な女性と思っていたのだが、意外に悪戯好きなのだ。今のように、思案中に背中に氷を突っ込まれる事も、過去何度があった。

「ゲストをほったらかしにするホストがどこに？ ああ、ここにいましたね」

「……………」

マザリーニは恨めしそうな顔でヴィヴィアンを睨むが、勿論、彼女は動じない。彼は衣服を整えると、改めて、ソファの上に座り直した。警戒しているらしく、腰を据ってヴィヴィアンを真正面から見る。

「それにしても、彼の治癒は見事でした。トライアングルにも引けを取りませんよ。あのような将来有望な水メイジがいるとは、我が国もまだまだ安泰でしょうね」

「ああ、アクセル殿か。彼は風のラインですよ」

「え？」

聞き間違いであると半ば断じて、ヴィヴィアンは聞き返した。しかしすぐに、その考えを否定する。

「マザリーニ枢機卿。確か貴方は、あの子とは初対面では……………」



「ええ、初対面です。ですが、ラヴィス子爵の息子となれば、その程度の情報は集めております。何ヶ月か前、ラヴィス子爵から領地の代官に任命された、九歳のラインメイジ。……それほどまでに貴女が賞賛するのならば、風と水の両方に、高い相性を持つメイジなのでしょう」

いつしかマザリーニの視線は、虚無となっていた。どこを見ているわけでもなく、ただ、眼球が開かれているだけ。その眼球から送られてくる情報は、脳内で至極どうでもいい情報として仕分けされ、うちやられた。彼は今、自らの思考の内側に入り込んでいた。

九歳でラインクラスというのは、確かに才能の発露と言える。しかし、ラヴィス子爵は息子のその才能を素直に喜ぶだろうか。マザリーニは、子爵は喜ばないだろうという結論に達した。現在のラヴィス子爵に、そんな才能は寧ろ不都合な場合が多いのだ。

確かに、子どもの成長を喜ばない親などいない。ラヴィス子爵も、自らの一人息子であるアクセルに、魔法の力を磨くななどとは言えないだろう。

(……だから、か?)

勉強のため、領地持ちの貴族がその子弟を代官に任ずるのは、それほど珍しいことでは無かった。もっとも大抵の貴族はラヴィス子爵と違い、代官に任せきりなどせず、自身が後ろから監督する。

ラヴィス子爵は、息子に代官として失敗して貰いたがっている……あまりにも穿ちすぎた予想だが、マザリーニはそれを笑い飛ばせなかった。

「……もう一度、いつときましようか」  
「のあつひゃあつ!?!?」

いつの間にか背後に回っていたヴィヴィアンにより、マザリーニはまた飛び跳ねる羽目になった。

応接間を後にしたカーリー又は、ふうと溜息をつくとき、そのままマザリーニ邸の玄関へと向かった。ヴィヴィアンを狙う者については放っておくことも出来ないが、とにかく今は大人しく引き下がる方がいい。ヴィヴィアンは決して無茶をするような性格では無く、またマザリーニも、責任感の強い男だ。あの二人がはっきりと警戒する以上、そうそう不幸な未来も起こり得ないだろう。

考えてみれば、ヴィヴィアンの怒りも尤もなのだ、カーリー又はそう省みた。かつてはどうであれ、今のカーリー又はラ・ヴァリエール公爵夫人。余計な首を突っ込む筋合いは無い。

しかし、もしもヴィヴィアンが殺されるような事があれば、その時は思うままに烈風で薙ぎ倒す……と、既に結論は出ていた。

勝手知った邸宅の中、案内も無用とばかりに颯爽と扉を開けた時、一陣の風が吹いた。カーリー又は桃色の髪が、風に梳かれてふわりと広がる。軽く髪を整えようとした彼女は、風が運ぶ、小鳥の囀りを聞いた。

「……………？」

そしてすぐに、それが囀りではなく、笛の音色であることに気付く。

扉を閉めたカリー又は、そつと石畳を下り、音色の源である裏庭に向かった。普通なら、無視する。それをしなかったのは、普通では無かったから。

花々が作る道を超えて、裏庭に回ってみると、その正体が明らかとなる。小さな人工池の傍の岩に腰掛け、白銅のフルートを奏でる一人の少年がいた。その正面の岩には、先ほどその少年の案内を仰せつかったメイドが腰掛け、目を閉じたまま音色に聞き入っていた。カリー又は傍らの、幻獣を模した石灯籠に寄り添うように立ち、その光景を眺める。

やがて演奏が終わり、アクセルはフルートから唇を離れた。

「素晴らしい音色ですね」

カリー又が進み出たのは、その時だった。慌てて立ち上がるメイドに釣られ、アクセルもフルートを手に腰を浮かせる。

アクセルはそつと、心の中で苦笑いをした。

先ほど彼女の、高純度の魔法を見せられたせい、どうも畏怖を拭いきれない。風の精神力が爆薬であるとすれば、それを薄める無属性の精神力は、導火線や制御装置の役割を果たす。勿論、純度が高ければ高いほど、単純に威力は上がるのだが、コントロールする余地が無くなる。通常の魔法の行使が補助輪付きだとすれば、このカリー又は手放し運転が可能なのだ。

そして、アクセルのようにそれを視認によってではなく、茫漠たる感覚として会得している彼女は、やはり並外れた才能の持ち主と言えた。

「いえ……母に言わせれば、まだまださうで」

アクセルは愛想笑いでカリーヌを迎える。その彼女が、仕事をサボっているメイドに尋問、又は精神的な拷問紛いの詰問を行う前に、少年は急いで口を開いた。

「ありがとう、長々と聞いてもらって。どうだった？」

カリーヌの静かな気迫に怯えていたメイドは、助け船を得たとばかりに、アクセルに向き直る。

「あ、あの、その……とても、気持ちのいい音色でした」

「そう。良かった」

アクセルは目を閉じ、笑った。

「ごめんね、引き留めて。戻っていいよ」

「は、はい。失礼します」

アクセルと、そしてカリーヌに直角のお辞儀を行い、メイドは早足で逃げ去った。

カリーヌは、先ほどメイドが腰掛けていた岩に座る。アクセルはヒヤリとしたが、平静を装ってフルートを撫でる。

「……美しく、そして不思議な音色でしたね」

「音楽療法です」

「……？」

「あのメイドは、どうやら疲労が溜まっていたようで。ほんの気休め程度ですが、音楽には、人を癒す効果がありますから」

音色に自らの精神力を込め、風に乗せ、対象の体調に作用させる。娼婦達の生理痛を少しでも軽減させるために、アクセルが確立しよ

うとしていた発展途上の技術。出来れば、一つの学問の体系として作り上げたいと考えていた。

しかし、それもまた、結局は自分一人でしか使えないものなのかも知れない。効果が出るのは、自分が大切だと思っているもの、好意的に見ているものに対してだけという、ある意味現金な技術だった。

だが、音楽が人に及ぼす影響は古来から言われており、誰かを想って調べを紡ぐのは……俗に言う、心を込めての演奏は、決して無意味なものではないだろう。精神力を操るメイジであれば、尚更に。

カーリー又は再び、口を開いた。

「治療が、お得意で？」

「あはは……。実はよく怪我をするので、その度に自分で治していたら、自然と……」

「怪我ではなく、病気を治療したことは？」

その質問に、アクセルは驚く。

今、カーリー又の脳裏に浮かんでいるのは、次女カトレアの顔なのだろう。

（まさか……そこまで切羽詰まっていると？）

初対面の九歳児にすら……ほんの僅かであるとはいえ、望みを繋いでしまうのかと、アクセルは愕然とする。

そもそも病気の治療は、怪我の治療よりも難しい。アクセルも、イシユタルの館直属の水メイジから少々話を聞いただけで、その勉強は始めていない。カトレアを治療することは、確かに大きな利益をもたらすことにはなるが、未だその時期では無いのだ。

咄嗟にアクセルの口から出た言葉は、否定だった。

「病気……ですか。それはまだ無いですね。そもそも、僕の属性は風ですし……水メイジのようにはいきませんよ」

考えてみれば、ラ・ヴァリエール公爵は水のスクウェアクラス。医者ではなく軍人だとしても、治癒に深い関わりを持つ水属性を極めた存在。その彼がどうにも出来なかった病気に……更に言えば、原作でも治っていなかったあれに、一体誰が手を出せるというのか。

「そうですか……」

カリーヌの顔色が、僅かに曇った。やはり、カトレアの治療は難航しているらしい。彼女の表情に、些か罪悪感のようなものを感じながらも、アクセルは無言だった。声を掛けるべきか決めかねている間に、カリーヌはそっと立ち上がる。

「それでは、失礼します。またお会いしましょう、アクセルさん」  
「あ……は、はい、わかりました。お気を付けて、ラ・ヴァリエール夫人」

出来ることなら、あまり会いたくないのが本音だった。そう考えると、王都に来て早々、自分は失敗してしまったのかも知れないと、アクセルは俯く。

見ず知らずの女性を、命を賭して助ける勇気……それをカリーヌが評価し、アクセルを勇者と見なし、記憶に留めれば……。

(巻き込まれるかも……)

カリーヌの末の娘にして、原作主人公のルイズのピンチがあれば、

アクセルも引つ張り出されることになるかも知れない。

(参ったなあ……)

銀色に輝くフルートを肩に乗せ、大きく、深々と溜息をついた。

しかし……と思い直す。それは所詮は、未来のこと。まだまだ先のこと。

今、足を踏み外してしまえば、その未来すら無くなる。未来を恐れることすら出来なくなる。

(結局、今の一步が大事ってことか)

岩から腰を上げ、背を反らして大きく伸びをする。黄昏色の夕日に顔を顰め、軽く息を吐き出すと、無理矢理に気持ちを入れ替えた。

(隙を見て……応接間に仕掛けた“アレ”、回収しないとな)

アクセルの表情が、黄昏の中に沈んだ。

## 第二十六話<邂逅8>

応接間の本棚に並ぶ、数々の本。子ども向けの童話から、教養本、歴史書、辞典まで、様々な種類のそれらが、規則正しい姿で眠りについていた。応接間であることを考え併せると、客人用のものであるのかも知れない。

書物だけでは無い。魔法の蓄音機もあった。きちんと本棚の中に寸法を採られ、ぴったりと納まっている。

その傍らに、貝殻が置かれていた。大人の掌に収まるほどの、巻き貝の殻。飾られている食器や小物類に紛れて、ひっそりと、目立たぬように。持ち上げると、ちゃぽんと内部の水が揺れる音がする。

「……………」

アクセルはそっと、その腔の出口に、波の声を聞くかのように耳を押し当てた。すると貝殻の表面をさすり、やがて微かに聞こえてきた話し声に集中する。

内部の水は周囲の音を記録し、保存する。魔法の蓄音機に使用されている技術の応用だが、勿論それほど性能が高いわけではなく、壊れかけのラジオのようにポツポツと雑音が軋む。

「……………ボーフォール伯爵か」

アクセルは貝殻を離すと、それをポケットに仕舞い、ぽつりと呟いた。その名を忘れぬよう、心に留める。



背後で、ドアが開く音がした。

「あ……こちらでしたか、アクセル様。失礼致しました」

昼間、部屋を案内してくれたメイドだった。深々と頭を下げる彼女の動きは、あの時よりも元気そうに見える。

「お食事の用意が出来ました。ダイニングルームまでご案内致します」

「うん、ありがとう」

まるでそれまでの表情を塗り潰すかのように、アクセルはにっこり笑って見せた。

足跡のない雪原のように新品の、真っ白なテーブルクロスが広げられ、料理を乗せた銀食器が並んでいた。マザリーニ、ヴィヴィアン、レオニー子爵、そしてアクセルの四人がダイニングに揃うと、晚餐が始まる。枢機卿の食卓だからだろうか、常の貴族の晚餐よりも肉は少なく、代わりに穀物や野菜が多い。

マザリーニが始祖ブリミルへの感謝の祈りを捧げ、晚餐が始まった。

「……………れすかられえ」

そして三十分後には、レオニー子爵の舌が回らなくなる。

昼間、命を拾った感動がまだ続いているのか、がばがばとワインを呷り、たちまちにして顔を赤くした。レオニー子爵と晚餐を共にした経験のあるアクセルだが、その時は恐らく、子ども前なので酒を控えていたのだろう。どうやら元々酒に強くは無いらしく、ワインを一杯飲み干す前に酔っ払ってしまったことにも驚いたが、そこからが長かった。据わった目で、給仕にワインを注がせる。

既に酔ったレオニー子爵を何度も見ているマザリーニは、平然と彼の相手をしていた。

「あれはれえ、ころ子らんれふよお……」

先ほどからずっと、蓄音機のように延々と同じことを喋っており、そして繰り返すたびに言語が理解不能なものへと変貌している。

しかし、話題は全く変わらず。鉄道のアイディアは、本当はアクセルのものだった、ということである。

(いつもなら、止めてくれて叫びたくなるけど……)

この時ばかりはアクセルは、自分を宣伝する存在に感謝していた。まず、マザリーニに興味を持って貰わなければ、何も始まらない。彼の中での自分を、もっともっと、興味深い存在へと押し上げねばならない。

しかし、面映ゆかった。普段、貴族としては決して全力など出さず、お飾りとして見られることに努め、コケかシダのようにひっそりとしていた己に、突然スポットライトが浴びせられたような気分だ。

更には、マザリーニもヴィヴィアンも、ちゃんとアクセルを褒めるのである。

(褒められるって、こんなむず痒いものだったっけ)

体中を搔きむしりたくなるような、しかし不愉快ではない気分。類が紅潮するのを感じるアクセルだったが、その顔色はマザリーニとヴィヴィアンの目には、幼子の微笑ましい光景として映っていた。

そしてついにレオニー子爵が酔い潰れ、使用人達の手を借りて寝室に向かった。

(……まだか……)

アクセルが望むのは、マザリーニとの一対一の密談。この場には給仕もあり、未だ腹を割った話など出来ないのは勿論のだが、それ以上に気がかりなのは、ヴィヴィアンの存在だった。彼女が果たして信用できる人物なのか、その判断が出来ない以上、密事を漏らすわけにはいかない。

もたついている内に、晚餐は終わってしまった。

そしてその頃には、焦りを覚えていたアクセルは、ある決断を下していた。

その二人には、足音が無かった。衣擦れの音も無かった。いや、無いというよりは、その音を周囲の人間が知覚することは無かった。

勿論、物音は隠せても、その姿形を隠すことは出来ず、彼等二人の方向へと目を向ければ、皆がその姿を認める。

しかし、既に日も暮れ暗闇が蔓延る中、月明かりに照らされるその姿は、ひどく曖昧なものだった。

二人は、忙しくそこかしこの通りを駆け回る衛士達にも、こそと裏通りを渡る間男にも悟られることは無く、進んでいく。

「あ？」

二人の内、背の高い男は首を右に捻りながら、声を漏らした。サイレントの魔法によって、その声は周囲に漏れることは無いが、前を歩く男の耳には届く。灰色の髪の男は、不可解な声を漏らした連れを振り向こうとしたが、やはり止めたらしく、その代わりに口を開いた。

「どうした」

「いや、今、そこを何か……子ども？」

「こんな夜更けにか？」

「ああ、うん。やっぱり見間違いかも。大きい猫か何かかな」

「猫……ねえ……」

灰色髪の男は、わざと聞こえるような大ききさで、鼻で嗤った。背後の大男は、少しムツとしたようで、ぼつてりとした唇をへの字に固める。その表情を知ってか知らずか、灰色髪の男は更に重ねた。

「怖じ気づいたんなら、帰って寝てる」

「……いや……けどな、ハンスの兄貴。もし、“烈風カリン”を相手にすることになったら……」

「それは無いだろう。烈風カリンに直接会ったことは無いが、集めた情報によれば、こんな政争には向かない人間だ。マザリーニもヴィヴィアン・ド・ジエーヴルも、好んであんな爆弾を使おうとは思うまい」

「でもよお、万が一ってことも……」

「俺はそれでも構わん」

前を歩くハンスの言葉に、後ろを歩くマルセルは、ああ、ついにこの兄貴は自信過剰が過ぎて、取り返しの付かない脳味噌になってしまったのだと絶望する。

「俺は疾風、ヤツは烈風。どちらが勝とうが、風の勝利は揺るがない」

ハンスは得意げにそう言った。マルセルも、どちらにしる風の負け、などと反論してしまう程、命を軽んじてもいなければ空気が読めないわけでもないのです、結局はそれきり口を閉ざす。

「おお、今度は本当に猫だな」

ハンスがそう言った通り、黒猫が目の前を横切った。

二人はやがて、モンシャラン街のマザリーニ邸へと至る。

ブリミル教の枢機卿に、正面切って喧嘩を売るような愚か者はおらず、警備もひどく脆弱だった。ハンスとマルセルは軽く壁を越えると、庭を突っ切り、アンロックで扉を開け、さながら帰宅のよう

な穏便さで侵入を終える。

マルセルは二階へと向かい、ハンスはそのまま一階を進んだ。

途中で遭遇した使用人が、二人。

しかしその二人とも、自分が何と出会ったのか、何をされたのかという疑問すら持つ間も無く、静かにその場に倒れ伏し、寝息を立てる。

最後に、一人、メイドがいた。赤子を抱くようにワインを抱え、廊下を歩いていく。その背中を見守るハンスに、彼女は気付かない。客人の為、応接間までワインを運ぶように命じられたメイドだった。

「ご主人様、ワインをお持ち致しました」

「ああ、入りなさい」

ドアの外で許可を貰い、彼女は華奢な指先をノブに這わせ、慎重に回す。客人の前で、ワインをうっかり落としでもしてしまうことが、どれ程の失態なのかよく理解していた。

しかし、ドアを開け、応接間の光が漏れ出したところで、彼女があれほど大事に抱えていたワインは、するりと抜け出す。自分の手から、何者かによってワインが抜き取られた事を悟ると同時に、メイドは強烈な睡魔に抗えず、その場に膝をついた。

「やあ………こんばんは」

ワインの瓶を片手で回し、それを肩に預けながら、ハンスはメイドの務めを引き継ぐかのように、応接間の中へと滑り込む。

中にいたのは、ソファに腰を下ろしているマザリーニ枢機卿と、

その傍らに立つヴィヴィアンの二人。

闖入者による彼等の動揺は、ともすれば見逃してしまいそうな程に微かだったが、ハンスの目には十分なそれだった。

「抜いてもいいぞ。無駄だがな」

真つ先に動いたのは、ヴィヴィアンだった。腰から愛用の杖を引き抜き、ハンスへと向ける。しかし、突如として風が暴れ、彼女の右肘を強かに打った。

「ッ……！？」

腕があらぬ方向へと向き、無理な動きを強制された関節が声のない悲鳴を上げる。その痛みを堪え、再びハンスへと杖を向けようとする彼女の動きは、マザリーニの主観でもあまりに隙だらけだった。“疾風”の二つ名は、彼の風の魔法を表すものでもあるが、本来は、相手より初動が遅れながら、それでも行動を追い抜くことが出来る迅業を指していた。

ヴィヴィアンの右腕を封じたハンスは、間髪入れず、二発目のウインドブレイクを放つ。

「っっ」

くぐもった呻き声と共に、ヴィヴィアンの足は床から離れ、その身体は背後の白柱に叩き付けられた。

「さて、こんばんは」

ヴィヴィアンが失神してしまえば、マザリーニがこの場で出来ることなど無い。

ハンスは軽く手を振り、マザリーニにソファに腰掛けるよう促すと、自らも向かいのソファの手摺りに尻を寄せ、左手のワインをテーブルの上に置いた。

「初めまして、だ。マザリーニ枢機卿殿」

「……“疾風怒濤”か」

「その通り。俺たちを用心棒だと勘違いしている奴らも多いようだが、生憎と、守るのは苦手だな。こっやって攻めるしか能が無い」

烈風カリンが出現したという情報は、十二分に相手への牽制になると、そう判断していたマザリーニにとって、全く予想外の事態だった。一度は失敗したその日の夜に、再び、しかも枢機卿の邸宅に攻め込むなど、まともな考え方をする者であればあり得ない。

(いや……しかし……どういうことだ?)

失敗したという事実は、既に過去のものである。マザリーニは、勝手にワインの中身を呷り始めたハンスから目を離さないまま、その思考を巡らせた。

そもそもが、おかしい。

ポーフォール伯爵の狙いが護民官の地位ならば、例えばヴィヴィアンが不慮の事故で亡くなるか、職務を続けられる状態に無くなれば、自然とその後釜として転がり込んでくるだろう。その為に伯爵の手下は、昼間ヴィヴィアンの暗殺を謀ったのだ。しかし、ヴィヴィアンがこうして失神している今、何故ハンスは彼女を殺そうとしないのか。マザリーニが見ているからだというのならば、それこそ本末転倒、初めからこの屋敷に攻め込んだりしない。

「兄貴、こっちは終わったぜ」



開け放たれたままの扉から、長身の男が入ってきた。それほど筋肉質でも無いが、服の上からでも分かる、適度に引き締まった身体は、荒削りの木像を連想させる。

「ああ、ご苦労」

ハンスは振り向かずにと、そのまま後ろ手に、ワインの瓶を差し出した。マルセルは右手で受け取り、二口ほど中身を飲み込むと、それを傍らのブリミル像の足元に置く。

「使用人の他には、おっさん一人。レオニー子爵だな」  
「待て」

報告を受けたハンスは、ぐいと腰を捻り、背後を振り向いた。それが隙ではないことは、マザリーニも理解している。

「もう一人、ガキがいただろう」

「いや？ 一通り探したけど、他には猫の子一匹いなかったぜ。多分、帰ったんじゃないの？」

「そうは思えん。……客室の準備は？ 食事の形跡は？」

「おお、成る程」

「それすら確認していないのか」

「けど、たかがガキ一匹だけ？」

「お前よりは利口だ」

ハンスは身体を戻し、再びマザリーニと向き合った。その直後、マザリーニは口を開く。

「ボーフォール伯爵の狙いは何だ？」

具体的な名を出しての、問い。

「ん、そうか。聞きたいなら、教えてやってもいいぞ」

ハンスのその言葉によって、マザリーニは覚悟を決めた。

顔も隠さず、ボーフォール伯爵との繋がりも否定しない。それはつまり、マザリーニもヴィヴィアンも、二人とも殺される予定であることを示す。それが分かれば、次の、何故今は生かされているのか、という疑問に移れる。

ハンスはソファにきちんと腰を下ろし、頬杖を突くと、右手の杖をくるくると弄び始めた。マザリーニは腰を曲げ、身を乗り出すようにして話を聞く姿勢を取る。マルセルは一人、気絶したままのヴィヴィアンを後ろ手に、腰に束ねていた縄で巻く。

「清貧伯……俗界の聖者……そう呼ばれた者が、得難いその名を捨てる時は、実を取る時だ。伯爵が求める実とは、チクトンネ街、フォツソワイヤール街、モンシヤラン街……王都トリスタニアの下流、中流、上流を代表する三区画。その全ての護民官となること」

「まるで、フロワサル伯だな」

「その通り。三つの区画の護民官を兼任するなんて離れ業をやったのけたのは、伝説の貴族、フロワサル八臂伯ただ一人。下らねえだろ？ 俺だってそう思う。けどな、あの伯爵は、本気で、八臂伯の再来になりたいと思ってるやがる」

「出来る筈も無いだろう。あの当時は、有能な人間は粗方戦争にかり出されていて、極端に人材が枯渇していた。だからこそ、フロワサル伯は三十代の若さで、三席の護民官を兼ねることが出来たのだ。有能な人材がきら星の如く、とまではいかずとも、現在の王都は、そこまで人材が不足してはいない」

マザリーニは真つ向から否定した。命が惜しくないわけでも無く、生き延びることを諦めたわけでも無いが、今はただ、好奇心が勝っていた。

「まあ、そりゃそうだな。お役に就けずに喘いでいる貧乏貴族も、山ほどいることだし」

ハンスは両肘を広げ、背中を一層クッションに沈めると、見下ろすような視線をマザリーニに向ける。

「……けどな、さっきも言ったが、うちの伯爵は本気だ。本気つてのは、命を賭けてるってことだ。命を賭けてるってことはつまり、自分の全てをフルに活用して、持ってるものを洗いざらい、一点にBETするってことだ。知ってるか？ 酒の不作を理由に、酒の値段が上がり始めてる。ああ、勿論、未だ上がっちゃいねえ。しかし、布告は出された。ポーフォール伯爵は、人脈を総動員するぞ。酒の値段は、これから絶対上がる。それも、前代未聞の勢いでな。数少ない楽しみを奪われた民衆の不満は、一気に高まる。そうすると、どうなるよ。反乱が起きるか？ 泣き寝入りか？ それとも」

「闇の市場が立つな」

「その通り。酒だけじゃねえ、ポーフォール伯爵の力の及ぶ、あらゆるものの値が上がる。一度闇の市場が成立すれば、あとはもう、広く深く進化していく」

「そして経済が混乱し、状況が悪化すれば、護民官になりたがる人間もいなくなる。槍玉に上げられ、生け贄にされるのは目に見えているからな。そこで、ポーフォール伯爵が一気に全てを仕切り、事態を鎮圧し、名声を得る……と」

「当たり前だ」

「出来ると思っっているのか、そんなことが。都合良く」

「わかってねえなあ」

マザリーニの強い、叱責のような視線をせせら笑うかのよう  
に、ハンスは軽く口角を吊り上げ、灰色髪を根本から小指で梳いた。

「賭けなんだよ、結局は。孤独なじいさまの、人生最後の大勝負だ。俺だって、失敗するだろうとは思う。が、成功する可能性だって低くはねえ。何しろ老先短いんだ、よって怖いモノ無しだ」

綿密に計算された、勝率九割超えの完全な謀略ではなく、失敗する可能性も十分に孕んだ陰謀。しかしそれだけに、マザリーニはその厄介なギャンブルに臍をかむ思いだった。何しろボーフォール伯爵は、安全策を取っていない。負ければそれまでと、了解してしまっている。そんな相手に、しかもこの状況に至ってしまった今、どう対応すればいいのか。

清貧の名は、既にボーフォール伯爵の中で、何の意味も持たないただの言葉と化しているらしかった。

「あ、そつだ、兄貴」

「ん？」

マルセルが思い出したように声を上げ、ハンスは首を伸ばすような形で、マザリーニの向こうの弟分を見た。

「結局、あのガキは放つといていいの？」

「ああ、いいんだいいんだ。マザリーニさん、アンタも教えてくれなくていいぞ」

「……まあ、兄貴がそう言っんならいいけど。無害なんだから？」

「とんでもない」

「え？」

どう考えても聞き間違いだと、マルセルは己にそう言い聞かせる。しかし、ハンスの表情を見て、ああただと、ある種の諦念のようなものをどこかで抱えながら、顔を引きつらせた。

「あのガキは、猛毒だ。人間に突き立った矢を躊躇いなく引っこ抜くなんて、恐ろしい度胸してやがる。昼間の襲撃の時、例えヒロイックな自己陶醉にどっぷり漬かったことを差し引いても、あの冷静さは賞賛に値するぞ」

「じゃ、じゃあ追いかけないと」

「わざわざ追いかけてなくても、潜んでるんじゃないか？ この屋敷のどこかに……」

ハンスは顔を動かさなのまま、ちらりと視線を天井に向け、そこから左右にメトロノームか何かのように動かした。

怪談話を聞かされた後のようなマルセルは、急いで背後を振り向いたり、天井を見上げたりと、挙動不審のままオロオロと揺れている。その様子が滑稽だったのか、ハンスは一度下を向き、囁りのような笑い声を漏らした。

「暗殺くらい、軽くやってのけそうなガキだったなあ。枢機卿と護民官を抑えたくらいで安心してたら、後ろからグツサリやられるかもな」

「……俺もつ、帰りてえんだけど。帰って寝たいんだけど」

「いいじゃねえか。あのガキは風のメイジ。対する俺も風のメイジ。つまりはどっちが勝とうが、風の勝ちだ」

「……この仕事が無事に終わったら、もうコンビ解消しようぜ、兄貴」

虎は死して皮を残し、人は死して名を残す

有名な言葉である。そしてそれは、ボーフォール伯爵家の家訓の一つでもあった。

ボーフォール伯爵は、今年、ちょうど六十を迎えた老人だった。ガリア貴族だった曾祖父がトリステインに移ってから、長い年月が流れ、今ではトリステインでも屈指の貴族として知られ、護民官の他、財務官を務めたこともある。かつては妻も息子もいたが、二人とも相次いで病で亡くなり、それからは再婚することも無く、ずっと一人だった。縁談は勿論多く、ガリア王国からも申し出があったが、亡き妻を偲び、結婚指輪を二人分嵌めていた。

(……バカらしい)

ボーフォール伯爵は、テーブルの上の肉を素手で掴む。こんがり焼かれた鶏の足は、勿論油でベタベタだが、構わず口に寄せ、かぶりつく。白くなった髭が油にまみれ、蝋燭の灯りでテラテラと光っている。そのままガツガツと、山賊や荒くれがするように食いちぎり、肉が無くなれば、骨を啜った。

妻が亡くなってから喪に服し、後妻を受け入れなかったのは、思えば愚んでいたからでは無い。それが正しいと思っていたからだ。一人が寂しくなっても、その頃にはもう皆遠慮して、縁談を持ち込む者はいなかった。それからの三十年、性欲を持て余しても、世間

体を気にして娼館へ行く度胸も無く、ずっと一人で処理してきた。娼婦を呼ぶことも出来たが、その娼婦の口からあらぬ事を漏らされてはと、そればかり恐れていた。

(バカらしい)

しゃぶり終えたチキンの骨を、からんと、皿の上に投げ捨てる。パリパリに焼けていたあの香ばしい皮を懐かしむように、伯爵は掌を広げ、べつとりと塗られた油を舐め取った。

今までの自分では想像することすら罪悪に感じていた、下賤の民の食べ方。しかしそれが、今までの人生の中で間違いなく、最も美味な食事だった。手が汚れるのが、何だというのか。髯が汚れるのが、一体何だというのだ。手を汚さずにする食事に、一体、どれだけの価値があるというのだろうか。

性欲を隠した。食欲を律した。その二つの代替として、名誉を欲した。

孤児院への寄付、貧民への炊き出し……身分を隠して街へと出、ボーフォール伯爵への賞賛、感謝を盗み聞き、密かに微笑んだ。

貴族に対しても、金に困っていれば二つ返事で貸してやった。金を貸した者と借りた者、その立場の違いを肌で感じ、そして自分がその上位に立つのだと実感した時、大声で快哉を叫びたくなる衝動に襲われた。

(それで、何を得た?)

隠居し、年金暮らしになった時、不幸な事にふと、ボーフォール伯爵は振り返ってしまった。家督を継いでから今までの、自らの足

跡を。

人は死して名を残す……。このまま死ねば、どんな名が残るか。弱き民を救けた聖人？ 財に固執せず、バラ撒くように貸し与えた清貧？ 一人目の妻が死んで以来、一度も女と交わらなかった聖者？

「ふざけるな、ふざけるな、ボーフォールよ」

既にその家名で呼べるのは、己一人。ついに、自分の血を残すことは無かった。養子を迎えるつもりは無い。

このまま死ねば、財産は全て国庫へと吸収される。子がないのだから当たり前だが、隠居する前に、既にその為の手続きは終えていた。そしてその事実が、より一層、ボーフォールの名を高めることになった。

「そんな名に、何の価値がある」

ボーフォール伯爵は、ぐっと、拳に力を込めた。健康のためには粗食が最上であるとの教え通り、もう何十年もそれを旨としてきたが、それを止めてから驚くべき事に、五体には沸々とした血潮が通り、若々しいとすら言えるような活力が漲った。

（今まで、人生の、何と多くを無駄にしてきた事か）

それに気付いた瞬間を、伯爵自身は覚醒と直感した。自分は決して、他人の評判を気にするような、敬虔なブリミルの信徒などでは無い。もっと荒くれた、奔放な者なのだ。

思い浮かぶのは、曾祖父の時代、あの動乱の時代より伝えられる、国を内側から守護した伝説の護民官、フロワサール伯爵。戦火に動揺する貧しき者、働く者、富める者、全ての民を鎮撫し、また王城



にて前線の諸將たちを支えるという、四面八臂の活躍をした男。

幼い頃から憧れていた彼こそが、彼の名声こそが、結局自らが最も欲するものだったと、そう気付いてしまった。

彼の名声を得る為には、まずやはり、三つの護民官を兼任しなければならぬ。フォツソワイヤール街区は既に陥落し、残るはモンシヤラン街区、チクトンネ街区の二つ。

（虎は死して皮を残し、人は死して名を残し……そして私は死して、フロワサール伯爵と並び称される、英雄となる）

狂気じみていることは、伯爵自身、自覚していた。以前の彼なら懺悔し、自室に引きこもり、始祖ブリミルに必死に許しを請うていただろうが、今の伯爵にはただ、熱病のような情熱があった。

（モンシヤラン街も、そろそろ陥落するだろう……。あとは、“疾風怒濤”が邪魔者を消し、そしてその“疾風怒濤”すら処理すれば……）

食事を終えたボーフォール伯爵は、上着を脱いだ。痩せていた身体には肉が付き、酒によってほんのり赤く染まっている。自らの手が、何よりも遅しく、いかなる障害をもはね除けるような、頼もしいものに思えた。

その手が、寝室のドアを開く。

「……………」

天蓋付きのベッドには、一人の少女がいた。服装から、平民であることが分かる。膝を抱え、大きなベッドの上で、その小さな身体

を震わせていた。

「……恐れることは無い。少々、痛いだけだ」

部下が調達してきた、どこかの平民の娘。搜索願が出されれば、ポーフォール伯爵の耳にも届くだろう。その母親は、一体、どんな顔をするだろうか。必死に縋り付いてくるか、ただ泣き叫ぶか。

タガさえ外してしまえば、あとは簡単だった。支援していた孤児院に行くたびに、笑顔で出迎えてくれたとある少女の面影が、伯爵の脳裏にちらつく。その顔が、どうしても、想像の中でも歪まない。一体どうすれば歪むのか、知りたかった。それは至極簡単であり、絶望させればよく……。

（何故、あの時……私は、実行しなかったのだろうか）

ずっと、思っていた。欲していた。考えてみれば簡単なのだ、楽しんだ後、口を封じればいい。そうすれば、惨めに一人で自慰に耽ることも無かっただろうに。

床から足を離し、ベッドに上った伯爵は、両手両足を支柱にして、少女の上に覆い被さる。既にその少女は観念したのか、それとも予め聞かされていたのか、ぎゅっと目を閉じ、声も出さずに震えていた。

「いじめん」

口づけようとした伯爵の耳に届いた、一言。

思わず聞き返そうと口を開いた瞬間、何かが口の中に飛び込んできた。それがその少女の拳であることを知り、深い皺が刻まれた伯

爵の顔が、より一層歪む。

少女は空いていた方の手で、伯爵の首筋に、針のようなものを突き刺した。

食べたばかりのチキンが逆流し、伯爵の二つの鼻孔から、そして拳で塞がれた口の隙間から、饅えた臭いと共に零れ出す。しかしそれでも怯まず、少女は拳をねじ込んでいた。焦って引き離そうとする伯爵の両手を、或いは蹴り飛ばし、或いは殴りつけ、掴み……やがて老人は、無言の肉の塊となった。

「…………チツ、そっちかよ」

ハンスのその呟きは、忌々しさと、どこか賞賛にも似た驚嘆を含んでいた。

再び、新しくスリープクラウドをヴィヴィアンにかけたマルセルは、暫し呆然と立ち尽くしていたが、やがて支えを失ったかのように、背後の白柱に寄り掛かった。

マザリーニはすぐに驚きを納めると、伶俐な瞳で客人を見つめる。

開け放たれた応接間の扉の前で、アクセルはただ、静かに立っていた。

「…………つふうーっ…………」

ハンスは溜息をつきながら、立ち上がる。灰色髪をガシガシと乱暴に掻きむしりながら、アクセルの前まで歩むと、軽く右手を出した。アクセルも逆らわず、その右手に、二つの指輪を乗せる。乗せられた指輪を、それぞれ左右の手で摘み上げ、ハンスは値踏みするかのように、隅々まで見つめた。

「確かに。ボーフォール伯爵の結婚指輪……のセットだな。噂じや、セズリの時にも外さなかつたらしいが、これが外れてるってことは……」

「……殺した」

言い終えずにこちらに目を向けるハンスの後を引き継ぎ、アクセルは静かに唇を開く。

「ふっ、ふざけんなっ」

それまで柱にもたれていたマルセルは、さながら精神の平衡を保とうとするかのように、辛うじて、かすれた叫び声を上げた。

「屋敷に、どれだけ傭兵が残ってると思ってんだ！ ててっ、テメエみてえなガキなんざ、二秒で塵だぞっ、塵！」

「……残って無かつただろ？」

「えっ!？」

ハンスはアクセルに問い、アクセルは頷き、マルセルが顔を引きつらせる。

「あの爺さんの家に残ってたのは、せいぜい、三人か四人ってところか」

「な……何でだよ、兄貴!？」

「そりゃ勿論、ここでマザリーニ枢機卿とヴィヴィアン・ド・ジエーヴルを殺した俺たちを、屋敷の外で待ち伏せて殺すためだろ」

「はあっ!?!」

「何だ、おい。枢機卿を殺しておいて、生きてるつもりだったのか、お前は」

ハンスが心底呆れたといった様子で弟分を眺めるが、マルセルは歯をガチガチと鳴らした。寒気でも恐怖でも無く、あまりの状況に脳が追いつかず、言うべき言葉が見つからない。

しかしようやく口を開くと、大股でハンスへと歩み寄った。

「じゃ……じゃあ俺ら、殺されるってのか!?!」

「心配するな。伯爵が死んで、今頃は慌てて逃げ帰ってるだろう。例え束になつてかかつてきても、“疾風怒濤”の敵じゃねえ。どちらにしろあんな小物どもじゃ、何も出来んよ。精々、金目のものを手にして逃げるくらいだ」

「……けど、本当に……伯爵は……」

「マルセル、お前はチエスを知らんのか？ ナイトの高飛び、ポーンの餌食と言って……いや、何か違うか？ まあ、ともかくだ。キングがポーンに殺られてしまうのは、自然の道理。雇い主が死んだのなら、もう俺たちは用無しだ。お望み通り、解消するか？ “疾風怒濤”を」

ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべるハンスに、マルセルは先ほどの自分の言葉を思い出す。そして顔を真っ赤にすると、ちらりとマザリーニを盗み見ながら、ぶるぶると首を振った。

「ふっふふふざけんなっ！ 兄貴、一人で逃げるつもりか!」

「いやあ、残念だ。まあ確かに、俺は悪い兄貴分だもんなあ。お前に色々と、酷い事も言ってしまったし。安心しろ、お前が望むな

ら、俺はもう金輪際関わることは無いぞ」

ハンスと、そしてマルセルのやり取りから感じられる余裕は、彼等のメイジとしての実力に裏打ちされたものだった。

ついに音を上げて、ハンスのズボンに縋り付くマルセルと、相変わらずのらりくらりとかわし続けるハンス。黙っていたアクセルは、己の存在を認識させる為に、だんっと靴を鳴らした。二人ともほぼ同時に、緑髪の少年に目を向ける。

「二人は“疾風怒濤”なのか？」

「違うさ。元・“疾風怒濤”だ。俺は“疾風”のハンス、こっちの可哀想な元弟分が、“怒濤”のマルセルだ」

「兄貴、頼むよ！ 許してっつてば！」

「……知り合いの元傭兵に、聞いたことがある」

「何をだ？」

アクセルは一度瞬きをすると、ハンスを見上げた。

「最強の傭兵の条件を攻撃力だとするなら、最強は“疾風怒濤”だろう……そう言っていた」

「ほお……。それだけか？」

ハンスは腕を組むと、生え始めていた顎髭を撫でる。アクセルは言葉を重ねた。

「最も恐るべきは前者、“疾風”の抜き撃ちだとも言っていた。蛇が草を払うよりも早く杖を抜き、抜けば既に勝負は決している。もしも“疾風”を倒したければ、この世から風属性そのものを無くすしかない、と。または、失われた“虚無”の属性を復活させるし

かないと……」

「そいつは素晴らしい傭兵だな。ただ残念ながら一つ、間違っている。最後だ。例え虚無が来ようが、俺の風は、それを哀れな伝説へと追い戻してしまおうだろっ」

（“疾風怒濤”の舵取りは“疾風”、そして“疾風”の舵取りはゴマすり……。スルトが言ってた通りだな、こりゃ）

喜んだふり、ではない。ハンスは本気で、心から気分を良くしている様子で、わしわしとアクセルの頭を撫でた。

「まあ、お前も風属性だろう？ 心配するな、俺のように……とまではいなくても、なかなか優秀に育つだろうさ」

「1000エキュー出す」

「……は？」

頭を撫でられている子どもの言葉には聞こえず、ハンスも流石に、首を傾げて聞き返す。

「次の雇い先は決まってるのか？ いや、決まってもいい。僕に雇われてくれ」

「……子爵の息子が出せる額かあ？」

「二階の、僕の客室にある荷物。その中の、ヴァイオリンケースの内側を切り裂けば、首飾りが入っている。骨董品としての価値も高い。人によっては、もう200エキューほど上乘せする筈だ」

ハンスの目も、マルセルの目も、シビアな傭兵のそれに変わっていた。ハンスに促され、マルセルは駆け足で二階へと向かう。詳しく聞こうとしたハンスだったが、アクセルは彼に背を向け、未だ無言の男の元へと向かった。

ヴィヴィアンの縄を解き、彼女の身体をソファに横たえたマザリーニの耳にも、一部始終は届いているだろう。どうやら、アクセルを待っていてくれたようだ。

「マザリーニ枢機卿……」

「さて。今日は忙しくなる。ポーフォール伯爵の後始末もしなくてはならない。しかし……その前に」

マザリーニは振り向くと、不意に柔らかい表情を作り、頭を下げる。

「ありがとう。どうやら君は、私たちの命の恩人だ」

まずは、感謝。命を救われたのは事実だ。しかしだからと言って、一切を不問にすることなど不可能だった。今のアクセルには、夕食の席で見せたあの可愛げなど見当たらず、静かな決意がある。冷静に、人を一人、はつきりとした意志で暗殺してしまえる程の。

ラヴィス子爵の、いや、ラヴィス子爵家の特性を知っているマザリーニだったが、アクセルにはそれとはまた別種の、さながら鈍い光沢のような、冷たい特異性が感じられた。

しかし、再び怜悯な表情に戻り、頭を上げたマザリーニは、思わず目を見開く。

アクセルは両膝を尽き、手を揃え、そして額を床に押し当てていた。

「マザリーニ枢機卿……。どうか、助けて頂きたいのです」



少年は土下座したまま、絞り出すような、重々しい慟哭に似た声で訴えた。

「……………なあ、兄貴」

「何だ？」

「本当によかったのかね？ あんなガキに雇われて」

「……………首飾りに狂喜乱舞してた野郎が、よく言っ」

がたんつと馬車が揺れ、マルセルの尻が浮く。隣のハンスは、その尻を軽く小突いた。こちらに目を向けたマルセルの前で、彼は深く溜息をつく。

「後始末は、枢機卿が引き受けてくれるってんだ。俺たちがいたら、かえって邪魔なんだよ」

「ふーん……………」

納得したのかしていないのか、マルセルは閉じた口の奥から返事をする。そしてふと思い出したように、後ろを振り向いた。

急いで調達した馬車は、客馬車では無い。荷物を運ぶための、質素な造りのものに、急拵えの幌をテントのように張っただけだ。

そして、その客室……………いや、荷台には、少々の荷物とアクセルがあった。胡座をかき、虚ろな目をしたまま膝に手の甲を乗せる少年に、王都を出発してから寸分も動いていないのではないかと、マルセル

は不気味に思う。

それ以上見てはいけないのではないかと、根拠のない自制を覚え、御者台の彼は再び前を向く。

「マルセル」

「ひゃいつ!? あ……いや、何だ？」

まるで萎縮してしまっている様子のマルセルに、ハンスは密かに笑いかみ殺した。アクセルは相変わらず虚ろな目のまま、唇のみを動かす。

「くどいけど、全速力だ。全速力で、ラヴィス子爵領、ゼルナの街へ向かってくれ」

「あ、ああ……」

パシッと、馬の背に鞭が弾ける音が響いた。甲高い嘶きと共に、馬車は速度を増す。

「……………」

アクセルはそっと、瞼を閉じる。

（ゼルナの街は栄えてはいけない……か）

脳裏に蘇る、マザリー二枢機卿の言葉。

時間が惜しい。風竜を借りることが出来なかったのも痛い。

（……大丈夫だ。ろくな準備も無かったのに、ポーフォール伯爵の暗殺に成功。ほぼ理想通りに、マザリー二枢機卿に恩も売れた。今、俺は幸運だ。行動は全て、プラスの方向へと続いている）

アクセルは目を閉じたまま、天を仰ぎ、神やそれに近い、あらゆるものに祈った。

（だから……俺の幸運よ。せめて、次の行動だけでいい。どうかそれまで、保ってくれ）

## 第二十七話<前夜>

かつて、一人の司祭が言っていた。

年老いれば年老いるほど、人は欲望を捨てていく。愚かしく、下劣な心を少しずつ少しずつ削り取り、欲望に凝り固まった衣を脱ぎ去っていく。そしていよいよ死が訪れる時、今までの中の人生できちんと、欲望からの決別を果たした人間は、あらゆるものから祝福を受け、永遠の安らぎに包まれながら、静かに眠りにつくことが出来る。生きるということは老いるということであり、そして老いるということとは、欲望という苦しみとの決別の楔ぎなのだ。

「……っつーのを、数年前、村に来た司祭が言ってたわけだ。その時は、よく意味がわからなかったが、子供心に感心したぜ。あのブランツォーリ……だっけか。何で同じ司祭で、こんな差があるんだろうな？」

「ほお、いい話じゃねえか」

目を閉じ、うんうんと、クーヤはしきりに頷く。感心していると、いうよりは、面倒な話をされて適当に受け流していると言っべきだ。ナタンは、まるで自分が口喧しい母親にでもなったような気がして、絨毯の上に座り込んだまま、少し俯いて溜息をついた。

ナタンに比べれば低背のクーヤだが、彼の顔は、座り込んだナタンより更に低い位置にあった。そして、床と直角の方向を向いている。ナタンと同じく、絨毯の上に平べったく座るマノンの太腿に頭を乗せ、彼女が口元へ運んでくれるブドウの玉を悠々と待ちながら、

クーヤは実に不遜な態度を崩さなかった。

「そして爺さん。もう十分生きてたろうに、あんたは何で、そんな欲まみれなんだ？」

「……ンフフフフ」

「あ、こら、もう。ボスもいるのに」

「聞けよ」

マノンの部屋だった。ギャエルは現在、客の相手をしている。

クーヤは顔の皺を一層深くして、好色な笑みを浮かべつつ、マノンのスリットから掌を差し込み、スカートの中に侵入させ、直接に太腿を撫でた。一応は拒むマノンだったが、その反応は茶番そのものだ。

あくまで仮の決定だが、クーヤは相談役という肩書きを得ていた。とはいえ、特に何かをするでもなく、主にギャエルとマノンの二人とイチャつくか、酒を飲んでいるくらい。

ナタンはちらりと、マノンを盗み見た。

ギャエルもマノンも、二人とも仕事で手は抜いていないそうだが。寧ろ、客からの評判は前以上。二人でクーヤを取り合うなどということも無い。

（取りあえず、得体の知れない爺さんではあるな）

何の答えにもなっていないが、ナタンはそう結論付けた。そのようにして疑問を打ち切ると、ある意味で、最も好奇心を促される疑問が再浮上する。何となく、それを聞くのは早すぎる気がした。しかしナタンは、ぎこちない動作を滑らかにしようとするかのようになり、軽くワインで口を湿らせると、ちろりと舌先で唇を濡らし、唸りのような声を漏らした。

「爺さん。あんたとベルは、初対面だよな？」

「うん？ おお、そうじゃが」

「ベルは何で……」

そう言いかけて、どのように尋ねるのが、それが全く意識の外であつたことに気付く。ナタンは再び唸つた。

クーヤはごろりと寝返りを打ち、マノンの柔らかな太腿から頭を離すと、胡座をかいて座り込んだ。マノンがそつと、彼の慎ましくも頼もしい肩に両手を乗せ、もたれるように頭を預ける。クーヤが唇を開いた。

「ワシは、ずっと遠いところで生まれた。風竜ですら辿り着けなような、遠い遠い場所……そこが、故郷だつた。辿り着けるはずも無いこの地に辿り着き、これも運命かと、この地で生きる決心をした」

まるで赤の他人の経歴でも説明するかのようになり、老人は淡々と言う。聞かれたから、そして黙っている理由も無いので答えている、ただそれだけのようだったが、ナタンの脳裏に、あの時の老人の姿がちらつく。平然とした語り口調は、裏を返せばこの話題が、この得体の知れない老人にとって、心を揺り動かさずにはいられない類のものであるからだ、そう考えてみれば、すつと喉の通りが良かった。

「生きよう、生きようと頑張つた。とにかく頑張つたさ、なあ。

受け入れて欲しい、信じて貰いたい、見捨てないで欲しい……。言つてしまえば、無理をしとつた。周りに気に入られなくて、いい子であろうとしていた。しかし、無理は無理。いつまでも、重ねられるものでもないわい。……孫がワシに言つた最後の言葉、教えてやる。 “おっ、おじいさん！ 何を考えてるんですか！ そんな、孫

みたいな年の娘を相手に！」

裏声を使って、戯けたように言うクーヤだったが、ナタンは顔を引きつらせて思わず顎を引く。反対に、マノンは動じることもなく、クーヤの背中にしなだれかかったまま目を閉じ、呼吸の動きだけを見せていた。

「まあそれが、ワシの本性ってヤツじゃろうな。何年か前に、村でワシの葬式が行われてからは、自由気ままの渡り鳥よ」

「……そうか」

ナタンはただ一言、クーヤにそれだけ言つと、マノンに別れを告げて立ち上がる。

満足したわけではないし、納得のいく答えを得られたわけでもない。ただ、クーヤという人物の本質に、ほんの少しだけ、指先程度は触れることが出来た気がした。そして、それ以上の追求は無理であることも悟った。

マノンの部屋を出る。姿が映るほどピカピカに磨き上げられた木造の床を、斜めに渡り、窓から中庭を覗き込んだ。灯りによって微かに照らし出された、木陰の岩が見える。いつも、女装したアクセルがヴァイオリンを奏でている場所だ。勿論、日が暮れてからあそこで演奏することは無いし、そして現在、アクセルはここにはいない。しかしそれでも、ナタンはある筈の無いその姿を探そうとした。

「……………」

ナタンは踵を返し、一階へと下りる。事務棟へ続く渡り廊下を歩いた時、びゅうっと、驚くほど涼しい風に包まれた。夏だというのに、鳥肌が立つ。感じたのは、悪寒とも呼べるようなものだった。

「……っ」

そして誰もいない筈の中庭から、その風に驚く、小さな声が聞こえる。

彼はハツとして、中庭の石畳を踏み進んだ。アクセルの特等席とも言える、あの岩から、確かにその声は聞こえたのだ。四階からはわからなかったが、アクセルよりも大きな人影があることに気付く。

誰かいるのか、そう声を掛けようとしたところで、あちらもこちらに気付いたらしく、人影は口を開いた。

「ボス、こんばんは」

「リリー又か」

岩から立ち上がり、歩み寄ってきた人影は、部屋着のままのリリー又だった。ちょうど雲に隠れていた双月が蘇り、淡い月光で彼女を包む。月下に醜女無しと言うが、彼女の場合も逆効果になる事は無い。金色の髪が、砂金のような光を放っていた。

今夜、彼女に客はいない。

「降りませんでしたね、雨」

「ああ……そうだな」

絵になる、というのはこういう女のことなのかと、ナタンは漠然とそう思った。空を眺める仕草一つとっても、男の視線を離さない魅力がある。ナタンは意識して、彼女と同じ空に顔を上げた。千切られた雲が再び双月を隠し、リリー又の輝きも潜まる。

「……まあ、あれだ」



ナタンは人差し指を鉤のように曲げ、こめかみを搔くと、再び彼女に目を向けた。

「いくら夏だからって、さつきみたいな風が吹いたりもするんだ。夜の散歩もほどほどにな」

「あの娘達の様子はどうです？」

「え？」

唐突な質問に、彼は目を見開いて首を傾げる。二秒ほど間拔けな体勢のままだったが、リリーヌが言うのが誰なのかに思い至った。

「……何でだろうな」

ナタンは、今度は頭を掻きむしる。

「なるべく秘密に、悟られないようにしてた筈なのに、やっぱり不安そうだ。考えてみれば、こんなに長い間、ベルがあいつらに会わなかったのは二度目。前の時は、大火傷を負った。やっぱり、漠然とした不安はあるんだろう。……アニエスは、前にも増して剣の修練に励んでる。マチルダも、すっかりしたもんさ。……問題は、ミシエルとテファ……いや、テファはマチルダがフォローしてるし……やっぱり、ミシエルだな。けど、ミシエルだって大したもんだぜ？ 少しでも大人の負担を減らそうとしてくれる」

「……みんないい娘ね」

「ああ、その通りだ。いい娘たちだ」

そう言って笑うナタンの顔を、リリーヌはじっと見つめた。

彼はこうやって、自分が褒められたわけでも無いのに、親しい人間が評価されれば、まるで自分のことであるかのように喜ぶことが

出来る。その喜びは、或いは本人以上かも知れない。

「……な、何だ？」

リリー又の視線に気付き、ナタンはたじろぎ、後退るように背を反らす。

「何でもありません。それじゃ、ボス。私はもう戻ります」

「おお、風邪ひくなよ。おやすみ」

リリー又と別れて後、ナタンは再び渡り廊下に戻り、事務棟へ上がった。事務室に戻れば、書類を広げ、それを眺めるバルシャがいる。仮眠程度でしか休んでいないらしく、普段ただでさえ鋭い視線が、一層鋭利になっていた。入ってきたナタンにも気付いていない。ナタンは水差しを持ち上げ、コップに注ぐと、それを恭しくバルシャに差し出した。

「どつぞ」

「おう」

部下か女中が持つてきたとも思ったのか、バルシャはぞんざいに受け取ると、一息に飲み干し、コップを突き返した。しかしようやく違和感を感じたらしく、首を回してから、目を丸くする。

「あ、ボス。失礼しました」

「いや。ご苦労様だ」

ナタンはひらひらと手を振って応じると、バルシャの向かいのソファに腰を落とした。その心地よい反発に押し出されるようにして、天井を見上げた口から、年寄り臭い溜息が溢れ出す。

「お疲れ様です」

「お前ほどじゃねえよ。……そろそろ、ベルは会えた頃か？ その……枢機卿に」

「マザリーニ枢機卿ですね」

「ああ。有能なんだろう？」

「ええ」

書類のいくつかにサインしたバルシャは、それらを束ねてテーブルの上で整えると、端に押しやった。しかし彼の手は、またすぐに別の書類に伸びる。

「通常、各国に派遣された枢機卿の給料は、ロマリアが負担するのですが……それとは別に、マザリーニ枢機卿はトリスティンからも給金を得ています。あまり表に出てくる名前ではありませんが、国王か、或いは国王に近い人間にとっては、手放し難い人材のようですね」

「そんなお偉いさんに、渡りをつける……ねえ」

「レオニー子爵が知り合いだそうですから、面会は容易でしょう。問題は、協力を得られるかどうかですが……。しかし狙いとしては、適当です。能力、人脈、権力、どれも申し分ない。ブランツォーリ司祭の一件すら揉み消せる人物です」

「なるほどなあ、それでか」

枢機卿、という位階はナタンにとって馴染みのないもので、何となくブリミル教の偉い人間、その程度の認識しか無い。

「あちらはベルさんにお任せしましょう。ラヴィス子爵の帰還まで、最短であと五日しかありません。こちらはこちらで、手は抜けません」

「今、うちの状況は？」

「イシュタルの内側の問題は、フラヴィ、そして私達が引き受けます。スルトには、ラヴィス子爵の帰り道である街道を遡って貰っています」

「何でだ？」

「イシュタルの館の利益の半分以上は……いえ、組織の収入の半分以上は、ラヴィス子爵領の外からの客が占めています。つまり、最大の街道である北東を封鎖されれば、組織の力は大きく減退することになります……」

「しかしよ、封鎖を力尽くで破壊なんて出来ねえだろ？ いや、あいつならやれるけど」

「あくまで、偵察のみです。北東街道の先には、クルコス街があります。失業中の傭兵は安値で買い叩けるでしょうし、子爵が手勢を整えるのなら最適かと。あそこは、スルトの拠点でもありません。だから、そこで情報収集を」

「そうか……」

一通り聞き終わると、ナタンは再び天井を仰ぎ、そつと瞼を閉じた。

皆が皆、それぞれの役割を得て、この館を守るために動いている。ナタンもいつも通り、縄張りにある店のトラブルの相談に乗ったり、娼婦達の慰勞に回ったりと、暇のない生活を送っていたが、それでも皆には及ばない気がした。自分一人だけ、いつも通りの仕事をし、ていて許されるのかと。

「……しつかり休んで下さいね」

「ん？」

そのナタンの心を見透かしたように、バルシャは書類から目を離さず、そう忠告した。

「ラヴィス子爵も、いきなり攻撃を仕掛けることは無いでしょう。その前に、何らかのコンタクトを取って来る筈です。その時、あなたは我々の顔として、子爵と相対しなければなりません」

「……責任重大だな」

「ええ。その通りです」

下手に慰めることは無かった。ふにやりとだらしのない笑い顔を作るナタンだったが、彼こそが、このイシュタルの館の……そして、東地区を非合法にまとめる組織の体現者なのだ。

「どうか、泰然と構えていてください。ボスとは本来、そうするものです」

「わかったよ」

ナタンは軽く右手を挙げて見せる。その右手は僅かに震えていたが、バルシヤは気付かないふりをした。

事務室を出て、伸びをした。出る時にちらりと時間を確認したが、そろそろ日付が変わる。しかしどうも、何故か眠る気にもなれず、ナタンは事務棟の階段に向かった。

「ん？」

「あ」

階段を二階まで上ったところで、フラヴィと鉢合わせした。彼女の朝は遅く、夜は長い。皆、街は眠りにつく時間だというのに、フラヴィはまるでイシュタルの館そのものであるかのように、イシュタルの館と同じ時間で生活していた。

元々、娼婦にしては色気の少ない服装だったのは、身体に混じる

吸血鬼の本能がそうさせていたらしい。そして完全な裏方となった今では、色気のなさに更に拍車がかかっていた。

「……寝かしつけてくれてたのか？」

「まあ、ね」

歯切れ悪く返事をする、フラヴィイは片手に持った絵本を振った。アクセルは毎晩のように、ティファニアの為に絵本を読んでやっているそうだが、フラヴィイはその代役に選ばれたらしい。

「ありがとな」

多忙な筈の彼女が、わざわざティファニアでも呼べるような位置にいたことは、つまり気に掛けていたということなのだろう。ナタンは微笑むと、若干照れくさそうに礼を言った。

「いや、礼を言われるほどでも無いんだけどねえ……」

「ん？」

「これ、ベルのヤツが書いたんだけど……どうも、大人が読み聞かせるのを前提にして……。文字を覚えたばかりのあたしじゃ、ちよっとキツイんだよ。マチルダやミシエルに手伝って貰って、ようやくって感じ」

「まあ、あの二人は元貴族だからな。そりゃ、俺らみたいな下々の者とは、下地が違うさ」

ナタンは冗談交じりに言う。フラヴィイも釣られたように笑みを零したが、ふと、押し黙った。

どうした、と問い掛ける代わりに、ナタンは待つ。

「……文字を……覚えたんだよ、お陰様でさ」

フラヴィイはふと、窓の外に顔を向けた。娼館の灯火を眺めているようではあるが、本当は、ナタンと顔を合わせない為だった。

「あたしだけじゃない、他の娼婦も……知ってる娘が、知らない娘に教えてやって……簡単な暗算まで……」

「ああ」

「だからさ、娼婦がダメだったとしても、他にいくらでも……見つけようと思えば、働き口くらい、見つけられるんだ」

「……ああ」

「元は、この街で野良猫の生活だったんだ。少しマシになって、あるべき場所に収まるだけさ。……一応、言っとくよ」  
「……………」

フラヴィイは真っ直ぐ、ナタンの瞳を見つめた。

「このイシュタルの館が無くなっても、誰も死にはしないんだ」

それは宣言であり、宣告であり……やはり、忠告であった。

ナタンは驚いたように、目を見開く。そして階段を数歩ほど駆け下りると、手摺りから身を乗り出して一階に向けて怒鳴った。

「おいっ、バルシャっ、大変だ！ フラヴィイが、俺に気を遣ったぞ！」

「ま……真面目に聞けっ」

フラヴィイも跡を追うように駆け下りつつ、手摺りによじ登るナタンの尻を蹴飛ばした。彼女にとっては相当に手加減したものだったが、その衝撃は、ずしんと身体の奥にまで響く。

苦笑いしながらナタンは階段に着地し、尻をさする。そして大き

く、腹の底から溜息のように息を吐き出すと、軽く顔を傾け、フラヴィの方を向いた。

「でもよ……気遣いは事実だろ？」

「……………」

「心配すんな、大丈夫だよ。命が危なくなれば、さっさと逃げ出すさ」

「別に、あんたの命を心配してるわけじゃ……………」

「ツンデレ乙」

「つん……え？ 何だつて？」

「ベルから教わった。東方じゃこんな時、そう言うのが礼儀らしい」

「そうなのかい？」

「そうなんだとさ」

「ふうん」

そこで、二人揃って言葉が途切れる。

そうやって静寂が訪れると、微かに、娼館から賑やかな声が聞こえてきた。酔った客の笑い声、何かを囁し立てる娼婦達の、息の合ったかけ声、そして音楽。

「いつまで……続くんだらうね」

フラヴィはそう言うと、ナタンとすれ違い、階下へと降りていく。ナタンは再び手摺りから身を乗り出し、彼女の白銀の後ろ髪に向かって、囁くような声を落とした。

「いつまでも、だろ」

その言葉を鼻で笑う代わりに、首を傾げトントンと、フラヴィは



絵本の角で肩を叩いた。

再び二階に戻り、廊下を歩く。もう寝ているかも知れない子ども達を起こさないよう、極力足音を殺し、ナタンは滑るような足取りで、散歩を再開した。

そして、角を曲がる時。ハツとして息を呑み、つま先立ちになり、背を反らして強制的に停止する。

「……………」

まるで潜むようにして、俯き、壁を片手で押すように立つアニエスがいた。もう片方の手には、木剣を握っている。

ナタンも暫く無言で、アニエスの頭頂部を見下ろしていたが、やがて、その彼女の頭から、一筋の……蜘蛛の糸のようなものが垂れ下がっているのに気付く。粘性を持つそれは、地獄の囚人を助けるかのように、真っ直ぐに下へ下へと伸びていった。

「……………おい」

「ふひゃえふあっ!?!」

寝起きの第一声は、聞いたこともない音だった。

顔を上げたアニエスは、顎を濡らす唾液を袖で拭い去ると、瞬きしながら左右を見回し、すぐにナタンを見上げる。

「あ……何だ、ナタン兄か」

「何してんだ、こんな所で。子どもはもう寝ろ」

「見回りだよ」

寝惚け眼のまま、アニエスは胸を張った。ナタンはちらりと、彼女が片手に持つ木剣に目をやりながら、呆れたように息を吐き出す。

「その、まあ、あれだ。とにかく、そろそろ寝る。朝飯に間に合  
わなくても知らんぞ」

「……そういうわけにもいかないさ」

「何でだ？」

「皆が頑張っている」

大人達の間の変な雰囲気から、子どもは子どもなりに、何か不吉な予  
感を感じているのだろう。目を擦り、欠伸をかみ殺し、アニエスは  
軽く頬を叩いた。

「ベル君だって、ただの旅じゃやないんだろう？　ここが一大事  
の時に、一人だけ遊びに行けるような子どもじゃない。だから私が、  
ベル君の分まで、ここを守る」

「……生意気言っくんじゃねえよ」

この少女は時折、信じられない程に勘が良い。一丁前に女としての  
第六感を備えているアニエスに密かに驚きつつ、ナタンは彼女の  
頭を少し乱暴に撫でた。

「お前が今守るのは、イシュタルの館じゃない。マチルダ、テフ  
ア、それにミシエルの三人だ」

「だから、ここを守ることがひいてはあの三人を……」

「焦るな」

頭を撫でる手を止め、ぽんぽんと、小さな肩を叩く。

「ベルの代役ってんなら、ベルが大切になっているものを守れ。イ  
シュタルの館を守るのは、大人たちの仕事だ。ベルは、全部を自分  
一人でしようとしたか？」

「……………」

「それに、あんまり心配すんな。今の問題が失敗しても、死ぬわけじゃない。ただ、ちよつと、他の街にお引越すだけだ。そりゃ、今までのようにベルとは会えなくなるが……それも、永久つてわけじゃない。さ、いいから寝ろ寝ろ。どんな屈強な戦士だって、眠気には勝てねえさ。よく寝て、身体を休めて、飯食って……今より強くなれ」

「わかった……。いつか、立つたまま眠れるようになるぞ、私は」

「うーん、そうか。一体何をわかったのかさっぱりだが……楽しみにしてるぜ」

ナタンがアニエスの背を押し出すと、彼女は素直に、ベッドへと向かった。その姿が寢室に消えるまで見送り、ナタンは首を何度か傾け、最後に一つ欠伸をする。

（眠気を移されたか？）

一度欠伸が出てしまえば、二度、三度と出た。そろそろ休むべきだと判断し、ナタンは一階へ下りる。雨は降らなかつたが、曇り空の為か、心地よく涼しい眠りを得られそうだ。

そう思いながら自室に戻ったナタンは、思わず叫びそうになった。

「……………夜分遅く、しかも無断での入室、申し訳ありません」

丁寧に謝罪するのは、ローランだった。

街の名士である彼が、大手を振って娼館に出入りするわけにはいかない。よって来訪の時は、今回のようにお忍びであることが常であったが、窓から侵入というのは初めてだった。どうやら、バルシヤにすら知られていないらしい。

「あんまり、驚かせねえでくれ……変な汗かいたまった」

ナタンが掌で顔を仰ぎながら言うと、ローランは再び謝罪した。

「で……何か飲むか？ 確かワインが」

「いえ、すぐにお暇します。……単刀直入にお聞きします。この館、畳むおつもりは？」

「ねえなあ」

ナタン自身が驚くほどあっさりと、即答することが出来た。

ローランの意見を、ナタンも、考えなかったわけではない。このままイシュタルの館に固執するあまり、犠牲者を出しては元も子もないのではないかと。そうなるくらいなら、綺麗さっぱりと全てを終わらせ、子爵に無条件降伏を行うべきではないかと。

しかし……最終的な結論は、ほんの数分前に出ていた。

「やっぱ……それは、出来ねえんだ。確かにそれなら、一滴の血も流れねえだろう。けど、それでも……俺は……最後まで、ここを捨てることは出来ない」

「そうですか……。よくわかりました。では、失礼致します」  
「早えな!？」

思わず突っ込みを入れたナタンに、ローランはそつと、微笑みを見せる。その笑みに、覚えがあった。あの時、アクセルが貴族の長男だと初めて知った後、昼の酒場で、三人で宣誓の杯を交わした時、あの時と同じ顔だった。

「あなたにそこまでの覚悟があるならば、私も、すべき事があるのです」

「何だよ、そりゃ」  
「秘密です」

微笑んだまま言うローランに、ナタンは拗ねたように頭をかく。

「ったく……クーヤといいアンタといい、老人は秘密ばつかだな」  
「クーヤ……？」

「いや、何でもねえ、こっちの話だ。まあともかく、気を付けて帰ってくれよ」

「ええ……。よい夢を」

最後にそう言い残すと、ローランは窓を飛び越え、曇り空の闇夜に融けた。

取り出しかけたワインを元の棚に戻し、ナタンは窓の枠を掴み、空を見上げる。真っ黒い闇に、ほつりほつりと、イシュタルの館の灯火が揺らいでいた。

「……………ふう」

バルシヤは身体を倒し、ソファの上に寝そべると、目を閉じて目を抓む。瞼の奥から、じいんと、反響のようなものが伝わってきた。

どういうことだ、と……………何度考えても、答えが出ない。

壁際の時計の、振り子の規則正しい音。微かに聞こえる、客と娼婦の喧騒。目を閉じていれば、実に様々の音が聞こえてきた。

（娼館は、街の風紀を乱す？ 馬鹿馬鹿しい。そんな理由、どう考えてもあり得ない。イシュタルの館は、あらゆる面で……目に見える成果も、見えない成果も、ちゃんと出しているんだ。その利益を見れば、娼館という汚点など、十分に懐に納められる筈だ。では何故、イシュタルの館を潰そうとする？ 清貧でも気取るのか？ まるで……。まるで……。？ そうだ、まるで……。このゼルナの街が変化することを嫌うような……）

ドアが開き、ハツとして、バルシャは跳ね起きた。

「……スルトか」

旅装のままのスルトが、ドアの前に立っている。報告を聞こうとソファから足を下ろし、テーブルの上の書類をまとめ始めたところで、バルシャは異変に気付いた。スルトの表情が、固い。

「どうした、スルト。何があった」

彼は固い表情を崩さず、じつと瞼を閉じていた。しかし、やがて光を失った目を開くと、次いでその鉛のように重々しい口を開く。

「悪い知らせだ。北東の街道だが、既に塞がれている。偶然の災害に見せかけてはいるが、魔法によるものだ」

「……そうか」

予想の範囲内だった。客の流入が制限されたのは、確かに痛い。しかし、蓄えが無いわけではない。それに、クルコスへの道を塞い

だことで、相手がクルコスへの逃亡を完全に阻止できると考えているなら、付け入る隙がある。もっともそれは、最悪の、逃亡の話だが。

対応しようと地図に向かうバルシャだが、未だスルトが立ち尽くしていることに気付いた。

「…………その様子だと…………」

組んだ腕にぎゅっと力を込め、バルシャはショックに備える。

「悪い知らせが…………まだありそうだな」

「ああ」

スルトが黙っているのは、バルシャの為だった。彼に、今以上のショックを与えて良いのかと、そう考えている。そしてそれを察したからこそ、バルシャは一言、

「言え」

そう命じた。

スルトは一度溜息をつくと、また、重々しい口を開く。

「ラヴィス子爵だが…………」

「そうだ、ラヴィス子爵…………。いや、ちょっと待て。今、北東街道が塞がれたと言ったな」

薄い微睡みの中にあつたバルシャの脳が、急激に冷えていく。

「つまり…………」

「ああ、そうだ。…………ラヴィス子爵は、既に、このゼルナにいる」

スルトがそう告げた途端、はつきりとした意識を保っているがら、バルシャはその場に崩れ落ちた。



## 第二十八話<相思>

「ふうむ」

ハンスはだんだんと濃くなってきた顎髭を指の腹で撫で、後ろを振り向いた。

「これは、メイジの仕業だな」

ラヴィス子爵領の北東へと延びる街道は、ゼルナの街へと至る最短ルートでもある。

そしてその街道は、大量の土砂によって塞がれていた。両脇は山林であり、その間に切り込むようにして街道が続いている。その穴を塞ぐようにして聳える土砂は、明らかに人為的に運ばれてきたものだった。

既に馬車は捨て、アクセル、ハンス、マルセルの三人はそれぞれ騎乗している。ハンスは手綱を引いて馬首を巡らせると、アクセルへと近づいた。

「それでどうする？ お坊ちゃん。もう夜は明けるとはいえ、こんな深い森を突っ切るんだとすれば、危険は変わらない。隣のレオニー子爵領の傭兵ギルドが壊滅したそうだが、山賊化した傭兵も、勿論ここらにまで流れてきているだろう」

「突っ切る」

少年の即答に、ハンスは小気味良さげに肩を震わせる。

「やめといた方がいいと思うぜえ」

マルセルは手綱を離し、両手を組み合わせて大きく伸びをしてから、憚ることもなく大あくびをして見せた。トリストニアアからここまで、ほとんど休み無く馬を走らせ、流石に疲労が溜まっている。

マルセルを睨むような目で振り向くアクセルだったが、その目もまた、真っ赤に充血していた。髪は乱れ、服や顔には乾いた泥がこびりついている。

マルセルは再び大口を開け、涙を滲ませながらあくびをした。そしてついではかりに軽く尻を鞍から浮かせ、太鼓のような音と共に放屁する。

「俺ら“疾風怒濤”は、攻撃しかしねえ。お前の安全まで保障は出来ねえよ。盗賊を退治してこいつてんなら話は別だが、お前を盗賊から守りながら山越えなんて、無理無理無理……」

「マルセルっ！」

ハンスが怒鳴ったのは、勿論、弟分の態度の悪さ故では無い。その怒鳴り声がマルセルの脳内で処理された時には既に、矢は、彼の騎乗する馬の首に突き立っていた。

苦しいな嘶きと共に馬が倒れ、マルセルは転げ落ちる。ハンスとアクセルは咄嗟に頭を下げ、二人も転げ落ちるようにして馬の腹に身を隠したが、彼等の馬にも次々と矢が突き刺さり、一頭はあらぬ方向へ走り出し、もう一頭は地面に座り込んでしまった。

そして間髪入れず、土砂の上から、森の中から、何人もの人影が姿を見せる。その時に聞こえてきた怒声によって初めて、包囲されていることが判明した。

「待ち伏せかつ」

土砂の上から滑り落ちてくる傭兵の顔面に、軽くジャブのように『ウインドブレイク』を放ちながら叫ぶハンスだが、その顔にさしたる狼狽は無かった。土砂がメイジによるものだと思った時、ほとんど反射的に、伏兵という言葉が頭の片隅に生まれていた。

「だあつ、畜生つ、畜生がつ」

襲撃者たちの鬨の声を跳ね返そうとするかのように、マルセルの怒りの叫びが走り抜ける。深海のような誰彼の中、人の姿はただ影としてしか見えず、アクセルとハンスはその叫びの源へと走り寄った。

背中合わせになり、円陣を組んだときには既に、三人とも杖を構えている。襲撃者達は全方位から、包囲するように近づいていた。

「だから……俺らは、守りは苦手だつてのに」

マルセルが吐き捨てた。

ハンスは弟分の言葉に強い共感を覚えながら、『ストーム』の魔法で飛来した矢を逸らす。

アクセルは構えた杖を動かさずに、背中合わせの二人の名を呼んだ。

「ハンス、マルセル」

「何だ、泣き言か？」

「ここで解散する。集合場所は、ゼルナの街の東地区、イシユタルの館。聞けばすぐにわかる筈だ」

「……はあ？」

驚愕ではない。何かの聞き間違いか、またはただの間違いだと、

不審に思っ て聞き返す。しかしそれでも少年は、動揺したような素振りを見せなかった。

「つまり、ここで一旦お別れってことか？ ゼルナで落ち合う？」  
「そうだ」

再び、上空から矢が襲いかかる。今度はアクセルが風で防いだ。

「成る程、お前を守らなくていいなら好都合」

ハンスは軽く笑みを漏らしながら、しかし冷徹な声で告げる。

「だがな、俺たちが素直に従うと思うか？ わざわざ山越えせずとも、ここで帰れば、俺たちは丸儲けなわけだが」

このままゼルナに向かうために山越えを選ぶか、それとも反転して引き返すか。そのどちらが安全で容易かは、今更言うまでもなかった。

そしてそのような未来を示して見せたのは、ハンスの優しさでも何でも無い。“疾風怒濤”の二人は本気で、その選択肢を考慮に入っていた。

「それは無いだろう」

相変わらず、アクセルは動揺を見せない。そのことが何となく、ハンスの癪に障った。

「“疾風怒濤”は、傭兵ギルドに所属しない、フリーランスの傭兵なんだろう？ 保証人がいない“疾風怒濤”にとって、前払いで金を渡されながらバックレるのは自殺行為だ」

「この場の全員の口を封じれば、残念ながら死人に口なしだが？」  
「そんな荒技をするくらいなら、素直に従ってくれ。それに、今更マザリー二枢機卿を殺しに戻るつもりか？」

「……ふんっ」

「あーあー、もう、つくづく可愛げのねえガキだこと」

ハンスは鼻で笑い、マルセルはほやくように天を仰いだ。

「生きてゼルナに辿り着けたら、イシユタルの館にいる、バルシヤかクーヤに従ってくれ」

「バルシヤにクーヤ、ね……」

「じゃあ……頼んだっ」

言つべき事を言つと、アクセルは駆け出す。その途端、周囲の襲撃者達にも変化があった。

「いたぞっ、こつちだっ！」

誰かの野太い声が放たれる。駆け出したのは、アクセルのみ。ハンスもマルセルも動いてはいない。そして襲撃者の矛先は、真っ先に、一人になつた少年へと向けられた。

（知っていたのか、あのガキ……自分がターゲットだと）

ただ孤立した者から狙つたのではない。襲撃者たちが狙うのは、一番背の低い、あの少年だった。風の魔法で土煙を巻き上げ、それに隠れながら森へと向かうアクセルの背を見送りながら、ハンスはそう結論付けた。

「で？ どうすんの、兄貴」

襲撃者達は粗方、アクセルを追って行ってしまった。残った者も何人かいるが、いずれもやる気は無いようで、牽制するようにマジックアローを放ってくる。

逃げるなら逃げろ……そう告げられているようだった。

「どうする……とは？」

「いやほら、結局あのガキにつくの？ それとも帰る？」

「なあ、マルセル。気付いたか？」

「え、何を？」

質問の応酬に初めて答えたのは、ハンス。

「ここまではほぼ休みなしで馬を飛ばした。しかしあの小僧は、まだあれだけ動ける」

「……確かに」

「そこまでなら、ただの元気な子どもだ。だが、あいつの魔法の実力はラインクラスでありながら、トライアングルやスクウェアと遜色ない風読みが出来る。これはどういう理屈だ？」

「いや……俺に聞かれても」

答えられる筈が無い質問をされ、困惑するマルセルだったが、兄貴分が出した結論がどちらかは、はっきりとしていた。

「俺は……あの小僧よりも強い、あの小僧に勝てるメイジは、山ほど知っている。だがな、マルセルよ。あいつと同じメイジは、一人として知らない。あの小僧を失うのは、大いなる風の、大いなる損失だ」

「……了解」

ハンスに続き、マルセルも杖を構え、精神力を高める。

「なあに、簡単だ」

ハンスは笑った。

「あの小僧を追いかけ、後ろから始末すればいい。あの小僧は前から始末するだろう。それだけだ」

夜明けだった。東から覗き出た太陽が、周囲をオレンジに染め上げる。それと共に、ハンスの兇悪な笑みが露わとなった。

そして“疾風怒濤”は一陣の風となり、森へと向かう。彼等を囲んでいた僅かばかりの傭兵達は、既に引き裂かれ、その屍を晒していた。

一人の男が、椅子に腰掛ける。

その椅子は、例えば国王が使者に謁見を許した時のような、例えば王女が肖像画を描かせる時に腰掛けるような、その類のものではない。アームチェアだ。装飾も無く、デザインも古風。ただ、良質のライカ櫟を使い、皮張りは水牛。座り心地の良い、無骨な威厳を感じさせる椅子だ。

その椅子に、一人の男が腰掛ける。その男の服装もまた、余計な

装飾など無い。色は黒か、灰色がいい。地味とも言えるような服だ。その男は足を組み合わせ、左拳を握り、左の肘掛けで頬杖をつき、身体もわずかに左に傾けている。右手は、そつと前に差し出されている。

そして、誰か……これは誰でもいい。例えば、部下でも。例えば、商人でも。その誰かは、跪き、その右手を受け入れ、忠誠を誓う。畏怖を示す。敬愛を伝える。椅子に腰掛けた男は、ただ、当たり前のようにその想いを受け取る。

自分はその光景を、その部屋の壁際……いや、窓際。もしくは、椅子の後ろから眺めている。

いつしかアクセルの頭には、マフィア映画の一場面そのものの、そんな光景が浮かんでいた。

決まらなかったのは、椅子に腰掛ける男の顔。それは若きアル・パチーノであることも多かったが、大抵の場合、靄がかかったようにぼんやりとしていた。

試しに、鏡で見た自分の顔を当てはめてみたことがある。しかしそれは、あまりにもそぐわなかった。一体どんな顔を、誰の顔を当てはめればいいのか、まるでジグソーパズルの残る一つのピースを探すように、アクセルはずっと考えていた。

(俺じゃ……駄目なんだ)

狭い木立の間、一人の傭兵が、剣を真つ直ぐに突き出してくる。狙いは、足。アクセルは軽く地面を蹴ると、その白刃に左足を置き、右足の爪先で傭兵の顎を蹴り上げた。

何本か、矢が襲いかかる。マントを掠め、たった今蹴り上げた傭兵のこめかみに突き立つが、アクセルに血を流させるには至らなか



った。

(矢は……まだあるのか。『フライ』は使わない方がいいな)

初めは遠くに、ぼんやりと感じる脅威。それは近づくにつれ、はつきりと輪郭が出来、そして肌を刺すように脅す。

(……頭か)

アクセルが足を曲げ、頭を下げると、木の幹に矢が刺さった。立ったままだったなら、左耳から右耳へと綺麗に突き抜けていたかも知れない。

振り向きながら、矢が飛んで来た方向へ『マジックアロー』を四発放ち牽制、そして再び森の奥へと走り出した。

(“椅子に腰掛ける男の顔”は……もう、換えがきかないんだ)

空想の中の男の顔に、初めてナタンを当てはめてみた時、あの時はただ違和感がなさそうだけだった。しかしあの時以来、もう、他の誰かの顔を試すことは無くなった。ナタンの顔は急激になじんでいき、今ではあの空想の光景を思い浮かべるだけで、彼の顔が現れる。

本当に彼は、そこまでの男になるのか。それは分からない。しかし、既に変更が出来ないのは事実だ。“椅子に腰掛ける男”は、“椅子に腰掛けるナタン”になってしまっていた。

(……死ぬなよ。死んでくれるな、ナタン。お前が、必要なんだ)

ひゅひゅんっ

二振りの剣が、風を縫う。襲いかかる二筋の白刃は、メイスによつて甲高い音と共に弾かれた。

「ふんっ」

弾かれた勢いを利用し、身体を回し腰を捻る。背を見せて攻撃を誘い、そしてナタンは剣を寝かせて並べると、スルトの首と腰を狙い、叩き付けた。しかしスルトは誘いに乗らず、膝を曲げて上の刃をかわし、メイスを立てて下の刃を防ぐ。甲高い音だった。

ナタンの脳裏に、何度か聞いた、女の悲痛な悲鳴が蘇る。続いて、それを聞いたびに沸き起こる不快感を連想する。そしてその隙を見破られ、彼が気付いた時には既に、スルトは肩から突っ込んできた。

「っ……!!」

身長も体重も、スルトの方が一段上。助走をつけた突撃ではなく、押し出すような体当たりだったが、それでもナタンの身体は人形のように弾き飛ばされ、数メートル後方の杉の幹に衝突した。

「げほっ」

そのまま杉の根本に座り込み、咳き込む。スルトは暫く、未だ彼の両手から離れていない双剣を眺めていたが、やがてメイスを腰に

納めると、ナタンに近づいて右手を差し出した。  
そして初めて、ナタンは剣の柄から指を解き、その手を掴んで引き起こして貰う。

「……だよなあ。体当たりもあるよなあ、そりゃ」

引き起こされながら、ナタンは感心したように、何度も頷いていた。スルトは呆れたように首を振る。

「常々思うが、ナタン」

「ん？」

「お前は、自分の身体を囿にし過ぎる。実戦では、相手は一人だとは限らんぞ」

「うーん」

自覚があったらしく、ナタンは自嘲するような曖昧な笑みを作ると、首の後ろを掻いた。

「駄目だ、どうしても、怪我したらベルに治してもらえばいい……そんな風に考えちゃって」

「いない人間を頼ってどうする。それに、あいつの治癒の魔法を一般だと思つな。俺から見ても、少々異常なレベルなのだ。まあこれは、治癒が苦手な俺の鼻屑目かも知れんのだが……」

擦り傷どころではない、裂傷や骨折ですら、アクセルは瞬く間に治してしまう。その腕前は見事なものだが、こうやって周囲の人間に、怪我というものをただの痛みだと錯覚させてしまうのは、副作用と呼んで差し支えないだろう。

ナタンは二振りの剣を鞘に納めると、スルトの言葉に応えないま

ま、軽く柄頭を掌で払った。

太陽は出ていない。どんよりと、緩やかに滴り落ちてきそうな程に重厚な黒雲が、青空を満遍なく塗り潰していた。夏とは思えないくらいに肌寒い。

「……一雨くるな」

ナタンに続いて事務棟に入る直前、スルトは独り言のように漏らした。

地下の風呂で汗を流した後、ナタンは自室へ向かった。待っていたフラヴィが、無言のまま鏡台を指し示す。貴族の婦人が使うような、上等な化粧台で、何故アクセルがこれをナタンの部屋に備えたのか、理由を聞いてみたことがある。その時アクセルは、見た目を気にしると、そんな風な事を言っていた。

今までほとんど使わなかった椅子を引き、鏡の前に腰を下ろす。

フラヴィは櫛を手にすると、ナタンの髪を梳いた。

「アンタ、結構くせつ毛なのに、櫛の通りはいいね」

「そうか？ 初めて言われたな、そんな事」

他愛もない会話。それを、どこか名残惜しそうに交えながら、フラヴィはナタンの髪を、丁寧な手つきで梳かし、少量の香油を染み込ませる。肩まで伸びた髪が、彼女の手によって軽く纏められ、後頭部で結われていくのを鏡越しに眺めつつ、ナタンは人差し指でさっと眉を撫でた。

「よっし、出来た、漢前っ」

満足のいく出来だったらしく、フラヴィは掌でバンツとナタンの

背を叩き、彼を立ち上がらせる。

「んじゃ、あたしはこれで」

「ああ、ありがとう」

ナタンが言い終わる前に、フラヴィはドアを閉めていた。

昨夜から、やけに肌寒い気がする。今にも降り出しそうな雨雲に覆われた空と相俟って、理由の有無に関わらず落ち込んでしまいうな天気だったが、ナタンは鼻歌と共にクローゼットを開いた。

ほんの数ヶ月前までは想像も出来なかった、着るものを選ばなくてはならないという贅沢。稽古の時の運動着から礼服まで、実に様々の服がハンガーを枕に眠っていた。ナタンは浴衣を脱ぎ、肌着を装備すると、革製の黒ズボンを穿き、金のバックルのベルトを通す。そして選んだ上着もまた、黒だった。その選択はほとんど無意識のものだったが、言い換えれば、ナタンの内側の顕現でもあった。

「……よし」

ナタンは上着のボタンを留め終え、ぽとりと呟く。そしてドアを開け、事務棟から娼館へと渡り、娼館の入り口で革靴を履くと、外に出た。

ざつ……と、靴が土をはね除ける音が重なる。

「行つてらっしゃいませ」

「行つてらっしゃいませええ」

一人が言った後、男達の、野太い声が重なった。

イシュタルの館、及びその周辺の治安維持に従事する“貝殻”達、総勢43名。揃いの貝殻紋の羽織を纏う男達が、ナタンの道を作る

ように、二列に並んでいた。メイジと非メイジの混合、誰も彼もが荒事に長けた屈強な男達。その彼等が、身分としてはただの平民であるナタンの前で、一斉に頭を下げる。

「おう」

それに臆すでもなく、尊大に構えるのでもなく、ナタンは軽く右手を挙げた。

「んじゃあ……行ってくる。後はよろしくな」

返事をするために、再び、男達の野太い声が上がった。

ナタンは微笑むと、彼等の間を颯爽とした足取りで歩いていく。男達も無言のまま、彼を見送った。男達の列が途切れた頃、ナタンはふと立ち止まり、視線を上へと向ける。足下にはベニティエの泉、そしてその視線の先には、イシュタルの像があった。

アクセルが作ったイシュタルという名の女神像は、門ではなく、娼館の方を向いていた。アクセルは娼婦の守護神だと言っていたが、成る程確かに、客を迎えるためではなく、娼婦を見守るための女神なのだろう。彼女は今日も変わらず、イシュタルの館を見守っていた。

「……またな」

そっと、ナタンは一言呟き、女神像から離れると、門に向かう。そこで更に、待ち受けている者がいた。その姿を認めた時、思わずナタンは立ち止まる。

「どうしたんだ、バルシャ」

ラヴィス子爵が予想を遙かに超える速度で帰還していたことに愕然とし、絶望感からか卒倒しかけたバルシャだったが、彼はまだ休もうとはしなかった。

バルシャはズボンに半袖のシャツという、普段着そのものの服装だったが、背には矢筒を背負い、左手に長弓を握っていた。

「……参りましょう」

彼は静かにそう告げると、背を翻し、歩き出す。ナタンも若干駆け足になると、バルシャの隣に並んだ。

二人揃って、通りを歩く。イシュタルの館へと至るその道の両脇には、手頃な価格の娼館や、それに関連した店が建ち並んでいた。もはや東地区は、ほんの数ヶ月前のゴミ溜めとは無縁である。

「ラヴィス子爵に呼ばれてるのは、俺一人だけ？」

「ええ、あなた一人です。武器も持たず、一人で来いと」

夜明け頃、イシュタルの館にはラヴィス子爵からの招待状が届けられた。そしてそれは、召喚状と呼んでも差し支えない。イシュタルの館の主人に、執政庁まで来るようにと、要約すればそれだけだった。

「まあ、あれだ。何か説教くらいされるだろうが、いきなり殺されるなんてことはねえだろ」

それが樂觀過ぎる考えだとは、ナタン自身も感じていた。しかしそれでも彼は、身に寸鉄すら帯びてはいない。

バルシャは何も言わなかった。

この街の裏の顔役とはいえ、それはあくまで非合法的な顔。ナタン

はあくまで、平民なのだ。そしてこの世の平民の命は、塵芥にも等しい。大義名分などあるうが無かるうが、貴族であるラヴィス子爵は何の躊躇も束縛もなく手を下せる。

寒気すら感じさせるような曇り空の下、二人は無言のまま、通りを歩く。

「あら、イシユタルの旦那さん」

風俗街を抜ける頃、そう言ってナタンを呼び止めたのは、一人の恰幅の良い女将だった。彼女が顔を出している扉の上には、“ヘビイチゴの館”の文字がある。更にその看板の上、二階の窓の手摺りから、化粧をした女が手を振っていた。

「よう、ジュリーの姐さん」

ナタンも挨拶を返し、二階の女にも手を振り返す。

「お散歩ですか？」

「まあ……そんなところだな。景気はどうだ？」

「お陰様で、と言いたいところですけどねえ。昨夜、予約を入れてくれてたお客さんが全員来なかったんですよ。まったく、こっちは折角料理や酒を奮発してたつてのに」

「そりゃ災難だったな。何でも、北東の街道が土砂崩れで通れないらしい」

「あらっ、本当ですか!？」

目を丸くする女将に、ナタンは黙って頷く。女将は顔に手を当て、曇り空を仰いだ。



「あーあー、何てこつたい。それじゃウチは、商売上がったりじやないか。ただでさえ領主様が不在で、ガキや小娘が街を仕切ってるつのに」

「おいおい、そういう事、大きな声で言うもんじゃねえよ」

「いいんですよ。どうせお貴族様なんかが、こんな時間にここに来るわけも無いですし」

吐き捨てるように言われたその言葉に、ナタンは密かに苦笑する。それを押し隠すかのように咳払いし、彼は再び微笑を浮かべて見せた。

「まあ、心配すんな。またウチのモンに、何とかするように言っとくよ」

「あらまあ、いいんですか？ そんな事をしたって、どうせお役人も、礼も言わなければ金も払いはしませんよ」

「アンタ等が商売あがったりってことは、ウチだって商売あがったりなんだ。黙ってたって、道が通れるようになるわけでも無し」

「そりゃそうですねえ」

女将は口を尖らせ、まだ何か愚痴を言いたげだったが、店の奥からの彼女を呼ぶ声に応え、大声で返事をする。そしてナタンに別れを告げた後、彼の脇に佇むバルシャにも声を掛けた。

「ああそつだ。残りモンで悪いんだけどねえ、バルシャさん。料理や酒が余っちゃって、大変なんだよ。折角だし、良ければ貰ってくれないかねえ？」

「いや……俺は……」

「おう、そつか。そんじゃ、有り難く頂いとくよ。ありがとな」

断ろうとしたバルシャの前に割り込み、ナタンは満面の笑みで答

える。反対しようとしたバルシャだが、女将はさっさと店の中に戻ってしまった。

「んじゃ、またな。ペラジー」

再び歩き出そうとしていたバルシャが振り向くと、ナタンが二階の女に手を振っているところだった。ペラジーと呼ばれた女も笑いながら手を振り返し、そのまま店の中へと戻った。

バルシャにナタンが追いつき、二人はまた、石畳の上を歩き出した。そして数歩も歩かない内に、バルシャはそつと尋ねる。

「……お知り合いですか？」

「あ、ジュリーの姐さんか？ ほらこの前、客を奪った奪わないで喧嘩になりかけた店があつただろ。そん時の仲介で、助けてくれたんだ。いやあ、流石に娼館の女将だけの事はあるぜ。どっちが嘘ついてんのか、スパツと見抜いちまって……。そうだ、知ってたか？ あの女将さん、昔、フラヴィとも喧嘩したことがあつて、そんな時も……」

「あの、ペラジーという女は？」

「え、ああ、あの娘か。先月くらいだったっけなあ。ウチの女の子が足りなくなった時に、ジュリーの姐さんが助っ人に寄越してくれたんだ。客のご機嫌を取るのには、はつきり言って苦手なんだが、面白い話を山ほど知ってるんだ。場が白けそうになると、すかさず話題を変えたり……。いやあ、見事なもんだった」

まるで自らの手柄話を語るかのように、ナタンは楽しげに話してみせる。

しかし、街の中央、噴水の広場まで差し掛かったところで、ふとナタンは黙った。怪訝そうにバルシャが横を向けば、彼は頭をかきながら、横目でバルシャの顔を見ている。

「……なんですか？」

そう尋ねられたナタンは、暫く言いにくそうにしていたが、やがて愛想笑いを浮かべながら口を開いた。

「いや、ひよっとして、こんな話はずまんなかったか？」

「……………」

心底呆れたような顔で、バルシヤはナタンを見つめる。その表情に、ナタンは思わず怯んでしまった。

「……ボスが、手下の顔色を窺ってどうするんですか」

「え、いや、だつて。むつつり黙っちまったから」

「寧ろ私は、この状況でそんな風に振る舞えるボスに、尊敬の念すら抱いていますよ」

「……なあ、バルシヤ。ひよっとしてそれって、皮肉ってヤツか」

「ええ、そうです」

誤魔化そうとすらせずに、バルシヤははっきりと言つてのける。それに益々怯んだように、ナタンは顔を歪めて見せた。

「……あ、ほら」

バルシヤの肩を叩き、ナタンはもう片方の手で噴水を示す。普段は人々がその縁に、休憩や待ち合わせの間に腰掛けているが、天気の良い日か、今は一人一人いなかった。そもそも、街を歩く人々からして少ない。

「……………噴水ですね」

バルシャの無機質な感想に辟易しながら、ナタンは続けた。

「言っただけ？　ここなんだよ。俺が、ベルと初めて会ったのは」

「噴水の前で、ですか。運命的ですね」

「いや、実際は、あいつが俺を見つけたんだけどな」

ナタンの指がすつと動き、ローランのホテル“初月の館”を指し示す。

「あそこ、ローランのホテルだろ？　俺、ベルには気付かず……  
って言うか知らずに、あの路地に入ってたんだよ。それをベルが  
追いかけたんだ」

「路地裏で、ベルさんと会ったので？」

「ああ、そうだ。俺がボコボコにされてるところに、ベルが助け  
に来てくれたんだ」

「それはそれは」

「まあ、俺をボコボコにしたのはアニエスなんだけど」

ぶほうっ、と、革袋が破裂するような音が響いた。バルシャが俯  
き、右手で顔を覆っている。

ナタンはその顔を覗き込もうとした。

「おい、今、吹き出しただろ」

「……………」

バルシャはそれには答えず、長弓を握ったままの左腕をぶんぶん  
と振って、ナタンの顔を遠ざける。それでもしつこく迫ってくる彼  
に耐えきれなかったのか、突然走り出した。

「おいっ、ちょっと、待てよ」

慌ててナタンも後を追う。

走り出したと言っても、全力ではなく、駆け足程度だ。忽ち追いついたナタンがバルシヤの襟を掴むが、彼は身を振って逃れる。するとナタンは更に、矢筒に手を伸ばす。それから再びバルシヤが逃れているうちに、いつの間にか二人は、噴水広場から執政庁へ至る道を随分と進んでいた。

「……ふっっ」

ようやく表情を落ち着けたのか、バルシヤは顔を上げ、息を吐き出す。ナタンも軽く額の汗を拭いながら、彼の隣に並んだ。

「っっーか、バルシヤ。笑い過ぎだろ。そんなに滑稽だったのか」  
「すみません。場面を想像したら、つい……。しかし、何でそんなことに？」

「……バルビエって商人に、家族を皆殺しにされてな。その敵討ちの途中だった」

バルシヤは息をのんだ。

そのことを、知らなかったわけではない。ローランからも聞かされてきた。しかし元々家族がいなかったバルシヤにとって、その痛みを想像することは出来ても、理解することなど不可能だった。

育ての親の死すら、バルシヤはあっさりと飲み込んでいた。怒りが湧かなかったわけではないが、非合法的な世界に生業を得た者の宿命だと、スムーズに納得することが出来た。

しかし今、実際、ナタン自身の口から告白され、そしてその彼の声が明らかに色気を失っていたことに、自分が踏み込んではいない場所をバルシヤははつきりと感じ取っていた。

「……それは……」

彼の記憶には、ナタンにかけるべき言葉が存在しない。  
言い淀むバルシヤに、ナタンはフツと、短く笑って見せた。

「まあ、気にすんな。俺自身、気にしてねえわけじゃねえが……最近、ようやく、な。こうやって、誰かに話せるくらいになったんだ」

いつの間にか、ナタンの歩みは早まっている。バルシヤは少し慌てて、彼の後ろに続いた。

「……なあ、バルシヤ」

「はい」

「さつき、女将さんが料理を勧めてくれた時、断ろうとしたら？ ああいうの、やっぱ、素直に貰っとくべきだと思うぜ」

「……しかし、我々は、あのような見返りを求めるわけではありません。食うに困っているわけでも無いのです。それに、どこかで歯止めをかけなければ、いつかは、なし崩しに……」

「あれはな……一種の、税金みたいなもんだ」

「税金？」

バルシヤは怪訝そうな顔を見ると、更に歩みを早め、ナタンの隣に並ぶ。

「領主は下々から税金を吸い上げて、下々に対して責任を持つんだろ？ それは、俺らも一緒じゃねえか？ 普段から相談に乗って、それで時々、ああやって贈り物を貰う。俺はな、それは別に、間違ったことじゃ無いと思う。……金を受け取れとは言わねえよ。けど、

ああやって料理を貰ったり、飯屋のオヤジに昼飯を奢ってもらったり、そういうのはあっていいと思うんだ。俺らが皆を助け、皆が俺らを助ける。それが本当に、受け入れられるってことで……この街で、この街と生きていくってことじゃねえかと思う」

「……何故、今、そんな話を？」

「さあ、何でだろな」

バルシャの詰問のような口調には、多分に危惧が含まれていた。しかし、その彼の心配を宥めるかのように、ナタンは軽い口調で空惚ける。

「死ぬつもりは……無いんですよね」

「当たり前だ。俺だって、死にたいとは思ってない」

「……なら、いいです」

空の色がより一層、その暗さを増すかのように灰色雲を重ねた頃、二人は執政庁に辿り着いた。そして庁舎へと至る門の前に、守備兵たちが並んでいる。その先頭には、少女と呼んでも差し支えないような年齢の、女メイジが立っていた。

「止まりなさい」

ナタンに杖を向け、リーズは言い放つ。

彼女は悪い女ではないと、アクセルはそう言っていた。そしてそれは、ナタンも同感である。

「召喚したのは、たった一人の筈だが？」

努めて男のような口調を使うその姿が、どこかアニエスと重なった。ナタンは背後のバルシャを振り返り、首を振ってみせる。

「この後、狩りにでも行こうかと話してしましてね。勿論、コイツは連れて行きませんよ。私一人で、子爵様にお会いします」

ナタンのその言葉を保障するかのようになり、バルシヤは何歩か後退った。

長弓と矢筒を携えているのは問題だが、たった一人が弓を持つて暴れたところで、守備兵達との戦力差は歴然。注意しなければならぬのは、どこからか執政庁に侵入しようとする伏兵であると判断し、リーズも特に追求はしなかった。

そして何より、リーズや守備兵たちは、ラヴィス子爵から勝手な真似はするなと釘を刺されている。事実、現在執政庁舎の内部には、子爵一人しかいなかった。

「それでは……お邪魔します」

リーズのディテクトマジックにより、非武装であると認められた後、ナタンはそっと、右拳を上空に向けて突き出しながら、門の内側に消えていく。

バルシヤはただ、その背を見つめていた。



ナタンにとつては意外なことに、たった一人で執政庁の中へと通された。信用されたと取れば聞こえはいいが、何しろここへ来たのは一度だけ。案内も無しに歩き回れるほど記憶してはいない。

（前の時は、ローランが一緒だったんだよなあ。……いや、っつーかこれ、どこ行けばいいんだ？）

一度リーズたちの所まで戻り、案内を請うのも間抜けな気がした。大声を張り上げてみようかと思った時、石造りの床に白墨で、矢印が描かれているのを見つけた。その先を目線で追うと、やはり次の矢印があり、それが奥へと続いている。

（何だこりゃ、横着だな……。こんな手の込んだ演出するくらいなら、案内を寄越せばいいのに）

いや、そもそも白墨で床に矢印など、子ども道案内と変わりが無い。無骨な石造りの床に描かれた白い矢印など、うっかりすれば見逃してしまいそうで、ナタンはふて腐れながらも、注意深くそれを辿っていった。

矢印は中庭の回廊をぐるりと回り、一階の、裏庭に面した部屋に出る。窓から見える裏庭は、訓練場らしい。更に奥には、焼け落ちた建物が見えた。恐らくあれが、かつての守備隊の宿舎なのだろう。そのまま訓練場へと下りることも出来たが、矢印は外へは向かず、大部屋の奥を示していた。ナタンはそつと、矢印以外の床を見回す。所々、斑点のように床が真新しくなっており、テーブルや椅子が置かれていたことがわかる。どうやら、この部屋は食堂か何かで、物は粗方仕舞い込んだのだろう。物置に入りきらなかったのか、壁際にいくつか、粗末なテーブルと椅子が重ねられていた。

ナタンは立ち止まる。

矢印の終着点に、円が描かれている。そしてその床の円の内側に、無造作に一振りの剣が放置されていた。そこらの武器屋で手に入れられるような、数打ちのブロードソード。

拾え、ということなのだろう。しかしナタンは、躊躇った。手にした途端、その辺りに隠れていた人間が姿を現し、あらぬ罪を着せてくるかも知れない。非武装でここまで入れたのなら、ただ拾えというだけではなく、使えということでもありそうだった。

「剣を拾いなさい、ナタン」

突如として、名を呼ばれた。誰しもが、咄嗟に背後を振り向く状況。しかしナタンは、それをしなかった。

声が続く。

「あなたは、不運だ。何も知らなければ、何もしなければ……：やりにもよって、ゼルナの東地区に手を差し伸べたりしなければ……：ただの、家族を皆殺しにされた哀れな男として、同情されながら生きていくことが出来た」

かつんと、靴音が響いた。ナタンは振り向かない。

「あなたは、不幸だ。アクセル・ベルトラン……：あの魔性の少年に魅入られた、不幸な男だ。こうしてとうとう、取り返しの付かない場所へと至ってしまった。もう、引き返すことなど出来ない。ここは墓場であり、墓穴だ。あなたはただ、そこに落ちるしかない」  
「随分と……：余裕な事言ってくれるな」

振り向かないまま、ナタンは返した。

「生き急ぐは、若者の特権。そしてその対価を払わせるのは、大人の責務」

「じゃあ、爺さん。死に急ぐアンタには、この俺が、その対価を払わせてやるうじゃねえか」

ナタンの爪先が、剣の下に差し込まれ、そして彼の手へと柄を運ぶ。左手で鞘を握り、右手で柄を握り、一息に振り抜く。その弧を描く切っ先に導かれるようにして、ナタンはついに、背後の男を振り向いた。

「剣を拾え……そう言ったのはアンタだけ。取り返しの付かないのは、アンタの方じゃねえか？」

「ああ、何てことだ。イシュタルのナタンよ。あなたは、剣を抜いてしまった。それで自害すれば……まだ、救いがあったろうに」

ローランは右手を顔に寄せ、嘆くように天井を見上げた。彼の骨張った左手には、ナタンのそれと同じ、ブロードソードが握られている。

降り出した雨が、静かに、裏庭の土を染め上げていった。

## 第二十九話<喪死>

「…………昨日降らないと思ったら…………」

フラヴィは愛用のロッキングチェアから立ち上がると、窓の前に立ち、腕を組んで溜息をつく。空を覆う黒雲が、いつもより近くに降りて来ている気がした。大粒の雨が窓ガラスを叩き、館をノイズが包んでいる。

「あーあ、もう。どんだけ降るんだよ」

降り出した頃、娼館を見回り窓の閉め忘れがないかを確認した。そして自室に戻ってきた時にはもう、小雨は豪雨となり、親指ほどもありそうな雨粒を叩き付けてきていた。

昨日、昼の間に、ストールを用意していた。これ以上寒くなるなら、上着も必要かも知れないと思いつつ、フラヴィは踵を返し、部屋の外へと出る。一応は彼女も娼婦なのだが、最近では裏方に回ることが多い、もう随分と客を取っていなかった。その為、部屋は娼館一階の端にある。

ざあざあと、凄まじい大雨だった。雨樋によって運ばれてきた水が、ポンプのように勢いよく噴き出している。

(…………そういや、あいつら、傘持ってなかったけど。流石にもう、役所には着いてるだろうし…………)

肩に掛けたストールを少し引き上げ、事務棟に渡ると、フラヴィ

の前から二人がやって来た。いや、正確には一人が歩き、もう一人は猫のように襟を持ち上げられている。

「こっ、こらっ、いい加減に離せっ」

「出来ん相談だ」

じたばたと暴れるアニエスを片手で持ち上げているのは、大男のスルト。時折少女の踵が彼の脇腹や腹に当たっているが、びくともしない。

「……何してんだい、あんた等」

その光景に思わず頬を緩めながら、フラヴィが尋ねた。彼女に氣付いたアニエスは、慄然として大人しくなる。スルトが立ち止まり、それに答えた。

「こいつが、一人で脱け出そうとしていた」

「違う、加勢に行くだけだ」

「加勢？」

アニエスの反論にフラヴィは首を傾げ、スルトは溜息混じりに首を振る。

「言っておくけどな、私にだって、切り札くらいあるんだぞ」

「切り札って？」

「それは言えない」

「……言えないのが切り札でもあるが、言う価値の無い切り札もある。お前のは後者だろう」

「決めつけるなっ」

アリエスは自分をぶら下げるスルトの腕を掴み、乾物のように吊されたたまぐるりと振り向くと、もう片方の手で彼の顔に人差し指を突きつける。

「だいたいだな、スルト。前々から言いたかったところがある」

「何だ？」

「いいか、私はな、この組織の初期メンバーなんだぞ。ベル君、ナタン兄、私の順だ！ バルシャですら、私の後輩なんだ！ にもかかわらず何だこの態度はっ、もつと先輩に敬意を払え！」

「では先輩、どうか大人しくお待ちを。昼飯の時間まで、お昼寝でもされてたら宜しいんじゃないですか」

「おいこらっ、厄介払いか！ 待てっ」

また暴れ出したアリエスだが、相変わらずスルトの精神も肉体も動じはしない。そのまま猫の子を連行するかのように廊下を渡り、階段を上がっていった。

暫く二人を見送っていたフラヴィは、ふと振り返ると、彼等とは逆に娼館の奥へと進む。客も雨が降らない内に全員朝帰りを行い、ただザアザアと、雨の音がやたらに響いていた。

「なあ、姉御お」

そしてそんな中、寝間着をだらしなく着崩したギャエルが、フラヴィを見つけて話しかけてきた。口を開けて大あくびをする彼女のほだけた胸元に、いくつか口吸いの赤い跡が残っている。ボサボサの髪を掻きむしりながら、彼女は再びあくびをした。

「何だいあんた、だらしない」

「別にいいだろ？ 昨晚の客、もう、しつっこいくせに下手クソでさあ……。 “気持ちいい？ ねえ、気持ちいい？” とか聞くなっ

つーに」

「……成長したじゃないか。野良猫の頃のアなたなら、客の胸ぐら掴んで罵ってただらうに」

「むう」

からかつように言うフラヴィに口をとがらせ、ギャエルはしゃがみ込む。下着すらつけておらず、股の付け根まで見えた。

「ああもつつ、そんな格好してんじゃないよ。ナタンやバルシヤが見たら何て言うか」

「まあまあ、二人とも出かけてるんだろ？」

ナタンとバルシヤの外出の理由を知るのは、娼婦の中ではリリー又だけである。まさかイシユタルの館の存亡を賭けたものと、ここまで気付ける者はいないだろう。

それ以上反論する気も起きず、フラヴィは軽く天井を見上げ、それから首を振った。

「あ、そつだ」

当初の目的を思い出したのか、ギャエルは跳ねるように立ち上がると、左右を見回す。

「クーヤなんだけどさあ、知らない？」

「あの爺さんがどうかしたのかい。確か昨日の夜は、マノンの部屋だった筈だけど……」

「気分直しに一発ヤリたかつたんだけど、見つからないんだよ。マノンも、起きたらいなかつたって言うしさあ」

「……………」

あの不敵な老人のどこに、女二人を相手にする精力があるのか……それも疑問ではあるが、そもそもその正体からして得体が知れず、アクセルが保証人になっているのみ。あの異常に疑り深く、滅多に他人を信用しない少年が、初対面で心を許したとなれば、それは何よりの信頼にも思えるが、それにしても少々迂闊すぎるのではないかと思う。自分に吸血鬼の血が混じっていたように、あの老人も、実は純粋な人間ではなく亜人の類なのではないかと、そんな疑問が浮かぶのも当然と言えた。

しかし、それら世間体を気にしたような常識を取っ払って見ると、フラヴィの奥底には何故か、クーヤに対する奇妙な信頼感があつた。アクセルの血を吸収する時のような、身体が洗われていくような清浄感とはまた別種のもの。包容力、とても表現すべきなのだろうか。心が満たされていくような、暖かい気持ち。

(……ま、いくら男に飢えてよーが、あんな爺さんを相手にしようとは思わないけど)

どこへ行ってしまったのかと、ギャエルは彼方此方を見回している。勿論、それで見つけられるわけも無い。

「とにかく、諦めてさっさと寝な。見かけたら、あたしが伝言しといてやるから」

「……うーん」

不承不承頷き、ギャエルは大人しく階段を上っていった。ちゃんと下着くらいつけなよと、その背に捨て台詞のように投げかけると、フラヴィはまた窓を見る。

「……喧しい天気だよ、まったく」



誰に聞かせるでもなく眩き、彼女はまるで追い払おうとするかの  
ように、雨雲を睨んだ。

執政庁の門の下で雨宿りする、急拵えの守備隊の靴は、既に泥で  
埋まっていた。ブーツの内側にまで染み込んでくる雨水は、少し動  
かせば音を立てるほどであり、耐え難い不快感を与えてくる。

「……………」

彼等の先頭に立つリーズは、じっと、顔を前に向けていた。

最近街でよく見かけるようになった、貝殻の羽織の男が、ずぶ濡  
れのまま、門の外側に立っている。視線も動かさなければ、顔にか  
かる髪をのけようともしない。まるで死体が立っているようだった  
が、真一文字の傷の上にある、二つの目だけがぎらぎらと光ってい  
た。その視線が向けられているのは、リーズの方向。しかし、彼の  
視線は彼女を擦り抜け、執政庁の奥へと向けられていた。

身じろぎもしない弓の男は、主の帰りを待つ忠犬のように、ただ  
静かにそこにいた。リーズの背後の守備兵たちが、ボソボソと何事  
か話している。彼等の視線は、さながら幽霊を目の当たりにした時  
のようなそれだった。

彼が手に持つ弓、それに射られる矢が、一体どこへ向かうのか。  
その視線に気圧されていることを自覚しながら、リーズはそれでも  
バルシャから目を離そうとはしなかった。

一方のバルシャだが、彼が弓を持って来たのは、合図の矢を射る為である。中に花火が仕込んであり、豪雨ではあるが、イシュタルの館への合図としては十分に機能してくれるだろう。勿論、少女達を逃がす時の為の。

残りの矢は、ナタンが帰って来なかった時の為だ。守備隊を何人相手にすることになるうが、絶対に、矢は一本だけ残す。そして残ったその矢を、絶対に、ラヴィス子爵の額に突き立てる。

“その時”を待つ両者は、今はただ、豪雨の中で待つことしか出来なかった。

ブロードソードが振り上げられる。高々と屹立し、さながら断頭台の刃のように、一直線に振り下ろされてくるであろうそれを予感。その予感に晒された大抵の人間がそうするように、ナタンも手に持ったブロードソードで受けようとする。

しかし、ローランの剣は雨粒のように真っ直ぐには落ちなかった。さながらツバメのように弧を描き、ナタンの足を狙う。ナタンは密かに鼻で嗤うと、床を蹴って跳躍し、右足でローランの顎を蹴り上げようとする。が、ローランは身を引いてそれを避け、更に一足跳び下がった。

「……基本は、心得ているようですね」

「ハッ。この程度でお褒めに与れるとは、光栄でございます……  
とでも言えばいいのか？」

ローランが剣術使いだということは、ナタンも知っていた。アクセルの祖父を、盗賊から守ったと伝えられるほどの腕だということも。

振り下ろすと見せかけて足を斬り飛ばす、傭兵の剣術。以前は、アクセルにもその手で散々にやられてしまったものだが、流石にもう、易々と斬られてしまわない為の動きは出来るようになった。

「……聞かせるよ、ローラン」

跳び下がったローランを追わず、ナタンは口を開く。

「何で裏切った？」

「裏切ってはおりません。私は初めから、ラヴィス子爵の麾下にあります」

恐らくは、アクセルの祖父を助けたあの時からか。少なくともその頃から、ローランはラヴィス子爵家に仕えていた。

「……で、どこまでだ？」

「どこまで……とは？」

ローランは軽く首を傾げる。

客に対する顔でも、今までアクセル達に接してきた顔でも無い。ナタンが初めて見る、敵意を含んだ冷酷な表情。己の心を殺して人の命を奪う、殺人者の顔だった。

ナタンは床を蹴り、飛び込むようにしてローランに斬りかかる。

ローランは腰を沈め、それを真正面から受けた。重なった刃が、悲鳴に似た金切り声を上げる。

「アクセルが黒幕だってことは、当然報告したんだろぅが……。テファのことは？ フラヴィのことは？」

「ああ……それは流石に、言えるわけありません」

「そうか、なら良い」

刃がするりと離れ、ナタンの剣が回った。ローランも手首を回し、脇腹へと襲いかかる刃を防ぐ。一度剣を引いて身を沈め、ナタンは喉を狙って突きを繰り出す。ローランは独楽のように回転すると、懐の内側へと入り込んだ。

「ぐっ」

回転した勢いそのまま、柄頭で腹を打たれ、ナタンの歯の間から呻きが漏れる。距離を取ろうと退がる彼を許さず、ローランは再び身体を半回転させながら、彼の頭上へと剣を振り下ろす。それを弾き、ナタンは尻餅をつきながら後転、そして立ち上がり剣を構え直した。

「……面白かったか？ 滑稽だったか？」

「……………」

「大人にはれてるとも知らず、無邪気に自分の城作りに精を出す子どもを見るのは」

「無邪気……とは言えないでしょう」

「まあ確かにな」

ナタンは軽く笑みを漏らすと、手に持った剣を握り直す。ローランも、今度は真横に構え直した。

「……不幸な男だ」

「そりゃ、誰のことだ？」

「ちようど今、私の目の前にいますね」

視線を強めながら、ローランは続ける。

「そうやって剣を持つことなく、一生を終えることも出来たでしょうに」

「……………」

「商人バルビエの金、子爵の息子アクセル・ベルトランの権力、傭兵メンヌヴィルの武力……その全ては、偶然に手に入ったもの。

それはさながら、子羊に大鹿の角を与えるにも似ています。角を持つのが、子羊は子羊。角を得ることは、幸運ではなく不幸なのです」

「つまりそりゃ、ボスの俺が力不足だったってことか」

「はい、言うまでもなく」

まるでそれを証明しようとするかのように、ローランは飛び出した。先ほどまでとは一転して、突撃のような迫力がある。

「ざけんなつ、ジジイ！」

怒声と共に心を奮い立たせ、ナタンも斬りかかる。ローランの攻撃を弾き、自分の剣を彼に食い込ませようとするが、逆に刃が肩を掠めた。

刃が激突するたびに、指に震えが来る。身体のどこかに、火かき棒を押しつけられた痛みが走る。

（くそっ、だめだ……）

若さと体力で勝っていようが、剣の腕と経験値は、ローランが圧

倒していた。

振り下ろそうとした刃を受け止められ、がら空きになった胴体に前蹴りを受ける。ナタンは咄嗟にその勢いを利用すると、大きく跳び下がった。

ローランは追ってこない。流石に息が続かなかったのか、肩を静かに上下させていたが、ここで斬りかかれればまた、こちらが一方的にダメージを重ねることになるだろう。

手や足の所々に感じる、火傷のような痛み。今までも散々に感じてきた痛みだが、何故か今回は、それに耐えるのにも苦勞する。

(……本物の、自分より強いヤツとの殺し合いか……)

殺される可能性が高い、その緊張感が、徐々に余分に体力を消耗させている。

「……少々、剣の腕には自信があります」

「今更かよ……」

「そしてあなたを上回る私の剣でも、メイジには勝てませんでした。それほどに、メイジと非メイジとの差は大きいのです」

火の玉を放ち、風の刃で襲い、土のゴーレムを操り、水で傷を癒す。いやそれ以前に、レビテーションで持ち上げられてしまえばまず抵抗できない。そんな相手に剣一振りで挑むなど、正気の沙汰ではなかった。

アクセルがあっさりと殺して見せた傭兵メイジも、ローランにとっては手も足も出ない怪物。

「確かに、現在、あなたの組織は強大な力を有していると言えます。こんな片田舎に不釣り合いな、ね。……何故あなたが駄目なのか、はつきり言いましょうか」

「……是非聞きたいね」

口にたまっていた血を吐き捨て、ナタンは口元を拭う。

「野望、です」

「……野望？」

「金を手に入れたい、いい女を抱きたい、上等の服を着たい、他人を跪かせたい、尊敬されたい、恐れられたい……その欲望が、なさすぎます。聖職者にでもなつたつもりですか？ それとも正義のヒーロー？ 予言……いや、断言しましょう。あなたは近い将来、部下にボスの座を逐われる」

ローランは剣を持ち上げ、その切っ先でナタンを指し示した。

「折角の武力も、治安維持の為だけに使うのなら宝の持ち腐れ。裏組織であるからには、のし上がらなければなりません。そしてそれを実現させる強い野望が、あなたには欠如している。それは何故か……。あなたはたまたま、本当に偶然に、その座に納まったに過ぎないからです。他の、例えば通りを歩いている酔っ払いにすら、あなたの代役は務まります。あれほどの人材を抱えていながら、潰す方が難しいのですから」

凶星だと感じたのか、ナタンは視線を伏せる。更に、ローランは重ねた。

「野望とは、つまり夢。組織に、現状維持など許されません。常に夢を見、常に上昇し、常に拡大しなければならない。ボスの夢に、部下達も夢を見るのです。……奴隷市場の掌握によって、クルコスの街の裏の鼎立は崩壊しました。何故、その勢いのまま、クルコスの裏を支配しようとしなかったのです？ あなたには、夢が無い。」

荒くれどもの上には立てない、善良な平民なのです。アクセル・ベルトランはそんなあなたを引き上げ、強引にトップに据えてしまった。あまりにも、残酷に過ぎる仕打ちだと……私は思います。言うなれば、あなたは被害者でしょうね。貴族の息子の気紛れによって、人生を狂わされた哀れな……」

そこまで言つて、ローランは気付いた。いつの間にか、ナタンが顔を上げていることに。

「……一つ聞きたい」

彼の視線に、ローランの肌が静かに粟立った。

ナタンの変化を、ローランは見逃していた。先ほどまでは一飲みにさえ出来てしまいそうな若造であったのに、いつの間にか、巨大になっている。こちらが押し潰されてしまいそうな程に巨大なそれは、精神の具象化だった。まるで、濁流に晒され続けた盤石のように泰然としている。果たして自分に動かせるのかと、そんな疑問が頭を掠めた。

「いい女を抱きたい……金が欲しい……いい服を着たい……。その程度か？」

「……………どういうことでしょうか？」

ローランは、父親が大嫌いだった。

決して自分では勝てそうにない存在だという、その絶対性を、何よりも嫌悪して憎悪した。

父親と相對する時、いつもローランは、ちょうど今と同じように、歯を食いしばる。カチカチと、音を立ててしまわないように。

「ヤクザ者のボスつてのは、皆……その程度の野望でやって行け



るのかつてことだよ」

ローランは、思わず目を見開く。

ナタンがまるで、枯れ木でも捨てるかのように、ブロードソードを傍らに放り投げていた。

「じゃあ、俺の勝ちだな。俺の野望は、そんなものよりずっと…  
…デカインだから」

静かに、身を沈める。そして目は、真っ直ぐ、ローランの顔を睨み付ける。身体は、倒れるように前のめりに。

ローランが剣を構え直そうとした瞬間、ギリギリまで引き絞られていた矢のように、ナタンは放たれた。倒れかけた身体を起こしつつ、顔はローランに向けられたまま、一直線に。

一人の男が、自分の全てを以って、真正面からぶつかってくる。避ければ確実に敗北すると、ローランは直感した。避けてしまえば、恐らくもう、自分では彼を殺せない。

避けられないならば、突きで確実に殺すべきだった。しかしそれを選べなかった時点で、ローランは既に敗北していた。振り上げた剣で、ナタンの頭を割ろうとする。

「!？」

しかし振り下ろした剣は、ナタンの髪にも届かなかった。レバーのように回転しながら出された彼の腕に、刃が深々と食い込んでいく。刃は、骨で止められていた。

「おおおおおっ！」

痛みに打ち勝つため、そして力を振り絞るため、ナタンは吼える。

ローランはただ、その咆吼を目で見ているしかなかった。

ナタンの額が、ローランの顔面に衝突する。鼻の奥底から鉄臭い臭いが広がり、ローランは反射的に目を閉じたまま大きく仰け反った。両の鼻から血が吹き出す。ナタンは無事な片手を伸ばし、ローランの襟首を掴むと、引き寄せつつ再び顔面に額をぶつけた。

解放されたローランの身体が、人形のように床に崩れ落ちる。顔を攣め、呻きながら鼻を手で覆う彼の耳元に、ブロードソードが突き立てられた。

「悪い、ローラン……。俺はもう、とつくに、お前より強くなつてたようだ」

突き立ったブロードソードによりかかり、左腕を鮮血で染めたナタンは、そう言いながらローランの顔を覗き込む。

「勿体ないぜ、ローラン。何で、ベルを選ばなかった？ あいつに信頼されるなんて、これでもう、二度と無いだろうに」

ローランは無言のまま、そっと、瞼を開けた。ナタンは大きく溜息をつきながら、背を伸ばす。そして呆れたような笑顔になると、床のローランに右手を差し出した。

「そろそろ、聞かせてくれねえか？ ラヴィス子爵が、イシユタルの館を潰したい理由を……」

「悪いが、それは出来んな」

ハッと、ナタンは振り向いた。ローランのものではない、新しい声が聞こえた。背後を振り向くと、アクセルと同じ髪の色 of 貴族が、こちらに杖を向けている。

振り向いた瞬間、自分の身体が揺れた。その理由を探ろうと視線を下げたナタンの視界に、光が入る。

黒い服だった為、出血に気付くのに、二秒ほどかかった。胸にコインほどの大きさの、小さな穴が穿たれている。

（ああ……。マジックアローか）

彼は思わず笑ってしまう程冷静に、そう判断した。

「…………え？」

バシャバシャと、泥の跳ねる音が近づいてきていた。伝令か何かだと思っていたリーズは、突然フードを取り去った小柄な人影に、それだけしか言えなかった。

「アクセル・ベルトラン……今、戻った」

事務報告のように無機質に、アクセルはそう告げた。

ひどい有様だった。髪は乱れ、顔には泥がこびり付いている。それだけではなく、ボロボロに破れた服の所々に、模様のように血液が染み込んでいた。雨粒が洗い流したことを考えても、相当に出血していたのだろう。傷は全て治癒の魔法で塞いでいるが、その幼い身体の消耗は、火を見るより明らかだった。

「わ、若様……?」

確認するようにリーズが尋ねるが、アクセルは振り向き、バルシヤを見ていた。目を見開く彼に、リーズにはわからないよう、軽く視線を返す。そしてすぐに前を向くと、守備隊の中に割って入った。

「若様っ」

慌ててリーズが追い縋る。何故こんな状態で帰還したのか、それよりも先ず、アクセルを止めるのが先だった。

「お父上のご命令で、入ってはならないと！　そ、それに、この二人は……?」

同じく泥だらけの、二人の男。

「ハンスだ」

「マルセルだ」

二人とも、事も無げに言うと、アクセルの後に続こうとする。

「若様っ」

再びアクセルを止めようとしたリーズだが、ぐいと、信じられない程の力で胸元を掴まれ、引き寄せられる。斜めになった彼女の顔に、アクセルは無表情のまま言った。

「父上の一大事に、息子が助っ人を連れて戻った、それだけだ。邪魔をするな」

ただ、それだけ。それだけの言葉で、リーズは何も言えなくなつた。

迫力だけではない。アクセルは、他人の襟を捕まえて引き寄せせるような、乱暴な真似はしない。その上、こんな冷たい表情など見せたことはない。

驚愕で何も出来ず、ただ呆然と立ち尽くす彼女の脇を擦り抜けつつ、アクセルは外套を脱ぎ捨てた。残る二人も、それぞれ雨水を吸ったマントを泥の中に放り捨てる。

「あーあ、休みてえ」

試しにマルセルが弱音を吐いてみるが、アクセルは完全に無視した。そして三段ほどの石段を飛び越えると、庁舎の中へと走る。

「まあ、さっさと終わらせようか」

マルセルの背を軽く叩き、ハンスも駆け足になった。

中庭を囲む回廊を走り抜け、人の気配を探る。森を突っ切った時の、野獣のような勘は未だ続いており、三人の気配はすぐに感じ取れた。

食堂だった。

「……っ、ナタンっ!!」

肺が、口から飛び出そうになる。名を呼びながら、アクセルは転がり込むように、目的の場所にたどり着いた。

うち捨てられたように転がった剣、突き立てられた剣。その傍に倒れるローラン。壁際に立つ、久方ぶりの父親。後方から、二つの駆け足が聞こえてくる。

もはや立つこともままならず、床に膝をつくアクセルに、ナタンが振り返った。

「ああ……ベルか」

アクセルの顔が歪んだ。それを揶揄するかのように、反対にナタンは笑う。

「その……すまねえな」

そんな顔をするなど叫ぼうとしたアクセルの声は、掠れて形にならなかった。

疲労だけが理由ではない。少年の指が震え、顔は益々歪み、唇は必死に言葉を紡ごうとして藻掻く。

ナタンは悪事を見られた子どものように、困った笑顔を作っていた。

「俺な、ほら、これ……もう……死ぬんだ」

胸に空いた傷を指さし、そう呟いた後、ナタンは笑顔のまま、アクセルの目の前で崩れ落ちた。

### 第三十話〈父子〉（前書き）

PVが二百万を超えました、ありがとうございます！

今回も、懲りずに落書きが後書きにあります。申し訳ありませんが、挿絵OFF、戻るボタンなど、各自対応をお願い致します。

### 第三十話<父子>

糸が切れた人形のようにだった。たった今、彼を辛うじて立たせていた最後の糸が途切れ、その身体は星の内側へと引き寄せられる。笑っていた。最後に、仲間の顔を見ることが出来たからか。それとも、これまでの人生を振り返り、それが満足できるものであったと納得出来たからか。

瞳から魂が失われ、そして瞼が緩やかに閉じる。安らかに、眠りにつくように静かだった。

「ア……ア……」

少年の喉が、壊れた笛のような音を立てる。言の葉は形作られず、風に融けて消えた。

立つことすらもどかしいかのように、アクセルはナタンの遺体に這い寄る。そして彼の身体に覆い被さると、両手を胸の穴に被せた。まだ肉体が生きていたのか、傷はすぐに塞がる。が、それだけだった。ナタンの心臓は脈を打たず、彼が瞼を開けることは無い。

「……どうやら、一足遅かったってヤツか？」

マルセルが腕を組み、ハンスが肩を竦めて見せた。

アクセルは両手を重ねたまま、ナタンの胸を押す。一度ではない。二度、三度と。再び心臓を鳴らそうと、力を込めて、圧迫を繰り返す。

それでも、ナタンは目を開けない。



アクセルの両手が、今度は彼の頭に伸びた。顎を引き上げ、顔を上に向かせ、口を開かせる。そして十字に口を重ねると、息を吹き込んだ。抜け殻に魂を吹き込もうと、唇を離しては息を吸い、また唇を合わせて吐き出す。

それでも、ナタンの魂は戻らない。

「な……何してんだよ」

人工呼吸と心臓マッサージを続ける少年の行動が奇怪な儀式に映り、マルセルは恐る恐る尋ねてみる。アクセルは答えず、また同じ動作を繰り返した。

「……もう止めておけ。そいつは死んだ」

溜息と共にハンスが告げる。

「確かに、世の中には……雷に打たれて生き返ったヤツとか……ゴーレムの口に吹き込まれた息が魂になったとか……そんな話も転がってるが。マジックアローで心臓を射抜かれた人間が生き返ることとは、あり得ない。気が済むまでさせてやりたい気もするが、なあ？」

そう言っただけ振り向いたハンスの視線の先には、緑髪の貴族。アクセルと同じ髪だった。

身長は高い。マルセルほどではないが、ハンスよりは上。杖を握り、静かに佇むその姿は、歌劇の主役のようでもあった。

「さて……。誰だ、お前達は」

「傭兵だ。その坊ちゃんに雇われた、な」

「“疾風怒濤”か？」

「その通り」

ふう……と、子爵は溜息をつく。数秒目を閉じていたが、やがて無表情のまま問いを重ねた。

「私の味方なのか？」

「どうだろうな。とりあえずこの坊ちゃんは、場合によっては父親殺しも厭わない種の人間のようだが」

「では……敵か」

「そのようだ。子爵、貴方にとっては何とも不幸なことに」

そう言いながらも、ハンスは杖を抜かなかった。抜き撃ちが彼の本領であるし、例えラヴィス子爵が攻撃を仕掛けてこようが、それでも間に合わせる自信があったからでもあるが、その最大の理由は、アクセルの次の行動を待たためである。

少年はまだ、ナタンの魂を呼び戻そうとしていた。

「最も不幸なのは、その男だ」

ラヴィス子爵は杖でナタンの遺体を示すと、目を細める。

「もつと他の生き方があっただろうに。妻を娶り、子を増やし、平穏の中で暮らすことも出来ただろうに。……アクセル、もう諦める」

自らの息子に、子爵は語りかけた。必死に心臓マッサージを繰り返していた少年の動きが、やがて止まり、遺体の傍らに座り込む。背を向けたアクセルの表情は、誰にも分からない。

「東地区の様子を見た。よくやった、と、褒めてやりたい気もす

る。しかし、それは余計なことだったのだ。東地区は、ゴミ溜めのままだるべきだったのだ。税収が増えようが、犯罪が減ろうが、あそこに手を出してはならなかった。……アクセル。ともかく、こちらに來い」

アクセルは膝をつき、そのままゆるやかに立ち上がった。悄然とするように肩が落ちていたが、その右手には、杖が握られている。アクセル……再びその名を子爵が呼ぼうとした時、風が巻き起こった。少年の身体が竜巻に包まれ、衣服の裾がはためき、水滴が飛び散る。その風はすぐに収まったが、ラヴィス子爵とマルセルは驚愕し、ハンスは一人笑っていた。

(トライアングルクラス……)

風の魔法に長けた者ならわからない筈の無い、強大な力の渦。一瞬竜巻となって発現したその魔力は、今は全て、アクセルの内側へと潜んでいた。

「……父上」

振り向いたアクセルの表情は、何の感情も映してはいない。その潜ませた力を、一切合切の敵意を解放するまで、雫すら漏らすまいとするかのように。怒声も激昂も表に出さず、一步一步、父親の元……ラヴィス子爵の元へと、歩んでいく。

「すみません。その……何と言えばいいのか、僕の頭では浮かびませんが……。ただ……一つだけ」

精神力が膨れ上がる。最早、風船と同じだった。膨れ上がり続ければ、あとはもう、割れるしか道は無い。

「あなただけは許さない。死ね」

頸動脈を切り裂けば、人は死ぬ。ナタンのように心臓を貫かれても、死ぬ。単純に首を絞められ続けても、死ぬ。

死ね…… そう言ったアクセルだが、彼の力の膨張は、それだけでは留まらなかった。殺すよりも先に、相手を滅亡させようとしていた。かつて人間であったこと、それすらも判別が付かない程の細切れに、そして挽肉に……。 実の父親を、爆ぜ飛ぶ血肉に変えようとしていた。

明確な殺意だった。殺さずにはいられない、殺さずには済まされない。自らの血を受け継いでいる息子の、盤石のような意志を感じ取り、ラヴィス子爵は杖を握り締める。もう、話は通じない。損得も利害も取引も有り得ず、アクセルの殺意が、ひしひしと肩にのしかかってきていた。

アクセルに、理性など無かった。ここで父親に許しを請い、これ以上の死者が出る前に解決を図るのが、最良の選択であった。にも関わらず、彼はラヴィス子爵を殺すことを決めていた。イシュタルの館も、ファミリーの仲間も、そしてティファニア達のことすら、今は、少年の頭から消えていた。

嘆願でも願望でも無く、そして命令ですらない。死ね…… それはあたかも、確定した未来をなぞらせる為の、エンターキーのようだった。

「……何だと？」

そう呟いたのは、ハンスだった。既に、顔の笑みは消えている。

アクセルが見たのは、ラヴィス子爵ではなく、その反対側。遺体だったナタン。

「……………げふおっ」

三度ほど咳き込み、ナタンの手が動く。顔を顰めつつ床を押し、上体を起こそうとして、ごろりと仰向けに転がる。

「……………ふう……………」

そして息を整えながら、ゆっくりと、その場に座り込んだ。

「……………何だ？ 何が起こった？」

状況を確認しようとしているのか、彼は座り込んだまま、首を左右に回す。寝惚けたような仕草だった。

「うおっ、痛え！？ ひっ、左、左手がっ」

アクセルが癒したのは胸の傷だけで、ローランの剣を止めた左腕の傷は何の処置もされていない。血が流れる左腕を押さえながら、ナタンは顔を歪めた。

「……………ナタ……………ン？」

風が弱まった。呆然と、ようやく形になった言の葉が、死んでいった筈の男の名を呼ぶ。アクセルの手から、するりと杖が落下し、甲高い音と共に跳ねたが、彼はそれに気付いていなかった。小走りに男の元に走り寄り、両側からナタンの頭を掴む。

「ナタンだなっ、おいつ、ナタン！」  
「そっ、そうですけど？ 何だ、何なんだよ、一体。どうした？」  
「ほら、これ、何本だ！？」  
「え？ 三本……いや、一本……おい、次々変えんなっ！」  
「動くなっ」

アクセルは彼の襟に指を差し込むと、一気に左右に引き裂く。そして露わになった胸に、頭突くようにして耳を押しつけた。ドクンドクンと、高らかに鳴り響く脈動がある。

「……動いてる」  
「え？ う、動いてねえけど……？」  
「……………ハハハハハハッ」

突如として高笑いを響かせると、アクセルは立ち上がり、ナタンの怪訝そうな顔を下から蹴り上げた。

「ぶっ？！ な、何なんだよっ、コラッ」  
「ハハハハッ、ハハッハハハッ……生きて……生きてたっ！ ア  
ッハハハハハッ」

相変わらず発狂したかのように笑いながら、掌で彼の頭をベシベシと、何度も叩く。笑いすぎたのか、目尻に涙が溜まっていた。

「どうした、ベル……一体どうした」  
「ハハッ、ナタンめっ、ナタンの癖にっ、このナタンがっ、この  
ナタン野郎っ！」  
「いや、そりゃ、自分の名前くらい知ってるけど……」

あり得なかった。ハンスの目から見ても、あの倒れ方は、擬態な

どでは無い。本当の、死人のそれだった。

まさかあの少年は、本当に、命を吹き込んだというのか。それとも、去りかけていた魂を引き戻したのか。

しかし、男は現在こうやってハンスの目の前で、動いている。会話している。それを現実として受け入れれば、その奇跡を起こしたのが風のメイジであることも事実であり、思わず快哉を叫びたくなる。

(やはり……こいつは惜しい)

ハンスは落ち着きを取り戻すと、腕を組み、ただ、雇い主の次の言葉を待っていた。

しかし、そこでめでたしめでたし、と終幕の筈も無い。

ナタンが生きていた以上、アクセルにはもう、ラヴィス子爵を殺す理由は無くなり、冷静さを取り戻す。数秒ほど天井を見上げ、溜息と共に激昂を追い払うと、再び緊張した表情で、父親を振り向いた。

「……アクセル」

息子の殺気が消え去り、ほっとした子爵は、その名を呼ぶ。

「もう、知っているんだな」

「……マザリーニ枢機卿から、お聞きしました」

「その名をリーズから聞いた時、予感はしていた。……やはり彼は、有能に過ぎる」

「僕が余計なことをしたのは、知っています。しかし父上。そのことを、予想していたのでは？ だから僕を、確かめるために、代

官として……」

「反論はせんよ、アクセル」

留守が多い父親と、父親が不在でも苦にしなかった息子。思えば、普通の親子という関係には、ほど遠かった。

「アクセル。それに、イシュタルのナタンよ。来い。話をしよう」

雨が上がっていた。あれほど重厚に塗りたくられていた黒雲は、いつの間にか姿を消していて、太陽の光が濡れた街に燦々と降り注いでいる。その眩しさに顔を顰めながら、ローランは執政庁から出ると、待機していたリーズ達に、全てが終わったことを告げた。

「ローラン殿、そのお顔は……」

鼻を覆うようにして、ぐるりと一周、包帯が巻かれている。思ったよりも重傷で、治癒の魔法でも完治はしなかった。

「いえ、何でもありません。このまま、待機してして下さい。あとで子爵様が直々に……」

「イシュタルの館はっ!？」

リーズにとっての本題は、やはりそれなのだろう。気色ばんで詰



め寄ってくる彼女を、彼は微笑んでいなした。

「そのことについては、私などの預かり知らぬところですよ。しかし、ご安心を。もう、血が流れることは無いでしょう。全ては子爵様がお決めになること……。それでは、失礼させて頂きます」

ローランは執政庁の門を抜けると、濡れ鼠のバルシャの元に歩み寄る。彼の姿を見ても、バルシャは驚きはしなかった。

「……今回は、若者の勝利です」

「……そうか」

機械的に返したバルシャだが、雰囲気若干和らぐ。それでも緊張を崩そうとしないのは、ローランを信用してはいないからだだった。

背筋を伸ばし、ローランは通りを抜ける。折られた鼻の辺りが、ぼつと熱を持っていた。

ひよつとしたら、アクセルは自分を殺しに来るかも知れない。あの少年は、その選択肢を容易に選び取って見せるだろう。しかし何故か、それに怯える気は無かった。寧ろ、そうなることを望んでいる風すらあった。

そんな自分の感情が可笑しく、ローランは小さく笑いを漏らす。しかし、上から降ってきた別の笑い声に、それは掻き消された。

「ヒヒヒッ。『初月の館』か……“みかづき初月”なんてモンを知ってる人間は、そうはおらんよなあ」

決して、思い出したくは無い声。死ぬまで、金輪際、永遠に、耳などしたくは無かった笑い声だった。

ハツとして上を見上げたローランは、塀の上に座り、片足をブラ

ブラと遊ばせている老人を発見すると、唇を剥いて歯根を露わにした。

「……クソジジイ……！ まだこの世にしがみついてやがったか……！」

「ジジイにジジイ呼ばわりされるとはなあ。しかし……なかなか男前になったんじゃないのか？ ええ、楼蘭<sup>ローラン</sup>？」

クーヤはローランを見下ろしたまま、ニヤニヤと笑みを浮かべている。

「テメエ……何でここに……」

普通の、礼儀正しく温厚なローランは、ここにはいない。剣を振り回していた頃の彼が、まるで時間を超えて来たかのように、そこにいた。

「今は、イシュタルの館で世話になつとる」

「！？ ケツ！ 女に食わして貰う身かよ。相変わらずの屑だな、お似合いだぜ」

「ヒビヒツ……。負け犬の遠吠えならぬ、負けジジイの八つ当たりか？ もう若くはねえのに、意地張って『デュランダル』を使わんからそうなる」

「黙れっ」

吐き捨て、ローランは歩き出す。

「気にすんなよ。少しくらいの汚点は、寧ろ美德にも成り得るもんじゃて」

「……あり得ねえよ。挽回のしようも無い、俺の人生最大の汚点

は、何だと思うっ？」

「うん？」

「“悪逆”のサンディ！ テメエの息子としてっ、この世に生を受けたことだっ」

ローランは振り向かず、クーヤは相変わらず笑っていた。

「我が家の成人の儀だ。少し早いかな」

雨上がりの中庭、そこに設置されたテーブルと二つの椅子。傍らには急拵えの竈が作られ、網が乗せられていた。

ラヴィス子爵が編み籠から取り出したのは、貝……牡蠣だった。

椅子には、アクセルとナタンが座っている。

「季節外れだが、北のオクセンシエルナでは、夏に獲れる牡蠣がある。これがそうだ。牡蠣を焼くコツは、平らな面を先ず焼くこと……」

貴族が料理をしないというイメージは、既にアクセルによって壊されている。しかし、歴とした貴族家の当主がトングを振るっている姿に、ナタンは密かに衝撃を受けた。

網の上の牡蠣が、やがて、海産物独特の、香ばしい香りを放つ。

殻が降参するように開き、ラヴィス子爵はその中に、レモン汁と、ローランが持参した瓶を傾け、黒い液体を垂らす。

それが醤油だということは、アクセルにはピンときた。

「ワインと言えばタルブ産だが、牡蠣に合うのは白……ドーヴィル産の白ワインだ」

平民には勿体ないが、と付け加えようとしたラヴィス子爵だが、止めておく。アクセルの機嫌を損ねれば、命が危ういと気付いていた。

「あ、俺が……」

酌をしようとしたナタンだが、無言のままアクセルが白ワインの瓶を掴む。三つのグラスにワインが注がれた頃、三つの皿にも焼き牡蠣が乗せられていた。

「さあ、食べ」

ラヴィス子爵に勧められるまま、フォークを手に取ったナタンだが、再びアクセルの手が伸びる。ナタンの皿を自分の方へと引き寄せ、自分の皿をナタンに押し出した。牡蠣は、既に一部が切り取られ、アクセルの胃の中にある。毒見だった。

ラヴィス子爵も、アクセルも、二人とも無言である。

(親子だつてのに……何てギスギスした空気だ……)

自分が消えて親子水入らになれば、雨上がりの陽気の下、もっと和気藹々としてくれるのかと、ナタンは本気でそう考えていた。

フォークで殻の中の肉を突き刺し、口に運ぶ。アクセルの料理は

堪能してきたが、季節の関係で、初めての牡蠣だった。

噛んだ瞬間、塩味の肉汁が溢れ出す。磯の香り、と表現される風味だとは知っていた。それに黒い液体が混じり、濃厚な風味が鼻孔にまで抜けていった。

「……美味いだろう」

「え、ええ」

お世辞などではなく、本当に美味ではあるが、出来ればもっと違う雰囲気で楽しみたかったと、ナタンは笑う。

「どう思う？」

「え？」

「貝殻だ」

ナタンは殻をひっくり返し、外側を見た。

「汚いだろう？」

確かに、内側のような光沢はない。海藻か何かが細かく張り付いている。貝殻で作られたアクセサリーなどもあるが、間違っても、その材料にはならない。他の貝殻を見るが、形もバラバラで、本当に同じ種類なのかと疑いたくなくなった。知らなければ、岩か何かにか見えないうら。

「驚くべきことに、フロワサール八臂伯の時代まで、この美食は漁師しか知らなかった」

ラヴィス子爵は椅子の上で足を組み替え、ワイングラスを持ち上げる。

「海岸を領地に持つ貴族も、外見のあまりの汚さに、目も向けなかった。……しかし、八臂伯はこれに目を付けた。漁師が捨てた貝殻から、草花が芽吹いているのを発見し、牡蠣が持つ生命力に驚嘆した。ゲルマニアとガリアの同時侵攻という難局に面していた当時、八臂伯は私費すら投じて牡蠣を集め、前線の將兵に送った。肉は精力を生み、貝殻は薬となった。……勿論、これはほんの一因に過ぎない。しかし、もし牡蠣が無ければ、現在の地図にトリストインの名は記されなかっただろう。そう言っても過言ではない」

アクセルは無言だった。父親の話が意図することは、既にマザリ―二枢機卿から聞かされている。

「もしかしたら、この貝殻の汚れは、牡蠣の自衛の手段だったのでは無いか。人々から目を背けさせる為の。今ではハルケギニア中で、牡蠣は食されている。……あの戦後、火のように早くこれは広まった」

グラスの中で、くるりと、ワインが回る。

「さて……。我がラヴィス領であるが、聖湖ラグドリアンから流れる大河の一つ、ギヨル川に面している。子爵であるにも関わらず、この水の王国で、そのような重要な土地を抱えることがどれ程危険か……わかるか？ 土地を持たない、碌な官職にも就けない貧乏貴族など、掃いて捨てる程いる。彼等の不平不満、嫉妬は、尋常では無い。その矛先は、ウチのような、土地持ちの弱小貴族に向けられるのだ。戦争も起こらないこの平時、土地を得る方法は？ ……跡取りのいない土地持ち貴族の養子となるか、それとも……政争によって罨に嵌め、奪い取るか。……言うなれば、ゼルナの東地区とは、必要な汚点だったのだ。牡蠣の殻に付着した、ゴミ……いや、ゴミ

箱だ。都合の悪い人間、裏切られた人間が押し込められた、開けてはならないパンドラの壺。それが、彼等の目を背けさせる」

本来いるべき子爵の不在は、隙では無い。持ち主ですら持て余す領地だと、周囲にそう印象づける必要があった。

「……そして、それだけでは十分では無い。強力な大貴族の後ろ盾が必要なのだ。私の後ろには、とある大貴族がいる。私はその手下として、各地を飛び回っている。それが留守の理由だ」

そこまで語ると、ラヴィス子爵は一息にワインを飲み干す。

アクセルは俯き、ナタンは手を膝に置いていた。

何もすることが無い……それが、アクセルが代官に任命されてから、ゼルナの街を歩いて出した感想である。目立った良も無く、目立った悪も無い。中庸の場所。例え東地区を改革などしなくても、十分に、街は機能していた。そのような仕組みは、既にラヴィス子爵家何代にも渡って受け継がれてきていた。

アクセルは、その規範を破壊したことになる。領地を失わない為というラヴィス家の目的を、大きく切り崩してしまったことになる。

感謝も、怨みもされてきた。しかし大局的に見れば、自分の行いは、果たして正しかったのだろうか。

ナタンに仇を取らせたら、すぐに彼を故郷の村に解放するべきでは無かったか。奴隷市場に出向き、マチルダやテファを見つけさえないければ、彼女たちは原作の流れに戻り、もっと平穩に暮らせたのでは無いか。アニエスを保護するべきでは無かったのではないか。メンヌヴィルと知り合いさえしなければ、葛藤することも無かったのではないか。娼婦達を知りさえしなければ、もっと別の……。

(……ダメだ)

既に、知ってしまったっていた。既に、変わってしまったっていた。既に、行ってしまっていた。

因果……因を作り出したのが自分ならば、その果を自分が受けるのは当然のこと。その因に、善悪は無い。良果か悪果か、どちらかを受けるだけだ。

「イシユタルの館の男達は、“貝殻”<sup>コキョ</sup>と呼ばれているそうだが……アクセル。お前の考えか？」

「……はい」

無表情のまま、アクセルは顔を上げ、はつきりと答えた。ラヴィス子爵は軽く笑みを浮かべる。

「貝殻か……。成る程、言い得て妙だな。牡蠣貝から教訓を得た当家である。差詰め、イシユタルはシャコ貝か。……ふむ」

ラヴィス子爵は立ち上がり、背を向けて後ろ手を組み、空を見上げた。

数分、そのままだった。

「……イシユタルのナタンよ」

「はい」

背を向けたままの子爵に、ナタンは短く答えた。

「東地区は、既に変更ってしまった。それを自然な形で元に戻すのも、手間がかかる。……率直に聞く。お前達は、この街を裏から



支えられるか？」

「アクセルが顔を上げた。

「この地を狙う貴族は、あの手この手を繰り出してくるだろう。勿論、秘密裏に、非合法に。東地区は既に汚点では無く、真珠の如き光となってしまった。陰謀の手を、叩きつぶせるか？ 答える」

ナタンは右手を上げ、頭をかく。不遜な態度とも取れたが、ラヴィス子爵は、彼の答えを待った。

暫く目を閉じ、考え込んでいた彼は、やがて片目を開けてアクセルを盗み見ると、フツと笑った。

「貴族様の事情は……正直に言えば、興味はありません。しかし」

そこで、子爵が振り向く。ナタンはその空色の目を、真正面から見据えた。

「ベル……アクセルは、俺の恩人です。もう、二度も命を救われました。だからという訳でもありませんが、ずっと、味方でありたいと思います。そしてもう一つ。イシュタルの女を泣かせるヤツは……俺も、バルシャも……野郎どもも、許しはしません。……俺から言えるのは、それだけです」

「いいだろう」

ラヴィス子爵は一つ頷くと、杖を抜く。そしてその先端を、アクセルへと向けた。

「アクセル・ベルトラン。改めて、ラヴィス子爵領の代官に命ず。その責を、全うせよ」

ふらりと、アクセルは立ち上がる。そして泥の地に片膝を付けると、頭を下げる。親と子ではなく、主と臣の姿だった。

その姿を傍らで見るナタンの心に、何故か、悲哀が生まれる。彼は唇を固く結んだ。

「……畏まりました。謹んでお受けします」

無機質に、義務としての返事を行ったアクセルは、自分の心に生まれた一抹の寂しさに、自嘲の念を浮かべる。

自分は、父親を殺そうとしたのに。何を今更、そんな善良な気持ちを持つのかと。

親子は、既に親子ではない。

アクセルは静かにその事実を見つめ、内側に納め、そして飲み干した。

### 第三十話<父子>（後書き）

妄想徒然

<オリ主について>

アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィス  
アクセルはハンス・アクセル・フォン・フェルセン、ベルトランは  
ベルトラン・デュ・ゲクランから取っています。特に意味はありません。  
ラヴィスは適当です。

いつまでも外見のイメージが無いのは個人的に不便なので、暫定と  
して

> i 3 5 7 4 6 — 2 6 9 5 <

暫定アクセル（どうでもいいですが、ブリザードアクセルを思い出  
しました）

最近とらドラが、虎と龍であることを教えて貰いましたが、私の中  
では冴島大河と桐生一馬です。（嶋野太でも可）

<バルシャについて>

頑張り屋さんです。すごい頑張ってます。  
名前は小型帆船、ボートなどを意味するBARCAです。

> i 3 5 7 4 7 — 2 6 9 5 <

暫定バルシャ

イメージは柏木修です。葬式屋さんに間違われたりします。縁の下の力持ちです。

フリー・アルヴァロスのように、頼りになります。同様に、間の悪いところもあります。

(フリー・アルヴァロス……ゲーム“ヴィーナス&プレイブス”にて、主人公の仲間になる弓使い。能力的にも非常に頼りになる存在だが、彼を加入させる為には、古株で役立たずの大食らいを切り捨てなければならぬ。切り捨てなくても後で仲間にはなるが、戦力強化のため、大半のプレイヤーはさっさと切り捨てる。きつと、すごい居心地悪かったに違いない。……念のために言っておきますが、うちのアニエスは、後々成長する予定です)

能力はオールマイティ。口調もオールマイティ。  
内政や交渉などはつきり描写しない部分などは、全て彼が解決してくれることにしています。便利です。

奴隷市場の商品管理をしていたので、マチルダとティファニアからは避けられがちですが、最近は改善されつつあるといいです。

> i 3 5 7 4 8 — 2 6 9 5 <

「いや、裏切るね。お前みたいなタイプは、どうせそのうち、口シウみたいなこと言い出すに決まってるんだから」  
「……誰ですか、それ」

可哀想かも知れませんが、作者自身、裏切り第一号は彼になると思っています。

> i 3 5 7 4 9 | 2 6 9 5 <

うちのアニメスは空気が読めないわけではありませんが、読む必要性を理解していない娘です。出来るのにしません。

< 進行速度について >

Q もつ30話なのに、未だに少年時代で大丈夫か？

A

> i 3 6 0 5 1 | 2 6 9 5 <

> i 3 6 0 5 2 | 2 6 9 5 <

きゅっ、きゅっ、きゅきゅーい……グルルルルル……

「そりゃ確かに、スタッフロールがあればマルトー70%だろうけど！　しかしスタッフロールなど無い！　いや違うつ、そもそも男で試すな！　悲し過ぎるわ！」

UFOエンドなら、ブリミル様が全て焼き払って解決。

マザリーニやスカロンとの関係はともかく、同胞に興味が無さすぎるオリ主。

そんなオリ主は、まとめると、女だった方が幸せだったかも知れません。

### 第三十一話<三面>

「……彼の名は“清貧”、彼の名は“惠雨”。生涯ただ一人の女性を愛し抜き、自らの財を貧しき者、悩める者に分け与え、常に愛をもって人を助け……」

葬儀の参列者は多く、墓地にはとても収まりきらなかった。平民達も墓地の外から、錆びた鉄柵によじ登ろうとしていたり、精一杯背伸びをしていたり……故人の最期を何とかして目に焼き付けようと、様々に試みていた。

折しも昼頃から豪雨に見舞われたが、それを苦にした様子の人々はついに見当たらなかった。

さながら、王族の葬式のようなだった。一体今の世で、何人の貴族が、ポーフォール伯爵と同じほど、平民からその死を悼まれるだろうか。

伯（……やはり、捨てるべきでは無かったのでは？　ポーフォール

ポーフォール伯爵は、病死ということで決着した。身寄りが無い為、葬儀の喪主はマザリー二枢機卿が担う。

「彼の魂を祝福し、永久の安楽の内へと導き給へ……」

故人が捨て去ろうとしていた名誉は、結局、失われなかった。マザリー二自身、聖職者でありながら暗殺すら考えてはいたが、いざ

伯爵の遺体を前にすると、やはり物悲しさは拭えない。

血の繋がらない、何人もの他人が、肅々と涙を流していた。

静かに瞑目するポーフォール伯の首の、小さな傷に気付く者はいない。よほど近くで、触れながらも無ければ、それを認識することとは不可能だった。葬儀の一切を取り仕切るマザリーニが、全てを了解している以上、彼の天寿を疑う者はいない。

マザリーニの脳裏には、いつしか、アクセルの顔が浮かんでいた。

未だ十にも満たぬ年齢で、これだけの事をしてのけた少年。その彼を、果たして父親はどう扱うのか。

自分が彼に差し出したのは、情報。彼が自分に差し出してきたのは、忠誠。

(自分を扱え……そう言うのか、彼は)

少年は自ら、手駒となることを望んだ。確かにあのような特異な味方は、政治に携わる者にとって、得難い手札となるだろう。

(……悲しいな)

そこまで追いつめられていた少年も、既にあの少年の使い道を思案している自分も。

マザリーニの悲哀にも似た失望は、表に出されることはなく、葬儀は恙なく終わりを迎えようとしていた。



イシュタルの難局を知る者は少ないが、それでも何人かの娼婦は、何か問題が起こったのではと、疑いを抱いていた。それを払拭するかのように、急遽、慰労の宴が催される。北東街道が塞がったことで急に暇になってしまったというのも、その理由の一つではあるが。

父親と共に屋敷に戻っていたアクセルが、ようやくイシュタルの館に顔を出せたのは、その宴会が終わり、片付けが済んだ頃だった。

「……あつ、お兄ちゃんっ」

事務棟の玄関で靴を脱ぐ少年を出迎えたのは、ティファニアだった。駆け寄ってきた少女の脇に両手を差し込み、ぐいと持ち上げると、アクセルはそのままクルクルと回り出す。

「テ〜ファ〜、久しぶり、会いたかったあ！ ああもうっ、テファテファテファテファテファテファテファテファテファ」

振り回されるティファニアは、鈴のような音色で笑っていた。

「おお、ティファニアよ、あなたは どうしてティファニアなの？  
それはね、マジ天使だからさあ」

「……何言ってるんだい、アンタ」

騒ぎを聞きつけたのか、それともたまたま通りかかったのか、フラヴィーが呆れたような顔で腕を組んでいる。構わずティファニアの

小さな身体を抱き締めるアクセルは、やがて少女を解放すると、慈しむように金色の髪を優しく撫でる。

「あ、でも、ちょっと悪い娘ですねえ。こんな時間まで起きてるなんてえ」

「えー。でも、マチルダお姉ちゃんは、今日は遅くまで起きてていいって」

「ああっ、ごめんっ、テファ！ 至らぬお兄ちゃんを許しておくれ！」

「うん、いいよー」

「ハッハッハ、このマジ天使めえ」

暫く黙っていたフラヴィイは、やがて顔を曲げて溜息をつくど、パンパンと急かすように手を叩く。

「ほらほら、テファ。あなたはもう寝なさい。明日は買い物に行くんだろ？」

「うんっ、お兄ちゃんも行くっよー！」

「え、いいの？ じゃあ連れてって！」

「いいよー」

名残惜しそうに頭を撫でるアクセルだったが、再びフラヴィイに急かされ、ティファニアと別れた。少女の身体が階段の向こうに隠れるまで手を振り続け、立ち上がると、微笑と共にフラヴィイを振り向く。

「お疲れ様、フラヴィイ。よく頑張った」

「……時々、あんたが年上に思えてくるよ」

そう言いながらも、フラヴィイは右手を伸ばし、アクセルの頭を撫

でた。

まるで飼い主に寝められる子犬のように、少年は気持ちよさそうに目を閉じる。その、いつもとは違う彼の雰囲気、フラヴィは戸惑った。

「あ、そうだ」

その戸惑いを打ち消す為に、フラヴィは急いで言葉を紡ぐ。このまま続ければ、妙な気分が生まれてしまいそうだった。

「宴会場は片付けたけど、まだ、飲んでるのが何人がいたよ。そいつらにも、顔、見せてやりな」

「ああ、そうだね。……フラヴィ、血はいいの？」

「……今夜は、いいよ。明日の晩に頼むかも」

「そう、わかった」

宴会場はほぼ片付けられており、娼婦達の姿は既に見えなかったが、代わりに男達が酒盛りをしていた。つまみも、簡単なものだけ。男達と言っても、ナタン、それにバルシャの二人しか残っていないかった。

「あ」

「おう、ベル。戻ったか！」

チビチビと飲むバルシャごしに、ナタンは赤い顔のまま手を振って見せる。

一度、確かに心停止していた彼ではあるが、今はもう、全快していた。いやそもそも、何故蘇生することが出来たのか、という疑問は残されているが、アクセルは偶然で片付けている。それ以外に、説明のしようが無かった。願いが神様に通じたとか、友情パワーと

か、またはご都合主義だとか、そういう類の。アクセル自身、一度死んで、この地に転生した存在である。

「ああ、ただいま。バルシャ、ナタン。二人とも、お疲れ様」

「いえ……。私は別に……」

「だから謙遜してんじゃねえよ。一番頑張ってたの、お前じゃねえか」

すっかり酔いが回っているのか、ナタンが笑いながら、バルシャの背を叩く。バルシャはそれに返さず、するりと滑らかに立ち上がった。

「酒、持ってきました。ワインで？」

「ああ、ありがと。お願い」

マントを脱ぎ、くるくると畳みながら、アクセルはその場に座り込む。つまみの皿に残された干し肉を摘み上げ、それを口に放り込んだところで、ナタンが静かに咳払いをした。どうやら見た目ほどには、酔ってははいないらしい。

「……よくやった、ナタン」

「ああ。お前もな」

軽く、拳をぶつけ合わせる。ナタンは手にしたグラスのワインを飲み干すと、大きく息を吐き出し、その場に寝転んだ。アクセルは、窓の双月を見上げている。

「一件落着いてことで、いいんだよな？」

「そうだ。これで僕も、安心して眠れそうだよ」

ブランツォーリ司祭の一件についても、マザリーニ枢機卿がその力を使い、揉み消してくれるよう手はずを整えている。恐らくは、病死ということを決着が付くだろう。

イシユタルの館も、表立ってというわけにはいかないが、存続が認められた。浮浪者に仕事を与えて税収を上げ、また治安の改善に成功するなど、領地に対する貢献が見られるため……大義名分は、そんなところである。

しかし、父であるラヴィス子爵の目的は、もっと暗い所にある。アクセルは漠然と、そう考えていた。

「お待たせしました」

新しい瓶とグラスを手に、バルシヤが戻ってくる。アクセルは礼を言いながらグラスを受け取り、ワインを注ぎ入れ、そしてそれを持ち上げた。

「乾杯」

「何にだ？」

「今に」

中身を一息に飲み干すと、アクセルは目を閉じ、息を吐きながら俯く。余韻でも楽しむかのように、暫く顔を下げていたが、やがてナタン、そしてバルシヤの名を呼んだ。

少年にとって、ここからが本題である。

「僕の目的は、表と裏、両面からの掌握。それは知ってるよね？」

「おう、知ってる」

「はい」

顔を上げ、アクセルは二人の顔を、それぞれ順番に見た。

「それなんだけど……少し、修正が入る」

「修正、というと？」

「僕は廃嫡された」

バルシャが凍り、その語句の意味を噛み砕いたナタンも、すぐにハツとして少年を見る。

「別に、驚くことでも無いよ。代官は本来、領主に代わり、徴税などの内政を担い、領地を管理する役職。現に僕が任命される前は、ラヴィス子爵家とは無縁の老人が務めていたんだ。要するに、代えが効く代用品。……“これからも、ラヴィス家に尽くせ”って言われたけど……実の息子なら、わざわざそんな言い方しないだろ？父が僕を代官にした理由は、僕を見極める為。危惧通り、余計なことをし出した僕は、要注意人物なのさ」

「……じゃあ」

ナタンが上体を起こし、人差し指をアクセルに向けた。

「お前が将来、領主になる可能性は……」

「ゼロ」

「有り得ません」

アクセルは横目で、バルシャを見る。彼は自分自身、話を整理しようとするかのように、床を指先でトントンと叩いた。

「あなたは、ラヴィス子爵の唯一の後継者。魔法の才能もある。それを、廃嫡など……」

「違うんだ」

「何がです？」

「……母が、妊娠していた」

バルシャが絶句する。アクセルは彼とは逆に、クスクスと、思い出し笑いのように微笑んでいた。

「全く、何時の間に……と思うよ。けど、目出度いことだ。僕に、弟か妹が出来るんだから。そうだから？」

「ああ……そうだな。何たって、お目出た、つつうくらいだし」

笑い返すナタンは、唇を結ぶバルシャの肩に手を回すと、彼のグラスにワインを注ぎ入れる。

「ほら、そんな顔すんな」

「しかし……」

「祝ってやろうぜ。新しい命だ。こいつも本当に、兄貴になるんだし。それに……ベルよ。お前、何か企みがあるんだろ？」

「んっふっふっふ」

アクセルは再び、グラスを傾けた。

「次の領主になるのは、今度生まれてくる第二子。弟なら継ぐし、妹なら適当な婿を迎え入れるだろう。その子が“表面”を掌握し、ナタンが“裏面”を掌握する」

少年の表情は、酒が興奮か、ほんのりと紅潮していた。

「そして僕は、“側面”を掌握する」

「側面？」

「……表向きの事情は、こうなる。“アクセル・ベルトランは嫡

男であったが、ブリミル教に傾倒、後に出家し、弟に家督を譲る。そして自らは司教として、生まれ故郷のラヴィス子爵領にて、布教に務める”」

「ブリミル教……？」

「今回の一件で、ブリミル教の厄介さとヤバさを思い知った。第二のプランツォーリが現れないとも限らない。だからいつそ、ここ  
のブリミル教を、僕が支配する」

突然、ナタンが笑い出す。

「お前がブリミル教？ 寧ろ教祖様の方が似合ってるんじゃないか、怪しい方の」

「失敬だぞ、お前」

「いやけど、食事前の祈りの言葉も満足に言えないだろ、お前は「  
言えないんじゃない、敢えて言わないだけだ」

「……始祖ブリミルへの敬意とかは？」

「無い。でも、ブリミル教は利用する」

「……可哀想な始祖ブリミル」

「ともかく」

グラスを置き、アクセルは自分の膝を叩いた。タシタシと、軽い音が鳴る。

「表を握る僕の弟妹、裏を握るナタン、そして側面を担うブリミルの僕。これでようやく、全ては成り立つ」

「……問題は、いずれお生まれになるご弟妹ですね」

落ち着きを取り戻したバルシャは、静かに問題点を指摘した。

確かに、その弟妹がどんな人間になるのか、それが最も重要な点である。



「まだ時間はある。それに、放置してても結構うまく行くのが、この領地さ。僕も兄として監督するし、ナタンにも裏から働いて貰う」

「それでいいのか？」

不意に、ナタンが尋ねた。質問の意図がわからないといった風に、アクセルは小首を傾げる。

「あれだ、ほら。領主にならなくて……家督を継げなくて」

「いいんだよ、別に。考えてみれば、こっちの方がいい。ほら、西地区に、寂れた教会があっただろ？ あれ、本当は、ブランツォーリの担当なんだよ。もう、次のブランツォーリは招かない。立て直し、僕が担当するんだ」

アクセルは一口だけワインを含むと、拳を作り、それで隣のナタンの胸を叩いた。

「……お前が、生きてる。誰も、死ななかつた。一人たりとも。これは、立派な勝利だ。勝ったんだよ、僕らは」

(……初めてだな。ノーリの予言が外れるなど)

あの老婆に、スルトは尋ねてみたことがある。老婆は、ある種の託宣だと答えた。本当に時たま、まるで神降ろしか何かのように、頭に言葉が入り込んでくることがあるそうだ。そしてそれは、占いなどではない。確定した、現在の先への道標である。

ナタンの心臓は一度止まり、その後、再び動き出したという。

（“ユル”……死と再生のルーン。ノーリの占いは、それを指していたのか？ しかし、予言では、ナタンの死は確定していた。いや、確かに一度は死んだ。外れたわけではない。……有り得たのか、そんなことが）

地面は、未だ濡れていた。少し足を動かせば、靴の側でずりりと泥がせり上がる。双月がただ、彼を見下ろしていた。

どうでもいいことの筈だった。ナタンが死のうが生きようが、生き返ろうが。このイシュタルの館が無くなるうが、存続しようが。自分はまだ、元の傭兵に戻り、メンヌヴィルの名を戻せばいい。そのどうでもいいことが、彼の頭を巡っていた。どうでもいい筈のことが。

「……お前が、スルトか？」

出来るだけ気配を消すようにして、その男が近づいてきているのは知っていた。しかしスルトはその素振りを見せず、たった今、名を呼ばれて初めて気付いたかのように、背後を振り向く。

ハンスはふつと嘲りのような笑いをすると、泥だらけの地面に足跡を残しながら、彼に近づく。

「やはり、メンヌヴィルか。“炎王”<sup>スルト</sup>とはまた、随分身の程知ら

ずな偽名だな」

「……………」

スルトは答えず、再び月を見上げた。

「何だ？ 盲目の貴様でも、月光が恋しいのか？」

挑発だった。しかも、本気ではない。ただの遊びである。言うなれば、虐めのようなものだった。その挑発に乗ろうが乗るまいが、ハンスにとっては、どちらでも構わない。

スルトは取り合わず、双月を見上げたまま、再び思索に耽った。

「貴様の危険性は、よく知っている。しかし……………あの小僧もよく、お前のようなものを迎え入れたな、大した度胸だ」

「……………」

「しかし、例の噂は知っているのかな？」

心当たりが多すぎる。頭の片隅でそう考えながら、スルトは黙殺した。

これまでマッチを擦るように、人を燃やしてきた。何本のマッチを使ったかなど、覚えている人間はいない。

「俺も、信じようとは思わん。いや、信じたくない、というのが本音か。いくら何でも、そんなこと、ある筈が無いと考える」

「……………」

「お前の一族が……………サトゥルヌ」

破裂だった。

風船に、ハンスの言葉が、針を刺した。

言葉を言い終わらないまま、ハンスは後方へと飛び退く。抜き打ちを信条とする筈の彼の右手は、まだ魔法を放ってすらいらないのに、杖を抜いていた。

スルトは、こちらを振り向いている。顔だけではなく、身体も同じ方向だった。手には、メイスが握られている。

「……噂じゃ無かった、というのか」

確認するようにハンスが尋ねるが、スルトはそのまま、メイスを納めた。そして相変わらず無言のまま、また、背を向ける。

杖を握り締めた自らの右手に気付くと、ハンスは忌々しげに舌打ちし、それをベルトに納めた。そして自らを奮起させようとするかのように、笑顔を作る。

「いや、まったく、驚きだ。あの噂に、根も葉もあつたとはな。

お前がかの実験小隊に加えられたのも、もしかしたら、一族の秘儀が理由か？ それはそうだ、もうお前一人しか残っていないのだからな。そうなると、貴様が何故、一族を皆殺しにしたのか、という疑問はあるが……」

「“疾風”よ」

初めて、スルトが声を出した。

「どうするつもりだ、それを知って」

「ん、何だ、“白炎”ともあろう者が、そんな事を気にするのか？ 知られたくないのか？ 嫌われたくないのか？ “白炎”よ、一体どれほどの人間を燃やしてきた。老若男女の差別なく、赤子も幼子も、神父も妊婦も、聖なるも邪なるも、悉く燃やし尽くしてきたのだから？ そんな悪魔が、誰の言葉を気にする、誰の目を気に

する。教えてくれ、“白炎”。一体貴様は、誰に嫌われたくないんだ？」

「……………俺は」

「おいつ、スルト！」

不意に、上空から声がかかった。見上げるまでもなく、二階から、小さな影が落ちてくる。泥が跳ねぬよう、その少年は、近くの石畳の上に着地した。

「それに……………ハンス？」

「何だ、その顔は。俺がいては不味いのか？」

「そうじゃないけど」

アクセルは否定するように手を振りながら、持っていた靴を履くと、泥の中に踏み込んだ。

「ただいま、スルト。戻ったぞ」

「ん……………ああ」

彼は、若干戸惑いのような仕草を見せる。あまりにもあからさますぎるその様子に、ハンスはブラフなのではないかと考えた。

「クルコスの街に行ってたそうだけど、様子は？ 何か変わったこととか……………」

「いや、特には。敢えて気になったことを挙げれば、市場の方で……………」

そのまま雑談に入った二人を後に、ハンスは踵を返し、建物の中に入った。

クルコスの街の様子、アクセル不在の間の出来事。そしてアクセルも、初めて行った王都トリスタニアのことなど。

「次は、もつとゆっくりと見て回りたいなあ」

そんな風に笑うアクセルに、スルトはふと気付いた。

「どうした、楽しそうだな」

「ん？ んふふ……。これ、何だか分かる？」

スルトは確かめるように、掌を差し出す。その大きな手に、少年の小さな手から、何かが零された。

小石のような形をしている。不揃いの、様々な形。しかしすぐに、スルトは気付いた。表情は、驚愕の色に塗り潰される。

「これは……。風石に、火石？ それに土石……。では、これは……」

「そう、全四種。風、火、土、水の、結晶体。まだ天然モノほどには役に立たないだろうけど、すごいだろ」

「いや、そんな言葉では片付けられんぞ、これは。伝え聞くところでは、エルフですらこのようなことを可能とする者は限られて……」

「祭壇だよ」

あの、四つの属性の祭壇を自作したのは、いつだったか。

相変わらずあそこを住処とする精霊は増え続け、あたかも宝石のように輝いていた。そしてその行き着く先が、どうやら結晶化だったようだ。

自室の祭壇の傍に放置されていた結晶体を発見した時、アクセルの身体は、歓喜に打ち震えた。

「んっふっふっふっふっふ」

くぐもったような、堪らなくなったような笑いを漏らし、アクセルは肩を震わせる。

「待つてる、スルト。お前にも、いいもの作ってやる」

「……ああ。それは、楽しみだな。しかし全く、デタラメなヤツだ」

掌の結晶を少年に返し、スルトは溜息混じりに呟いた。アクセルは彼の袖を、軽く引つ張る。

「？ 何だ」

「一緒に、名前を考えてくれないか？」

「名前……」

「そうだ。今、僕は、アクセル・ベルトランの他に、アリス・ムーンライトというペンネームを持っている。そして、もう一つ、マジックアイテムの製作者としての名前も持ちたい。クラフトネームってヤツだ」

これから更に、金は必要となってくる。組織の為だけではない、父親が要求するであろう、無理難題に応える為にも。

そのために、自分に何が出来るのか……アクセルの出した結論は、マジックアイテムの製作だった。しかし、そのままアクセルの名前を使いたくは無い。もっと、新しい、それこそどこからかわき出た人間、という名前が必要だ。

十数秒ほど考えて、スルトは口を開く。

「マスターピース  
……傑作」

「マスターピース？」

「そうだ。アルベール・オブ・マスターピース。こんなのはどうだ？ 名を聞いた者は、アルビオン辺りの出身だと思うだろう」

「いや、けど、“傑作”だなんてそんな……」

「そこだ」

スルトの大きな掌が、少年の肩を包んだ。

「そういうお前だからこそ、マスターピースと名乗れ。お前とはほど遠い、自信家の名前だ。シンプルで分かり易いではないか。“傑作卿”」

「……うわー、頑張らないと」

「そうだな」

アルベール・オブ・マスターピース……アクセルは何度かその名を、舌の上で転がす。それを具象化してみようとするれば、白衣のマッドサイエンティストが現れた。中年の、妙な瓶底眼鏡をかけた、神経質そうな男である。その様をどこか可笑しく感じ、少年は微笑んだ。

「……なあ、ベル」

スルトは静かに、名を呼ぶ。その声は、それまでの彼のものとはどこか違っていた。

「新しい物や、新しい技術を開発しようとする心……その欲望は、俺は、健全なものだと思う。素晴らしいと、賞賛されるべきものだが……。時として、人は、それに吞まれる。頭を没し、ただその先だけを見つめて、無意識に他を視界に入れなくなる。何もかもを巻き込み、踏み潰して、それでも尚、見果てぬ夢を見てしまう。

俺は……」



そこで、彼は言葉を切る。言つのを躊躇うというよりは、何を言うべきなのか、それに迷ったようにも見えた。

「……どうした」

続きを促すように、アクセルは尋ねる。スルトは少年ではなく、双月を見上げていた。まるで月面に、己の姿を映し出そうとするかのように。月光すら捉えられない瞳を、ずっと、夜空に向けていた。

「いや、何でも無い。ただ杞憂からか、老婆のようなことを言ううとしてしまった。忘れてくれ」

笑顔を作ろうとしたスルトの顔は、歪んだまま、何も表すことは無かった。

“白炎”のメヌヴィルは、精々、トライアングルクラスのメイジである。そしてハンスは、火属性のメイジにもトライアングルクラスのメイジにも、山ほど圧倒し、勝利してきた。

(それなのに、クソ……クソが)

そのトライアングルクラスの火メイジに、気圧された。火炎など、

風で吹き返してやればいいのに。そう、簡単だ。本気を出せば、メ  
ンヌヴィルなど、簡単に始末出来る筈だ。

ハンスは傍らの柱を蹴りつけた。

「どうした、兄貴い」

甘ったるい吐息と共に、マルセルが近寄ってくる。今までどこで  
飲んでいたのか、顔は真っ赤だった。手には、ワインの小瓶がある。

「……マルセルか」

「兄貴い、ここ最高だなあ」

ニヤニヤと気色悪いほどの笑顔を見せるマルセルは、上機嫌にハ  
ンスの肩に腕を回した。餂色の吐息が、ハンスの顔を包む。

「女は美人ばかりだし、料理はうまいし、酒はあるし……。な  
あ、兄貴い。暫くここにしようぜ。傭兵は、ちよつと休んでさあ。  
金も手に入つたし、暫くはゆつくり、遊んで暮らそうぜ。最近働き  
過ぎだつたんだ、いいだろ？」

溜息をつき、ハンスは弟分の腕を振り解く。そして彼を放つたま  
ま、スタスタと、廊下を歩いていった。

少し慌てたように、マルセルはハンスの背を追う。

「な、なあ、兄貴。このまま、ここで働くつてもアリじゃねえ  
？ 俺ら“疾風怒濤”がいれば、百人力だろ？ なあ、兄貴。どう  
してそんな機嫌が悪いんだ？ 俺、何かしたか？ それとも何かあ  
つたのか？ 頼むよ。兄貴。俺、ここが気に入っちゃったんだ。こ  
の通りだ、兄貴、なあ兄貴」

ハンスは突然振り向くと、マルセルの手から小瓶を奪った。風の刃で栓を開け、口をつけると、そのまま天を仰いで瓶を逆さまにする。ごきゅごきゅと激しく喉が鳴り、ワインの水面が、どんどん下がっていく。やがて小さな渦となり、ワインが全てハンスの喉を通り抜けていったところで、彼は瓶をマルセルに突き返し、大きく息を吐いた。

「……だから駄目なんだ、お前は」

「え？」

ハンスは口を拭い、歯根を剥き出しにして笑う。さながら悪魔の笑顔のようで、マルセルは酔いが醒めたように身体を硬くした。

「なあ、マルセル」

「な、何だ？」

「そんなに気に入ったんなら……乗っ取るうじゃねえか。この娼館だけじゃねえ。この組織の全てを、な」

第三十二話＜夢中＞

「ヒツヒツヒツヒ」

クーヤはペン先をちろりと舐め、紙に文字を走らせる。

「疾きこと風の如く……」

風、の漢字。その脇に、ハンスとマルセルの名が並ぶ。

「徐かなること林の如く……」

林、の漢字。その脇に、バルシャの名。

「侵掠すること火の如く……」

火、の漢字。その脇に、スルトの名。

「動かざること山の如く……」

山、の漢字。そこで、老人は暫く考え込む。やがて口角を吊り上げると、まあ他におらんしな、と独り言を呟き、クーヤと記した。

「知り難きこと陰の如く……」

陰、の漢字。その脇に、アクセル・ベルトランの名。

「動く」と雷霆の如し……」

雷、の漢字。その脇に、ナタンの名。

「何とびつくり、揃いよったわ」

顔の皺を一層深め、クーヤは会心の笑みを漏らした。中指で白眉を撫でながら、ペンを机の上に戻す。

風林火山陰雷……六つの面を揃えたこの組織は、もはやヤクザ集団などではない。少し肉付ければ、立派な軍団である。

「ヤベエな。こんな綺麗に揃われたら、早々抜けられんわい」

言葉だけならば愚痴のようだが、彼は肩を震わせて笑っていた。生まれた、生きた、後は死ぬだけ。佐々木武雄の葬式から、既に十余年。何のしがらみも持たない筈の自分が、今正に、縛られようとしている。それが堪らなく滑稽だった。

「……ヒヒツ、死ぬまで生きようじゃねえか。まったく、面白い」  
「死ぬの？ クーヤ……」

肩に、白い腕が回される。ギヤエルの腕だった。身体を密着させ、老人の肩に顎を乗せると、彼の前の紙を覗き込む。

「……遺書、じゃないな。よかったよかった」  
「遺言か。そんなもん、その時が来れば口で言っわい」

ギヤエルの腕に、骨張った掌が重ねられる。

「出来れば……あたしより長生きして欲しいんだけどなあ、クーヤには」

「ヒツヒツヒ。お前が婆さんになる頃にゃ、ワシや土に還つとるわ。……いいのか、起きて。未だ日の出にゃ時間があるぞ」

「んー。また、欲しくなった」

「嬉しい事言ってくれるじゃないの。それじゃ、粉骨碎身、ご奉仕させて頂くとしますかな」

クーヤはギャエルを抱え上げると、ベッドの上に放り投げた。

お気に入りの髪飾りは、アクセルが買ってきた物。お気に入りの服は、アクセルのお手製。若草色のワンピースの襟から、プハツと頭を出したティファニアは、鏡の前に立つと、髪飾りを丁寧な仕草で身につけた。

太陽が燦々と、窓辺に降り注いでいる。その光を浴びる少女の髪は、麦穂のように輝いた。最後に、チョーカーを首に巻くと、尖った耳が完全に髪に隠れる。

「あつ、そうだ」

思い出したように振り返るティファニアに微笑み、マチルダは麦わら帽をその頭に乗せた。

「ありがと、お姉ちゃん」

ティファニアはそのツバを持ち、ぎゅっと被る。あとはピンクの花柄ポシエットを下げれば、彼女の余所行きスタイルが完成した。虚無の曜日には、大通りに市が立つ。見物料を求める大道芸人もやって来て、街はなかなかの賑わいを見せる。そしてそんな街中を歩くのは、ティファニアの楽しみの一つだった。

「お姉ちゃん、用意出来た？」

「ああ、出来てるよ」

そう言いながら、マチルダは壁際の時計に目を向ける。

妙だった。ティファニアとの買い物なら、何を置いても予定をこじ開けるアクセルが、未だ顔を見せない。ティファニアもそれに気付いたのか、マチルダの袖を引く。

「遅いねえ、お兄ちゃん」

「そうだね……」

「まだ、寝てるのかな？」

「そうかも」

「じゃ、私、起こしてあげなきゃ！ お兄ちゃん、昨日は夜更かしてたに決まってるし。きつと、寝坊しちやってるんだ！」

言い終わると同時に、パタパタとティファニアは駆けていく。

部屋に一人残されたマチルダの耳に、小高い音が届いた。それが何の音であるのか、見なくてもわかっていたが、彼女は窓から一階を見下ろす。

木剣を握るアニエスが、十字型に組まれた木材に、様々に打ちかかっていた。跳躍して打ち、しゃがんで打ち。縦に振り下ろし、横

に薙ぐ。いつもの、彼女の修行風景だった。

「……精が出るわね、アニエス」

「ああっ」

マチルダの声にも振り向かず、一心不乱に木剣を振り続ける。アニエスの午前は、そうやって過ぎていく。血豆や擦り傷など、掌が傷つけば、アクセルが治癒の魔法を使うのだが、最近アニエスは、それを昼食の前に頼んでいた。午前中の鍛錬が終わるまでは、いくら怪我をしようが、血を流そうが、頑なに治癒を拒む。一度など、折れた木剣がざっくりと太腿に刺さったが、アニエスはそれでも治癒を断り、涙を流して痛みに唸りながらも、新しい木剣を振り続けた。結局その時は、終了時間を迎える前に貧血で倒れたのだが。

“もうヘタレなんて言えないな”と、アクセルはマチルダの前で、そう笑っていた。

「……これから買い物に行くんだけど、アニエスもどう？」

「いや、私はいい」

断るアニエスだが、その時初めて、木剣が空を切った。

マチルダは窓際で頬杖を付くと、続ける。

「お昼の後、おやつも作るつもりなの。テファがまた、メロンパンが食べたいて言い出してね。その材料も買うから、荷物を持ってくれる人が欲しいの」

「メロンパン……か」

時たまアクセルが作る、砂糖がかかったパン。表面にクッキー生地を貼り付けて焼くそうだが、焼き立てのあの不思議な食感は、貴族ですら知らないのではないかと思える。



アリエスの手が止まった。

「まあ……そうだな」

木剣を下ろし、考える。

「その、あれだな。この暑さの中、休みも取らないのは自殺行為であり、それはただの愚か者で……。弓も、たまには弦を外して休ませてやらなければ……」

「ね、行きましょう」

「……そうだな、よし。パシられてやることにしよう」

微かに呆れも混じったような微笑みと共に、マチルダは溜息をつく。

風が吹き、彼女の髪を解した。目を細めて髪を抑えながら、マチルダの瞳は、虚空へと向けられる。どこか、懐かしむような表情だった。

「お姉ちゃん」

一瞬、惚けていたのだろう。マチルダはハツとして振り返ると、窓から離れる。

「ど、どうしたの？ テファ」

ふて腐れたように唇を尖らせ、ティファニアは上目遣いにマチルダを見上げた。

「お兄ちゃん、起きないよ」

「……え？」

初めは、誰しもが、ただ疲労しているだけだと思った。阿片の一件から今まで、アクセルに、心の安まる時は無かった。

しかし、アクセルを置いて買い出しに行ったマチルダ達が帰って来ても、少年は目を開けない。そして皆、異変に気付いた。

水メイジの診断は、疲労による休息。

それは間違っではないなかったが、問題は、対処法が見つからないことだ。

「……ただ……眠ってるだけなんだよな」

ベッドの上の少年は、ただ静かに、寝息を立てている。寝顔を眺めるナタンはそう言いながら、アクセルの頬を軽く突く。

「身体が、な」

クーヤは椅子をガタガタと鳴らした。

「身体が、拒否しとる。起きることを。まあ要するに、疲労が極限まで達して、並大抵の睡眠じゃ足りん、と判断したんじやるうな」

「……そりゃ俺だって、12時間くらいぶっ通しで眠ったことはあるがよお……。有り得るのか、そんなの。もう20時間近くにな

るんだぞ？」

「蛇や熊なんぞは、数ヶ月眠つとるわい」

「そりゃ冬眠だろうが」

「そう、その通り」

クーヤは立ち上がると、アクセルの襟から手を差し込み、彼の胸に直に掌を当てた。

「冬眠みたいなものじゃな。見ろ、心臓も随分ゆっくりじゃ。可能な限り体力の消費を抑え、そして可能な限り体力の回復を図つる」

「いつ、目覚めるんだ？」

「知らん」

二度寝や三度寝というわけではない。目を覚ますことも無く、ただ昏々と、まるで物語の眠り姫のように、ただ眠っていた。

(……ガキじゃねえか、未だ……)

今更ながらそのことを認識し、ナタンは唇を噛む。少年の身体は、随分と小さく見えた。

いくら大人びていようが、死体の隣で食事が出来るような異常者だろうが、未だ十にも満たない少年なのだ。確かに、全てはアクセルが始めたことである。しかし彼は、彼自身も、自らの年齢を忘れていたのではないか。日付が変わる前に休むことも無く、昼寝をすることも無い。常に考え、常に磨き、常に心がけてきた。

「失礼します」

ノックの後、盆を持つリリーヌが入室した。深皿には、湯気の立

つシチューがある。彼女と入れ替わりにクーヤは退室し、それにナタンが続く。

「……リリーヌ」

去る間際、ナタンはリリーヌを振り向いた。

「はい」

「その……すまん。けど、頼む」

「仰らないで下さい、そんな事。私も、ベル君のこと好きですから」

「そうか……」

微笑む彼女に頷き返し、ナタンは後ろ手にドアを閉める。

リリーヌはベッド脇に盆を置くと、匙で一口すくい、それを自らの口に含んだ。食材はとろける程に煮込んであるが、今のアクセルには、咀嚼する力すら無い。リリーヌは腰を上げ、アクセルの唇を開かせると、零れないよう口移しで、彼の口の中にシチューを流し込んだ。少年はそれを、静かに嚥下する。

翌日になっても、アクセルは目を覚まさなかった。ティファニアが話しかけても、反応を見せない。まるで沼のように深い眠りだった。

「……まだ、か」

不思議だと、アニエスはそう思う。少し頬を叩き、名を呼べば、今にも目を開けそうに感じられた。しかし実際は、いくら呼びかけても少年は反応しない。

「ベル君」

無駄だろうと思いつつ、それでも呼んでみる。やはり、一方通行。何も返っては来ない。

「お兄ちゃん、いつ起きるのかなあ？」

隣には、ティファニア。ベッドの脇に頬杖をつき、首をふらふらと動かしている。

少女の疑問に答えるのは、いつもはマチルダの役目なのだが、今はない。アニエスは無言だった。

「ねえ、いつ起きるの？」

ティファニアは振り返り、アニエスに尋ねる。それに答えられる筈は無かった。アニエス自身、不安で心が揺さ振られているというのに。

何も知らない、無垢な瞳に彼女は怯む。しかし助け船は、意外な所からやって来た。

「心配ない。もうすぐだ」

声を聞いて驚き、そして振り向いてもう一度、アニエスは驚いた。スルトだった。部屋に入ってきた彼を、蹠踵けながら見上げ、ティファニアはまた聞き返す。

「ほんとに？ もうすぐ？」

「ああ、もうすぐだ。少し長く、寝過ぎているが。……ティファニア。マチルダが呼んでいた。行ってこい」

「うんっ」

はつきりと、保証するような肯定を聞いたからか、ティファニアは満面の笑みになると、パタパタと走っていく。スルトはそのままベッド脇の椅子に腰掛けると、自らの杖であるメイスを床に立て、指先で弄んだ。

ふんっ、と、アニエスは鼻で嗤う。

「嘘も、そこまで堂々としてれば立派だな」

「……嘘を言った覚えは無いが」

「ベル君が、もうすぐ目覚めるなんて、どうしてわかる？」

「わかる筈が無い。俺はただ、信じているだけだ」

信じている……その言葉が何故か、アニエスの癩に障った。かあと頭に血が上りかけたが、踏み止まる。

「信じる根拠は何だ？」

「そんなものは無い」

「何だそれは。無い無い尽くしだな」

「ではお前は、目覚めることなど無いと、そう信じたいのか？」

……どちらなのか、など、どうでもいい。俺はただ、目覚める方を信じることにしただけだ」

アニエスが立ち上がる。それ以上、この場に留まることを拒否するかのように、スタスタとドアへと向かった。

「……言っておくが」

ノブに手を掛けた所で、彼女はスルトを振り向く。

「目覚めると信じているのは、私も同じだからな」  
「ああ……。知っている」

少々乱暴に、音を立てて、ドアは閉じられた。

もしも、このままずっと目を開けなければ……。そんな危惧が、段々と現実味を帯びたものになっていく。

アニエスは焦れた心を叩き付けるかのように修行に励み、ミシエルとマチルダは何度も見舞いに行った。

だが、その眠りも永遠では無い。

アクセルがようやく目覚めたのは、イシュタルの館に戻って三日後の、昼前のことだった。

「ん……………」

本当に、自然な目覚めだった。朝、日の光を浴びてのそれと同じような、ごく自然な起床。

朝食を持ってきたリリーヌは、危つく盆を落としそうになる。

「ベル君……………」

「おはよう、リリーヌ。長い間……………眠ってたみたいだけど」

身体を起こそうとする彼に駆け寄り、リリーヌは枕を支えにして、アクセルの upper body を立たせた。

「心配かけたね……………。ごめん」

「うっん……………」

彼女は微笑と共に首を振る。

「その……知らせて、くるね……」

「ああ。リリーヌ」

「ん？」

「ありがとう」

「うん……」

彼女は袖口で目を押さえながら、ドアを開け、小走りに走っていった。

一人残されたアクセルは、窓の外の陽気に目を細め、そしてそっと、自らの心臓に掌を押し当てた。

(……夢……)

恐らく、随分と長い間眠ってしまったのだろう。

そして自分はその間、夢を見ていた。夢の多くがそうであるように、目覚めた今はもう、はっきりと思い出せない。記憶に霧か靄がかかり、全ては曖昧になり、輪郭すら定かではない。

(何か、大切なことだったような……)

その大切だった筈のことが、思い出せなかった。覚えているのはただ、その重み。

誰かに、何かを言われた。その言われたことが、思い出せない。

(誰に……？ 何を……？)

全ては文字通り、霧の中だった。



「……フハハハハハハツ！！」

突如として、笑い声が届く。それと同時に、ガチャガチャとノブが軋んだ。

ビクリと身体を震わせたアクセルは、ドアに目を向ける。ノブの他に、ドアを叩く音もした。

「フハハハハハハツ！」

恐らくは、押すのではなく引かなければならないことを思い出したのか、すぐにドアが開き、見事なまでの高笑いの主が姿を現す。アニエスだった。

「フハハハハハツ、お寝坊さんだなあベル君！」

「ああ……。アニエス、おはよう。心配かけたね」

「クククツ、どうしたどうした、ヤケにしおらしいじゃないか！

ははあん、さてはアレだな！ 恋しいおねえさんに久々に会えて

感動で胸いっぱい涙腺崩壊三秒前といったところか、んん！？」

「まあ、そんなところかな……」

「フハハツ、素直だな、愛いヤツめえ！ そういう素直な少年は、おねえさんは嫌いではないぞ？ しかしベル君！ 聞くところによれば、眠ってる間、大きいのも小さいのも垂れ流しだったそうではないか！ それをリリー又さんに処理させたのは、頂けないなあ！ それともアレか？ そういうプレイのつもりだったのか！？ このマセガキめがっ！」

さながら、機関銃を想わせるような喋りだった。まるでホースの先を抓んだように、言葉は勢いよく飛び出し、途切れることを知らない。

未だ寝惚け眼のアクセルは、微笑を浮かべて聞いていた。

「フハハハハハッ、どうしたどうしたあ！　そう言えば先ほど、ドアがやけに開きにくかったが、きつとアレだろう！？　たまった涙の水圧だろう！？　そーかそーか、とつくに泣きべそ大洪水か！　確かに、ベル君っ、よく見れば涙のせいでグシヨグシヨじゃないか！　涙腺崩壊で、両目どころか全身くまなくウルウルだな！　フハハッ、ハッ、ハッ……ハッ……し、仕方ない、から……おねえ……さんの……胸で……思う存分っ……泣……」

どうやら、限界を迎えたようだった。

蛇口を止めたかのように言葉が途切れ、そして同時に、別の蛇口が開いてしまったらしい。両手で顔を覆い、肩を震わせるアニエスに、アクセルはそっと呼びかけた。

「アニエス、来てくれる？」

返事も、頷きも返さず、彼女は顔を隠したままアクセルの前に歩み寄る。

指の隙間から、微かに、嗚咽が漏れていた。

「……抱き付いていい？」

微笑を浮かべたまま、アクセルは尋ねる。アニエスは答えず、バツと腕を広げると、急いで少年の頭を抱え込み、その若草色の髪に顔を埋めた。

「……ありがとう」

一言、それだけ呟くと、アクセルは目を閉じる。どくんどくと、アニエスの心臓の確かな脈動が、暗闇の中に響いていた。その心臓

の音、そして微かな嗚咽を聞くうちに、アクセルの瞼の裏にもふと、涙が滲んだ。

（ああ、そうだ）

不意に、思い出せた。夢のことを。

誰に言われたかもわからない。何故言われたのかもわからない。どんな声だったのかすら覚えてはいない。

それでも、たった一つだけ、思い出す事が出来た。霧の中、その部分一点だけが、何故か晴れている。

（妙な夢だったなあ……）

夢は、確か記憶の整理の余波のようなものだったと聞いたことがある。様々な記憶が混じり合い、ちくはぐに組み合わせられ、破綻した世界を生み出すのだと。

その世界の中で、自分は確かに、言われた。

“お前の命はあと十年”と。

### 第三十三話<野望>

両手を、胸の前で交差させる。身体を縮め、背を丸め、膝を曲げる。

「……………ふっ……………」

抑え込むように、溜め込むように。体中を震わせながら、解放に備える。

「つかあああああつっ」

跳躍し、両手両足を大の字に広げた。そして着地すると、少年は四方八方に正拳突きを放ち始める。

「アクセル・ベルトラン復活ツツ！！ アクセル・ベルトラン復活ツツ！！」

「だあもつっ、うるせえ！ 何回やんだよ、それ！」

「また三日くらい寝たらいいんじゃないの？」

ナタンが怒鳴りつけ、フラヴィが虚空を見上げて溜息をついた。普段から破天荒な面のあるアクセルだが、眠り過ぎて体力が有り余っているのか、平時にも増して騒がしく、賑やかである。

辟易した様子の二人を前に、アクセルはオーバーアクションに両手を広げ、肩をすくめ、やれやれという風に首を振った。

「ヘイヘイヘイヘイ、シヨウウヘイ、ヘーイ。みんな大好き、幼気な愛玩動物が、夢の世界での死亡宣告を乗り越えて帰って参りました、ってカンジなのに、何故そんなに素っ気ないんだい？ ははぁん、わかったぞ。さては君たち、僕がいなくて不安いっぱい胸おっぱい、切ない気持ち甘酸っぱい、だったワケだな？ そうだろ。いや、そうに違いない。全く、このこの……このっ、子猫ちゃんどもめ！ 言葉の前と後に“ニヤン”を付ける！」

「ニヤンッ、黙れこの殺人鬼が！ 心配して損したニヤン！」

「ニヤンた、アニエスから何か感染されたのかニヤン？」

「……ニヤタンがキッツイのは想定範囲内だけど、フラヴィーがキッツイのは哀れだニヤー」

「よし、ベル。血圧が高すぎなんだろ？ 血い抜いてやろうじゃないか。一滴残らず」

ともかくイシュタルの館にも、そして組織にも、ようやく日常に戻ったことになる。尤も、その変化を知る者は限られているが。

ラヴィス子爵は妻に会い、レオニー子爵領から連れてきた傭兵たちをそのまま守備隊に組み入れると、北東街道の土砂を除きつつ、再び旅立った。それはアクセルの長い睡眠の前の出来事であったが、もしも子爵に報告が届けば、彼はその足を止めただろうか。

アクセルが代官、リーズが代理として務めるのは、今のところ変わりはない。しかしそれも、第二子の誕生によって、やがて変化が生じるであろう。どのような変化であるのか、それをアクセルが予知する術は無いが。

「恐らく僕の父には、野心がある」

それが、アクセルの出した答えだった。

「代々、大貴族の後ろ盾を得る代わりに、その手下として働いていたそうだけど……。忠誠を誓う、なんてことは無い。所領安堵の為の、ギブアンドテイクだ。そして父は、今の状態に納得していた訳じゃない。大貴族の後ろ盾など無くても、ラヴィス子爵領を守り抜ける可能性をこの組織に見たからこそ、存続を許した。となると、組織のこれからの行動は一つ」

「拡大、ですね」

後を引き継ぐ形で、バルシャが呟いた。

今までは、ひたすら守ってきた。女を、イシュタルの館を。この街を、組織を。ただただ守り抜き、反撃し、向かってきた者は叩き潰した。

今度は、攻める番だった。

「賭場のアガリも、既に精一杯。これ以上は見込めません。娼館も、確かに赤字ではありませんが、外部から見えるほど儲かっているわけでも無い。……力が、必要です。ここで守ってばかりでは手に入らない、力が」

「それで、クルコスを狙うのか？」

「そう提案します」

バルシャはそう言いながら、壁の地図のクルコスの街にピンを刺した。

王都へ続く北東街道を、上っていくことになる。

「クルコスの裏を支配する組織は、三つ。まずは奴隷市場ですが、これは既に、配下にあります。残る二つは、占い師の老婆、ノーリが支配する『漠忘の彼岸』。そして、商人の連合体である『バルテ

ルミイ』。……決して、易い事ではありません。先代の奴隷市場の管理人は、『漠忘の彼岸』にだけは手を出すな、と、そう言っていました。ですが、ここを支配出来ないようならば、どの道勢力拡大など夢です。我々にとっても、これは賭けになります。この街すら失う恐れもありますし、勿論、死人も出るでしょう」

バルシャはそこで、ナタンに目を向ける。

椅子に深々と腰掛け、頼杖を付いて地図を眺める彼は、実に泰然としていた。

「……続けます。謎が多い『漠忘の彼岸』は、ひとまず置いておくとして、先ず攻めるのは商人の『バルテルミイ』。彼等を調べ上げます。望み、弱み、怨み、好み、あらゆる事を。必ずどこかに、隙はある筈です。それを突き上げ、『バルテルミイ』を支配下に置いた後、『漠忘の彼岸』を押し潰す。今の段階で描く手順としては、これが妥当かと」

「そしてクルコスの街を狙うもう一つの理由は、傭兵ギルドの復興だ」

アクセルは椅子から立ち上がると、バルシャの隣に並び、ノックするように地図を叩く。

「北東街道の上流を、このまま治安の悪い状態にしておくわけにはいかない。そもそも、クルコスの治安悪化の原因は、傭兵ギルドの壊滅にある。レオニー子爵も腐心しているが、結果は出せていない。ギルドを復興したとして、それを任せられる、有能な人材が見当たらないんだ。……『漠忘の彼岸』は知らないが、既に『バルテルミイ』は、勢力拡大の為に傭兵ギルドを手に入れようと動き出している。それに先んじて、この組織が、クルコスの傭兵ギルドを設立する」

官としてではなく、民としての行動。不満を持っていたり、反抗したりする傭兵たちを纏め上げる、強力な力を持った人間が必要だった。

アクセルが選んだのは、『疾風怒濤』のハンスとマルセル。フリランスとして今まで生き抜いてきた彼等に、クルコス の街で、傭兵ギルドを立ち上げさせる。並の傭兵メイジなどでは歯が立たない、強力なメイジであるあの二人ならば、他の傭兵達も認めざるを得ないだろう。例え暗殺計画が持ち上がったとしても、そうそう殺される彼等ではない。

「まずは傭兵ギルドを設立、その次に『バルテルミイ』を相手して、最後に『漠忘の彼岸』。順序としては、そうなるな」

「はい」

「よし、早速準備だ。バルシャ、お前は奴隷市場と連携して、傭兵ギルド設立の下地を整えてくれ。そしてハンスとマルセルがギルドを立ち上げた後、『バルテルミイ』を調査。その時は、ベル。お前もアリスとして、連中を探って貰う」

「よшきた」

「それまでは、いつも通りだな。全ては、傭兵ギルドの後だ。俺たちはこの土台を固める為、治安維持に努める」

「そうそう、こつちも疎かには出来ないんだ。もう夏も終わる。」

つまりは、学校の夏休みが終了するということだ。以前から危惧していた貴族のガキが、イシュタルの館で問題を起こすかも知れない……ハンスとマルセルはクルコスに行かせるとして、やっぱりスルト、それにクーヤは外に出せないなあ。まあ、僕もなるべくアリスでいるし、バルシャがいなくても、何とかなるか」

「……すみません。以前は任せて下さいなど、大きな事を言ったのに」



「だからよお、バルシヤ。お前には、もつと大事な仕事が出来ただけだろうが。ウジウジ言つなよ。さて、こんなところか。予定も立ったし、小腹も空いた。終わりにしようぜ」

大雑把ではあるが、クルコス制圧の道は立った。

アクセルが鼻歌交じりにナタンの部屋を出た後、残されたバルシヤは、ふとナタンに声を掛ける。何か腹に入れようと立ち上がったナタンは、椅子から腰を浮かせたまま、怪訝そうに彼の顔を見た。

「少し……驚きです」

「何がだ？」

ナタンは更に首を傾げる。

「このような勢力拡大を、ボスが言い出したことです。その、別に否定的な意味を含んでいるわけでは無いのですが、貴方には、そういう野心は無いものだ……」

「ああ、そりゃ見込み違いだぜ」

ドサリと音を立て、ナタンは浮き上がった腰を椅子に落としたりラヴィス子爵との対峙後からか、彼はどうも、一回り大きくなつたように見える。一度は心臓が止まり、その死線を乗り越えて生き残ったからか。

「バルシヤ。俺には一つ、野望があった。今もある」

「野望……ですか？」

「そうだ、野望だ。秘密だけだな。のし上がるとか、いい女を抱くとか、豪華な服に身を包むとか、大勢の人間を跪かせるとか……そんなのがちつぽけに思えるほど、バカでかい野望だ」

欲望とはつまり、野望の原動力。金が欲しい、いい女を手に入れたい、尊敬されたい、畏怖されたい……。そうした欲望が野望に火を注ぎ、その人間を動かす。王になるという野望があれば、その野望は欲望によって肯定され、人生も命も賭けさせることになる。

大勢力の大ボスになれば、金も、女も、力も手に入る。貴族のような暮らしが出来、自らの手を汚すことなく他人の人生を支配することが可能となり、大抵の我が侏を押し通すことが出来る。

野望を抱いていながら、ナタンはそれらの欲望を、ちっぽけに思えると語った。

「……一番の野望は、たった一つ、それだけだ。けど、それじゃあ駄目だった。野望はいくつも必要なんだ、俺の場合は。イシユタルの女達、貝殻の男達、それにお前ら……。俺の肩には、たくさんものに乗っかってる。なら俺は、乗せてる奴らに、夢を見せてやりたい」

その一番の野望について、ナタンはバルシャにも決して話さなかった。

祭壇に住ませたアクセルの精神力は、相変わらずそこを住居としていた。そして気付けば増加している。どこからか仲間を連れてくるのか、それとも精神力それ自体が分裂して増殖しているのか、それは定かではないが。

増加を続け、飽和状態になれば、それは結晶体として実体化する。そう呼んで正しいのか定かではないが、アクセルはそれらを総じて、精霊石と名付けた。

(……さて、どうするか)

通常、メイジがそれを生み出すことは出来ない。火石も風石も、全ては宝石や化石のように、鉱脈として発掘されるものだ。強大な力を有するエルフですら、それを製造出来る者は限られている。

はつきり言つて、扱う勇氣はなかなか出なかった。下手をすれば、虚無魔法並の威力と共に暴発してしまうのではないか……そんな恐れがあった。

(……ゆつくり考えよう)

精霊石は相変わらず生産されていたが、アクセルは全て、厳重に保管することにした。今の力量で、扱いこなせるとは思えない。ただ、ほんの少しだけ……本当に、ほんの少しだけ、使うことにした。あくまで一部だけ、慎重に、注意深く。

あれを作る為に。

そして、気がかりな事。自分の今の力量……メイジとしてのクラスだ。

ナタンが殺された時、トライアングルクラスに跳ね上がったという自分の力は、未だラインクラス。精神の爆発による、一時的なものだったらしい。しかしラインクラスの中では確実にトップの実力であり、やがて自然とトライアングルに達して落ち着くだろうと、ハンスもスルトも、口を揃えていた。

(……さて)

服は、いつものゴシックロリータ。娼婦達の中にも、影響されたのか似たような服を着る者もあり、このイシュタルの館でそう珍しいものでは無くなった。夏なので、半袖に改造したものを選ぶ。

カツラを被り、軽く口紅を。爪の状態を確かめ、仕上げに、鏡の前でくるりと回った。

「異常なし、と」

アリス。イシュタルの館に住む、不思議な少女。ナタンのお気に入りだとか、バルシャの妹だとか、様々に噂されていたが、確かに見習いの娼婦ではなく管理側であるというその立ち位置は、特殊だった。

イシュタルの館の玄関では、既に準備を終えたリリーヌが、花壇のヒマワリを眺めつつ待っていた。

「お待たせしてごめんなさいね、リリーヌ」

アクセルの口調は、余所行きのそれである。自分はアクセルでもベルでもなく、アリスという少女であるという自己暗示にも似た切り替えは、容易には崩れなかった。

「ううん。それじゃあ、行こっか。アリス」

寧ろ気を付けるべきは、アリスに接する他の皆だった。間違っても、ベルなどと呼ぶわけにはいかない。

リリーヌの隣に並び、アリスは外に出た。天気は曇りで、時々太陽が、思い出したように顔を見せる程度。その為、暑すぎず寒すぎ

ず、過ごし易い気温だった。花壇の周りを、蝶が飛び回っている。時折涼しい風が吹き、木の葉が囁き合った。

イシユタルの館を出た後、街の中心部へと向かう。若草色のドレスに身を包んだりリリー又は、実に優雅な所作で、大通りを歩いていた。

(……美人だな)

隣のアリスも、そう思う。整った顔立ちに、柔和な雰囲気。一度その美しさを目に入れてしまえば、彼女のちよつとした動作も、歩き方も、話す言葉も、表情も、あらゆるものが美しく感じてしまう。声を掛けてくる商店の主人や、挨拶してくる酒場の女将に、丁寧に会釈を返しながら、リリー又は尚も歩き続ける。アリスはただ、従者のように付き従っていた。

やがて、東地区の端に達したところで、彼女の足が止まる。

「着いたわ」

リリー又のその言葉に、アリスも看板を見上げる。三階建ての建物で、一階部分の入り口の上に、酒瓶を形作る真鍮製の突き出し看板があった。

食堂の名前は『揺れる天窓』。ふと、覚えのある名だと思った。

「リリー又様！」

その声の大きさにも驚いたが、様を付けているのにも驚いた。アリスがふと顔を上げると、店の中から、一人の可愛らしい少女が駆け出してくる。

「ようこそいらっしゃいました、リリー又様！」

年の頃は十五、六。はきはきとした活発な、看板娘といった感じの少女だった。

「元氣そうね。モニク」

リリーヌが少女の名を口にした時、アリスはようやく思い出せた。以前の、立て籠もり事件。リリーヌが服を脱ぎ去り、その隙にバルシャが犯人を取り押さえた、あの事件だ。人質になった少女の名前がモニクであり、事件の現場はこの食堂だった。

「席の用意は万端です。ささ、小汚い店ではありますが、どうぞ、奥の方へ……」

リリーヌの手を取り、モニクと呼ばれた少女は店内へ導く。その時、ちらりとアリスを振り返り、眉間に皺を寄せて怖い顔で睨んだ。

(……ああ、なるほど。お邪魔虫ってワケね)

あの事件以来、どうやらこの少女は、すっかりリリーヌに懐いてしまっているようだ。更にその好意は、少々妙な方向へと傾いているらしい。

心の中でだけ苦笑いを浮かべつつ、アリスもそつと、二人の後に続いた。

店内は、なかなか小綺麗だった。まだ昼食には少し早く、客の姿は見当たらない。入り口脇の階段を上り、三階に達すと、ベランダに二人分の席が用意されていた。

“予約席”と記された札を持ち上げ、モニクは恭しく椅子を引き、リリーヌを座らせる。アリスも自ら椅子を引き、その向かいに腰掛けた。

モニクはテーブルの前に立つと、一つ咳払いをする。

「本日は、当『揺れる天窓』亭にご予約を頂き、ありがとうございます。リリー又様、あともう一人」

アリスは今度こそ苦笑した。

「それでは、ただいまお料理をお持ち致します。暫しお待ち下さい」

ただの居酒屋食堂であるのに、一流レストランを意識したかのような喋り方だった。それもまた、このモニクという少女のリリー又に対する、精一杯の敬愛の表れなのだろう。

モニクが去った後、アクセルはアリスの顔で微笑んだ。

「随分と、慕われてらっしゃるんですね。リリー又様」

「うん、そうなの。有り難いことに」

リリー又は頬杖をつき、そっと微笑みを返す。そして彼女の人差し指が、どこかへ向けられた。アリスはその指先を追う。

「ねえ、アリス。あそこに、大きな建物が見えるでしょう？」

「ええ、ありますわね。確か、使われていない倉庫だった筈。あ

そこは……」

そこで、アリスは気付いた。ここが東地区と南地区の境目であり、あの倉庫こそ、自分が誘拐された場所であることに。あそこで初めてフラヴィと顔を合わせ、メンヌヴィルに目を付けられた。

あの時も、今と同じ、自分はアリスだった。

「その周りに、いくつか空き家があるの。それを繋げれば……」  
「なるほど。あれが、劇場の候補地ですか？」

以前、アクセルはリリーヌに尋ねた。何か欲しいものは無いかと。彼女の答えは、望んだものは、大きかった。劇場である。

「娼婦の私が、街の皆に受け入れられている。それは、凄い事だと思ふの。男に見下され、女に軽蔑される娼婦を、ああやって慕ってくれる子もいる。……幸せなことだわ。受け入れて貰える、というのは」

彼女も、あの倉庫を忘れた訳では無いだろう。アリスと同じ方向へ目を向けたまま、リリーヌは続けた。

「イシュタルの女の子達にも、歌の上手な子もいれば、物語が大好きな子もいるの。勿論、本業を疎かにするつもりは無いわ。空いた時間で、稽古をすればいい。それは確かに、本物の劇団には敵わないけれど、娼婦達が行う歌劇は、それだけで話題になると思っわ」

それは、リリーヌの立てた作戦。

「だから……あそこを、劇場に改造して欲しいの」

アリスは彼女の作戦を、前世の知識に当てはめる。

要するに、政治家や金持ちが、大金を払ってでもアイドルや女優を抱きたがるのと同じなのだ。それは性欲を満たす為だけではなく、大勢の人間が応援し熱狂するその人物を、自分一人が独占しているという、征服欲の為。

美形揃いの娼婦達である。稽古次第で、また演劇の出来栄によって、人気は更に上がるだろう。



ステージの上は、不可侵の神聖な領域。その領域で、アイドルとして輝く彼女たちを手に入れるためならば、貴族も商人も、大枚を叩く。

（枕営業ありきのアイドルってことか？ 何という逆転の発想。……しかし）

アリスは考える。そうすれば確かに、女優を兼ねる娼婦達の人気は上がり、彼女たちを独占するためならば、客同士で値の釣り上げ合戦が起こる。そしてオークションのように、高騰するだろう。しかしそれはあくまで、成功した場合の話である。

倉庫を見つめたまま、アリスは険しい顔をして考えている。リリー又はテーブルに両手を置き、椅子から腰を浮かせて身を乗り出すと、そっと顔を近付ける。彼女の唇が、アリスの頬に触れた。

「ひふっ!？」

奇声と共に、アリスは口付けられた頬を抑えて仰け反る。がたんと椅子が鳴り、危うく転倒しそうになった。リリー又は既に椅子に戻り、両手で頬杖をついてアリスを眺めている。彼女は、微笑んでいた。

「な、何……ですか？」

若干頬を染めたまま、アリスは引きつった笑みと共に尋ねる。

「だって、可愛かったから、つい。……お願い、アリス。ちよつと大きなプレゼントだけど、くれないかな？ 舞台の女の子も、稽古も、私が責任を持つわ」

「……劇場自体は、いいんです。リリー又さんには、いつもお世話になってますから。今のはただ、舞台上で利用できそうなマジックアイテムを考えていただけです」

「協力してくれるの？」

「ええ、勿論。やるからには、成功させます。いいですね、リリー又さ」

「ありがとうっ」

テーブルが揺れた。身を乗り出したリリー又が、アリスの首に抱き付いている。彼女に引き寄せられるように背を曲げながら、アリスは呆れた。落ち着いた雰囲気的美女かと思えば、こうやって、幼い少女のような行動もする。今までに、一体何人の男が、このギャップによって心を驚掴みにされたのだろうか。

階段の方角から感じる、メイジに換算すればトライアングルクラスはあろうかという殺気に晒されつつ、アリスはまた、引きつった笑みを浮かべた。

昼下がりの裏庭で、スルトにハンスが話しかけた。

「“白炎”よ。準備は順調か？」

おはよう、でも、こんにちは、でも無い、ハンスの挨拶を受け、

スルトはメイスを振り回していた腕を止める。暫く何の準備かと考えている風だったが、答えが出なかったのか、彼は無視した。再びメイスを振るい、小さな火炎を放つ。飛び出した火の玉は、二十メートルほど前方に転がる古兜に当たり、消えた。  
ハンスはふと、尋ねる。

「……無視か」

スルトは何の反応も返さないことで、それを肯定した。

次に、古兜の隣に転がる、穴の空いたコップ。それに小さな火の玉が当たり、コップが弾け飛ぶ。

「何の準備か、理解していない風だな？ ならば敢えて口に出してやろう。裏切りの準備だ」

「……悪いが、益々理解できない」

それがスルトの、素直な感想だった。相変わらず鍛錬を続ける彼に向かって、ハンスはポケットから銅貨を取り出しながら、呼びかける。

「おい、メンヌヴィル」

「……俺は、スルトだ」

振り向いた彼に、銅貨を見せる。

「このコインが分かるな？ 勝負だ。上昇ではなく、落下の時に……」

そう言うと、ハンスはコインを跳ね上げた。風の魔法で、更に高く舞い上げると、それは事務棟の屋根と同じほどにまで上昇する。

ハンスは杖をベルトに納め、眼光鋭く待ち構えた。

上昇していたコインに勢いが失われ、ほんの刹那、静止する。そして力を失ったコインは、星の内側へと引き寄せられ始めた。

その瞬間、空気の塊が、コインをどこかへ弾き飛ばした。

「ハハハハハッ」

杖をくるくると回し、ハンスはベルトに納めると、高笑いする。

「どうだ、メンヌヴィルよ！ この私の……」

ぱしゅんっ

「……………」

また、古兜に火の玉が弾ける。スルトはコインにも、ハンスにも気付かなかったと言うように、自らの鍛錬に没頭していた。

ベンチの背もたれに腰掛けていたマルセルは、兄貴分に憐れみの視線を向ける。

「兄貴。……今は、いくら何でも空回り過ぎ」

しばあんっ、と、振り向きざまに『エア・ハンマー』で顎を撃ち上げられたマルセルは、ベンチの後ろに落下した。

「ひ、ひはは……」

舌を噛んだのか、口を抑えて悶絶している。ハンスはベルトに指

を差し込むと、またスルトを振り向いた。

「なあ、メンヌヴィルよ。教えるんだ。お前が未だ、こんな片田舎で燻っている理由は何だ？ “白炎”の名が泣くぞ？ 邪魔なもの焼き尽くし、素直に奪い取ってしまえばいいじゃないか。欲しいものは何だ？ 今更手を汚したくないのか？」

ハンスにとって、一番の気がかりが、このメンヌヴィルだった。メンヌヴィルではなく、スルトと呼べと言う彼は、今更改心したというわけでも無いだろう。

何を考えているのか、全く不明なのだ。

「あら、スルトさん。こちらにいらっしやっただんですか」

スルトが鍛錬の手を止め、振り向く。ハンスも彼に倣い、その幼い声の方向へと目を向けた。

黒髪の少女が、微笑と共に歩み寄ってくる。

「……ああ、アリスか」

鍛錬は中止するようで、スルトはメイスを納めた。アリスと呼ばれた少女は、軽くハンスに会釈しながら、スルトの前に立つ。

「スルトさん、お願いがあるんです。ちょっと来て頂きますか？」  
「わかった」

あれだけ挑発されても応じなかったスルトが、この少女の願いを、鍛錬を止めてまで容易く受け入れる。まさか……と、ハンスは顎を撫でた。

ふと、彼の背後で靴音が鳴る。マルセルが立ち上がったのだろう。

「……は……初めましてっ！」

弟分を振り向こうとしたハンスは、突然の大声に顔を顰め、肩を縮めた。

「ぼ、僕の名前はマルセルです！ 名前はマルセルですが、知り合いは皆こう呼びます！ ……マルセルと！」

（こいつは一体……何を言ってるんだ？）

落下した拍子に、頭を強く打ってしまったのか。振り向いて見れば、マルセルは顔を硬くして、目を見開いている。視線の先には、アリスがいた。

大声に驚いたのか、アリスは若干惑った風だったが、スカートの裾を掴み上げ、丁寧にお辞儀する。

「ご丁寧に、ありがとうございます。初めまして、マルセルさん。アリスと申します。それでは、ご機嫌よう……」

「ままつ、待って下さい！ 一つだけ、一つだけ教えて下さい！」

一つだけと言われ、アリスは困ったような表情で待った。

「シチューは、シーフードかビーフ、どちらが好きですか!？」

「え……と……。敢えて言うならば、シーフードの方が……」

「僕もです！」

「そうですね……。それでは、失礼させていただきますね」

「あ、待つ、待って下さい！」

「待つのはお前だ。だいたいお前、好物は豚肉だろうが」

放っておけば面倒な事になると判断し、ハンスはマルセルを羽交い締めにした。暫く抵抗していたマルセルは、アリスとスルトの姿が見えなくなつて後、急に大人しくなる。

こちらを振り返つた弟分の顔に、ハンスは思わず後退つた。

「ど……どうしよう、兄貴……」

「おい止めろ、よせ。止めるんだ」

「俺……俺……。恋……。しちゃつたみたいなんだよね……。ふへ……へへへ……」

「その気色悪い顔を止めろお！」

『疾風怒濤』による組織乗っ取り計画は、前途多難だった。

スルトの義眼のサイズはわかった。全ては、ここから。

「さて……。やってみますか」

地下倉庫の片隅で、アクセルは指を鳴らす。机の上には、精霊石が乗っていた。

アルベール・オブ・マスターピース……“傑作卿”。その記念すべき第一作目は、相応しいとすべきかすべきで無いのか、なかなか難易度の高いものである。

か。“傑作卿”。そんな名を名乗る資格が、果たして自分にはあるの

「頼むぞ、僕。成功させるよ」



### 第三十四話<不羈>（前書き）

後書き落書き注意です。挿絵OFFとバックのご用意を。

### 第三十四話<不羈>

ギルドを立ち上げるのは、そこまで難しい問題ではない。問題は、それを存続させることだ。

「『疾風怒濤』が？」

報告を聞いた時、レオニー子爵は鸚鵡返しに尋ねる。

その名は、聞いたことがあった。二人組の傭兵メイジで、どこのギルドにも所属していない、流浪の戦士。出身はゲルマニアだともガリアだとも言われており、家名など、詳しいことは不明。ただ伝え聞くところでは、たった二人で城一つを攻め滅ぼしたこともあるという。

い) (流石にそれは眉唾だが……強力なメイジであることに違いはない)

利用しない手はない。

クルコスの街に滞在しているという二人を、早速、レオニー子爵は召喚した。

召喚に応じて執政庁にやって来た彼等からは、年若く、実力を兼ね備えた自信家といった印象を受ける。領主である子爵を前にしても、何ら怖じ気を抱く様子は無く、颯爽とマントの裾を翻して歩を進める。

灰色髪、背の低い方の男が、軽くお辞儀をした。

「お初に。『疾風怒濤』の前者、“疾風”のハンスにございます」  
続いて、その後ろの大男が頭を下げる。

「同じく『疾風怒濤』の後者、“怒濤”のマルセル」

二人の挨拶を受け、レオニー子爵も微笑と共に頷く。

「当地の指図役、レオニー子爵家のフィルムマンだ。ようこそ、『疾風怒濤』。まずは乾杯を」

使用人に命じて、ワインの準備は済んでいる。応接室のテーブルに二人を案内し、三つのグラスにワインを注ぎ終わると、子爵は一つ咳払いの後、乾杯の音頭を取った。

一杯目を飲み干した後、レオニー子爵は両手の指を絡め合わせて、尋ねる。

「さて……。二人の武名は、この私ですら知っている。率直に聞きたいのだが、『疾風怒濤』がこんな片田舎に、一体何の用だ？まさかとは思うが、何かこの地で、重大な事件が起きようとしているのではないな？」

傭兵の生活の糧は、争いごとである。誰と誰が喧嘩するとか、どこそこで反乱が起きそうだとか、命を狙う者、狙われる者がいるだとか……。そのような、武力を必要としている所へと出向いて、自らを売り込む。逆に言えば、傭兵が動くときは、何か良くない事が起きる時なのだ。

それを把握するためにも、傭兵達をまとめる傭兵ギルドは必要だった。

「いえ、そうではないのです」

ハンスは微笑を浮かべたまま、静かに首を振る。

「仕事を終えて、まとまった金が入りましたね。知り合いから聞いた、イシュタルの館を尋ねようかと」

イシュタルの館のことは、レオニー子爵も知っていた。多少ラヴィス子爵といざこざがあったようだが、何とか切り抜けたそうで、今もあの娼館は営業している。

「羨ましいな。君たちの若さも、身軽さも」

「何を仰る。子爵殿とて、まだまだ現役でしょうに」

適当に愛想を使い、ハンスは続けた。

「一度遊んで、次の仕事までどこで過ごすか、となったのですがねえ。こいつが、離れたくないなんて言い出しまして。骨抜きにされてしまったわけですよ」

彼は拳を作り、親指で隣のマルセルを示す。

「それでまあ、ともかくここまで引き返して、今後の予定を立てていたわけです」

「そうなのか……。いや、わざわざ呼び立てて申し訳なかった。てつきり、どこかで反乱でも起きるのではないかと思ってしまったな」

そう言いながら笑うレオニー子爵は、すぐに口を閉じると、足を組み替えた。

「さて……。ところで、次の仕事は決まっているのか？」

「まだですね。何か、御用でも？」

「少し前、この傭兵ギルドが壊滅してな。立て直そうにも、傭兵達をまとめられる人物がいない」

随分正直に話すな、と、ハンスはそう感じた。

「君たち『疾風怒濤』の名で、新しい傭兵ギルドを立ち上げて欲しい。別に、年がら年中いてくれなくても構わないんだ。ただ、『疾風怒濤』の武名を借りたい。何かあった場合は、君たちに制裁を下して欲しい」

どうやら、それほど切羽詰まった問題らしい。

恐らくこの、申し出るのではなく申し出させるという作戦も、それを見越してのことなのだろう。

「さて……。どうする、マルセル？」

一応、弟分に意見を求める振りをする。ハンスはマルセルを振り向いた。

しかし、マルセルは何の返事もせず、じつと窓の外を見ている。

「……………」

特に、悪意のあるような気配は無かった筈だ。にも関わらず、彼は何故こんな真剣な目で、窓の外を見つめているのだろう。つられたハンスがそちらを見ると、窓の外の枝に、一羽の鴉が止まっていた。

「……黒……」

ぼつりと、マルセルが漏らす。

「黒……黒い髪……。黒髪あの娘……。ふへっ、ふへへへへっ、  
へへへへへへ……」

「……………」

ハンスは無表情で顔を戻すと、マルセルの不気味な笑いに顔を引  
きつらせる子爵に向き直った。

「子爵殿。お引き受け致します」

「あ、ああ、助かる。だが……大丈夫なのか？」

「問題ありません。これはこういう生き物です」

「……そうか」

「はい」

詳しい手続きは後日ということで、ハンスは未だ薄ら笑いのマル  
セルを引きずって、出て行った。

再びグラスにワインを注いだレオニー子爵は、隣に控える執事に  
漏らす。

「それで……セバスチャン。どう思う、あの二人」

「わ、私ですか？ そうですね……。やはり、その、ただ者では  
無さそうで」

「ああ。確かに、普通ではないな」

「正気にては大業成らずかと……」

「そうか……」

『疾風怒濤』をクルコスの街に派遣し、傭兵ギルドを立ち上げさせる。その目的は、もう一つあった。

金にシビアナ傭兵ではあるが、彼等は未だ、そこまで信頼できる仲間ではない。状況次第でそのあり方は、如何様にも変わるだろう。ゼルナから、イシュタルの館から引き離し、傭兵ギルドを運営させる。表向きにイシュタルの館と傭兵ギルドとの繋がりを示すものは無く、全くの別組織として扱われる。すると、傭兵ギルドが力を増せば、『疾風怒濤』の力も増すことになる。彼等は恐らく、その力を使って離反するだろう。

ともかく、イシュタルの館の安定の為、そして彼等の行動を見極めるため、一旦組織から放つ。それが狙いでもあった。レオニー子爵が設立の金を負担するよう仕向けたのも、傭兵ギルドを野放しにせず、ある程度彼に監視させるためである。治安維持の為に立ち上げた傭兵ギルドが、自発的に治安を乱そうとした場合、子爵はすぐにも対応を行うだろう。

そしてハンスは恐らく、それに気付いている。

「……どう思う、ナタン？」

アクセルは書類の束をナタンの机に乗せながら、ふと尋ねる。ナタンはペンを走らせたまま、聞き返した。

「どう思う、ってのは？ 何の事だ？」

「だから、ハンスとマルセル、『疾風怒濤』のことだよ。連れて

きた僕が言うのも何だけど、手放して信用できる相手じゃない。メイジじゃないナタンがボスであることに不満だし、隙を見せれば……」

「そういうこともあるだろ」

ペンをペン立てに戻し、ナタンはサインした書類をサイドチェストに乗せる。そして、机の端に立つアクセルを見上げた。

「ベル。俺は、この組織を大きくすることに決めた。たくさん、色々な人間とも関わるだろう。騙されたりするだろうし、こっちが騙す側にだって回る。泣き言言ったって、世間の裏での出来事である以上、誰も同情すらしてくれねえよ。みすみす裏切らせはしねえが、裏切られたとしても、俺達が勝つ。というか、勝つしかねえ」

アクセルは無言で聞いていた。

「あの二人が裏切るなら、ボスである俺に問題があるってことだ。……あいつらの夢を、俺が背負い切れなかった、それだけだ。どのみち、たった二人程度の夢も背負えないようじゃ、俺の器もタカが知れてる。……心配すんな、お前らもいるんだ。俺が勝つ」

言うようになったな、と、アクセルは密かにそう思う。

ナタンを失うような目には遭いたくないが、あの死線は、確かにナタンを成長させたようだ。

(サイヤ人みたいなもんか)

まだまだ危うい気もするが、ナタンは確かに、身につけ始めているようだ。彼なりの、ボスとしてのあり方を。



「心配ない」

途中から話を聞いていたらしい。部屋に入ってくるなりそう言ったスルトは、自分の机に腰掛けると、首元のボタンを外した。

アクセルが聞き返す。

「心配ないって、『疾風怒濤』が？」

「そうだ。“疾風”のハンスは強力なメイジだが、ヤツは頭のいいバカだ。お前達が思っているよりも、ずっと簡単に対処出来てしまっただろう」

「……そういうもんかな？」

「それに裏切るにしても、傭兵ギルドの戦力が整い、安定してからになる。まだ時間はある。今はそれよりも、この月を無事乗り切ることを考える」

ナタンは“夢”という言葉を使った。

ふと、アクセルは思う。ならばスルトは、一体どんな夢を、この組織に乗せているのか。

自分の両目を焼いたコルベルを探し求めるといふのなら、確かにそうだろう。復讐を誓っていても不思議ではない。

しかし、彼は未だ、コルベルのコの字も出さなかった。いや、実験小隊時代はただ、“隊長”としてしか呼んでおらず、本名は全く知らされていないのかも知れない。

スルトは現在、街を歩き回り、ハザードマップの作成に取り組んでいた。主に大規模な火災が発生した時の避難経路図だが、火メイズである彼のセンスにより、既に基礎部分は完成している。延焼を防ぐための火除け地としての空き地の選定から、街全体を改造するような、大掛かりな水路の設計まで。形になるのはまだまだ未来の

話だが、その場合には、スルトの作成した資料が大いに役に立つだろう。

本当に盲目なのかと、ナタンもバルシヤも疑っていた。

「さて……」

仕事のキリがついたようで、ナタンは立ち上がる。

「それじゃ、俺はそろそろ行くぞ。戻るのは、明日か明後日だ」

ラヴィス子爵領、パリュキオの村。そこで、イシュタルの館の名を騙った者が、娘を攫ったという。まだ守備隊に漏れない内に、ナタンが数人を引き連れ、事実確認に向かうことになった。普段ならばバルシヤが向かうのだが、彼はギルド設立を監督するため、レオニー子爵領クルコスの街に出張している。

「代わろうか？」

アクセルが申し出るが、ナタンはそれを断った。

「お前はあれだ、なるべく休むようにしろ」

「それじゃ落ち着かない。皆が頑張ってるのに……」

「だから、お前はまだガキなんだ。身体も小さいし、その分体力もない。ここの守りだって、甘いわけじゃないんだ。それじゃあな。ちゃんと寝ろよ」

捨て台詞のような気遣いを残して、ナタンは“貝殻の男”達を引き連れ、出発した。

(まあ確かに……。もつと、体力をつけないと)

短期決戦ならともかく、持久戦をすることになった場合、自分はきつと、誰よりも早く脱落するだろう。その自信があった。

(もう少し長めに走り込むようにするか？ でも、それだと予定がなあ)

「では、俺も行くぞ」

「今から鍛錬か？」

「まあな」

短く答え、スルトはメイスを片手に立ち上がる。ドアノブに手を掛けたところで、アクセルが呼び止めた。

「その鍛錬が終わった後でいいんだけど、ちょっと、地下室に来てくれないか？」

「地下室……？ 何かあるのか」

「んー、秘密。ちよつと、試作品がね」

「ほう。早速“傑作卿”の始動というわけか」

愉快そうに、スルトは肩を上下させる。つられたようにアクセルも笑みを見せると、俯き加減に首を振った。

「そんな大層なものじゃない。何とか形にはなったけど、成功なのか失敗なのか、まだはつきりとはしない」

「そうか。何にせよ、光栄だ。第一号作品の試験に招かれるとはな」

「それじゃ、また後で」

「ああ……また」

フラヴィが事務室に顔を出すと、アクセルしかいなかった。少年はソファに腰掛け、カタログを捲っている。

「やあ」

「ああ」

お互いの存在を示す、それ以上の意味は無い軽い挨拶を交わし、彼女もアクセルの隣に腰を下ろした。

「それ、何だい？」

「ああ……。ちよつとね」

軽くカタログを傾け、フラヴィに示す。

「……杖？」

「そう。マチルダとミシエルの」

そう言われて改めて、あの二人がメイジであることを思い出した。メイジ向けの杖のカタログには、実に様々な杖が掲載されている。オーソドックスなワンド型から、軍人が扱うような杖剣型、または装飾を凝らした美術品のような形状、両手で扱う大きなスタッフ型など。

「へえ……。色んなのがあるんだねえ」

カタログを受け取り、フラヴィはパラパラとページを捲った。

「流石に、あんたみたいなのは無いよねえ」

「あつたら怖い」

そう言いながら、アクセルは自分の両手の指を曲げ伸ばした。

「怖いってあんた……。自分の肉を骨まで抉る子どもの方が、何千倍も恐ろしいんだけど。痛くなかった？」

「お前は僕を何だと思ってるんだ。痛かったに決まってるだろう。ああそう言えば、あの晩、高熱を出して寝込んだなあ」

「けど、普通の杖も持つてるんだろ？」

「うん」

幼い頃に与えられた、大多数を占める形状であるワンド型。自分が、一番始めに契約した杖だ。それは未だ持っているが、手にしても、あくまで形式上。実際は杖に沿わせた右手の指で魔法を扱っている。

使えなくなった理由は恐らく、限界に達したのではないかと思う。聞くところによれば、予備の杖一本を扱うのにも、相当な才能が必要だそうだ。勿論、それはメイジの力量と関係は無く、何本持とうが、相手の一本の杖に敗北することも多々ある。

それにしても、両手両足合計で十四本というのは、あまりに多すぎる。ギリギリ、あのワンドが切り捨てられたのだと、そう考えることが出来た。

フラヴィは再び、カタログを捲った。

「特徴的と言えば、スルトの杖もそうだね。あんなごついもの、このカタログにも載ってないし」

それぞれのメイジにも、杖の形状の向き不向きはあるようで、一番安定しているのがワンド型ということらしい。あまり特異な形状の杖は忌み嫌われるものだが、スルトのような傭兵にとって、そんな嗜好など瑣末である。魔法としての杖だけではなく、相手を叩きのめすメイスは、確かに彼のような膂力のある人間には似合っていた。

「何か、こう……取っ手が三本？」

フラヴィの感想を少し考え、ああ確かにと、アクセルは納得する。柄の反対、先端部分から、取っ手のようなものがメイスに沿って三つある。真上から見ればちょうど、三菱紋に似たシルエットを形作る。

「ひよつとして、相手に威圧感を与える意味もあるんじゃないかな。あんなもので殴られたら、どうなるか……。いや、間違いなく骨が碎けるね。折れるとかじゃなく」

「威圧感ねえ……。あの顔で、まだ足りないってのかい？ にっこり笑ってみせるのが一番効果的だと思うけど」

フラヴィはカタログの元のページを開くと、そのままアクセルに渡した。

「で？ 決めたのかい？」

「うーん……やっぱり、ワンド型がいいかと思って。下手に奇を衒うよりはいいし。それに、軽くて振り回せるのがいいな。女の子

だし」

「……いつそ、あんたが作ったらどうだい？」

「ああ、確かに。別に、一生それを使うってわけでも無いんだし。初心者用として僕が作って、成長した後、好みの杖に変えて貰えばいいか」

「どうだろうねえ。あんたが作ったの、一生使い続けてくれるんじゃないのかい？」

「冗談ではなく、半ば確信したフラヴィの言葉だった。

アクセルを兄と慕うミシエルは、何一つ疑う余地もなく、彼を信賴しきつている。その様子は、本物の兄妹以上だった。

「こんな言い方も妙だけど、ミシエル、あの娘は完全にブラコンだよ。あんたから貰ったんなら、例えそこらの石ころでも、大事に抱いて眠るだろうさ。きつと、あんたから贈られた杖なら、どんなに傷付こうが使い続けるね」

「ハハハ。それは嬉しいなあ」

「責任重大じゃないか。一生モンの杖なんだ、作るんだったら手は抜けないよ」

アクセルはカタログから目を離さないまま、楽しげに笑う。

「それにマチルダだって……」

そこまで言いかけて、フラヴィは迷った。この少年に、こんな嘘を付いてもいいのかと。

しかし、アクセルは無言でカタログを閉じ、傍らに置くと、そつと首を振る。どこか、寂しげな横顔に見えた。

「……気付いてたのかい」

「そりゃね」

フラヴィは天井を見上げて溜息をつき、爪で頭を搔く。

「マチルダは……まだ僕に、心を開いてはいない」

そしてマチルダの判断は正しいと、アクセルはそう思った。

アルビオン王族、モード大公。彼とエルフとの間に生まれた禁断の娘、ティファニア。そして、モード大公を助けたサウスゴータ太守。その遺児、マチルダ。

マチルダに口止めされているのか、ティファニアは過去のことを語らない。アクセルも敢えて聞かず、彼の意を受けるナタン達も、興味のない素振りを見せた。

マチルダは、肉親全てを失った。たった一人、妹のような存在である、ティファニアを除いて。ティファニアを失えば、マチルダは近しい者全てを失うことになる。それは彼女にとって、死に勝る苦痛なのだろう。マチルダは全てを失ってしまった為にも、ティファニアを守る。

アクセルは未だ、マチルダに完全に信用されてはいない。ただ、彼のティファニアに向ける、嘘偽りの無い愛は理解しているようだ。しかし、それまで。アクセルがマチルダをどれ程愛そうが、マチルダにそれは届かない。

「買い物に行くんだ……。ミシエルも、テファも、勿論アニエスも、あれが欲しい、これが見たい、それが食べたい……。そう言ってくれる。教えてくれる。たくさん、話してくれる。でもマチルダは、そうじゃないんだ。自分を押し殺して、ただ、僕に気を遣っている。



今まで、何一つとして、マチルダは僕に望まなかった」

考えてみれば、自分は信用されるような人間ではないと、アクセルは確認する。

奴隷市場で自分たちを突然買い取った、得体の知れない少年。そんな人間が、怪しまれない筈が無い。自分たちがアルビオン王国にとって邪魔な存在であり、アルビオン王国以外の手に渡れば、非常に高度な政治取引に使われる存在だと、マチルダはそのことを理解しているのだろう。

その事もまた、信用出来ない理由だった。アクセルがそのことを知っていない、知るはずがないと、その確信が持てないでいる。更に不幸なことに、アクセルはその事実を知っているのだ。原作知識という、マチルダが予想だにしないものの為に。

事情を全て知りながら尚、それをマチルダに教え、決着を付けてしまうことが出来ない。その勇気が無い。原作が都合の悪い方向へと改変されてしまうのではないか、その恐れ故に。

自分が信用されることも、信用される資格も、無くて当然なのだ。

「ま、まあさ、大丈夫だって。ちょっと疑り深いだけで、あの娘だってそのうち……」

「いや、いいんだ」

慰めようとしてくれるフラヴィに応えるように、アクセルは笑った。自嘲のようであり、諦めのようであり、そして何より、悲しげだった。

「僕自身、自分が得体の知れない存在だってことは理解している。ミシエルやテファが懐いてくれるのは、僕にとって奇跡なんだ。あり得ない程の。……マチルダが幸せなら、僕は満足だ。いや、幸せ

に出来るなんて、そんな自信も無い。ただ、平穏と、安穩さえあれば……。マチルダは、いい娘だ。疑り深い僕が、保証出来るくらいに」

「……いくつだい、あんた」

アクセルの、そのような純な想いを聞かされたことが予想外だったらしく、フラヴィは驚嘆と呆れの混じった表情と共に尋ねる。

「うーん。三十くらいと思ってくれれば、色々と順調かも」

「まあ確かに、そんなくらいじゃないのか、って思うことはあるけど」

「え、嘘っ」

そこでようやく、二人は笑い合った。

アクセルは壁の時計に目を向けると、カタログを抱え、立ち上がる。

「さて、それじゃ僕はそろそろ」

「ああ、そうかい。あたしも準備しないとねえ。今日は、バルシヤもナタンもいないんだし」

「色々聞いてくれて、ありがとう、フラヴィ。でも、このことは……」

「わかってる、誰にも言いやしないって。安心しな。疑うのかい？」

「信じてたら確認しないよ」

最後に一つ、意地の悪そうな笑みを浮かべ、アクセルはドアを抜けた。

地下倉庫の一角は、相変わらずアクセルの研究室になっていた。そろそろ地下を工事し、きちんとした区切りを作るべきかとも思われるが、秘密裏にそんな事を行える、強力な土メイジが組織にいない以上、実に長期的な作業になりそうだった。

「入るぞ」

地下倉庫の扉を開け、棚の裏に回る。マジックライトの灯りの下、アクセルが背を向け、何かをいじっていた。

「お。来たな」

振り向いたアクセルの弾んだ声は、見なくとも笑顔だとわかる。

「さて、スルト。また義眼、見せてくれないか？」

「ああ、構わんが……」

盲目の彼にとっては、どの道、飾りでしかない。左の眼窩に指を差し込み、白い義眼を取り出すと、それを差し出す。アクセルの小さな手が、大切そうに受け取った。

「ふーん、ふんふん、ありがと」

確認するようにしきりに頷いていたが、すぐに少年は、スルトに

向かって手を伸ばす。指は、義眼を挟み込んでいた。

「一体何だ？」

スルトは義眼を受け取り、それを再び、左のぽっかり空いた眼窩に嵌め込む。その直前、彼は、アクセルの手に未だ義眼が残されていることに気付いた。

スルトは、停止していた。動き方を忘れたかのように。が、やがてゆっくりと左手を持ち上げ、それに顔を向ける。紅色の瞳をした義眼は、正しく、その掌に向けられていた。何かを確認するかのように、彼は、掌を折り曲げ、また伸ばす。

丸椅子に尻を落とすアクセルは、腕を組み、笑っていた。

「スルト。かなり前のことになるけど、お前、言ってたよな。盲目になって一番の不便は、読書が出来なくなったことだって」

成功を確信した笑みだった。

「流石に、僕自身では試せなかったけど、そこそこ自信はあった。これならいけるんじゃないか、と。……で、どうなんだ。スルト？ ちゃんと見えてるか？ 少なくとも、光は感じられてるだろ？」

白黒テレビのようなのか、カラーテレビなのか、それともただ、漠然と輪郭が見えるだけなのか。

スルトは未だ、無言のままだった。しかし、アクセルは構わず続ける。

「材料は、火石とか風石、それに水石と……まあ、色々だ。小さいけれど、水晶も入ってる。なあ、スルト。早く感想を聞かせてくれないか。そうしないと、改良のしようが」

かつん、と、義眼が落下した。その紅色の瞳が、床から無機質に、アクセルの顔を見上げている。

その上に、スルトの足が落ちた。ガラス玉が碎けるような音と共に、義眼が、粉々に碎け散る。

「え？」

アクセルがその光景を理解出来ず、呆けたように呟いた刹那、メイスが走った。腕を組んでいたアクセルの右側に叩き付けられ、小さな身体は、いとも簡単に吹き飛ぶ。空樽に突っ込み、木片が飛び散った。

右腕が、身体にめり込んでしまったかのような感覚。痛みより先に、意識が遠くなるのを感じる。

「スルト……ト……？」

口中に、鉄臭いものが広がった。スルトの空洞の眼窩が、洞窟の入り口のように……魔物が潜む深淵のように、アクセルを見下ろしている。その奥に潜む何かに、じっと、観察されているような気分だった。

「誰だ……それは」

スルトは転がっていた自分の義眼を拾い上げ、軽く拭くと、それを眼窩に嵌め込んだ。

「俺は……メンヌヴィルだ……」

そう言うと、彼は背を翻す。

ああ、ついにその時が来たのかと、どこか冷静な部分でアクセルは思った。彼はスルトであることを止め、元のメンヌヴィルに戻った。

もう、間もなく自分は、意識を失ってしまうだろう。視界の中のメンヌヴィルの後ろ姿が、ふと、曖昧なものに映った。

(あれ……)

何故か、予感がした。直感だった。

彼は、死ぬのではないかと。

「なあ……スルト」

辛うじて声を絞り出し、アクセルは息を吐き出す。

「出かけるんなら……風邪とか……引くなよ……」

一体何を言ってるんだと、頭の中の冷静な部分が呆れていた。言った後で、アクセル自身、自分は一体何を言ったのかと、純粹に誰かに尋ねたくなる。もしかしたら、これが、自分の遺言となってしまうかも知れないのに。

言い終えたと同時に、自然と瞼が下りる。意識を失う直前、頭の中には、荒い足音が響いていた。



第三十四話<不羈>（後書き）

<第三十四話・不羈>

今回のラスト、どこかで聞いた話だと思いました。パクリかも知れない、でも元ネタが思い出せない。

つい先ほど、はとよめであると判明しました。

> i 3 6 7 8 8 — 2 6 9 5 <

> i 3 6 7 8 9 — 2 6 9 5 <

（歌・若林正恭）

音程を犠牲にして呪いのような中毒性を生み出す程度能力。

ジャガーさんがハマーの漫画を破り捨てるあれは技術的に無理です。あっちの方が合ってますが。



### 第三十五話<鬼人>

一番始めに見つけたのは、ミシエルだった。夕方になっても地下から出て来ないアクセルの様子を見に、倉庫のドアを開けた彼女は、砕けた樽と、そしてぼんやりと座り込んでいる少年を目にする。

「……兄さん!？」

額から血を流しているのは、特に問題無い。問題は、傷を治すこともせず、ただ遠い目で虚空を見上げている彼の様子だった。

「ああ、ミシエルか」

首を回し、アクセルは微笑む。駆け寄ったミシエルは、ハンカチで額の血を拭った。そこで初めて怪我に気付いたのか、アクセルは自らに治癒の魔法を使う。

「どうしたの？ 何があったの？」

「……んー」

再び虚空に視線を泳がせながら、彼は考えた。

スルトがもし、本当にメンヌヴィルに戻ったというのなら、何故自分は生きているのだろう。鉄すら溶かす白炎にて敵を焼き尽くす、それがメンヌヴィルの筈だ。なのに、彼はメイスで攻撃した。それも、骨の一本も折れないような力で。

「大丈夫、立てる？」

「ああ、うん。ちょっと……何かを、失敗したみたいだ」

答えを濁し、アクセルは立ち上がる。首に手を当て、軽く頭を振った。

何故、メンヌヴィルに戻ると言いながら、彼は自分を殺さなかったのか。

「ねえ、ミシエル。スルト知らない？」

「あの人なら、少し前に出て行ったわ。顔は見えなかったけど、何だか慌ててみたい」

「……そう」

もしもまた自分と殺し合いがしたいのなら、他の方法を取る筈だ。誰かを人質にとって誘き出したり、または殺して見せて、アクセルを怒らせたり。

彼はただ、出て行った。

(……咄嗟だったなあ)

アクセルへの攻撃は、何かに対する反射のような、突発的なものだった。計画など無い。出奔のようだ。まるで家出だ。

「……迎えに行くかあ」

ぼんやりと、独り言のようにアクセルは呟く。伸びをし、身体を左右に曲げる少年に、ミシエルは不思議そうに尋ねた。

「迎えに行くって、誰を？」

「スルトを。何というか、あれだ。放っとけない。フラヴィに、そう伝えておいて」

「え……うん、わかった」

アクセルは机の上の小箱をポケットに押し込むと、小瓶の水を飲み干す。倉庫の扉を開けた彼を、ミシエルが呼び止めた。

「兄さん」

「うん？」

「帰って……来るよね？」

「当たり前だよ、そんなの」

振り向き、安心させるように微笑む。嘘になるかも知れないな、と、そう思った。

何故、追うのか。殺されるかも知れないのに。もしもメンヌヴィルが自分への興味を失ったというのなら、幸いではないのか。彼につけ狙われる心配はなく、金輪際顔を合わせることも無いかも知れない。

確かに、彼が抜けるのは痛い。戦力は大幅にダウンするし、火メイズの暴力と、風メイズと遜色ない隠密技術を持ち合わせる人材は、そうそう見つかるものではない。

しかし、あまりに危険すぎるのだ。彼に追いついたとして、何を話せばいいのだろう。再び彼を仲間に出来る保証はなく、以降裏切らないという保証もない。

(……何でだろうなあ)

アクセルは自問した。放っておけばいい。そして自分を殺しに来るようなら、仲間達と力を合わせて返り討ちにすればいい。

ふと、考え事を止めてみると、蹄の音が大きく響いてきた。既に日も暮れかけ、周辺は黄昏の中に沈んでいる。北東街道を上り、既にラヴィス子爵領から外れようとしていた。

「！」

アクセルは手綱を引き、馬を停止させる。嘶きと共に立ち上がった馬は、二、三度前足で藻掻き、着地すると首を振った。

道脇のあすなるの樹の根本に、一人の老婆が座り込んでいる。馬から飛び降り、アクセルはその老婆の前にしゃがみ込んだ。眠るように目を閉じていた老婆は、ちろりと片目で少年を見上げると、口を開く。

「……どうかしたのかい、坊ちゃん」

頭には、飾り気のない灰色の頭巾。誰彼の刻限であるが故に、顔ははつきりとは見えない。ただ、瞳だけが光っていた。血の色をした、不気味な瞳が。

スルトが踏み砕いた義眼が、アクセルの頭を過ぎる。

「お婆や……」

何をしているのか、と、アクセルは尋ねようとした。見たところ、老婆は旅装ではなく普段着で、少し散歩に出てきた、というような服装だった。この近くに、人が暮らすような場所などない。ましてや、このような老婆が。

いや、それよりも、何故これほど近くに来るまで、自分はこの老婆に気付かなかったのか。まるで木石のように、気配が無かった。さながら闇に溶け込むようにして、彼女はただ、そこに座っていた。自分がこの老婆に気付いたのではなく、この老婆がわざと、自分に気付かせたのではないか。そんな気もしてくる。

しかし、今、それをいちいち解明する暇は無かった。

「お婆さん、聞きたいことがある。大男だ。白髪で、右目に仮面。左目に火傷の痕がある、大男を見なかったか？」

「……最近、腰が痛くてねえ」

老婆はそう言いながら、大袈裟に腰をさする。数秒して意図に気付いたアクセルは、軽く頷いた。

「わかった、家までこの馬を使ってくれ。従順な馬だから、下手なことしなければ大丈夫だ。……あつ、でも、お婆さん。馬は……」

「ふむ。乗れないこともないねえ」

「よし。それで、知ってるのか？ 知らないのか？」

「……………」

老婆は枯れ木のような指を伸ばすと、そつと、地面を示す。つられて下を向いたアクセルは、目を見開いた。いつの間にか、数枚のカードが並んでいる。

「一枚、捲ってごらん？」

老婆の申し出に、思わず怒鳴りそうになった。そんな場合では無い、急いでいるのだと。しかし、ここまできて機嫌を損ねるわけにもいかない。アクセルは無造作に一枚のカードを選ぶと、それをひっくり返した。

「ふむ……。『ソーン』のルーンかい」

この暗さでカードを判別した老婆に驚き、アクセルも目を凝らす。確かに、自分が捲ったカードには、ソーンのルーン文字が記されていた。

「意味を、知ってるかい？ 坊ちゃん」

「氷の巨人……。行く手の吹雪、閉ざされた門」

「そうさ。つまりは、帰りな、ってことだ。あたしゃ、人相も見るだけどねえ。坊ちゃんの顔には、死相が出るよ。何を急いでるのか知らないけど、今引き返さなけりゃ、死ぬ。だから……」

アクセルは立ち上がる。そして馬の手綱を傍らの朽ち木の枝に括り付け、ポケットから金貨を一枚取り出すと、カードの上に乗せた。

「何だい、こりゃ」

「見料さ」

アクセルは微笑んだ。

「つまり、この道で合ってるってことだろ？ 僕が追っているヤツが、この道の先にいる。占いに興味は無いけど、お婆さん、今のは本当だ」

「わからないねえ。相当、危ない男なんだろう？ 味方でもないんだろう？ なのに、何で追う？」

「僕にもよく分からん」

言い捨て、少年は走り出す。闇を裂き、風を切るように。

あつという間に遠ざかっていくアクセルの後ろ姿を見送ると、老婆はカードを纏め、懐に収める。そしてひらり、老年とは思えない身のこなしで馬の背に飛び乗ると、少年に追いつかない程度の速度で、その後を追った。

もう、二度と得られるはずの無かった、光。さながら聖なる日の奇跡の如く、それが蘇った時、感じたのは喜びではなく……恐怖。あの時、アクセルを振り向くわけにはいかなかった。彼を見るわけにはいかなかった。見てしまえばきっと、焼き尽くしてしまっていただろう。

(……これでいい)

そう……これでいいのだ。出会うべきではなかった。興味を持ち、積極的に関わろうとしてしまったのは自分の方だが、それは大きな間違いだった。

「……泡沫の一族」

メンヌヴィルはそっと、口ずさんだ。

「その手は空……倉には風……夢破れて骨残り……」

ざわざわと、周囲の木々がざわめいた。

「我が名はただ……水面に描くべし。読む者はおらず、呼ぶ者もおらず。故にただ、指の先にて水面に描き、そのうたかたに混じりて消えるべし。我が名はロティスール……」

「いいや。お前はスルトだ」

木々のざわめきの筈だった。それがただ、偶然にも、言の葉となつて現れた。願わくば、そうであつて欲しかった。

メンヌヴィルは背を翻し、振り向く。

「やあ……」

軽く片手を上げ、アクセルは微笑む。

彼がメンヌヴィルの元に辿り着けたのは、全くの偶然だった。老婆と別れた後、相変わらず北東街道を上っていたが、ふと、本当に何となく……直感した。ここで彼は、森に入ったのだらうと。

普段のアクセルならば、己の直感を疑い、切り捨てるだらう。そうしなかったのは、彼が既に、メンヌヴィルを追いかける自分自身に疑問を抱いていたからかも知れない。

メンヌヴィルはアクセルの姿を認めると、メイスを振り、火炎を撒き散らした。周囲の木々が忽ちに松明に変じ、赤々と闇を染め上がる。その赤の中に、メンヌヴィルの姿が晒された。



「フハハハハハハ！！」

狂ったような笑い声を上げ、彼は歯をむき出しにする。

「面白い、面白いぞ、アクセル・ベルトラン！ 生かしてやったにも関わらず、この俺に挑もうというのか！ 全く、何という小僧だ、お前は！」

「……それは、嘘だ」

アクセルは切り捨てるように告げた。

狂ったような笑い声ではあっても、狂った笑い声では無い。

「どうした？ スルト」

狂ったというのなら、寧ろ、アクセルの方だろう。

死なないため、殺されないため……そのために、今まで生きてきたのに。

「いつものお前は、もっと冷静だった。お前はもっと、氷のような凍てつく炎だった筈だ。あのお前の、何と恐ろしく、何と頼もしかったことか。お前を見るたびに僕は、お前が味方であることに感謝した」

歌劇のような台詞回しだった。産毛を焦がす灼熱の火炎に包まれながら、アクセルに慌てた様子は無い。それどころか、自らの周囲を一つの舞台に見立て、精一杯演じきろうとしているかのようだった。

「出会った時、お前の笑顔が怖かった。狂った言葉が恐ろしかった。」

た。でも……何だ、今のお前は？ まるで弱い犬だ。吠えることは出来ても、噛みつく勇氣はない。殺す力があるのに、その力を出さうとしない」

アクセルは歩き出した。

「なあ、スルト」

「俺は、メンヌヴィルだ」

笑顔を消し、ただ、彼は告げる。

「スルト」

「メンヌヴィルだ。何度言わせる」

「スルト。スルト。スルト。スルト」

「……………俺は、メンヌヴィルだ」

二人を隔てる、火炎の壁。

初めて対峙した時は、逃がさないための壁だった。そして今は、近寄らせないための壁だった。

その中に、アクセルは踏み込む。少年の小柄な身体は、忽ちにして、炎の内側に消えた。

「ツツ……………！」

メンヌヴィルが動揺し、無意識のまま、炎に向かって手を伸ばす。炎から出現した手が、それを握り返した。

「『『拳弾』』」

何度も何度も……皮膚を破り、骨を砕き、それでも懲りずに岩を

叩いてきた拳。その硬い拳の表面を、更に硬化させるイメージ。そして強化した右拳を、メンヌヴィルの腕をたくり寄せるようにして、叩き付けた。

「くっ……!？」

無防備な状態で腹部に受け、メンヌヴィルは呻き声と共に後退った。身体をくの字に曲げ、腹部を掌で押さえて震えている。

「スルト、と……そう呼ばれるのがイヤなのか？ なら、何度でも呼んでやる。どれ程嫌がろうが……いや、嫌がるからこそ呼んでやろう。スルト」

額に汗を滲ませ、メンヌヴィルはアクセルを見上げた。

その顎を蹴り上げようと、少年の爪先が跳ね上がる。それを掌で受け止めたメンヌヴィルだが、もう片方の足が飛び、結局顎を蹴られた。思わず足を手放すが、アクセルは蹴り足を下ろさずに踵を彼の肩に引っかけ、左手で襟を掴み、今度は顔面に右拳を叩き付けた。

「くっ……」

跳び下がったメンヌヴィルは、メイスを構える。

「どうした？ 何故魔法を使わない？」

アクセルは止まらなかった。走りはしないが、その歩みは確かにメンヌヴィルを追いかけ、追いつめようとしている。彼はメイスを構えたまま、後退った。

「それとも……ひょっとして、あれか？ 恐れ知らずの子猫に喧

嘩を売られた猛虎が、戸惑いを見せるのと同じく……僕があまりにちっぽけ過ぎて、どうしていいのかわからないか？ “白王”のスルトよ」

決して、メンヌヴィルとは呼ばない。例え殺されても、そう呼ぶつもりは無かった。

「……来いよっ、スルトおお！」

「……っおおおおおお！！！」

メンヌヴィルが、吼えた。

大きく振り回された後、アクセルに向けられたメイスの先から、火炎が吹き出す。その熱に、アクセルの肌が栗立つ。

「あははははは！！！」

身体が感じた恐れを振り解くかのように、少年は狂ったような笑い声を上げた。無理矢理に目を見開き、狂気の笑みを作り、火炎を受け止めるように両手を突き出す。風が起こり、炎は左右に分かれた。しかしその熱は、アクセルの肌を焦がす。

火炎の背後から、メンヌヴィルが現れた。

「『密葉』 ああ！！！」

絶叫するように唱え、両手にマジックブレードを発生させると、それを交差し、振り下ろされたメイスを受ける。流石に臂力の違いが出て、アクセルはその場に両膝を付いた。片膝を立てるでもなく、完全に跪いてしまった以上、もう立ち上がることは不可能である。歯を食いしばり、必死にその重量を支えながら、アクセルは笑った。

「ど……うし……た……」

圧倒的不利にありながら、彼はメンヌヴィルの顔を見つめ、途切れ途切れに囁く。

「僕如きに……受け止められる……程度の……力じゃ……無いだろ？ ふざけ……やがって……」

その言葉に反応したかのように、更に重量が増した気がした。一瞬呻き声を漏らし、それでも、アクセルは屈さない。

今の力が、果たしてどの程度なのかはわからない。まだまだ彼に余力があるかも知れないし、本当に全力である可能性もある。

しかしどちらにせよ、メンヌヴィルが、本気で殺しに来ているわけではない事は感じていた。

「どうした……僕の口を……塞ぎたいんだろ、スルト？」

それが何故か、気に入らない。適当にあしらって逃げてしまおうという、そんな魂胆が見え隠れしているかのようで、癩に障った。

癩に障るからこそ、負けてやるわけにはいかない。

「優柔不断め……。いいか、何度でも言っただけ……スルト……スルト……スルト」

言葉を途切れたのは、メンヌヴィルがそうさせたのではなく、アクセルの計算済みの自発的な行動だった。

少年は突如として、右手の『密葉』を解除する。体重をかけていた勢いを止められず、メンヌヴィルのメイスは残ったもう片方、左手の『密葉』の上を滑り、アクセルの左脇の地面に落下した。

「『拳弾』！」

倒れかけていたメンヌヴィルの腹部に、再び右拳。その衝撃に、彼は距離を取ろうと離れる。だがアクセルは右拳を開き、掌を更に腹部に押しつけた。

「『威吹』！！」

掌に風を発生させるのではなく、遙か背後から、掌を発射口にして風を吹き出させるイメージ。現在の時点での完成度は、ただの強化パンチである『拳弾』より上であり、超至近距離での本命の攻撃だった。

「うあっ……！！！」

メンヌヴィルの巨体が浮き上がり、三メートルほど飛ばされる。仰向けに地面に叩き付けられた彼を追おうと、アクセルは蹠跟けながら立ち上がった。このチャンスは逃せない。倒れ伏す獲物に襲いかかる獣の如く、飛びかかるとした。

「……」

が、メンヌヴィルの足が襲いかかる。倒れたまま、踏みつけるように叩き付けられた足裏を、両腕を交差して受けた。アクセルの足が浮かび、今度は彼の方が、四メートルほど弾き飛ばされる。片手と両足で着地し、少年は一つ、ふうと息を吐いた。

(……) 思ってたより、ずっと……ダメージが通らない。全く、なんてタフなヤツだ。まあ、だからこそ、すげえ頼もしかったんだけ

ど)

メンヌヴィルが、むくりと上体を起こした。アクセルは、それ以上の追撃を試みることを断念する。

「これはこれは」

その時、新しい声が響いた。己の存在を誇示するかのようには手を叩く。

「また、面白い場面に出会したものだ。ラインクラスの小僧を大げなく虐める、トライアングルクラスの大人。いや全く、えげつない」

火炎の壁の一角が、風に吹き飛ばされ、穴が空いた。火の粉と熱を振り払うかのように、片手で扇ぎながら登場したのは、灰色髪の男。その後ろに続き、長身の男が現れる。

クルコスで傭兵ギルドの設立に携わっている筈の、ハンスとマルセルだった。

メンヌヴィルもアクセルも、特に驚いた様子は見せない。そしてそのような彼等に少し機嫌を悪くしたらしく、ハンスは両手を広げた。

「ああ、何というこ」

「ハンス、マルセル。二人とも、何故ここに？」

彼の台詞を容赦なく両断し、アクセルは静かに尋ねる。片側の眉を痙攣させつつ口を開こうとしたハンスを更に押しつけ、マルセルが首を振った。

「いやほら、俺も兄貴も、イヤな予感がしたんだって。誰か……そう、そのメンヌヴィルあたりが裏切りそうな、とてもイヤな予感が。バルシヤに相談する暇も無かったし、急いで戻ってきたら、こんな状況だし……」

「嘘だな」

アクセルはマルセルの真似をするように、笑いながら首を振る。

「ナタンもバルシヤも不在の今、組織を乗っ取るにはまたとない機会だと、そう思ったんだろう。それでゼルナの街に向かう途中、ここに来た、と」

「いや、それは違……」

「いい加減にしる貴様らあ！」

マルセルを殴りつけ、ハンスは灰色髪をかき上げる。そして開き直りを隠そうともせず、口角を釣り上げた。

「ああ、その通りだ。間違っではないない」

「ちよっ、兄貴」

黙らせようと手を伸ばしてきたマルセルを、杖を向けて逆に黙らせ、ハンスは楽しげに暴露を始める。

「あのゾンビのようなボスト、やたら切れ者の幹部がいらないとなれば、あとは小僧、女、小娘だけ。厄介なのは“白炎”だったのだが……その“白炎”と、得体の知れない小僧が内輪もめを始めたこの状況。さながら天佑神助だな。つまり、あとは小娘と、女だけ。……くくく。あの占い師の言った通りだな」

「占い師？」



ここに来る途中、馬と金貨を渡した老婆を思い出しながら、アクセルは聞き返した。

「そうだ、占いによって出た俺の運命は、オセルのルーン！ 領土のルーンだ！ お前が先に裏切ってくれて、感謝するぞ、メンヌヴィル。そして安心しろ、アクセル。組織は頂くが、お前達の命までは奪わない。お前はただ、子爵領の代官として生きればいいじゃないか！」

ハンスの笑顔は、自信に満ちあふれていた。あらゆる困難を、己の風魔法の腕前一つで乗り切ってきた者の自信が、彼を支えていた。

既にメンヌヴィルは立ち上がっている。

「無理だな」

立ち上がった彼をちらりと見て、アクセルは笑った。嘲笑の笑みだった。そしてハンスは、そのことを敏感に感じ取る。

「ほう。何が無理なんだ？」

「全て、さ」

アクセルは首を捻り、拳を構える。向かう先にいるのは、メンヌヴィル。

焦れたように、ハンスが地面を踏み鳴らし、言った。

「どういうことだ？」

「僕とスルトが戦っている間に、組織を奪おうとしてるんだらうけど……結局、無理だらう。ここで僕とスルトが戦えば、まず十中

八九、僕が死ぬ」

それは比喻ではなく、その場の誰の目から見ても、明らかだった。いや、それよりも高い確率で、アクセルは殺される。少年はそのことを、他人事のようにただ淡々と告げた。

「そしてハンス、お前がスルトと戦えば……スルトが勝つ」

マルセルは今度は、アクセルの口を塞ぎたくなった。

彼の危惧の通り、ハンスのうなじの毛が逆立つ。しかしそれでも、口調は冷静だった。

「何を馬鹿な……。最強属性である風でありながら、お前が負けるのは、ラインクラスである故に仕方ない。だがこの俺は、最強属性である風の中でも更に最強の、スクウェアクラスだ。その“白炎”のようなトライアングル如きに負ける道理など、無い」

「いや、無理だな。クラス以前の問題だ。お前はスルトに劣る。スルトはお前より勝っている」

挑発し、この場に留める目的も、確かにあった。

しかし、アクセル自身が驚くほど自然に、言葉が紡がれる。それは恐らく、アクセルの本心であろう。挑発の意図があるのが無かるうが、アクセルは直感で、メンヌヴィルが勝つと断じている。

「ふっ……」

ハンスは鼻で嘲笑い、灰色髪を指で梳いた。そして一つ、溜息をつく。

次の瞬間、豹変した。

「ふざけんじゃねえぞつ、小僧！」

精神力が膨れあがる。スクウエアクラスの、強大な精神力が。

「この俺がつ、スクウエアクラスの俺がつ、燃やすしか脳のない、火メイジのつ、しかもトライアングルにつ、劣るってか!? “疾風”を舐めんじゃねえ!!!」

渦巻く膨大な魔力が、周囲の火を吹き消した。

「いいだろうつ、小僧つ、貴様の挑発に乗り、その“白炎”をも吹き消してやる! こんな感じになあ!!!」

「生憎、スルトの相手は僕だ。引つ込んでろ」

「引つ込むのはテメエだ!!! 吹き飛ばしてやる! 例え“白炎”つ、テメエがあのおぞましいつ、“サトゥルヌスの一族”だとしても!」

その時現れたメンヌヴィルの動揺は、その大きさは、初めてのものだった。アクセルも密かに驚き、ハンスに目を向ける。

「おい、ハンス。何だそれは? “サトゥルヌス”?」

「はっ、そうだよなつ、知らねえよなあアクセル! お前はよおつ。知ってたらつ、こんな化け物、仲間にしてねえよなあ!?!」

「止める」

メンヌヴィルが歯を噛みながら、呟く。それは命令のようであったが、紛れもない嘆願であった。

「止めて……くれ」

頭を抱え、俯き、跪く。

その様子に一瞬驚いたハンスだったが、彼の嗜虐心には既に、火が灯っている。哀れな姿で懇願する大男を、更に貶めるべく、言葉は続けられた。

「何だ、おい。“白炎”よ。何十何百と焼き殺してきた貴様が、その姿か？ そんな姿で命乞いする輩も、飽きるほど焼き殺してきたんだろう？ 何故そんな姿を？ ガキの教育に悪いからか？」

どさりと、メンヌヴィルはその場に崩れ落ちた。頭を抱えたまま、己の身体を精一杯に縮めようとしている。彼の嵐のような暴力の象徴であるメイスは、その両手に握られ、縊られるようにして立てられていた。

「お笑いぐさだぞ、“白炎”！ 死ぬときは、その姿で死ぬ！ 自分が焼き殺して来た者どもに、あの世でその姿を大いに嗤って貰え！ 何だっ、許しても乞うてるのか！？ 誰に！？ それは何だっ、懺悔か！？ 何を！？」

アクセルは構えも忘れ、ただメンヌヴィルの背を、呆然と見下ろしていた。

ハンスの言の葉が剣となり、止めを刺す。

「懺悔するというのがならちようどいいっ、ついでに答えてみる！ あの味を！ どんな味なんだっ、ええ！？ ……この人肉喰らいカニバリストがっ」

深紅だった。

巨大な火炎だった。

「……は？」

火のついた嗜虐心に、水を浴びせられたかのように、ハンスは間の抜けた声で首を傾げる。しかし次の瞬間、ハツとして我に返ると、風を起こしてその場から飛び退く。

ハンスもマルセルも、アクセルも、無我夢中で回避し、三人は固まって、それぞれの杖を構える。どこから発生したのか、それすら定かではない火炎から逃げたのだが、その源は他に考えられなかった。

三人の杖が揃って向けられた先で、未だ、メンヌヴィルは蹲っている。ただ、先ほどまでとの違いは、彼の震えが止まり、そして彼の内側から、詠唱が漏れ出していることだった。

「ウル・カーノ……エオー……ニイド……ウル・カーノ・ティール……」

膨大な火炎は、既に無い。ただメンヌヴィルを、火の渦が取り巻いている。

(まさか……あの火炎が全て、凝縮されて……?)

火メイジが苦手とする、魔力の集中。それが、あり得ない程の密度と精度で行われている。アクセルは今度こそ、全身が粟立ち、さながら魂の底から震えが来るのを感じた。

メンヌヴィルが立ち上がる。ゆるりと、何かに引き上げられたかのように。

火の渦が蠢き、立ち上がった彼の両側に、計四つの塊となって並んだ。

アクセルはメンヌヴィルの顔を見る。そこには狂気も、怒りも、悲しみも、憔悴も、慟哭も、全て無い。あるのはただ、深淵だった。彼の空洞の眼窩の奥に潜んでいたものが、ずるずると這い出してきた。それが実体として現世に生まれ出でたかのようだった。

何かに導かれるように、メンヌヴィルはメイスを掲げる。アクセル、ハンス、マルセルの三人が、攻撃ではなく身を守るようにして身構えるが、彼の口は相変わらず、詠唱を続けていた。

「……おい」

ハンスは杖をベルトに戻さない。そのまま、両隣のアクセルとマルセルに声を掛けた。

「悪いニュースと、とても悪いニュースがある」

「うるさいな、さっさと見え」

ぶつきらぼうにアクセルが返すが、それを咎める余裕は、既にハンスから失われていた。

「一つ目、悪いニュースだ。今のでヤツは……めでたく、火のスクウェアに成長した」

「有り難いな」

たっぷりとハンスへの皮肉を込め、アクセルは笑おうとした。しかし、出来なかった。その代わりに、続きを急かす。

「それで？ それ以上に悪いニュースは？」

「ああ……。 たった今、気付いたんだが。ヤツは……」

メンヌヴィルの両隣に、それぞれ二つずつ並ぶ、計四つの火の玉。それが歪み、拡大し、人影となる。そのシルエットはさながら、メイスを持つ四人のメンヌヴィルのようだった。

「そうだ、ヤツは……」

そしてメンヌヴィルは、詠唱を終える。

「ユビキタス・デル・ムスベル 大いなる火炎の偏在……」  
『イグニス・フイートス 鬼 火』」

ハンスが怒鳴った。

「ヤツは……畜生めっ、既につ、風のスクウェアだった！」

ぱらりと、老婆の膝の上でカードが捲れる。老婆は呟く。

「地獄から救い出せるのは、天使だけ……」

その声は、老婆のものでは無かった。もっと若々しい、娘のような声だった。

「地獄に引きずり込まれるか……地獄から引き上げるか……」

ピット、その指がカードを抜き出す。記されていたルーンは、“ラグ”。

「アクセル・ベルトランの宿命のルーンは、“ラグ”。水……霊能……女性。残る命は……あと十年？」

老婆は、真つ赤な目を細める。以前に占った時、そんな結果は出なかった。アクセル・ベルトランの生命力は、無限を示していた。その時は何かの間違いだと思っていたが、今になって何度占っても、結果は全て十年。

勿論、占いである。当たりもすれば、外れもする。しかし、ここまで同じ結果が出続けることは無い。

馬上で溜息をつき、老婆は彼方の、赤々と燃える空を眺めた。そして両手を広げ、目を閉じる。

占いは、もはや役には立たない。この先自分が出ることは、ただ、祈るだけ。

「大いなる水の精霊よ……どうか……あなたのルーンを背負う少年に、あなたの力を分け与え給え」



### 第三十六話<毆愛>

それは、戦闘とすら呼べなかった。

コップに入れられた蟻が、注がれる水に為す術無く溺れ死ぬかのような、圧倒的な力の差。

「こちらも終わりました」

貝殻紋の羽織の男が、荒縄を引きずり、木々の間から姿を見せる。篝火の下にまで来ると、荒縄をたぐり寄せようにして、その先に括り付けてあるものを放り捨てた。足首を緊縛された男は、既に死体である。

「ああ、ご苦労さんだ」

彼に應じるようにして、男が歩み出た。両腰にはそれぞれ、一振りずつの剣。男……ナタンはしゃがみ込み、その死体の顔を持ち上げた。

「この男か？」

背後の村長に尋ねる。老齢の村長は、しばしばと何度か瞼を開閉し、篝火に照らされた物言わぬ顔をじっと見つめた。そして、納得したかのように大きく頷く。

「そうです、この男です。イシユタルの館の使いだと名乗って…

…」

ラヴィス子爵領、パリュキオの村。ここにも、イシュタルの館のことは伝わっていた。もっともそれはあくまで、その暴力性についてのみだったが。

「そうか……」

ナタンは立ち上がり、村長の肩に手を置くと、他の部下に声を掛ける。

「攫われた娘達は？」

「山小屋に監禁されていました。全員無事です」

「死体はいくつだ？」

「これを入れて、ちょうど十体。全て、下衆どもです。明日の朝には燃やします」

「……わかった」

淀みなく答える部下に頷き、ナタンはふと双月を見上げた。

やはり、イシュタルの館の武力は異常である。メイジ達を除いたとしても、その結論は撤回されない。荒事や一芸に長けた、恐るべき男達。ナタンが殆ど動くこともなく、彼等はすぐに敵の居場所を突き止め、間髪入れずに始末してしまった。

(……ゴミ溜め、か)

ラヴィス子爵はそう言っていた。

彼等は誇りも、矜持も奪われ、あの場所に文字通り捨てられた。

何を成すでもなく、何を行うでもない。ただ薄暗いあの地で、死ぬ

のを待っていた。心を枯らし、魂を腐らせて。

「……ボス。どうかなさいましたか？」

一人、歩み寄ってきた部下がいる。メイジの男だった。元は、どこかの貴族の私生児だという。トライアングルの技量を持ちながら、彼は何故、捨てられたのか。それは、彼自身しか知らない。

「いや……。相変わらず、お前らすげえなあ、と思ってな」

ナタンはニツと笑って見せ、腰の剣の柄頭を撫でた。

ドロップアウトしたとはいえ、貴族の血を受け継ぐ者が、しかも年下のナタンをボスと呼び、敬意を表している。今更ながら、ナタンにはそれが不思議だった。例えば彼と自分が戦えば、三秒と経たずに魔法にやられるだろう。

そのメイジは、ナタンの隣に並んだ。

「許せなかった。それだけです」

「許せなかった、ねえ。当たり前だな」

「ええ。特に、俺たちにとっては」

メイジはふと、双月を見上げる。

「“貝殻紋”は、俺たちに授けられた、最期の誇りなんです」

「最期……？」

「東地区に流れてくるような俺たちです、碌な人間がいませんよ。揃いも揃って、屑ばかりで……肥やしと大差ありません。死んで、土に還る時を待ってるだけ」

双月に彼は、どんな思いを馳せているのだろう。ふわりと、花が

聞くように喋り出した彼は、そのまま想いを連ねていく。

「女を守れ」……それだけ、言われました。単純な、難しいことを。でも、まずはそれです。笑っちゃうくらいの初歩の初歩。子どもでも知ってるようなことから始めました。そうすると、自分でもわかったんです。認められていくのが。……一時は世捨て人を気取ってみたりもしましたが、人間は結局、人間の中で生きてるんです。人から認められたい、気に入られたい、受け入れて貰いたい……そんな風に思いながら。覚えてますよ、俺。ほら、花屋の爺さんです。非番の時、ふらりと町に出たら、あの爺さんが挨拶してくれました。ご苦労さん、と。ああ、俺は苦労してたんだ、そしてその苦労を知っていてくれる人がいたんだ。……正直、今まで生きてきた中で、一番嬉しかったです」

照れ臭くなつたのか、彼は人差し指で、鼻の頭を擦った。

「……まあ、その……。俺たちにとつての“貝殻紋”は、俺たちの全てなんです。一時は人間をやめさせられた俺たちを、また人間に戻してくれた。もし、俺が死んで、墓なんてもんを建てて貰えるんなら、貝殻を彫って貰いたい。“貝殻の男、ここに眠る”……そんな一文でも刻んで貰えたなら、俺たちの人生も、あの世で少しは自慢出来る気がします」

「縁起でもねえな」

そう言って、ナタンは笑った。

その時ふと、メイジは何か気付いたように、顔を上げる。ガサガサと草が踏み荒らされる音に、ナタンもハツとして周囲を見回そうとした。

しかし、探すまでも無い。草むらから、男が飛び出す。片手に握

った拳銃は、その銃口をメイジの彼に向けていた。彼は急いで杖を引き抜こうとするが、間に合う筈も無い。

「死ねええ！」

逃げられないことを悟った犯人の、最期の攻撃なのだろう。絶叫と同時に、男は引き金を引いた。

「危ねっ」

ナタンが叫ぶ。轟音の瞬間、メイジの顔の前を、何かが凄まじい速度で擦り抜けた。

銃弾は発射されたが、痛みは無い。恐らくは、至近距離であることの慢心が外させたのだろう。攻撃が失敗し、みるみる恐怖の表情へと変貌する男の眉間に、マジックアローが突き立った。

「ボス、ご無事で!？」

メイジが叫ぶが、ナタンは右手首を左手で握り、地面を転げた。

「痛っ、熱っ、痛くて熱いっ」

「ど、どこを撃たれたんです!？」

銃口は、間違いなくメイジに向けられていた。どう考えても、隣のナタンに当たる筈が無い。

転げ回るナタンは、やがて蹲り、ぶるぶると右手を差し出した。拳になっていた掌が開くと、血の雫と共に、何かが落ちる。

「……………え？」

鉛の球体だった。ちょうど、弾丸ほどの大きさである。まさか、と、メイジは頭を振った。

「ボス、大丈夫ですか!？」

「い……いや、何か黒いのがあったから、思わず……」

「ともかく、右手を見せて下さい。多少、治癒の心得は」

「……て、あれ？」

ピタリと、ナタンの震えが止まる。むくりと起き上がった彼は、掌をひっくり返してみた。

掌の中心に感じた痛みと熱はすぐに消え、傷も無い。

「え……あれ、おかしいな。あんだけ痛かったのに……」

「……あの、ボス。これ」

メイジは鉛の球体を広げると、ナタンの傷すら無い掌の上に転がした。彼は暫く無言で、それを握り、開く。そして、メイジと顔を見合わせた。

「……。まつさかあ、あり得ねえよなあ？」

「ええ、俺もそう思います。けど……」

「いやいやそんな……まさか……嘘だろ」

いくら軌道の予測が付いたとはいえ、銃弾を横から掴み取るなど、出来る筈が無い。そしてその傷が、こんな短時間で跡形もなく消える筈が無い。

「……まあ、あれだ。無事で何よりだ」

誤魔化すように笑い、ナタンは鉛玉を投げ捨てた。

例えばメイジに、尋ねてみたとする。「最強の属性とは何ですか？」と。

失われた始祖ブリミルの虚無である、と答える者がいる。最も強いというのなら、火属性だと答える者もいる。最も剛いというのなら、土属性だと答える者もいる。いや、水属性の禁呪である『ギアス』も侮りがたいぞ、と答えたりもする。

次の質問。「風は最強の属性なのですか？」と尋ねてみる。

余裕のあるメイジは「ああ確かにそうだ」と微笑み、余裕のないメイジはムツとして口を結ぶ。ともかく、どちらも否定はしない。皆、それぞれの属性に誇りを持つが、風メイジが最強である、という言葉に異議を唱えても、風属性が最強である、という言葉には反論の口を閉ざす。

風最強説の所以として挙げられるのは、その応用範囲の広さの他に、スクウェアスベル『遍在』があった。

風はどこにもある、故に風属性のメイジはどこにも存在できる、という、飛躍というレベルを軽く超越した理論によるもの。使用するメイジと全く同じ分身を作り出し、一斉に攻撃する、恐るべき魔法である。例え一対一の正式な決闘であろうが、『遍在』は魔

法のひとつとして認められる。つまり、一対一でありながら、三対一でも四対一でも成り立つという、非常に恐ろしい状況が生まれる。最強クラスのスクウェアスperlでありながら、大勢で一人を倒すという、弱者の必勝戦法を許可するもの。しかも、本体であるメイジー人を倒せば全ての遍在が消えるという弱点を有するため、ルールや縛りの多い大会でも禁止されない。

「ユビキタス・デル・ウインデ…… 『風の遍在』<sup>ユビキタス</sup>」

『遍在』を相手にした場合、まずこちらも『遍在』によって戦力差を縮めるのが定石である。ハンスは三体の分身を生み出すと、襲いかかってきた火炎の人影を迎え撃った。

「おいっ、これは何だ!? 風属性の『遍在』と同じと考えていいのか!?!」

『遍在』の一つに加勢しながら、アクセルは怒鳴る。

「俺はそう思う!」

「いや、火属性の『遍在』なんて聞いたことないぞ!」

「くそっ、これやっぱり、俺のせい?」

「くたばれくたばれ、みんなくたばれ」

瞬きを二回ほど繰り返し、アクセルはハッと我に返った。

「じゅっ……順番に喋れお前ら! え、あれ? どれが本体だ!?!」

「俺だ、俺!」

「騙されるな、そいつは偽者だ!」



「気を付ける、最初と三番目のヤツは嘘つきだ!」  
「かく言う私も本体だね」

アクセルは両手を伸ばし、傍らのマルセルの襟首を掴むと、ぐいと自分の目線まで引き寄せた。

「おいっ、何だ!? 『遍在』に反乱起こされるようなヤツを、お前は兄貴と慕ってたわけか!? しかも全部偽者っばいぞ!」

「い、いやほら、兄貴の『遍在』って、少し個性的で……」  
「これを個性で片付けてたのか!？」

外見も中身もコピーする、それが『遍在』である。故に近しい人間でも、その見分けは容易にはつかない。

(……の筈なのに、何だこれ。一人の本物に三つのコピー、全部揃って偽者っばい)

「ぐあっ」

呻き声に、マルセルの襟を掴んだまま振り返る。一人のハンスが炎のメイスで胸を貫かれ、ぼしゅんと、嘘のようにかき消えた。しかしハンスの『エア・スピアー』も、相打ちで火炎の人影の喉元を貫いており、その人影も消滅する。

(ハンスの『遍在』はおかしいとして、問題はスルトの作った火炎の『遍在』だ。火属性の『遍在』? 姿が火だるまなだけで、これ全部、中身はスルトか?)

スルトの場合は、本体の判別は容易であった。彼は相変わらずあの場所から動かず、じっと、夜空を見上げている。戦っているのは、

彼が生み出した火炎の分身たちだけだった。

基本的には火炎の『遍在』も、その外見を除けば、風の『遍在』と同じらしい。本体と同じ能力を持ち、それぞれ独自に動き、死ぬほどのダメージを受ければ消える。

(つまり……魔法も、スルトと同じく?)

アクセルがそう考えた刹那、三体の炎人たちは一斉に跳び退がった。そして集合し、火炎のメイスの先を全て、ハンス達に向かって揃える。

放たれた三つの火炎は、螺旋状に組み合わされて一つの奔流となり、大口を開けて襲いかかってきた。

「！」

三体のハンスも、力を合わせて風で上昇気流を起こし、火炎を斜め上へと逸らす。しかし火炎を追うようにして、メヌヴィルの『遍在』達が迫ってきた。

「『アイス・ウォール』!!!」

動いたのは、マルセル。杖を向けて素早く詠唱し、ハンス達とメヌヴィルの影達との間に、氷の壁を作り出した。

「ええい……クソツ、邪魔だっ」

三体のハンスが、三体とも同じ動きで、杖を振り下げる。そのうち二人がかき消え、真ん中の一人が残った。

「……おい、ハンス。とりあえずお前、もう『遍在』は使つなよ」  
アクセルが冷たく言い放つ。  
本体のハンスは片手で頭を抑え、何かを追い払うように首を振つた。

『遍在』を解除したハンスは、氷の壁の向こう、火炎の人影たちを見て考える。

『遍在』は風のスクウェアスペル、つまり風を四つ重ねて完成する。三つ重ねて劣化版が完成することはあり得ない。メイジが重ねられるスペルは、最大で四つ。その四つを全て風で埋めて初めて、『遍在』を使用できるのだ。故に、トライアングルクラスのみメイジは使用できず、スクウェアクラスのみ魔法となる。

しかし、メンヌヴィルの『遍在』は、あり得ない。風のスクウェアだというのなら、『遍在』を使用できることに疑問は無いが、彼はそれを炎で行った。風を四つ重ね、更に炎を重ねた。

(あり得ない)

重ねる属性の限界が四つであるというのは、全てのメイジ共通の絶対不変の理である。確かに、王家のみに許されたヘクサゴンスペル、聖堂騎士が得意とするという賛美歌詠唱など、スクウェアスペルを超える魔法は存在する。しかしそれらも、合体魔法に分類されるものであり、二人以上の協力者がいて初めて成り立つ。たった一人で、独力で出来るものではない。

(ならば、あれは?)

メンヌヴィルがエルフだというのなら、どれ程楽な答えだろう。

その方がまだ、納得できる。

(くそ……考えるなっ)

ハンスは自らに言い聞かせた。風と炎、二つの属性のスクウエアクラスなど、それ自体が前代未聞だ。火炎による『遍在』のからくりがどうだろうが、自分は今、想定外の化け物を相手にしている。ならば、詮索は無用だ。

火炎の『遍在』達はそれぞれ炎を放ち、見る間に氷の壁を溶かしていった。

「マルセル！」

振り向かないまま、ハンスは背後の弟分を呼ぶ。若干怯えは含んでいるが、応つと、力強い返事が来た。

「やるぞっ、『疾風怒濤』だ！」

「たった一人相手にか……っつて、言ってる場合じゃねえな」

マルセルはメンヌヴィル達を警戒したまま、じりじりと後退る。続いてハンスは、アクセルに怒鳴った。

「いいかつ、アクセル！ 一分、いやっ、三十数える！ その後、上空へ避難だ！」

「……わかった、信じる」

アクセルの答えに一つ頷き、ハンスはマルセルを連れ、森の中へと消えた。

彼等が何をするのか、それは不明である。しかし、選択の余地な

ど無かった。

(風属性の……スクウエアだ！？)

未だ愕然とした硬直は解けないが、考えてみれば納得がいく。熱を肌で感じている、それだけにしては、メンヌヴィルは周囲を認識し過ぎていた。人間だけならまだしも、壁やドアノブ、ボタンまで彼は正確な位置を把握している。シャツを裏表に着ることも無い。

そもそも熱を肌で感じるというのは、風があつてこそだ。スクウエアクラスの風読みで周囲を把握し、更に加えて、風が運ぶ熱で敵を認識する。流石に風のスクウエアだというのは予想外だったが、風属性の高い才能を持つというのは、あり得ない話では無かった。

火炎人形たちは氷を消滅させると、ざっと、左右に分かれる。まるで、道を作るかのように。彼等の間を、メンヌヴィルは、一歩一歩……両手を広げ、天を仰ぎ、近づいてきた。

その口から、声が零れる。冷静な声ではなく、血の通わないような、不気味な音。洞穴を抜ける風が偶然にも人の声を真似た、そんな気がした。

「幼子は、水浴びを好む」

アクセルは震える身体にギツと力を込め、拳を構える。

「しかし、童は……季節の巡るを知らず」

少年は閉じた口の中で、十を数えた。

「故に季節を知る大人、無情に幕を引く」

通り抜けるたび、火炎人形たちは再び火の玉へと姿を変え、メヌヴィルの周囲にまとわりつく。三つの火の玉を纏ったまま、彼は掌で自らの顔を覆った。

「我が名は……ロティスール」

二十を数える。あと、十。

アクセルはそっと、流れるように身体を低くし、足の裏に風を起す。そしてその勢いで、飛びかかった。

「『密葉』！」

固めていた拳を広げ、掌からブレイドを形成する。斬るのではなく、突き。さながら貫手のように、ブレイドの先端をメヌヴィルの胴体に向けて突き出した。それに対し、メヌヴィルは全くの無防備。アクセルの攻撃を知覚していない筈が無い。それでも、メイスを動かすこともせず、ただ泰然と立っていた。

その姿に、アクセルは迷う。殺し合いにおいて躊躇うのは、これが生まれて初めてのことだった。その迷いが、突きを鈍らせる。

ブレイドが、止められた。

「……！！？」

アクセルが驚愕したのは、止められたことではない。メヌヴィルに纏わりつく火の玉から、火炎の腕が伸び、それがブレイドを阻んだこと。

(何てことだ……)

風の『遍在』は、風の普遍性を表している。そして炎の『遍在』が表すのは、変幻自在。風のように姿形を完全に真似ることは出来ないが、代わりにその姿を、あらゆる形に変えることが出来る。

「アクセル・ベルトラン。何を迷う」

指一本も動かさないまま、メンヌヴィルは口を開いた。

「お前は……」

ハンス達が隠れてから、三十秒。アクセルは足裏に風を起こして跳躍すると、『フライ』で飛び、頭上の枝に乗った。

感じたのは、膨大な魔力。

「『疾風怒濤』」  
シュトゥルム・ウンター・ド・ラング

闇を貫き、無数の光が走った。ほんの一瞬、風の吼える音の後、それは金切り声に変わる。

きらきらと輝く何かが、ブリザードのように一直線に走っていた。それらはメンヌヴィルを狙い、跡形もなくなる程に穿ち、貫こうとする。巻き上げられた土煙、そして白い霧が混ざり合い、メンヌヴィルをその中に隠した。

（何だこれ……）

アクセルは樹上から、半ば呆然と見下ろしている。キラキラとしたものは、無数の氷の刃だった。そしてそれを、風の魔法によって走らせる。

ハンスとマルセルの二人が、その力を合わせた『疾風怒濤』をた

った一人相手に使用するのは、これが初めてのことだった。そもそもが、敵部隊を蹂躪し、城門を砕き、砦を破壊する魔法である。

マルセルが作り出す、親指ほどの大きさをした、無数の氷の弾丸。それを、ハンスが撃ち出す。使用する魔法は単純で、そこらのメイジでも真似ることは出来るが、問題はその持続性だった。莫大な精神力を全て注ぎ込み、直線上にあるもの全てを破壊するまで止まらない。ガトリング砲のように、ひたすらに氷の弾丸を放ち続ける。

木々が薙ぎ倒され、悲鳴のような音と共に崩れ落ちた。

煙幕へと続く、青白い光の道。二十秒ほどして、それは狭まってく。ついには一筋の光となり、そして消えた。

がさがさと、葉や草を踏みしめる音。闇の森から姿を現したハンスとマルセルは、それぞれ肩を回し、肩を上下させて呼吸を整える。

「どうだ……見たか、俺たちの切り札」

未だ晴れぬ土煙を指さし、また、頭上のアクセルをも見上げ、ハンスは勝利の笑みを浮かべた。

「切り札、ね」

アクセルは樹から飛び降り、ハンスの隣に着地すると、また拳を構える。

「じゃあ……やっぱり、お前の負けだ」

ハンスの笑顔が固まった。その視線は、徐々に散っていく土煙へと向けられている。

ちらちらと、幻のような火の玉が浮かんでいた。

「嘘だろ」



マルセルの眩きが、全てを表していた。火の玉がかき消える。煙が晴れ、メンヌヴィルの姿が露わとなった。周囲の木々は薙ぎ倒され、砕かれ、無惨な姿になっているが、ただその中で、彼だけは違う。メイスを手に、泰然と立っていた。

氷の弾丸は、当たれば砕け、破片を撒き散らす。元々物量で押し潰す魔法なので、後続の邪魔にならぬよう、弾丸は脆く作成されるが、例えスクウェアの火炎だとしても、一瞬で溶けて消えはしない。例え出来たとしても、残った氷が、そして水が弾丸となり、相手を攻撃する。

メンヌヴィルは、火炎の魔法を使わなかった。彼が使ったのは、水属性の初歩、『凝縮』。それが水の球体を作り出し、メンヌヴィルの前に浮かんでいる。恐らくはそれで、自らを襲う範囲の弾丸のみを防いだのだろう。水面に弾丸を撃ち込むのと同じく、弾丸は自滅し、それを吸収して水の球体は更に巨大化していた。

(どこまで可能なんだ、この化け物は)

そしてその早業を知った瞬間、ハンス体中から、冷たい汗が噴き出す。火属性に才能があり、風属性も得意だというのならわかる。しかし、火属性に相反する水属性ですら、メンヌヴィルはトライアングルの実力を示した。

化け物だった。メイジではない。ただ、何の因果か人の形をしてこの世に生まれ出でてしまった、どこか別の世界からの来訪者。不幸なことに、自分は今、それと遭遇してしまったのだ。

そう結論付けると、ハンスの取るべき行動は一瞬で出された。

「負けだ」

「え？」

マルセルは兄貴分の顔を見るため、振り向く。ハンスは眉を八字に下げ、片目をつぶり、大きく溜息をついた。

「負けだ、負け。だいたい、二属性スクウェアの時点でおかしいんだよ。ヤツは人間じゃねえ。悪魔だ」

「……………」  
「逃げるぞ。付き合ってられん」

この場に残ったのは、あくまで、アクセルの挑発に乗ったから。そもそのハンスの目的は、アクセルを守ることでも、己の力を認めさせることでも、メンヌヴィルに勝利することでも無い。ただ、イシユタルの館を乗っ取ること、それだけである。

最強の切り札『疾風怒濤』が敗られ、メンヌヴィルの実力が常識なことを理解した今、傭兵としてのシビアな考え方は、あっさりと逃走を許可した。

「……………それじゃな。残るかどうかは好きにしろ。まあ言わせて貰えば、ここに残り、少しでも足止めしてくれば嬉しいが」

「兄貴……………いいのか？」

「いいんだいいんだ、さっさと逃げる」

本当に、驚くほどあっさりと、ハンスは逃げた。杖を納め、踵を返し、闇の森へと駆け足で消えていく。マルセルが慌ててその後ろを追った。

（まあ……………仕方ないか）

アクセルはそれに続かず、また、彼等を罵倒することも無い。命あつての物種である。無理に戦う理由が無いのなら、生き延びるた

めに逃げるのが正しい。それは本能に沿った行動であり、逃げた彼等を非難するのであれば、命そのものを非難するのと同義だ。そう、この状況、逃げるのが正しいのだ。

（なのに……何で、俺は）

圧倒的な実力差を感じた身体が、震え出す。身体だけではない。胸の奥底にある筈の魂も、迫る死の恐怖に怯えていた。

（身体も心も、怖い怖いと言ってるのに）

未だ足下に突き刺さっている氷の弾丸を、メンヌヴィルは足で踏み潰す。まるで、霜を踏み砕くような音がした。再び、ぼう、と灯火のように、メイスの先に火の玉が生まれる。

（逃げるよ、俺……何で逃げない？）

アクセルは自問した。

心も体も、両方が戦闘を拒否しているというのに、何故自分は逃げないのだろう。死なないためには、逃げるしかない。殺されないためには、逃げるしかない。逃げるしかないのに、何故、逃げないのか。

「アクセル・ベルトラン」

メンヌヴィルが、その唇からぽとりと零す。

「お前は……素晴らしい、戦慄するほど」

それが本当に賞賛なのか、アクセルには分からない。いや、言っ

た本人も、それは同様なのではないか。

「俺は、お前が好きだ。お前を、尊敬している。……燃やしてしまいたい程に」

突然、アクセルは構えを解く。そして闇夜へと顔を向け、その顔を両手の平で覆い隠した。

全くの無防備である。今ならば、ドットクラスのメイジにも殺されるだろう。

メンヌヴィルは足を止めた。

「くく……くく……」

アクセルの指の隙間から漏れてきたのは、笑い声。

「あはっ、はは……あははははっ」

両手を下ろしながら、ただ、笑う。嘲笑でも、狂った笑いでもない。まるで遊んでいるような、子どものような笑い声だった。

メンヌヴィルの言葉を聞いた途端、アクセルは答えを出した。

「何だっ、おい！ そんな、そんなことだったのか！ ははははっ、スルト！ ありがとう、ようやく謎が解けた！ すつきりだ！」

笑い声を納め、アクセルはメンヌヴィルを向く。満面の笑みで歯を見せ、パキパキと指の骨を鳴らす。

「全く……仕方がないな、お前は！ 僕を困らせて、仕方がないヤツだ！」

「……何を、笑う？」

メイスを構え、メンヌヴィルは静かに尋ねる。指一本でも動かせば、間髪入れず火炎が襲いかかるほどの緊張状態であったが、アクセルはそれでも笑顔を崩さなかった。

「何故、僕が笑うのか。お前はそれが気になるんだな？」

少年は両手を広げ、静かに笑いを漏らす。

メンヌヴィルの実力ならば、どちらにしろアクセルは殺すことが出来る。方法も時間も、いくらでもあるのだ。事実先ほども、殺せと言わんばかりの隙を見せた。

「何故、何故、何故……世の中、そればかりかもあるな？ 何故、お前は肉が焦げる臭いを求める？ 何故、お前は未だ僕を殺さない？ 何故、お前は逃げるようにして出てきた？ 何故、僕が作った義眼を踏み潰した？ 何故あの時、僕に手加減した？ 何故、気を失った僕を燃やさなかった？」

無防備のまま、つかつかと、アクセルは迫る。歩み寄ると言うよりは、迫ると言う方が合っていた。

「質問したいのは、僕の方だぞ、スルト。……安心しろ。僕は……お前が好きだ」

メンヌヴィルに、明らかな動揺が見えた。

「僕はずっと……ずっと、ひとりぼっちだった。それで良かった。ひとりでも構わなかった。何しろ、初めからそうだったからなあ。」

酒を飲んだことないヤツが、酒なんていらないとほざくのと同じだ。ひとりぼっちだった僕は、もう、ひとりじゃないことの幸せを知ってしまった。すると、どうだ。ひとりぼっちが、恐ろしくなった」

言葉が、次から次へと生み出され、紡がれる。アクセルの口は、まるで羽のように軽かった。栓を失った水道だった。放っておいても、勝手に言葉が飛び出してくる。

メイスの間合いに入っても、メンヌヴィルは手を出さない。アクセルは彼を見据えたまま、ついにその懐に入り込み、そこでようやく立ち止まった。

「おい、スルト。僕はな、ひとりぼっちが怖い。寂しいのが怖い。ひとりきりで死ぬのも、とても怖い。そして、お前が僕の元から去っていくのも、すごく怖いんだ」

「俺は……メンヌ」

「またそれか？ それしか言えないのか？ バカなのか？ 他の言葉を忘れたのか？ でもな、それでも構わん。僕はな、スルト、お前が好きだ。初めは怖かったし、災難だと思った。でも今は、大好きだ。お前の事情なんか、教えてくれないんだから知らん。知ったことか。だから、僕だつて教えてやらん。ただな、お前は逃がさんぞ。僕から逃げられると思うな。お前はこれからも、イシユタルの館の仲間で、僕の仲間だ」

「俺は……」

「まさかの友は真の友」……あの時、馬車の中で、お前はそう言ったな？ スルト。お前は僕の、真の友だ。聞くまでもなく、お前も僕をそう思っている。それとも何か、あれは嘘だったのか？ 今更どうでもいいがな！」

「俺は……メンヌヴィルだっ」

「黙れスルトお！」

アクセルは跳躍すると、右拳を振りかぶり、メンヌヴィルの頬を殴り飛ばした。魔法は一切使わない、純粹な、身体能力のみの攻撃。メンヌヴィルの巨体がぐるりと半転し、樹木の倒れるような音をさせ、仰向けに崩れ落ちた。

「……何だっ、おい！ 魔法使った時より効いてんのか！？ だつたら始めっから、こうしてれば良かったなあ！」

アクセルの顔から、笑みが消えていた。眉を吊り上げ、眦を決し、倒れ伏す彼を見下ろして怒鳴りつける。しかし、そこに殺気は無かった。

「そう言えば……思い出したぞ。あの時、馬車の中で、僕は確かこう言っただ。 “殺し合いの中で育まれる友情なんて聞いたこともない、信じたくもない” と。でもな、今は信じたい気分だ。……いいぞ、スルト！ 殺し合いだ、命がけの喧嘩だ！ とことん付き合っつて、友情つてもんを育んでやる！ お前、何だかんだ言っつてどうせ、僕のが好きなんだろうが！ それをお前に認めさせてやる！ お前が泣いてもっ、両手を合わせてもっ、ぶん殴っつてやる！ お前が素直になるまでっ、殴り続けてやる！」

アクセルは肩に手を当てると、シャツを掴む。そして一気に破り捨て、投げ捨てた。

少年の身体は、既に衣服の下に、筋肉と呼べるものを隠していた。

「どうした、いつまで寝てる？ ……来いよ、スルト。………  
来いっつってんだろがっ、この無茶ゴリラがあああ！！」

「俺はっ、メンヌヴィルだあっ！」

悲鳴のような咆吼と共に、メンヌヴィルは立ち上がった。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8880q/>

---

漂流のA

2011年12月18日02時49分発行